

台東区

元浅草遺跡

— 都立白鷗高等学校附属中学校仮設校舎建設に伴う埋蔵文化財調査 —



2024・7

東京都埋蔵文化財センター

元浅草遺跡（台東区 No.11）の調査成果

台東区元浅草遺跡（台東区遺跡 No.11）は、台東区元浅草1丁目にある遺跡です。遺跡の範囲は、都立白鷗高等学校の敷地にあたります。

台東区は、地形的に見ると上野台を中心とした台地地域と、台地縁辺から隅田川西岸にかけての低地地域に大きく分かれます。元浅草遺跡は、このうち低地地域にあります。武蔵野台地縁辺から約0.5km、隅田川から約1kmの位置にあり、現地表面は海拔2～3mを測ります。

台東区の低地地域では、隅田川西岸で弥生時代ごろから遺跡が遺されていますが、元浅草遺跡に遺跡が形成されるのは江戸時代以降です。江戸時代の当地付近は、歴史史料から旗本・御家人の組屋敷や大名の屋敷として利用されていたことがわかりました。元浅草遺跡の範囲は、江戸時代の初頭には南北に分割され、それぞれに組屋敷が設けられていました。その後、岡山藩池田家が一带を取得し、大名屋敷として利用されるようになりました。池田家以降、浅川藩本多家、松山藩酒井家が屋敷を構え、大政奉還を迎えます。酒井家は廃藩置県以降も引き続き当地を所有していたようです。明治期の当地周辺の地図には、庭に池を持つ屋敷が多く記録されており、酒井家の庭にも池があったようです。

明治35（1902）年になると、東京府立第一高等女学校が当地に移転してきます。府立第一高等女学校は、東京府初の高等女学校として明治21（1888）年に認可された学校です。当初は築地、次いで神田に校舎がありましたが、女子中等教育需要の高まりにともなって生徒数が増加したため、より広い校舎が必要になりました。そこで、酒井家などから当地を購入して新校舎を建設し、移転することとなりました。その後、府立第一高等女学校は、東京都立第一女子高等学校、都立白鷗高等学校へと名称・体制を変えながら、現在まで当地に所在しています。

元浅草遺跡では、昭和62（1988）年に都立白鷗高等学校の建替えにともなって最初の発掘調査が行われました。この発掘調査では、江戸時代の遺構や府立第一高等女学校校舎の建物基礎を検出し、陶磁器など多数の遺物が出土しました。

今回報告する発掘調査は、2回目の調査となります。調査地点は都立白鷗高等学校の校庭にあたり、前回の調査地点の南側に位置します。発掘調査は令和4（2022）年7月から開始し、令和5（2023）年6月に終了しました。また、報告書刊行に向けた整理作業を令和5年4月から令和6（2024）年4月まで行い、7月に本報告書が刊行となりました。

今回調査で検出した遺構の多くは、盛土の上面で確認されました。元浅草遺跡は低地にあり、人々は盛土によってかさ上げした土地で生活していたようです。本報告書では、盛土の形成時期から3つの遺構確認面を設定しました。現地表面をⅠ面とし、Ⅱ面、Ⅲ面、Ⅳ面が遺構確認面です。

Ⅱ面は、府立第一高等女学校の学校校舎の時期にあたります。Ⅱ面を埋める第1層の遺物（写真16）や、Ⅱ面を形成する第2・3層（写真17・18）の遺物には、江戸時代のものも含まれますが、明治時代や大正時代のものも多く含まれます。特に、絵の具の容器（写真16最前列左端）など、学校に関係すると考えられる遺物も出土しており、遺物からも学校であったことが示唆されます。

Ⅱ面に属する遺構の中で最も注目されるのは、府立第一高等女学校の校舎と考えられる建物基礎です（写真1）。校舎の建物基礎は、講堂と考えられる建物基礎1棟（35号遺構）と校舎棟と考えられ

る建物基礎2棟(52・56号遺構)を検出しました。発掘調査により、建物基礎の詳しい構築方法がわかりました。

建物基礎は、3層の構造を持ちます(写真2)。最下部では、まず多数の杭を打った上に横木を設置し、次いで横木の上に胴木を2条設置したあと、胴木や横木の間に人頭大の礫を多数敷き詰めていました。胴木の上部には、コンクリートによる土台を設けています。コンクリート製土台の上部には、煉瓦積による建物基礎がつくられていました。煉瓦の積み方はイギリス積みを基本としていますが、規則性を大きく逸脱した部分も見られます。52号遺構ではアーチ状の積み方も確認されました。さらに、煉瓦積の最上段には表面を黒っぽく仕上げた「花黒」の煉瓦が使用されていました(写真3・21奥)。建物基礎のうち地表に出ている部分に「花黒」を利用していたようです。また、積み重ねた煉瓦の中には炭で「口」「ハ」「二」といった文字が書かれたものがありました(写真4)。同じ文字の書かれた煉瓦は一定の場所に固まっていることから、建物基礎を作る際に煉瓦を積む位置を表すために書き込まれたものと考えられます。

35号遺構の一部では煉瓦の積み方が変化している部分がありました(写真3)。講堂を南側に増築したものと考えられます。また、35号遺構の南辺に沿うように土管列と木製の桁が組み合わさった遺構(37号遺構)がありました(写真5)。講堂に伴う排水施設と考えられます。このような土管と木製・煉瓦製の桁を組み合わせた遺構は、合計9系統を確認しました。それぞれ、明治・大正の校舎や昭和の頃の校舎に伴うものと考えられます。

Ⅲ面は、35号遺構の下層から見つかった池遺構が利用された時期にあたります。Ⅲ面を形成する第4層の出土遺物は、18世紀後葉から19世紀前葉のものが中心です(写真19)。先述のとおり、池遺構は明治時代の絵図にも描かれており、Ⅲ面も明治時代まで機能していたと考えられます。

Ⅲ面に属する遺構の中で最も注目されるのは、調査範囲のほぼ中央で検出された池遺構です(写真6)。池遺構は東岸、北岸、西岸を検出しましたが、南岸は調査範囲外となっています。池遺構の全体の規模は不明ですが、検出した範囲でも東西約32m、南北約19mを測る大きなものでした。

池遺構は、周囲に間知石^{ひんちいし}でできた護岸を持っていました(61号遺構、写真7)。細い胴木を設置し、その上に2段から4段の間知石を積み上げて護岸を構築していました。また、池の中央北寄りには中の島(93号遺構)がありました。調査の結果、構築当初の93号遺構は、周囲に間知石の護岸を持つものであったことがわかりました(写真8)。その後、中の島に土を被せた後に、池の北岸との間に土橋を構築していました。このように池遺構は幾度か改修されながら利用されていたようです。

池遺構の改修の様子は別の場所でも確認できます。池の北東部には、池への導水施設と考えられる木樋^{もくひ}・竹樋^{たけひ}と木製桁を組み合わせた遺構が接続していました(写真7・9)。導水施設の出口にあたる部分は、61号遺構の石積の間に組み込まれて池側に突き出ていました(写真7)。このような導水施設は3系統確認されました。調査の結果、導水施設は1つずつ順番に利用されており、前の導水施設を使い終わると栓をして利用を停止し、新たな導水施設を設置していたようです。そのたびに61号遺構を積み直して木樋を設置したのと考えられます。第4層はこれらの導水施設の設置に伴って形成された盛土と考えられ、導水施設の設置時期は18世紀後葉から19世紀前葉と考えられます。

また、調査では池遺構を埋立てる過程も確認しました。池遺構の覆土には、覆土を仕切るように数列の土留板が設置されていました(48号遺構、写真10)。土留板列は段階的に設置されており、大

まかに西から東に向かって埋立てが行われたようです。

池遺構上層からは多くの遺物が出土しました(写真23～25)。出土遺物は18世紀後葉から19世紀前葉に属するものが中心です。一方で、池遺構下層の出土遺物には、17世紀後葉から18世紀前葉に属するものも目に付きませんが、それ以降の遺物も出土しています(写真26)。先述のとおり池遺構は幾度か改修されており、それぞれの改修に伴って各時代の遺物が混入したものと考えられ、池遺構の構築は最も早くて17世紀後葉から18世紀前葉の遺物であると推測されます。

IV面は、江戸時代の中でも池遺構が構築される以前の盛土(第5層)や自然堆積層(第6層)の上面に遺された遺構が属します。調査範囲の東端、西端では、第6層まで掘乱されており、第6層上面で遺構を検出しました。調査範囲東端の第6層上面の遺物集中部(6号遺構)からは、18世紀後葉から19世紀前葉のものを中心に、17世紀後葉から18世紀前葉に属するものも出土しており(写真27)、長期間使用された遺構と考えられます。調査範囲西端の土坑(69・70・74号遺構)からも17世紀後葉から18世紀前葉に属する出土遺物があり(写真29)、第6層上面の遺構には比較的早い時期から利用された遺構が含まれるようです。

また、6号遺構からは賤機焼^{しずはたやき}と考えられる施釉^{せゆう}の土器が出土しました(写真28)。賤機焼は徳川家康が駿府に在所した頃に興された窯で、徳川家の御用窯となっていました。元浅草遺跡には徳川家と縁戚関係にある池田家や、本多家、酒井家といった譜代大名が屋敷を構えており、徳川家との親密な関係を示すと考えられます。

そのほかに、土製の鳩笛や型が、IV面の遺構をはじめ、第1層などから出土しました。鳩のほかにも馬や福助とみられる型も出土しています。元浅草遺跡の各層は盛土であり、外部から持ち込まれたと考えられるため、この型や土製品が元浅草遺跡で使われたものかどうかは不明ですが、江戸時代の土製品製作の一端を垣間見ることができる資料です。

IV面に属する遺構で特に注目されるのは、調査範囲の東側で見られた赤褐色の盛土面(第5層)とそれに伴う遺構です(写真11)。第5層は調査範囲の北側で途切れており、その境界には間知石の列がありました(写真12)。この間知石列を調査したところ、胴木を設け、その上に間知石を3段積み上げた石積遺構であることがわかりました(33号遺構、写真13)。石積を設け、その南側に赤褐色土の盛土を行って、居住可能な土地としていたようです。33号遺構は、調査範囲を東西に横断しており、西側では調査範囲外に続いていることがわかりました。先述のとおり、元浅草遺跡では江戸時代の初頭に南北に分割されてそれぞれに組屋敷が設けられていた時期がありました。33号遺構は、その時の境界にあたる可能性があります。土層を確認すると33号遺構の北側は溝となっていたようですが、調査範囲内で対岸となる石積遺構を検出することができませんでした。33号遺構の北側の溝は、幅の広い水路などがあったのかもかもしれません。

一方、33号遺構の南側の赤褐色土の盛土面(第5層)には、建物基礎や土坑などの遺構が遺されていました。建物基礎は、南側に開いた「コ」の字の形をした浅い溝状の遺構です(写真14)。この溝の中に焼けた瓦が敷き詰められていました(写真15)。焼けた瓦の中には、家紋と考えられる文様を持つものがありました(写真31)。この家紋は「蝶」を模しています。元浅草遺跡に屋敷を構えた大名の中では、池田家の家紋に蝶が使われています。池田家の家紋と、出土した瓦の文様とは少し形が違いますが、池田家との関係が示唆される遺構です。



写真1 府立第一高等女学校の講堂と考えられる建物基礎（35号遺構）



写真2 35号遺構の南側側面



写真3 35号遺構の東側側面



写真4 煉瓦の炭書き「口」



写真5 35号遺構に沿う土管列（37号遺構）



写真6 池遺構 (61・93号遺構) (池中央にある杭列は、35号遺構下部の杭)



写真7 61号遺構の石積 (北西部分)



写真8 構築当初の93号遺構



写真9 池遺構に接続する導水施設 (75～80号遺構)



写真10 池遺構の埋立て用土留板列 (48号遺構)



写真 11 IV面の赤褐色盛土（第5層）の上面



写真 12 石積遺構の検出状況（33号遺構）



写真 13 石積遺構の側面（33号遺構）



写真 14 第5層上面で検出された建物基礎（24号遺構）



写真 15 24号遺構の瓦充填の様子



写真 16 第1層の出土遺物



写真 17 第2-1・3層・第3層の出土遺物



写真 18 第2-2層の出土遺物



写真 19 第4層の出土遺物



写真 20 35号遺構の出土遺物



写真 21 35号遺構に使用された煉瓦



写真 22 煉瓦製柵に使用された煉瓦



写真 23 池遺構上層の出土遺物 (1)



写真 24 池遺構上層の出土遺物 (2)



写真 25 池遺構上層の出土遺物 (3)



写真 26 池遺構下層の出土遺物



写真 27 6号遺構の出土遺物



写真 28 6号遺構から出土した賤機焼



写真 29 69・70・74号遺構の出土遺物



写真 30 埴笛とその型



写真 31 24号遺構から出土した瓦

Summary

The Motoasakusa Site 2nd excavation report.

The Motoasakusa Site is located in Motoasakusa, Taito-ku, Tokyo. The site is located on a lowland between the Musashino Plateau and the Sumida River. The current elevation is about 2 m above sea level. In the Edo period, there were residences of samurai and feudal lords, and in the Meiji period, there was Tokyo Prefecture First High School for Girls. Currently, Tokyo Metropolitan Hakuou High School is located there.

Through this archaeological excavation, we unearthed remains and artifacts mainly from the Edo period and the Meiji period. The remains were mainly located on piles of embankments. We categorized the results into three phases according to the order of embankment, giving them the names Phase II, Phase III, and Phase IV.

Phase II corresponded to the middle of the Meiji period or later. We found three foundations of Tokyo Prefecture First High School for Girls. The foundations were constructed of wood, concrete, and bricks. We believe that the foundations were built solidly to cope with the soft ground of the lowland area. We also found clay pipes along the building foundations. We believe they were intended to collect rainwater and drain it off.

Phase III corresponded to the late Edo period to the early Meiji period. We found a large pond in the center of the survey area. The pond was surrounded by wedge-shaped stones, and a central island was built in the center of the pond. We assume that it was a garden pond used by feudal lords. The pond was gradually filled in from the end of the Edo period, and we assume that the reclamation was completed before the construction of the Tokyo Prefecture First High School for Girls. We also found three water-conducting facilities made of wooden flumes and wooden boxes in the northwest of the pond. These would be the facilities for regulating the pond's water.

Phase IV corresponded to the early Edo period. We found masonry remains crossing the survey area from east to west. This masonry remains consisted of three wedge-shaped stones piled up and was accompanied by a retaining plate. Based on an Edo period map, we assume that the masonry remains demarcated in this area. We also found a reddish-brown soil embankment to the south of the masonry remains. This embankment was made after the masonry remains were built, and there were remains of buildings on this embankment. The masonry remains may have been constructed in preparation for embankment to create ground for human habitation.

Each phase of this survey yielded interesting results. We hope that this report will be useful in understanding this site.

序 言

元浅草遺跡は、武蔵野台地縁辺と隅田川との中間にあたる低地部に遺された遺跡です。今回の調査地点は、都立白鷗高等学校の校庭部分にあたります。

今回の調査は都立白鷗高等学校附属中学校の仮設校舎建設に先立って行われました。調査期間は令和4年7月から令和6年4月までで、調査面積は1,800㎡です。

調査の結果、近世から近代の遺構・遺物を確認しました。近世の成果として特に注目されるものは、調査範囲の中央を占める池遺構です。周囲に間知石の護岸を持ち、中央に中の島を伴う大きなものでした。近世から近代まで継続して利用されており、当地を利用した大名屋敷に伴うものと考えられます。近代の成果として特に注目されるものは、現在の白鷗高等学校の前身となった東京府立第一高等女学校の建物基礎です。桐木、コンクリート、煉瓦を用いて強固に作られており、関東大震災でも校舎の倒壊は免れたようです。

これらの調査成果をまとめた本報告書が、多くの人々に活用され、地域の歴史を解明する資料となることを期待いたします。また、本報告書を通じて、埋蔵文化財に対する都民の皆様の関心とご理解を深めていただくことができれば幸いです。

本報告書の刊行にあたり、ご協力とご指導をいただきました東京都教育委員会、台東区教育委員会に厚く御礼を申し上げるとともに、ご教示いただきました研究者の皆様、近接地での調査にご理解とご協力をいただきました都立白鷗高等学校関係者の皆様、地域の住民の皆様に心より感謝を申し上げます。

令和6年7月

公益財団法人 東京都教育支援機構
理事長 坂東 眞理子

例 言

- 1 本書は、東京都立白鷗高等学校附属中学校仮設校舎建設予定地における台東区元浅草遺跡（台東区No.11）の発掘調査報告（東京都埋蔵文化財センター調査報告第386集）である。
- 2 調査は、東京都教育庁都立学校教育支援部の委託を受け、公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センターが開始し、令和5年4月1日に公益財団法人東京学校支援機構東京都埋蔵文化財センターへ事業を移管した。その後、令和5年7月1日からは公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センターと改称し、事業を継続実施した。
- 3 遺跡所在地：台東区元浅草一丁目6番22号 都立白鷗高等学校校庭
- 4 調査面積：1,800㎡
- 5 調査期間
発掘調査 令和4年7月25日～令和5年6月27日
一次整理 令和5年2月20日～令和5年4月28日
二次整理及び報告書作成期間 令和5年4月15日～令和6年4月30日
- 6 本事業における事業者との調整などは、東京都教育庁地域教育支援部管理課が担当・指導した。
課長代理 鈴木徳子
埋蔵文化財担当 野口 舞（令和4年7月25日～令和6年4月30日）
- 7 調査担当者
東京都埋蔵文化財センター台東区白鷗高校分室
調査課課長代理 小林 裕（令和4年7月25日～令和6年4月30日）
調査研究員 山崎太郎（令和4年8月1日～令和6年4月30日、令和5年4月1日より主任調査研究員）
調査研究員 両角まり（令和4年8月1日～令和5年12月31日）
調査協力
株式会社鴻池組東京本店（請負会社）
株式会社ジオダイナミック（協力会社）
- 8 本報告書は「Ⅰ 調査の経緯」「Ⅲ 層序」「Ⅳ 遺構と遺物 Ⅰ 遺構」を山崎が執筆し、「Ⅱ 遺跡の位置と環境」「Ⅵ 調査の成果と課題」を山崎と両角が分担して執筆した。「Ⅲ 遺構と遺物 2 遺物」については、「1）中世以前の遺物」の一部を及川良彦（東京都埋蔵文化財センター）が、「14）動物遺体」を宮本由子（東京都埋蔵文化財センター）、江田真毅氏・許開軒氏（北海道大学）、阿部常樹氏（國學院大學）が執筆し、その他は両角が執筆した。また、「Ⅳ 分析と考察」については後述のとおり、ご寄稿を賜った。編集は山崎が行った。
- 9 出土した陶磁器・土器の胎土分析、金属製品、銭貨、煉瓦の分析、及び金属製品、木製品の保存処理は長佐古真也（東京都埋蔵文化財センター）が行った。煉瓦の分析結果については、Ⅳに報告を記載した。

- 10 遺跡から出土した木種の樹種同定及び年輪年代の測定は、鈴木伸哉（東京都埋蔵文化財センター）・大山幹成（東北大学植物園）が行った。分析結果については、IVに報告を記載した。
- 11 本報告に関わる現地指導は次のとおりである。
- (1) 33号遺構出土の間知石の調査：柴田徹氏（石器石材研究所）
 - (2) 動物遺体等の調査：阿部常樹氏（國學院大學）
 - (3) 文献・史料等の調査：渋谷葉子氏（徳川林政史研究所）
- 調査成果について、(1)についてはご指導いただいた内容をⅢの報告に反映させるかたちで掲載した。(2)について、ご寄稿いただき、Ⅲに掲載した。(3)について、ご寄稿いただき、IVに掲載した。ご寄稿いただいた文章は、独立したものである。
- 12 出土遺物及び発掘・整理調査に関わる図面・写真記録等は、東京都教育委員会にて保管している。
- 13 本調査については以下で報告しているが、本書の刊行をもって正式報告とする。
- 山崎太郎 2023 「台東区元浅草遺跡」『たまのよこやま』132 5頁
 - 山崎太郎 2024 「台東区元浅草遺跡」『東京都埋蔵文化財センター年報』43 22頁
 - 山崎太郎 2024 「台東区元浅草遺跡」『東京都埋蔵文化財センター遺跡調査発表会』7-8頁
- 14 本文用例等
- ・土色及び遺物の色調の表記には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を用いた。
 - ・各挿図の縮尺及び記号の判例はそれぞれ図中に示した。図中の方位記号は真北を示す。遺構断面図中に表記した標高値はT.P.（東京湾平均海面：Tokyo Peil）を基準とした計測値を用いている。
 - ・調査に伴う測量は、(測地成果 2011) 平面直角座標IX系を基準とした。
 - ・本調査地点の標準座標は調査範囲を包括するグリッドの北西端A1、平面直角座標 $X = -32406.779$ m・北緯 $35^{\circ} 42'$ 、 $Y = -4598.286$ m・東経 $139^{\circ} 46'$ を代表値とした。
 - ・各挿図のトーン、各遺物の計測位置は、後述の凡例のとおりである。
 - ・出土遺物の注記略号は「MA22」である。
 - ・第1図及び第6図に使用した「東京都縮尺2,500分の1地形図」は、東京都知事の承認を受けて使用した。(承認番号)6都市基交著第26号、6都市基交測第62号
- 15 発掘調査及び整理・報告書作成について、下記の方々にご指導・ご協力を賜った。記して深謝します(敬称略・五十音順)。
- 幾島 審、岩淵合治、小俣 悟、金子 智、齊藤 進、清野利明、谷川章雄、中野光将、仲光克顕、長佐古美奈子、深井明比古
- 一般社団法人颯友会、白桦市教育委員会、公益財団法人三井文庫、静岡市観光交流文化局文化財課、台東区教育委員会、東京都教育委員会、東京都立白鷗高等学校、鶴岡市郷土資料館
- 16 本報告書の著作権（日本国著作権法第21条から第28条までに規定された権利）、及び編集著作権（著作権法第12条第1項）は、公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センターが保有する。

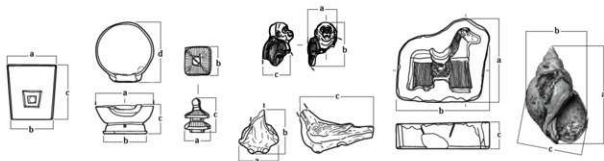
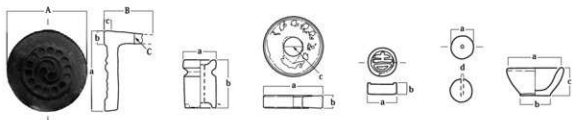
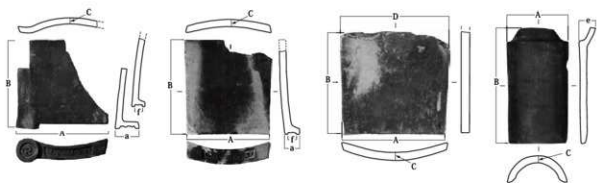
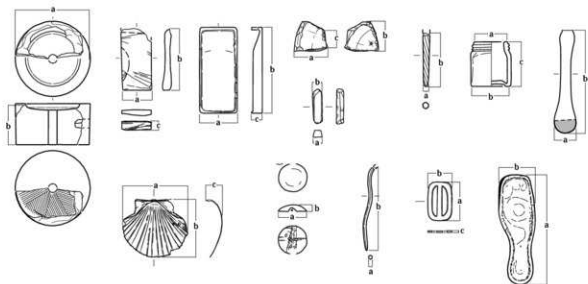
凡例

遺構凡例



遺物凡例





目次

元浅草遺跡（台東区 No.11）の調査成果

Summary

序言

例言・凡例

目次

巻頭写真図版目次

挿図目次

表目次

図版目次

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	2
1) 調査の方法	2
2) 発掘作業の経過	6
3) 整理作業等の経過	8

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	9
2 歴史的環境	10
1) 周辺の遺跡	10
2) 調査地点の概要	13

III 層序

22

IV 調査の成果

1 遺構	28
1) II面の遺構	28
2) III面の遺構	55
3) IV面の遺構	95
2 遺物	124
1) 中世以前の遺物	124
2) 陶磁器・土器	127
3) 木製品	209
4) 金属製品	227
5) 石製品	236
6) ガラス製品	237
7) 植物質製品	240

8) 骨角貝製品	240
9) その他の素材製品	241
10) 瓦	243
11) 煉瓦	244
12) その他(建材など)	266
13) ミニチュア、人形、玩具	266
14) 動物遺体	274
A. 貝類・魚類遺体	275
B. 鳥類	283
C. 爬虫類	286
D. 哺乳類	286
15) 植物遺体	286
V 分析と考察	
1 元浅草遺跡・白鷺高校地区の江戸時代における土地利用	287
2 元浅草遺跡 2次地点から出土した遺構構成材の樹種同定と年輪年代学的検討	308
3 EDXを用いた元素分析による元浅草遺跡出土煉瓦の分類	311
VI 調査の成果	323
引用・参考文献	332
写真図版	
報告書抄録	

巻頭写真図版

写真1 府立第一高等女子学校の講堂と考えられる建物基礎(35号遺構)	iv	写真13 石積遺構の側面(33号遺構)	vi
写真2 35号遺構の南側側面	iv	写真14 第5層上面で検出された建物基礎(24号遺構)	vi
写真3 35号遺構の東側側面	iv	写真15 24号遺構の瓦充填の様子	vi
写真4 煉瓦の炭書き「口」	iv	写真16 第1層の出土遺物	vii
写真5 35号遺構に沿う土管列(37号遺構)	iv	写真17 第2-1・3層・第3層の出土遺物	vii
写真6 池遺構(61・93号遺構)(池中央にある杭列は、35号遺構下部の杭)	v	写真18 第2-2層の出土遺物	vii
写真7 61号遺構の石積(北西部分)	v	写真19 第4層の出土遺物	vii
写真8 構築当初の93号遺構	v	写真20 35号遺構の出土遺物	vii
写真9 池遺構に接続する導水施設(75~80号遺構)	v	写真21 35号遺構に使用された煉瓦	vii
写真10 池遺構の埋立て用土留板列(48号遺構)	v	写真22 煉瓦製柵に使用された煉瓦	vii
写真11 IV面の赤褐色盛土(第5層)の上面	vi	写真23 池遺構上層の出土遺物(1)	vii
写真12 石積遺構の検出状況(33号遺構)	vi	写真24 池遺構上層の出土遺物(2)	viii
		写真25 池遺構上層の出土遺物(3)	viii

写真 26	池遺構下層の出土遺物	viii	写真 29	69・70・74号遺構の出土遺物	viii
写真 27	6号遺構の出土遺物	viii	写真 30	鳩笛とその型	viii
写真 28	6号遺構から出土した炭機焼	viii	写真 31	24号遺構から出土した瓦	viii

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第31図	池遺構掘方(1/150)	69
第2図	試掘の成果(1)	3	第32図	61号遺構(1)(1/60)	70
第3図	試掘の成果(2)	4	第33図	61号遺構(2)(1/60)	71
第4図	グリッドと調査区の設定	6	第34図	61号遺構(3)(1/60)	72
第5図	周辺の地形図	9	第35図	61号遺構(4)(1/60)	73
第6図	台東区の遺跡(1/30,000)	11	第36図	61号遺構(5)(1/60)	74
第7図	明治時代の調査地点付近	15	第37図	61号遺構(6)(1/60)	75
第8図	府立第一高等女学校校舎配置図	16	第38図	61号遺構(7)(1/30)	76
第9図	府立第一高等女学校校舎の写真	17	第39図	48・93号遺構(1/80)	77
第10図	トレンチの位置と土層模式図	23	第40図	93・47号遺構(1/60)	78
第11図	調査範囲の土層(1)	24	第41図	48号遺構(1/60)	79
第12図	調査範囲の土層(2)	25	第42図	51号遺構(1/100・1/60)	80
第13図	Ⅱ面遺構全体図(1/350)	39	第43図	91号遺構(1/60)	81
第14図	35号遺構(1)(1/100)	40	第44図	73・90・64号遺構(1/20・1/40)	82
第15図	35号遺構(2)(1/60)	41	第45図	75・76・77・78・79・80号遺構(1/40)	83
第16図	35号遺構(3)(1/60)	42	第46図	80号遺構木樋(1/30)	84
第17図	35号遺構(4)(1/60)	43	第47図	88・92号遺構(1)(1/40)	85
第18図	35号遺構(5)(1/40)	44	第48図	88・92号遺構(2)(1/40・1/20)	86
第19図	35号遺構(6)(1/250・1/100)	45	第49図	88号遺構木樋(1)(1/30)	87
第20図	35号遺構(7)(1/30)	46	第50図	88号遺構木樋(2)(1/30)	88
第21図	52・58・63号遺構(1/100)	47	第51図	88号遺構木樋(3)(1/30)	89
第22図	56・60号遺構(1/60)	48	第52図	81・94号遺構(1/80・1/60)	90
第23図	7・10・15・18・19号遺構(1/80・1/60)	49	第53図	32・45号遺構(1/100・1/20)	91
第24図	39・40・62・67・14・30・36・57号遺構(1/60・1/40)	50	第54図	66・82号遺構(1/20)	92
第25図	8・13・34・46号遺構(1/60)	51	第55図	83・84号遺構(1/100・1/20)	93
第26図	37・38・41・44号遺構(1/120・1/40・1/20)	52	第56図	87号遺構(1/40)	94
第27図	11・53・59号遺構(1/80)	53	第57図	Ⅳ面遺構全体図(1/350)	103
第28図	42・43・49・50・54・55号遺構(1/40)	54	第58図	33号遺構(1)(1/120)	104
第29図	Ⅲ面遺構全体図(1/350)	66	第59図	33号遺構(2)(1/80)	105
第30図	池遺構全体図(1/150)	67	第60図	33号遺構(3)(1/60)	106
			第61図	33号遺構(4)(1/30)	107

第62図	33号遺構(5)(1/30)	108	第97図	陶磁器・土器(21)	162
第63図	33号遺構(6)(1/30)	109	第98図	陶磁器・土器(22)	163
第64図	33号遺構(7)(1/30)	110	第99図	陶磁器・土器(23)	164
第65図	2号遺構(1)(1/80)	113	第100図	陶磁器・土器(24)	165
第66図	2号遺構(2)(1/30)	114	第101図	陶磁器・土器(25)	166
第67図	24号遺構(1/60・1/40)	115	第102図	陶磁器・土器(26)	167
第68図	12・26号遺構(1/20)	116	第103図	陶磁器・土器(27)	168
第69図	95・96・97・98・1・3・4号遺構(1/40・1/20)	117	第104図	陶磁器・土器(28)	169
			第105図	陶磁器・土器(29)	170
第70図	96号遺構木樋(1/30)	118	第106図	陶磁器・土器(30)	171
第71図	22・9・23・21号遺構(1/40・1/20)	119	第107図	陶磁器・土器(31)	172
第72図	25・29・27・85・89・17号遺構(1/20・1/40・1/80)	120	第108図	陶磁器・土器(32)	173
第73図	31・68・70・69・74・71・72号遺構(1/40)	121	第109図	陶磁器・土器(33)	174
第74図	6号遺構(1/40)	122	第110図	陶磁器・土器(34)	175
第75図	池遺構関連の注記	125	第111図	陶磁器・土器(35)	176
第76図	中世以前の遺物	126	第112図	陶磁器・土器(36)	177
第77図	陶磁器・土器(1)	142	第113図	陶磁器・土器(37)	178
第78図	陶磁器・土器(2)	143	第114図	陶磁器・土器(38)	179
第79図	陶磁器・土器(3)	144	第115図	陶磁器・土器(39)	180
第80図	陶磁器・土器(4)	145	第116図	陶磁器・土器(40)	181
第81図	陶磁器・土器(5)	146	第117図	陶磁器・土器(41)	182
第82図	陶磁器・土器(6)	147	第118図	陶磁器・土器(42)	183
第83図	陶磁器・土器(7)	148	第119図	陶磁器・土器(43)	184
第84図	陶磁器・土器(8)	149	第120図	陶磁器・土器(44)	185
第85図	陶磁器・土器(9)	150	第121図	陶磁器・土器(45)	186
第86図	陶磁器・土器(10)	151	第122図	陶磁器・土器(46)	187
第87図	陶磁器・土器(11)	152	第123図	陶磁器・土器(47)	188
第88図	陶磁器・土器(12)	153	第124図	陶磁器・土器(48)	189
第89図	陶磁器・土器(13)	154	第125図	陶磁器・土器(49)	190
第90図	陶磁器・土器(14)	155	第126図	陶磁器・土器(50)	191
第91図	陶磁器・土器(15)	156	第127図	陶磁器・土器(51)	192
第92図	陶磁器・土器(16)	157	第128図	陶磁器・土器(52)	193
第93図	陶磁器・土器(17)	158	第129図	陶磁器・土器(53)	194
第94図	陶磁器・土器(18)	159	第130図	陶磁器・土器(54)	195
第95図	陶磁器・土器(19)	160	第131図	木製品(1)	211
第96図	陶磁器・土器(20)	161	第132図	木製品(2)	212
			第133図	木製品(3)	213

第134図	木製品(4)	214	第171図	池遺構出土オオタニシ殻高分布	283
第135図	木製品(5)	215	第172図	江戸全図(部分、白竹市教育委員会所蔵)	298
第136図	木製品(6)	216	第173図	江戸大絵図(部分、公益財団法人三井文庫所蔵)	298
第137図	木製品(7)	217			
第138図	木製品(8)	218	第174図	新編江戸外全図東ノ浅草、北ノ染井、西ノ小石川(部分、国立国会図書館デジタルコレクション)	298
第139図	木製品(9)	219	第175図	御府内往還其外治革図書 延宝年中の形(部分、国立国会図書館デジタルコレクション)	298
第140図	木製品(10)	220	第176図	御府内往還其外治革図書 貞享四卯年の形(部分、国立国会図書館デジタルコレクション)	298
第141図	木製品(11)	221	第177図	御府内往還其外治革図書 元禄十一寅年の形(部分、国立国会図書館デジタルコレクション)	298
第142図	木製品(12)	222	第178図	御府内往還其外治革図書 宝永二酉年の形(部分、国立国会図書館デジタルコレクション)	299
第143図	木製品(13)	223	第179図	御府内往還其外治革図書 享保年中の形(部分、国立国会図書館デジタルコレクション)	299
第144図	木製品(14)	224	第180図	御府内往還其外治革図書 当時(弘化2年)の形(部分、国立国会図書館デジタルコレクション)	299
第145図	金属製品(1)	229	第181図	[江戸屋敷間取図](鶴岡市郷土資料館「阿部正己文庫」のうち「松山藩史料」345)	300
第146図	金属製品(2)	230	第182図	[松山藩江戸屋敷間取図](鶴岡市郷土資料館「阿部正己文庫」のうち「松山藩史料」346)	300
第147図	金属製品(3)	231	第183図	元浅草遺跡第2次地点から出土した遺構構築材の顕微鏡写真	310
第148図	金属製品(4)	232	第184図	元浅草遺跡第2次調査地点から出土した木種用材の横断面写真	310
第149図	金属製品(5)	233	第185図	元浅草遺跡第2次調査地点から出土した木種用材と都内墓地遺跡出土木棺材の標準年輪曲線とのクロスデーティング結果	311
第150図	金属製品(6)	234	第186図	板目(手抜き成形)「さ」「サ」刻印煉瓦分析値の二元分布図	317
第151図	石製品	238	第187図	板目(手抜き成形)「他刻印、無刻印・不明」煉瓦分析値の二元分布図	318
第152図	ガラス製品	239	第188図	チチレ目(機械成形)煉瓦各種分析値の二元分布図	319
第153図	骨角貝製品	241	第189図	出土煉瓦分析値の遺構別二元分布図	320
第154図	その他の素材の製品	242	第190図	器種別出土パターン	325
第155図	瓦(1)	245			
第156図	瓦(2)	246			
第157図	瓦(3)	247			
第158図	瓦(4)	248			
第159図	煉瓦サンプル採取位置	255			
第160図	煉瓦(1)	256			
第161図	煉瓦(2)	257			
第162図	煉瓦(3)	258			
第163図	煉瓦(4)	259			
第164図	煉瓦刻印の種類	260			
第165図	その他の建材など	265			
第166図	玩具・ミニチュア・人形(1)	269			
第167図	玩具・ミニチュア・人形(2)	270			
第168図	玩具・ミニチュア・人形(3)	271			
第169図	玩具・ミニチュア・人形(4)	272			
第170図	出土バイ殻高・殻幅分布(N=5以上)	282			

第191図 時期別出土パターン……………	325	第193図 池遺構と周辺の遺構の変遷(1/500) ……	331
第192図 II面の遺構と学校校舎の配置図(1/800) ……	330		

表目次

第1表 都立白鷗高等学校附属中学校仮設校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査工程表……………	7	第32表 埋設桶計測表……………	123
第2表 台東区の遺跡一覧……………	11	第33表 土坑計測表……………	123
第3表 元浅草遺跡の土地利用の概略……………	14	第34表 溝計測表……………	123
第4表 煉瓦製建物基礎計測表……………	54	第35表 遺物集中部計測表……………	123
第5表 56号遺構内土坑計測表……………	54	第36表 中世以前の遺物観察表……………	127
第6表 近代コンクリート製構築物計測表……………	54	第37表 陶磁器・土器観察表……………	196
第7表 鉄管・土管計測表……………	54	第38表 文字や記号が記された陶磁器・土器の一覧表 ……	207
第8表 コンクリート製・煉瓦製橋計測表……………	55	第39表 木製品観察表……………	225
第9表 木製橋計測表……………	55	第40表 金属製品観察表……………	235
第10表 土坑計測表……………	55	第41表 石製品観察表……………	239
第11表 86号遺構礎石計測表……………	55	第42表 ガラス製品観察表……………	240
第12表 石積遺構計測表……………	81	第43表 植物質製品観察表……………	240
第13表 中の島計測表……………	81	第44表 骨角貝製品観察表……………	241
第14表 池遺構内土留板計測表……………	81	第45表 その他の素材の製品観察表……………	243
第15表 池遺構内瓦集中部計測表……………	81	第46表 瓦観察表……………	249
第16表 土留板計測表……………	81	第47表 煉瓦観察表……………	261
第17表 木桶計測表……………	94	第48表 煉瓦刻印の歪みと押印の作業方向 ……	266
第18表 竹桶計測表……………	94	第49表 その他の建材など観察表……………	267
第19表 木製橋計測表……………	94	第50表 玩具・人形・ミニチュア観察表……………	273
第20表 32号遺構板基礎計測表……………	95	第51表 動物遺体一覧表……………	274
第21表 45号遺構礎石計測表……………	95	第52表 貝類・魚類種名表……………	276
第22表 井戸計測表……………	95	第53表 出土貝類遺体同定結果……………	279
第23表 箱状木枠計測表……………	95	第54表 出土魚類遺体同定結果……………	280
第24表 溝計測表……………	95	第55表 出土ハマグリ計測結果……………	280
第25表 土坑計測表……………	95	第56表 出土パイ計測結果……………	281
第26表 石積遺構計測表……………	111	第57表 池遺構出土オオタニシ計測結果……………	282
第27表 33号遺構間知石一覧表……………	111	第58表 鳥類種名表……………	285
第28表 土留板計測表……………	112	第59表 元浅草遺跡における鳥類の出土量 ……	285
第29表 建物基礎計測表……………	123	第60表 爬虫類・哺乳類種名表……………	286
第30表 井戸計測表……………	123	第61表 屋敷地所有者等観歴……………	301
第31表 木桶計測表……………	123	第62表 元浅草遺跡白鷗高校地区 江戸時代屋敷関係 年表……………	302

第63表	元浅草遺跡第2次調査地点から出土した遺構 構築材の樹種	第65表	分析結果	321
	312	第66表	器種別出土量	326
第64表	元浅草遺跡第2次調査地点から出土した木樋 用材の年輪計測値	第67表	時期別出土量(パーセンテージ)	327
	312	第68表	遺構別素材別出土量	328

図版目次

図版1	1. I区IV面全景(南から) 2. III区II面全景(西から)	2. 35号遺構拡張部桐木検出状況(西から) 3. 35号遺構東辺・南辺桐木結合部(南から)	
図版2	1. II・III区III・IV面全景(西から)	4. 35号遺構南辺桐木・横木撤去状況(西から)	
図版3	1. I区北壁土層堆積状況(南から) 2. II区北壁土層堆積状況(南から) 3. III区北壁土層堆積状況(南から) 4. 35号遺構建物基礎南側土層堆積状況(東から)	5. 35号遺構南辺桐木・横木撤去状況(南から)	
図版4	1. I区南北トレンチ土層堆積状況(1)(西から) 2. I区南北トレンチ土層堆積状況(2)(西から) 3. I区南北トレンチ土層堆積状況(3)(西から) 4. I区南北トレンチ土層堆積状況(4)(西から) 5. I区南北トレンチ土層堆積状況(5)(西から) 6. I区東西トレンチ土層堆積状況(1)(南から) 7. I区東西トレンチ土層堆積状況(2)(南から) 8. I区東西トレンチ土層堆積状況(3)(南から)	図版9	1. 52号遺構東辺内部側面(西から) 2. 56号遺構北辺外部側面(北から) 3. 39・40号遺構検出状況(東から) 4. 15号遺構上段(南から) 5. 15号遺構下段消火栓検出状況(南から)
図版5	1. I区東西トレンチ土層堆積状況(4)(南から) 2. I区東西トレンチ土層堆積状況(5)(南から) 3. I区東西トレンチ土層堆積状況(6)(南から) 4. II区深掘トレンチ土層堆積状況(南から) 5. 35号遺構東張出部(北から) 6. 35号遺構東辺内部側面(西から) 7. 35号遺構拡張部東辺内部側面(西から)	図版10	1. 7号遺構北側(北から) 2. 7号遺構南側(南から) 3. 13・34号遺構検出状況(西から) 4. 13・38・46号遺構検出状況(東から) 5. 34号遺構検出状況(南から) 6. 46号遺構検出状況(西から) 7. 62号遺構検出状況(南から) 8. 67号遺構検出状況(北西から)
図版6	1. 35号遺構東辺外部側面(東から) 2. 35号遺構南辺外部側面(南から) 3. 35号遺構中辺内部側面(北から) 4. 35号遺構中辺中央炭書き「ロ下」 5. 35号遺構中辺中央炭書き「ハ下」	図版11	1. 14号遺構検出状況(東から) 2. 36号遺構検出状況(北から) 3. 37号遺構検出状況(東から) 4. 37号遺構木製枘a遺物検出状況(南から) 5. 37号遺構木製枘b底面検出状況(南から) 6. 44号遺構底面検出状況(南から) 7. 63号遺構土管検出状況(南から) 8. 10号遺構検出状況(南から)
図版7	1. 35号遺構西辺中央炭書き「二下」 2. 35号遺構中辺中央炭書き「へ下」 3. 35号遺構西辺炭書き「と下」 4. 35号遺構東辺中央炭書き(文字不明) 5. 35号遺構拡張部土層堆積状況(西から) 6. 35号遺構東辺外側土層堆積状況(北東から) 7. 35号遺構中辺南側土層堆積状況(西から)	図版12	1. 30号遺構検出状況(西から) 2. 38号遺構検出状況(南から) 3. 41号遺構検出状況(東から) 4. 60号遺構検出状況(北東から) 5. 59号遺構-1完掘(南から) 6. 53号遺構-1完掘(南から) 7. 11号遺構検出状況(北から)
図版8	1. 35号遺構桐木検出状況(北から)	図版13	1. 42号遺構底面検出状況(南から) 2. 50号遺構底面検出状況(北から) 3. 43号遺構完掘(南から)

	4. 49号遺構完掘(西から)		8. 48号遺構(南4)側面(東から)
	5. 54号遺構完掘(北から)	図版20	1. 48号遺構(南5)側面(東から)
	6. 55号遺構礎検出状況(北から)		2. 48号遺構(北1)検出状況(東から)
	7. 35号遺構調査作業		3. 48号遺構(北2)検出状況
	8. 30号遺構煉瓦サンプル採取作業		4. 48号遺構(北2)完掘(東から)
図版14	1. 池遺構検出状況(南から)		5. 91号遺構瓦集中部検出状況(南から)
	2. 47・48・51・61・93号遺構検出状況(南から)		6. 90号遺構底面・礎検出状況(西から)
図版15	1. 池遺構底面検出状況(南から)		7. 64a号遺構竹樋検出状況(東から)
	2. 池遺構完掘(南から)		8. 64b号遺構木樋検出状況(東から)
図版16	1. 61号遺構(A)石積検出状況(北東から)	図版21	1. 75・76・77・78・79・80号遺構完掘(東から)
	2. 61号遺構(B)石積前面(東から)		2. 76・80号遺構木樋検出状況(東から)
	3. 61号遺構(B・C)石積前面(北東から)		3. 77号遺構底面検出状況(西から)
	4. 61号遺構(C・D)石積前面(東から)		4. 75号遺構底面検出状況(西から)
	5. 61号遺構(D)石積前面・木樋出口部分(東から)		5. 80号遺構木樋内部堆積状況(東から)
	6. 61号遺構(E)石積前面(南から)		6. 81・88・92・94号遺構検出状況(東から)
	7. 61号遺構(F)石積前面(南西から)		7. 88・92号遺構検出状況(東から)
	8. 61号遺構(F)石積前面(南西から)	図版22	1. 88号遺構a木樋継手部分
図版17	1. 61号遺構(G)石積上面(北西から)		2. 92号遺構底面検出状況(南から)
	2. 61号遺構(G)石積前面(南西から)		3. 81・94号遺構検出状況(東から)
	3. 61号遺構(F・H)石積前面(南から)		4. 81号遺構側面(南から)
	4. 61号遺構(H)石積前面(南東から)		5. 81号遺構側面(南から)
	5. 61号遺構(I)石積前面(南西から)		6. 94号遺構側面(南から)
	6. 61号遺構(I・J)石積前面(西から)		7. 94号遺構側面(南から)
	7. 61号遺構(K・L)石積前面(西から)		8. 32号遺構-1礎面検出状況(南から)
	8. 61号遺構(L)石積検出状況(北西から)	図版23	1. 32号遺構-2検出状況(南から)
図版18	1. 61号遺構(C)桐木検出状況(北から)		2. 32号遺構-3検出状況(南から)
	2. 61号遺構(D)桐木検出状況(北から)		3. 32号遺構-4検出状況(南から)
	3. 61号遺構(G)桐木検出状況(西から)		4. 32号遺構-4礎面検出状況(南から)
	4. 93号遺構土層堆積状況(東から)		5. 32号遺構-5検出状況(南から)
	5. 93号遺構土層堆積状況(北から)		6. 45号遺構土層堆積状況(南から)
	6. 47号遺構検出状況(西から)		7. 66号遺構検出状況(北から)
	7. 47号遺構土留板側面(北西から)		8. 66号遺構底面検出状況(北から)
	8. 47号遺構土層堆積状況(北東から)	図版24	1. 82号遺構瓦出土状況(西から)
図版19	1. 48号遺構(南1)検出状況(東から)		2. 84号遺構-2礎出土状況(北から)
	2. 48号遺構(南1)コモ状繊維検出状況(1)(東から)		3. 84号遺構-3完掘(北から)
	3. 48号遺構(南1)コモ状繊維検出状況(2)(東から)		4. 83号遺構完掘(北から)
	4. 48号遺構(南2)側面検出状況(東から)		5. 87号遺構倒卸状況(北から)
	5. 48号遺構(南3)側面検出状況(東から)		6. 33号遺構検出状況(Ⅰ区東)(北から)
	6. 48号遺構(南4)側面検出状況(東から)		7. 33号遺構検出状況(Ⅰ区～Ⅱ区東)(西から)
	7. 48号遺構(南5)側面検出状況(東から)	図版25	1. 33号遺構検出状況(Ⅰ区西～Ⅱ区東)(北から)
			2. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(1)(北から)
			3. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(2)(北から)

4. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(3)(北から)
5. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(4)(北から)
6. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(5)(北から)
7. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(6)(北から)
8. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(7)(北から)
- 図版26 1. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(8)(北から)
2. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(9)(北から)
3. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(10)(北から)
4. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(11)(北から)
5. 33号遺構石積前面(Ⅰ区東)(北から)
6. 33号遺構石積前面(Ⅰ区西)(北から)
7. 33号遺構石積前面(Ⅱ区東)(北から)
8. 33号遺構石積前面(Ⅱ区西)(北から)
- 図版27 1. 33号遺構石積前面近影(Ⅰ区西)(北から)
2. 33号遺構アンカー状木製品あ出土状況(北東から)
3. 33号遺構アンカー状木製品い出土状況(西から)
4. 33号遺構アンカー状木製品う出土状況(南西から)
5. 33号遺構アンカー状木製品え出土状況(北東から)
6. 33号遺構アンカー状木製品お出土状況(西から)
7. 33号遺構アンカー状木製品か出土状況(北西から)
8. 33号遺構アンカー状木製品き出土状況(北から)
- 図版28 1. 33号遺構土留板検出状況(北から)
2. 33号遺構銅木検出状況(銅木①~④)(北から)
3. 33号遺構銅木検出状況(銅木⑤~⑧)(北から)
4. 33号遺構銅木検出状況(⑦~⑩)(北から)
5. 33号遺構銅木検出状況(銅木⑪・⑫)(北から)
6. 33号遺構銅木撤去後(銅木支え②~⑤)(北から)
7. 33号遺構銅木撤去後近影(銅木支え④・⑤)(北から)
8. 33号遺構銅木撤去後近影(銅木支え②・③)(北から)
- 図版29 1. 33号遺構完掘(Ⅰ区東)(北から)
2. 33号遺構完掘(Ⅰ区西~Ⅱ区東)(北から)
3. 33号遺構完掘(Ⅱ区西)(北から)
4. 33号遺構底詰め土層堆積状況(Ⅰ区東)(西から)
5. 33号遺構土層堆積状況(Ⅰ区東)(西から)
6. 33号遺構石積前面(Ⅲ区)(北から)
7. 33号遺構銅木検出状況(銅木⑬~⑯)(北から)
8. 33号遺構銅木撤去後(Ⅲ区)(北から)
- 図版30 1. 33号遺構土層堆積状況(Ⅲ区)(東から)
2. 99号遺構検出状況(南から)
3. 2号遺構検出状況(東から)
4. 24号遺構西辺瓦面検出状況(南から)
5. 12号遺構検出状況(南から)
6. 12号遺構土層堆積状況(南から)
7. 12号遺構井戸下段検出状況(南から)
- 図版31 1. 26号遺構土層堆積状況(西から)
2. 95・96・97号遺構検出状況(西から)
3. 95号遺構内部完掘(北から)
4. 95号遺構木樋出口部分近影(東から)
5. 96・97・98号遺構断削状況(北から)
6. 1号遺構底面検出状況(北東から)
7. 3号遺構遺物出土状況(西から)
8. 4号遺構遺物出土状況(西から)
- 図版32 1. 22号遺構底面検出状況(西から)
2. 21号遺構底面検出状況(南から)
3. 9号遺構側板検出状況(西から)
4. 23号遺構側板検出状況(南から)
5. 25号遺構側板・底面検出状況(南から)
6. 29号遺構底面検出状況(南から)
7. 85号遺構完掘(東から)
8. 89号遺構完掘(南から)
- 図版33 1. 27号遺構礫面検出状況(南から)
2. 31号遺構完掘(南から)
3. 68号遺構木材出土状況(南から)
4. 68号遺構完掘(南から)
5. 69・74号遺構完掘(西から)
6. 71号遺構完掘(北から)
7. 72号遺構遺物出土状況(北から)
8. 72号遺構完掘(北から)
- 図版34 1. 6号遺構完掘(東から)
2. 遺跡説明会(学校向け)(1)
3. 遺跡説明会(学校向け)(2)
4. 33号遺構土留板取上げ作業
5. 33号遺構銅木取上げ作業
6. 61号遺構調査作業

7. 61号遺構調査作業

8. I・II区雨天後水抜き作業

図版35 中世以前の遺物

図版36 文字や記号が記された陶磁器・土器(1)

図版37 文字や記号が記された陶磁器・土器(2)

図版38 木製品(1)

図版39 木製品(2)

図版40 木製品(3)

図版41 木製品(4)

図版42 木製品(5)

図版43 金属製品(1)

図版44 金属製品(2)

図版45 金属製品(3)

図版46 金属製品(4)

図版47 石製品、ガラス製品

図版48 植物質製品、骨角貝製品、その他の素材の製品

図版49 瓦

図版50 煉瓦(1)

図版51 煉瓦(2)

図版52 煉瓦(3)

図版53 煉瓦(4)

図版54 煉瓦(5)

図版55 煉瓦(6)

図版56 煉瓦(7)

図版57 その他建材など、玩具・ミニチュア・人形

図版58 動物遺体(貝類)

図版59 動物遺体(魚類)

図版60 動物遺体(鳥類)(1)

図版61 動物遺体(鳥類)(2)

図版62 動物遺体(爬虫類・哺乳類)

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経緯

東京都教育庁都立学校教育部（以下、「都立学校教育部」という。）は、都立白鷗高等学校附属中学校の建替え工事に伴い、仮設校舎を都立白鷗高等学校校庭に建設することとなった。この都立白鷗高等学校（以下、「白鷗高校」という。）の敷地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「元浅草遺跡（台東区No.11）」の範囲にあたる。このため、都立学校教育部から東京都教育庁地域教育支援部（以下、「地域教育支援部」という。）へ、令和3年12月24日付で法94条第1項に基づく通知（3教学高埋第2551号）を行った。地域教育支援部から都立学校教育部へ令和3年12月24日付で法94条第1項に基づく通知（3教地管理第3999号）があり、試掘調査を行うこととなった。試掘調査は東京都教育委員会教育長（以下、「都教育長」という。）が発注し、台東区教育委員会（以下、「区教委」という。）の立会いの下、トキオ文化財株式会社が令和3年12月25日から令和4年1月8日まで行った。この結果、江戸時代及び明治時代の遺構を検出したため、区教委は都教育長へ令和4年2月14日付でこの旨を回答（3台教生第1395号）した。

このような経緯をふまえ、都立学校教育部から地域教育支援部へ令和4年2月21日付で埋蔵文化財発掘調査の取り扱いについての照会（3教学高第3146号）があった。地域教育支援部は令和2年2月24日付で本発掘調査は地域教育支援部が対応し、調査については東京都スポーツ文化事業団東



第1図 遺跡の位置図

京都埋蔵文化財センター（令和5年4月1日より東京学校支援機構東京都埋蔵文化財センター、令和5年7月1日より東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター、以下「都埋文」という。）が実施する旨を回答（3教地管第2770号）、関係機関と調査実施に向けての協議を行うように通知した。

上記通知をうけて、都埋文から令和4年3月7日付で承諾書（3ス文事理文第3098号）を提出した。令和4年3月31日付で協定書（3教地管第3110号）、令和4年5月27日付で契約書（4教総契字第35号）が締結された。

調査開始にあたり、令和4年6月30日付で都埋文から都教育長へ法92条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘届（4ス文事理文第2191号）を提出し、令和4年7月19日付で都教育長から都埋文へ通知（3教地管第1322号）を受け取った。これに基づき、令和4年7月末から準備工を行うこととなった。

■試掘調査

試掘調査は、先述のとおり、都教育長が発注し、区教委の立会いの下、トキオ文化財株式会社が行った。調査は3か所のトレンチを設定し、総調査面積は40㎡である。調査期間は、令和3年12月25日から令和4年1月8日である。重機による表土除去の後、遺構確認・精査を人力で行った。その結果、トレンチ1では地表下1.6mで江戸時代の基礎杭列と石列が検出された。また、トレンチ2では地表下0.65m、トレンチ3では地表下0.85mで明治時代以降の煉瓦基礎が検出された。各トレンチにおいて平面図と土層断面図、写真撮影により記録した。埋戻しはトレンチ脇に仮置きした発生土を用いて行った。また表層についてはダスト舗装を行い、旧状に復した。

試掘調査では、江戸時代から明治時代の遺構が10基、遺物が35点確認された。各トレンチの位置と調査成果は第2・3図のとおりである。

トレンチ1においては、江戸時代と考えられる杭列7本、石列1基が検出された。遺物は8層から18世紀前半頃の磁器1点、陶器3点、土器1点、木製品1点の計6点が出土した。

トレンチ2においては、明治時代以降の煉瓦基礎が検出された。煉瓦基礎は大型礫を敷設した後、胴木とコンクリート土台を設置し、その上面に煉瓦が10段積み上げられていた。遺物は江戸時代から明治時代にかけての磁器10点、陶器11点、瓦3点、計24点が出土した。

トレンチ3においては、明治時代以降の煉瓦基礎が検出された。最深部の煉瓦基礎は煉瓦が9段積み上げられていた。遺物は12層から18世紀前半頃の磁器2点、陶器3点、計5点が出土した。

2 調査の方法と経過

1) 調査の方法

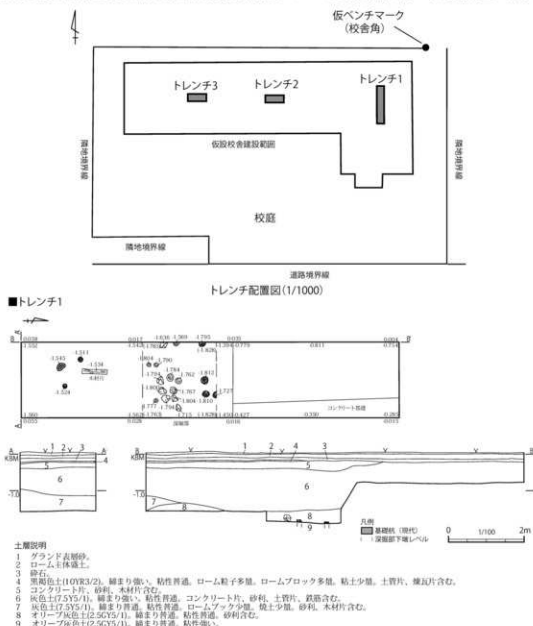
調査の方法は、地域教育支援部や区教委との協議の上で決定した。元浅草遺跡では昭和62年に都立学校遺跡調査会による調査（以下、「第1次調査」という。）が行われているが、今回の調査では第1次調査における遺構番号や遺構名称を用いず、土坑や井戸等の遺構を区別せず、全ての遺構に新規の通し番号を用いている。また、遺構調査の方法や作図、写真撮影などの記録については、第1次調査との互換性を保持し出来るように凡そ準拠している。なお、第1次調査と対比するため、本報告書では今回調査を「第2次調査」と呼ぶ。

発掘調査の作業手順については、都埋文の作業工程水準表及び掘削作業標準に従って実施した。ま

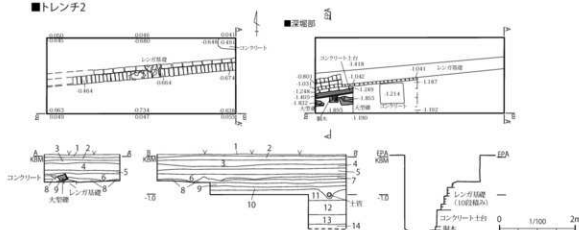
た、作業時間短縮のため、手作業による作図に加えて、遺構の記録には写真撮影による三次元測量を用いて作業を行った。

先述のとおり、調査地は白鷺高校の校庭であり、白鷺高校構内への入退場は原則 8 時 30 分から 17 時 00 分までと定められた。このため、都立学校教育部と都埋文は事前に協議を行い、調査地点に設置する仮設事務所（以下、「仮設事務所」という。）は朝礼や夕礼、作業時の休憩施設として利用することとし、白鷺高校の外部に調査事務所（以下、「調査事務所」という。）を設置して、調査に係る事務作業や測量データ処理、作業員の更衣等を行うこととした。また、整理作業についても、発掘調査終了後に調査事務所にて引き続き行うこととなった。調査事務所は令和 4 年 8 月 9 日から令和 6 年 3 月 22 日まで利用した。

また、調査にあたり、月に一回程度、都立学校教育部、地域教育支援部、白鷺高校、都埋文の四者で、仮設事務所、調査事務所、及び白鷺高校会議室において定例会議を行い、発掘調査の進捗状況や



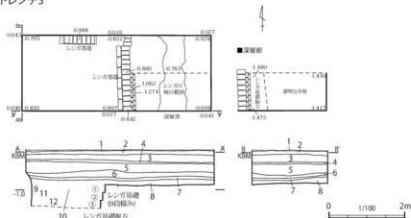
■トレンチ2



土層説明

- 1 グラウンド表層砂。
- 2 ローム主体強土。
- 3 砂石。
- 4 砂、礫瓦片含む。
- 5 コンクリート片、砂利、木材片含む。
- 6 灰色土 (7.5V5/1)、締まり強い、粘性普通、焼土多量、炭化物多量、コンクリート片、礫瓦片、礫含む。
- 7 明黄褐色 (10YR6/8) ローム主体土、締まり強い、粘性普通、焼土少量、礫少量、灰色土 (7.5V5/1) 中層。
- 8 黒褐色土 (10YR3/2)、締まり強い、粘性普通、ローム粒子多量、ロームブロック多量、粘土少量、土質片、礫瓦片含む。
- 9 灰色土 (7.5V5/1)、締まり強い、粘性強い、ローム粒子少量、焼土少量、礫少量。
- 10 灰色土 (7.5V5/1)、締まり強い、粘性強い、ローム粒子多量、焼土多量、炭化物多量、シルト質土多量、礫多量。
- 11 灰色土 (7.5V5/1)、締まり普通、粘性強い、ローム土多量、焼土少量、瓦片、貝片含む。
- 12 灰色土 (7.5V5/1)、締まり強い、粘性普通、ローム土少量、焼土中層、炭化物少量、瓦片含む。
- 13 オリーブ灰色土 (2.5GY5/1)、締まり普通、粘性強い、炭化物少量、漆喰微量、礫瓦片含む。
- 14 オリーブ灰色土 (2.5GY5/1)、締まり普通、粘性強い、木材片含む。

■トレンチ3



土層説明

- 1 グラウンド表層砂。
- 2 ローム主体強土。
- 3 砂石。
- 4 砂、礫瓦片含む。
- 5 コンクリート片、砂利、木材片含む。
- 6 灰色土 (7.5V5/1)、締まり強い、粘性普通、焼土多量、炭化物多量、コンクリート片、礫瓦片、礫含む。
- 7 明黄褐色 (10YR6/8) ローム主体土、締まり強い、粘性普通、焼土少量、礫少量、灰色土 (7.5V5/1) 中層。
- 8 黒褐色土 (10YR3/2)、締まり強い、粘性普通、ローム粒子多量、ロームブロック多量、粘土少量、土質片、礫瓦片含む。
- 9 灰色土 (7.5V5/1)、締まり普通、粘性普通、ローム土多量、漆喰微量、粘土少量。
- 10 灰色土 (7.5V5/1)、締まり普通、粘性強い、ローム土少量、漆喰少量、礫少量、土質含む。
- 11 明黄褐色 (10YR6/8) ローム土、締まり普通、粘性強い、灰色土 (7.5V5/1) 中層。
- 12 オリーブ灰色土 (2.5GY5/1)、締まり普通、粘性普通、焼土少量、炭化物少量、礫微量、礫瓦片含む。

礫瓦片母体土 土層説明

- ① オリーブ灰色土 (2.5GY5/1)、締まり強い、粘性強い、焼土少量、貝片微量、コンクリート片含む。
- ② オリーブ灰色土 (2.5GY5/1)、締まり普通、粘性強い、焼土微量、貝片微量。
- ③ オリーブ灰色土 (2.5GY5/1)、締まり弱い、粘性強い。

第3図 試掘の成果 (2)

調査工程の確認、調査状況の把握・共有を行い、調査を円滑に進めるための協議を行った。特に、定期試験などの学校行事へ配慮して作業を行う必要から、白鷺高校との情報共有を適時行った。

■グリッドと調査区の設定 (第4図)

調査範囲を包括し、軸線方向を調査範囲に準拠させた 4×4 m 方眼で区画し、その方眼の単位を 1

グリッドとした。グリッド名は北西隅を基点に、西から東へアラビア数字を1～21、北から南へアルファベットをA～Iの順で付した。また、発生残土の処理を場内で行うため、調査範囲をI区からIII区の調査区に区分して作業を行った。

座標軸の基点は、グリッドの北西端A1を0基点とし、世界測地系（測地成果2011）に基づく座標値は、平面直角座標 $X = -32406.779 \text{ m}$ ・北緯 $35^{\circ} 42'$ 、 $Y = -4598.286 \text{ m}$ ・東経 $139^{\circ} 46'$ 、真北 $-0^{\circ} 01'$ を示す。

■遺構の図化・遺物の取り上げ

本遺跡は第1次調査や試掘調査の結果から、近代から近世にいたるまでの遺物及び遺構が遺存していることが想定された。調査では、近代及び近世の2つの遺構確認面を検出し、遺構確認面までの掘り下げは重機を用いて掘削した。また、遺構の掘削や図化には基本的に人力を用いたが、本調査区には厚い覆土や盛土を伴う遺構や、間知石や桐木などの重量の重い構築物を含む遺構があり、これらの遺構では重機と人力を併用して掘削や取り上げを行った。また、遺構の記録には、手作業による作図に加えて、光波測量機器（トータルステーション）による測量や写真撮影による三次元測量を用いた。

Ⅲにて詳述する通り、本遺跡は客土の積み上げにより土層を形成しているため、包含層出土の遺物は必ずしも本遺跡で使用されたものとは限らない。このため、表土や包含層から出土したものについては層位ごとに一括して取り上げている。遺構出土のものについては、遺構ごとに一括して遺物を取り上げた。なお、池遺構については段階的な埋立てが確認されたため、埋立ての段階ごとに一括して取り上げている。

■写真撮影

記録写真の撮影はフルサイズデジタルカメラのみを用いて行っている。また、そのカメラを用いて高所作業車による撮影を適宜実施した。先述のとおり、発生残土の処理を場内で行うため、調査区を分割して順次発掘と埋め戻しを繰り返しながら調査を行った。そのため、調査範囲全体の写真撮影を行うことは適わず、各区の調査進捗に合わせて高所作業車を用いて写真を撮影した。

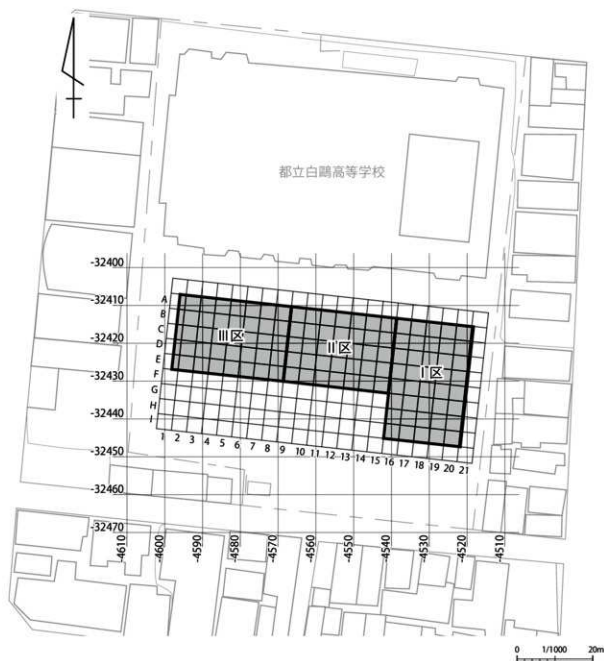
■遺構・遺物精査

検出された遺構と遺物について、調査時と整理事業時に精査し、出土遺物やその配置、及び文献や古地図等の情報から帰属時期を決定している。さらに、遺構の性格や帰属時期における特性を踏まえて報告書への掲載を判断し、個別遺構図・遺構全体図及び各種観察表を作成している。

出土遺物については、各時期の遺構や出土層位に鑑みて器種の分類を行い、特徴的な資料や遺存状態が良好な資料を中心に抽出して掲載している。

■報告書作成

報告書作成について、挿図・図版・表などは全てパソコン上で作業を行った。遺構図版は、手書き図面についてはスキャナで取り込み下図とし、三次元測量を行ったものは適宜方向を定めて切り取ることで下図とした。それらの下図をドローソフト（Adobe Illustrator CC）に取り込み、トレース及び版組を行った。遺物図版は、手書きにより作成した実測図をスキャナで取り込んだものを上記のドローソフトでトレースし、拓本をスキャナで取り込んだ画像や、デジタルカメラで撮影した画像と組み合わせて版組を行った。



第4図 グリットと調査区の設定

これらのデータを編集ソフト（Adobe InDesign CC）に貼付け、文章と共にレイアウトして編集したものを印刷業者に入稿した。

2) 発掘作業の経過（第1表）

調査に先立つ準備工は令和4年7月25日から開始した。当初、学校と調査区である校庭との境界に銅板柵を設置する予定であったが、試掘により、境界部分に校庭の設備の配線が通っていることが確認された。そのため、銅板柵ではなく、B型バリケードを用いて調査地を隔離した。

調査準備の整った令和4年8月8日からI区の発掘調査を開始した。発掘調査期間は当初令和5年3月末までの予定であったが、調査開始の遅れもあり、協議の結果、令和5年4月末までに発掘調査を終了することとなった。

発掘調査に伴う排土については場内に仮置きし、各調査区の終了後、埋め戻しを行った。I区の調査に伴う排土は、調査区南側の排土置き場とII・III区に仮置きし、I区の調査終了後に戻しを行った。II・III区の調査に伴う排土は排土置き場とI区に仮置きした。排土置き場については、防塵シートを設置し、水撒きを適宜行って、粉塵の飛散防止に努めた。

I区の発掘調査は令和4年8月8日から着手した。表土中には改良材やガレキの混入があるためとても硬く、表土掘削には時間を要した。さらに、多量のガレキを排土から分離し、場外搬出する必要が生じた。江戸時代の遺構確認面（以下、「近世面」という。）は現地表面から約1.5m掘り下げた地点で確認された。近世面には攪乱された箇所が多く、特にI区南側で攪乱の影響が大きかった。その中で、江戸時代の埋設桶や井戸、木枠、明治時代以降の建物基礎などを検出した。また、調査範囲内では無数の杭を検出している。杭は、近世以降に断続的に打ち込まれたものと考えられる。これらの木杭について協議を行い、調査と無関係のものについては残置とし、調査に影響のあるもののみ撤去し、場外へ搬出して廃棄物として処理を行った。

I区は令和4年10月27日に終了確認を行ったが、I区北側に間知石の石積と土留遺構(33号遺構)を検出したため、その部分を追加で調査することとなった。その後の調査により、33号遺構はI区からII・III区にまたがり、調査範囲全体に東西に伸びる遺構であることがわかった。遺構はI区の範囲から分割して調査を行い、間知石列とその下の胴木の取り上げを行って終了した。なお、この取り上げた33号遺構の石材について、考古石材研究所の柴田徹氏に現地指導を依頼した。I区の埋戻しは33号遺構の調査後の12月27日に完了した。

II区の発掘調査は令和4年10月17日に開始した。I区とII区の境界周辺から西側で近代の盛土層を確認した。この近代の盛土層の上面を確認面（以下、「近代面」という）として調査を行った。近代の確認面は現地表面から約1m掘り下げた地点である。近代面からは、煉瓦製建物基礎（35号遺構）や土管、煉瓦製の枡などを検出した。35号遺構はII・III区にまたがって検出され、明治時代に建設された府立第一高等女学校の講堂と考えられる。35号遺構の調査後、これを解体して近世面

第1表 都立白鷗高等学校附属中学校仮設校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査工程表

作業内容		令和4年度												令和5年度												令和6年度											
		7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月											
発掘調査	I区	浄土工																																			
		表土掘削																																			
		遺構調査																																			
	II区	埋戻し																																			
		表土掘削																																			
		遺構調査																																			
	III区	埋戻し																																			
		表土掘削																																			
		遺構調査																																			
	埋戻し																																				
	グラウンド舗装工																																				
	整備作業	一次整備	遺物洗浄																																		
遺物主記																																					
遺物		分類・接合																																			
		実測・拓本																																			
		トレース・デジタル処理																																			
		写真撮影																																			
		図像作成																																			
		図面整理・3Dデータ処理																																			
遺構		トレース																																			
		写真撮影																																			
		図像作成																																			
		図面整理・編集																																			
	印刷・製本																																				
	印刷・製本																																				

まで掘削を行った。35号遺構は煉瓦の他にコンクリートや胴木等を使用しており、これらについては一部サンプルを採取したのち、場外へ搬出して廃棄物として処理を行った。

Ⅱ区の近世面からは、Ⅰ区に続いて33号遺構を検出したほか、建物基礎やⅡ区西部からⅢ区東部にまたがる広大な池遺構などの遺構を検出した。Ⅱ区東側は令和5年2月2日に調査を終了し、埋戻しを開始した。残るⅡ区の範囲は池遺構にあたるため、Ⅲ区東部と同時に調査を行い、令和5年4月14日に調査を終了し、埋戻しを行った。

Ⅲ区の調査は、Ⅱ区に引き続いて令和4年11月30日から開始した。35号遺構を検出するため、まずⅢ区東部の表土掘削を開始し、近代面の調査を行った。Ⅲ区東側の近代面の調査終了後、令和4年12月27日からはⅢ区西部の表土掘削を開始した。Ⅲ区西側の近代面では、旧府立第一高等女学校の教室棟と考えられる煉瓦製建物基礎を検出した。近代面の調査後、続いて近世面の調査を行った。Ⅲ区の近世面では、東側で池遺構とそれに伴う木樋列を検出し、西側では33号遺構のほか、土坑や井戸などを検出した。Ⅲ区西側では、令和5年2月21日と3月3日の2度に分けて終了確認を行い、埋戻しを開始した。一方でⅢ区東側は池遺構にあたるため、Ⅱ区西側と同時に調査を行い、令和5年4月14日に全ての調査を終了した。

発掘調査終了後、都立学校教育部の要請により、現地を学校グラウンドとして利用できるように埋戻し及び舗装工事を行うこととなった。そのため、令和5年5月26日までにⅡ・Ⅲ区の埋戻しを行い、引き続きグラウンド舗装工事を行った。グラウンド舗装工事は6月23日までに終了し、6月27日に都立学校教育部へ調査地の引渡しを行った。

3) 整理作業等の経過

整理作業は令和5年2月20日から令和6年3月22日まで、調査地及び調査事務所にて行った。一次整理作業は、令和5年2月20日から4月17日まで行った。主な作業は、遺物の水洗、注記、粗分類、計測等である。注記作業は手作業の他、一部機械を用いて行った。

二次整理作業は、令和5年4月15日から令和6年3月22日まで、調査事務所にて行った。主な作業は、遺物の接合、実測、拓本、計測、写真撮影、遺構図面の修正、トレース、測量データ処理、原稿執筆、報告書編集などである。また、二次整理作業と並行して、徳川林政史研究所の渋谷葉子氏に文献調査について、國學院大学の阿部常樹氏、北海道大学の江田真毅氏に動物遺体の分析について、それぞれ現地指導を依頼した。令和6年3月11日に東京都五橋収蔵庫へ遺物を移管し、3月22日に調査事務所から撤収した。

調査事務所での作業終了後、令和6年3月25日から都埋文に移り、引き続き報告書編集作業を行った。編集作業は令和6年4月30日までを行い、報告書は令和6年7月31日に刊行された。

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

元浅草遺跡は、台東区元浅草一丁目に所在する。遺跡の範囲は都立白鷗高等学校の敷地に相当し、現在の上野駅から東に約848m、新御徒町駅から北に約192mの位置にある（第5図）。

元浅草遺跡の所在する台東区は、東側に広がる隅田川の氾濫原である低地部と、西側の武蔵野台地東縁にあたる上野台の台地部に大きく分かれる。低地部は、標高2mから3mの平坦な地形にある。低地全体は、東側及び南側に僅かに傾斜しているものの、ほぼ平坦である。ただし、隅田川西岸は微高地となっており、標高4mから5mを測る。

本遺跡は、隅田川と神田川に挟まれた低地部に所在する。武蔵野台地東縁部までの距離は約0.5km、隅田川までの距離は約1kmの位置にあり、現地表面の海拔は2.8mである。



「地図で見る東京の変遷II」（財団法人日本地図センター）を元にトレースして作成。

第5図 周辺の地形図

2 歴史的環境

1) 周辺の遺跡

元浅草遺跡の所在する台東区では、現在 142ヶ所、150地点の遺跡が確認されている（第6図、第2表）。元浅草遺跡は台東区遺跡No.11に相当する。以下、本遺跡周辺の遺跡を概観する。なお、遺跡名の後ろに示した番号は、第6図及び第2表の遺跡番号と対応する。

台東区には古くから数多くの遺跡が残されている。特に先史時代の遺跡が多く残されているのは上野台を中心とした武蔵野台地上である。旧石器時代から遺跡が確認されており、上野台の南端部を占める上野忍岡遺跡群では、国立西洋美術館地点（4-1）で立川ロームⅢ層下部から黒曜石の剥片、V層からメノウの剥片が出土しているほか、谷際に礫群や焼け石等が検出されている。

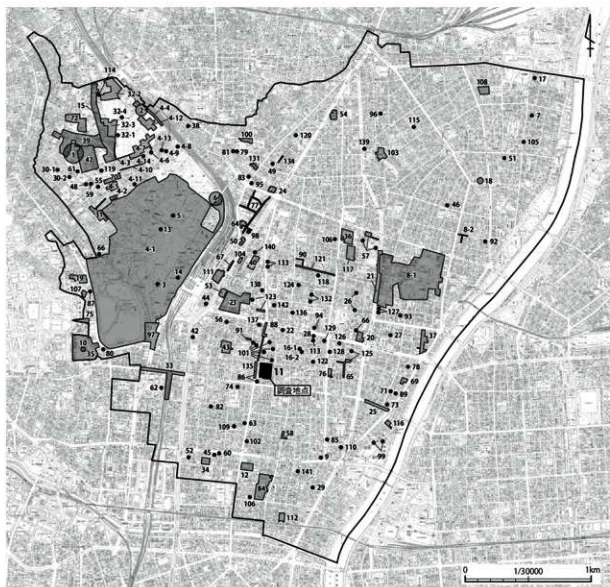
縄文時代においても台地上に占める遺跡が多く、上野忍岡遺跡群の国立西洋美術館地点、上野駅東西自由通路地点で前期の住居跡、上野動物園五重塔隣接地点で中期の住居跡、東京芸術大学奏楽堂建設予定地地点で後期の住居跡が検出されている。また、上野台縁辺部には多数の貝塚が残されており、谷田川に解析された上野台西側には領玄貝塚（1）、湯島貝塚（10）、茅町遺跡（35）など、低地部に面する上野台東側には天王寺貝塚（2）、新坂貝塚（6）などがある。

弥生時代に入っても台地上に占める遺跡が多く、上野台上の上野忍岡遺跡群西洋美術館地点に弥生時代後期の住居跡、国立科学博物館たんけん館地点に弥生時代末の住居跡、上野駅東西道路地点に弥生時代末から古墳初頭の住居跡がそれぞれ検出されている。低地部からも三好町遺跡（116）などから遺物が出土しているものの、検出例は少ない。

古墳時代には、上野台に古墳がつくられている。摺鉢山古墳（3）は前方後円墳である。そのほか、表慶館古墳（5）、鳥越古墳（9）、蛇塚古墳（13）、桜雲台古墳（14）などの古墳がある。上野忍岡遺跡群の東京国立博物館平成館地点、上野動物園ゾウ舎地点、上野駅東西自由通路建設地点のほか、谷中真鳥町遺跡（30）などで住居跡が検出されている。特に上野駅東西自由通路建設地点から出土した後期の金環と土器群は台東区の有形文化財に指定されている。この時代には隅田川西岸の微高地にも遺跡があり、駒形遺跡（69）、浅草駒形二丁目遺跡（78）で古墳時代の貝塚が確認されたほか、三好町遺跡では掘立柱建物跡が検出されている。

古代から中世にかけて、人々の活動が低地でも活発に行われるようになる。その顕著なものとして浅草寺遺跡（8）がある。浅草寺は、隅田川西岸の微高地に所在し、推古天皇36（628）年の創建と伝わる区内最古の寺院である。境内の発掘調査では、古代の遺構が検出され、仏具等の須臾器や和同開珎等の皇朝十二銭が出土している。また、中世では『吾妻鏡』にも浅草寺の名前が見え、発掘調査では中世の瓦も多量に出土している。古代から中世の住居跡は台地上の上野忍岡遺跡群の各地点や、隅田川西岸の微高地上の駒形遺跡など検出されている。

徳川家康の江戸転封を機に、台東区は江戸の辺縁地域として開発を受けることとなった。このため、近世に入ると遺跡数が急激に増加する。台東区を代表する近世遺跡は社寺跡であり、台東区に登録された近世の遺跡150地点のうち、実に96地点の種別が社寺となっている。著名なものとして上野忍岡遺跡群（4）内部にある寛永寺がある。寛永寺は徳川家の菩提寺となっており、それに関わる発掘成果が多数得られている。例えば、都立上野高等学校地点では護国院の旧墓所が明らかとなり、東京



「東京都縮尺2,500分の1地形図」及び「東京都遺跡地図情報インターネット提供サービス」(東京都教育委員会)を元に作成。

第6図 台東区の遺跡 (1/30,000)

第2表 台東区の遺跡一覧

「東京都遺跡地図情報インターネット提供サービス」(東京都教育委員会)を元に作成。

番号	遺跡名	所在地	種別	時代
1	南正寺石塚	台東区谷中四丁目	古墳地・石塚	縄文(中期～晩期)・近世
2	天主寺石塚	台東区谷中七丁目	古墳地・石塚	縄文(晩期)・古墳
3	徳兵衛石塚	台東区上野公園	古墳	古墳
4-1	上野古河遺跡群	台東区上野公園・上野一丁目・池之端三丁目	古墳地・集落・社寺・塚墓・その他(墓・花倉)	旧石器・縄文(早期～晩期)・弥生(晩期)・古墳・奈良・平安・中世・近世・近代
4-2	上野古河遺跡群	台東区上野坂本一丁目	古墳地・集落・社寺	奈良・平安・近世
4-3	上野古河遺跡群	台東区谷中七丁目	古墳地・社寺	奈良・平安・近世
4-4	上野古河遺跡群	台東区谷中七丁目	古墳地・社寺	縄文・近世
4-5	上野古河遺跡群	台東区上野坂本一丁目	古墳地・集落・石塚・塚墓・社寺	旧石器・縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
4-6	上野古河遺跡群	台東区上野坂本二丁目	古墳地・集落・社寺	古墳・奈良・平安・中世・近世
4-7	上野古河遺跡群	台東区谷中七丁目・上野坂本二丁目	古墳地・集落・社寺	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近世
4-8	上野古河遺跡群	台東区上野坂本一丁目	古墳地・集落・社寺	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
4-9	上野古河遺跡群	台東区上野坂本二丁目	古墳地・集落・社寺	縄文・古墳・奈良・平安・近世
4-10	上野古河遺跡群	台東区上野坂本二丁目	古墳地・社寺	奈良・平安・近世
4-11	上野古河遺跡群	台東区上野坂本一丁目	古墳地・集落・社寺	古墳・奈良・平安・近世
4-12	上野古河遺跡群	台東区谷中七丁目	古墳地・集落・社寺	縄文・弥生・奈良・平安・近世
4-13	上野古河遺跡群	台東区上野坂本二丁目	古墳地・社寺	縄文・古墳・奈良・平安・近世
4-14	上野古河遺跡群	台東区上野坂本二丁目	古墳地・社寺	奈良・平安・近世
5	表輪敷古墳	台東区上野公園	古墳	古墳

番号	遺跡名	所在地	種別	時代
6	非田遺跡	伊東区野間東二丁目、上野公園	古墳	縄文(前期)・弥生(前期)
7	伊豆宮	伊東区藤原一丁目	古墳	古墳
8.1	浅草寺跡	伊東区浅草一丁目、浅草二丁目	古墳跡・集落・住居・水田跡・古墳跡	縄文(前期)・弥生・奈良・平安・中世・近世・近代
8.2	浅草寺跡	伊東区浅草二丁目	住居	古墳
9	浅草寺跡	伊東区浅草二丁目	古墳	古墳
10	山田(古蹟)土居 遺跡	伊東区浅草二丁目	古墳	縄文(前期-中期)
11	元成寺跡	伊東区元成町一丁目	住居・集落	古墳
12	伊東区元成 12 遺跡	伊東区元成町一丁目	古墳	古墳
13	伊東区元成 13 遺跡	伊東区元成町一丁目	古墳	古墳
14	集落跡(古蹟)	伊東区上野公園	古墳	古墳
15	大工(古蹟)跡	伊東区中下町一丁目、中下町六丁目	古墳跡・集落	縄文(前期)
16.1	飯沼一丁目遺跡	伊東区飯沼一丁目	住居	古墳
16.2	飯沼一丁目遺跡	伊東区飯沼一丁目	住居	古墳
17	伊東区飯沼 17 遺跡	伊東区飯沼一丁目	住居	古墳
18	伊東区飯沼 18 遺跡	伊東区飯沼一丁目	住居	古墳
19	飯沼二丁目遺跡	伊東区飯沼二丁目	古墳跡・住居・集落	縄文・弥生・古墳・古墳
20	浅草寺跡(新跡)	伊東区浅草二丁目	住居	古墳
21	浅草寺内遺跡	伊東区浅草二丁目、浅草三丁目、浅草一丁目、浅草二丁目	住居・集落、道路跡	古墳
22	伊東区浅草 22 遺跡	伊東区浅草二丁目	集落	古墳
23	浅草園(浅草寺跡)遺跡	伊東区浅草三丁目	古墳跡・住居	古墳・奈良・平安・中世・近世
24	入谷遺跡	伊東区下谷一丁目	住居・集落・農耕地	古墳
25	伊東区入谷 25 遺跡	伊東区浅草一丁目	古墳跡・住居	奈良・平安・古墳
26	浅草山田遺跡	伊東区浅草二丁目	住居・集落	古墳
27	伊東区浅草 27 遺跡	伊東区浅草一丁目	集落	古墳
28	伊東区浅草 28 遺跡	伊東区浅草一丁目	住居	古墳
29	伊東区浅草 29 遺跡	伊東区浅草二丁目	住居	古墳
30.1	伊豆山田遺跡	伊東区山田一丁目	集落・集落	縄文・古墳・奈良・平安・古墳
30.2	伊豆山田遺跡	伊東区山田一丁目	古墳跡	古墳(中)・古墳・奈良・平安・古墳
31	伊豆山田遺跡	伊東区山田二丁目	古墳跡・集落・集落	古墳・奈良・平安・古墳(中)・古墳
32.1	入谷寺跡	伊東区山田一丁目	古墳跡・集落・住居	奈良・平安・古墳
32.2	入谷寺跡	伊東区山田一丁目	古墳跡・集落・住居	古墳・奈良・平安・中世・近世
32.3	入谷寺跡	伊東区山田二丁目	古墳跡・集落・住居	古墳・奈良・平安・古墳
32.4	入谷寺跡	伊東区山田二丁目	住居	古墳
33	伊豆山田一丁目遺跡	伊東区山田四丁目、山田五丁目	住居・集落・集落	古墳
34	山田遺跡	伊東区山田一丁目	集落	古墳
35	伊豆山田	伊東区山田一丁目	古墳跡・集落・集落・塚宅	縄文(前期)・縄文(前期)・弥生(前期)・古墳・奈良・平安・古墳
36	浅草寺跡(新跡)	伊東区浅草二丁目	古墳跡・集落	奈良・平安・中世・古墳
37	浅草寺跡(新跡)	伊東区浅草二丁目	集落・集落	奈良・平安・古墳
38	伊東区浅草 38 遺跡	伊東区浅草一丁目	集落	古墳
39	山田・浅草跡	伊東区山田一丁目、浅草三丁目、浅草四丁目、浅草五丁目、浅草六丁目	古墳跡・集落・住居・集落	旧石器・縄文(前期-中期)・古墳・奈良・平安・古墳
40	伊東区浅草 40 遺跡	伊東区浅草四丁目	住居	古墳
41	伊東区浅草 41 遺跡	伊東区浅草一丁目	集落	古墳
43	浅草寺跡	伊東区浅草一丁目	古墳跡・集落	中世(前期)
44	伊東区浅草 44 遺跡	伊東区山田一丁目	住居	古墳
45	山田二丁目遺跡	伊東区山田一丁目	住居	古墳
46	浅草園(新跡)	伊東区浅草五丁目	古墳跡・住居・集落	中世(前期)
47	山田遺跡	伊東区山田四丁目	集落・住居	縄文・奈良・平安・中世・古墳
48	伊東区浅草 48 遺跡	伊東区山田一丁目	住居・集落	古墳
49	伊豆山田(新跡)遺跡	伊東区下谷一丁目	住居・集落	古墳
50	伊東区浅草 50 遺跡	伊東区上野上丁目	古墳	古墳
51	伊東区浅草 51 遺跡	伊東区山田一丁目	住居	古墳
52	伊東区浅草 52 遺跡	伊東区山田一丁目	集落	古墳
53	浅草寺跡	伊東区浅草四丁目	古墳跡・集落・集落	古墳・奈良・平安・中世・近世
54	浅草寺跡	伊東区浅草一丁目	古墳跡・住居・集落	古墳(前期)
55	伊東区浅草 55 遺跡	伊東区山田一丁目	古墳跡・住居・集落・道	古墳・奈良・平安・古墳
56	浅草寺跡	伊東区浅草一丁目	集落	古墳
57	浅草園一丁目遺跡	伊東区浅草四丁目	住居	古墳
58	伊東区浅草 58 遺跡	伊東区浅草一丁目	集落	古墳
59	伊東区浅草 59 遺跡	伊東区山田一丁目	古墳跡・住居・集落	奈良・平安・古墳
60	浅草寺跡	伊東区浅草一丁目	集落	古墳
61	伊東区浅草 61 遺跡	伊東区山田四丁目	古墳跡・住居	縄文・古墳
62	伊豆山田(新跡)遺跡	伊東区山田一丁目	古墳跡・住居・集落・道路	縄文(前期-中期)・奈良・平安・中世・古墳
63	伊東区浅草 63 遺跡	伊東区浅草一丁目	集落・集落	古墳
64	伊豆山田遺跡	伊東区下谷一丁目	古墳跡・住居・集落	縄文・古墳(前期)
65	伊豆山田(新跡)遺跡	伊東区山田一丁目	住居・古墳	古墳
66	伊豆山田(新跡)遺跡	伊東区浅草二丁目	住居・集落	古墳
67	伊東区浅草 67 遺跡	伊東区上野上丁目	住居	古墳
68	飯沼一丁目遺跡	伊東区飯沼一丁目	集落・古墳跡・古墳跡・住居・集落	古墳・奈良・平安・中世・古墳
70	伊東区浅草 70 遺跡	伊東区山田六丁目	古墳	古墳
71	伊東区浅草 71 遺跡	伊東区飯沼一丁目	集落	古墳
72	伊豆山田(新跡)遺跡	伊東区山田四丁目	古墳跡・集落・住居・集落	縄文・弥生(前期)・奈良・平安・中世・古墳
73	伊東区浅草 73 遺跡	伊東区飯沼一丁目	古墳跡・集落	古墳・奈良・平安・古墳
74	伊東区浅草 74 遺跡	伊東区山田四丁目	集落	古墳
75	伊豆山田(新跡)遺跡	伊東区飯沼一丁目	古墳跡・住居・集落・集落	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・古墳
76	伊東区浅草 76 遺跡	伊東区飯沼一丁目	住居・集落	古墳
77	伊東区浅草 77 遺跡	伊東区下谷一丁目	住居・集落	古墳
78	浅草園(新跡)一丁目遺跡	伊東区浅草一丁目	古墳跡・古墳跡・住居・集落	古墳・奈良・平安・古墳
79	伊東区浅草 79 遺跡	伊東区飯沼一丁目	住居	古墳
80	伊東区浅草 80 遺跡	伊東区浅草二丁目	集落	古墳
81	浅草寺跡	伊東区飯沼一丁目	古墳跡・住居	古墳・奈良・平安・古墳
82	伊東区浅草 82 遺跡	伊東区山田一丁目	集落	古墳
83	伊東区浅草 83 遺跡	伊東区飯沼一丁目	集落	古墳
84	浅草園(新跡)遺跡	伊東区浅草五丁目	古墳	古墳
85	伊東区浅草 85 遺跡	伊東区浅草四丁目	住居	古墳
86	伊東区浅草 86 遺跡	伊東区浅草一丁目	住居・集落・集落	古墳
87	伊東区浅草 87 遺跡	伊東区浅草二丁目	古墳	古墳
88	伊東区浅草 88 遺跡	伊東区浅草一丁目	住居・集落	古墳
89	伊東区浅草 89 遺跡	伊東区山田一丁目	集落・集落	古墳・奈良・平安・古墳
90	伊東区浅草 90 遺跡	伊東区浅草一丁目	住居	古墳
91	伊東区浅草 91 遺跡	伊東区浅草一丁目	集落	古墳
92	伊東区浅草 92 遺跡	伊東区浅草一丁目	集落	古墳
93	伊東区浅草 93 遺跡	伊東区浅草一丁目	集落	古墳
94	伊東区浅草 94 遺跡	伊東区浅草一丁目	住居・集落	古墳
95	伊東区浅草 95 遺跡	伊東区下谷一丁目	集落	古墳
96	伊豆山田(新跡)遺跡	伊東区飯沼一丁目	集落・集落	古墳
97	伊豆山田(新跡)遺跡	伊東区山田一丁目、一丁目	古墳跡・集落	古墳
98	伊東区浅草 98 遺跡	伊東区下谷一丁目	集落	古墳
99	浅草寺跡	伊東区飯沼一丁目	古墳跡・集落・集落・集落	古墳・奈良・平安・中世・古墳・近代
100	伊豆山田遺跡	伊東区山田一丁目	古墳跡・集落・住居・集落	縄文・奈良・平安・中世・古墳

番号	遺跡名	所在地	種別	時代
101	浅草町新町跡	台東区浅草一丁目・一丁目・東上野三丁目	住居	高世
102	台東区102遺跡	台東区浅草二丁目	宗廟跡・塚墓	高世・平安・高世
103	浅草千鳥町一丁目跡	台東区千鳥一丁目	塚墓・農耕遺	高世
104	台東区104遺跡	台東区東上野四丁目	住居・和屋	高世
105	台東区105遺跡	台東区浅草一丁目	宗廟跡・住居・農耕遺	高世・平安・高世
106	浅草町一丁目跡	台東区浅草四丁目	和屋	高世
107	浅草町南邊跡	台東区浅草一丁目	宗廟跡・住居	高世・平安・高世
108	台東区108遺跡	台東区浅草一丁目	住居・農耕遺	高世
109	台東区109遺跡	台東区浅草一丁目	和屋	高世
110	台東区110遺跡	台東区浅草四丁目	住居・和屋	高世
111	台東区111遺跡	台東区上野七丁目	住居・和屋	高世
112	浅草町新町跡	台東区浅草一丁目	和屋・和屋	高世
113	台東区113遺跡	台東区浅草四丁目	住居	高世
114	台東区114遺跡	台東区浅草七丁目	宗廟跡・住居・和屋	高世・平安・高世
115	台東区115遺跡	台東区千鳥四丁目	和屋	高世
116	浅草町跡	台東区浅草一丁目	宗廟跡・塚墓・その他の遺・和屋	高世・古墳・奈良・平安・中世・高世
117	浅草町一丁目跡	台東区浅草一丁目	宗廟跡・住居・和屋跡	高世・高世
118	台東区118遺跡	台東区浅草一丁目	住居	高世
119	台東区119遺跡	台東区浅草一丁目	住居・和屋	高世
120	台東区120遺跡	台東区下台二丁目	住居	高世
121	浅草町跡	台東区浅草一丁目・和が谷三丁目	住居・道路・水跡	高世
122	台東区122遺跡	台東区浅草一丁目	住居・和屋	高世
123	台東区123遺跡	台東区東上野五丁目	住居・和屋	高世
124	台東区124遺跡	台東区浅草一丁目	住居	高世
125	浅草町跡	台東区一丁目	宗廟跡・住居	中世・高世
126	台東区126遺跡	台東区一丁目	住居・和屋	高世
127	台東区127遺跡	台東区浅草一丁目	和屋	高世
128	台東区128遺跡	台東区一丁目	住居	高世
129	台東区129遺跡	台東区浅草四丁目	住居	高世
131	台東区131遺跡	台東区浅草三丁目	和屋	高世
132	台東区132遺跡	台東区浅草一丁目	住居	高世
133	台東区133遺跡	台東区東上野六丁目	住居	高世
134	台東区134遺跡	台東区下台一丁目	住居	高世
135	台東区135遺跡	台東区浅草一丁目	和屋	高世
136	台東区136遺跡	台東区浅草一丁目	住居	高世
137	浅草町跡	台東区東上野一丁目	住居	高世
138	浅草町跡	台東区五丁目	住居	高世
139	浅草町跡	台東区千鳥一丁目	住居	高世
140	台東区140遺跡	台東区浅草一丁目	住居	高世
141	台東区141遺跡	台東区浅草四丁目	宗廟跡・和屋	高世
142	台東区142遺跡	台東区東上野六丁目	和屋	高世

国立博物館地点では徳川将軍家の霊廟へ通じる参道や広場、本坊が検出された。また、国立西洋美術館から上野駅前にかけて、徳川御三卿の清水家・一橋家墓所が検出されている。

低地部では、明暦3(1657)年の大火以降、神田周辺の寺社が台東区域に移転され、寺町が形成された。浅草松清町遺跡(20)、北稲荷町遺跡(23)、入谷遺跡(24)をはじめとして、多数の寺院跡がある。

また、台東区域には大名や旗本・御家人の屋敷も多く残されている。屋敷地は低地域に多く、西町遺跡(43)、上車坂町遺跡(53)、竜泉寺町遺跡(54)、向柳原町遺跡(84)では、本遺跡と同じく屋敷地として利用される中で池跡が検出されており注目される。

2) 調査地点の概要

先述のように、台東区の低地部に遺跡が形成されるのは弥生時代以降である。しかし、多くは隅田川西岸の微高地にあり、元浅草遺跡を含む台地縁辺と隅田川の中間地点において遺跡が多く形成されるのは近世以降である。第3表は、元浅草遺跡の土地利用の概略である。近世は武家屋敷として利用されており、近代に入っても酒井子爵家により利用されていた。その後、東京府が土地を取得し、以降現在まで学校地として利用されてきた。

なお、元浅草遺跡の近世における土地利用について、渋谷葉子氏に文献調査を依頼し、詳細な調査をしていただいた。その成果をまとめた玉稿を賜り、IVに掲載した。ここでは、概略を述べるにとどめ、詳細は渋谷氏の論考を参照されたい。

■近世

江戸時代の元浅草遺跡周辺は、大名屋敷、組屋敷などの武家地と寺社地が混在していた地域であった。「江戸全図」(1642～43)では、元浅草遺跡は南北に分断され、「御徒組」、「御土蔵番」、「新庄美作与力同心」とある。敷地は細分され、それぞれ徒組・土蔵番や書院番頭との与力同心の組屋敷とし

て利用されていたことがわかる。一方、『江戸大全図』（1657）では、南北の敷地が統合され、書院番頭酒井飛騨守重之配下の与力同心の組屋敷として利用されていたようである。

『江戸大全図』の描かれたとされる明暦3（1657）年は著名な明暦の大火が起こった年であり、その影響から各地で屋敷地の変更が行われた。元浅草遺跡もこの対象となり、明暦3年5月には所有者が備前岡山藩池田家へと移った。翌年の万治元（1658）年には池田家による屋敷の建設に及び大規模な土木工事を行ったようである。

しかし、寛文8（1668）年には再度大火に見舞われ、藩主池田光政は再度屋敷の移転を検討したようである。この結果、寛文10（1670）年に池田家は大崎へと移転することとなった。池田家が元浅草遺跡を利用したのは約10年間である。

池田家の去った元浅草遺跡は一度幕府に上地となったが、寛文10年中に陸奥浅川藩本多家が元御竹蔵上屋敷に替えて当地を拝領した。翌寛文11（1671）年に描かれた『新版江戸外絵図』（1671）には調査地に「本多タン正」とあり、本多弾正少弼忠晴の屋敷であったことが確認できる。

本多家は天和元（1681）年に三河伊保、宝永7（1710）年に遠江相良、延享3（1746）年に陸奥泉と移封が繰り返されるが、屋敷は元浅草遺跡に所在したままであった。しかし、天明7（1787）年に藩主本多忠壽が若年寄に任命されると、大手前に上屋敷を拝領したため移転した。本多家が元浅草遺跡を利用したのは、約130年間である。

陸奥泉藩本多家の退去と同時に、屋敷を交換するかたちで、出羽松山藩酒井大学頭忠崇が家屋そのままに当地を拝領した。その後、大政奉還に至るまで、元浅草遺跡は出羽松山藩酒井家の上屋敷として利用された。

（山崎太郎）

■近代以降

明治以降の当地の土地履歴を地図で辿ると、明治2（1869）年刊行の『東京御繪圖』⁽¹⁾では「酒井大ガク」の文字、明治9（1874）年刊行の『明治東京全図』⁽²⁾では「酒井忠匡」の文字、明治17（1884）年測量の『東京図測量原図』⁽³⁾では屋敷と苑池のある邸宅が確認できる。また、明治42（1909）年大日本帝国陸軍陸地測量局測量の一万分の一地形図以降では、都立白鷗高等学校の前身である東京府立「第一高等女学校」が記されている（第7図）。後述するように同校は明治35（1902）年に当地に新校舎を建設し、翌明治36（1903）年移転してきている。ここではその移転前と移転後に大きく分けて、土地と建物に係わる履歴について記す。

【明治維新から第一高等女学校移転（明治35年）まで】

大政奉還が成り、江戸幕府が瓦解した慶應4（1868）年1月3日、当地は出羽松山藩の江戸上屋

第3表 元浅草遺跡の土地利用の概略

所有者または利用状況	利用期間	備考
御役所・御土蔵兼・新田実作与力御心	1642～43	『江戸全図』にて確認。
酒井飛騨与力屋敷	1657	『江戸大全図』にて確認。
備前岡山藩池田家	1657～1670	
陸奥浅川藩本多家	1670～1787	
出羽松山藩酒井家	1787～1901	大政奉還により松嶺藩酒井家。単独名により酒井子爵家と変遷するが、元浅草遺跡は所在。
酒井子爵家から	1869	『東京全図』にて確認。酒井子爵家による切り売りがあったとみられる。
東京府立第一高等女学校	1901～現在	酒井子爵家ほかの地権者より取得。1903年松崎清成・移転。
東京府立白鷗高等学校		府立第一高等女学校から。明治第一高等女学校を経て、都立白鷗高等学校に名称。

※（ ）としたものは確認した絵図等の年代である。

敷であった。藩主は7代酒井忠良であったが、戊辰戦争で幕府方に与したため隠居、同年12月、三男忠匡が家督を継いだ。明治2(1869)年、版籍奉還により出羽松山藩は松嶺藩と改称、藩主忠匡は松嶺藩知藩事となるも、明治4(1871)年、廃藩置県で罷免。明治17(1884)年、華族令により子爵となる。

明治以降、諸大名の江戸藩邸については、中屋敷・下屋敷は旧藩主の所有が認められたが、上屋敷は基本的に明治政府に接収された。出羽松山藩は、旧幕時代、当地に上屋敷、四ツ谷千駄ヶ谷に下屋敷を拝領していたが、いずれを私邸とするかは暫し保留としていたようで、明治4(1871/辛未)年、四ツ谷千駄ヶ谷の下邸(下屋敷)は不便なので、上邸(上屋敷)を私邸とし、下邸を返還したい旨、東京府に願ひ出ている(史料①)。

以降、当地屋敷については、以下のような屋敷周りの改変が酒井忠匡の名で行われている。

(1) 明治6(1873)年:埋立工事。屋敷南側表門以西の外側下水溝幅を長さ20間(約36.4m)にわたって、9尺(約2.7m)から2尺(約60cm)に縮小(史料②、③)。

(2) 明治10(1877)年:埋立工事。明治6年工事箇所の東隣、表門前の外側下水溝幅を長さ3間(約5.5m)にわたって、9尺(約2.7m)から2尺(約60cm)に縮小(史料④、⑤)。

いずれの工事についても、下水溝縮小の理由として、外周長屋に開店した商店にとって(幅広の溝が)不便であるため、という記述がある。おそらくは、街路に面した部分に酒井家の貸地・貸家があり、借主の商売に便宜を図るため、下水溝の縮小が行われたのであろう。また、添付された工事箇所の概略図では、この一郭は四筆に分筆されており、最も東側の四番地には「御払下ヶ地」と記され



(部分、「東京御繪圖 全」香田屋文三蔵)

東京御繪圖



(部分、国立公文書館デジタルアーカイブ蔵)

明治東京全図



(部分、「地図で見る東京の変遷1」財団法人日本地図センター)

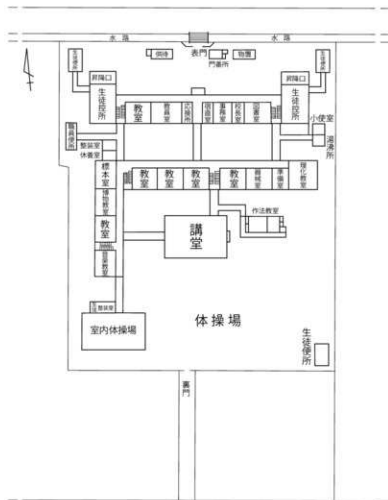
東京府武蔵國下谷地図



(部分、「明治・大正・昭和 一万分の一地形図集成」柏書房)

明治42年陸地測量部上野

第7図 明治時代の調査地点付近



『東京府立第一高等女学校一瞥明治40年度』(国立国会図書館デジタルコレクション)をトレースして作成。

第8図 府立第一高等女学校校舎配置図

井家を除く)、一部は、北側校門周辺と南側校門周辺を除く四辺に家屋が密集する現在の状況に近くなっていたと考えられる。調査の過程で提出された酒井忠匡所有地の土地登記簿抄本には、「所有者本郷区駒込本町参拾七番地 酒井忠匡」とあることから、浅草七軒町邸がこれまでの間に居宅としての役割を終え、酒井家は転居していることがわかる。第一高等女学校の建設以前に、建物を取り壊され、整地が行われていた可能性もある。

【第一高等女学校移転(明治35年)からアジア太平洋戦争終結まで】

東京都立白鷗高等学校は、前身校を含め長い歴史を持った伝統校である。その変遷は、東京府高等女学校(明治21～33年/1888～1900年)→東京府第一高等女学校(明治33～34年/1900～01年)→東京府立第一高等女学校(明治34～昭和18年/1901～43年)→東京都立第一高等女学校(昭和18～23年/1943～48年)→東京都立第一女子高等学校(昭和23～25年/1948～50年)→東京都立白鷗高等学校(昭和25年～/1950年～)と135年にわたる。以下、都立白鷗高等学校によって編集・刊行された『百年史』を中心に、公文書などから、土地と建物に関する出来事を辿る⁽⁴⁾。

ている。土地が売却され、酒井家の屋敷地範囲が旧上屋敷より縮小していることが伺われる。出羽松前藩旧上屋敷は南は七軒町通り(現春日通り)、西は現清洲橋通りの西まで広がる範囲を持っていたと言われるが、当該範囲には、前述『明治2年東京全図』でも他家の屋敷が確認できるので、早い段階から周囲の切り売りが行われていたのかもしれない。そのようにして売却されたと思われる隣地(七軒町二番地一号)について、名義書き換えの手続きと地券交付を浅草区役所に指示する東京府からの訓令も確認されている(史料⑥)。明治34(1901)年、当地が第一高等女学校移転先の候補地に挙げると、現在の元浅草1丁目6番地にあたる範囲に対して、立ち退き保証を視野に入れた上物調査が行われているが、調査に応じた人々の一覧には、地主・借地人・借家人など

100人以上が名を連ねており(酒



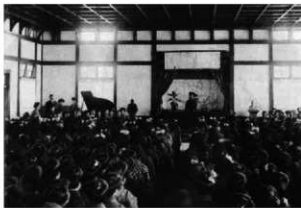
明治45年頃(敷地北辺にある表門。敷地境に溝がある。)



明治43年頃(右手前が講堂、左奥は西側校舎が。間に渡り廊下が見える。)



明治43年頃(奥の西側校舎の手前に増築部が見える。)



明治43年頃(講堂の中、中央に見えるのは演壇か。)



大正12年頃(関東大震災直後、講堂は焼失。奥は焼け残った西側コンクリート校舎。)



昭和10年頃(昭和3年竣工の復興建築コンクリート校舎)

第9図 府立第一高等女学校校舎の写真(1989『百年史』都立白鷗高等学校)

移転への経緯 東京府高等女学校は、明治21(1888)年12月22日認可され、翌明治22(1889)年4月、京橋区南小田原町4丁目8番地(現中央区築地7丁目3番地)所在の手工学校(現工学院大学/当時夜間制)校舎を昼間のみ借用して開校した。入学希望者の増加に伴い、恒常的な教室不足に陥ったため、明治27(1894)年1月、内務省所管河岸地神田区錦町1丁目20番地2号の土地(現千代田区神田錦町)を借用して自前校舎の新築を企てるも、明治東京地震(同年6月)、日清戦争の影響、

資金難などによって計画は頓挫した。そうこうしているうちに、明治29(1896)年2月10日、借用していた手工学校が火災のため全焼。一切の記録と校舎を失う。当面の措置として、神田区今小路二丁目八番地(現千代田区神保町3丁目8番地)の専修学校(現専修大学)校舎を借用して授業を再開したが、同年6月30日、神田錦町の地に新校舎が竣工したため移転した。施設は拡充されたものの、折からの女子中等教育需要の高まりから、生徒数は増大の一途を辿り、明治30(1897)年には運動場用地の追加借用、明治31(1898)年には校舎の増築を行っている。また、明治33(1900)年には、生徒の一部を新設の東京府立女子師範学校、東京府第二高等女学校(現都立竹早高等学校)へ移籍させ、教育空間の確保に努めているが、運動場用地のほとんどを返還余儀なくされるなど、事態は悪化の一途をたどった。なお、東京府第二高等女学校の設立と同時に、東京府高等女学校は東京府第一高等女学校と改称されている。

明治～大正期の校舎 さて、上記のような事態に対し、東京府は、明治34(1901)年、新校舎建設用地として浅草区七軒町2番地の土地を取得、翌明治35(1902)年5月、校舎建築のための地ならしに着手している。明治36(1903)年3月に第一期工事落成、5月に第二期工事落成、8月に第三期工事落成、これらの校舎は9月に学校に引き渡された。校舎の配置は第8図のごとくで、敷地北辺中央に表門、北側に総二階建て教室棟2棟、教室棟の南に講堂や作法教室、屋内体操場を配し、南側に校庭と裏門があることがわかる。建物の素材についての言及はないが、『百年史』収録の写真資料を見ると、煉瓦積み基礎の木造であったようである(第9図)。

爾後、関東大震災で甚大な損害を被るまで、敷地や校舎の改変記事として、以下のような記録が見られる。

- (1) 明治38(1905)年3月、裏門より街路に通じる道路の敷地35坪7合2勺を追加購入。
- (2) 明治39(1906)年8月、割烹教室(建坪24坪)竣工。
- (3) 大正4(1915)年11月、教室模様替増築1棟、教室増築1棟、便所増築1棟、手洗所増築1棟(史料⑦)。
- (4) 大正6(1917)年9月、南側隣接地を買収して運動場を拡張することを府知事に願ひ出る。
- (5) 大正11(1922)年3月、第二号館(どの校舎を指すのか不明。北から二番目のL字形校舎か。)中央階段の東側の壁間より出火し、校舎の一部を焼失。
- (6) 大正12(1923)年7月、婦人体育館(位置不明。前述の屋内体操場とは別のものではだろうか。)落成。

『百年史』の写真資料には、建築記録がない建物がいくつも写っており、増改築が頻繁に行われていたことが伺われる。ボヤなどは度々発生したようで、屋内体操場なども何らかの理由で失われ、婦人体育館として再建されたのではないかと考えられる。

関東大震災被災と校舎再建 大正12(1923)年9月1日関東大震災が発生する。周辺民家より出火し、2日午前11時過ぎ校舎に飛び火、鉄筋コンクリートの新校舎(大正11年に焼失した第二号館に代わって建てられたものか。)を除いて全焼、完成したばかりの婦人体育館も焼失した。鎮火後焼け残った西館に付近の罹災者を受け入れる。10月15日、焼け残った校舎で授業再開。一部の生徒は府立第五高等女学校(現都立富士高等学校/新宿区)の教室を借用した。翌大正13(1924)年3月、仮校舎2棟、講堂1棟が完成。また、11月、校庭に防災用掘り抜き井戸を設置。大正14(1925)

年10月、復興第一期建築工事に着手。大正15(1926)年5月、第二期基礎工事(本館教員室・特別教室)に着手、4月第二期工事了。昭和2(1927)年2月、復興第三期工事(東館校舎)に着手、10月完成。11月、バラック校舎から新館校舎への全部の移転を終る。新校舎の設計者は、歌舞伎座、明治生命館、鳩山一郎邸などを設計した建築家岡田信一郎。倒壊・消失をまぬかれた西側の校舎を生かした校庭を取り囲むような配置である。いわゆる復興建築であり、コンクリート造りで曲線やアーチの多用などが特徴であった。こういった意匠は、平成10(1998)年に建て替えられた現校舎にも引き継がれている。昭和8(1933)年3月、賀陽宮恒憲王敏子妃が日本女子教育視察のため来校。これを記念し、敷地南西角に、翌昭和9(1934)年、行啓記念館を建設。1階運動場、2階購買部売店及び調理室、3階読書室兼会議室、4階行啓記念室。

アジア太平洋戦争と東京大空襲被災 アジア太平洋戦争が激化した昭和19(1944)年、勤労動員が始まり、校舎は託児所や軍需工場へ転用される。工場では無線部品の生産や携帯食料包装が行われた。同年12月31日、夜半の空襲では体育館屋上及び校地内に被弾し、火災が発生。ほどなく鎮火している。翌昭和20(1945)年3月10日、前夜より早朝にかけて東京大空襲。焼夷弾に被弾し、出火する。倉庫を焼失するも全焼はまぬかれ、同日夜から6日間、付近罹災者のために体育館を開放、4,546名を受け入れた⁶⁾。3月17日、集団疎開決定。校舎内の軍需工場は閉鎖となり、警視庁刑事部、浅草区第三配給所、第一陸軍造兵廠などが校舎建物を利用することになる。これらは8月15日の終戦以降も一部残留するが、9月20日には学校が疎開から戻り、授業が再開された。(両角まり)

〔史料①〕東京都公文書館 605.C2.09 (343)
第二套 第十一編 府限願伺留 第八

先年下賜候浅草永住町上邸四ツ谷
千駄ヶ谷下邸両所之内右下邸之儀ハ
不都合之場所二付是近官私取極之儀
御猶預願置候然ル福近々出京仕候二付
浅草永住町上邸之内手廣二モ有之
縣廳ニテモ差支無之趣二候間別紙絵
図面朱引之通區別相立私邸二取極申
度奉存候就テハ四ツ谷千駄ヶ谷下邸
之儀ハ上地仕度奉存候依之別紙絵図
面二枚相添此段奉候 以上
辛未

八月 従五位酒井忠匡
東京府
御中

〔史料②〕東京都公文書館 606.D4.04
明治六年 管民願伺届 第四部 土木

以書付奉願候
第五大区六小区浅草七軒町貳番地

酒井忠匡拝領邸表長屋西乃方商
店相間候二不都合二付邸外下水別紙
絵図面乃通長延貳拾間幅九尺之趣
今度長延其儘ニテ幅九尺乃方自費ヲ以
貳尺取縮申度奉存候此条御開濟
被成下置度奉願候以上
明治六年十二月
第五大区六小区
浅草七軒町貳番地
酒井忠匡家令
武藤旭山
戸長 高木孝勝
一図面添付一

〔史料③〕東京都公文書館 606.D4.10
明治六年 管民願伺届 第四部 土木

以書付御届申上候
第五大区六小区浅草七軒町貳番地
酒井忠匡拝領邸外下水患■奉願
取縮埋立之儀此日出来仕候此如御届
申上候 以上

西十二月廿三日

第五大区六小区浅草七軒町二番地

従五位酒井忠匡家令

武藤旭山

戸長 山田靖直

東京府知事

大久保一翁殿

[史料④] 東京都公文書館 608.C4.1

明治十年 管民願伺届 従一月至二月 土木掛

第四■

第五大区六小区

浅草七軒町貳番地

華族

従五位酒井忠匡

私賜邸

南表通長屋御度貸家商店等間度

ヲル處邸外長サ三間巾九尺之廊有之

基不都合ニ此間別紙絵図之通巾

九尺之處貳尺取縮メ自費ヲ以埋立

申度奉存候右之段御間■被下度

奉願候也

明治九年十二月廿八日 従五位酒井忠匡

前書之道■■■奥印仕奉也

六区戸長 内満志作

東京府権知事 楠本正隆殿

一圖面添付一

[史料⑤] 東京都公文書館 608.C4.1

明治十年 管民願伺届 従一月至二月 土木掛

己三〇八號

堀埋立落成届

東京府華族

従五位酒井忠匡

第五大区六小区浅草

七軒町貳番地住

私賜邸表通三間巾九尺之預テ

自費ヲ以埋立願之本月落成

二付此段及御届候也

明治十年二月廿三日 右従五位酒井忠匡

東京府知事楠本正隆殿

[史料⑥] 東京都公文書館 616.D3.16 (124)

明治二十年 訓令

自第四〇五二至四〇五七号

…(略)

浅草区浅草七軒町二番地ノ内第一号酒井

忠匡浅草永住町九十八番地盛泰寺浅

草今戸町廿三番地伊達宗城へ私下及下渡

民有道敷宅地ニ地種組換候以下前全文(該地地券下付等

取計フヘシ)

…(略)

浅草七軒町二番地一号

一市街宅地拾九坪五合式勾 酒井忠匡

此地價金九門六拾六錢貳厘

全額金貳拾四錢貳厘

此地租金拾六錢壹厘 但月割粗額五月ヨリ十二月マ

テ八ヶ月分

外金八錢壹厘 未廿一年ヨリ可増分

…(略)

[史料⑦] 東京都公文書館 301.G4.1

大正四年 学事 府立学校 第一號 冊ノ三六

第二八三號

一教室模様替増築 木造二階建て 瓦葺 貳ヶ所 四拾

坪

一教室増築 木造平屋建 瓦葺 壹棟 貳拾坪

一便所 全土 壹棟 四坪四合五勾

一手洗所 木造平屋建 生子板葺 壹ヶ所 六合五勾

右御引継相成正二受領候也

大正四年十一月二十四日

東京府立第一高等女学校長 伊藤貞勝

東京府内務部長 岡田忠彦殿

※文字の判読できなかった箇所については■で示した。

■第1次調査の成果

Iで述べたとおり、元浅草遺跡の第1次調査は、都立学校遺跡調査会により、白鷗高校の校舎建替えに先立って行われた。発掘調査は昭和62(1987)年に行われ、整理作業は昭和63(1988)年から平成2(1990)年まで行われた。報告書は平成2年に刊行された⁽⁴⁾。以下、発掘報告書をもとに、第1次調査の主な成果を記述する。

第1次調査の主な検出遺構は、明治時代の煉瓦製基礎、礎石、煉瓦溜、江戸時代の廃棄土坑、瓦列、石組、井戸、穴蔵、溝、木組、墓跡などである。出土遺構は5つの時期に分割され、I期からIV期を江戸時代、V期を明治時代の遺構としている。特に注目されるのは、I期に属す墓跡である。29基が検出され、多くは埋設桶の底板ないし底部付近が残存したものである。第1次調査では、これらを屋敷地としての利用に先立って社寺が置かれた痕跡と推定している。また、III期には廃棄土坑が13基検出された。廃棄土坑は安政地震の廃棄物層とされる遺物の多い土層を掘り込んでおり、廃棄土坑からは、木材や炭化物、瓦片をはじめ、陶磁器など18世紀後葉から19世紀初頭の遺物が出土している。廃棄物層の出土遺物と廃棄土坑の出土遺物での接合もあるため、第1次調査では廃棄土坑群は比較的短期間に掘削され、廃棄物とともに埋戻されたと推測している。III期の上位にあるIV期には、石組や瓦列などの遺構が属す。第1次調査では、これらを庭園の設備と推測している。

主な出土遺物は、陶磁器を中心に、土器、土製品、瓦、石製品、金属製品、硝子製品、漆器、木製品、骨角貝製品などである。特に陶磁器の出土が多く、磁器は1万4千点余、陶器は5万6千点余を数え、他の遺物に卓越している。遺構から出土した陶磁器はわずかで、大部分は土層から出土したものである。陶磁器は、17世紀後半から19世紀のものが見られるものの、磁器では18世紀後半から19世紀初頭にかけての碗・皿類が主体をなし、陶器も18世紀後半から19世紀にかけてのものが大半を占める。18世紀後半から19世紀にかけての時期に元浅草遺跡を利用したのは松山藩酒井家であり、酒井家との関係が注目される。(山崎太郎)

【註】

- (1) 近世の絵地図の系譜を引く絵図で、版元は江戸時代からの地本問屋(江戸で出版された大衆本の版元)、吉田屋文三郎。
- (2) 海岸線や河川の形状は測量図の様を呈すが、街路などについては絵地図風。方位が記載されているので、伊能図など既存の測量図を参照して作成した可能性もあろう。原著者は市原正秀、出版人は小林新兵衛・中村熊次郎。小林新兵衛は江戸時代からの有力な書籍版元である。
- (3) 参謀本部陸軍部測量局作成。近代測量によるもので、縮尺は1/5,000である。
- (4) 1989『百年史』都立白鷗高等学校。公文書に記録のある記事については出典を記した。『百年史』抜粋の記事については、特に注釈はしない。
- (5) 2002『台東区史』通史編Ⅲ下巻 第四章庶民社会の諸相第四節下谷・浅草の戦災 東京都台東区
- (6) 1990『白鷗』都立学校遺跡調査会。

Ⅲ 層序

元浅草遺跡は、武蔵野台地縁辺部と隅田川の間に位置する低地に遺された遺跡である。遺跡は、自然堆積層である砂混じりの粘土質土の上に、盛土を行って形成されている。盛土は、出土遺物や遺構との前後関係から、近世から近代、現代にかけて断続的に行われていることがわかった。また、盛土には二種ある。ひとつは本調査地点の自然堆積層である暗緑灰色粘土層を主とした盛土である。もうひとつは、一見するとローム層のような褐色土を主とした盛土である。調査地点は低地域にあり、褐色土が元来堆積していたものとは考えにくく、外部から搬入された客土であると推測される。

第10図下部の土層模式図は、第2次調査で確認した土層を大別したものであり、第1～6層を確認した。なお、土層番号は第1次調査や試掘調査と共通するものではなく、本調査において独自に整理した番号である。また、本報告書では、基本土層を表す際には「第〇層」と表記して、遺構覆土などの土層と区別している。

第1層は、最上位にあたる盛土層である。調査区北壁の土層観察から、第1層はさらに4層に細別される(第11図)。最上層の1-1層は現在の都立白鷗高等学校のグラウンドの整地層で、上面は現地表面である。グラウンドは排水のために、中央を頂点として東西に傾斜しているため、東端部分では中央よりも低い位置で1-1層が出現している。1-2層は、コンクリートガラが多量に混じる層である。改良材等で固めた影響か、重機の歯が立たないほどに固く締まった層であった。第Ⅱ章で言及した昭和3年のコンクリート製校舎(以下、「昭和校舎」という。)を解体、埋戻した際の攪乱と考えられる。1-3層は砂礫を含む整地層である。1-2層に切られることから、昭和校舎が健在であった頃に整地された層と考えられる。1-4層は固く締まった整地層である。35号遺構(明治期の煉瓦製建物基礎)を埋めるように整地されていることから、関東大震災に伴う火災のあと、臨時校舎を建てる際に埋戻した盛土層と考えられる。以上から、第1層は昭和から現在に至るまで、白鷗高校の校舎建替えにともなって形成された盛土と考えられる。

第2層は、Ⅰ区西側からⅢ区東側までの範囲で検出された盛土層である。調査区北壁の土層観察から、第2層には35号遺構が掘り込まれるため、明治期の煉瓦製建物基礎が構築される以前に整地された土層であると考えられる。調査区北壁及びⅡ区南北ベルトの土層観察から、第2層は最上面に黄褐色土を硬く締め固めた層があり、その下層に褐色、暗褐色、黒褐色を呈する土層があることがわかる。後述の池遺構や第4・5層などの前の時代の土層を埋めるように褐色土、暗褐色土、黒褐色土で盛土を行い、その上層に黄褐色土で整地を行ったものと考えられる。以上から、第2層は近代に形成された盛土層と考えられる。

第3層は、第2層と同じ高さで形成された盛土層である。土層は主として暗褐色土を呈し、遺物を含む。調査区北壁の観察から、池遺構の覆土に流れ込む91号遺構の土層が第3層の上位にあることが確認できる。このため、池を埋立てる以前には既に第3層は形成されていたことがわかる。第4層形成以降から池遺構の埋立て以前に形成された盛土層と考えられ、近世から近代初頭に比定される。

第4層は、第3層の下層にあり、池遺構西岸に形成された黒色からオリブ褐色の盛土層である。一見して第6層と色合いに差がなく、当初は判別ができなかったものの、81・94号遺構の土層観察

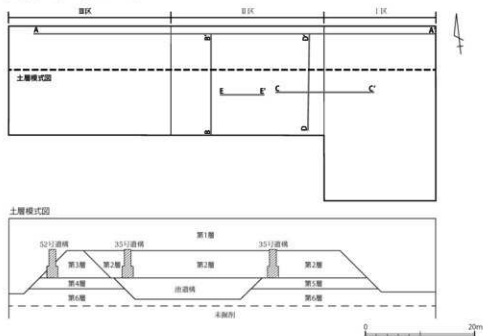
により、33号遺構の間知石を取り除いたのちに、61号遺構と連結する木種列（76・80・88号遺構）を盛土内に設置したことを確認した（第52図C-C'）。木種列は3条を確認し、木種列の設置と盛土は交互に行われていたことを確認した。そのため、第4層は木種列と同時期に形成された盛土層であり、池遺構よりもやや新しく第3層よりも古い。近世の後半に比定される土層であると考えられる。

第5層は、第2層下位に確認された。発掘時に第6層と異なる褐色土の面を確認し、東西・南北の2本のトレンチを入れて調査を行った（第12図C-C'・D-D'）。トレンチや33号遺構裏込め土（第58図C-C'）の土層観察から、33号遺構の裏込め土の上位に形成された盛土整地層であることがわかった。土層は細かく分かれていることから、整地は何層もの土層を重ねながら行われており、堆積の先後関係から、整地は西から東へ行われたことがわかった。また、大別して3層に分かれ、最上位は褐色土層、中位は黒褐色やオリーブ黒色の土層が混在して細かく堆積し、下位はオリーブ黒色土層を中心に灰オリーブ色の粘土質土が一部に混在して堆積していた。盛土からは瓦や木材の小破片が出土している。また、61号遺構は第5層を切って構築されることから、第5層は、33号遺構の構築から池遺構の構築までの間に形成された、近世に比定される土層であると考えられる。

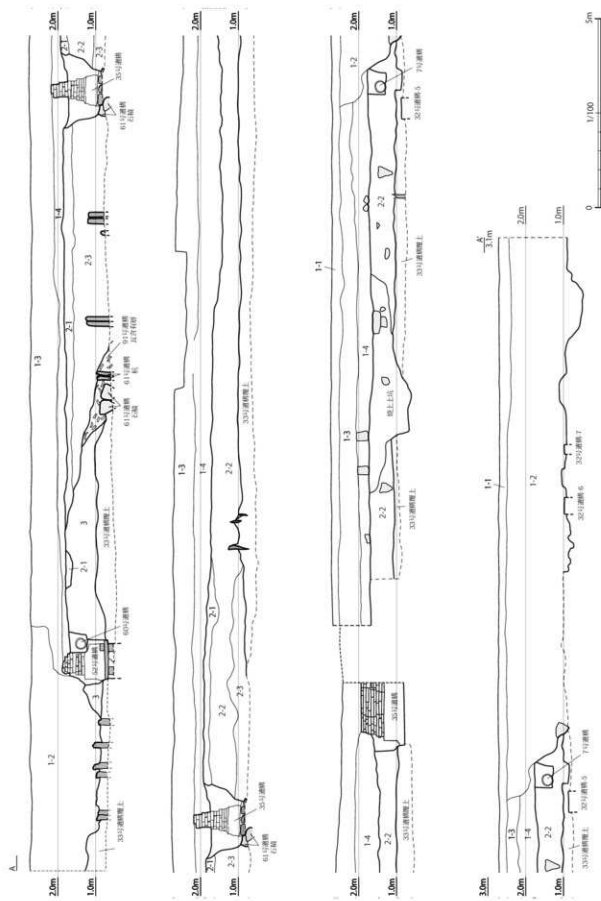
なお、第4・5層の上面、池遺構の埋立て土の上面、33号遺構覆土の上面は、ほぼ同一の海拔1m付近となっている。第4・5層上面の遺構の上端が削平されていることから、第2・3層の盛土を行う際に一度削平、整地したものと推測される。

第6層は、自然堆積層であり、本遺跡における地山層である。調査は調査区東側のI区から行ったため、1層の攪乱層を掘削してすぐに暗緑灰色粘土層を確認した。2号遺構や12号遺構の調査により、自然堆積層であることを確認した。総じて暗緑灰色を呈する砂混じりの粘土層であるが、深掘トレンチ（第12図E-E'）から、深部では砂の混入に濃淡があることがわかった。

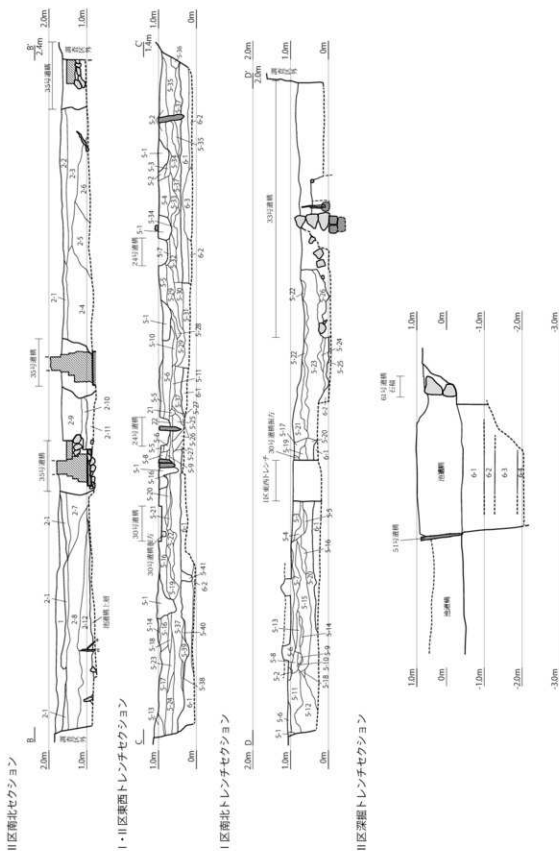
第2次調査地点の土層は以上の6層に大別される。この6層と検出した大規模な遺構との新旧関係は、古い方から順に第6層→33号遺構→第5層→池遺構（61号遺構）→第4層→第3層→第2層→35・52号遺構→第1層となる。



第10図 トレンチの位置と土層模式図



第 11 図 調査区の土層 (1)



第12図 調査区の土層 (2)

調査区北壁東西セクション (第11図A-A')

- 1-1 現在の郡立白鷺高等学校グラウンド整備に伴う整地層。上面は現地表面。
- 1-2 コンクリートガラを多量に含む粗乱層。昭和校舎の解体による粗乱と考えられる。
- 1-3 礫や砂利を含む層。1-2層に切られるため、昭和校舎時代の整地層と考えられる。
- 1-4 固く締まる整地層。煉瓦製校舎基礎を埋め戻したものが。
- 2-1 黄褐色を主とした盛土層。遺物(木材、瓦、陶磁器等)が混じる。35号遺構の周囲に広く広がっている。
- 2-2 褐色を主とした盛土層。遺物(木材、瓦、陶磁器等)が混じる。35号遺構内部から1区画まで広がる。
- 2-3 暗褐色を主とした盛土層。遺物(木材、瓦、陶磁器等)が混じる。35号遺構内部から西側にかけである。
- 3 暗褐色を主とした盛土層。江戸時代から明治初期の整地層と考えられる。

II区南北セクション (第12図B-B')

- 1 10YR2/1 (黒色) 細り強、粘性やや強。瓦片3~5%混、φ10~30mm礫3~5%混。整地層。
- 2 10YR4/3 (にぶい黄褐色) 細り強、粘性やや強。φ10~20mmロームブロック3~5%混。整地層。
- 2.2 2.5Y3/1 (黒褐色) 細り強、粘性やや強。φ3~5mm焼土粒・炭化物粒・貝片各2%・遺物(瓦)多。粘土層だがやや上っぽい。
- 2.3 2.5Y3/1 (黒褐色) 細り強、粘性强。φ20~50mm炭化材微、礫・遺物多。ブロック状の粘土充填。
- 2.4 2.5Y3/1 (黒褐色) 細り強、粘性強。φ5~8mm焼土粒・炭化物粒・貝片各7%混。遺物(JD)多。粘土層。
- 2.5 2.5Y3/1 (黒褐色) 細り強、粘性強。φ8~10mm焼土粒・炭化物粒・貝片各10%混。遺物(JD)多。2-4層に似る。粘土質上。
- 2.6 2.5Y3/2 (黒褐色) 細り強、粘性強。φ5~8mm焼土粒・炭化物粒各5%混。
- 2.7 10YR3/2 (黒褐色) 細りとても強、粘性やや強。φ20~30mm炭化物5~7%混、φ10~50mm礫・瓦片各7~10%混。炭化物は北側に多い。整地層で上面は硬化している。
- 2.8 10YR3/4 (暗褐色) 細り強、粘性やや強。φ10~20mm炭化物3~5%混。整地層だが、2-7層のような上面の硬化は見られない。
- 2.9 7.5YR3/1 (黒褐色) 細り強、粘性強。φ5~8mm焼土粒・炭化物粒各10~15%混。遺物(瓦・礫・貝片多。粘土層。
- 2.10 7.5YR3/1 (黒褐色) 細り強、粘性やや強。層状の淡黄褐色砂質粘土混。砂混じり粘土層で砂多。
- 2.11 7.5YR2/1 (黒色) 細り強、粘性やや強。遺物・貝片・木材多。砂混じり粘土層で砂多。ブロック状の粘土充填。
- 2.12 10YR2/2 (黒褐色) 細り強、粘性強。木片・貝片各1~3%混、φ5~10mm炭化物・φ10~20mm礫各3~5%混。

I・II区東西トレンチセクション (第12図C-C')

- 5-1 7.5Y2/1から2.5Y4/3 (黒色からオリーブ褐色) 細り強、粘性やや強。、φ3~5mm炭化物・φ5~10mm黒色土ブロック各3~5%混、φ5~10mm黄褐色砂粒5~7%混、φ10~30mm青灰色粘土ブロック7~10%混。混入物の濃淡により色調は変わる。砂混じり粘土層。杭の露方。
- 5-2 5Y4/2 (灰オリーブ色) 細りやや強、粘性やや強。黄褐色砂粒3~5%混。砂混じり粘土質上のブロックで埋戻した層。
- 5-3 5Y3/2 (オリーブ黒色) 細りやや強、粘性やや強。にぶい黄褐色砂粒5~7%混、φ5~10mm黒色土ブロック10~20%混。5-37層と同質だが、混入物が異なる。
- 5-4 2.5Y4/2 (オリーブ褐色) 細り強、粘性有。φ5~10mm黒色土ブロック5~7%混、黄褐色砂粒10~15%混。砂混じり土。黒色土ブロックの集中する層がある。
- 5-5 2.5Y4/6 (オリーブ褐色) 細りやや強、粘性やや弱。φ10~20mm黒褐色土ブロック5~7%混。黄褐色砂粒多。砂質上。
- 5-6 2.5Y3/2 (黒褐色) 細りやや強、粘性有。φ1~3mm炭化物粒子1~3%混、にぶい黄褐色砂粒7~10%混。砂混じり粘土質上。
- 5-7 10YR3/3 (暗褐色) 細り有、粘性やや弱。φ10~30mm礫3~5%混。砂混じり土。
- 5-8 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) 細りやや強、粘性やや弱。φ3~5mm白色粒子・φ5~7mm黒褐色土ブロック各3~5%混。
- 5-9 10YR3/4 (暗褐色) 細りやや強、粘性有。φ3~5mm黒色粒子1~3%混、褐色砂粒10~15%混。
- 5-10 2.5Y3/2 (黒褐色) 細り強、粘性有。瓦片3~5%混、φ3~5mm炭化物粒子・にぶい黄褐色砂粒各5~7%混。
- 5-11 2.5Y4/2 (暗灰黄色) 細り強、粘性弱。φ10~30mm青灰色粘土ブロック7~10%混。にぶい黄褐色砂粒を中心に、僅かに黄褐色砂粒も混じる砂質上。
- 5-12 2.5Y3/2 (黒褐色) 細り強、粘性強。にぶい黄褐色砂粒3~5%混。粘土質上。
- 5-13 2.5Y3/2 (黒褐色) 細り強、粘性有。にぶい黄褐色砂粒7~10%混、φ10~30mm青灰色粘土ブロック10~15%混。
- 5-14 2.5Y4/4 (オリーブ褐色) 細り強、粘性有。φ10~20mm青灰色粘土ブロック7~10%混。
- 5-15 10YR3/4 (暗褐色) 細り有、粘性弱。φ5mm黄褐色砂粒3~5%混、φ10~30mm青灰色粘土ブロック5~7%混。
- 5-16 2.5Y4/4 (オリーブ黒色) 細り強、粘性強。暗褐色砂質土ブロック10~20%混。5-18層に近く、さらに粘土質上が多い。
- 5-17 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) 細り強、粘性やや強。φ10~30mm黄褐色土ブロック3~5%混、φ10~30mm青灰色粘土ブロック20~30%混。
- 5-18 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) 細り強、粘性有。暗褐色砂質土(一部にぶい黄褐色)ブロック20~30%混。粘土質上。
- 5-19 2.5Y3/1 (暗褐色) 細り強、粘性有。φ5mm炭化物粒子3~5%混、φ10~20mm灰色砂質土ブロック7~10%混。5-37層に近い粘土質上に、5-38層に近い砂質土ブロックが混じる。
- 5-20 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強、粘性弱。砂混じり粘土層。
- 5-21 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強、粘性弱。φ3~5mm黒色粒子5~7%混。砂混じり粘土層
- 5-22 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強、粘性有。φ3~5mm黒色粒子3~5%混。粘土と褐色砂質土が混じる。砂質土は一部にぶい黄褐色。
- 5-23 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強、粘性強。暗褐色砂質土ブロック10~20%混。5-18層に近く、さらに粘土質上が多い。
- 5-24 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強、粘性強。黒色土ブロック・黄褐色土ブロック3~5%混、暗褐色土ブロック5~7%混。粘土質上。
- 5-25 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強、粘性強。にぶい黄褐色砂粒7~10%混。粘土質上。
- 5-26 7.5Y3/2 (オリーブ黒色) 細り強、粘性強。黄褐色砂粒微。にぶい黄褐色砂粒20~30%混。砂混じり粘土質上。
- 5-27 5G3/1 (暗オリーブ灰色) 細り強、粘性強。にぶい黄褐色砂粒5~7%混。5-37層と似るがやや青黒い。
- 5-28 2.5Y3/2 (黒褐色) 細りやや強、粘性やや弱。φ3~5mm炭化物粒子1~3%混、φ5~10mm黒褐色粘土ブロック3~5%混。褐色砂粒10~15%混。
- 5-29 5Y3/2 (オリーブ黒色) 細り強、粘性強。暗褐色砂粒・青灰色粘土ブロック各7~10%混。粘土質上。下層ほど青灰色粘土ブロックが多い。
- 5-30 2.5Y3/2 (黒褐色) 細りやや強、粘性やや弱。φ10~30mm黒褐色粘土ブロック7~10%混。褐色砂粒15~20%混。砂混じり土。
- 5-31 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強、粘性有。φ3~5mm炭化物・φ5~10mm褐色土ブロック各1~3%混。6-1層に近い粘土質上だが、や

- や暗く、混入物が異なる。
- 5-32 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) 締り強、粘性有。黄褐色砂粒1~3%混、 ϕ 10~20mm青灰色粘土ブロック3~5%混、褐色砂粒・にぶい黄褐色砂粒各7~10%混、砂混じり上。
- 5-33 2.5Y3/2 (黒褐色) 締り強、粘性やや強。黄褐色砂粒10~15%混。砂混じり粘土質上。砂粒はブロック状を呈する。
- 5-34 5Y3/1 (オリーブ黒色) 締り強、粘性強。にぶい黄褐色砂粒15~20%混。砂混じり粘土質上。砂粒はブロック状を呈する。
- 5-35 5Y3/1 (オリーブ黒色) 締り強、粘性強。にぶい黄褐色砂粒10~15%混。砂混じり粘土質上。砂粒はブロック状を呈する。砂粒は5-39層、5-40層と同質だが、やや褐色に近い。
- 5-36 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締り強、粘性強。暗褐色土ブロック7~10%混。粘土質上。
- 5-37 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締り強、粘性強。黄褐色砂粒1~3%混、暗褐色土ブロック5~7%混。粘土質上。暗褐色土ブロックは西側が多い。
- 5-38 7.5Y4/2 (灰オリーブ色) 締り強、粘性強。 ϕ 10~20mm灰オリーブ色砂質土ブロック3~5%混。砂混じり粘土質上。
- 5-39 7.5Y4/1 (灰色) 締り強、粘性強。 ϕ 3~5mm砂質土ブロック1~3%混。5-38層と同質の粘土質上。
- 5-40 7.5Y4/2 (灰オリーブ色) 締り強、粘性強。 ϕ 5~10mm暗褐色砂質土ブロック5~7%混。5-38層と同質の砂混じり粘土質上。
- 5-41 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締り強、粘性強。 ϕ 20mm礫1~3%混。5-37層と同質の粘土質上。6-1層への振り込みか。
- 6-1 10Y3/1から7.5GY3/1 (オリーブ黒色から暗緑灰色) 締り強、粘性有。線状の黄褐色土5~7%混。砂混じり粘土質上。水が湧く。
- 6-2 10Y3/1から7.5GY3/1 (オリーブ黒色から暗緑灰色) 締り強、粘性有。線状の褐色土5~7%混。砂混じり粘土質上。水が湧く。6-1層よりやや暗い。
- 6-3 5Y4/2 (灰オリーブ色) 締り強、粘性有。 ϕ 10~30mm褐色土ブロック3~5%混。砂混じり粘土質上。水が湧く。

I 区南北トレンチセクション (第12園D-D')

- 5-1 7.5YR3/2 (黒褐色) 締り弱、粘性弱。礫・焼土・炭化物多。
- 5-2 7.5YR4/4 (褐色) 締りやや弱、粘性弱。 ϕ 1~3cm小礫多。
- 5-3 7.5YR3/2 (黒褐色) 締りやや弱、粘性弱。 ϕ 2~3cm炭化物土層に多、 ϕ 5mm小礫多。砂混じり上。
- 5-4 7.5Y4/1 (灰色) 締り強、粘性強。 ϕ 5mm~2cm炭化物・ ϕ 5mm焼土ブロック現状に混。粘土層も、僅かに砂混じる。
- 5-5 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締り強、粘性強。 ϕ 5mm炭化物1%。粘土層。
- 5-6 7.5YR4/4 (褐色) 締り強、粘性やや強。ローム混じりの土層。やや砂っぽい。所々灰白色化している。
- 5-7 7.5YR4/2 (褐色) 締りやや強、粘性やや強。 ϕ 2~3mm焼土粒微、 ϕ 2~3mm炭化物粒3%混。やや砂っぽい。ローム混じり所々褐色化。遺物混。
- 5-8 7.5YR4/4 (褐色) 締り強、粘性強。5-7層類似だが、より砂っぽい。
- 5-9 7.5YR3/4 (暗褐色) 締り強、粘性弱。 ϕ 3mm炭化物粒・ ϕ 3mm焼土粒各1%。
- 5-10 7.5YR4/4 (褐色) 締り強、粘性やや強。 ϕ 1mm焼土粒・ ϕ 2mm炭化物粒微。
- 5-11 7.5YR4/3 (褐色) 締り強、粘性無。 ϕ 1mm以下の焼土粒多。やや赤っぽい色調。
- 5-12 7.5YR3/1 (黒褐色) 締り弱、粘性弱。 ϕ 3mm焼土粒・ ϕ 5mm小礫混。砂質土層。
- 5-13 7.5YR3/2 (褐色) 締り強、粘性強。2~3mm焼土粒微、 ϕ 2~3mm炭化物粒3%。遺物混。粘土質上。
- 5-14 7.5YR4/3 (褐色) 締り強、粘性やや強。やや砂っぽい。ローム混か。
- 5-15 7.5YR3/2 (黒褐色) 締り強、粘性強。褐色粘土ブロックが所々に塊状に混じる。
- 5-16 7.5YR3/2 (褐色) 締り強、粘性やや強。水玉状に褐色化した部分有。
- 5-17 7.5YR3/2 (黒褐色) 締りやや弱、粘性弱。 ϕ 2~3mm炭化物土層に多、 ϕ 5mm小礫多。砂混じり上。
- 5-18 7.5Y3/2 (オリーブ黒色) 締り強、粘性強。 ϕ 3mm炭化物粒3%。粘土層。
- 5-19 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締り強、粘性強。砂混じり粘土層。やや褐色。
- 5-20 7.5YR3/1 (黒褐色) 締り強、粘性強。粘土層。
- 5-21 7.5YR4/3 (褐色) 締り強、粘性無。 ϕ 3mm炭化物粒1%混。 ϕ 1~3cm小礫多。ローム混。
- 5-22 7.5YR4/1 (褐色) 締り強、粘性強。 ϕ 1~2cm小礫・遺物・焼土混じる。褐色がやや強い。
- 5-23 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締りきわめて弱、粘性無。 ϕ 2~5cmの小礫多。砂質土層。砂礫は多量かつ、粒度が大きいため塊りが多い。
- 5-24 7.5Y3/2 (黒褐色) 締り弱、粘性強。 ϕ 10~15mm粘土ブロック主体。僅かに砂混じり、灰オリーブ色がかかる。
- 5-25 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締り強、粘性やや強。砂混じり粘土層。砂粒が多いが締りは良い。含水有。
- 5-26 7.5YR3/2 (黒褐色) 締りやや弱、粘性やや強。ローム混か。砂混じりで、やや含水が多い。
- 6-1 7.5YR3/1 (黒褐色) 締り強、粘性やや強。砂混じり粘土層。砂混じりで、湧水がある。自然堆積土か。
- 6-2 7.5Y2/1 (黒色) 締りやや強、粘性無。砂質層。やや青灰色がかかる。

※ 南北トレンチセクション19層は東西トレンチセクション5-20層、南北トレンチセクション5-20層は東西セクション5-37層、南北セクション6-1層は東西セクション6-1層とそれぞれ対応する。

II 区深掘トレンチセクション (第12園E-E')

- 6-1 10GY2/1 (緑黒色) 締り有、粘性やや強。 ϕ 5~10mm粘土ブロック7~10%混。砂質。
- 6-2 10GY3/1 (暗緑灰色) 締りやや強、粘性有。 ϕ 5~10mm粘土ブロック7~10%混。
- 6-3 10G3/1 (暗緑灰色) 締り有、粘性やや強。 ϕ 10~20mm粘土ブロック10~15%混。
- 6-4 5G3/1 (暗緑灰色) 締り強、粘性無。粘土ブロック微。砂質。湧水がある。

IV 遺構と遺物

1 遺構

第2次調査で検出した遺構は、煉瓦製建物基礎3基、円礫充填建物基礎1基、瓦充填建物基礎1基、コンクリート礎石列1条、板基礎列1条、十字形土坑列1条、礎石列3条、コンクリート三和土1基、コンクリート緑石列1条、鉄管列1条、土管列10条、コンクリート製枡1基、煉瓦製枡12基、木製枡6基、木樋列6条、竹樋3条、溝2条、石積遺構2条、土留板列13条、中の島1基、井戸5基、井戸囲い枠1基、埋設樋4基、木枠土坑5基、土坑16基、木枠2基、瓦集中部1ヶ所、遺物集中1ヶ所である。これらのうち、石積遺構1条、中の島1基、土留板列10条、瓦集中部といった遺構は、庭園に用いられた池跡に関連するものとして、池遺構としてまとめて取り扱った。また、土管と煉瓦製枡、木樋と木製枡など接続が確認できる遺構については、系統としてまとめて取り扱った。

層序の項で確認したとおり、調査地点の土層は自然堆積層の上に盛土を行って形成されており、それぞれの盛土の上面で遺構を検出した。このため、各遺構は平面的には重なり合っただけで検出されている。そこで、遺構の堆積順序に応じて遺構面を設定し、それぞれの遺構面ごとに整理し報告を行った。

I面は、第1層上面、すなわち現地表面である。相当する遺構はない。

II面は、第2・3層上面にあたる。煉瓦製建物基礎や、煉瓦製枡、土管などを検出した。近代に相当する確認面である。遺構確認面は概ね海拔1.5mであるが、第1層の厚い調査範囲の東側ではやや低い位置から検出している。

III面は、第4層の上面にあたり、池遺構やそれに伴う木樋、木製枡などを検出した。近世から近代に相当する。遺構確認面は概ね海拔1mである。

IV面は、第5・6層上面にあたり、石積遺構や円礫充填建物基礎、瓦充填建物基礎、井戸などを検出した。池遺構以前の近世に相当する確認面である。遺構確認面は海拔0.5mから1mである。I区東側やIII区西側では第1層の攪乱が深く、遺構を確認できたのは第6層上面であったものの、本来第4・5層のような盛土があった可能性もある。しかし、調査では確認できなかったため、IV面の遺構とした。

1) II面の遺構 (第13図)

II面から検出された遺構は、煉瓦製建物基礎3基、コンクリート礎石列1条、十字形土坑列1条、礎石列1条、コンクリート三和土1基、コンクリート緑石列1条、鉄管列1条、土管列10条、コンクリート製枡1基、煉瓦製枡12基、木製枡3基、土坑4基である。煉瓦製建物基礎は、第II章で述べた府立第一高等女学校の講堂及び校舎棟に比定される。また、コンクリート三和土もこの校舎に伴う渡り廊下に比定される。多数出土した鉄管列・土管列とコンクリート製・煉瓦製・木製の枡は、明治35年築造の校舎ないし、昭和校舎に伴う導水施設と考えられる。導水施設は、鉄管列・土管列とコンクリート製・煉瓦製・木製の枡の組み合わせから、10の系統が考えられる。鉄管列・土管列との接続が考えられない煉瓦製枡については、独立したものとして報告した。

■府立第一高等女学校の建物基礎

【校舎の建物基礎】

35号遺構 (第14～20図、第4表、図版5～8) II区からIII区の北側で検出された。東辺、南辺、

西辺、中辺を検出し、北側は調査範囲外へ続いている。東西に長軸を持つ長方形の基礎であり、前回の発掘調査や試掘でも確認されている。

35号遺構の構造は、下位から、杭→横木・胴木→コンクリート製土台→煉瓦製基礎の順序で構築されている。第18図R-Rの土層確認から第2層から後述の池遺構上層まで掘り込んだ掘方があり、当時の地表面であったと考えられる第2層上面から杭の上面まで、約1m掘り込みを行っていたようである。掘方の幅は約1.3mであるのに対して、横木が約1mであるため、掘方の掘削幅は最小限にとどめていたようである。横木の下位にある杭の長さは、中辺で約2.5m、南辺で約1.7mあり、これらを打ち込むことを考えても、掘方の掘削幅はやや狭いように考えられる。しかし、杭や横木・胴木を設置した上で、上位の基礎のための掘方を正確に設定し、調整しながら地面をかさ上げすることは非常に困難と考えられるため、すべての作業は第2・3層上面から行われたと考えられる。

杭は2列を基本としているが、部分的に3列となっている箇所や、列から外れて打ち込まれている箇所もある。また、杭同士の幅も一定ではなく、東辺から中辺にかけてはやや密に、南辺では比較的間隔を開いて打ち込まれている。杭は枝を落とし皮を剥いた幹を用いた丸木材で、採取したサンプルは中辺で約2.5m、南辺で約1.7mの長さを測る。杭の上位には長さ約1mの横木を一定間隔で設置している。横木は杭の頂部に合釘で打ち付けられ固定している。また、杭頂部と接する下面には円形の凹みが見られた。横木は、東辺から中辺にかけてはやや密に、南辺では比較的間隔を開いて設置されており、南辺とその他で構築に差があることが見て取れる。横木の上には2条の胴木を設置している。胴木は長さ約4mの材を用い、側面に加工痕は見られないが、胴木同士を連結するために木口を加工している。一方で、横木と胴木は加工して連結しておらず、太い犬釘を打ち込んで固定している。横木・胴木の間には拳大から人頭大の角礫・円礫を充填している。

胴木の上には、コンクリート製土台が設置される。土台は高さ約40cm、幅約70cmを測る。使用されるコンクリートはやや粗雑であり、砂利が大きいため、人力でも剥がれ落ちる部分がある。特に東辺から北辺では砂利の粒度と割合が大きく、外面が部分的に崩れている。一方、南辺は比較的粒度が小さく詰まっている印象である。

コンクリート製土台の上には、煉瓦製基礎が設けられている。煉瓦は、最大で11段積まれているが、煉瓦の積み方が一律でないため、段数や積み方を捉えることは難しい。東辺を一例とすると、11段の煉瓦積みを確認できる。最下段から3段は幅約60cm、次の3段は幅約50cm、その上は幅40cmを測り、裾に向かって広がるように積まれている。確認した最上段から2段は、黒化した煉瓦を用いている。この黒化煉瓦は、火災等の被熱により黒化したものではなく、煉瓦一個体の全面が黒色に仕上げられているもので、地上に露出した部分を装飾する目的で利用されたと考えられる。黒化煉瓦よりも下位の煉瓦は赤褐色の煉瓦である。煉瓦の積み方は、建物外側面（第15図C-C）から見て、上から小口→長手→長手→小口→長手→小口→長手→小口→小口→長手→小口の順で積まれており、変則的である。内側面（第15図D-D）を見るとさらに積み方の規則は崩れており、確認した最上段から2段目は長手面を水平に、小口を外面にして積まれている。また、長手面を打ち欠いて細長い形状とした煉瓦や平手面を打ち欠いて厚みを減じた煉瓦が多く利用されている。煉瓦の目地にはモルタルを使用しているが、目地の幅も一定ではなく、外側面の確認した最上段から3段目と4段目の間は、煉瓦をもう一段積めるほどの幅の目地となっている。他所に目を移すと、例えば中辺の内外の

側面（第17図L・L'・M・M'）では、最下段で長手面を水平とした煉瓦積みが見られる。その他の箇所もモルタルの目地の幅や煉瓦の厚みを調整している箇所が多く見られた。コンクリート製土台の上面は一見して水平であるが、例えば中辺の中央よりも東端は約10cm下がっている。これは土台設置時の不備というよりも、軟弱な地盤のため、土台や煉瓦積みの重みで基礎全体が部分的に沈み込んでいったものと考えられる。このため、煉瓦の積み方の変化や煉瓦の加工、モルタル目地の調整は、建物基礎の最上面を水平とするために、他所と高さをすり合わせる目的で行われたものと考えられる。

また、煉瓦積みの中には、平手面に炭で文字を書いたものが見られた。確認した炭書きは「口」「口下」「八下」「二」「二下」「へ」「へ下」「ト」「と下」と不明の炭書きの10種である。文字は「いろは」に相当すると考えられ、グルーピングのために書き込まれたものであろう。また、東辺・中辺・西辺の各所に各文字は一定範囲に固まって確認されたものの、南辺には見られなかった（第19図上）。また、「口下」は「口」のすぐ下段から確認された一方、「下」と書かれた煉瓦の下段には特に炭書きは見られなかった。各文字は煉瓦の設置場所を示しており、煉瓦積み基礎を構築する際に間違いないように記されたものと考えられる。先述のとおり、煉瓦積みは高さの調整のために様々な工夫をしており、調節の最終段階において利用する煉瓦を明確にするように炭書きを行ったものと考えられる。また、煉瓦には刻印も多数見られ、それらについては遺物の項で詳述する。

煉瓦基礎の各辺には、幅約70cmにわたって上段から数段部の煉瓦が抉られている部分がある。東辺・南辺・西辺では抉られたままとになっているが、中辺では抉られた部分にモルタルを厚く塗って煉瓦を積み直している。煉瓦を積んでいるというよりも、モルタルで煉瓦片を固めて充填していると言った方が適切な表現かもしれない。おそらく配管等を通すため抉られたものと考えられ、中辺は必要がなくなったために埋められたと考えられるが、詳細は不明である。

さて、東辺には、南端から約2.7mにわたって、煉瓦の積み方が著しく変化している箇所がある。土台及び煉瓦積みにも継目が生じている部分があり、煉瓦を打ち欠いて幅を調整しながら噛み合わせて基礎を継いでいる。煉瓦が裾に向かって広がるように構築されていることは変わらないが、裾の最も広がった部分の段数が3段から2段へ減じ、積み方も2段とも外側面に小口が出ている積み方である。その上段も小口と長手が混在するような積み方であり、変則的である。また、南辺の目地もモルタルであるが、厚く塗られており、非常に強く固着している。一方で、確認した最上段の黒化煉瓦は東辺と同様に積まれており、東辺から引き続いて積んでいるようである。先述のとおり、南辺と中辺以北には、杭や横木、コンクリート製土台においても構造の差があり、同時に作られたものとは考えにくい。府立第一高等女学校校舎配置図（第8図）と比較すると、35号遺構は講堂に比定される。出土した遺構と重ね合わせると、当初の講堂は中辺までの規模であったと考えられる。いずれかの時期に南側へ約1間半にわたって増築したようである。なお、当初建築部分と増築部分には、煉瓦積みを用いられた煉瓦の種類や構成にも違いが見られるが、それらについては遺物の項で詳述する。

講堂の建物基礎には、東辺・南辺・西辺に張出部が設けられている。東張出し部は東辺から南北4m、東西1.2mが張出しており、他の基礎と同様に杭→横木・胴木→土台→煉瓦積みの順で構築されている。張出し部の中部には炭化材の多く混じる層が埋め戻されていた。東張出し部は、講堂内部の写真（第9図4）の演壇にあたる箇所と考えられる。

西張出し部は、南北2.2m、東西1mを測る。拳大から人頭大の角礫を敷き詰め、その中に崩れた

煉瓦が混じる。煉瓦については、35号遺構が崩された際に混入したものと推測される。南西張出し部は南北0.6m、東西2.2mを測る。南辺に沿う37号遺構の上位にある。拳大から人頭大の角礫を敷き詰め、東西の端部はコンクリートで固められている。また、中辺の南側にも砂利と人頭大の角礫が敷き詰められた箇所があり、同様の張出し部であった可能性がある。府立第一高等女学校の写真(第9図2)を見ると、講堂の南側から校庭に出るための扉が見られる。写真では東西に2か所の扉が見られるため、これは中辺の張出し部に相当するものと推測される。南西張出し部や西張出し部も同様の出入口施設であったと考えられる。

第9図から、府立第一高等女学校の校舎は木造で、建物基礎のみを煉瓦積みで構築している。講堂を含む木造校舎は明治35(1902)年に完成し、大正12(1923)年の関東大震災に伴う火災によって全体が焼失したと記録が残る。東張出部に詰まっていた炭化物はこの際に投棄された可能性がある。一方で、地震による被害はあまりなかったと記録され、建物基礎に地震の痕跡は見られなかった。

35号遺構と同様の遺構に、墨田区横綱一丁目遺跡(第二地点)の01号遺構がある⁹⁾。01号遺構は陸軍被服工廠の基礎とされ、下位から根切り溝・土留板→杭→枕木・胴木→モルタル?→レンガ積み(原文ママ)の順で構築している。01号遺構の上位には煉瓦製建物があったとされ、35号遺構よりもさらに重量のかかる建物基礎であったと考えられる。同様の工法を採用した35号遺構も強固な建物基礎となることを目指して構築されたと考えられる。

52号遺構(第21図、第4表、図版9)Ⅲ区西寄りで検出された。35・56号遺構と同様の建物基礎で、北側、南側はともに調査範囲外へ続いている。52号遺構の西側は攪乱を受けており、35号遺構よりも残存状況が悪い。南北の建物基礎は煉瓦積み部分まで検出されたが、東西の棧にあたる建物基礎は胴木以下の木材、杭のみ検出している。

52号遺構の構造は、基本的には35号遺構と同様であるが、細部で異なっている。第3層に掘り込んだ掘方に2列の杭を打ち込み、その上に横木を設置している。横木は杭を繋ぐように設置されているが、部分的に斜行して設置されており、一部ではX字状に設置されている。これが基礎の強度などにどのように影響しているのか不明である。横木の上に2条の胴木を設置しており、胴木、横木の間は円礫や砂利で充填している。胴木の上にはコンクリート製土台を設けている。土台に使われているコンクリートは砂利の粒度が粗く、ポロポロと崩れる部分がある。土台の上位には煉瓦積みの建物基礎が設けられている。煉瓦は確認できた範囲で最大11段確認されたが、攪乱を受けており、11段の煉瓦積みを確認できた箇所は少ない。煉瓦は全て赤褐色の煉瓦を積んでおり、上から5段は、建物内側面から見て、上から小口→小口→長手→小口→長手の順で積まれている。その下の3段は少し幅を広げて煉瓦を積んでおり、上から小口→長手→小口の順で積んでいる。最終の3段はさらに幅を広げて積んでおり、上から小口→長手→小口の順で積んでいる。

52号遺構で最も特徴的なものは、北側で見られたアーチ状の煉瓦積みである。最下段から下から8段目までの高さで、小口を表に、長手面を下面として2段のアーチ状に組まれている。アーチの上部、下部は上記の規則に従って積まれており、アーチに接する部分は煉瓦を打ち欠いてサイズを調整したうえで積んでいる。このアーチ部分が露出していたことは考えにくい。ため装飾とも考えにくく、また地下室等の施設があったことも確認できなかった。積み方にアーチを採用した理由は不明である。

府立第一高等女学校校舎配置図(第8図)と比較すると、52号遺構は西側の校舎に比定される。

西側の校舎は関東大震災以前に建替わっているため、明治35（1902）年から大正11（1922）年頃まで利用された校舎であると考えられる。

56号遺構（第22図、第4・5表、図版9）Ⅲ区中央で検出された。35・52号遺構と同様の建物基礎で、平面形状は方形である。56号遺構の西側には63号遺構が掘り込まれており、52号遺構との接合部の様子は不明である。

56号遺構の構造は、基本的に35・52号遺構と同様であるが、より整然としている印象を受ける。第2・3層を掘り込んだ掘方に2列の杭を打ち込み、その上に横木を設置している。その横木の上に2条の胴木を設置し、横木と胴木の間に拳大から人頭大の礫を充填している。胴木の上にはコンクリート製土台を設けている。土台には砂利の多いコンクリートが使われているが、35・52号遺構と比べてより緻密なコンクリートが使用されている。土台の上には煉瓦積みの建物基礎が設けられている。煉瓦は確認できた範囲で12段あり、下段にむけて裾の広がった構造をしている。煉瓦は上から2段は黒化した煉瓦を利用し、その下の4段は赤褐色の煉瓦を黒化した煉瓦と同じ幅で積んでいる。その下の3段は少し幅を広げて赤褐色の煉瓦を積んでおり、最終の3段はさらに幅を広げて赤褐色の煉瓦を積んでいる。それぞれの組み合わせは基本的にイギリス積みで積まれており、最上の6段は、建物外側面から見て、上から長手→小口→長手→小口→長手→小口の順に積み、次の3段も小口→長手→小口の順に積み、最下の3段は上から小口→長手→小口の順に積んでいる。つまり、幅が広がる前と後で小口を表とする積み方が連続している。また、56号遺構北辺の中央には最上位から4段分の煉瓦が抉り取られ、そこにコンクリートを詰めている箇所がある。35号遺構中辺や南辺でも、煉瓦が崩された箇所がモルタルと煉瓦片で固められており、それと同様のものかもしれない。

建物基礎の内部には浅い土坑が25基検出された。56号遺構-3は土坑の際に礫が並べられており、56号遺構-18には根固めと考えられる煉瓦片が敷き詰められているが、その他の土坑には設置されたものはない。これらの遺構は56号遺構の床を支えるためのツカなどを設置するためのものであったと推定される。

56号遺構は校舎配置図には描かれていないため、当初から建てられた校舎ではないと考えられる。府立第一高等女学校の明治43年頃の写真（第9図3）には西校舎手前に増築された方形の建物が見え、56号遺構と考えられる。生徒数の増加に対応して増築したものと考えられる。関東大震災後の写真（第9図5）には増築部がないため、56号遺構は52号遺構の建替えの際に壊されたものと考えられる。

【校舎に付属する施設】

39号遺構（第24図、第6表、図版9）35号遺構西張出し部の西側から検出した。53・59号遺構の上位にあり、40号遺構に壊される。南北2条のコンクリート製緑石列の間にコンクリート製三和土が設置された遺構である。緑石は北側の遺存状態が良く、南側は緑石の一部と、緑石の痕跡を検出した。緑石は、方形の緑石の間に、長辺の長い長方形の緑石を4つ並べる規則的な配置をしている。南北の緑石の延長線は、西張出し部の北辺と南辺とちょうど合うようである。三和土は、緑石の間に下層に細かい砂利を敷き詰め、その上に緑石と同じ高さまでコンクリート製三和土を設けている。三和土の上面は平滑に作られている。

府立第一高等女学校校舎配置図（第8図）を見ると、講堂と西の校舎棟を繋ぐ通路とみられる線が写りかかれており、明治43年頃の写真（第9図2）には講堂と西の校舎棟を繋ぐ渡り廊下がみられる。

39号遺構の縁石と三和土は講堂と校舎棟を結ぶ渡り廊下であろう。35号遺構西張り出し部は講堂からの出口部分であると考えられる。一方で、校舎棟側の出入口にあたる位置には57・63号遺構が設置されており、痕跡はない。40・57・63号遺構を設置した際に、撤去されたものと考えられる。

■導水施設

先述のとおり、鉄管列・土管列とコンクリート製・煉瓦製・木製の桁の組み合わせから、10の系統に分類し、系統に属さないと思われるものはその他の煉瓦製桁・木製桁として報告した。

導水系統は、遺構の切り合い関係から、時代の新しい順に番号を附している。土管系統1・2は、関東大震災以降に建設された昭和校舎に伴うものであると推定され、土管系統2・3は明治期の校舎を壊して設置したのと考えられる。一方、土管系統5・6は35号遺構に、土管系統7は56号遺構にそれぞれ伴うものと考えられる。土管系統8は56号遺構に、土管系統9は35号遺構の南辺にそれぞれ壊されていることから、明治期の校舎の増築以前に機能していた導水施設と考えらる。

【鉄管系統1】

鉄管系統1には、鉄管列である19号遺構と、接続する15・18号遺構が属す。18・19号遺構は7号遺構に切られるため、鉄管系統1は土管系統1より古いものである。しかし、金属製の消火栓を伴うものであることから、昭和校舎に伴って利用されたものと推測される。

19号遺構（第23図、第7表） 15・18号遺構を接続する鉄管である。径は8cmと他の土管と比べると細く、出土した状態では錆っており、劣化が進んでいた。15号遺構内部の消火栓と接続しており、防火設備として設置されたものと考えられる。

15号遺構（第23図、第8表、図版9） 煉瓦製桁である。また、15号遺構は上下で構造が異なっている。上部は小口積みとした煉瓦をコンクリートで強く固着しており、コンクリートが煉瓦製桁の周囲にも固着している。下部はモルタル目地であり、煉瓦は小口積みを基礎としている。上部は下部の煉瓦製桁を再利用するために設けたものと考えられる。また、下部の煉瓦製桁内部には消火栓とみられる金属製品があり（図版9）、この消火栓と18号遺構が接続していた。

18号遺構（第23図、第8表） コンクリート製桁である。7・10号遺構に切られており、東側の一辺のみ検出した。この一辺は60cmを測る。同じ鉄管系統1の15号遺構が一辺1mの規模であったことを考えると、この遺構も同様の規模であった可能性も考えられる。

【土管系統1】

土管系統1には土管列である7号遺構のみが属す。土管系統1は鉄管系統1や土管系統4を切って通されており、導水系統としては新しいものと考えられる。土管系統2は調査範囲の東側を南北に縦断する系統である。明治期の校舎の中には敷地東側に南北に建つものはないが、昭和校舎は南側が開いた「コ」の字状の校舎であり、土管系統1は昭和校舎の東翼に沿う導水施設と考えられる。

7号遺構（第23図、第7表、図版10） 土管列である。1区の西寄りで見出した。調査範囲を南北に縦断しており、北側、南側ともに調査範囲外へ続いている。7号遺構の上位には11号遺構があり、10号遺構の一部を切られている。遺構の北側がやや高く、南側に向かって緩やかに傾斜しており、継手も北を向いて設置されているため、北から南に向かって水を流したのと考えられる。土管列は土圧のためやや崩れた状態で出土した。土管の直径38cmは第2次調査で出土した土管列の中で最も太い。出土したその他の土管列のうち径30cmを超える40・63号遺構は、切り合い関係から明治

期の校舎よりも新しいものと考えられる。先述のとおり、7号遺構は昭和校舎に伴う導水施設と考えられ、第2次調査で検出した土管列は新しいものほど太い傾向にあるといえる。

【土管系統2】

土管系統2には、土管列である63号遺構と接続する58号遺構が属す。土管系統2は、土管系統3・7を切って通されている。土管系統2は52号遺構に沿うように南北に敷設されるものの、52・56号遺構を壊しているため、明治期の校舎を利用しなくなった後に敷設されたと考えられる。土管系統2は昭和校舎の西翼に伴うものと考えられる。

63号遺構（第21図、第7表、図版11）土管列である。Ⅲ区の中央付近で検出した。調査範囲を南北に縦断しており、北側、南側ともに調査範囲外へ続いている。土管の継手は北を向いており、北から南へ水が流れていたと推定される。63号遺構は56・57号遺構を壊して設置される。先述のとおり、本遺構は昭和校舎に伴うものと考えられ、遺構の年代は新しいものと推定される。

58号遺構（第21図、第8表）煉瓦製柵である。52号遺構の一部を壊して設置され、63号遺構に接続する。モルタル目地で、煉瓦は長手積みである。他の煉瓦製柵が概ね一片1m程度であるのに対し、58号遺構は一辺72cmとやや小型である。同様に小型の煉瓦製柵は土管系統1を壊す10号遺構であり、時代の新しい煉瓦製柵はやや小型となる可能性がある。

【土管系統3】

土管系統3には、土管列である40号遺構と、14・36・57号遺構が属す。14・36・57号遺構はそれぞれ40号遺構と接続しないものの、各煉瓦製柵に土管の接続痕跡があり、全てが40号遺構の延長線上にあることから接続するものと想定した。土管系統3は、39号遺構を壊して設置されており、明治期の校舎を利用しなくなった後に敷設されたと考えられる。しかし、57号遺構は土管系統2に壊されており、土管系統2を敷設するとともに使われなくなったと考えられる。

40号遺構（第24図、第7表、図版9）土管列である。39号遺構を壊して設置されている。掘削を受けており、検出状態は悪い。土管列はほぼ東西方向に設置されている。継手は西を向いているため、西から東へ水を流していたと考えられる。また、40号遺構の延長線上にあたる35号遺構西辺の一部には、煉瓦が除去されてくぼんでいる箇所があり、40号遺構を通していた可能性がある。

14号遺構（第24図、第8表、図版11）煉瓦製柵の上に、コンクリート製の角枠で鉄格子上の蓋を固定している遺構である。Ⅱ区北側にあり、35号遺構東側にある。煉瓦製柵はモルタル目地で、小口積みである。西辺の残存部最上段には土管が設置された箇所があり、14号遺構から36号遺構方向へ土管が接続していたものと考えられる。また、元々の煉瓦製柵はさらに上段まであったものと考えられ、蓋は煉瓦製柵の再利用のために設置されたものと考えられる。

36号遺構（第24図、第8表、図版11）煉瓦製柵である。35号遺構の内側で検出した。東辺を欠いている。煉瓦製柵は、西辺や北辺の一部では小口積みであるが、北西角や南辺では、長手を水平にし、小口を外側に向けて煉瓦を積んでおり、積み方が一様ではない。目地は全体的にモルタルである。北辺の残存部最上段に土管の接続口があるが、延長線上は調査範囲外にあたる。また、元々の煉瓦製柵はさらに上段まであったものと考えられる。

57号遺構（第24図、第8表）煉瓦製柵である。西辺は63号遺構により壊されている。煉瓦は小口積みであり、目地はモルタルである。東辺に土管の接続口があり、40号遺構と接続していたと考

えられるが、接続口の径 21cm と、40 号遺構の径 32cm とは合わない。40 号遺構との間に接続部が設けられていたか、あるいは 40 号遺構と接続しない可能性もある。

【土管系統 4】

土管系統 4 には、土管列である 13 号遺構と、接続する 8・34・46 号遺構が属す。土管系統 1 に切られ、土管系統 9 を切る。I 区から II 区にかけて東西に延びる。8 号遺構以東にも延びていた可能性があるが、攪乱され消失している。また、土管系統 4 の西側の延長線上には土管系統 8 があるが、接続していた様子は見られない。

13 号遺構（第 25 図、第 7 表、図版 10）土管列である。I 区中央から II 区南側にかけて、8・34・46 号遺構と接続しながら東西に延びている。土管列は、土圧や攪乱の影響で多くは崩れた状態で出土したが、一部良好に出土したものがあつた。土管の直径は 25cm であり、土管系統 1・2・3 と比べて一回り細身の土管が使用されている。また、8・34 号遺構間よりも、34・46 号遺構間の方がやや細身の土管が使用されている。継手は 8・34 号遺構間では東を向いており、34・46 号遺構間では西を向いている。つまり、8・46 号遺構から 34 号遺構に向けて水が流れていたと推定される。34 号遺構に集まった水をどのようにしていたかは不明である。

また、出土した土管の中には「 \neg ○神谷」という刻印のある土管があつた。常滑市民俗資料館のまとめた全国の土管工場の一覧^②によると、「神谷」という名前は、知多郡小鈴谷村の「神谷出張所小鈴谷工場」（工場主：神谷太郎）のみに確認できる。この工場の操業が明治 44（1911）年であることから、13 号遺構は明治 44 年以降に構築された遺構と推定される。

8 号遺構（第 25 図、第 8 表）煉瓦製枡である。I 区中央西寄りで検出された。7 号遺構に壊され、西辺が失われてる。一辺は約 1.2m あり、他の煉瓦製枡よりも一回り大きい。煉瓦は小口積みであり、目地はモルタルである。東辺の北寄りに土管の接続部があり、さらに東へ土管が延びていた可能性がある。

34 号遺構（第 25 図、第 8 表、図版 10）煉瓦製枡である。II 区南側で検出された。一辺は約 1.2m あり、8 号遺構と同様の規模で、他の煉瓦製枡よりも一回り大きい。煉瓦は小口積みであり、目地はモルタルである。13 号遺構が東西に接続する。先述のとおり、13 号遺構の継手の向きから、34 号遺構に水を集めていたと推定される。西側の接続口は残存部最上段にあり、元々の煉瓦製枡はさらに上段までであったものと考えられる。

46 号遺構（第 25 図、第 8 表、図版 10）煉瓦製枡である。II 区南側で検出された。一辺は 1m に及ばず、8・34 号遺構と比べると一回り小さい。煉瓦は小口積みであり、目地はモルタルである。東側に 13 号遺構が接続する。東側の接続口は残存部最上段にあり、元々の煉瓦製枡はさらに上段までであったものと考えられる。

【土管系統 5】

土管系統 5 には 41 号遺構のみが属す。35 号遺構の南辺にあり、開口部が上向きに開くことから、35 号遺構の上屋の雨樋等から水を流した導水施設と考えられる。土管系統 6 の上位にあるが、直接的に壊してはいない。そのため、土管系統 6 と併存していた可能性がある。

41 号遺構（第 26 図、第 7 表、図版 12）土管列である。垂直方向上向きに開口し、90 度折れて南西方向へ延びている。南西側は土管の痕跡を検出したものの、攪乱のため土管の出土はなかった。

【土管系統 6】

土管系統 6 には、土管列である 37 号遺構と、接続する 37 号遺構の木製枡、44 号遺構が属する。35 号遺構の南辺に沿うように東西に伸びている。西側は、35 号遺構より西側では検出されず、東側も 35 号遺構から離れると消失している。先述のとおり、土管系統 6 は土管系統 5 の下位にあるが、切り合い関係はない。また、土管系統 6 の下位に土管系統 9 がある。

37 号遺構（第 26 図、第 7・9 表、図版 11） 土管列と接続する木製枡を組み合わせた遺構である。35 号遺構の南辺に沿うように検出された。土管列の遺存状態は悪く、東側、西側は 35 号遺構から離れると、攪乱され消失している。西側延長部分には一部煉瓦で土管列を支えているような箇所も見られた。土管列の遺存状態の良かった部分では、継手は西を向いており、西から東へ水が流れていたと推定される。しかし、37 号遺構の東側の延長線上には接続する枡や土管がみられず、どのような導水の構造であったかは不明である。

37 号遺構の木製枡は、2 基検出した。東を 37 号遺構木製枡 a、西を 37 号遺構木製枡 b としている。木製枡は、浅く掘り込んだ方形の土坑に、平手面を水平にして煉瓦を並べて底面としている。底面の煉瓦の並べ方は一様ではなく、敷き詰めることを目的としているようである。使用された煉瓦は、完形のものもあれば、欠けたものや打ち割られたものも利用されている。煉瓦製底面の上に木枡を設けて枡としている。木枡の一片は約 30cm であり、高さは約 10cm である。木製枡 a は木枡が全周するが、木製枡 b では西辺が失われ、南辺、東辺も一部のみ遺存している。また、木製枡 a の覆土からはズック靴のような靴底が出土している。37 号遺構と 44 号遺構の木製枡は 35 号遺構の軒下と考えられる位置に設置されており、雨水等を集めるための施設であったと推測される。

44 号遺構（第 26 図、第 9 表、図版 11） 木製枡である。37 号遺構の木製枡と同様に、掘方に煉瓦を並べて底面とし、木枡を設置した構造である。木枡の一片は 32cm で、37 号遺構の木製枡と同様の規模である。

【土管系統 7】

土管系統 7 には 60 号遺構のみが属す。土管系統 7 は 56 号遺構の北辺に沿うようにあり、土管系統 2 に壊されている。また、東側も攪乱等により消失しているため不明である。

60 号遺構（第 22 図、第 7 表、図版 12） 土管列である。56 号遺構北辺に沿って東西方向に検出された。西は 63 号遺構に切れ、東側は攪乱により消失している。土管は土圧や攪乱により、遺存状態が悪い。土管の継手は西を向いており、西から東に水が流れていたと推定される。仮に東側へ直線的に延伸すると 35 号遺構に突き当たるため、どこかで南北に折れていたと推測されるが、不明である。

【土管系統 8】

土管系統 8 には土管列である 65・67 号遺構と、62 号遺構が属す。土管系統 8 はⅢ区南側にあり、北西、西、南西、南、南東の 5 方向へ土管の接続がみられる。土管系統 8 は 56 号遺構に切られており、明治期の校舎の増築の際に壊されたものと考えられる。

65 号遺構（第 24 図、第 7 表） 土管列である。Ⅲ区南側で検出された。62 号遺構から西へ、緩く北寄りに曲がりながら伸びる痕跡が検出された。土管列は攪乱を受け、遺存状態が悪い。土管の継手方向は不明だが、67 号遺構を見ると、西から東へ、62 号遺構方向に水が流れていたと推測される。

67 号遺構（第 24 図、第 7 表、図版 10） 土管列である。Ⅲ区南側から中央にかけて検出された。

62号遺構の北西方向に延びる土管列で、56号遺構の内部にも痕跡が見つかった。56号遺構の建設の際に壊されたと考えられる。土管列は攪乱を受け遺存状態が悪いが、62号遺構付近では継手が北西を向いており、北西から南東に向けて水が流れていたと推測される。

62号遺構(第24図、第8表、図版10) 煉瓦製枡である。Ⅲ区南側で検出された。一辺は1.1～1.2mであり、8・34号遺構と同様の規模である。煉瓦は小口積みであり、目地はモルタルである。土管の接続口が、西側に3基、南側に1基、東側に1基ある。西側・南側の接続口は残存部最上段にあり、元々の煉瓦製枡はさらに上段まであったものと考えられる。また、接続口に残存する土管から、西側・南側の接続口は全て62号遺構へ流し込むためのものであったと考えられる。東側の接続口は他の接続口よりも下段にある。さらに継手を西にして接続しており、62号遺構から流れ出るための土管であったと推測される。

【土管系統9】

土管系統9には38号遺構のみが属す。35号遺構と土管系統4に切られ、土管系統6の下位にある。38号遺構(第26図、第7表、図版12) 土管列である。Ⅱ区南側で検出された。35号遺構南辺から延び、調査範囲外まで続いている。37号遺構の下位にあり、13・35号遺構に切られる。土管列は継手を北にして並べられており、北から南へ水が流れていたようである。土管列の北端は35号遺構南辺によって切られているが、35号遺構南辺が増築部であることから、当初の南辺であった35号遺構中辺に伴う土管であった可能性も考えられる。

【その他の煉瓦製枡・木製枡】

上記の土管系統に属さない、独立した煉瓦製・木製枡を検出した。各遺構の形状は、土管系統に属する煉瓦製・木製枡とよく似ており、本来は土管等を伴う遺構であったと考えられる。

10号遺構(第23図、第8表、図版11) 煉瓦製枡である。Ⅰ区中央西寄りにあり、7・18号遺構を壊している。煉瓦製枡は一辺60～70cmであり、検出された煉瓦製枡のなかでは58号遺構と並んで比較的小型である。煉瓦は長手積みであり、東辺は2列の長手積みが確認された。また、上段は煉瓦の積直しが行われている。接続する土管列は確認されなかった。

20号遺構(第13図、第8表) 煉瓦製枡である。Ⅰ区中央北寄りで検出された。攪乱を受けており、一部残存するのみである。煉瓦の積み方は不明で、モルタル目地である。接続する土管等は確認されなかった。

30号遺構(第24図、第8表、図版12) 煉瓦製枡とそれを壊して設置されたコンクリート製礎石である。Ⅱ区中央東側で検出された。コンクリート製礎石は一辺約60cmで、側面は平らに仕上げられているものの、上面は波打っている。中央に方形のくぼみがあることから、柱等が乗っていた礎石であると考えられる。煉瓦製枡は一辺1mを測り、小口積みでモルタル目地である。接続する土管等は確認されなかった。

42号遺構(第28図、第9表、図版13) 木製枡である。Ⅲ区北側の35号遺構内部で検出された。37・44号遺構の木製枡と同様に、掘方に煉瓦を並べて底面とし、木枠を設置した構造である。底面の煉瓦は木枠の設置範囲を超えて並べられている。また、木枠の一辺は45cmで、同様の構造を持つ他の木製枡よりも一回り大型である。接続する土管等は確認されなかった。

50号遺構(第28図、第9表、図版13) 木製枡である。Ⅲ区北側で検出された。37・44号遺構の

木製橋と同様に、掘方に煉瓦を並べて底面とし、木枠を設置した構造である。木枠は北辺のみ検出した。一辺 38cm で、37・44 号遺構よりもやや大きく、42 号遺構よりもやや小型である。接続する土管等は確認されなかった。

■土坑

【建物基礎】

59 号遺構（第 27 図、第 10 表、図版 12）Ⅲ区北側にあり、39 号遺構を取り除いた第 3 層上面で検出した。方形の土坑の中に、方形のコンクリート製礎石が設置されていた。59 号遺構 -1 から 4 は、同様の規模の方形土坑が東西に並んでいる。59 号遺構 -1 を掘削したところ、内部に方形のコンクリート製礎石を検出した。礎石の一辺は約 60cm である。59 号遺構 -5 は東西方向を長辺とする長方形の土坑で、59 号遺構 -1 と同様のコンクリート製礎石を 2 基検出した。59 号遺構 -5 と並ぶ土坑はなかったが、同一の遺構と考えられる。39 号遺構の下位にあることから、明治期の校舎の建設以前の建物の基礎と考えられる。

53 号遺構（第 27 図、第 10 表、図版 12）Ⅲ区北側にあり、39 号遺構の緑石列の下位にある。十字形の土坑を東西 2 列、南北に 4 列の計 8 基検出した。南端にあたる 53 号遺構 -8 は 56 号遺構の掘方により切られている。53 号遺構 -1 を掘削したところ、用途不明の金属製品が出土したものの、礎石等はみられなかった。39 号遺構の下位にあることから、明治期の校舎の建設以前の建物の基礎と考えられる

【その他の土坑】

43 号遺構（第 28 図、第 10 表、図版 13）Ⅲ区北側で検出された。東西方向を長軸とする長方形の浅い土坑である。43・49・54・55 号遺構は東西に並んで検出されたが、形状がそれぞれ異なっており、別の用途で設けられたものと考えられる。

49 号遺構（第 28 図、第 10 表、図版 13）Ⅲ区北側で検出された。やや南北方向に長い方形の土坑で、底面に方形の掘り込みを持つ。掘り込みは底面からさらに約 30cm 掘り込まれており、柱穴と考えられる。39 号遺構が渡り廊下であり、明治 43 年頃の写真（第 9 図右上）から渡り廊下に屋根がかかっていることがわかる。49 号遺構は渡り廊下の屋根の支柱の柱痕の可能性はある。

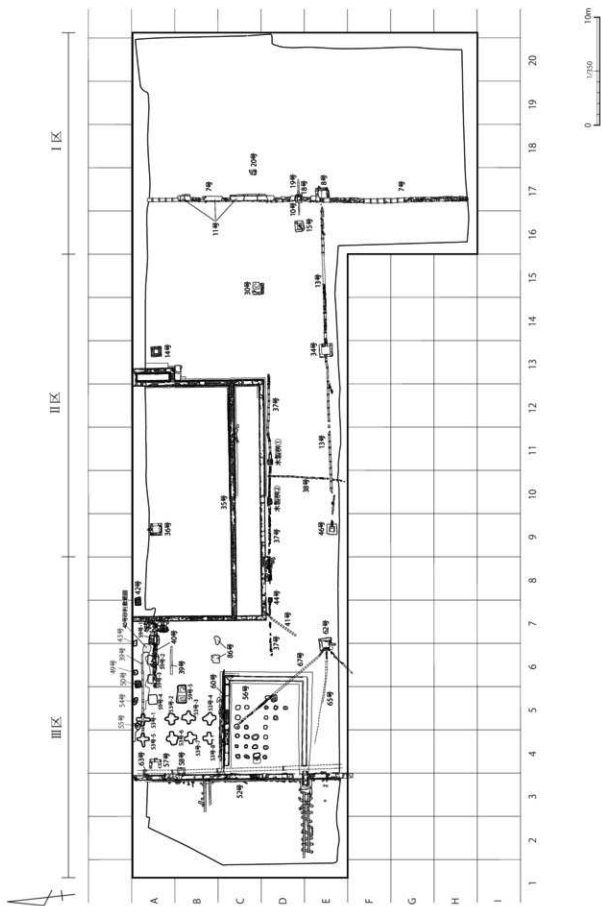
54 号遺構（第 28 図、第 10 表、図版 13）Ⅲ区北側で検出された。東西方向を長軸とする楕円形の土坑で、底面に不定形の掘り込みを持つ。掘り込みは底面からさらに約 15cm 掘り込まれている。49 号遺構と同様の柱穴と考えられ、渡り廊下の屋根の支柱の柱痕の可能性はある。

55 号遺構（第 28 図、第 10 表、図版 13）Ⅲ区北側で検出された。東西方向を長軸とする楕円形の土坑で、底面に人頭大の礫が 2 点置かれている。

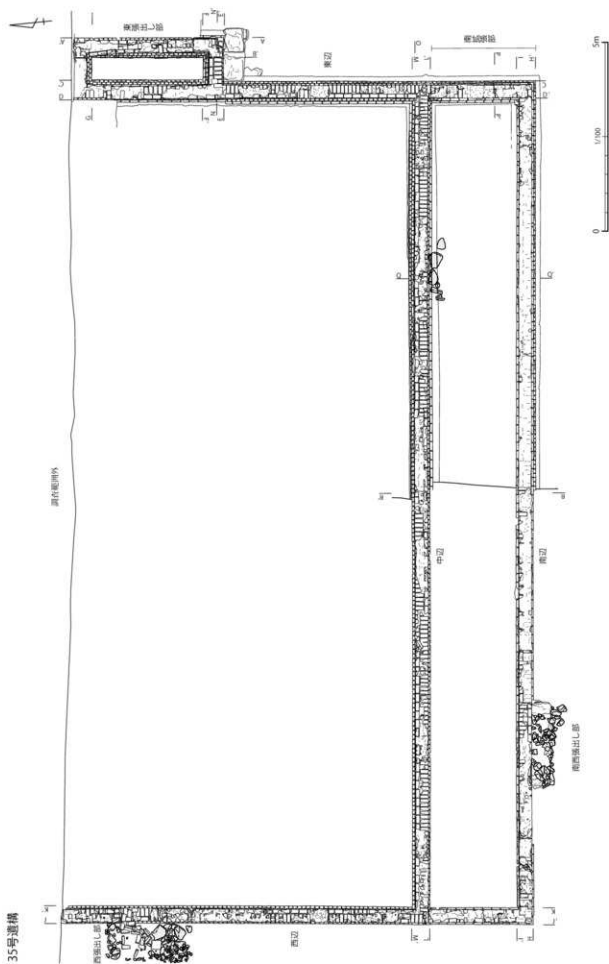
■その他の遺構

11 号遺構（第 27 図、第 6 表、図版 12）Ⅰ区西寄りに南北に検出されたコンクリート緑石列である。幅約 70cm を測る板状のコンクリートを南北に並べている。コンクリートの東側面には高さ約 20cm の緑石が並べられているが、西側面にはない。7 号遺構の上位にあり、土層確認からは 7 号遺構の掘方に蓋をするように設置されているように見えるが、7 号遺構全体に伴うものではない。

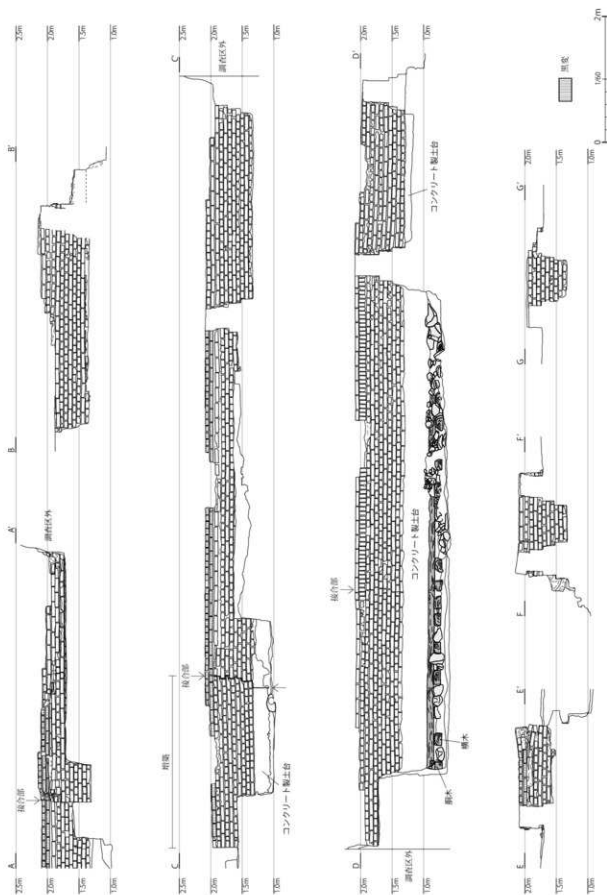
86 号遺構（第 13 図、第 11 表）Ⅲ区中央東寄りで検出された礎石列ある。根固めと考えられる角礫の集積である。東西 2 か所で検出した。35・56 号遺構の中間にあるが、関連は不明である。



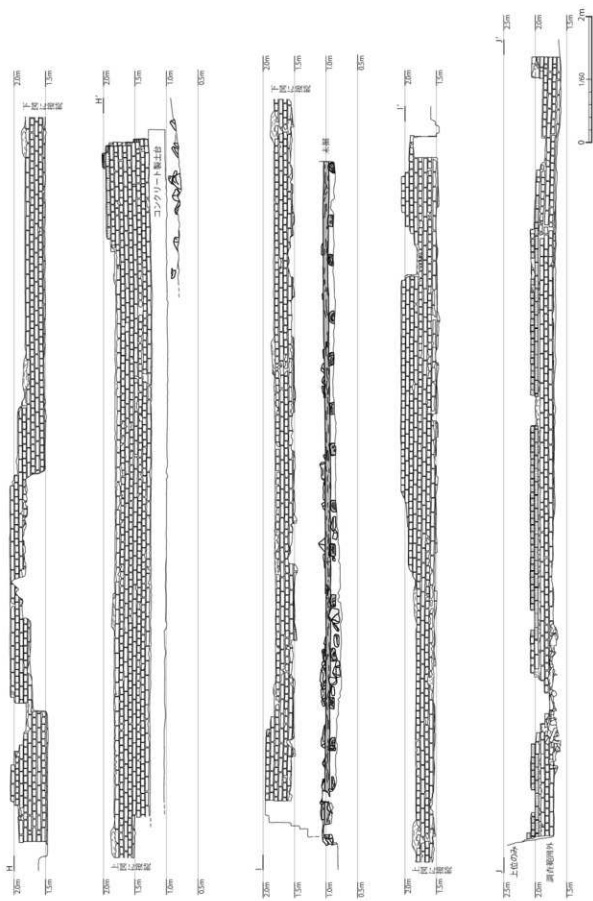
第13図 II面遺構全体図 (1/350)



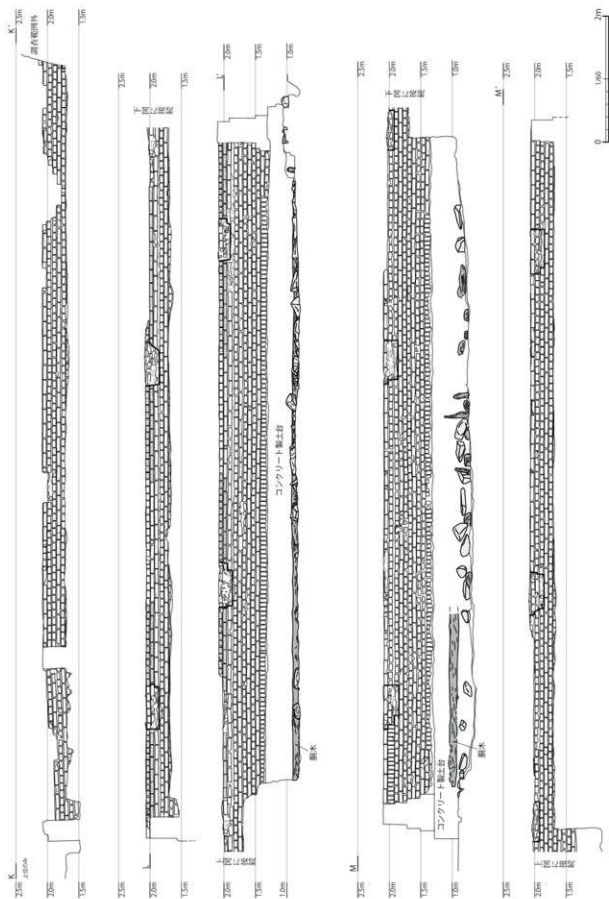
第14图 35号遺構(1) (1/100)



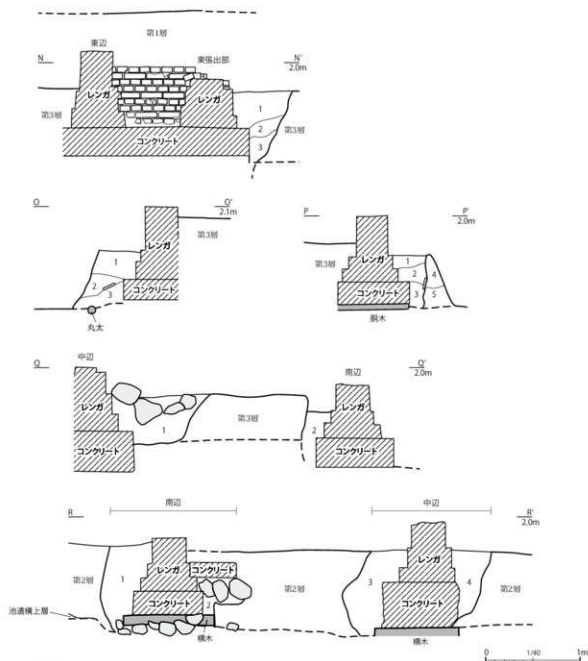
第15図 35号遺構(2) (1/60)



第 16 図 35 号遺構 (3) (1/60)



第 17 図 35号遺構 (4) (1/60)



35号遺構

N-N'

- 1 7.5Y3/1 オリーブ黒色 細り強 粘性やや強。φ3~5cm小礫・遺物を含む。ブロック。粘土層。
- 2 7.5Y3/1 オリーブ黒色 細り強 粘性やや強。やや粘土っぽい。1と同層だが1と2の間に明らかに面がある。粘土層。
- 3 7.5Y3/1 オリーブ黒色 細り強 粘性やや強。1・2層と同層だが小礫がやや少ない。粘土層。

O-O'・P-P'

- 1 7.5Y3/1 オリーブ黒色 細り弱 粘性やや弱。貝殻片含む。ボソボソ。やや材木質。
- 2 7.5YK3/2 黒褐色 細り強 粘性やや強。下はより褐色っぽい。角礫・レンガ・砂利・砂等混。
- 3 7.5YK3/2 黒褐色 細り強 粘性やや弱。ロームブロックをたたきしめている。瓦・砂利・礫・レンガ混。

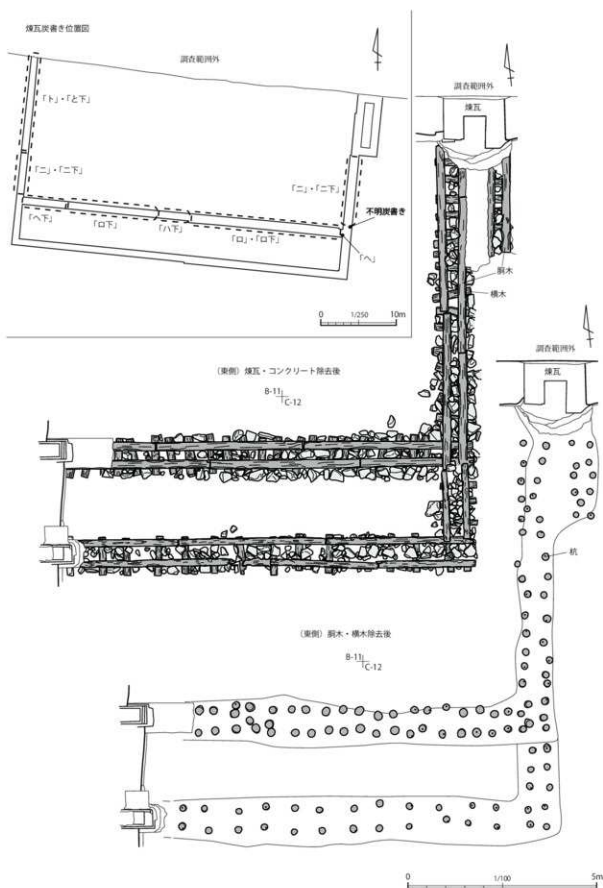
Q-Q'

- 1 7.5Y4/1 灰色 細り強 粘性やや強。φ50~80mm粘土ブロック主体 φ1cmレンガ片・瓦物片多数。粘土層。
- 2 7.5YK3/2 黒褐色 細り強 粘性やや強。φ30~50mmロームブロック混。ブロックをつきかためた感じ。遺物・礫混。

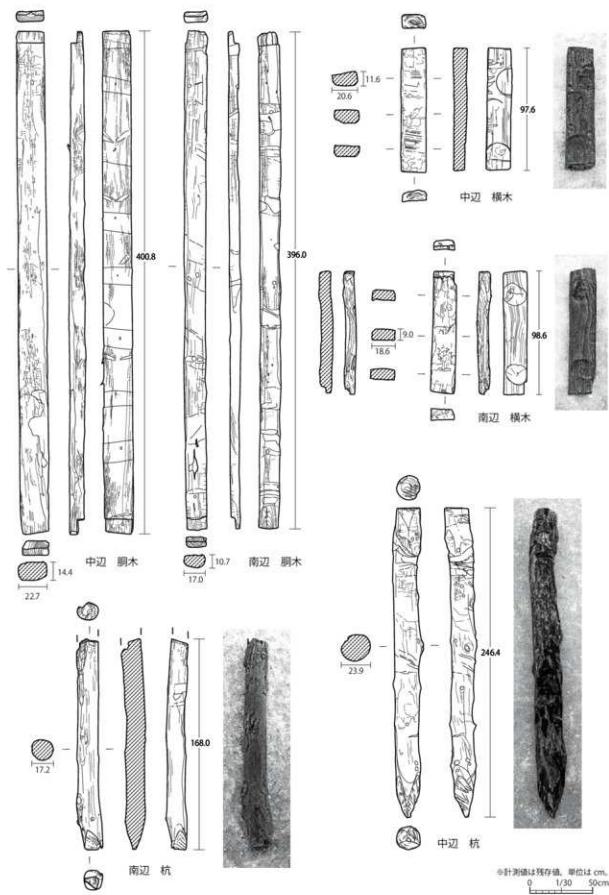
R-R'

- 1 10YR2/2 黒褐色 細り弱 粘性有。礫5~7% 瓦片5~7% 炭化物5~7%。焼瓦基礎の層方。
- 2 7.5YK3/2 黒褐色 細り強 粘性やや強。φ1~3mm炭土粒・炭化物粒10%。角礫多。粘土層。
- 3 7.5YK3/1 黒褐色 細り弱 粘性弱。コンクリート基礎の層方。小砂利・礫混 遺物少しあり。
- 4 7.5YK3/1 黒褐色 細り強 粘性やや強。φ1mm炭化物粒混。粘土っぽい。ブロック状のものが充填されている。遺物・木片・礫多。

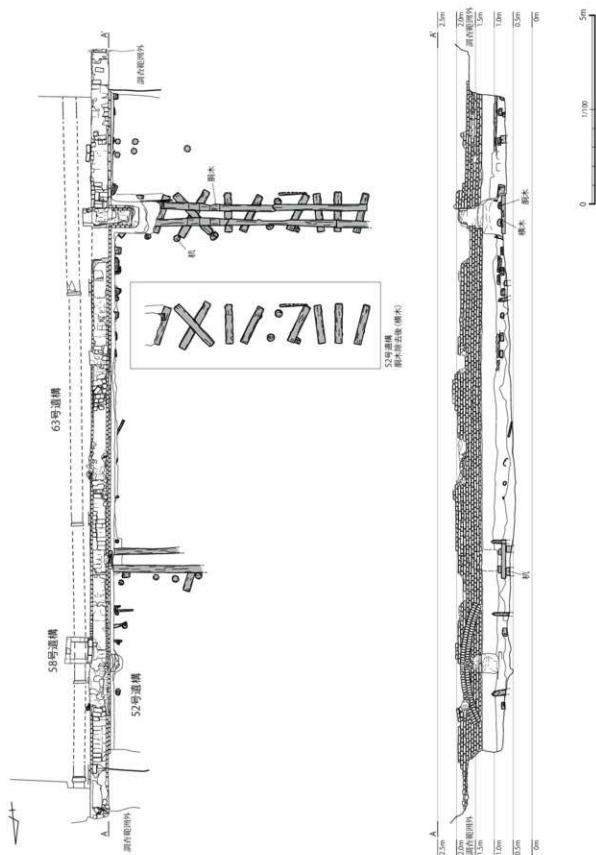
第18図 35号遺構 (5) (1/40)



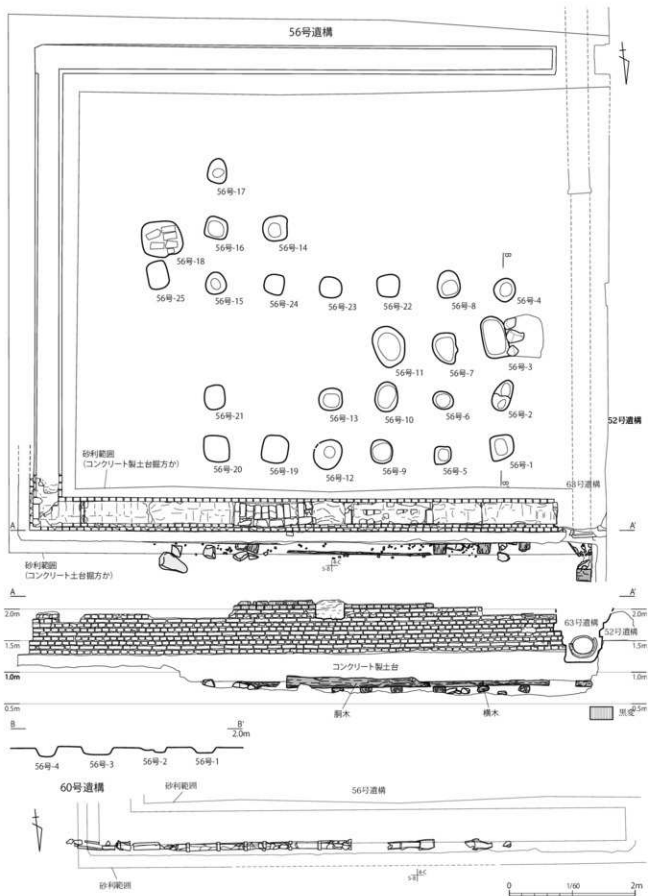
第19図 35号遺構 (6) (1/250・1/100)



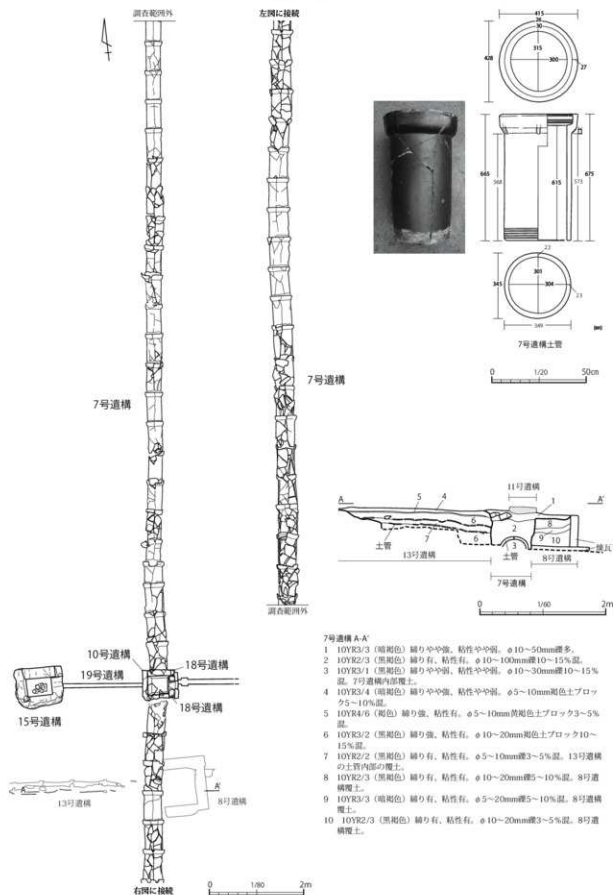
第20図 35号遺構 (7) (1/30)



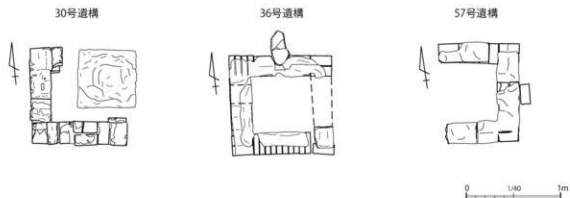
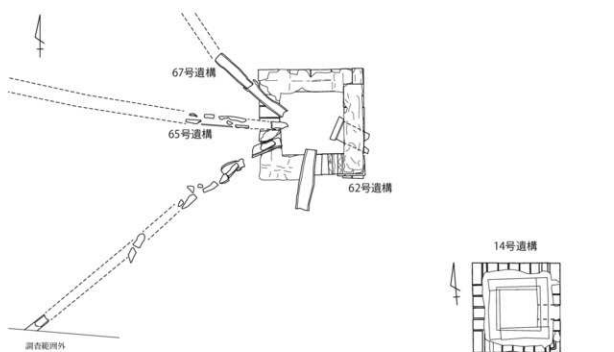
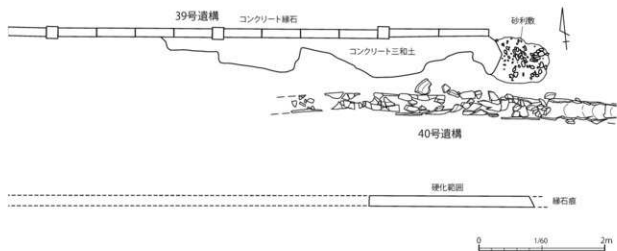
第21図 52・58・63号遺構 (1/100)



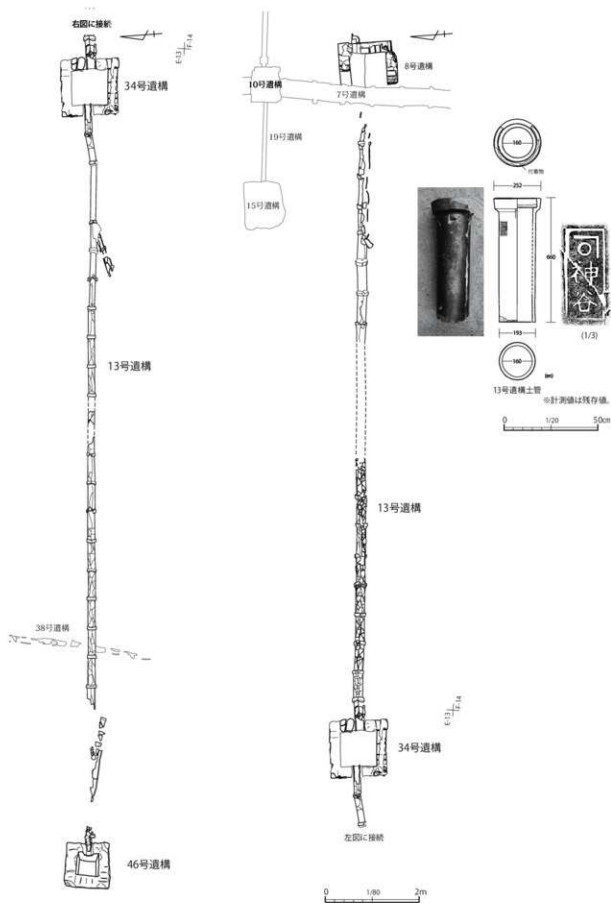
第22図 56・60号遺構 (1/60)



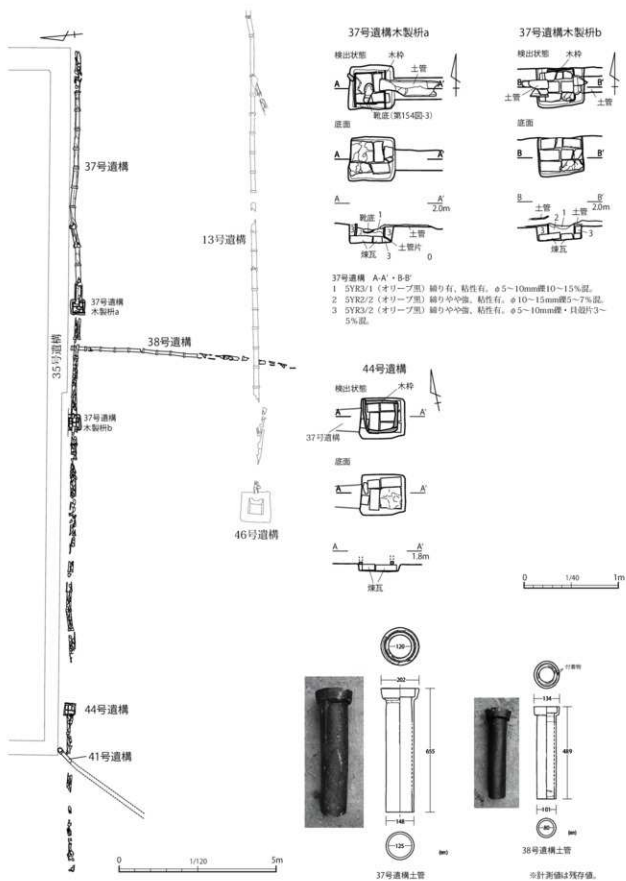
第23図 7・10・15・18・19号遺構 (1/80・1/20・1/60)



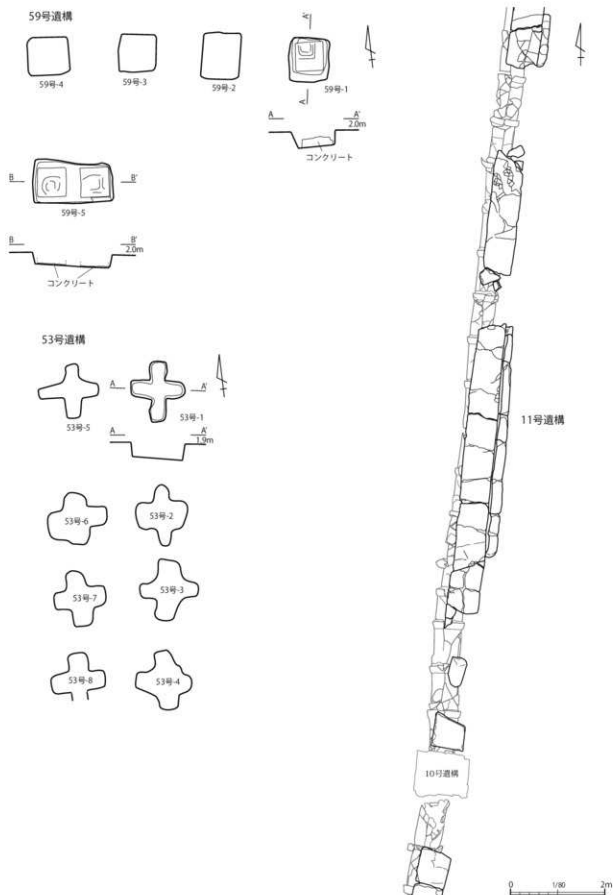
第24図 39・40・62・67・14・30・36・57号遺構 (1/60・1/40)



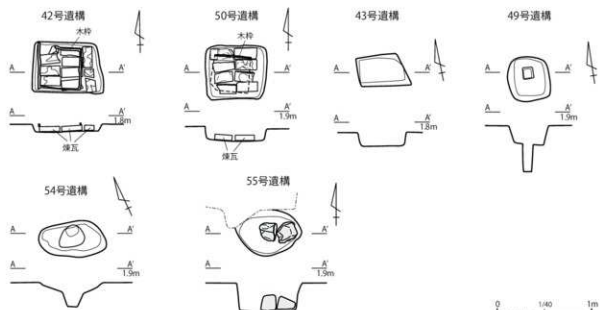
第25図 8・13・34・46号遺構 (1/60)



第26図 37・38・41・44号遺構 (1/120・1/40・1/20)



第27図 11・53・59 (1/80)



第 28 図 42・43・49・50・54・55 号遺構 (1/40)

第 4 表 煉瓦製建物基礎計測表

遺構名	棟別番号	図面番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	規模 (cm)				延長方向	測定時期	備考
							長軸	短軸	幅	深さ			
35号遺構	第14・20号	図面2-1号	B-1調査区	A-6-13	第2層	Ⅱ面	23.4	13.1	0.6	1.4	N 90°	古代	11月17日第一高等学校遺跡発掘
52号遺構	第21号	図面9	調査区	A-6-3	第3層	Ⅱ面	20.0	17.0	1.2	1.6	N 5° W	古代	11月17日第一高等学校遺跡発掘
54号遺構	第22号	図面9	調査区	C-4-6	第3層	Ⅱ面	0.0	8.5	0.0	0.7	N 50° E	古代	11月17日第一高等学校校内牧草園発掘調査

第 5 表 56号遺構内部土坑計測表

遺構名	棟別番号	図面番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模 (cm)		延長方向	平面形状	測定時期	備考	
								長軸	短軸					
56号遺構1	第22号	—	調査区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	39	37	9	N	古代		
56号遺構2	第22号	—	調査区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	50	30	10	N 30° W	古代		
56号遺構3	第22号	—	調査区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	67	40	15	N 5° E	方形	古代	上面に礎がある。
56号遺構4	第22号	—	調査区	D-4	第2層	Ⅱ面	土坑	32	31	18	N 4° E	楕円形	古代	
56号遺構5	第22号	—	調査区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	29	27	13	N 6° W	方形	古代	
56号遺構6	第22号	—	調査区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	34	28	13	N 41° E	楕円形	古代	
56号遺構7	第22号	—	調査区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	48	37	6	N 18° E	方形	古代	
56号遺構8	第22号	—	調査区	D-4	第2層	Ⅱ面	土坑	42	37	10	N 4° E	楕円形	古代	
56号遺構9	第22号	—	調査区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	35	33	21	N 4° E	楕円形	古代	
56号遺構10	第22号	—	調査区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	47	35	13	N 22° W	楕円形	古代	
56号遺構11	第22号	—	調査区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	64	50	24	N 22° E	楕円形	古代	
56号遺構12	第22号	—	調査区	C-5	第2層	Ⅱ面	土坑	60	41	18	N 44° E	楕円形	古代	
56号遺構13	第22号	—	調査区	C-5	第2層	Ⅱ面	土坑	37	34	9	N 83° E	方形	古代	
56号遺構14	第22号	—	調査区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	39	38	20	N	方形	古代	
56号遺構15	第22号	—	調査区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	36	32	19	N 16° E	楕円形	古代	
56号遺構16	第22号	—	調査区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	34	33	18	N 20° W	方形	古代	
56号遺構17	第22号	—	調査区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	39	31	25	N 13° W	楕円形	古代	
56号遺構18	第22号	—	調査区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	65	57	—	N 44° E	方形	古代	
56号遺構19	第22号	—	調査区	C-5	第2層	Ⅱ面	土坑	43	39	—	N 18° W	方形	古代	礎面に礎瓦が敷かれている。
56号遺構20	第22号	—	調査区	C-5	第2層	Ⅱ面	土坑	41	40	—	N 17° W	方形	古代	
56号遺構21	第22号	—	調査区	C-5	第2層	Ⅱ面	土坑	36	31	—	N	方形	古代	
56号遺構22	第22号	—	調査区	C-4	第2層	Ⅱ面	土坑	35	34	—	N	方形	古代	
56号遺構23	第22号	—	調査区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	34	31	—	N 74° E	方形	古代	
56号遺構24	第22号	—	調査区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	32	31	—	N 24° W	方形	古代	
56号遺構25	第22号	—	調査区	D-5	第2層	Ⅱ面	土坑	44	32	—	N 8° E	方形	古代	

第 6 表 近代コンクリート製構築物計測表

遺構名	棟別番号	図面番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	確認距離 (m)		延長方向	測定時期	備考
								幅	深さ			
39号遺構	第24号	図面9	調査区	A-6	第2・3層	Ⅱ面	コンクリート3軸土	08.0	02.8	N 82° W	近代	幅方向に切られる。7号遺構と52号遺構をつなぐ溝り跡と見られる。
11号遺構	第27号	図面12	1区	B-D-17	第2層	Ⅱ面	コンクリート緑石列	113.2	0.6	N 40° E	近代	7号遺構の上面にある。7号遺構を跨るように架べられているが、直線的な関係は不明。

第 7 表 鉄管・土管計測表

遺構名	棟別番号	図面番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	確認距離 (m)		延長方向	測定時期	備考
								幅	深さ			
19号遺構	第23号	—	1区	D-16・17	第2層	Ⅱ面	鉄管	3.6	8	N 85° W	近代	調査区縦1・7号遺構に切られる。15号遺構の跡に接続する。
7号遺構	第23号	図面10	1区	E-11・7	第2層	Ⅱ面	土管列	20.8	38	N 5° W	近代	土管系統1・短軸が直交している。
13号遺構	第25号	図面10	1区	E-9・17	第2層	Ⅱ面	土管列	29.2	26	N 82° W	近代	土管系統1・7号遺構に切られる。38号遺構を含む。
37号遺構	第26号	図面11	B-1調査区	D-8-12	第2・3層	Ⅱ面	土管列	25.4	17	N 83° W	近代	土管系統1。41号遺構に切られる。38号遺構を切る。35号遺構跡部面と直交している。本調査未検出。
38号遺構	第26号	図面12	調査区	D-10	第2層	Ⅱ面	土管列	7.7	11	N 10° E	近代	土管系統1。13・35・37号遺構に切られる。確認区間の35号遺構に存在可能性がある。
40号遺構	第24号	図面9	調査区	A-6	第2層	Ⅱ面	土管列	5.4	32	N 82° W	近代	土管系統1。39号遺構を含む。35号遺構基部の一部分が埋れており、幅が不明である。なお、本調査未検出。
41号遺構	第26号	図面12	調査区	D-7	第2層	Ⅱ面	土管列	0.6	11	N 51° E	近代	土管系統1。7号遺構の上面にある。35号遺構跡部面と直交する。
40号遺構	第22号	図面12	調査区	C-4-6	第3層	Ⅱ面	土管列	8.9	12	N 83° W	近代	土管系統1。63号遺構に切られる。36号遺構跡部面と直交する。
63号遺構	第21号	図面11	調査区	A-E-4	第3層	Ⅱ面	土管列	18.2	31	N 5° E	近代	土管系統1。40・50・60号遺構を切る。52号遺構跡部面と直交する。幅が不明である。本調査未検出。
65号遺構	第24号	—	調査区	E-4-6	第3層	Ⅱ面	土管列	1.7	12	N 80° W	近代	土管系統1。
67号遺構	第24号	図面10	調査区	C-E-6	第3層	Ⅱ面	土管列	11.3	12	N 50° W	近代	土管系統1。56号遺構に切られる。

第8表 コンクリート製・煉瓦製柵計測表

遺構名	検出番号	図面番号	調査区	グリッド	確認位置	確認面	種類	規模 (cm)			長軸方向	平面形状	備考			
								長軸	短軸	深さ						
18号遺構	第23回	—	1区	D-17	第2層	北面	コンクリート	60	—	—	11	N9° E	方形	現代	調査範囲外、7・10号遺構に切られる。	
8号遺構	第25回	—	1区	E-17	第2層	北面	煉瓦製	100	100	53	24	N	方形	古代	土質基礎、7号遺構に切られる。	
10号遺構	第25回	100	1区	D-17	第2層	北面	煉瓦製	74	63	35	20	N 6° E	方形	古代	7・18号遺構に切られる。後縁は深く掘立している。	
14号遺構	第24回	100	1区	E-13	第2層	北面	煉瓦製	84	94	26	28	N 5° E	方形	古代	土質基礎。	
15号遺構	第24回	100	1区	D-16	第2層	北面	煉瓦製	104	75	34	25	N 88° W	方形	古代	調査範囲外、7号遺構に切られる。西側に排水溝を持つ。	
20号遺構	—	—	1区	C-17	第2層	北面	煉瓦製	680	143	—	—	N 12° E	方形	古代	後縁は深く掘立している。	
30号遺構	第24回	100	1区	C-15	第2層	北面	煉瓦製	113	99	—	—	N 84° W	方形	古代	調査範囲外、上下で分離されており、東側に溝を掘り、建物基礎とみられるコンクリートが埋め込まれている。	
34号遺構	第25回	100	1区	E-13	第2層	北面	煉瓦製	120	116	10	24	N 1° E	方形	古代	土質基礎。	
35号遺構	第24回	100	1区	A-9	第2層	北面	煉瓦製	106	106	—	—	N 7° E	方形	古代	土質基礎。3号遺構内部にある。北向きに土質の被覆層あり。	
46号遺構	第25回	100	1区	E-9	第2層	北面	煉瓦製	98	92	32	27	N	方形	古代	土質基礎。	
57号遺構	第24回	—	1区	A-4	第3層	北面	煉瓦製	105	75	—	—	23	N 8° E	方形	古代	土質基礎。6号遺構に切られる。東向きに土質の被覆層あり。40号遺構と接続すると思われる。
58号遺構	第21回	—	1区	B-4	第3層	北面	煉瓦製	72	72	24	14	N 3° E	方形	古代	土質基礎。52号遺構の一部である。	
62号遺構	第24回	100	1区	E-6・7	第3層	北面	煉瓦製	117	112	23	24	N	方形	古代	土質基礎。北西方向に引き渡され、西方向に引き渡しが確認される。東向き、南向きにそれぞれ土質の被覆層あり。	

第9表 木製柵計測表

遺構名	検出番号	図面番号	調査区	グリッド	確認位置	確認面	種類	規模 (cm)			長軸方向	平面形状	備考	
								長軸	短軸	深さ				
37号遺構	第26回	100	1区	D-10	第2層	北面	木製	26	23	10	N 90° W	方形	古代	土質基礎。北側に埋込みをき、断面に木栓が2つで刺さっている。西側の断面が消失している。
37号遺構	第26回	100	1区	D-11	第2層	北面	木製	25	23	18	N 85° E	方形	古代	土質基礎。37号遺構木製柵と同様の構造。木製柵部分は消失している。
42号遺構	第26回	100	1区	A・7	第2層	北面	木製	60	44	8	N 88° W	方形	古代	53号遺構と接続すると思われる。
44号遺構	第26回	100	1区	D-7・8	第2層	北面	木製	42	32	14	N 75° E	方形	古代	土質基礎。37号遺構木製柵と同様の構造。北側の一部が欠われている。
50号遺構	第26回	100	1区	A-9	第2層	北面	木製	65	55	13	N 60° W	方形	古代	37号遺構木製柵と同様の構造。木製柵は正面のみが土に埋まっている。

第10表 土坑計測表

遺構名	検出番号	図面番号	調査区	グリッド	確認位置	確認面	種類	規模 (cm)			長軸方向	平面形状	備考		
								長軸	短軸	深さ					
43号遺構	第26回	100	1区	A-6・7	第2層	北面	土坑	53	30	15	N 99° W	方形	古代	遺構中の内周りに方形の埋込みがある。	
49号遺構	第26回	100	1区	A-9	第2層	北面	土坑	47	41	48	N 52° E	方形	古代	遺構中の内周りに方形の埋込みがある。	
53号遺構-1	第27回	100	1区	A-5	第3層	北面	土坑	134	132	108	38	N	十字形	古代	平面に十字の形状。コンクリートなどは埋め込まれていない。
53号遺構-2	第27回	100	1区	A・B-5	第3層	北面	土坑	128	100	—	—	N	十字形	古代	53号遺構-1と同様の遺構。
53号遺構-3	第27回	100	1区	B-4	第3層	北面	土坑	125	120	—	—	N	十字形	古代	53号遺構-1と同様の遺構。
53号遺構-4	第27回	100	1区	B-5	第3層	北面	土坑	128	92	—	—	N	十字形	古代	53号遺構-1と同様の遺構。
53号遺構-5	第27回	100	1区	A-4	第3層	北面	土坑	128	112	—	—	N	十字形	古代	53号遺構-1と同様の遺構。
53号遺構-6	第27回	100	1区	A・B-4	第3層	北面	土坑	128	112	—	—	N	十字形	古代	53号遺構-1と同様の遺構。
53号遺構-7	第27回	100	1区	B-4	第3層	北面	土坑	120	112	—	—	N	十字形	古代	53号遺構-1と同様の遺構。
53号遺構-8	第27回	100	1区	B-4	第3層	北面	土坑	116	110	—	—	N	十字形	古代	53号遺構-1と同様の遺構。
54号遺構	第26回	100	1区	A-5	第3層	北面	土坑	72	32	25	N 50° W	楕円形	古代	楕円形状に不完全な埋込みがある。	
55号遺構	第26回	100	1区	A-5	第3層	北面	土坑	69	41	30	N 80° W	楕円形	古代	楕円に人頭文の埋込みがある。	
59号遺構-1	第27回	100	1区	A-6・7	第3層	北面	土坑	84	84	40	N 5° E	方形	古代	楕円に方形のコンクリートが埋め込まれる。建物基礎。30号遺構の下層にある。	
59号遺構-2	第27回	100	1区	A-8	第3層	北面	土坑	80	80	—	—	N 6° E	方形	古代	59号遺構-1と同様の遺構。30号遺構の下層にある。
59号遺構-3	第27回	100	1区	A-6	第3層	北面	土坑	104	80	—	—	N 4° E	方形	古代	59号遺構-1と同様の遺構。30号遺構の下層にある。
59号遺構-4	第27回	100	1区	A-5	第3層	北面	土坑	96	80	—	—	N 87° W	方形	古代	59号遺構-1と同様の遺構。30号遺構の下層にある。
59号遺構-5	第27回	100	1区	B-5・6	第2層	北面	土坑	172	80	30	N 84° W	長方形	古代	楕円に方形のコンクリートが埋め込まれる。東西に溝で区切られる。建物基礎。	

第11表 86号遺構礎石計測表

遺構名	検出番号	図面番号	調査区	グリッド	確認位置	確認面	種類	規模 (cm)			長軸方向	備考		
								長軸	短軸	深さ				
86号遺構	—	—	—	—	—	—	礎石	79	60	—	—	N	古代	人頭文の遺構である。礎石に埋め込まれる。
86号遺構	—	—	—	—	—	—	礎石	82	41	—	—	N	古代	人頭文の遺構である。礎石に埋め込まれる。

2) III面の遺構

III面から検出された遺構は、板基礎1条、礎石1条、木製柵3基、木樋列5条、竹樋3条、溝1条、石積遺構1条、土留板列12条、中の島1基、井戸1基、土坑4基、木枠2基、瓦集中部1ヶ所である。検出した遺構のうち、石積遺構と中の島は1つの池を構成するものと考えられ、池遺構として報告した。また、池遺構内部に構築された土留板列10基、池遺構の覆土内にある瓦集中部、木樋、木枠遺構も、池遺構に伴うものとして、池遺構の項で報告している。また、池遺構の北西から、竹樋・木樋列と木製柵の組み合わせた遺構が検出された。組み合わせから3系統を確認し、系統ごとに報告している。

また、32・45号遺構は33号遺構北側の溝の覆土上面に構築された遺構である。後述のとおり、33号遺構北側の溝は自然堆積に近い形で埋没したものであり、33号遺構や第5層の形成時期とは異なる時期に作られたと推定される。一方で、池遺構は33号遺構北側の溝も切って形成されるため、33号遺構北側の溝は少なくとも池遺構形成までには埋没していたと考えられる。そのため、32・45号遺構は池遺構形成と同時期からそれ以降につくられた遺構と捉え、III面の検出とした。

■池遺構

調査区Ⅱ区からⅢ区にまたがって検出された。検出当初、調査地が35号遺構の胴木・横木や杭によって分断されており、個別に47・51号遺構の杭列や、61号遺構の間知石上面を検出したため、それぞれの遺構に個別の番号を付して調査を進めた。その後、池遺構の全面を検出し、61号遺構が周回する間知石列であること、61号遺構の内部の中央北側に93号遺構があり、48号遺構が93号遺構と47・61号遺構を繋ぐように設置されていることが判明し、一連の遺構であることがわかった。このため、本報告書では、外縁部にあたる61号遺構の内部から検出された一連の遺構を総じて「池遺構」と呼称し、池遺構が内包するそれぞれの遺構については遺構番号で呼んでいる。

【池遺構の構造】

池岸を周回する間知石の石積（61号遺構）と、池遺構の中央北側に設けられた中の島（93号遺構）がある。池として利用されていたころは、61号遺構の内側に水が張られ、93号遺構が浮かんでいるような光景であったのだろう。調査の結果、池遺構の造成は、まず海拔0m近辺まで掘削を行ったと考えられる。その際に33号遺構の石積を撤去し、95～98号遺構の井戸を壊している。本来は武家屋敷に伴う遺構も多数あったものと考えられるが、池の掘削のために失われたと考えられる。

掘削後、次いで池の底面に厚さ30～50cmほどの粘土層を設けている。池水の過剰な浸透や湧水を防いで水量を安定的かつ清浄を保つために、粘土層を設けたと考えられる。本報告書では、この底面の粘土層を「池遺構下層」と呼称し、遺物の報告もこの名称で行っている。池遺構下層は西がやや高く、東に向かって緩やかに傾斜している。

池遺構下層を設けるのと同時期に、間知石の石積による護岸が行われたようである。ただし、61号遺構の北辺には二重の石積みを検出した箇所や、石積の間に時期の異なる木樋を通した箇所があり、石積は適宜修正や改修を行っていたようである。また、93号遺構は池遺構下層を設けた直後に構築されたようである。93号遺構の基盤となる盛土が池遺構下層の直上に積まれていることが土層観察からわかる（第30図B-Bの24～29層）。池遺構が池として利用されたころは、61・93号遺構のみがあったと考えられる。

その後、何らかの理由で池遺構の幅を狭めるため、48・51号遺構の土留板列が設けられ、部分的に池を埋立てた。さらに池遺構を完全に埋立てるにあたり、47号遺構を設けて西半分を埋立て、次いで東半分を埋立てた。本報告書では、これら一連の作業にもなって池遺構内部に埋戻された土層を「池遺構上層」と呼称し、遺物の報告もこの名称で行っている。

61号遺構（第32～38図、第12表、図版16～18）西辺、北辺、東辺を検出し、南辺は調査範囲外である。検出した池遺構の外縁部の全てに間知石による石積遺構があった。使用された間知石は、33号遺構の間知石と同質の石材と考えられ、大きさも同様である。先述のとおり、池遺構は33号遺構を壊して造成されたことから、間知石を転用した可能性がある。間知石の前面は池の内部を向いており、池岸を護岸するための石積と考えられる。池遺構の外形は、北西がやや突き出ており、北辺や東辺は波打った形状であるため、A～Lに分割して図化を行った。各記号が表す位置は第32図上の図のとおりである。D-E間、I-J間はほぼ直角に折れていることから、A～Dが西辺、E～Iが北辺、J～Lが東辺と捉えることができる。

A～Cは西辺の中央から南側である。Aの南端は調査範囲外で、調査範囲の壁に近く、石積遺構の

方向を確認するとどまった。Aは北西-南東方向、Bは南北方向、Cは北西-南東方向に設置される。南端は緩やかな弧を描いて東へ向かっており、池の南西隅にあたる位置と考えられる。石積は最大で3段を確認した。使用されている間知石の大きさはほぼそろっており、整然と積まれていた印象である。石積の正面に細い杭が設けられ、石積を支えている。石積下層には胴木が1条あり、石積の沈み込みを防いでいたようである。胴木は、枝を払った径10～15cm程度の幹を使用しており、表面を焼いて防腐処理を施している。胴木同士には接手のような加工はなく、僅かに隙間を設けて設置されている。後述のいずれの地点でも、同様の木材が胴木に利用されていた。また、Cの胴木は北側に向けて緩やかに上がって設置されているため、石積自体も北に向かって緩やかに上がっている。石積の後背には、やや小さい間知石や拳大から人頭大の角礫が詰まっていた。裏込めと考えられる。

Dは、西辺の北側にあたる。石積遺構は南北方向に設置され、最大で3段を確認した。使用された間知石はほぼそろっており、整然と積まれているが、Dの中央付近では平たい間知石が横長に設置されており、その合間には76号遺構の木樋が通っている。76号遺構の周辺は拳大の礫で充填される。また、76号遺構より北側には80号遺構の木樋が通っている。木樋に損傷がないことから、石積を積み直して木樋を設置したものと考えられる。石積下層には胴木があり、胴木は1条であるが、2条となっている箇所もある。また、胴木と同じ高さにDの南端とCの北端を補強するように横木が渡されている。胴木の下には88号遺構の木樋が通っており、石積遺構の構築前に作られたものと考えられる。また、Dの南端にあたる箇所では、最上段の石が池の縁辺よりもやや南を向いて向いて積まれている。Dは木樋の設置の際に石積を積み直していたと考えられ、その際に異なる方向を向いたものと考えられる。そのため、Dは他の石積よりも後の時期に作られたものであり、池遺構の構築当初は異なる形状であったと推定される。

Eは、北辺の西端にあたる。調査範囲の壁に近く、石積遺構の方向を確認するとどまり、石積下層の確認はできなかった。石積遺構は東西方向に設置されている。石積遺構の平面形は、他所では緩やかな波状を呈するが、E-F間のみ弧が連なった形状である。Fから波状を呈するように延びる間知石も検出されており、調査範囲外に外縁の石積遺構が続いている可能性がある。

F・Gは、北辺の西側にあたり、石積遺構を二重に検出した。GはFの後背にあり、F以前に利用された石積と考えられる。石積遺構は北西-南東方向に設置され、Fで最大4段、Gで最大2段を検出したが、Fは、西側で石積がやや崩れている箇所があった。F・Gともに石積下層には2条の胴木があり、Fの胴木の下位には横木が1本設けられている。両者とも前面には密に杭が打ち込まれている。F・Gはともに石積が胴木よりも池遺構の内側にせり出して作られており、不安定な石積を支えるために密に杭を打ち込んだものと考えられる。

Hは、北辺中央にあたる。石積遺構は東西方向に設置され、最大で3段を確認した。西側はF・Gが重なる地点であるため石積は雑然としており、一部は崩れて前面の杭にかろうじて支えられていた。また、石積の最下段が東に向かって緩やかに上がりながら設置されている。石積下層西側には胴木があったが、Hの石積とは方向が異なるため、Gに伴うものと考えられる。石積の後背には砂を多く含むにぶい黄褐色土や黒褐色土が充填されており、裏込めの土層と考えられる。

Iは、北辺の中央から東端にあたる。石積遺構は緩やかに波打ちながら概ね北西-南東方向に設置されている。最大で3段を確認したが、3段あるのは東端部のみで、概ね2段で構築されている。

積まれた間知石は下段が小さく、上段が大きい傾向があり、特にIの中央で顕著である。石積遺構下層西側には胴木が1条あったが、東側では確認できなかった。石積の前面には細い杭が打ち込まれており、石積を支えていた。

J・Kは、東辺の中央から北側にあたる。Jは北東-南西方向、Kは南北方向に設置され、最大で3段を確認した。35号遺構の杭が打ち込まれているため、部分的に間知石が動き、原位置でないと考えられる。特にKでは間知石の前面がそろっておらず、池遺構の内面を向いていないものや、他の間知石と異なる方向を向いているのがみられ、これらは原位置を保っていない可能性が高い。石積の前面は細い杭によって支えられていたが、周辺には51号遺構の杭列があり、全ての杭が61号遺構に伴うものではない可能性がある。石積の後背には裏込めとして拳大から人頭大の角礫が詰まっている。

Lは、東辺南端にあたる。石積遺構は南北方向から北東-南西方向に湾曲しており、池遺構の南東隅にあたると思われる。石積は2段を検出し、上段の間知石が大きく、下段の間知石がやや小さい。石積は整然と積まれているが、一部間知石が抜き取られ、裏込めに使われた角礫が散乱している箇所があった。

93号遺構（第39・40図、第13表、図版18）池遺構の中央北寄りにある。調査の結果、93号遺構は上下2段階に分かれることがわかった。本報告書では「93号遺構上層・下層」と呼称して報告した。

93号遺構上層は、61・93号遺構をつなぐ土橋を伴う中の島である。93号遺構下層を土台に、黒褐色土を被せて中の島としている。この黒褐色土には小礫が多量に含まれ、池の水に洗われたためか、小礫が黒褐色土上面に露出している。特に93号遺構の北から東にかけて顕著である。その上に、オリブ黒色土を中心とした土層を盛り、61号遺構H付近と93号遺構北側をつなぐように土橋としている。土橋は93号遺構の外形から緩やかに細くなり61号遺構に接続している。土橋の上面は61号遺構よりもやや高く、東西方向の断面をみると、中心が最も高く、東西の裾に向かって緩やかに傾斜している。土橋の上面には瓦が多く出土しており、敷き詰められたようである。土橋の中心が水面より上にあり、通ることができたと考えられる。

93号遺構下層は円形に作られ、周囲に間知石の石積による護岸を持つ中の島であり、池遺構の造成当初の姿と考えられる。一部を35号遺構下層の杭列によって攪乱されており、南東部分の石積が崩れている。中の島は、まず池遺構下層の上面にオリブ黒色の粘土層を盛って基盤とし、盛土の外周に2段の石積遺構を設けている。使用された間知石は61号遺構に積まれたものと同質の石材を用いているが、やや小さい印象である。石積の前面は細い杭が密に打ち込まれ、石積を支えている。石積を設けた後、中の島上部に黒色土を充填して、中の島の上面としている。この中の島に渡るための橋は検出されず、中の島の上面や土橋の下層等にも橋を架けた痕跡はなかった。中の島が池の中でどのように使われていたかは不明である。

【池遺構内の土留板列・杭列】

池遺構の内部に土留板と杭によって構築された土留板列・杭列を検出した。池遺構の中央から東側にかけて設置されており、西側には51号遺構の端部が設置されているに過ぎない。遺構の先後関係から、51号遺構→47号遺構→48号遺構の順に設置されたと考えられる。

51号遺構（第30・42図、第14表）池遺構の北から東にかけて、曲がりながら設置されている。

大部分で杭のみを検出し、東側で土留板をともなっている。また、北西端では、土留板と角礫をともなっている。角礫は土留により堰き止められたものであろう。51号遺構の土留板は最大で2段検出した。土留板の西側に杭が打ち込まれており、埋立ては東から西へ行われ、池を狭めるためのものと考えられる。51号遺構の杭列のとおり池を狭めたと考え、池は北東に細長く突き出た部分を持つ形となる。この形状は明治17(1884)年の『東京図測量原図』(第7図左下)の池の形状とよく似ており、明治17年段階では51号遺構の範囲まで埋立てを行ったと考えられる。

47号遺構(第30・40図、第14表、図版18) 池遺構の南東で検出した。平面形は北側を弦とする弧状を呈する。検出範囲で3段の土留板を確認し、北側を杭で固定している。このため、南側からの埋立てを行うための土留板列と考えられ、池の南岸を狭めるような埋立てを行ったと考えられる。また、土留板の南側には製材や丸木材があった。土留板列に沿うものや、直交するものがあり、これらの木材は土留の補強であったと考えられる。

48号遺構(第30・39・41図、第14表、図版19・20) 池遺構中央の93号遺構の南北で検出した。北側で2条、南側で6条を確認した。北側のものは、東から北1・2、南側のものは、東から南0～5の番号を付している。

北1・2は、93号遺構と61号遺構北岸を繋ぐように設置されている。杭列は見られず、土留板が土圧によって東へ押し倒されている様子が確認された。南0は93号遺構と47号遺構を繋ぐように設置されていたようである。残存状況が悪く、土層確認と僅かに残った杭と土留板から確認した。土圧等により押し流されたものと考えられる。南1は南0の西側にある。北端は93号遺構と接し、南端は調査範囲外である。最大で3段の土留板を検出し、土留板列の東側を杭で固定していた。南2は南3の一部を繋ぐように設置されている。最大で2段の土留板を検出し、土留板列の東側を杭で固定していた。また、南2と南1の間の埋立て土の下面に、コモ状繊維の土嚢を検出した。埋立て前に設置されたものと考えられる。また、南2と南1の間の南側には、東西方向の土留板列を検出した。土留板の北側を杭で支えているため、47号遺構と同様の機能を持っていると考えられる。南3は南1・2の西側にある。北端は93号遺構に接し、南端は調査範囲外である。最大で3段の土留板を検出し、土留板列の東側を杭で固定していた。南4は南3の西側にある。北端は93号遺構に接し、南端は調査範囲外である。最大で3段の土留板を検出したほか、垂直方向に打ち込まれた土留板も検出した。杭は概ね土留板列の西側に設置され、垂直方向の土留板は水平方向の土留板の東側に打ち込まれていた。また、この垂直方向の土留板のさらに西側から補強するように、水平方向の土留板3段と杭が設置されている。土留板が崩れ、その部分を補強したものと推定される。南5は南4の西側にある。北端は93号遺構に接続し、南端は調査範囲外である。下層は細い竹材を用いた柵でつくられており、竹材の東側を杭で固定している。上層は土留板に変化している。さらに杭の東側に土留板を垂直方向に打ち込んで、補強している。おそらく、当初柵にて土留を行ったが、土圧に負けてしまったため、土留板で補強したものと推測される。

48号遺構の各土留板列を見ると、概ね西からの土圧に耐えるように土留板列と杭が設置されている。そのため、池遺構の埋立ては西から東へ行ったものと考えられる。土留の方法を見ると、西にある南5では、柵と土留板を併用しているものの、強度が足りなかったためか垂直方向に土留板を打ち込んで補強している。また、南4でも土留板列の崩れたような部分があり、埋立ての初期段階に

おける土圧が強かったことがわかる。あるいは、土圧ではなく、西から東へ追い込まれた池の水の水圧による崩壊の可能性もある。南2も南3の補強と考えられ、南2と南1の間にコモ状繊維による土嚢が埋め戻されていることも、土圧ないし水圧に対するための補強であったと考えられる。その結果、南0～5の6段階に及ぶ土留板列が形成されたと考えられる。

【池遺構上層の遺構】

91号遺構（第43図、第15表、図版20）池遺構の北西側にあり、池遺構上層中にある瓦集中部である。瓦は池遺構の西辺付近に多く、池の中心方向にかけて少なくなる。含まれる瓦の大部分は平瓦片であり、被熱していた。また、瓦の含まれる土層も焼土を多く含んでいる。池遺構の西にある第3層の盛土の側面から池遺構上層に流れ込んでおり、91号遺構の上層には池遺構上層、第2層の順に盛土が行われている。つまり、第3層の盛土造成後にも継続して池遺構の埋立てが行われていたということになり、第3層は池遺構を完全に埋立てる以前から造成された盛土であることがわかる。

73号遺構（第44図、第17表）Ⅱ・Ⅲ区の境界線の南側で検出した。池遺構上層にあり、南側は調査範囲外へ続いている。底板と側板を検出したが、側板は削平されており、南側の一部で残存している。底板は2枚確認し、南北に連なっていた。底板は特に接手加工等はされておらず、並べられているに過ぎない。形状から木樋と考えられるが、本遺跡から検出したいづれの木樋よりもかなり太い。また接続する遺構も不明であるため、機能等は不明である。

90号遺構（第44図、第23表、図版20）池遺構の中央西寄りの上層内にある。底板と側板を組み合わせ、巻頭釘で留めた箱状の木枠である。内部に人頭大の礫が1つある。木枠の周辺に掘方はない。池遺構が機能していた時期に、人頭大の礫を重石として沈められたものと推定される。

■池遺構の導水施設

池遺構の北西、61号遺構Dにあたる護岸に木樋が3条組み込まれ、それらの端部は池遺構の内部に突き出していた。これらの木樋は池遺構の外部にあたる西側から続いており、調査の結果、木樋・竹樋・木製枘を組み合わせた遺構であることがわかった。これらを池遺構に水を流し込むため、あるいは池から水を取水するための施設であったと推定し、導水施設として報告する。

池遺構の導水施設は3系統確認された。本報告では、新しいものから順に、導水系統1～3と分けて記述する。後述の66号遺構も導水施設の一部であった可能性があるが、直接の接続が見られなかったため、分けて報告している。なお、各遺構出土の木樋について、樹種同定ならびに年輪年代学的検討を依頼し、IVにご寄稿いただいた。

【導水系統1】

木樋1条（80号遺構）、竹樋2条（78・79号遺構）、木製枘1基（75号遺構）からなる。78～80号遺構は全て75号遺構に接続する。78号遺構が77号遺構の上層に通っていることから、導水系統2よりも新しいものである。

80号遺構（第45・46図、第17表、図版21）西端は75号遺構に連結する。東端は61号遺構の石積に組み込まれ、胴木に接して設置されている。ほぼ水平に設置されており、木樋内部には砂を多量に含む粘土質土が詰まっていた。止水の栓をともなわないため、池遺構の廃絶時まで機能していたものと考えられる。使用した木樋の蓋は一枚蓋であり、胴は一本の木材をくりぬいたものである。蓋と胴は釘で留められている。釘は細身で長身の巻頭釘が主体だが、犬釘もある。75号遺構に差し込

んで連結するため、連結孔に合わせて少し削っている。また、61号遺構側も、石積に合わせて削られている。

78号遺構(第45図、第18表) 南北に設置された竹樋で、77号遺構の上位にある。腐敗しており、遺存状態は悪い。北端は75号遺構の側板に連結孔を設け、差し込んで連結している。南側には木製継手があり、継手に差し込まれた状態で検出した。継手より南側は検出できなかった。

79号遺構(第45図、第18表) 東西に設置された竹樋である。腐敗しており、遺存状態は悪い。東端は75号遺構側板に連結孔を設け、差し込んで連結している。西端は検出できなかった。なお、79号遺構を西に延伸した先に66号遺構がある。66号遺構の側面には孔が穿たれていたことから、79号遺構が66号遺構に接続していた可能性がある。

75号遺構(第45図、第19表、図版21) 平面方形の木製枡である。数枚の板材を連結した底板の上に、側板を乗せ、外側から釘留めしている。側板は上下2段を確認し、上段の上端部は削平のためか削られていた。また、75号遺構の外側に崩落した側板と考えられる板材もあり、さらに上段まで側板があった可能性がある。西側面に79号遺構との連結孔、南側面に78号遺構との連結孔、東側面に80号遺構との連結孔がある。西と南の連結孔はやや高く、東の連結孔は底面に近い高さにあるため、75号遺構は78・79号遺構から集めた水を、80号遺構へ流す機能があったと考えられる。

【導水系統2】

木樋列 2条(64b・76号遺構)、木製枡1基(77号遺構)からなる。77号遺構が78号遺構に切られることから、導水系統1よりも前に作られたのものであると考えられる。導水系統3は導水系統2の下位にあるため、導水系統2が新しいものである。

64号遺構(第44図、第17・18表、図版20) 64号遺構は竹樋(64a号遺構)と木樋(64b号遺構)からなる。当初同一の遺構と考えたが、掘方の観察により、64b号遺構の掘方を掘削して64a号遺構を設置していることがわかった。両者を別の遺構と分けて報告する。

64a号遺構は、竹樋とそれに接続する木製継手を検出した。竹樋の東端は木製継手に接続し、西端は調査範囲外まで延びている。また、52号遺構の下層でも竹樋の痕跡を検出したため、継手から東へ向けて竹樋が延びていたものと考えられる。

64b号遺構は、64a号遺構の下位で検出した木樋である。西端は64a号遺構付近で途切れている。東端は52号遺構で壊されているものの、延伸先には76号遺構があるため、両者は接続していたものと考えられる。なお、64b号遺構周辺は第1層の攪乱や52号遺構の建物基礎があり、当初64b号遺構も攪乱に含まれると同一の木材と認識して掘削してしまったため、中央部分の木樋や、木樋の蓋は失われている。接続すると考えられる76号遺構も組み合わせの木樋であり、64b号遺構の木樋も組み合わせであったと考えられる。

76号遺構(第45図、第17表、図版21) 77号遺構の東西にあり、どちらも77号遺構に連結する。西側を76号遺構a、東側を76号遺構bとして報告する。76号遺構aは西端を52号遺構によって失っているが、延伸先に64b号遺構があるため、接続していたものと考えられる。東端は77号遺構に連結する。木樋の蓋は腐敗して崩れており、部分的な検出となった。胴は組み合わせである。77号遺構との連結箇所、特に加工は見られなかった。内部には、砂と灰色粘土ブロックを含む黒土色が詰まっていた。

76号遺構bの西端は77号遺構に連結し、連結箇所には木製の栓が設けられていた。栓は角状で76号遺構bに合うように加工されている。東端は61号遺構の石組に組み込まれ、池遺構に接続する。木樋の蓋は損傷を受けているうえ、全体的に腐敗しており、細かく割れていた。胴は組み合わせである。東端、西端ともに接続のための加工は見られなかった。また、内部には76号遺構aと同様に砂と灰色粘土ブロックを含む黒土が詰まっていた。76号遺構a・bはほぼ水平に設置されているが、僅かに東に向かって傾斜している。西から東へ、池遺構方向に向かって導水していたと想定される。77号遺構(第45図、第17表、図版21) 平面方形の枡である。底板の上に側板を乗せ、外側から釘留めしている。上半は壊されており、78号遺構が通っていたことから、導水系統1を設置した際に壊されたと考えられる。東西で76号遺構a・bと連結する。両者は底板に乗るように連結されており、高さの差はない。

【導水系統3】

木樋列1条(88号遺構)と木製枡1基(92号遺構)からなる。導水系統2の下位にあり、導水系統3の後に導水系統2が設置されている。

88号遺構(第47～51図、第17表、図版21～22) 92号遺構の東西に検出した木樋と木製継手の組み合わせた遺構である。木樋は4本検出し、a～dの記号を振った。88号遺構dと継手は52号遺構の杭の合間で検出したが、杭による損傷はなかった。西からa→d→木製継手→b→92号遺構→cの順に接続しており、継手から西ではやや北に折れて木樋が設置されている。また、88号遺構a・dは、33号遺構の裏込めを掘り込み、裏込めに混入する割栗石を残して木樋の支えとして設置している。52号遺構以東では33号遺構の石積遺構が撤去されており、埋立て土中に88号遺構b・cと92号遺構が設置されている。

88号遺構aの西端は調査範囲外、東端は88号遺構dと連結している。木樋の東端は凸状に加工され、88号遺構dの西端に連結する。木樋の蓋は一枚蓋、胴は組み合わせである。組み合わせられた板は、底板が8cm、側板が6cmと厚手であり、くりぬきの木樋に見まがうほどである。

88号遺構dの西端は凹状に加工され、88号遺構aの東端と連結する。東端は凸状に加工され、木製継手と連結する。蓋は一枚蓋で、手斧による加工痕が著しい。胴は組み合わせである。88号遺構aと同様に厚手の板材を使用している。木製継手の西端は凹状に加工され、88号遺構dの東端と連結する。東端は凸状に加工され、88号遺構bと連結する。

88号遺構bの西端は凹状に加工され、木製継手と連結する。東端は凸状に加工され、92号遺構に連結する。88号遺構a・dの東端が台形の凸状に加工されているのに対し、88号遺構bの東端は長方形の凸状に加工されており、92号遺構の連結部の形状に合わせていると考えられる。蓋は一枚蓋で、胴はくりぬきである。胴に使用した材は四つ割り材とみられる。

88号遺構cの西端は92号遺構に連結するが、特に加工は見られない。東端は61号遺構の胴木下部から池遺構内部に向けて突き出ている。61号遺構の構築より前に設置されたものと考えられる。また、東端は削られて、断面円形となっている。さらに円柱状の栓が設置され、木樋の上から金輪を嵌めて固定している。金輪を嵌める部分は一段掘り込まれ、金輪が外れないようになっている。蓋は一枚蓋で、胴はくりぬきである。88号遺構bと同様に四つ割り材が使用されている。

92号遺構(第47・48図、第19表、図版21～22) 平面方形の木製枡である。底板に側板を乗せ

て外側から釘留めしている。釘は細身で長大であり、先端部の鋭い巻頭釘である。西側面には方形の孔を設けて、88号遺構b東端が連結する。東側面にも方形の孔を設けて88号遺構cが接続する。88号遺構bの連結孔がやや高く、88号遺構cの連結孔はやや低い位置に設けられている。底面もやや東に傾いていることから、88号遺構bから88号遺構cの方向へ導水したものと考えられる。また、覆土からは側板の一部とみられる炭化材や、金属製の網（第150図110）が出土している。網は桁内部に設置された可能性が考えられる。

■土留板列

池遺構北西に接続する導水施設の調査を行ったところ、導水施設と並行して土留板列を2条検出した。33号遺構前面の土留板列とほぼ同じ位置で検出したため、当初33号遺構が導水施設の下層にあるものと考えた。しかし、周囲を掘削しても石積遺構はなく、別の遺構であると判断した。

81号遺構（第52図、第16表、図版22）Ⅲ区北側で検出した。西端は52号遺構の杭により失われ、東側は池遺構の底面まで続き、61号遺構と接するあたりまで検出した。土留板は最大で2段検出し、土留板列の北側に杭が打ち込まれていた。81号遺構の下層には、33号遺構の土留板列を支えるためのアンカー状木製品が残置されていたものの、石積遺構の間知石や裏込め、胴木、胴木支えは遺存せず、痕跡も見られなかった。つまり、33号遺構に関連したものは意図的に撤去されたと考えられる。94号遺構（第52図、第16表、図版22）81号の北側に並行する土留板列である。西端は52号遺構の杭により失われ、東端は池遺構底面まで検出した。土留板は1段検出し、土留板列に伴う杭はなかった。

81・94号遺構はともに、61号遺構Dの下位から池遺構の底面まで続いている。池遺構北西部を改修に際して、61号遺構Dの周辺の石積を一度解体し、33号遺構を胴木まで撤去した後、81・94号遺構を設置して土留めを行いながら埋立てを行ったものと考えられる。

76・80・88号遺構の木樋は、81・94号遺構によって埋め戻された土層を掘り込んで設けられている。81・94号遺構の土層（第52図C-C'）をみると、埋立て土は81・94号遺構を境にして変化している。各木樋は81号遺構より南側に設けられており、81号遺構以南の1～5層は木樋の設置に伴う盛土層と考えられる。

94号遺構は81号遺構以北の盛土の中にある。81号遺構の杭が北側に設置されていることから、埋立ては南から行われたと考えられる。まず81号遺構以南を埋立て、次いで、81号遺構以北を埋立てたのだろう。最初に18～20層を埋立てた後、94号遺構を設置し、13～17層を順次埋め戻したと考えられる。その後、10～12層を埋立てて81号遺構以北の埋立てを完了した。先述のとおり、81号遺構以南は76・80・88号遺構の設置のために再度掘削され、5層より上層に木樋が設置されている。6層上面は水平であり、また、6層の立ち上がりを超えて水平面が続いている。これは88号遺構の設置前に一度削平して5層の盛土で整地したと考えられる。そうであれば、6～9層は33号遺構撤去直後に埋立てた土層という可能性がある。また、5層上面も水平であり、3層の盛土を行った際にも削平があったのかもしれない。76・80・88号遺構の設置に伴って順序立てて盛土や整地が行われていたと考えられる。

これら1～5層の盛土は、基本土層の第4層を形成する盛土である。つまり、第4層は導水系統1～3の設置に伴って設けられた盛土であると考えられる。

■その他の遺構

【板基礎列】

32号遺構（第53図、第20表、図版22～23）Ⅰ区北側の33号遺構の覆土上面に構築された遺構である。方形の板が東西方向に一定間隔を隔てて並べられており、上面のレベルもほぼそろっているため、一連の板基礎列であると考えられる。使用されている基礎板は、概ね、長軸40～50cm、短軸30～40cm、厚さ5～15cmの範囲に入るが、32号遺構-4のみ長軸60cmとやや大きい。なお、32号遺構-8は基礎板が取り除かれ、基礎板の痕跡のみ検出した。また、32号遺構-6は確認面以下に沈みこんでおり、原位置から動いている可能性がある。基礎板の下部には径15～20cmの杭があり、基礎板と杭は合釘で固定している。基礎板の下層はそれぞれ構造が異なり、32号遺構-1・4は基礎板の下部に掘方を持ち、そのほかのものは杭の上に基礎板が乗せられているだけである。杭は調査範囲の北壁際であり、杭を抜き取ることはできなかった。32号遺構-1・4の掘方は、平面は隅丸方形を呈し、基礎板の下層は径5～8cmの小礫や貝片を含んだ土層で埋められている。各基礎板間の芯々間の距離は、32号遺構-1・2間が2m、32号遺構-2・3間が0.8m、32号遺構-3・8間が2m、32号遺構-8・4間が2.2m、32号遺構-4・5間が4.5m、32号遺構-5・6間が6m、32号遺構-6・7間が1.9mを測る。やや異なる間隔もあるが、32号遺構-1・2間、32号遺構-3・8間、32号遺構-6・7間は概ね約2m間隔であり、京間を採用したものと推測される。これに従えば、32号遺構-5・6間が6mは3間となるだろう。一方で、32号遺構-4・5間は京間では2間と4分の1となり、江戸間とすれば2間半となる。32号遺構-2・3間も京間の半間とするよりも、江戸間の半間の方が近いであろう。32号遺構-8・4間は京間、江戸間のどちらでもやや広い。全体に、どちらの尺度を採用したか判然としない。また、32号遺構-1の掘方からガラス製品の破片が出土している。小破片であり未報告だが、近代に属するものと考えられ、本遺構は近代の遺構と考えられる。

【礎石列】

45号遺構（第53図、第21表、図版23）32号遺構の南側にあり、同様に33号遺構の覆土上面に構築された遺構である。2個体の人頭大の礫が並んでおり、礫は長径40cm前後のほぼ同じ大きさのものを使用している。礫の下部には掘方があり、瓦片や小礫が詰まっていた。礫の芯々間は1.8mである。こちらは江戸間を採用したと考えられる。人頭大の礫は他に見られず、周囲に礫を抜き取った痕跡はないため、この2個体のみと考えられる。32号遺構と関係する遺構である可能性もあるが、不明である。

【井戸】

66号遺構（第54図、第22表、図版23）Ⅲ区北西隅にあり、33号遺構の間知石護岸の一部を取り除いて設置されている。底板の下位には33号遺構の間知石護岸の最下段が残る。後世の攪乱の影響を受けて出土状況は良くないものの、側板と底板、掘方を確認した。確認した側板は1段であり、底板は北側の一部で消失していたものの、多くを検出した。溜井であったと考えられる。また、破損した側板の端部には円形の穴があり、64号遺構aや79号遺構などの竹樋と接続していた可能性がある。このため、先述の池遺構に関連する導水施設の一部であった可能性も考えられる。

【箱状木枠】

82号遺構（第54図、第23表、図版24）Ⅲ区中央で検出した。確認面とした第4層上面よりも少

し高い位置にあり、さらに上位から掘り込んだ掘方が存在した可能性もあるが、調査では確認できなかった。検出した際には周囲に多くの焼土が散っており、箱状の木枠の内部には焼土・炭化物が多く含まれており、上層ほど焼土や炭化物は多い。底面付近には平瓦片が幾重にも重なって出土した。平瓦片の接合率は高く、完形に復元できるものもいくつか見られ、完形の平瓦が敷き詰められている様であった。また、下層の瓦には被熱の痕跡は少ないが、上層の瓦には顕著な被熱痕がみられた。木枠は巻頭釘留めで、東辺側板の内側には焼けた痕跡が見られた。また、周囲を取り囲むように、5本の杭を検出した。箱状木枠との関連は不明であるが、82号遺構に伴う可能性もあるので、図中に示した。

本遺構は、箱状木枠の中に焼土、炭化物、瓦などを投棄した廃棄土坑と考えられる。しかし、木枠の東側内面には焼けた形跡があり、その付近には焼失が固まって投棄されていた。焼土の中に投棄された瓦は被熱し赤褐色に変色していた。木枠や瓦が被熱するということは、高温を保ったままの焼土を投棄したか、木枠内で火が熾ったということである。一方で、底面直上の土層には焼土の混入が少なく、その上層の瓦片は被熱していない。つまり、82号遺構は火炉付近で焼土等をそのまま投棄するための遺構か、内部で火を扱うために設けられた遺構であった可能性が考えられる。瓦片や底面付近の土層は木枠底面を火から保護する目的であったと推測される。しかし、恒常的に火を扱う施設であれば底面同様に側面も保護していたと考えられるため、82号遺構は火炉付近で焼土等をそのまま投棄するための遺構であったと推測される。

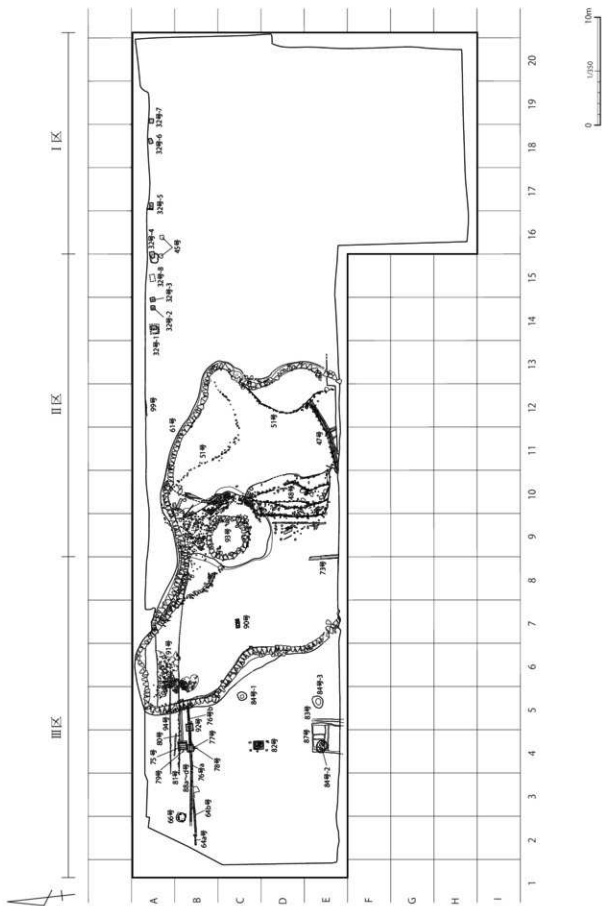
【溝】

83号遺構（第55図、第24表、図版24）Ⅲ区南側で検出した。56号遺構南辺の横木・胴木と調査範囲の南壁の間で検出したものの、56号遺構の内側へは延びていないため、北端は56号遺構の杭や横木・胴木の設置によって失われたものと考えられる。深さ40cmほどの溝で、覆土には二枚貝の破片が充填されていた。貝種はアサリが目立つ。貝片は溝の範囲を超えて、一部で溝の西側に広がっている。他の遺構との関連が考えにくく、遺構の性格は不明である。

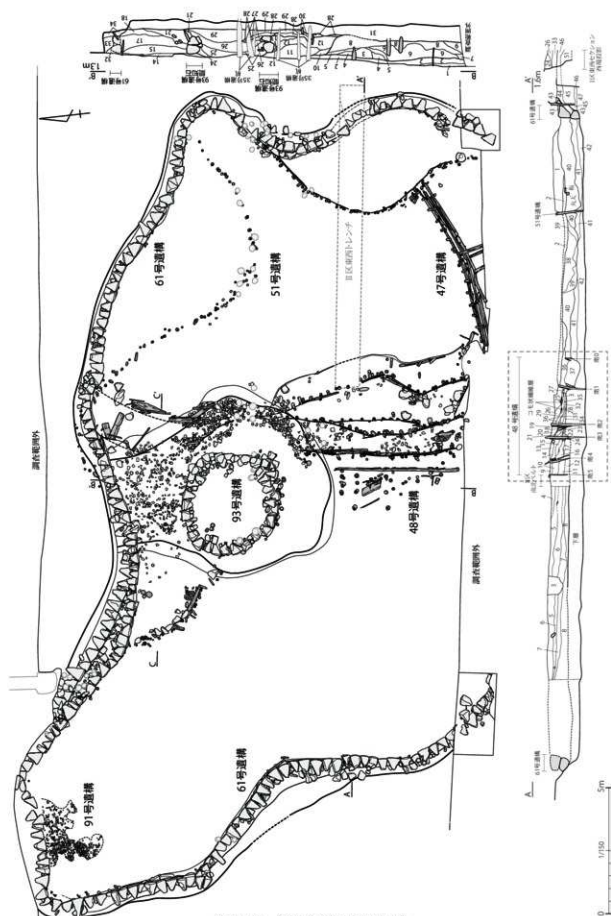
【土坑】

84号遺構（第55図、第25表、図版24）Ⅲ区南側で検出した。87号遺構の覆土上面に構築される。同様の形状の浅い円形土坑3基を検出し、方形を呈するように並ぶことから一連の土坑とした。各土坑の芯々間は、84号遺構-1・3間は7.2m、84号遺構-2・3間は4.2mを測る。84号遺構-1・3は立ち上がりの緩やかな土坑で、出土遺物はない。84号遺構-2は他の2基に比べて鋭角に立ち上がり、土坑内に礎石と考えられる角礫が充填されていた。建物基礎と推測され、84号遺構-2に充填された角礫は礎石であると考えられる。

87号遺構（第56図、第25表、図版24）Ⅲ区南側の調査範囲の壁際で検出したため、南側は調査範囲外である。83号遺構に隣接し、84号遺構は87号遺構を掘り込んで構築される。検出範囲の東西軸で2.7m、深さ1.7mを測り、第2次調査で検出した土坑の中ではもっとも大規模なものである。壁際から段階的に掘り下げて遺構を確認した。87号遺構は第4面から掘り下げられ、自然堆積層まで掘り込まれていた。覆土中には遺物を多く含み、特に小礫、貝片、瓦片のほか、細かく砕いた木片を多く含んでいた。廃棄土坑と推測される。



第 29 图 III 面遺構全体图 (1/350)



第30図 池遺構全体図 (1/150)

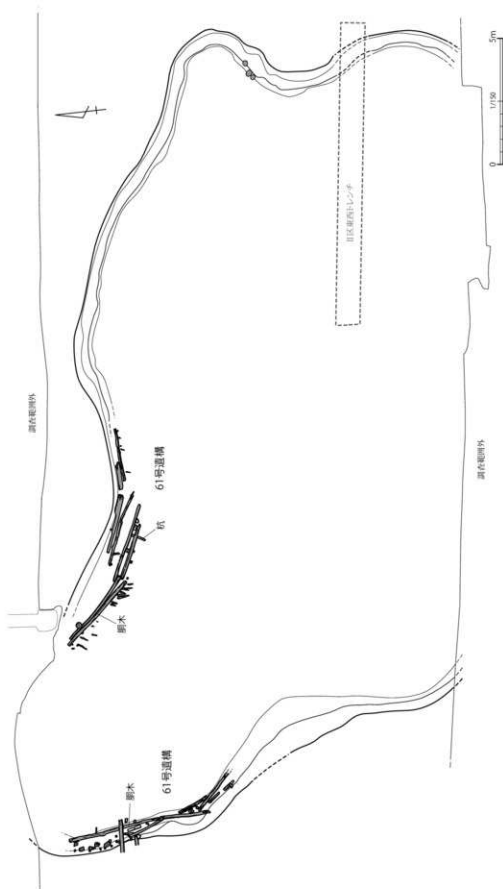
第30組A-A'

- 1 7.5YR3/2 (黒褐色) 細り強、粘性やや強。小礫・貝片・木片混。遺物(瓦)多。粘土質土。
- 2 7.5YR3/2 (黒褐色) 細り弱、粘性弱。木片・薄板片・遺物・葉粒(植物片)多。
- 3 空層
- 4 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。焼土粒・炭化物粒混。含水粘土層。
- 5 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性やや強。φ30mm焼土・貝片・遺物混。φ30mm青灰色粘土ブロックを主体とし、僅かに砂混じる。
- 6 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。小礫・瓦片・遺物多。φ50~80mm青灰色粘土ブロックを主体とし青灰色砂混じり土が入る。
- 7 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。φ10~20mm青灰色粘土ブロック混。φ2mm炭化物粒5%混。φ10mm以下焼土粒・小礫・貝片・木片・遺物(瓦)混。横たえ瓦片有。砂混じり粘土層。やや褐色がかる。
- 8 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強。粘性やや弱。φ30mm以下炭化物粒。小礫混。7層に近似するが、より黒色がかかり、粒度が僅かに大きい。僅かに含水す。
- 9 7.5Y2/1 (黒色) 細り強。粘性やや強。φ5~10mm焼土粒5%混。小礫混。粘土層。
- 10 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。φ8mm焼土粒・φ5mm炭化物粒混。貝片混。粘土層。やや褐色がかる。
- 11 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。φ10~30mm焼土粒混。小礫・瓦片・貝片・木片混。砂混じり粘土層。含水が多い。
- 12 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。φ3~5mm焼土粒・遺物混。粘土層。含水部が少ない。
- 13 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性やや強。φ10~30mm横たえ瓦片・小礫・遺物・木片多。やや褐色がかる。砂混じり粘土層。
- 14 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。貝片混。含水のある粘土ブロック層。
- 15 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強。粘性やや強。14層類似だがより細っている。粘土ブロック層。
- 16 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性やや強。貝片混。14層類似だがやや褐色がかる。粘土ブロック層。
- 17 3.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性やや強。瓦片・木片・薄板片混。粘土質土。
- 18 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強。粘性弱。φ3~10mm焼土粒・φ2mm炭化物粒10%混。貝片・瓦・遺物多。砂質土層。
- 19 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強。粘性やや弱。2層類似。砂混じる。
- 20 7.5Y2/2 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性やや強。19層類似だが砂粒なし。
- 21 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。φ10・20層類似。
- 22 10Y2/1 (黒色) 細りやや弱。粘性やや強。φ3~5mm炭化物粒3%。含水のある粘土質土。
- 23 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性やや強。小礫多。砂混じり粘土層。粒度大きい。
- 24 10Y2/1 (黒色) 細りやや強。粘性強。含水のある粘土層。
- 25 7.5Y2/1 (黒色) 細り弱。粘性強。瓦・木片遺物多。ややオリーブ色がかる。粘土層。
- 26 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り弱。粘性強。貝片・木片・瓦・遺物多。粘土層。アラカシ織網による土のロウの編みかけが下層にみられる。
- 27 7.5Y2/1 (黒色) 細り強。粘性強。やや青灰色がかる。瓦を多く含む。粘土層。
- 28 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。φ5mm焼土粒混。小礫混。砂質粘土層。
- 29 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。φ5~10mm青灰色粘土ブロックφ30~50%混。小礫混。28層より砂粒多い。砂混じり粘土層。
- 30 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。砂・土コ炭混雜多。含水のある粘土層。粒やや小細か。
- 31 7.5Y2/1 (黒色) 細りやや弱。粘性やや強。やや灰色がかる。瓦・土コ炭混雜・小礫混。含水のある粘土層。やや褐色がかる。
- 32 7.5Y2/2 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性やや強。φ1~3mm焼土粒混。砂混じり粘土層。
- 33 7.5Y2/2 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。砂混じり粘土層。砂粒の多い部分と少ない部分が見られ。
- 34 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強。粘性強。貝片少。粘土層。やや褐色がかる。
- 35 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強。粘性やや強。砂混じり粘土層。やや褐色がかる。
- 36 7.5YR3/2 (黒褐色) 細りやや強。粘性弱。遺物(瓦・木片)多。2層類似。
- 37 7.5YR3/2 (黒褐色) 細りやや弱。粘性やや弱。粘土層(貝片・木片)多。
- 38 7.5YR3/2 (黒褐色) 細りやや強。粘性やや強。遺物(貝片・木片・木炭・植物片・瓦)多。
- 39 7.5YR3/2 (黒褐色) 細りやや強。粘性やや強。遺物混。粘土層。
- 40 7.5YR3/2 (黒褐色) 細りやや強。粘性弱。遺物(貝片・瓦・木片)層上に多。
- 41 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強。粘性強。植物片僅か。φ3~5mm炭化物粒5~7%混。粘土層。

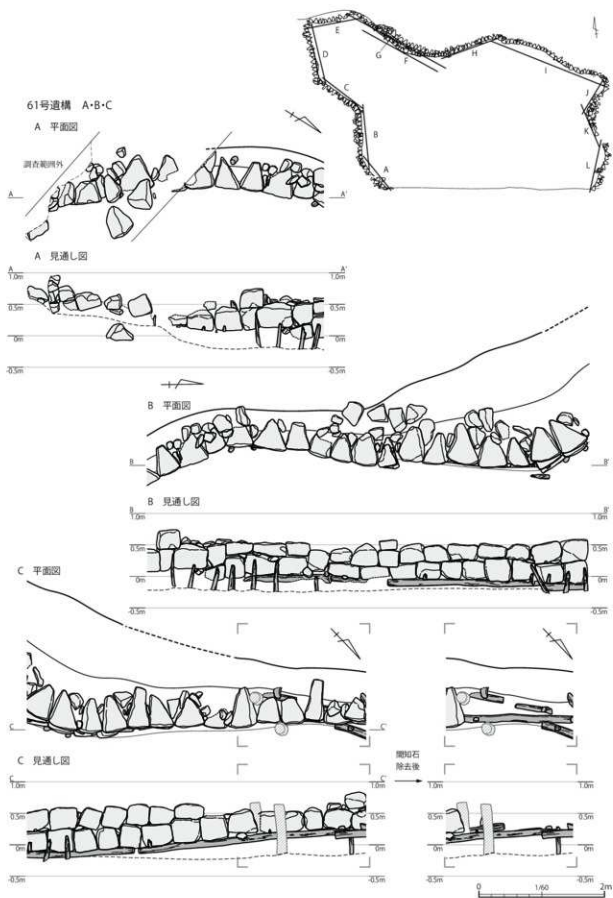
- 42 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強。粘性強。粘土層。φ50mm程度のやや褐色がかった粘土ブロックを混雑。
- 43 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。粘土層。石積遺構層上。
- 44 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強。粘性強。粘土層。やや褐色がかる。
- 45 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強。粘性強。φ1~3mm炭化物粒3~5%混。粘土層。ややオリーブ色がかる。緑褐色の土色有る。
- 46 7.5Y2/1 (黒色) 細り強。粘性強。砂粒混。やや青灰色がかる。
- 47 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強。粘性強。粘土層。

第30・30組B'-C-C'

- 1 7.5Y4/1 (灰色) 小礫混。粘土層。
- 2 7.5Y4/1 (灰色) 細り強。粘性やや強。φ5~10mm焼土粒5%。小礫混。粘土層。
- 3 7.5Y4/1 (灰色) 粘土層。粘土層。
- 4 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。φ8mm焼土粒・φ5mm炭化物粒混。貝片混。含水のある粘土層。やや褐色がかる。
- 5 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや弱。粘性強。φ10~30mm焼土粒混。小礫・瓦片・貝片・木片混。含水のある砂質粘土層。
- 6 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性やや強。φ10~30mmの焼土・横たえ瓦混。φ10~30mmの炭化物・木片・遺物・貝片多。粘土ブロックを主体とし、含水がある。やや褐色がかる。
- 7 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。φ1~3mm炭化物粒・φ20~30mm横たえ瓦片・φ30~40mm小礫混。砂混じり青灰色粘土ブロック層。
- 8 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや弱。粘性強。φ3~5mm焼土粒・遺物混。含水の多い粘土層。
- 9 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。小礫少。青灰色粘土ブロック20%混。含水のある砂質粘土層。
- 10 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性やや強。粘土層。含水のある粘土質土。瓦・礫多。
- 11 7.5YR3/1 (黒褐色) 細り強。粘性やや弱。φ3~5mm炭化物粒3~5%混。φ3~8cm焼土粒10~20%混。遺物・木片・瓦・小礫・縦貫多。やや褐色がかる。島の塩浜部分。
- 12 7.5YR3/1 (黒褐色) 細りやや弱。粘性やや強。φ1~3mm焼土粒・φ1mm炭化物粒混。貝片・小礫少。含水のある粘土層。粒度やや大きい。
- 13 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性やや強。φ1~3mm焼土粒・小礫混。貝片多。粘土質土。
- 14 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強。粘性やや強。小礫・遺物(瓦)多。砂混じり粘土層。瓦を敷き敷いたように垂直している。
- 15 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性やや強。木片少。瓦・小礫・遺物多。砂質粘土層。
- 16 7.5YR3/1 (黒褐色) 細り強。粘性弱。φ1~5cm焼土・φ1~3mm炭化物粒5~10%混。小礫・瓦片・木片・遺物多。19層よりやや褐色がかる。島の塩浜上。
- 17 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。粘土層。やや褐色がかる。池遺構下層の土層と同。
- 18 7.5YR3/2 (黒褐色) 細りやや弱。粘性強。φ5mm焼土粒・φ3mm炭化物粒各5%混。含水のある粘土層。
- 19 7.5YR3/1 (黒褐色) 細り弱。粘性弱。木片混。遺物・貝片・小礫多。
- 20 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強。粘性やや強。やや砂っぽい。小礫含む。
- 21 7.5YR3/2 (黒褐色) 細り強。粘性やや弱。φ5~20cm褐色粘土ブロック(ロームか?)・小礫多。砂質粘土層。砂粒の粗度が大きい。
- 22 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り弱。粘性強。5層よりやや褐色がかる。含水のある粘土層。褐色土ブロック形状に似る。
- 23 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り弱。粘性強。φ3mm炭化物粒混。含水のある粘土層。
- 24 10YR2/2 (黒褐色) 細り弱。粘性有。φ10~30mm礫7~10%混。砂まじり土。石の混入認め。
- 25 7.5YR3/2 (黒褐色) 細り強。粘性やや弱。粘土層。粘土層1%混。φ5~20cm褐色粘土ブロック(ロームか?)・小礫多。砂混じり粘土層。小礫のたまり程度大きい。
- 26 7.5Y3/1 (暗褐色) 細り有。粘性強。炭化物・木片混。粘土層。中の島の基層類。
- 27 7.5YR2/1 (黒色) 細り強。粘性強。粘土層。やや粒度が大きい。
- 28 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。φ1~3cm白色粘土ブロック混。含水の多い粘土層。
- 29 5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性強。遺物1%混。φ3~5mm褐色粒φ1~3%混。粘土層。自然石積網に近づく。土中の島の基層類。
- 30 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強。粘性やや強。木片・小礫多。粘土層。やや褐色がかる。
- 31 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り弱。粘性強。φ8~10mm木質繊維ブロックを混雑に混。含水のある粘土層。
- 32 10YR4/3 (土に黄褐色) 細りやや強。粘性有。φ5~20mm礫10~15%混。砂混じり土層。石積遺構の充填土。
- 33 2.5Y3/1 (黒色) 細りやや強。粘性有。φ5~20mm礫5~7%混。瓦10%混。粘土ブロックと砂粒が混在する。間石混入認め。
- 34 5Y3/2 (オリーブ黒色) 細りやや強。粘性有。φ1~10mm砂粒5~7%混。砂混じり粘土層。石積遺構の基層か。



第31図 池遺構掘方 (1/150)

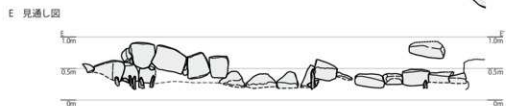
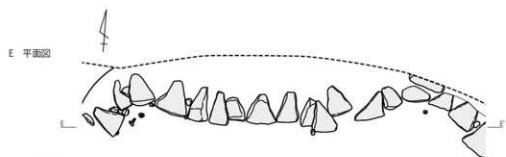
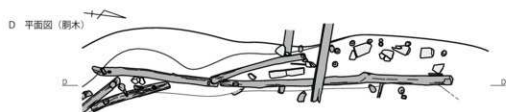


第 32 図 61号遺構 (1) (1/60)

61号遺構 D-E



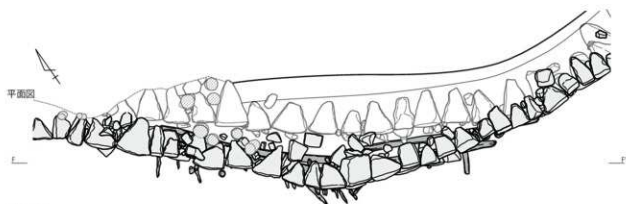
間知石
除去後



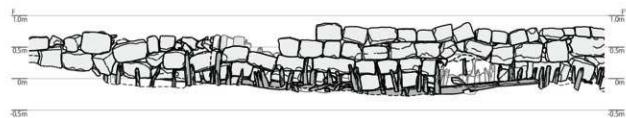
0 1/60 2m

第33図 61号遺構 (2) (1/60)

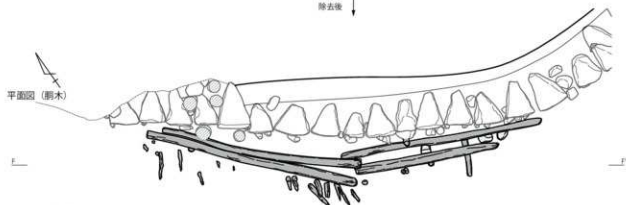
61号遺構 F



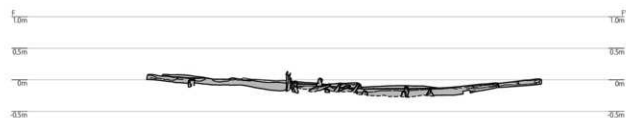
見通し図



間知石
除去後

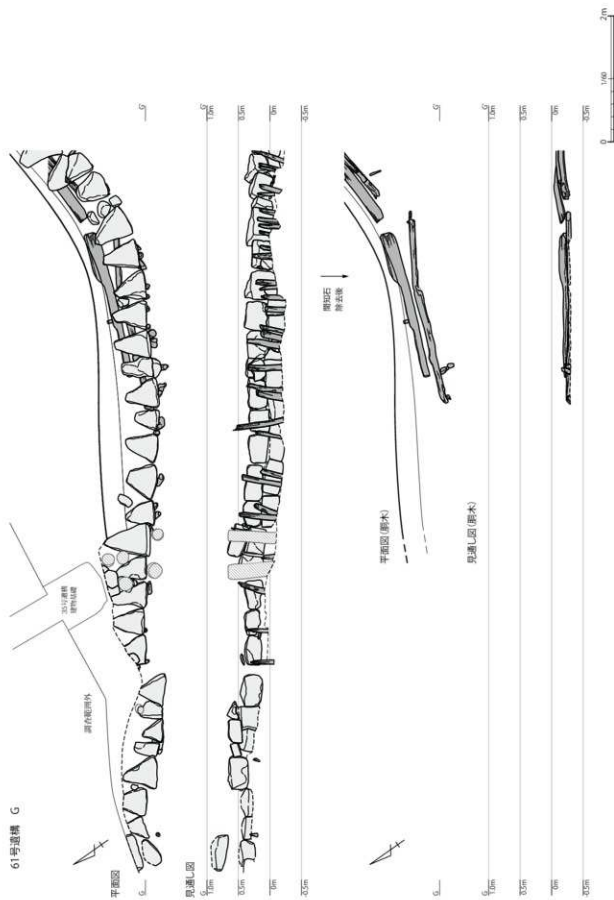


見通し図 (削木)



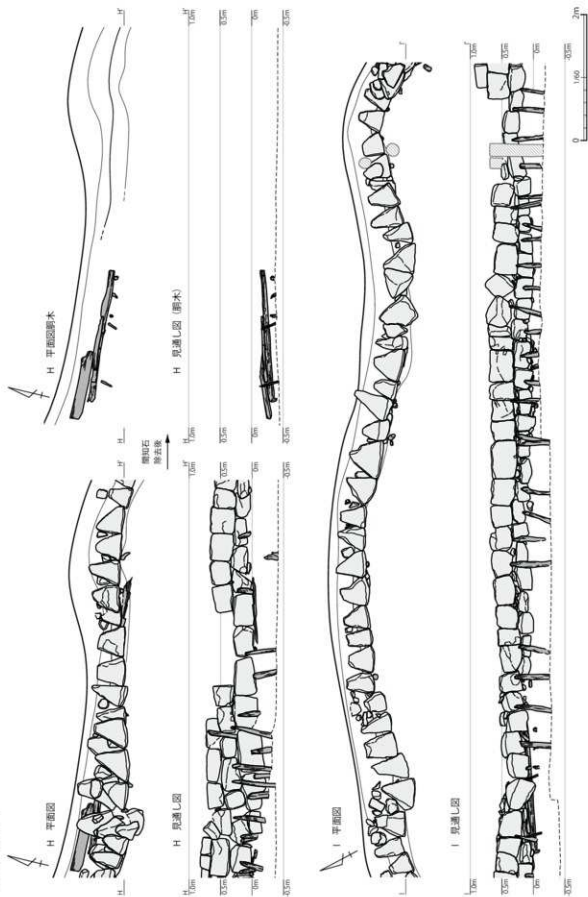
0 1/60 2m

第 34 図 61号遺構 (3) (1/60)



第35図 61号遺構 (4) (1/60)

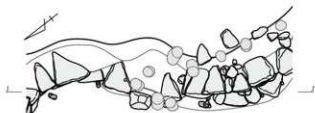
61号遺構 H・I



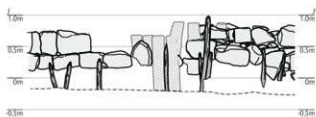
第36図 61号遺構 (5) (1/60)

61号遺構 J・K・L

J 平面図



J 見通し図



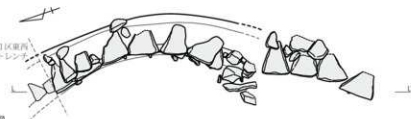
K 平面図



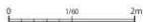
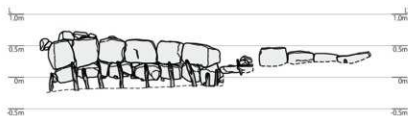
K 見通し図



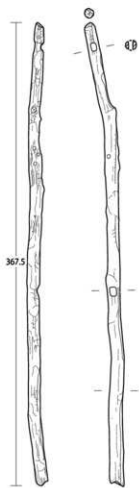
L 平面図



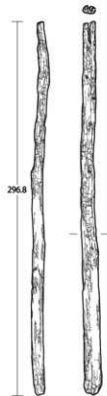
L 見通し図



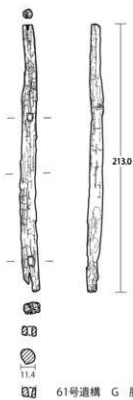
第 37 図 61号遺構 (6) (1/60)



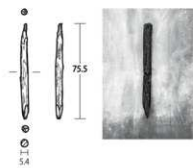
61号遺構 C 胴木



61号遺構 F 胴木



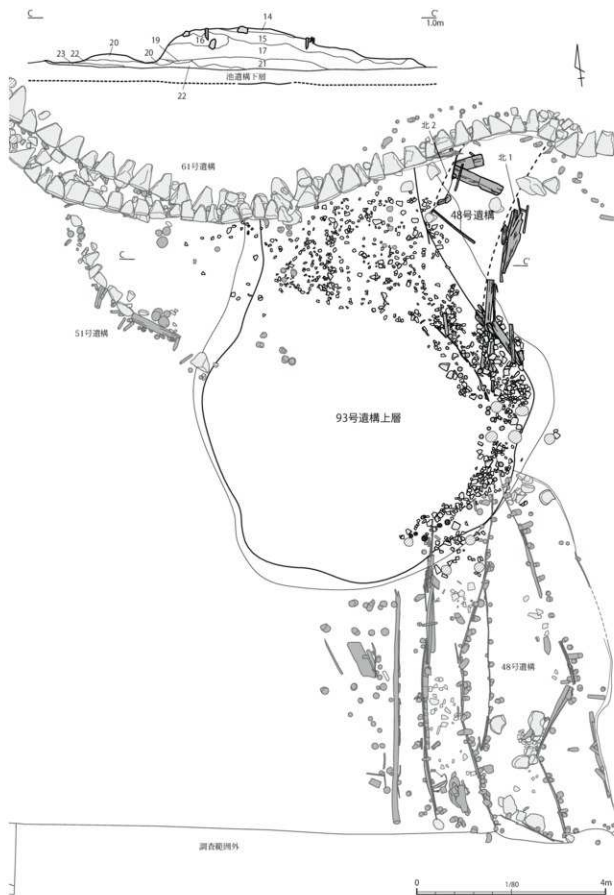
61号遺構 G 胴木



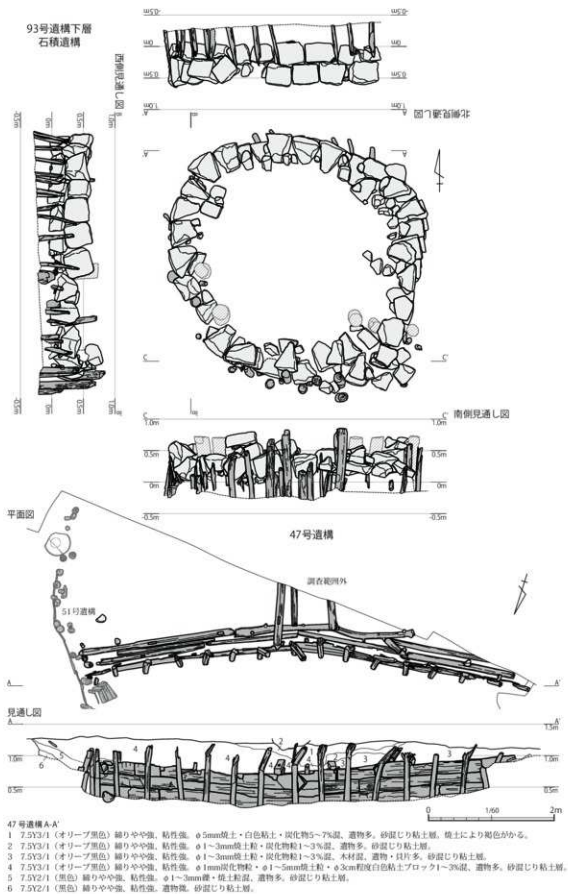
61号遺構 B 石積前面杭

※計測値は保存値。単位は cm。
0 1/30 50cm

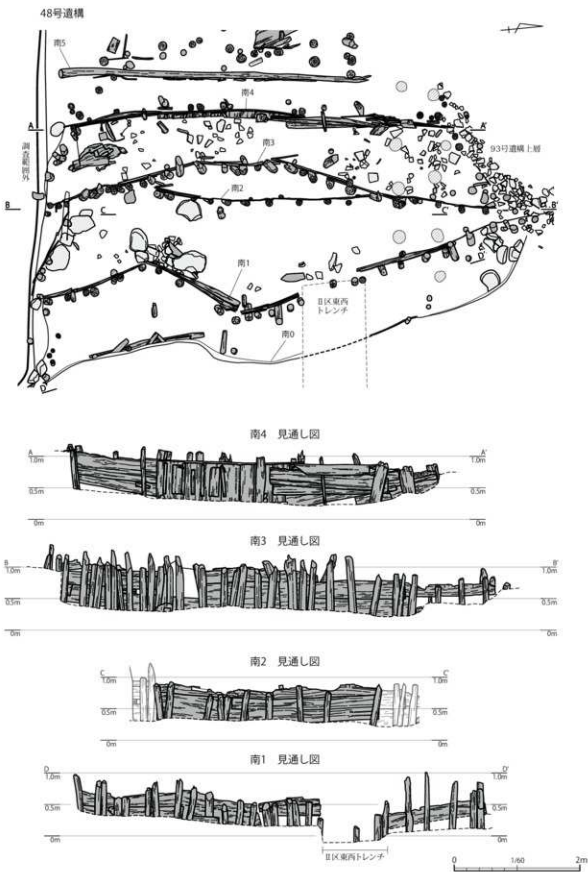
第 38 図 61号遺構 (7) (1/30)



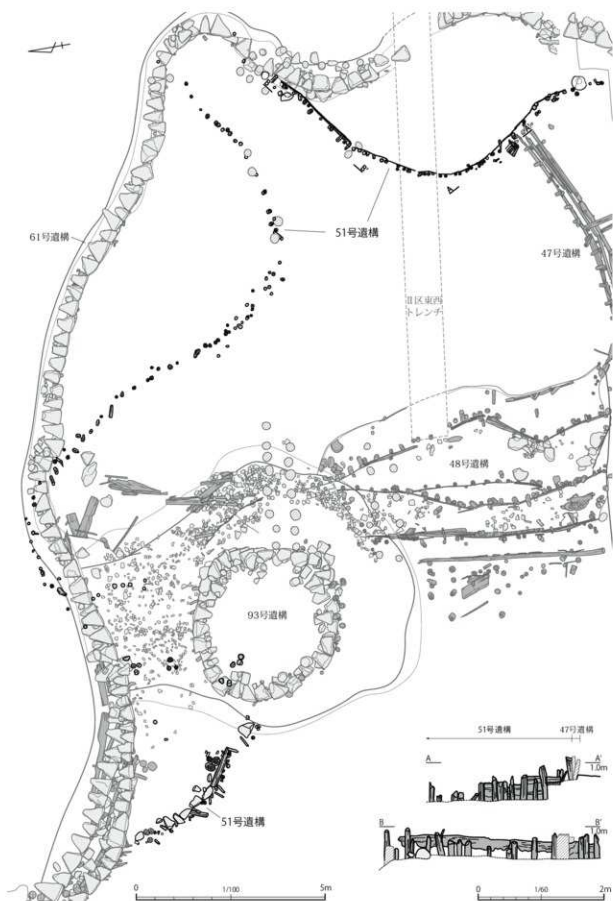
第39図 48・93号遺構 (1/80)



第40図 93・47号遺構 (1/60)



第41図 48号遺構 (1/60)



第42図 51号遺構 (1/100・1/60)



第43図 91号遺構 (1/60)

第12表 石積遺構計測表

遺構名	検出番号	調査番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	棟出脚長さ (m)	高さ (m)	長軸方向	推定時期	備考
61号遺構上層	第23-29区	第0216-18	B区	A-E-5~13	第0層	壁面	67.76	1.2	N 58° W	近世~近代	北側の一段石積遺構が重なっており、北側の棟出脚長は基礎埋没のため、正確な計測は67.42m。

第13表 中の島計測表

遺構名	検出番号	調査番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	長軸	短軸	高さ	長軸方向	平面形	推定時期	備考
93号遺構上層	第3096	第0218	B区	B-C-N-9	第4層	壁面	8.9	7.6	1.0	N 5° E	不定形	近世~近代	長軸、短軸は土柱を含む大きさ、高さは池遺構下層1層から測ったもの。
93号遺構下層	第4078	第0218	B区	B-C-N-9	第4層	壁面	4.8	4.3	0.7	N	円形	近世~近代	円形の中心部、高さは池遺構下層1層から測ったもの。

第14表 池遺構内土留板計測表

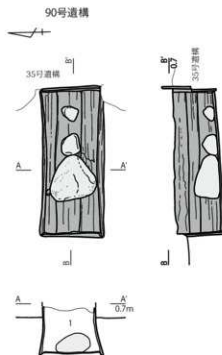
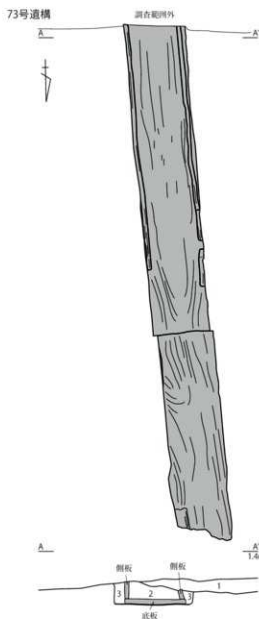
遺構名	検出番号	調査番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	棟出脚長さ (m)	高さ (m)	長軸方向	推定時期	備考
47号遺構	第304	第0218	B区	E-11~12	池遺構上層	壁面	土留板列	(7.2)	1.1	N 5° E	近世~近代	内側は調査範囲外。
48号遺構内	第304	第0218	B区	C-E-10・11	池遺構上層	壁面	土留板列	(5.1)	-	N	近世~近代	一部で土留板が欠れている。
48号遺構南	第304	第0218	B区	C-E-10	池遺構上層	壁面	土留板列	(7.1)	1.2	N 4° W	近世~近代	南側は調査範囲外。
48号遺構北	第304	第0218	B区	C-E-10	池遺構上層	壁面	土留板列	3.6	0.7	N 4° E	近世~近代	南3の一部を補修するように設置される。
48号遺構西	第304	第0218	B区	C-E-10	池遺構上層	壁面	土留板列	(7.6)	1.3	N 7° E	近世~近代	南側は調査範囲外。
48号遺構南	第304	第0218	B区	C-E-10・11	池遺構上層	壁面	土留板列	(6.0)	0.9	N 7° E	近世~近代	南側は調査範囲外。
48号遺構南	第304	第0219・20	B区	D-E-11	池遺構上層	壁面	土留板列	(5.0)	0.9	N 7° E	近世~近代	南側は調査範囲外。
48号遺構北	第304	第0220	B区	A-C-10	池遺構上層	壁面	土留板列	(3.7)	-	N 18° E	近世~近代	土柱のためか傾いている。
48号遺構北	第304	第0220	B区	A-B-10	池遺構上層	壁面	土留板列	(1.3)	-	N 24° E	近世~近代	土柱のためか傾いている。
51号遺構	第304	第0220	B区	A-D-8・13	池遺構上層	壁面	土留板・礎石	(32.5)	0.6	-	近世~近代	土留板は土留板の傾斜ですが、右列のみ傾斜している。53号遺構で鉄入で一度埋められ、61号遺構の外側の外側にも傾いている。

第15表 池遺構内瓦集中部計測表

遺構名	検出番号	調査番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	棟出脚長さ (m)	高さ (m)	長軸方向	平面形	推定時期	備考
91号遺構	第4306	第0220	B区	A-B-5・6	池遺構上層	壁面	瓦	(4.0)	(4.0)	1.0	N 84° W	-	近世~近代 北側は調査範囲外、平面は不定形。

第16表 土留板計測表

遺構名	検出番号	調査番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	棟出脚長さ (m)	高さ (m)	長軸方向	平面形	推定時期	備考
81号遺構	第5206	第0222	B区	B-4~7	第0層	壁面	土留板列	(3.7)	0.5	N 82° W	近世~近代	内側は52号遺構により覆われる。東端は池遺構下層の中で欠けたもの。	
94号遺構	第5206	第0222	B区	A-4~7	第0層	壁面	土留板列	(8.0)	0.3	N 90° E	近世~近代	内側は52号遺構により覆われる。東端は池遺構下層の中で欠けたもの。	

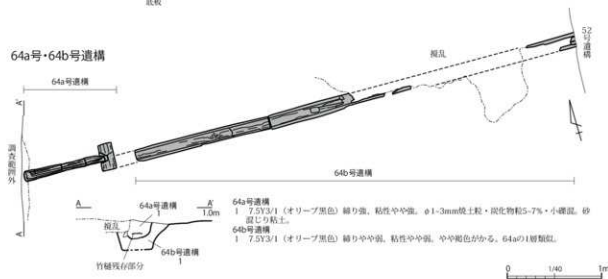


90号遺構
1 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや強、粘性強、 ϕ 3-5mm脱土層。砂混じり粘土層。

73号遺構
1 10Y2/1 (黒色) 細りやや強、粘性弱、 ϕ 1-2mm炭化物粒混。遺物混。砂質土層。
2 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細りやや弱、粘性強、粘土層。
3 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り強、粘性強、 ϕ 3-5mm瓦片3%混。砂混じり粘土層。

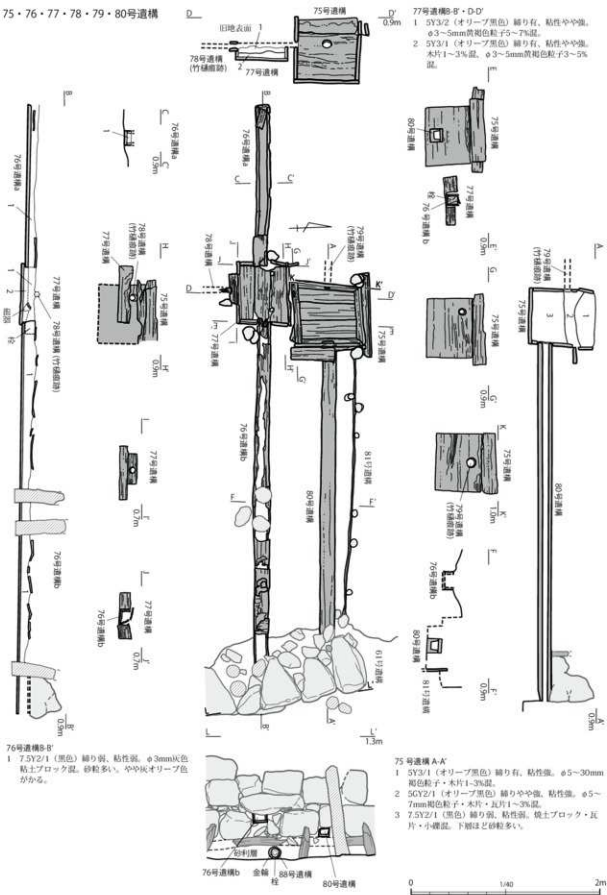
0 1/20 50cm

64a号・64b号遺構



第44図 73・90・64号遺構 (1/20・1/40)

75・76・77・78・79・80号遺構



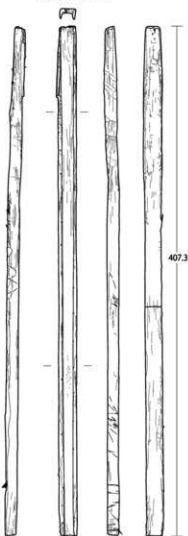
第45図 75・76・77・78・79・80号遺構 (1/40)



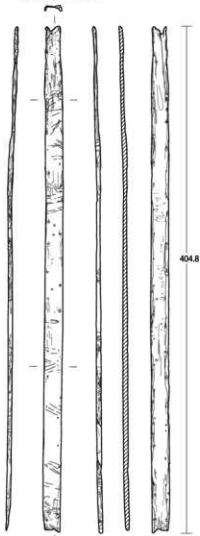
池邊橋遺跡(東端)



池邊橋遺跡(東端)



75号遺構遺跡(西端)
80号遺構 木樋胴

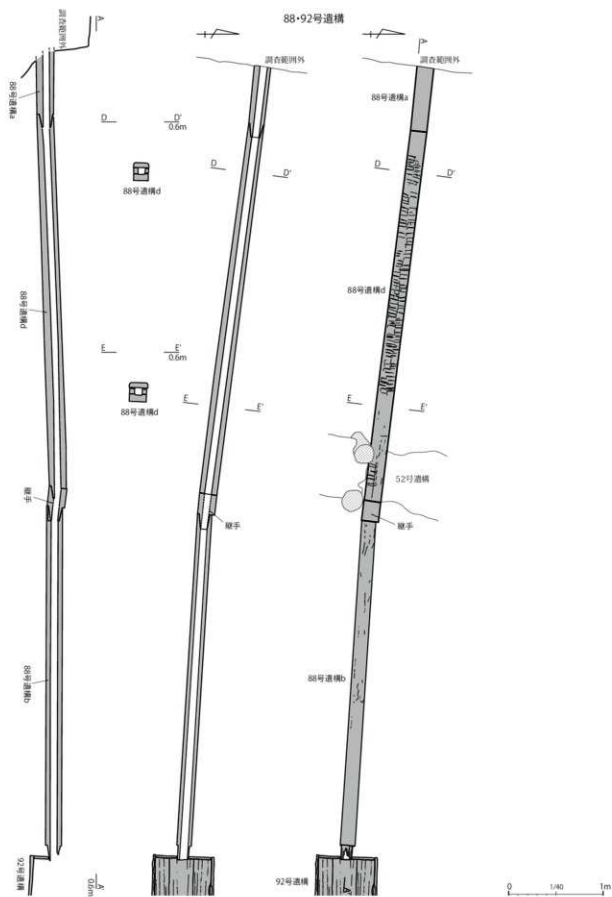


75号遺構遺跡(西端)
80号遺構 木樋蓋

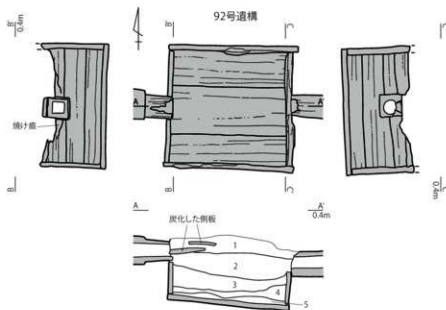
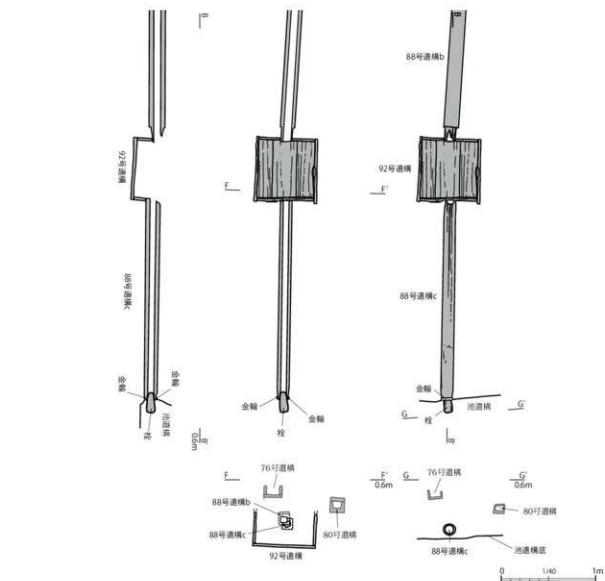
※計測値は残存値。単位はcm。



第46図 80号遺構木樋 (1/30)

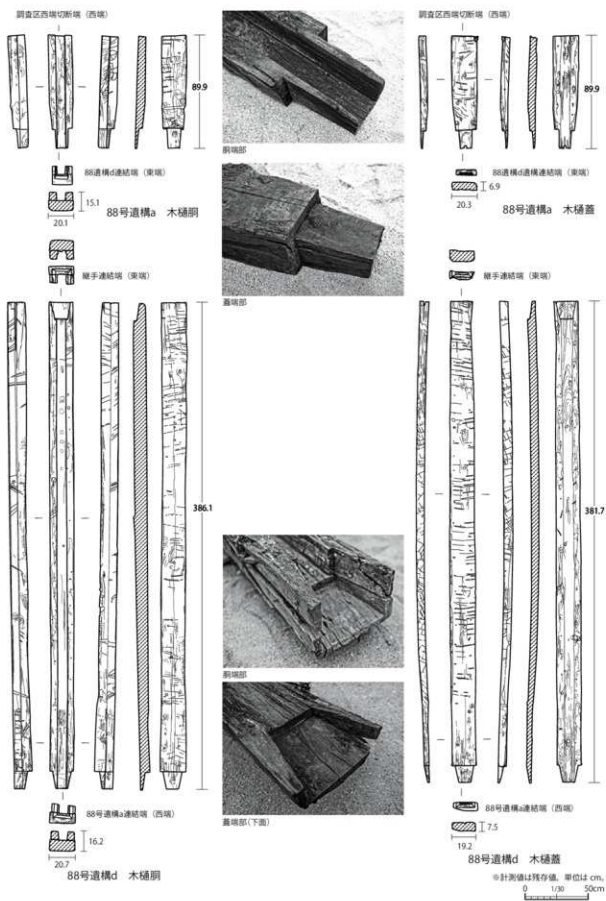


第47図 88・92号遺構 (1) (1/40)



- 92号遺構A-A'
- 1 7.5Y3/1 オリーブ黒色 緋りや
や強 粘性弱、やや褐色っぽい。
離かくて砂っぽい。小礫・木片
などを多く含む。
 - 2 7.5Y3/1 オリーブ黒色 緋りや
や強 粘性やや強、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 炭
土粒・ $\phi 3 \sim 5\text{mm}$ 炭化物粒各
3%、小礫を多く含む。粘土層。
 - 3 7.5Y3/1 オリーブ黒色 緋りや
や強 粘性弱(なし)。木片・小
礫を多く含む。砂質土層。
 - 4 7.5Y3/1 オリーブ黒色 緋り強
粘性弱、3層より細かい。砂質土層。
 - 5 7.5Y3/1 オリーブ黒色 緋りや
や強 粘性強、水っぽい。やや褐
色っぽい。粘土層。

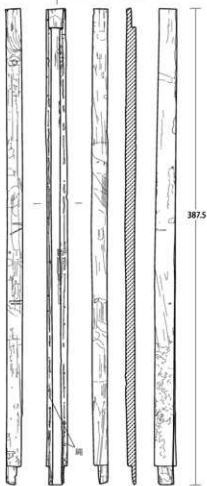
第48図 88・92号遺構 (2) (1/40・1/20)



第 49 図 88 号遺構木桶 (1) (1/30)



88号遺構b 手漕結端 (西端)



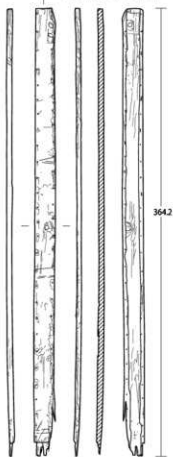
92号遺構結端 (東端)



88号遺構b 木桶胴



88号遺構b 手漕結端 (西端)



92号遺構結端 (東端)

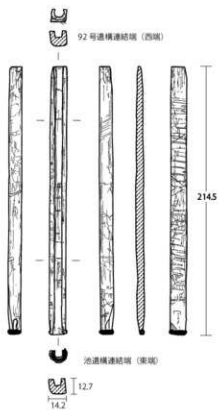


※計測値は残存値。単位は cm。
0 1/30 50cm

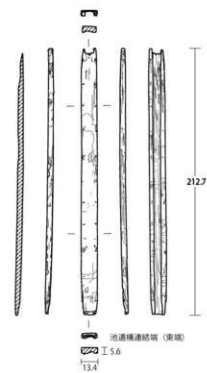
88号遺構b 木桶蓋



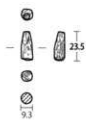
第 50 図 88号遺構木桶 (2) (1/30)



88号遺構c 木樋胴



88号遺構c 木樋蓋

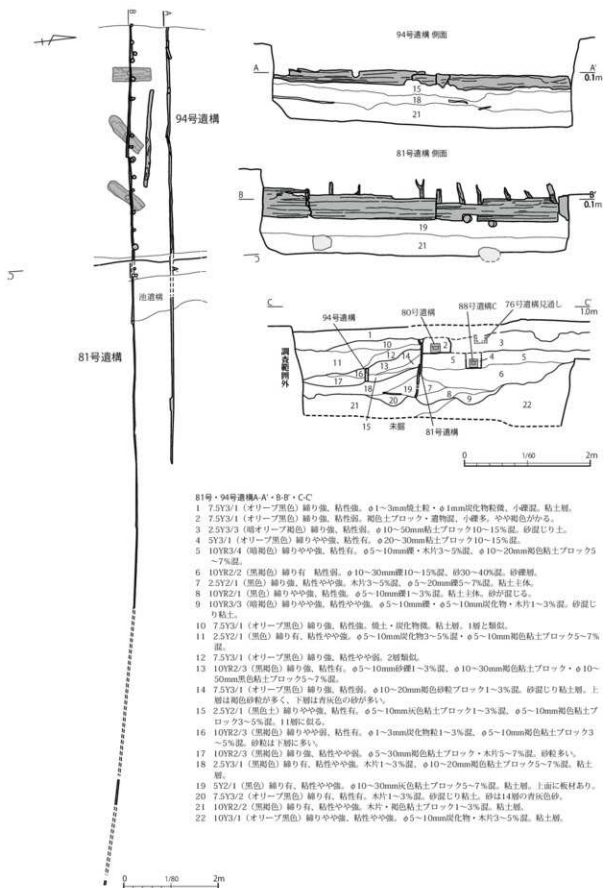


88号遺構c 栓



※計測値は残存値。単位はcm。
0 1/30 50cm

第51図 88号遺構木樋(3) (1/30)

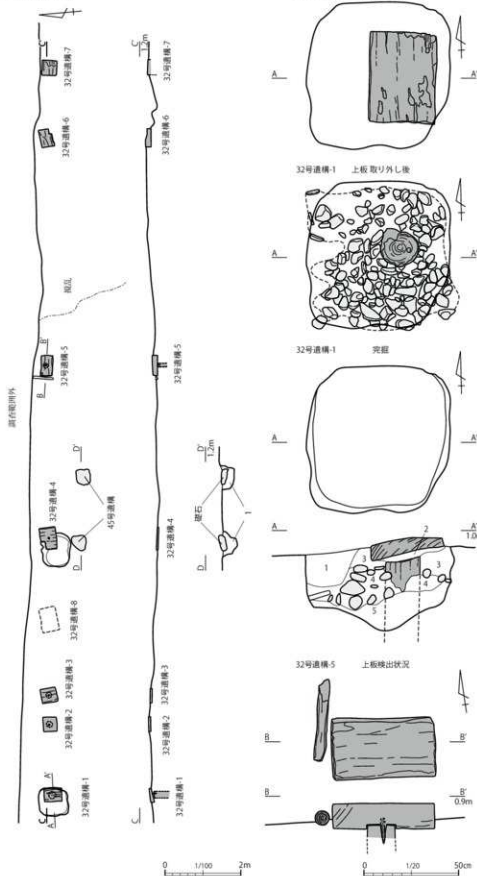


81号・94号遺構A'・B・C

- 1 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 練り強、粘性強。φ1~3mm焼土粒・φ1mm炭化物粒散、小礫混。粘土層。
- 2 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 練り強、粘性弱。褐色土ブロック・遺物混、小礫多。やや靨色がかる。
- 3 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐色) 練り強、粘性弱。φ10~50mm粘土ブロック10~15%混。砂混じり土。
- 4 5Y3/1 (オリーブ黒色) 練りやや強、粘性有。φ20~30mm粘土ブロック10~15%混。
- 5 10YR3/4 (暗褐色) 練りやや強、粘性有。φ5~10mm礫・木片3~5%混。φ10~20mm褐色粘土ブロック5~7%混。
- 6 10YR2/2 (黒褐色) 練り有、粘性弱。φ10~30mm礫10~15%混。砂30~40%混。砂礫層。
- 7 2.5Y2/1 (黒色) 練り強、粘性やや強。木片3~5%混。φ5~20mm礫5~7%混。粘土主体。
- 8 10YR2/1 (黒色) 練りやや強、粘性弱。φ5~10mm礫1~3%混。粘土主体。砂が混じる。
- 9 10YR3/3 (暗褐色) 練りやや強、粘性やや強。φ5~10mm礫・φ5~10mm炭化物・木片1~3%混。砂混じり粘土。
- 10 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 練り強、粘性強。樹土・炭化物混。粘土層。層と類似。
- 11 2.5Y2/1 (黒色) 練り有、粘性やや強。φ5~10mm炭化物3~5%混・φ5~10mm褐色粘土ブロック5~7%混。
- 12 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 練り強、粘性やや強。2層類似。
- 13 10YR2/3 (黒褐色) 練り強、粘性有。φ5~10mm砂礫1~3%混。φ10~30mm褐色粘土ブロック・φ10~50mm黒色粘土ブロック5~7%混。
- 14 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 練り強、粘性弱。φ10~20mm褐色砂粒ブロック1~3%混。砂混じり粘土。上層は褐色砂粒が多く、下層は青灰色の砂が多い。
- 15 2.5Y2/1 (黒色土) 練りやや強、粘性有。φ5~10mm灰色粘土ブロック1~3%混。φ5~10mm褐色粘土ブロック3~5%混。1層に似る。
- 16 10YR2/3 (黒褐色) 練りやや強、粘性有。φ1~3mm炭化物粒1~3%混。φ5~10mm褐色粘土ブロック3~5%混。砂粒は下層に多い。
- 17 10YR2/3 (黒褐色) 練り強、粘性やや強。φ5~30mm褐色粘土ブロック・木片5~7%混。砂粒多。
- 18 2.5Y3/1 (黒褐色) 練り有、粘性やや強。木片1~3%混。φ10~20mm褐色粘土ブロック5~7%混。粘土層。
- 19 5Y2/1 (黒色) 練り有、粘性やや強。φ10~30mm褐色粘土ブロック5~7%混。粘土層。上面に板材あり。
- 20 7.5Y3/2 (オリーブ黒色) 練り有、粘性有。木片1~3%混。砂混じり粘土。砂は14層の青灰色砂。
- 21 10YR2/2 (黒褐色) 練り有、粘性やや強。木片・褐色粘土ブロック1~3%混。粘土層。
- 22 10Y3/1 (オリーブ黒色) 練りやや強、粘性やや強。φ5~10mm炭化物・木片3~5%混。粘土層。

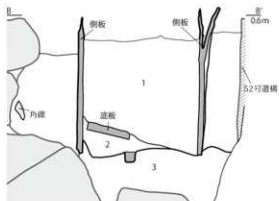
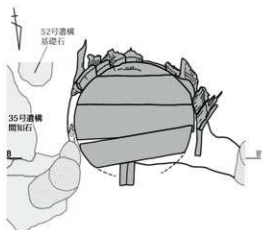
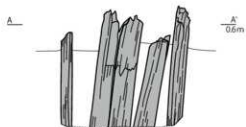
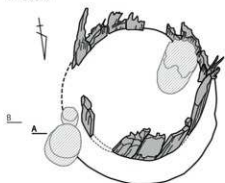
第52図 81・94号遺構 (1/80・1/60)

32号遺構-1~8

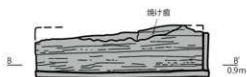
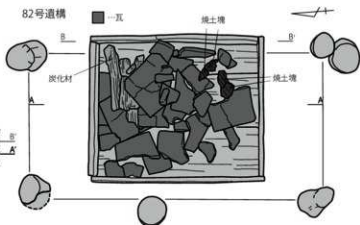


第53図 32・45号遺構 (1/100・1/20)

66号遺構



82号遺構



82号遺構A-A

- 1 7.5YR1.7/1 (赤色) 細り弱、粘性弱、焼土5-7%混、炭化物多。
- 2 焼土層、細り弱、粘性無。
- 3 7.5YR3/2 (黒褐色) 細り弱、粘性弱、 ϕ 1mm焼土粒40~50%混、瓦片混。
- 4 7.5YR3/2 (黒褐色) 細り弱、粘性弱、焼土・瓦片混、3層類似だが、焼土や中少。
- 5 7.5YR2/3 (梅暗褐色) 細り弱、粘性弱、 ϕ 1mm焼土粒2%混、砂混じり土、瓦の下。

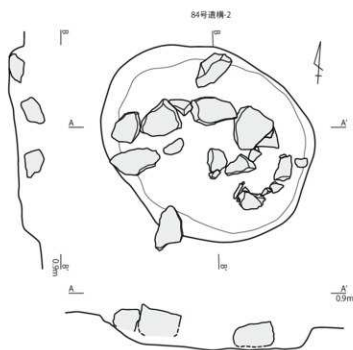
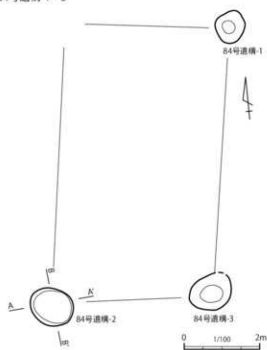
66号遺構B-B

- 1 10YR2/2 (黒褐色) 細り無、粘性やや弱、木片1~3%混、砂粒5~7%混、含水量多い、井戸内部の増積層。
- 2 10YR2/3 (黒褐色) 細り有、粘性有、 ϕ 3~5mm炭化物・ ϕ 5~7mm黄褐色粒子・瓦片3~5%混、井戸壁方の浮き上がり。
- 3 10GY2/1 (緑褐色) 細り有、粘性なし、砂粒5~7%混、湧水層、井戸壁方。

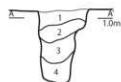
0 1/20 50cm

第54図 66・82号遺構 (1/20)

84号遺構-1~3



83号遺構

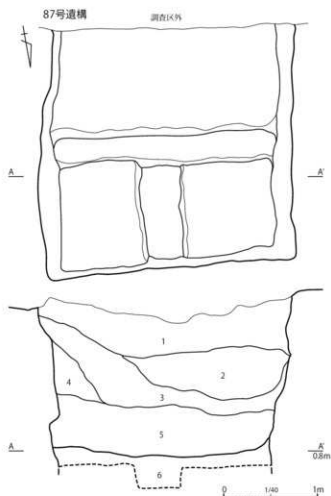


83号遺構A-A'

- 1 5Y2.2 (オリーブ黒色) 細り有、粘性強、貝殻の小破片混。
- 2 5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り有、粘性強、φ20~50mm 二枚貝破片 30%混。
- 3 5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り有、粘性強、φ20~50mm 二枚貝破片 30%混。2層よりも小さい貝殻が多い。
- 4 5Y3/1 (オリーブ黒色) 細り有、粘性強、φ10~30mm 二枚貝破片 10~15%混。



第55図 83・84号遺構 (1/100・1/20)



87号遺構

- 1 7.5YR3/1 (オリーブ黒色) 締り強, 粘性強, 遺物(木片・礫・貝片) 混合層。
- 2 7.5YR3/1 (オリーブ黒色) 締り強, 粘性強, 遺物(木片・礫・貝片) 多, 粘土ブロック層(層割れだが, やや砂粒多い)。
- 3 7.5YR2/3 (暗褐色) 締りやや弱, 粘性強, 遺物(木片・礫・貝片) 多, 砂混じり粘土質, 含水有。
- 4 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締りやや強, 粘性やや強, $\phi 5 \sim 8\text{mm}$ 炭土粒 $\phi 5 \sim 8\text{mm}$ 炭化物粒 10%混。
- 5 7.5YR3/1 (黒褐色) 締り弱, 粘性やや強, 遺物(薄板状木片・貝片・瓦) 多, 砂混じり粘土質上, 含水有。
- 6 10YR3/1 (オリーブ黒色) 締りやや強, 粘性強, 小礫混, 含水有, 自然堆積層か。

第 56 図 87 号遺構 (1/40)

第 17 表 木樋計測表

遺構名	縄文番号	図面番号	調査区	グリッド	確認層位	確認層	種類	構造断面長 (cm)	幅 (cm)	長軸方向	推定時期	備考
64号遺構	第48区	00820	Ⅱ区	B-2・3	第4層	Ⅱ面	木樋	(4.8)	16	N 90° E	近世～古代	母木系統1, 64号遺構とは接続しない。東端は52号遺構とより接続。
73号遺構	第48区	-	Ⅱ区	B-8	遺構層上層	Ⅱ面	木樋	(2.7)	34	N 47° W	近世～古代	やや太い木樋, 接続は不明。
76号遺構	第43区	00821	Ⅱ区	B-3	第4層	Ⅱ面	木樋	1.7	15	N 85° W	近世～古代	母木系統1。
77号遺構	第43区	00821	Ⅱ区	B-4・5	第4層	Ⅱ面	木樋	(3.8)	16	N 85° W	近世～古代	母木系統1, 本樋の縁で止木。
80号遺構	第45・46区	00821	Ⅱ区	B-4・5	第4層	Ⅱ面	木樋	(4.1)	15	N 85° W	古墳～古代	母木系統2。
83号遺構	第47・49区	00821～22	Ⅱ区	B-2・3	第4層	Ⅱ面	木樋	(0.8)	18	N 84° W	古墳～古代	母木系統3, 33号遺構に接り込まれる。
88号遺構	第47・48・50区	00821～22	Ⅱ区	B-4・5	第4層	Ⅱ面	木樋	3.7	16	N 83° W	古墳～古代	母木系統3, 88号遺構との縁が接り。
89号遺構	第48・51区	00821～22	Ⅱ区	B-5	第4層	Ⅱ面	木樋	(2.1)	13	N 90° E	古墳～古代	母木系統3, 遺構間に突き出す。本樋の縁で止木。
89号遺構	第47・49区	00821～22	Ⅱ区	B-3・4	第4層	Ⅱ面	木樋	(4.2)	19	N 84° W	古墳～古代	母木系統3, 88号遺構との縁が接り。

第 18 表 竹樋計測表

遺構名	縄文番号	図面番号	調査区	グリッド	確認層位	確認層	種類	構造断面長 (cm)	幅 (cm)	長軸方向	推定時期	備考
64号遺構	第48区	00820	Ⅱ区	B-2	第4層	Ⅱ面	竹樋	(98)	10	N 90° E	近世	縁部と縁下を焼付, 内側は調査範囲外, 東端は削り込まれる。縁下は長軸方向(長軸)16cmを跨る。東方の深さは10cmを跨る。
78号遺構	第43区	-	Ⅱ区	B-4	第4層	Ⅱ面	竹樋	(9)	(6)	N 2° E	近世～古代	6号遺構との下に接り込まれる。
79号遺構	第43区	-	Ⅱ区	B-4	第4層	Ⅱ面	竹樋	-	(8)	N 85° W	近世～古代	母木系統3, 縁部を削って接続される。77号遺構を知って接続される。

第 19 表 木製枘計測表

遺構名	縄文番号	図面番号	調査区	グリッド	確認層位	確認層	種類	径長 (cm)		長軸方向	平面形	推定時期	備考	
								径長	径長					
73号遺構	第43区	00821	Ⅱ区	B-4	第4層	Ⅱ面	木製枘	85	66	70	N 90° W	方形	近世～古代	母木系統2。
77号遺構	第43区	00821	Ⅱ区	B-4	第4層	Ⅱ面	木製枘	65	64	14	N 90° W	方形	近世～古代	母木系統2, 78号遺構位置に認められている。
82号遺構	第47・48区	00821～22	Ⅱ区	B-5	第4層	Ⅱ面	木製枘	67	66	19	N	方形	近世～古代	母木系統3。

第20表 32号遺構基礎礎計測表

遺構名	検出番号	図面番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	規模 (cm)			長軸方向	測定時期	備考			
							高輪	幅輪	厚輪						
32号遺構1	第5300	図版22-23	I～II区	A-14	33号遺構 層上土	壁～IV面	47	35	10	79	76	46	N15°E	近世～近代	土版・版方発掘品。
32号遺構2	第5300	図版22-23	I～II区	A-14	33号遺構 層上土	壁～IV面	40	35	5	-	-	-	N90°E	近世～近代	
32号遺構3	第5300	図版22-23	I～II区	A-14	33号遺構 層上土	壁～IV面	40	35	5	-	-	-	N47°W	近世～近代	
32号遺構4	第5300	図版22-23	I～II区	A-14・15	33号遺構 層上土	壁～IV面	60	40	5	91	70	27	N90°E	近世～近代	土版・版方発掘品。
32号遺構5	第5300	図版22-23	I～II区	A-17	33号遺構 層上土	壁～IV面	55	30	15	-	-	-	N80°W	近世～近代	
32号遺構6	第5300	図版22-23	I～II区	A-18	33号遺構 層上土	壁～IV面	50	35	15	-	-	-	N85°E	近世～近代	
32号遺構7	第5300	図版22-23	I～II区	A-19	33号遺構 層上土	壁～IV面	40	40	10	-	-	-	N85°W	近世～近代	
32号遺構8	第5300	図版22-23	I～II区	A-15	33号遺構 層上土	壁～IV面	60	145	-	-	-	-	N85°E	近世～近代	板の端部のみ発掘。

第21表 45号遺構礎石計測表

遺構名	検出番号	図面番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模 (cm)			長軸方向	測定時期	備考	
								高輪	幅輪	厚輪				
45号遺構1	第5300	図版23	II区	A-15	33号遺構 層上土	壁～IV面	38	36	-	-	-	N90°W	近世～近代	33号遺構の礎石上で発掘。入隅大の礎石点。
45号遺構2	第5300	図版23	II区	A-16	33号遺構 層上土	壁～IV面	42	41	-	-	-	N90°W	近世～近代	33号遺構の礎石上で発掘。入隅大の礎石点。

第22表 井戸計測表

遺構名	検出番号	図面番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模 (cm)			長軸方向	測定時期	備考		
								高輪	幅輪	厚輪					
66号遺構	第5400	図版23	III区	B-2	33号遺構 層上土	井戸	井戸	70	42	76	-	-	N80°E	近世～近代	掘削・板敷き等あり。33号遺構を埋して作られている。掘削の一部に円筒のくり貫き痕跡があり、竹藪などの礎石として利用可能性あり。79号遺構と接続。

第23表 箱状木枠計測表

遺構名	検出番号	図面番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模 (cm)			長軸方向	平面形	測定時期	備考		
								高輪	幅輪	厚輪						
82号遺構	第5400	図版23	III区	C-4	第4層	壁面	箱状木枠	93	78	26	-	-	N5°W	方形	近世～近代	層土に埋す類。発掘、埋けた瓦など多量に含む。穴は40cm程度あり。
90号遺構	第4400	図版20	III区	C-7	61号遺構 層上土	壁面	箱状木枠	80	33	26	-	-	N90°E	方形	近世～近代	61号遺構層上土中に発掘。板石はない。掘削中に入隅大の礎石あり。発掘後既に盗掘のためか。

第24表 溝計測表

遺構名	検出番号	図面番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	幅 (cm)			長軸方向	測定時期	備考		
								幅1	幅2	幅3					
83号遺構	第5300	図版24	III区	E-5	第5層	溝	溝	溝	溝	溝	溝	溝	N90°E	近世～近代	溝1・溝2・溝3は、板石多量に含む。

第25表 土坑計測表

遺構名	検出番号	図面番号	調査区	グリッド	確認層位	確認面	種類	規模 (cm)			長軸方向	平面形	測定時期	備考		
								高輪	幅輪	厚輪						
84号遺構1	第5300	図版24	III区	E-5	第4層	壁面	土坑 (建物基礎)	90	80	18	-	-	N22°E	楕円形	近世～近代	土坑の内部を埋す瓦・土坑。
84号遺構2	第5300	図版24	III区	E-4	第4層	壁面	土坑 (建物基礎)	120	91	18	-	-	N50°W	楕円形	近世～近代	層土に入隅大の礎石多数見られた。
84号遺構3	第5300	図版24	III区	E-5	第4層	壁面	土坑 (建物基礎)	120	90	13	-	-	N56°E	楕円形	近世～近代	土坑の内部を埋す瓦・土坑。 南側に調査範囲内で2基の基礎は不発、溝・礎石まで掘り込まれ、かなり深い。層土には木片や瓦片等が多く含まれる。
87号遺構	第5600	図版24	III区	E-4・5	第4層	壁面	土坑	290	270	171	-	-	N10°E	方形?	近世～近代	

3) IV面の遺構 (第57図)

IV面から検出された遺構は、円礫充填建物基礎1基、瓦充填建物基礎1基、石積遺構1条、土留板列1条、井戸4基、井戸囲い枠1基、埋設桶4基、木枠土坑5基、土坑10基、遺物集中1ヶ所である。先述のとおり、第IV面には第5層上面と第6層上面の遺構が含まれる。特に調査範囲の東側、西側で第1層による攪乱の影響が大きく、本来は第4・5層のような盛土の上面に形成された遺構であったと考えられる。そのため、同一の検出面であっても、本来の所属時期は異なる可能性がある。

■石積遺構

33号遺構 (第58～64図、第26～28表、図版24～30) I区からIII区の北側で東西に延びる石積遺構を検出し、西端は調査範囲外まで続いていることを確認した。33号遺構の東側は第1層による攪乱を受けているほか、II区からIII区にかけて、池遺構のある範囲では失われている。81・94号遺構の下層から33号遺構で見られたアンカー状木製品を検出したため、池遺構は33号遺構を撤去した後に掘削して設けられたと考えられる。また、1・3・4号遺構の周囲で石積遺構を確認できなかったため、33号遺構の東端は検出した位置に近いものと考えられる。

33号遺構は石積遺構とその裏込め、石積遺構前面の土留板列からなる遺構である。また、石積遺構の北側は溝であったと考えられ、溝内には棚状の遺構も検出したため、これも33号遺構の項でまとめて報告する。また、池を挟んで東西で遺構の様子が異なることから、Ⅰ・Ⅱ区で検出した箇所を「33号遺構東側」、Ⅲ区で検出した箇所を「33号遺構西側」と呼称し、分けて報告する。なお、石積遺構の間知石は人力で運搬することができず、重機により取り上げを行った。

33号遺構東側では、石積遺構と裏込め、土留板列、溝内の遺構を検出した。石積遺構は、まず裏込め部分を掘削し、その底面に胴木を支える材を設置して、その上に胴木を渡している。胴木支えには木材を使用しているが、この木材の形状は一様でなく、丸太状あるいは面取り丸太状の木材が使用されている。他所で使われていた木材のうち、適当なものを転用したと考えられる。また、胴木支え同士の間隔も一様ではなく、必要な箇所に適宜設置したものと考えられる。これらの胴木支えの上に胴木を2条、並行して渡している。胴木は西から東に向けて僅かに上がりながら設置されている。胴木の長さは3.5～5m程度を測り、幅は15～25cmを測る。胴木は面取り程度の粗製材を含む材が多いが、丸太材に近い曲がり材も見られる。また、製材のなかには中央に臍穴があるものもあることから、他所で使われた建材を転用したものと考えられる。胴木の端部は互い違いの組手状に加工されて、接手としている。接手には計9cmほどの円孔が穿たれ、円柱状のダボを通して固定している。胴木④の接手には墨書がみられたが、文字の判別には至らなかった。また、胴木の脇を細い杭で固定しているものもあった。なお、胴木③～⑤、⑩について、樹種同定及び年輪年代学的検討を依頼し、Ⅳにご寄稿いただいた。

胴木の上には間知石による石積遺構がある。石積遺構は概ね3段が確認され、最も残存している箇所では4段を確認した。一方、池遺構に近い西側では、先述のとおり胴木が上がっている影響か、1段のみを確認した。また、攪乱等の影響により、2段となっている箇所もある。石積遺構に利用された間知石は、概ね下段ほど大きく、上段ほど小さい。しかし、間知石同士のバランスをとるためか、下段であっても小さな間知石を使用している箇所もある。間知石は概ね前面を揃えて設置されているが、攪乱の影響か崩れている箇所もある。

使用された間知石は、前面が方形または長方形を呈し、尾に向かって細くなる四角錐を呈している。また、間知石の前面や側面には矢穴を持つものが多く見られたほか、工具痕や自然面を残すものもあった(第59図下)。特に矢穴を持つものは多く、観察した間知石のうち、半数近くが矢穴を持っていた。なお、出土した間知石の考古学的所見、及び柴田徹氏に依頼した岩石学的所見については第27表に取りまとめている。先述のとおり、間知石の段数は検出した位置によって異なるため、検出時の最上段を「初段」、以下、初段の下位を「次段」「次々段」と順に表記している。また、第27表中のNo.1-1から1-38については第58図中の間知石に付した番号に対応する。その他については、取り上げた後に任意に番号を付したため、第58図には記載がない。

石積遺構の裏込めは、間知石の背後にあり、広いところで間知石列から約6m、狭いところで約2mを確認した。第6層とみられる粘土質土に木材や角礫を交えて充填している。この充填土の上層に第5層の赤褐色土層があるため、33号遺構は第5層に先行してつくられたものであることがわかる。このことから、石積遺構は、第5層を整地する前に設けられた護岸であると考えられる。

石積遺構前面の土留板列は、1段の土留板が杭によって支えられていた。土留板は薄く、水に浸かっ

ていた影響が非常に脆い状態であったため、多くは破損している。杭は細い角材や丸木材が用いられていたが、杭を単体で打ち込んだものと、杭の先端にアンカー状の木製品を取り付けたものがあった。このアンカー状木製品は丸太様の木材で、材の上面中央付近に径10cm、深さ10cm程度の孔を穿ち、そこに杭を差し込んでいるものである。孔は杭の形状に合わせて作られており、杭の径に合わせて孔を穿ったものもあれば、杭の下端を加工して固定して、その形状に孔を合わせているものもあった（第61図上）。アンカー状木製品は、概ね石積遺構の胴木から間知石の最下段の高さ、海拔0mとなるあたりに、一定間隔を離して設置されていた。海拔0mを下回る土層からは湧水があり、土層は水を含んで非常に軟質であるため、軟質の土層に杭を打ち込んでも固定できないだろう。アンカー状木製品は、丸太様の木材を利用して接地面を増やし、重量を分散することで、杭の沈降を防ぎつつ、木材の重量によって重心を安定させて、杭の浮遊や傾斜を防いだものと考えられる。

石積遺構北側には黒褐色からオリーブ黒色の土層があり、第5層の赤褐色土と明確に異なっている（冒頭概要写真11）。掘削の結果、溝内の土層はいわゆるレンズ状の堆積をしており、自然堆積に近い形で堆積したと考えられる。このため、石積遺構や第5層の形成後に、自然に埋め戻っていったものと考えられる。一方で、石積遺構や土留板列の前には棚状の盛土遺構がみられた。第59図D-D'では棚状遺構の肩には細い横木があり、棚状遺構を区画したのと考えられる。一方で、E-E'には横木が検出されなかったため、全体に設置されたものではないと推定される。

33号遺構西側では、石積遺構とその裏込めを確認した。調査範囲の西側壁と52号遺構の間の約4mの範囲で確認した。遺構の西側は調査範囲外まで続いており、東側は52号遺構の杭によって失われていた。また、西側には66号遺構が掘り込まれ、石積が消失している。土留板列や溝内の棚状遺構は確認できなかった。胴木支えには丸太材ではなく、俗に土丹と呼ばれる軟質の石材^㉓を利用している。胴木は、調査範囲外まで続いており正確な長さ等は不明だが、使われている材は製材であった。また、端部の接手も33号遺構東側と同様に円形の孔を穿ち、ダボで固定している。また、胴木^㉓のように長さ1.3mと短いものもあった。胴木の上には石積遺構があり、利用されている間知石は東側と比べてやや大きい。また、東側と比べると、前面が揃わず雑然と積まれた印象を受ける。66号遺構の設置時等に、一度積み直された可能性がある。また、裏込めには木材や角礫は少なく、代わりに土丹を交えた土層が充填されていた。土丹は裏込めの下層に多く、最下層は土丹が密に詰まっていた。

99号遺構（第24表、図版30）33号遺構の対岸を検出する目的で、Ⅱ区の調査範囲の北壁の一部を掘削したところ、土留板列を検出した。33号遺構の石積遺構から北に3.5mを測る。33号遺構に伴う土留板列と対になる土留板である可能性があるが、99号遺構の周囲では間知石は確認できなかった。溝の埋立てに利用された土留板列と考えられる。

■建物基礎

2号遺構（第65・66図、第29表、図版30）Ⅰ区東側で検出した。北辺、西辺、南辺を確認し、北辺と南辺は調査範囲外へ続くようである。検出範囲で南北10m、東西9mを測り、方形の遺構であると推定される。第1層の掘乱により、西辺、南辺は残存状況が悪かったものの、北辺は良好に残存していたため、ここでは北辺の観察をもとに報告する。

遺構は、深さ約40cmの溝を掘り、そこに杭を2列打ち込み、その間を拳大から人頭大の円礫で

充填している。このため、本遺構は円礫充填建物基礎と呼称して報告する。円礫はほぼ全面が自然面であり、白色に近い堆積岩であった。杭は径 15～20cm のものを利用しており、地中深く打ち込まれていた。杭のうち良好な 2 点をサンプルとして抜き取り、観察、図化した（第 66 図）。杭は枝を落として皮を剥いた幹を用いた丸木材で、長さは約 3m である。上端部には敲打痕がみられる。特に杭 2 では顕著である。敲打痕が上端部の縁辺にもみられ、縁辺部が削れている。敲打痕は杭ごとに程度が異なるため、杭を打ち込んだ際に遺されたものであろう。また、上端部に釘などを打ち込んだ痕跡はなかった。側面には明確な加工痕はなく、下端部は先端を尖らせるように加工していた。

2 号遺構は、35 号遺構などの建物基礎下部の構造によく似ている。しかし、35 号遺構では杭に伴う掘方は見られず、充填される礫も角礫が含まれていた。また、35 号遺構では杭の上端を繋ぐように横木が設置されて釘で留められていたが、2 号遺構では横木や釘の痕跡が見られないなど、各所に違いが認められる。府立第一高等女学校校舎配置図（第 8 図）や府立第一高等女学校（第 9 図）の写真にも 2 号遺構の位置に建物は認められず、府立第一高等女学校時代以前の建物と推測される。

24 号遺構（第 67 図、第 29 表、図版 30）Ⅰ・Ⅱ区にまたがって検出した。第 5 層上面にあり、西辺、北辺、東辺を確認した。一方で南辺は確認できず、攪乱を受けた形跡もないため、平面形は南側が開いたコの字形である。遺構は幅 1m の溝状であり、溝の中には覆土とともに多量の瓦片が充填されていた。遺構から出土した瓦片のほとんどが平瓦であり、一部に軒丸瓦、軒平瓦が混入する。特徴的な瓦片については遺物の項で詳述するが、軒丸瓦は揚羽蝶紋、軒平瓦は古手のものである。また、瓦片の多くは被熱しており、覆土にも焼土が多く含まれているため、火災等を受けたものを利用して建物基礎を構築したと考えられる。

Ⅳにて詳述のとおり、元浅草遺跡の土地は明暦 3（1657）年より岡山藩池田家が所有しており、その屋敷は寛文 8（1668）年の火災にて焼失している。岡山藩池田家の家紋は揚羽蝶であるが、24 号遺構出土の蝶紋とはやや異なっている。しかし、後続して屋敷を構えた本多家、酒井家は揚羽蝶紋を利用しないことから、出土した瓦は池田家に関連する軒丸瓦であると考えられ、軒平瓦の年代観とも一致する。本遺構は、焼失した池田家屋敷の瓦を用いて構築したものと考えられ、本多家時代の初期である 17 世紀後葉から 18 世紀初頭の遺構と推測される。

■井戸

12 号遺構（第 68 図、第 30 表、図版 30）Ⅰ区南側で検出した。第 1 層による攪乱を受けており、側板上端は破断していた。断割り調査により側板を 2 段確認し、また、側板の上段は竹製のタガによって留められていることがわかった。湧水のある粘土層まで掘り込まれていることから崩落の危険があるため、側板下段の上端を確認した時点で調査を打ち切った。湧水層まで掘り込まれることから掘り抜き井戸であると考えられる。また、側板には掘方があり、掘方は第 5 層の最下層部の土層により埋められていることから、第 5 層の盛土を行う以前から井戸が設置されていた可能性がある。

26 号遺構（第 68 図、第 30 表、図版 31）Ⅰ区南側で検出した。平面は円形で、ほぼ垂直に掘り込まれている。覆土は第 6 層に近いオリープ黒色の粘土で、礫や瓦片、焼土を含む。当初土坑の可能性もあったが、湧水層に達しても堅坑が掘られていることから、側板をともなわない素掘りの掘り抜き井戸であると考えられる。深度が深く、底面の確認には至っていない。

【池遺構底面検出の井戸】

池遺構下層の調査を行っていたところ、南西隅の底面に円形の側板列を検出した。このため周囲を調査したところ井戸2基(95・97号遺構)とそれを繋ぐ木樋(96号遺構)、95号遺構を囲う木枠(98号遺構)を検出した。池遺構の底面にあり、それぞれの遺構は海拔0m前後で確認された。遺構の周囲は湧水のある軟質な粘土層であったため崩落の危険性が高く、全体を掘削することはできなかった。95号遺構(第69図、第30表、図版31)上下2段の側板を確認したが、先述のとおり全体を掘削しておらず、上段は上端から中位まで、下段は上端部のみを確認した。側板上段の上端で海拔0.3mであり、他の盛土上面と比較するとかなり低いため、さらに上段の側板があったものと推定される。底板を確認できなかったため、掘り抜き井戸であると考えられる。

96号遺構(第69・70図、第31表、図版31)95号遺構と97号遺構を連結する木樋である。95号遺構側が高く、97号遺構に向けて導水していたと考えられるが、97号遺構側の連結部が板によって止水されていたため、いずれかの段階で止水したものと考えられる。使用された木樋は、胴は芯材のくりぬきで、蓋は一枚蓋である。なお、木樋について、樹種同及び年輪年代学的検討を依頼し、IVにご寄稿をいただいた。

97号遺構(第69図、第30表、図版31)側板1段と底板を確認した。側板は96号遺構接続部以下のみ検出している。底板は一部のみ残存していた。側板上端で海拔0mを下回り、覆土にも側板の破片が含まれることから、本来はさらに上位まで側板が設置されていたと考えられる。また、底板があることから溜井戸であったと考えられる。当初掘り抜き井戸(95号遺構)から木樋(96号遺構)を通して導水し、溜井戸(97号遺構)として利用していたものが、何らかの理由で板による止水を行い、97号遺構を廃絶したものと考えられる。95号遺構も同時に廃絶するのであれば96号遺構を止水する必要はないため、97号遺構廃絶後も95号遺構が一定期間利用されていたと推定される。

98号遺構(第69図、図版31)95号遺構を囲う木枠である。西辺と北辺を確認した。東辺は掘削範囲では確認できず、南辺は調査範囲外である。西辺は96号遺構の下位にあり、上端部は96号遺構の底面に接していた。そのため、98号遺構は96号遺構の設置前に構築されたと考えられ、95号遺構の構築の際に、軟質土壌の崩落を防ぐために設けられた土留板と推測される。

■その他の遺構

【埋設桶】

埋設桶は4基あり、全てI区北東で検出した。それぞれの埋設桶は南北に、ほぼ等間隔で並んでいる。それぞれの芯々間は約1.5mである。第1次調査でも同様の遺構を多数検出しており、墓と報告されている。第2次調査では、墓跡と断定できるような痕跡は認められなかったため、埋設桶として報告する。

1号遺構(第69図、第32表、図版31)底板と掘方を確認した。削平を受けており、北側の一部や、側板は検出できなかった。土層には側板の痕跡が遺されていたため、埋設桶であったと考えられる。底板は4枚の板からなり、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈する。掘方も類する形状であったと考えられるが、削平のため不明である。

3号遺構(第69図、第32表、図版31)底板と一段の側板、掘方を確認した。当初円形の遺構を確認し、掘削したところ側板と底板が残存する埋設桶であった。覆土から板状の木片を検出しており、埋没時に側板が落下したものと考えられる。また、側板の下端は底板を超えて地中に沈みこんでいた。側板

の設置時に押し込まれたものと考えられる。

4号遺構(第69図、第32表、図版31) 底板と一段の側板、掘方を確認した。当初円形の遺構を確認し、掘削したところ側板と底板が残存する埋設桶であった。3号遺構と同様に、覆土には埋設時に落下したと考えられる側板が含まれ、側板の下端部は下位の土層に沈みこんでいた。また、遺構南側の掘方と側板の間には瓦片が設置されていた。側板を支えるための裏込めと考えられる。

22号遺構(第71図、第32表、図版32) 底板と一段の側板、掘方を確認した。当初円形の遺構と側板の上端を検出し、掘削したところ側板と底板が残存する埋設桶であった。3・4号遺構と同様に側板の下端部が下位の土層に沈みこんでいた。また、検出面で瓦片も検出しており、4号遺構の裏込めの瓦片と同様の機能を担っていた可能性が考えられる。

【木枠土坑】

9号遺構(第71図、第33表、図版32) I区北東で検出した。東側に17号遺構があり、17号遺構の覆土を掘り込んで構築される。平面形は南北方向に長軸を持つ長方形を呈する。掘方の壁面に側板を貼付けて構築されており、掘方壁面、側板ともにほぼ垂直に立ち上がる。覆土に遺物や小礫、木片、灰色砂粒、炭化物、焼土ブロック等を含んでおり、廃棄土坑であった可能性が考えられる。

23号遺構(第71図、第33表、図版32) I区中央西側で検出した。24号遺構と同様に、第5層上面に掘り込まれた遺構である。平面形は南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈する。掘方はやや開きながら立ち上がり、西辺・北辺・東辺の掘方壁面に側板が設置されていた。側板は薄く、剥がれて底面に落下したものもある。また、北辺(C-C)・東辺(D-D)の側板をみると、本来は長方形の側板であったものの、削平等により上端が削られているようである。第5層も含め、本来はさらに高い位置に上面があったものと推測される。

21号遺構(第71図、第33表、図版32) I区中央西側で検出した。23号遺構の南側にある。上面及び覆土に攪乱を受けており、特に南側で攪乱の影響が大きいものの、平面方形の遺構を検出した。木枠は板ではなく角状の木材を利用しており、西辺・北辺に沿って設置されている。また、北辺・東辺・南辺では、木材より低い壁面に漆喰が塗られていた。湿気を抑制するためのものと推測されるが、底面には塗られておらず、詳細は不明である。

25号遺構(第72図、第33表、図版32) I区中央北側で検出した。遺構上面に第1層による攪乱を受けている。底板と側板、掘方を検出した。掘方の平面形は長方形を呈し、底板は掘方底面とほぼ同規模である。側板も掘方に沿って設置されたと考えられ、木枠は箱状を呈する。覆土には小礫や木片などを含むが、貯蔵や埋納したと考えられる遺物などは出土しなかった。

29号遺構(第72図、第33表、図版32) I区中央北側の第6層上面で検出した。遺構上面に第1層による攪乱を受けている。底板と掘方を検出し、土層観察から側板は腐ってしまったものと考えられる。掘方の平面形はほぼ方形であり、底板は掘方底面とほぼ同規模である。腐敗した側板の外側に掘方の土層が認められず、掘方に沿って側板を設置したと考えられる。25号遺構と同様に木枠は箱状を呈していたと考えられる。覆土には炭化物粒子を含むものの遺物はなく、この土坑の性格は不明である。

【その他の土坑】

85号遺構(第72図、第33表、図版32) III区中央で検出した。一辺3mを超える方形の土坑である。

西辺・北辺の壁際には灰褐色粘土が貼り付けられていた。また、中央北側の壁沿いで10cm程度掘り込まれ、段状になっている箇所があった。しかし、西側及び南側に緩やかに立ち上がり、同一の底面となっている。遺構の覆土は第6層に近い黒褐色の粘土層であり、遺物や貝片を含むほか、遺構西側では拳大から人頭大の礫が多数含まれていた。

89号遺構(第72図、第33表、図版32) 89号遺構の底面で検出した。平面形は東西方向に長軸を持つ隅丸長方形を呈する土坑である。底面に深さ3cm程度の掘り込みがある。覆土は第6層に近いオリブ黒色粘土質土で、砂を多く含んでいる。

27号遺構(第72図、第33表、図版33) I・II区の境界付近のI区側にあり、24号遺構の内部にある。円形の土坑で、覆土及び周囲に小礫が散っている。また、覆土にもロームのような粒子が含まれており、第5層の土層が流れ込んだものと考えられる。先述のように24号遺構の内部にあるが、関係は不明である。

31号遺構(第73図、第33表、図版33) II区東側の第5層上面で検出した円形の土坑である。壁面はやや開いて立ち上がる。覆土は黒褐色土で、焼土や炭化物、小礫を多く含む。また、下層は灰色粘土を含む。

68号遺構(第73図、第33表、図版33) III区南西で検出した。北側に52号遺構の杭が打ち込まれておりその周囲は攪乱されている。平面形は北側に向かって細くなる隅丸長方形であり、断面は南側で直に立ち上がるものの、北側は緩やかに立ち上がる。いわゆる舟形の土坑である。遺構の内部には木材が多量にあり、木材の隙間に黒褐色土が充填されているような状況であった。木材には板状のものや角状のものなど様々な形状があり、一部には臍穴のような加工が施されていた。建材として利用された木材を投棄した土坑と考えられる。

72号遺構(第73図、第33表、図版33) III区南西隅で検出した。68号遺構に隣接する。南側は調査範囲外であり、検出範囲の平面形は長方形を呈する。壁面は僅かに開きながら立ち上がる。68号遺構と同様に、覆土には多量の木材を含むが、検出したうち上層は遺物が少なく、下層には木材や木っ端がぎっしりと詰まっているような状態であった。68号遺構と同様に木材を投棄するための土坑であったと考えられる。68号遺構に投棄された木材と比べると、72号遺構のものは細かい破片が多くみられる。

69号遺構(第73図、第33表、図版33) III区南西で検出した。69・70・74号遺構は連なって検出し、新しいものから70号遺構→69号遺構→74号遺構の順である。当初、69・74号遺構は一つの土坑として調査を開始したが、土層観察や69号遺構の立ち上がりから別の遺構であることが判明した。69号遺構は不定形の平面を呈し、底面は中央部でやや深くなり、南側に向けて緩やかに立ち上がる。一方北側はやや垂直に立ち上がるようである。覆土には遺物や木片、小礫が多く、68・72号遺構と同様の廃棄土坑であったものが、削平されて浅い状態で検出されたと考えられる。

70号遺構(第73図、第33表、図版33) 69・74号遺構と重なり合う遺構で、一連の中では最も新しい土坑である。土坑壁面は緩やかに立ち上がるが、これは削平を受けて底面付近のみ検出した影響であると考えられる。覆土には遺物や木片、小礫が多く、69号遺構と同様に、廃棄土坑であったものが、削平されて浅い状態で検出されたと考えられる。

74号遺構(第73図、第33表、図版33) 69・70号遺構と重なり合う遺構で、一連の中で最も古

い遺構である。他の2遺構に比べると遺構は良好に残存している。平面は隅丸方形を呈し、壁面はほぼ直に立ち上がる。覆土には遺物や木片、小礫が多く、69・70号遺構と同様に、廃棄土坑であったと考えられる。

71号遺構(第73図、第33表、図版33) III区中央東側で検出した。円形の浅い土坑である。覆土には木片や遺物が含まれ、69・70・74号遺構と同様に、廃棄土坑であったものが、削平されて浅い状態で検出されたと考えられる。

【溝】

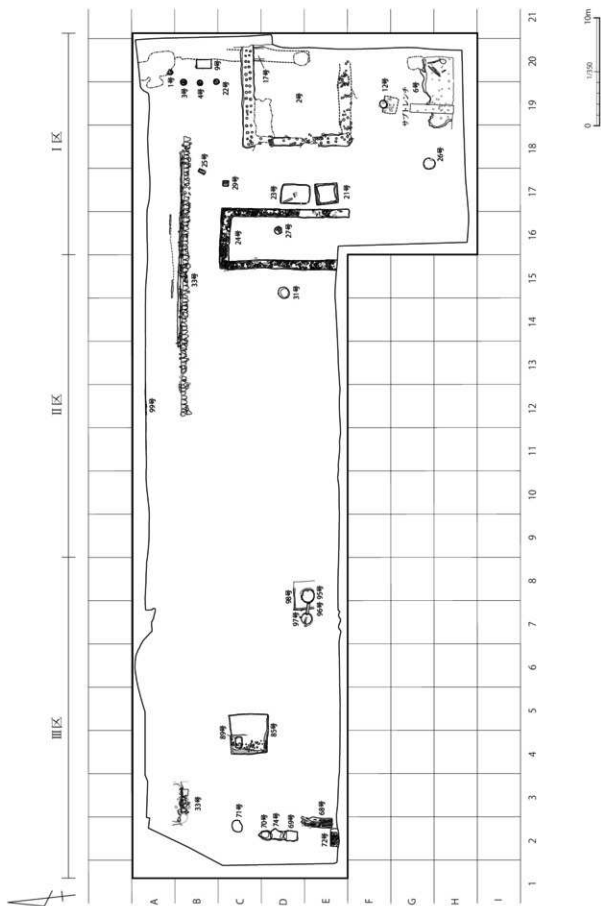
17号遺構(第72図、第34表) I区東側にあり、調査範囲の壁際に沿って南北に延びる溝である。一部を2・9号遺構に切られる。調査範囲の壁面はコンクリートガラなどを多く含んでおり、崩落の危険性があったため、17号遺構の調査はプランの確認と一部の掘削に留めた。幅は1.2～1.5mを測り、掘削した部分では深さ13cmと浅い溝であった。覆土には炭化物や瓦片などの遺物が混じる。

【遺物集中部】

6号遺構(第74図、第35表、図版34) I区南東から南側で検出した。東側及び南側は調査範囲外である。多数の遺物を包含する土層を検出したものの、周囲は第1層による攪乱を受け、範囲が不明であった。このため、サブトレンチを設定し、土層の確認と範囲の確認を行ったが、やはり範囲や形状は不明瞭であった。このため、遺物を多く含む土層(第74図A-A'の1層)をこの遺構の覆土と定め、この覆土の範囲を6号遺構として掘削した。覆土中には木片や貝片のほか、多数の遺物が含まれていた。68・72号遺構のような遺物の廃棄土坑である可能性が高いが、土坑としての形状を確認できなかったため、遺物集中部として報告した。(山崎太郎)

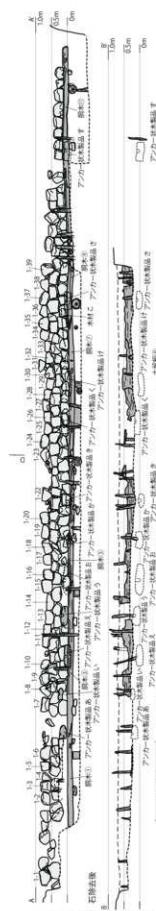
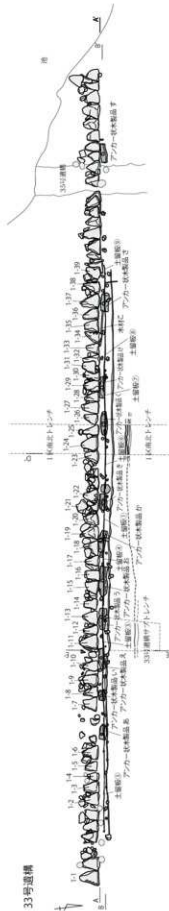
【註】

- (1) 墨田区横綱一丁目埋蔵文化財調査会『本所御蔵跡・陸軍被服工廠跡』株式会社NTTドコモ・東日本電信電話株式会社、株式会社NTTドコモファシリティーズ、墨田区横綱一丁目埋蔵文化財調査会
- (2) 常滑市教育委員会編1994『特別展 土管の歴史展～飛鳥から現代まで～』常滑市
- (3) 正確には岩石ではなく、シルトや粘土が固結したものとされる。本遺跡の土丹は青灰色で、第6層が固結したものであると考えられる。

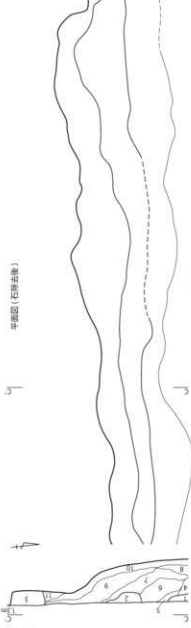


第57図 IV面遺構全体図 (1/350)

33号遺構

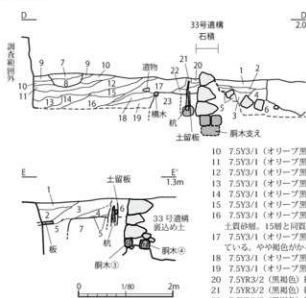


- 33号遺構C-C
- 1 5Y23.4 (南点部) 柳ノ丸、藁付やや丸、積層色灰土 $1 \sim 3$ 段、 $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ 土ワラック 2 、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段
 - 2 5Y23.4 (北点部) 柳ノ丸、積層、藁・間接付、 4×4 - 3 段、 $10 \sim 20\text{mm}$ 色瓦 1 、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段
 - 3 5Y23.1 (4リ-7間) 柳ノ丸や丸、積層、間接付、 4×4 - 3 段、 $\phi 2 \sim 10\text{mm}$ 色瓦 1 、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段、 $10 \sim 20\text{mm}$ 土ワラック 2 、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段
 - 4 5Y23.6 (南点部) 柳ノ丸、藁付丸、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段、 $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ 色瓦 1 、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段
 - 5 5Y23.1 (4リ-7間) 柳ノ丸、藁付やや丸、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段、 $10 \sim 20\text{mm}$ 土ワラック 2 、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段
 - 6 5Y23.1 (4リ-7間) 柳ノ丸、藁付やや丸、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段、 $10 \sim 20\text{mm}$ 色瓦 1 、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段、 $10 \sim 20\text{mm}$ 土ワラック 2 、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段
 - 7 5Y23.1 (4リ-7間) 柳ノ丸や丸、積層、間接付、 4×4 - 3 段、 $\phi 2 \sim 10\text{mm}$ 色瓦 1 、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段
 - 8 25X23.1 (南点部) 柳ノ丸や丸、積層、 4×4 - 3 段、 $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ 色瓦 1 、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段、 $10 \sim 20\text{mm}$ 土ワラック 2 、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段
 - 9 25X23.3 (南点部) 柳ノ丸、積層、 4×4 - 3 段、 $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ 土ワラック 2 、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段
 - 10 25X4.1 (北点部) 柳ノ丸、積層、 4×4 - 3 段、 $10 \sim 20\text{mm}$ 土ワラック 2 、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段
 - 11 10Y23.255-10Y23.4 (南点部) 柳ノ丸、藁付丸、 10×10 - 7 段、 10×10 土ワラック 2 、 $200 \times 200 \times 3$ - 5 段



第 58 図 33号遺構 (1) (1/120)

33号遺構

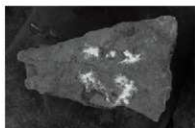


33号遺構D-D'

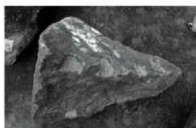
- 1 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締り強、粘性やや弱、砂混じり土。わずかに褐色がかる。
- 2 7.5Y2/1 (黒色) 締りやや弱、粘性やや弱、上部に礫混。砂混じり粘土層。今やオリーブ色がかる。
- 3 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締りやや弱、粘性強、含水多い砂混じり粘土層
- 4 7.5Y2/2 (オリーブ黒色) 締りやや強、粘性弱、 $\phi 3\text{mm}$ 炭化物粒混。砂混じり粘土層
- 5 7.5YR3/1 (黒褐色) 締り強、粘性強、灰白粘土ブロック混。粘土ブロックが強く突き固められている。
- 6 7.5Y2/2 (オリーブ黒色) 締りやや弱、粘性強、地山層。
- 7 7.5Y2/2 (オリーブ黒色) 締りやや強、粘性強、 $\phi 1\text{--}10\text{mm}$ 小礫混。砂層。上位からの遺品か。
- 8 7.5Y3/1 (黒色) 締り強、粘性やや弱、 $\phi 5\text{--}15\text{cm}$ 礫混。遺品か。
- 9 7.5Y3/2 (オリーブ黒色) $\phi 1\text{--}2\text{mm}$ 焼土粒混。砂質土層。
- 10 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締りやや弱、粘性弱、白色貝片？混。砂混じり土。
- 11 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締りやや弱、粘性弱、白色貝殻片5%混。砂混じり土。10層より砂粒多い。
- 12 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締りやや強、粘性無、白色貝殻片3%混。砂層。
- 13 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締りやや強、粘性弱、砂層。12層よりやや粘性強い。
- 14 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締り強、粘性やや強、砂混じり粘土層、1層より粘土っぽい。
- 15 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締りやや弱、粘性強、砂混じり粘土層、砂粒多い。
- 16 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締りやや弱、粘性やや強、 $\phi 5\text{--}8\text{cm}$ オリーブ黒色粘土ブロック状に混。粘土質砂層。15層と同質。
- 17 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締りやや弱、粘性やや弱、 $\phi 3\text{--}5\text{cm}$ 小礫混。砂混じり粘土層で、ボソボソしている。やや褐色がかる。砂混じりボソボソしている。流れ込みか。
- 18 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締り強、粘性やや強、粘土層。粒が細かく、やや褐色がかる。
- 19 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締り強、粘性やや強、砂混じり粘土層。18層類似だが砂混じる。
- 20 7.5YR3/2 (黒褐色) 締りやや強、粘性やや強、 $\phi 3\text{--}5\text{cm}$ 黒褐色ロームブロック多。
- 21 7.5YR3/2 (黒褐色) 締り強、粘性やや強、20層類似だが締りより強く、ブロックが大きい。
- 22 7.5YR3/2 (黒褐色) 締り強、粘性やや強、焼土ブロック主体。20・21層よりやや弱い。
- 23 7.5YR3/2 (黒褐色) 締り強、粘性やや強、22層と同質。強く突き固められている。

33号遺構E-E'

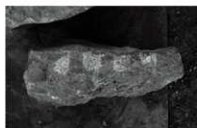
- 1 7.5YR3/2 (暗褐色) 締りやや強、粘性弱、 $\phi 1\text{cm}$ 小礫・ローム・焼土混。砂が多量に混じる。
- 2 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締りやや強、粘性やや弱、貝殻片混。砂混じり粘土層。
- 3 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締りやや弱、粘性やや強、 $\phi 1\text{--}2\text{cm}$ 小礫混。2粘土ブロックと砂粒の混合層。層類似だが2層より粘性強い。
- 4 7.5Y3/2 (オリーブ黒色) 締り強、粘性やや強、粘土ブロックを主体とし、砂粒混じる。褐色がかる。
- 5 7.5Y3/1 (オリーブ黒色) 締り強、粘性強、硬かに砂が混じる粘土層。
- 6 7.5YR4/3 (褐色) 締り弱、粘性やや弱、 $\phi 3\text{--}5\text{cm}$ 小礫混。ロームブロック主体。ブロックを密に充填するが、崩れやすい。
- 7 7.5YR3/2 (黒褐色) 締り強、粘性強、ローム混。ロームブロック多く、かなり均質。



1-12 矢穴 (尾)



1-34 矢穴 (側面)



3-23 矢穴 (側面)



2-19 矢穴 (前面)



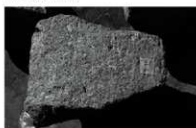
3-2 矢穴 (前面)



3-29 矢穴 (側面)



3-4 工具痕 (前面)



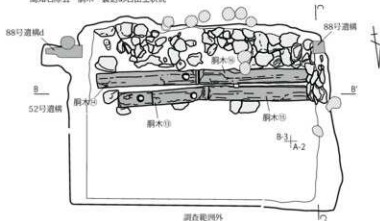
3-32 自然面 (側面)

第59図 33号遺構 (2) (1/80)

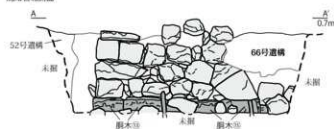
周知石出土状況



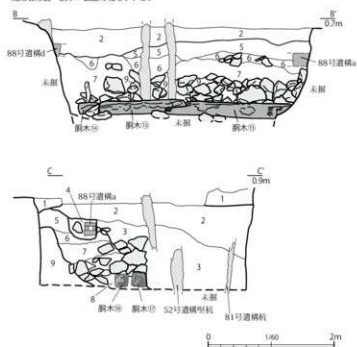
周知石除去 薪木・裏込め石出土状況



周知石北側面



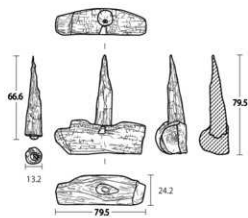
周知石除去 薪木・裏込め北セクション



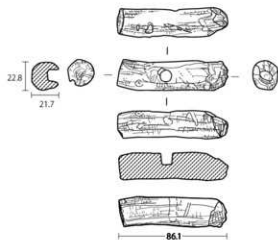
33号遺構 B-B・C-C

- 1 2.5Y3/1 (黒褐色) 練り強く、粘性有。φ10~30mm砂礫3~5%混。砂凝じり土。
- 2 10YR3/2 (黒褐色) 練りやや強く、粘性やや強い。φ3~5mm炭化物3~5%混。φ5~10mm黒褐色粒子5~7%混。含有物は下層に多い。
- 3 7.5YR3/2 (黒褐色) 練り有、粘性有。φ5~10mm黒褐色粒子・φ10~20mm砂礫1~3%混。後に砂凝じる。
- 4 5Y3/1 (オリーブ黒色) 練りやや強く、粘性有。φ5~10mm褐色土ブロック3~5%混。φ10~20mmオリーブ黒土ブロック7~10%混。ブロックは下層はど多い。
- 5 10YR2/3 (黒褐色) 練り強く、粘性有。φ10~20mm砂礫3~5%混。φ5~20mm褐色土ブロック25~30%混。
- 6 2.5Y3/2 (黒褐色) 練り有、粘性やや強い。φ5~10mm灰褐色土ブロック3~5%混。φ10~30mm褐色土ブロック5~7%混。
- 7 10YR2/2 (黒褐色) 練り有、粘性有。φ5~30mm褐色土ブロック7~10%混。上層ほど粒度が大きい。5層類似土層。
- 8 2.5GY3/1 (暗灰オリーブ色) 人頭大の礫多数の中に、9層の粘土が混在する。
- 9 2.5GY3/1 (暗灰オリーブ色) 練り有、粘性強い。φ5~5mm黒色粒子1~3%混。地山層。

第60図 33号遺構 (3) (1/60)

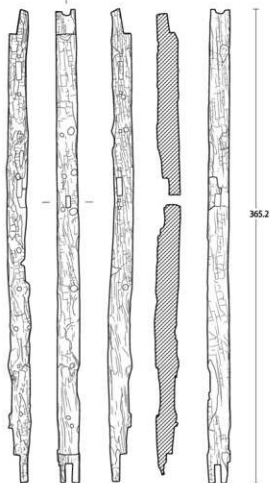


33号遺構 杭+アンカー状木製品が



81号遺構下出土 アンカー状木製品

①連結端 (西端)



東端

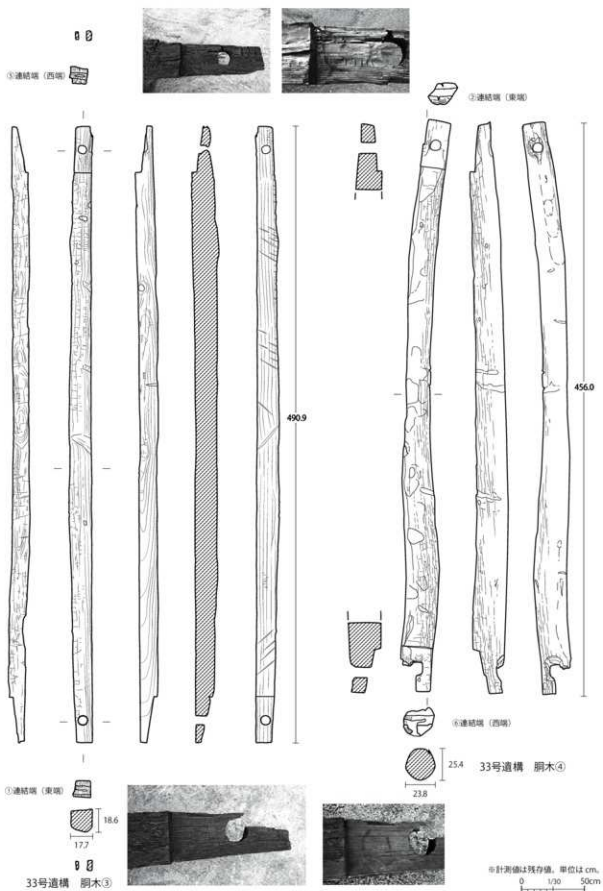


33遺構 桐木①

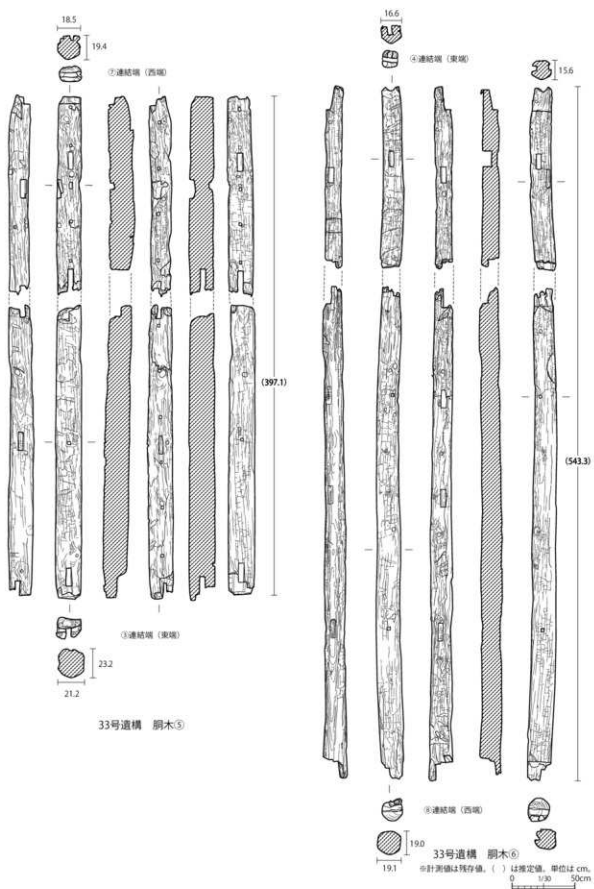


33遺構 土留め板② (残存部分のみ)

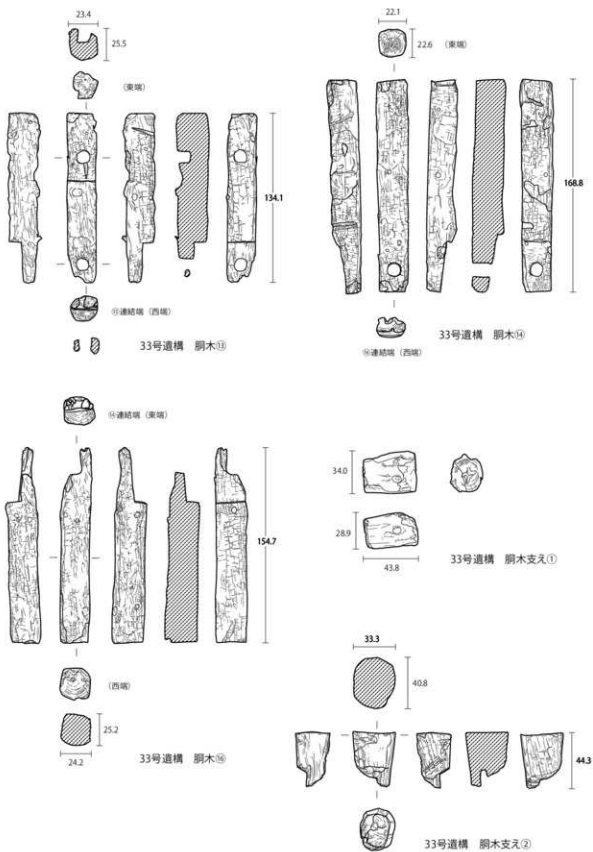
※計測値は残存値。単位はcm。
 0 1/30 50cm



第 62 図 33号遺構 (5) (1/30)



第63図 33号遺構 (6) (1/30)



※計測面は保存端。単位は cm。
 0 1/30 50cm

第 64 図 33号遺構 (7) (1/30)

第26表 石積遺構計測表

遺構名	棟号	図面番号	調査区	グリッド	確認箇所	確認品	種類	積出延長(m)	高さ(m)	長軸方向	積造時期	備考
33号遺構	35B-64B	図面24-30	I-Ⅱ区	B12-18 B3	南縁	灰土	石積遺構	(約)27	0.6	N 83° E	近世	調査範囲を案内に陥穽するよう注意する。西縁は調査範囲外へ続く。

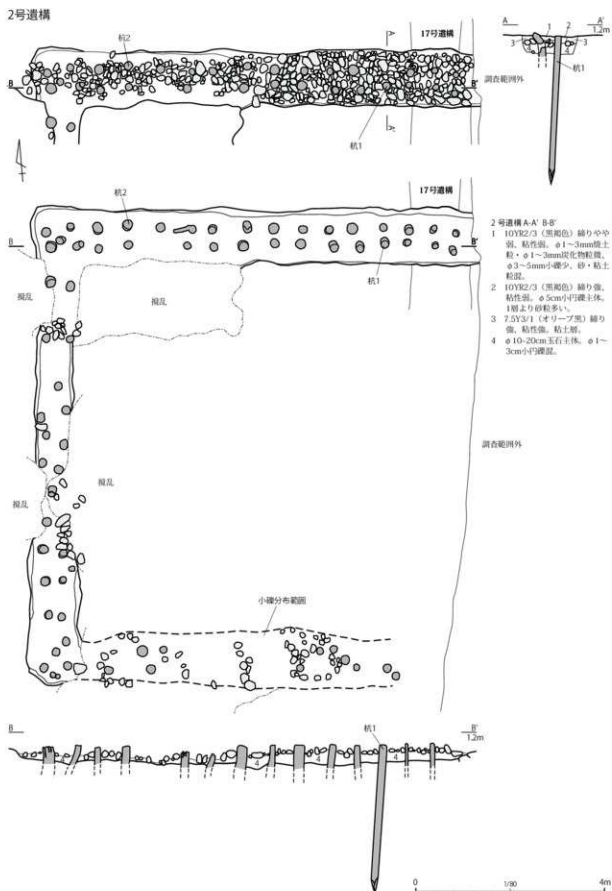
第27表 33号遺構間知石一覽表

No	位置	積数	実測寸法 (cm)			備考・欠欠	位置	種類	積造時期	積石の積層			備考	
			長軸	短軸	厚さ					積層	積層	厚さ		
1.1	I区	積段	48	35	58		知石	灰	前	2.10	多	0.5.1	少	多孔質
1.2	I区	積段	40	30	45		知石	灰	前	2.10	多	0.5.1	少	多孔質
1.3	I区	積段	33	35	48		知石	灰	中	0.5.2	中	1.3	多	×
1.4	I区	積段	28	28	44		知石	赤灰	前	1.3	中	1.1	少	×
1.5	I区	積段	29	29	41		知石	赤灰	前	1.3	中	1.1	少	×
1.6	I区	積段	44	31	43		自然存在							
1.7	I区	積段	46	28	44		知石	赤灰	前	1.2	少	1.1	少	×
1.8	I区	積段	34	33	48		知石	赤灰	前	2.10	多	0.5.1	少	多孔質
1.10	I区	積段	32	37	43		知石	赤灰	前	2.10	多	0.5.1	少	多孔質
1.11	I区	積段	44	19	58		知石	赤灰	前	2.10	多	0.5.1	少	多孔質
1.12	I区	積段	34	24	48		知石	赤灰	前	2.3	多	0.5.1	少	×
1.13	I区	積段	30	30	46		知石	赤灰・灰	前	1.3	少	不明	×	
1.14	I区	積段	48	28	45		知石	灰	前	2.10	多	0.5.1	少	多孔質
1.15	I区	積段	41	36	42		知石	積灰	前	2.10	多	不明	×	
1.16	I区	積段	30	30	38		知石	赤灰	中	1.4	多	不明	×	
1.17	I区	積段	38	38	44		自然存在							
1.18	I区	積段	47	23	49		知石	赤灰	中	1.3	中	1.2	少	×
1.19	I区	積段	43	26	59		前面上に積層							
1.20	I区	積段	36	27		知石	赤灰	中	1.4	多	不明	×		
1.21	I区	積段	42	30	50		自然存在							
1.22	I区	積段	40	30	47		知石	赤灰	前	1.2	少	1.1	少	×
1.23	I区	積段	43	32	43		知石	赤灰	中	1.4	多	不明	×	
1.24	I区	積段	32	21	53		知石	赤灰	中	1.1	多	不明	×	
1.26	I区	積段	30	20	44		知石	赤灰	中	1.3	多	1.2	中	×
1.27	I区	積段	39	17	60		知石	赤灰	中	0.5.3	多	不明	×	
1.28	I区	積段	30	16	46		知石	赤灰	中	1.2	中	1.2	中	×
1.29	I区	積段	30	22	68		知石	赤灰	中	1.3	多	不明	×	
1.31	I区	積段	32	26	47		知石	赤灰	中	1.1	中	不明	×	
1.32	I区	積段	31	15	59		知石	赤灰	中	1.4	多	不明	×	
1.33	I区	積段	33	19	43		知石	赤灰	前	2.7	多	不明	×	
1.34	I区	積段	31	27	51		知石	灰	中	1.3	中	1.1	少	×
1.35	I区	積段	40	38	61		知石	赤灰・積灰	中	1.3	多	不明	×	
1.36	I区	積段	25	19	62		知石	赤灰	中	1.3	多	不明	×	
1.37	I区	積段	38	18	71		知石	赤灰	中	1.3	多	不明	×	
1.38	I区	積段	37	22	53		知石	赤灰	中	1.3	多	不明	×	
1.39	I区	積段	36	26	46		知石	赤灰・灰	前	1.2	中	1.1	少	×
1.40	I区	積段	36	30	45		知石	赤灰	前	1.2	中	0.5.1	少	×
1.41	I区	積段	37	27	53		知石	赤灰	中	1.2	中	1.1	少	×
1-50	-	積段	39	27	68		前面上に積層							
2.1	-	積段	34	24	37		知石	赤灰	前	1.3	中	0.5.1	少	×
2.2	-	積段	26	28	49		知石	赤灰	前	1.2	中	不明	×	
2.3	-	積段	29	27	43		知石	赤灰	前	2.3	中	不明	×	
2.4	-	積段	46	30	44		知石	赤灰	前	1.2	少	1.1	少	×
2.5	-	積段	37	32	58		前面上に積層							
2.6	-	積段	44	29	34		前面上に積層							
2.7	-	積段	24	33	24		知石	赤灰	前	1.7	多	不明	×	
2.8	-	積段	31	23	47		西方縁 前面上に積層							
2.9	-	積段	39	30	62		知石	赤灰	中	1.3	多	不明	×	
2.10	-	積段	22	20	44		知石	赤灰	前	1.3	多	不明	×	
2.11	-	積段	22	18	41		知石	赤灰	前	1.1	少	不明	×	
2.12	-	積段	28	24	44		知石	赤灰	前	1.1	少	不明	×	
2.13	-	積段	33	32	54		知石	赤灰	前	1.1	少	不明	×	
2.14	-	積段	30	25	49		知石	赤灰	前	1.3	中	不明	×	
2.15	-	積段	36	29	47		知石	赤灰	前	1.3	中	不明	×	
2.16	-	積段	31	23	48		知石	赤灰	中	1.3	多	不明	×	
2.17	-	積段	37	27	56		知石	赤灰	中	1.3	多	1.2	中	×
2.18	-	積段	35	33	50		知石	赤灰	中	1.3	多	1.1	多	×
2.19	-	積段	38	30	60		知石	赤灰	中	1.3	多	1.1	多	×
2.20	-	積段	37	35	48		知石	赤灰	中	1.2	中	1.3	中	×
2.21	-	積段	37	32	54		前面上に積層							
2.22	-	積段	37	26	37		知石	赤灰	前	2.10	多	0.5.1	少	多孔質
2.23	-	積段	35	31	60		知石	赤灰	中	1.3	中	不明	×	
2.24	-	積段	32	37	54		知石	赤灰	前	2.10	多	不明	×	
2.25	-	積段	35	24	39		知石	赤灰	中	0.5.3	中	不明	×	
2.26	-	積段	38	30	51		知石	赤灰	中	0.5.3	中	不明	×	
2.27	-	積段	42	37	60		知石	赤灰	前	1.3	中	2.4	少	×
2.28	-	積段	35	31	47		知石	赤灰	前	1.2	少	不明	×	
2.29	-	積段	43	32	52		知石	赤灰	前	1.2	少	不明	×	
2.30	-	積段	37	35	48		知石	赤灰	中	1.2	中	2.5	少	×
2.31	-	積段	39	31	51		知石	赤灰	前	2.1	多	不明	×	
2.32	-	積段	37	27	57		知石	赤灰	前	2.4	中	不明	×	
2.33	-	積段	36	20	56		前面上に積層							

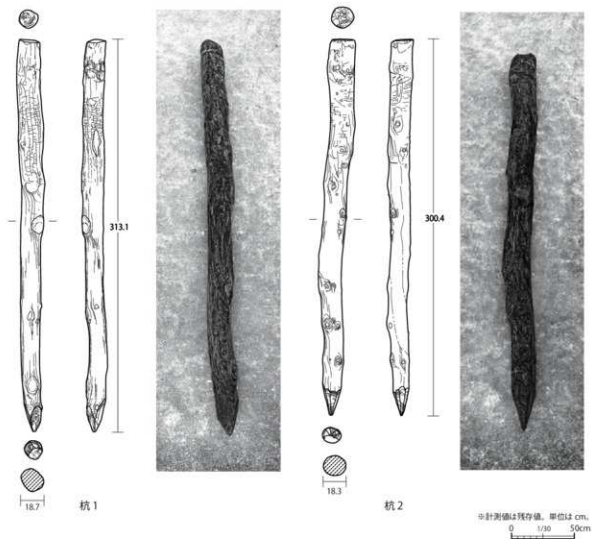
No	位置	図数	考古学的所見				新石器時代の遺構					調査箇所	備考		
			大まな土 (cm)			備考・矢印	層数 (縦×横×深さ (m))	姓名	色	結実	縦長			厚さ	
			高輪	短輪	高行方						縦長 (mm)				横長 (mm)
2.34	-	309	37	29	43	矢印	灰	粗	1.4	多	不明	多土質			
2.35	-	309	37	18	38	矢印	灰	粗	1.4	多	不明	多土質			
2.36	-	309	27	25	54	矢印	灰・赤土	中・粗	1.3	少	不明	×	横長したよみ交差に		
2.37	-	309	20	27	50	矢印	灰・赤土	中・粗	1.3	少	不明	×	横長したよみ交差に		
2.38	-	309	42	28	55	矢印	灰	粗	1.3	多	不明	多土質	高低右 5mm 少		
2.39	-	309	29	21	50	矢印	灰	中	2.0	多	不明	多土質	高低右 5mm 少		
2.40	-	309	40	15	55	矢印	灰	粗	2.0	多	不明	多土質			
2.41	-	309	39	22	50	矢印	灰	中	2.0	多	不明	×	横長したよみ交差に		
2.42	-	309	34	29	50	矢印	灰	粗	1.3	多	不明	多土質			
2.43	-	309	32	17	36	矢印	灰	粗	2.0	多	不明	多土質			
2.44	-	309	35	27	64	矢印	灰	中	1.3	多	1.1	少	多土質		
2.45	-	309	41	27	51	矢印	灰	中	1.3	多	1.1	少	多土質		
2.46	-	309	35	13	45	矢印	灰	中・粗	2.1	中	不明	×	高低右 7mm 少し		
2.47	-	309	40	22	52	矢印	灰	中・粗	2.1	中	不明	×			
2.48	-	309	35	18	42	矢印	灰	中・粗	2.1	中	1.2	中	×	前後部より、前後部で高低右側	
3.1	-	3次発	38	26	38	矢印	灰	粗	1.0	多	0.5	中	×		
3.2	-	3次発	44	30	45	矢印	灰	粗	1.3	中	1.3	中	多土質		
3.3	-	3次発	43	29	44	矢印	灰	粗	1.3	中	1.3	中	多土質		
3.4	-	3次発	35	28	47	矢印	灰	粗	1.3	中	1.3	中	多土質		
3.5	-	3次発	36	38	49	矢印	灰	粗	1.4	多	1.2	少	多土質		
3.6	-	3次発	44	32	54	矢印	灰	粗	1.10	多	1.1	少	多土質		
3.7	-	3次発	32	29	45	矢印	灰	粗	1.10	多	1.1	少	多土質		
3.8	-	3次発	34	27	51	矢印	灰	粗	1.3	多	3.1	少	多土質		
3.9	-	3次発	40	27	49	矢印	灰	粗	1.3	多	3.1	少	多土質		
3.10	-	3次発	33	35	42	矢印	灰	粗	0.5-2	中	2.3	少	多土質		
3.11	-	3次発	40	26	50	矢印	灰	粗	0.5-2	中	2.3	少	多土質		
3.12	-	3次発	31	29	43	矢印	灰	粗	0.5-2	中	3.6	少	多土質		
3.13	-	3次発	38	32	54	矢印	灰	粗	1.2	中	1.3	中	×		
3.14	-	3次発	45	23	36	矢印	灰	粗	1.10	多	1.1	少	多土質		
3.15	-	3次発	32	31	47	矢印	灰	粗	1.3	多	不明	多土質			
3.16	-	3次発	37	22	47	矢印	灰	粗	2.3	少	1.2	中	×		
3.17	-	3次発	45	31	48	矢印	灰	粗	1.3	多	不明	多土質			
3.18	-	3次発	33	29	58	矢印	灰	粗	1.3	中	1.1	中	多土質		
3.19	-	3次発	38	25	矢印	灰	粗	1.3	中	不明	多土質				
3.20	-	3次発	35	35	51	矢印	灰	粗	1.3	中	不明	多土質			
3.21	-	3次発	40	22	55	矢印	灰	粗	不明	1.1	0.9	多	×		
3.22	-	3次発	37	29	46	矢印	赤土	粗	1.3	少	0.2-2	中	×		
3.23	-	3次発	29	22	46	矢印	灰	粗	2.0	多	1.2	中	×		
3.24	-	3次発	37	28	47	矢印	灰	粗	1.3	少	1.2	多	×		
3.25	-	3次発	47	29	46	矢印	灰	粗	1.3	少	2.3	少	×		
3.26	-	3次発	37	34	46	矢印	灰	粗	1.3	多	2.6	少	多土質		
3.27	-	3次発	34	32	44	矢印	灰	粗	1.3	多	2.6	少	多土質		
3.28	-	3次発	35	26	37	矢印	灰	粗	1.3	多	2.6	少	多土質		
3.29	-	3次発	31	27	49	矢印	灰	粗	1.3	多	不明	多土質			
3.30	-	3次発	30	33	51	矢印	灰	粗	1.3	多	2.6	少	多土質		
3.31	-	3次発	34	29	43	矢印	灰	粗	1.3	多	2.6	少	多土質		
3.32	-	3次発	41	34	50	矢印	灰	粗	1.10	多	1.1	少	多土質		
3.33	-	3次発	32	30	43	矢印	灰	粗	1.10	多	1.1	少	多土質		
3.34	-	3次発	42	20	44	矢印	灰	粗	1.3	多	2.6	少	多土質		
3.35	-	3次発	39	27	50	矢印	灰	粗	1.3	多	不明	多土質			
3.36	-	3次発	38	29	58	矢印	灰	粗	1.10	多	1.1	少	多土質		
3.37	-	3次発	30	24	48	矢印	灰	粗	1.3	多	2.6	少	多土質		
3.38	-	3次発	36	27	44	矢印	灰	粗	1.3	多	不明	多土質			
3.39	-	3次発	34	17	57	矢印	灰	粗	2.6	多	不明	多土質	高低右 10mm 少し		
3.40	-	3次発	39	20	58	矢印	灰	粗	1.5	多	不明	多土質			
3.41	-	3次発	41	17	56	矢印	灰	粗	1.5	多	不明	多土質			
3.42	-	3次発	28	24	51	矢印	灰	粗	1.5	多	不明	多土質			
3.43	-	3次発	38	19	51	矢印	灰	粗	1.3	多	不明	多土質			
3.44	-	3次発	37	22	56	矢印	灰	粗	1.3	多	不明	多土質			
3.45	-	3次発	30	15	47	矢印	灰	中	1.3	多	不明	多土質			
3.46	-	3次発	35	12	60	矢印	灰	中	1.3	多	不明	多土質			
3.47	-	3次発	29	23	49	矢印	灰	中	1.3	多	不明	多土質			
3.48	-	3次発	26	17	54	矢印	灰	中	1.3	多	不明	多土質			
3.49	-	3次発	29	22	43	矢印	灰	粗	1.2	多	3.5	少	多土質	高低右 5mm 少し	
3.50	-	3次発	26	17	45	矢印	灰	粗	1.2	多	3.5	少	多土質		
3.51	-	3次発	36	21	50	矢印	灰	粗	1.3	多	不明	多土質			
3.52	-	3次発	30	17	56	矢印	灰	粗	1.2	多	3.5	少	多土質	高低右 5mm 少し	

第 28 表 土留板計測表

遺構名	測図番号	図面番号	調査区	グリッド	確認発掘区	確認区	種類	構造体延長 (m)	高さ (m)	基礎方向	埋没状態	備考
33号遺構	第28B	図面24-30	1区	B12-18	33号遺構 掘削区	N側	土留板列	17.0	0.6	N83° E	近埋	33号遺構の一部に片子土留板だが、33号遺構全体に片子土留板が認められ、土留板を片子土留板と見做す。
99号遺構	-	図面30	2区	A12	33号遺構 掘削区	E側	土留板	11.0	-	N60° W	近埋-近表	掘削区の一部を抽出したのみ。

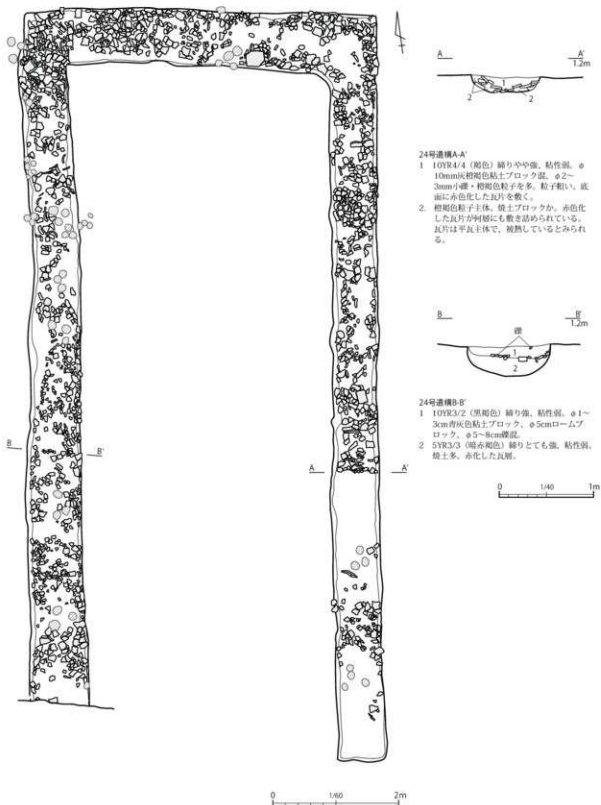


第65図 2号遺構 (1) (1/80)



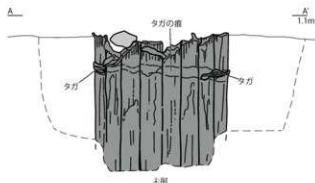
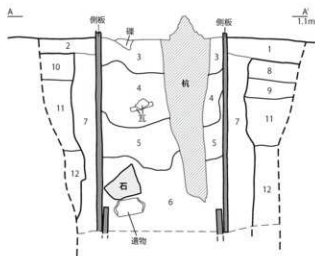
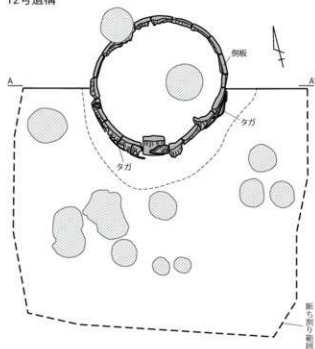
第66図 2号遺構 (2) (1/30)

24号遺構

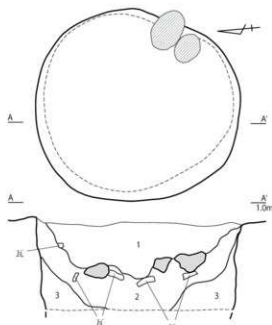


第 67 図 24号遺構 (1/60・1/40)

12号遺構



26号遺構



26号遺構A-A'

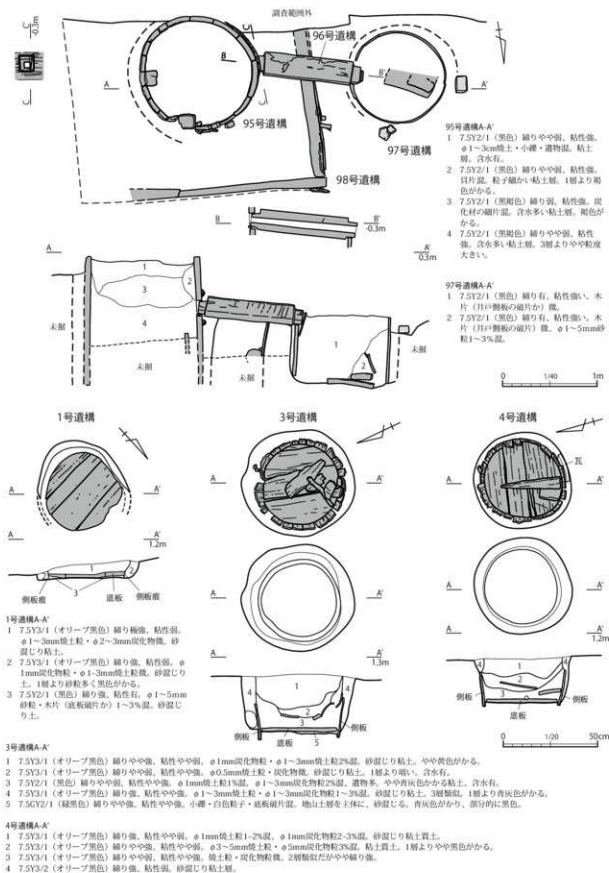
- 7.5Y2/2 (オリブ黒色) 締り弱, 粘性やや弱, $\phi 3\sim 5\text{mm}$ 焼土粒・ $\phi 5\text{mm}$ 炭化物粒1%混。遺物多。やや褐色がかる。含水多い。
- 7.5Y3/1 (オリブ黒色) 締り弱, 粘性強, 人頭大の礫・瓦混。含水多い粘土層。全体に青色がかる。1層との境目付近はやや黒色がかかり、締っばい。
- 7.5Y3/1 (オリブ黒色) 締りやや弱, 粘性やや強, $\phi 1\sim 3\text{mm}$ 焼土粒1%混。砂混じり粘土層。粘土は地山のものが。

12号遺構A-A'

- 2層-基本土層5層 3~6層-井戸覆土 7層-井戸開り方 8~12層-地山
- 7.5Y3/2 (オリブ黒色) 締り強, 粘性やや強, 砂礫3~5%混, $\phi 3\sim 10\text{mm}$ 褐色粒子7~10%混。後部の礫瓦か。
- 5Y3/2 (オリブ黒色) 締り強, 粘性有, $\phi 5\sim 10\text{mm}$ 褐色土ブロック7~10%混。10層に似るが砂粒を含む。
- 7.5Y3/2 (オリブ黒色) 締り強, 粘性有, $\phi 3\sim 5\text{mm}$ 褐色粒子・砂礫3~5%混。瓦混, 井戸の埋め土。
- 7.5Y3/1 (オリブ黒色) 締り弱, 粘性やや強, $\phi 1\sim 3\text{mm}$ 焼土粒1%混, $\phi 1\sim 3\text{mm}$ 青色粘土ブロック, $\phi 1\sim 2\text{cm}$ 小礫混。やや褐色がかる。
- 7.5Y2/2 (オリブ黒色) 締り弱, 粘性弱, $\phi 1\text{mm}$ 焼土粒混。4層より締るが空疎多い。砂粒多く、僅かに粘土混じる。
- 7.5Y2/1 (黒色) 締り弱, 粘性弱, 礫・遺物・木片多。わずかに粘土にばい。砂粒多く、僅かに粘土混じる。含水有。
- 7.5Y3/1 (オリブ黒色) 締り強, 粘性やや強, $\phi 20\sim 30\text{mm}$ オリブ黒色粘土ブロック20~30%混。砂粒混じる。土層片屑り方。
- 10Y3/2 (オリブ黒色) 締り強, 粘性有, $\phi 5\sim 20\text{mm}$ 褐色土ブロック5~7%混。砂混じり粘土層。
- 5Y3/2 (オリブ黒色) 締り強, 粘性やや強, 褐色土ブロック3~5%混, $\phi 5\sim 10\text{mm}$ 1層粘土ブロック5~7%混。
- 5Y3/2 (オリブ黒色) 締り強, 粘性強, $\phi 5\sim 10\text{mm}$ 褐色粒子7~10%混。1層に似た粘土質の土層。9層に対応するか。
- 7.5Y3/1 (オリブ黒色) 締り強, 粘性強, 塊状に砂粒を含む粘土層。地山
- 7.5Y2/1 (黒色) 締りやや弱, 粘性強, 粒子細かい粘土層。やや褐色がかる。



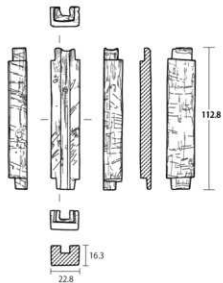
第 68 図 12・26号遺構 (1/20)



第 69 図 95・96・97・98・1・3・4号遺構 (1/40・1/20)

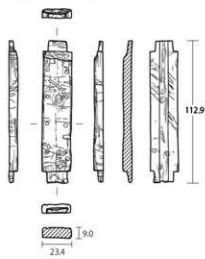


95号遺構連結桁 (東端)



97号遺構連結桁 (西端)

95号遺構連結桁 (東端)



97号遺構連結桁 (西端)

※計測値は保存値。単位は cm。
0 1/30 50cm

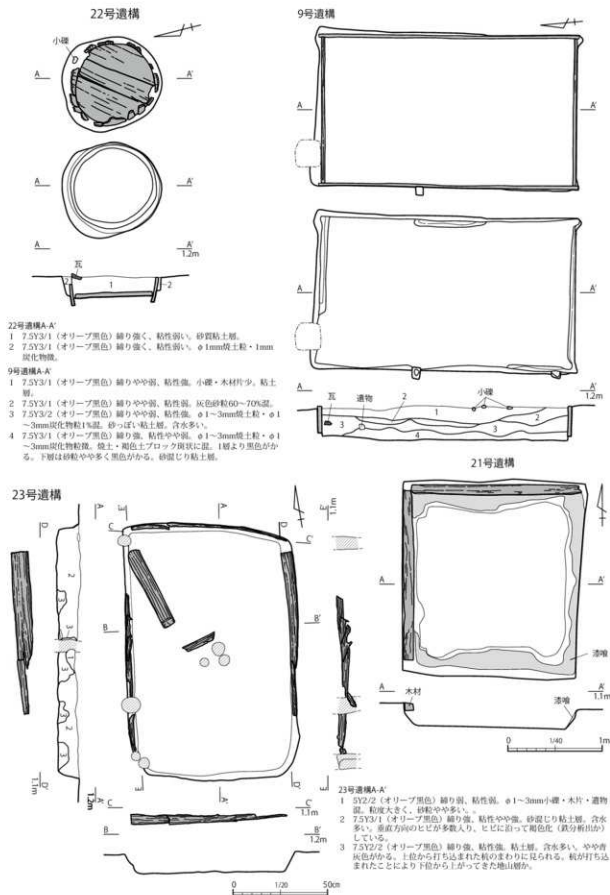


96号遺構 木樋洞

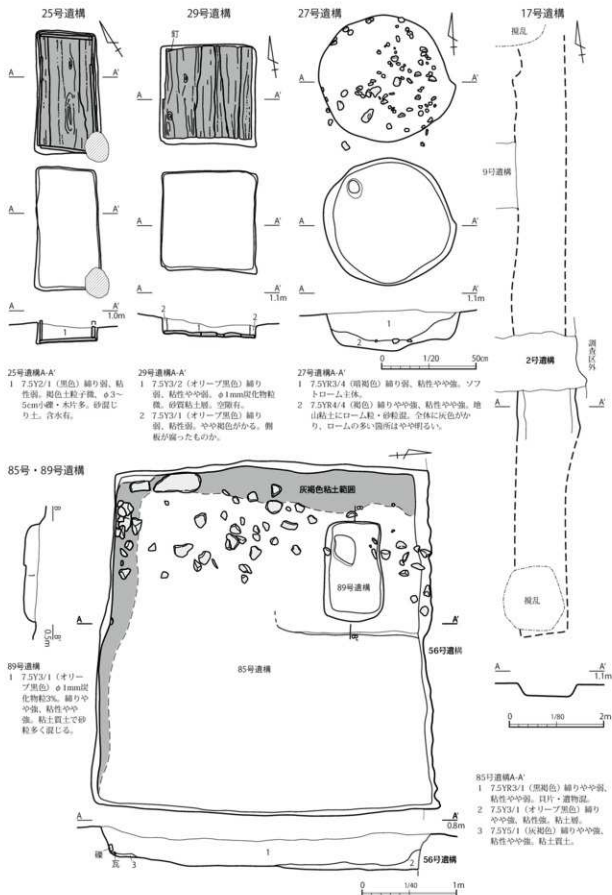


96号遺構 木樋蓋

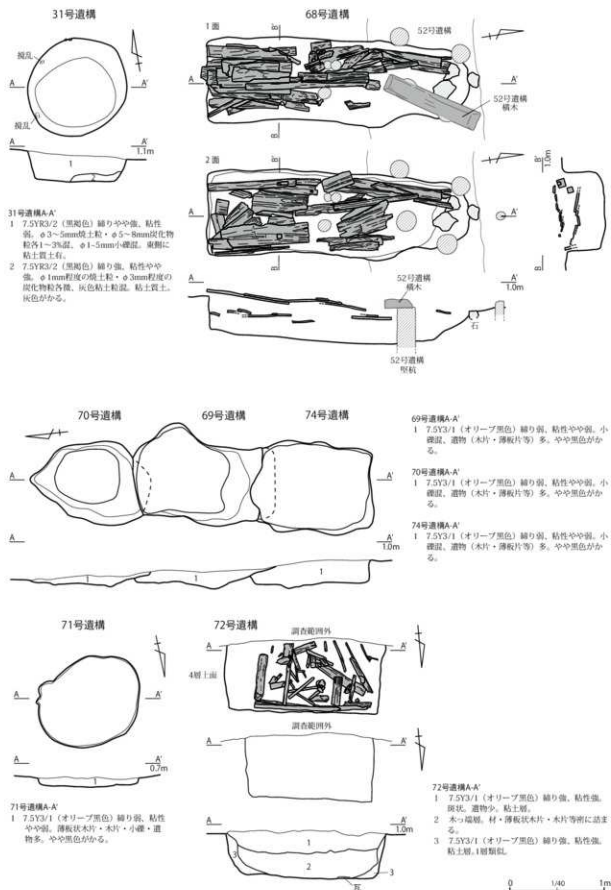
第 70 図 96 号遺構 木樋 (1/30)



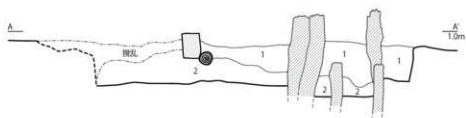
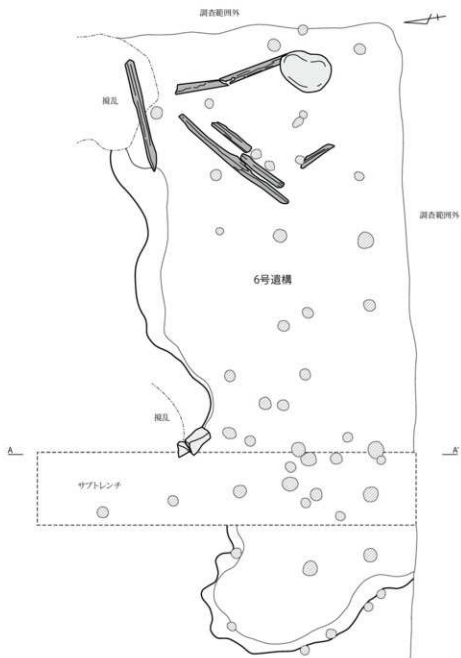
第 71 図 22・9・23・21号遺構 (1/40・1/20)



第72図 25・29・27・85・89・17号遺構 (1/20・1/40・1/80)



第73図 31・68・70・69・74・71・72号遺構 (1/40)



6号遺構A-A'

1. 7.5Y2/1 (黒色) 硬りやや強、粘性強。貝片・木片・遺物多。粘土層、やや青灰色がかかる。草木有。
2. 7.5Y1/1 (黒色) 硬り強、粘性強。土丘により上位から貝片・遺物ももろり込む。1層より黒色がかかる。地山粘土層。

0 1/40 1m

第74図 6号遺構 (1/40)

第29表 建物基礎計測表

遺構名	探検番号	調査区	グリッド	確認層位	確認法	種類	規模 (cm)			長軸方向	平面形	測定時期	備考		
							長軸	短軸	深さ						
2号遺構	第6500	第6300	1区	C-F18~20	第6層	N面	円筒状土 建物基礎	10.2	19.4	1.2	3.7	N40°E	方形	近世~近代	東側に調査区内外、南側に地盤を受け前の平明敷。35・52号遺構の榑木下部の構造とよく似ている。
24号遺構	第6700	第6300	1区	C-E15~17	第5層	N面	瓦片造 建物基礎	11.80	5.6	1.0	0.2	N7°E	長方形	近世	南に北向き、北は確認したものが多数、平明敷中心、瓦片の瓦片に傾斜有。尖角を受けた家から北側面したか。

第30表 井戸計測表

遺構名	探検番号	調査区	グリッド	確認層位	確認法	種類	規模 (cm)			長軸方向	測定時期	備考	
							長軸	短軸	深さ				
12号遺構	第6800	第6300	1区	F19	第6層	N面	井戸	7.2	6.9	110.0	N76°W	近世	階段状2段構造。下部の掘削より下部は深さが深く未確認。
26号遺構	第6800	第6300	1区	G18	第6層	N面	井戸	10.9	10.1	4.9	N4°E	近世	層9以下。
95号遺構	第6900	第6300	1区	D-E7・8	第6層	N面	井戸	1.28	1.24	1.38	N83°W	近世	階段状2段構造も、下部は深さが深く、詳細不明。1段内側に96号遺構が接続。
97号遺構	第6900	第6300	1区	D-E7	第6層	N面	井戸	9.9	9.7	7.6	N60°E	近世	階段状1段構造。東側に96号遺構が接続。

第31表 木桶計測表

遺構名	探検番号	調査区	グリッド	確認層位	確認法	種類	標高(延長 (m))		幅 (cm)	長軸方向	測定時期	備考
							上	下				
96号遺構	第69・7000	第6300	1区	E7	第6層	N面	木桶	1.2	1.6	N74°W	近世	95号遺構上97号遺構の井戸をつなぐ。95号遺構から97号遺構へ41°傾斜。

第32表 埋設桶計測表

遺構名	探検番号	調査区	グリッド	確認層位	確認法	種類	規模 (cm)			長軸方向	平面形	測定時期	備考	
							長軸	短軸	深さ					
1号遺構	第6500	第6300	1区	A20	第6層	N面	埋設桶	5.2	2.6	8	N47°E	円形	近世	鉄板の土桶状。
3号遺構	第6500	第6300	1区	B19~20	第6層	N面	埋設桶	6.0	5.5	3.1	N25°E	円形	近世	鉄板と土板を桶身。覆土上に構造あり。
4号遺構	第6500	第6300	1区	B19~20	第6層	N面	埋設桶	3.2	5.0	7.4	N15°E	円形	近世	鉄板と土板を桶身。
22号遺構	第7100	第6300	1区	B19~20	第6層	N面	埋設桶	5.3	4.7	1.2	N14°E	円形	近世	鉄板と土板を桶身。

第33表 土坑計測表

遺構名	探検番号	調査区	グリッド	確認層位	確認法	種類	規模 (cm)			長軸方向	平面形	測定時期	備考	
							長軸	短軸	深さ					
9号遺構	第7100	第6300	1区	B20	第6層	N面	木枠土坑	14.0	8.0	1.8	N6°E	方形	近世	土坑の構造に土板を埋設して木枠とする。17号遺構を参照。
21号遺構	第7100	第6300	1区	E17	第5層	N面	木枠土坑	21.0	18.3	3.5	N	方形	近世	土坑の構造に土板を埋設して木枠とする。17号遺構に準ずる。
23号遺構	第7100	第6300	1区	C-D16	第5層	N面	木枠土坑	13.5	8.9	1.2	N8°E	方形	近世	土坑の構造に土板を埋設して木枠とする。
25号遺構	第7200	第6300	1区	B17	第5層	D面	木枠土坑	6.5	3.1	1.1	N32°E	方形	近世	土坑の構造に土板を埋設して木枠とする。
26号遺構	第7200	第6300	1区	C17	第5層	N面	木枠土坑	7.3	4.8	8	N5°E	方形	近世	土坑の構造に土板を埋設して木枠とする。
27号遺構	第7200	第6300	1区	D16	第5層	N面	土坑	7.0	6.6	2.1	N43°W	円形	近世	土坑の構造不明。
31号遺構	第7200	第6300	1区	D15	第5層	N面	土坑	11.3	8.8	3.8	N54°E	円形	近世	土坑の構造不明。
68号遺構	第7200	第6300	1区	E2	第6層	N面	土坑	27.7	7.0	4.5	N7°E	方形	近世	覆土に木枠有。
69号遺構	第7200	第6300	1区	D2	第6層	N面	土坑	1.36	8.5	1.8	N6°E	不規則	近世	74号遺構を参照。70号遺構に似られる。
70号遺構	第7200	第6300	1区	D2	第6層	N面	土坑	1.25	8.8	1.6	N6°E	不規則	近世	69号遺構を参照。
74号遺構	第7200	第6300	1区	D2	第6層	N面	土坑	1.32	8.8	2.5	N6°E	不規則	近世	69号遺構に似られる。
77号遺構	第7200	第6300	1区	C2	第6層	N面	土坑	11.6	9.2	1.0	N67°W	円形	近世	南側に調査区内外あり。全体の規模は不明。覆土に木枠有。
79号遺構	第7200	第6300	1区	E2	第6層	N面	土坑	16.9	17.6	5.1	N45°W	方形	近世	土坑の構造不明。覆土に木枠有。
85号遺構	第7200	第6300	1区	C-D4・5	第6層	N面	土坑	37.4	33.5	3.6	N47°W	方形	近世	土坑の構造不明。覆土に木枠有。
89号遺構	第7200	第6300	1区	C4	第6層	N面	土坑	10.6	9.7	1.5	N43°E	長方形	近世	土坑の構造不明。覆土に木枠有。

第34表 溝計測表

遺構名	探検番号	調査区	グリッド	確認層位	確認法	種類	標高(延長 (m))		幅 (cm)	深さ (cm)	長軸方向	測定時期	備考
							上	下					
17号遺構	第7200	1区	B-D20	第6層	N面	溝		12.7	14.6	1.3	N44°E	近世	調査区内外の溝間に存在する。南側は覆土。北側は調査区内外。覆土に灰化土・瓦片。

第35表 遺物集中部計測表

遺構名	探検番号	調査区	グリッド	確認層位	確認法	種類	規模 (m)			長軸方向	平面形	測定時期	備考
							長軸	短軸	深さ				
6号遺構	第7400	第6300	1区	H-19~20	第6層	N面	前立	0.2	0.3	N48°W	不規則	近世	南側に調査区内外。遺物収集土坑。

2 遺物

陶磁器・土器を中心に、コンテナ約 80 箱の遺物を取り上げた。ほとんどの遺物が近世以降に属すもので、中世以前の遺物は 7 点に過ぎなかったため一括して報告する。近世以降の遺物については、陶磁器・土器、木製品、金属製品、石製品、ガラス製品、植物質製品、骨角貝製品、その他の素材の製品など、素材で大別して報告し、瓦、煉瓦、その他の建材、玩具・人形・ミニチュア類については、素材を横断して種別でまとめて報告する。

また、池遺構をはじめ、33 号遺構、35 号遺構など、本遺跡において重要な遺構の多くが大型であったため、より具体的な出土位置を示すために、観察表出土地点欄に注記を併記した。特に、池遺構とこれに関連する 93 号遺構については、細かく範囲を区切って遺物を取り上げたので、注記の示す範囲について第 75 図に示す。上層（47 イコウ、47 イコウ下、51 イコウ、61 イコウ、モリ土 4 北 1～5、モリ土 4 南 0～7、モリ土 4 西 1～2）は覆土にあたり、埋立盛土である。下層は底（池北、池南、池西、池北西）および間知石護岸（池北キシ 1～6、池南キシ 1～2、池西キシ 1～3、池東キシ 1～3）の掘方にあたる。また、93 号遺構については、円形に組まれた間知石を伴う部分を下層（93 イコウ北東上、北西上、南東上、南西上）、これを覆い土橋を伴う部分を上層（93 イコウ北東下、北西下、南東下、南西下）とした。なお、基本土層に関しては、調査時に第 2・1・3 層と第 3 層を掘り分けることができず、遺物は同一土層のものとして取り上げたため、一括して扱う。

1) 中世以前の遺物（第 76 図、第 36 表、図版 35）

弥生土器 2 点、古墳時代土師器 1 点、古代須恵器 2 点が出土した。また、時期不明の土器 1 点も便宜的にこの項で扱い、計 6 点を報告する。（両角まり）

■弥生土器

1 は壺頸部片で、1/6 片からの推定復元である。頸部径は現状で 10.6cm であるが、もう少し細頸かもしれない。頸部の屈曲は強くなく緩やかに外湾する。外面は 3 条の S 字状結節文を 3 条施す。結節文の下端に LR 縄文が部分的に認められている。結節文の末端圧痕か横位施文の LR が明確にできない。文様帯以外は横位ヘラミガキの後赤彩である。内面は横位ヘラミガキ、肩部内面は指ナデである。胎土は砂質で径 2～5mm 大の赤褐色のシャモットをわずかに含む。焼成は良好で、堅緻。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）、赤彩部分は赤褐色（2.5YR4/6）である。2 は壺の胴部下半 1/10 片からの推定復元である。現状の胴部最大径は 22.5cm である。球胴形を呈すると思われる。外面は粗い横位の横ヘラミガキで、上部は赤彩される。ヘラミガキが雑なため、砂粒が器面に沈み込むことなく多数浮き出ている。内面は横位のナデの後ヘラナデである。胎土は砂粒が多く黄白色の軟質粒子を大量に含む。焼成は良好で外面は黒斑が残る。色調は灰黄褐色（10YR5/2）、赤彩は暗赤褐色（2.5YR3/6）である。1、2、いずれも弥生時代後期後半である。1 は池遺構上層、2 は第 1 層からの出土である。（及川良彦）

■古墳時代土師器

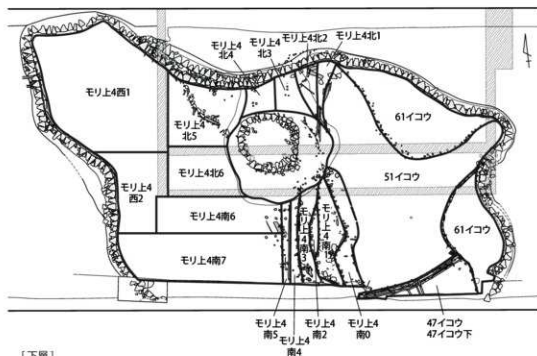
3 はごくゆるく丸みを帯びた土器破片である。胎土は灰褐色～にぶい褐色（7.5YR5/2～5/3）でやや砂っぽく、よく焼きしまっている。径 1mm 以下の褐色軟質粒子を多く含み、径 1mm 程度の白色粒子を少量含む。また、量はわずかながら、黒色で光沢のある針状粒子が特徴的にみられる。内面

は平滑で、丁寧にナデ調整されており、外面にはケズリによる複数の面が観察される。ケズリ方向は横位もしくは斜位で、破片の半ばあたりで面が接するためごく弱い稜のようにになっている。古墳時代中期から後期の壺もしくは甕の胴部、最大径よりやや底に近い部分の破片であろう。内面および破断面の一部に明褐色(7.5YR5/8)の変色がみられる。小破片のため、径を正確に復元することはできないが、丸みの程度から、胴部最大径は20～30cm程度と考えられる。池遺構上層出土である。

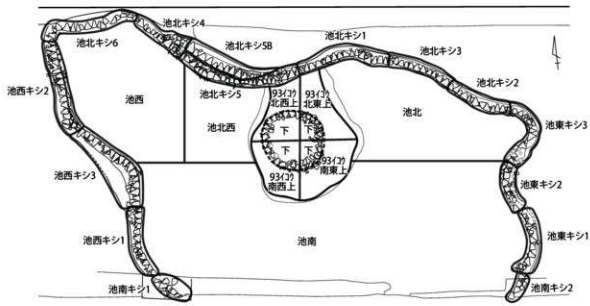
■古代須恵器

4、5は須恵器の破片である。4は厚みが均一で、ゆるく丸みを帯びている。胎土は灰色(7.5Y5/1)で、粒子は細かく、よく焼きしまっている。径1mm以下の褐色粒子を少量含み、内面、外面ともに

[上層]



[下層]



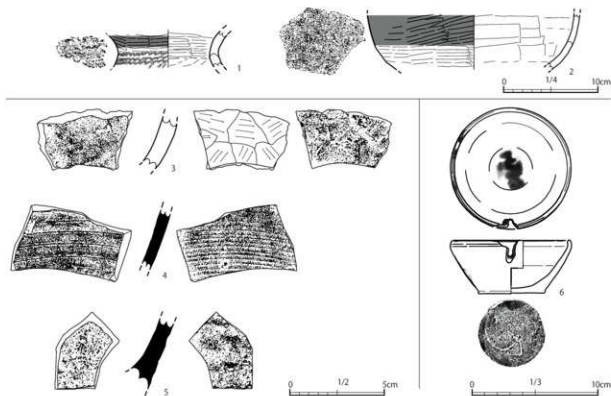
第75図 池遺構関連の注記

顕著な水挽き痕が観察される。古代前半、丸みの程度からは、甕のようなやや大ぶりの器種の胴部下半の破片と推定できよう。5は厚みが均一でなく、丸みが強い。胎土は灰色(7.5Y5/1)で、やや粗く、径1~2mm程度の白色粒子を含む。内面は平滑、外面はゆるく波打っている。古代前半、長頸瓶などのように径が比較的小さい瓶類で、底部に近い部分の破片と考えられる。4、5いずれも池遺構上層出土である。

■時期不明土器

6は完形の環形土器である。体部は、底部から口縁部に向かって直に開き、口縁端部は内湾する。底部縁辺はエッジが立っており、外面には左回転の回転糸切痕が残る。糸切の支点は縁辺と中央付近の2カ所にみられるが、縁辺の方が古く、中央付近の方が新しい。俗に二重糸切りと言われる痕跡である。胎土は灰白色(7.5Y7/2)で、やや砂っぽい。径1mm以下の黒色粒子を多く含み、径1mm程度の白色粒子を少量含む。表面はざらついた感触である。内面口縁端部直下の内湾する部分に顕著な水挽き痕がみられ、水分を多く含む粘土であったことがうかがわれる。口縁の1カ所が深く抉られ、打ち欠いた痕跡が数カ所みられること、内面の底部中央、口縁端部の数カ所、外面の底部周辺にスモもしくはタール状の炭化物が付着していることから、灯火具に転用されたと考えられる。

環形の器形は古代あるいは中世末などに見られるが、それらの口縁部には本資料のような内湾は見られない。また、エッジの立った底部の立ち上がりや左回転の二重糸切りは18世紀後半以降の江戸の土器、特に胞衣皿などの大きめのロクロ製品に顕著な特徴であるが、江戸の土器に環形の器形は見られず、砂っぽくざらざらと粗い胎土も、江戸の細かく均質な胎土とは異なる。以上の所見から、本資料については時代・時期・地域とも不明とせざるを得ない。口径9.9cm、底径5.3cm、器高4.4cm、第4層出土である。



第76図 中世以前の遺物

第 36 表 中世以前の遺物観察表

層位	写真 番号	出土地点	法定	種別	時代	時期	産種	遺存部位	量・重 (g)	備考
75-1	35-1	池遺構 1 層	1914 遺 1	土器	古生時代	前期	蓋	胴部	23.0	横径 30mm 深径 10mm 程度
75-2	35-2	第 1 層	1914 遺 1	土器	古生時代	前期	蓋	胴部	47.0	横径 30mm 深径 10mm 程度
75-3	35-3	池遺構 1 層	1914 遺 1	土器	古生時代	前期	蓋	胴部	15.0	横径 30mm 深径 10mm 程度
75-4	35-4	池遺構 1 層	1914 遺 4	土器	古生時代	前期	蓋	胴部	15.0	横径 30mm 深径 10mm 程度
75-5	35-5	池遺構 1 層	1914 遺 4	土器	古生時代	前期	蓋	胴部	14.7	横径 30mm 深径 10mm 程度
75-6	35-6	第 4 層	1914 遺 3	土器	不明	不明	杯形土器	完形	102.6	口径 9.9cm、底径 5.3cm、器高 4.4cm 打丸貝に似る

2) 陶磁器・土器 (第 77 ~ 130 図、第 37・38 表)

遺構から 15009 片 338499.5g (磁器 3695 片 44633.9g、陶器 10627 片 278565.0g、土器 687 片 15300.6g)、遺構外から 4179 片 124434.1g (磁器 1470 片 30622.7g、陶器 2539 片 88753.9g、土器 170 片 5057.5g)、計 19188 片 462933.6g (磁器 5165 片 75256.6g、陶器 13166 片 367318.9g、土器 857 片 20358.1g) が出土した。遺構出土のものとしては、池遺構のものが最も多く、9743 片 235869.7g (磁器 2475 片 30707.0g、陶器 6880 片 197178.6g、土器 388 片 7984.1g) で、遺構出土全体に占める割合は破片数で約 64.9%、重量で約 69.7%であった。遺構外出土のものは、第 1 層が 1965 片 59467.0g (磁器 746 片 16608.8g、陶器 1134 片 40543.7g、土器 85 片 2314.5g) 第 2・3 層が 1273 片 40737.9g (磁器 425 片 9883.4g、陶器 825 片 40737.9g、土器 23 片 477.8g)、第 4 層が 716 片 19590.1g (磁器 211 片 2844.5g、陶器 466 片 15261.6g、土器 39 片 1484.0g)、第 5 層が 8 片 99.0g (磁器 3 片 31.0g、陶器 4 片 51.0g、土器 1 片 17.0g)、層位不明のものが 217 片 4540.1g (磁器 85 片 1255.0g、陶器 110 片 2720.9g、土器 22 片 564.2g) で、第 1 層出土のものが最も多かった。これらのすべについて接合を行った結果、層位間、遺構間、遺構一遺構外の接合例が 10 例 (層位間 1 例、遺構間 4 例、遺構一遺構外 5 例) 確認されたが、これは、陶磁器・土器の総量に対して非常に少ない事例数と言えよう。

これら出土した遺物のうち、磁器 312 点、陶器 216 点、土器 119 点の計 647 点を報告する。以下、各個体に関する基本情報と観察内容については観察表に記載し、特筆すべき事柄がある場合のみ、本文に記した。

観察表の項目として、挿図番号、出土地点 (注記を併記)、素材、器種、遺存部位、法量、重さ、観察内容、産地・時期、遺物番号の欄を設けた。器種名は一般的な呼称を採用し、より具体的に器形や用途を示す通称があればこれを下段に付記した。法量は、△が推定値、▲が残存値、—は計測不可を示す。観察内容については、全面…全、内面…内、外面…外、口縁部…口縁、端部…端、胴部…胴、体部…体、底部…底、高台部…高等の略称を用い、器物そのものが持つ属性と共に、焼成後の穿孔や敲打痕、付着物、墨書、釘書、焼継痕と焼継印などの使用痕について記載した。また、これらの観察内容から推定される産地と時期を次項に記し、不明な箇所は一で示しめした。以下、素材や器種ごとに観察事項と表記について記す。

磁器：主文様を中心に記載した。施文方法については特に記載がない場合は手描きである。また、皿を中心に、見込が圏線などで区画されている場合、区画された縁側を「縁帯」、見込中央に描かれる小型の文様を「一点文」と便宜的に表現した。

陶器：釉の種類や施釉範囲を中心に記載した。

土器：器面の成形・整形痕を中心に記載した。焙烙や火消壺の蓋の離れ痕として「砂目」と「チヂレ目」を用いたが、前者は細かい砂粒状の付着物、後者は細かくひび割れたような皺状の痕跡を指す。回転系切痕については回転方向が判別できる場合は () 内に記した。

その他:文字については□が一文字欠損、■が判読不可を示し、…は文字数不明かつ判読不可を示す。

■基本土層出土の陶磁器・土器

【1面】

第1層出土(第77～84図) 磁器71点、陶器26点、土器11点の計108点を報告する。

1～71は磁器である。4はコバルト染付の小杯で、転写紙を用いた施文だが、ぼんやりと不鮮明なので石版転写であろう。形状から20世紀第2四半期のものと考えられる。5は小碗で、染付で施文された宝珠文は線描きである。18世紀末～19世紀前葉のものと考えられるが、口縁の反りがやや弱いので、19世紀中葉に近い時期のものであろう。6、8、9の小碗は細身小振りの端反り器形で、幕末～明治前半のものと考えられる。いずれも施文は手描きだが、6、8は呉須染付、9はコバルト染付である。10は高台が厚く畳付の内側がわずかに浮く特徴的な器形で、手描き染付の区画唐草文である。文様は一見して区画唐草文とは見えなほど著しく崩れており、圏線で区画された見込の中央に見える一点文も破損のため詳らかではない。18世紀末の中国産である。11は刃のついた工具を外面に当てて軽く削って作りだした凹凸に、鮮やかなクロム青磁釉が施されている。高台内は兜巾状である。17～22は端反碗である。いずれも、唐草文や区画唐草文など、同時期の中国産舶載磁器を意識した文様である。23の染付広東碗は線描きで施文されている。24～29は近代の飯碗である。いずれもコバルト染付で、体部が直に大きく開く、背の低い器形である。

27は青磁染付で、内面に籠に入った九つの枇杷の実が描かれ、「金丹九成」の四文字が配されている。

「金丹九成」は、文人画の謎語画題(寓意を込めてつけた画題)で、「枇杷実九つ」を意味する。外面にある「誰知水陸分木蓮花種種」は意味が分からないが、同様の謎語画題の可能性もあろう。37は菊花文の小皿で外面には山水のモチーフが配されている。高台内に「宣喜年□」の銘あり。器表が細かく泡立って曇った色調と質感になっている。被熱したのであろう。41は内面を二重圏線で区画し、緑帯に蜘蛛の巣文、見込中央にコンニャク印判の五弁花を配す。緑帯の蜘蛛の巣は墨弾きで表現されている。44は櫛高台が特徴的な肥前鍋島の皿である。わずかな遺存部分に柳の葉が枝垂れる様子が描かれている。高台の櫛歯文は緑取りの無い筆描きで、18世紀末～19世紀前葉の製品と考えられる。池遺構上層でも同様のものが出土しているが、櫛高台の筆致が異なるので、別個体であろう。同時期の柳モチーフ櫛高台鍋島皿は第1次調査でも数点出土している。49は輪花の小鉢3個体分が融着したものである。外面は微塵唐草文、二重圏線で区画された見込の中央に手描き五弁花が配されている。高台内の「或化…」は「成化(年製)」銘を模倣したものであろう。第2-1・2・3層でも同様の状態で4個体が融着しているものが出土している(122)。器形や文様がほぼ同一で、出土地点も近いことから、元は一緒に保管されていて、同時に被災した可能性が高い。50、51の鉢は蛇の目高台で、口縁が肥厚しながら大きく反る器形。コバルト染付の線描きで施文されている。口縁部の帯文や見込に環状松竹梅文を配す文様構成が近世的だが、文様の崩れ具合などから幕末～明治初頭のものと考えられる。52も鉢で、口縁部が外反する器形、内外両面に銅板転写で鳳凰文を描き、高台内には「□峰園製」の銘が見える。文様モチーフは中国風で、19世紀第4四半期～20世紀第1四半期以降盛んに生産されるようになった東アジア(主に中華圏)向け輸出用の器種である。59はコバルト染付の銅版転写で丸文が施された卵形合子の身である。67～69は急須の蓋である。いずれにも通気孔が見られること、コバルト染付を用いていることなどから近代以降のものと考えられる。70、71は

文房具である。70は岩絵の具の容器、71は絵具の筆洗いである。いずれも学生がよく用いる画材であり、明治末～大正期にかけて販売されるようになったとされる。府立第一高等女学校の時期のものと考えられよう。

72～97は陶器である。74は腰張碗で、やや大ぶり、器壁は厚く、黒っぽくざらざらした粗い胎土で、薄墨様の色調の釉で施文されている。肥前産、17世紀末～18世紀前葉のものである。75は近代の硬質陶器製の碗である。口縁部にクロム緑釉で二重圏線を巡らす、いわゆる集団食器である。20世紀第2四半期のもので、府立第一高等女学校の備品の可能性もあろう。79は灰釉で、蛇の目軸ハギの皿である。高台内に「九十／以奴」の墨書がある。80は灰釉の捏鉢であろうか。高台内に「…二ツ之内」と墨書がある。81は大鉢である。遺存部分には鉄軸が認められるが、恐らくは緑釉も用いた施文がなされていたであろう。高台内に「…出来」と墨書がある。82は灰落として、高台内に「火キ」と墨書がある。79～81に見られる墨書の意味はいずれも不明。82は灰落としなので、墨書の「火キ」は、「火器」の意であろう。84は妬器質で、浅い盤状の器形だが、器種不明である。胎土はわずかに紫がかかった暗褐色で、志戸呂産、刻印があるが判読できない。91は徳利自体の年代も古いが、釘書きの書き方もしっかり軸を削っており、古い様相を示している。93、95は土瓶の蓋である。いずれも通気孔がないことから、近世のものと考えられる。95は外面鉄釉で、内面に「文化八未年 三月三日 ■之」と墨書されている。購入年月日であろうか。文化八年は1811年に当たり、器形からの年代観とも合致する。

98～108は土器である。98～101は大きさから灯火皿と考えられる。101はやや大きく、体部が直に開く形状から17世紀後葉のものと考えられる。100は底部外面に「中」の墨書が見られる。102、103は大きさから胎衣皿と判断される。底部外面に回転系切痕が見られることから、近世のものと考えられる。同様の皿形の胎衣皿は明治に入っても見られるが、底部外面に回転系切痕が見られなくなる。105は板づくりの壺蓋で、胴部上半の内面に離材の布目圧痕が残る。隅切り角棒の銘が見られ、「…伊織」と読める。「堺淡伊織」銘であろう。106の焙烙は内耳が遺存している。江戸においては、都市化に伴って焙烙をもっぱらカマドや焔炬にかけて使うようになり、釣り手である内耳が消滅する。概ね17世紀末ごろから18世紀前葉にかけて消滅してゆけど、この資料は形状などから、消滅の進行している時期のものと考えられる。108は形状も用途もよくわからない土製の製品の一部である。全体を復元すると、かなり大きなものになりそうなので、大型の土製品と考えた方が良くもかもしれない。庭園などに設置する置物などの可能性もある。

【II面】

第2-1・3層・第3層出土（第85・86図） 磁器18点、陶器8点、土器2点の計28点を報告する。

109～126は磁器である。120は極浅い小型の段重で、微塵唐草文である。化粧道具でもあろうか。121は蓋であるが、やや大きめの通気孔が3か所に設けられている。摘みは菊のような花のモチーフで、その横に木葉のモチーフが添えられている。香炉のようなものの蓋であろうか。122は輪花の小鉢が4個体分が重なって融着しているものである。4個体は同じ器形、同じ文様で、組み物だと考えらる。また、器表の軸が発泡してくもった風合いになっている。重ねて保管していたものが、火災などで被熱したのであろう。外面は微塵唐草文、見込を二重圏線で区画して、中央に手描きの五弁花を配す。高台内に「成化年製」とあるが、「成化年製」を写し違えたものであろう。第1層でも

同様の状態のものが3個体融着しているものが出土しているが(49)、器形や文様がほぼ同一で、出土地点も近いことから、元は一緒に保管されていて、同時に被災した可能性が高い。

127～134は陶器である。127は筒形碗で内外面に鉄軸を施す。鉄軸のムラは文様状である。高台内に角枠の「志戸呂」銘がある。濃い褐色の胎土は良く焼き締まっており、器壁が薄い点も志戸呂らしい。129、130は美濃高田産の灰軸徳利である。129は肩部のすぐ下に横書きの釘書がある。左読みで「々ちし七」と読めそうである。131は鉄軸の土瓶である。胎土は橙褐色でかなり粗く、径1mm程度の白色粒子を多く含む。丸みが強く、深さのある器形で、やや古手。18世紀末ごろのものと考えておく。外面には、スス・タールが厚くこびりついている。132は欠損部分が大きく、全体の形状がわからないが、鍋の可能性があろう。全面に灰軸が施軸されている。

135、136は土器である。135は脚付の灯火受皿、136は大きさから17世紀後葉の灯火皿と考えられる。

第2-2層出土(第87～89図) 磁器23点、陶器6点、土器3点の計32点を報告する。

137～159は磁器である。139～141は染付で手描きされており、文様モチーフも近世から用いられてきたものであるが、器形は近代に入ってから一般的になる小振りの碗である。近世から近代にかけてのものと考えられる。140、141は19世紀第3四半期、139はやや新しく19世紀第4四半期に入っているかもしれない。142は広東碗の高台部で、中央に内側からの穿孔がある。破断面の処理が雑ではあるが、何らかに転用されたのであろう。147は型打ちで草花文を施した淡い色調のクロム青白磁である。高台内に鎔軸が施されており、かなり新しい時期のもの可能性が高い。151は型紙刷のコバルト染付で草花文を施している。口縁端部の太い圈線やぼかしを用いた意匠は明治末～大正期にかけてよく見られる。152は18世紀後葉に盛行するタイプだが、高台が極端に低く、周囲のケズリ調整がないことなどから19世紀に入ってからのももの可能性が高い。155はかなり鮮やかな色調ではあるが呉須染付で、外面の流水文は墨弾きで表現されている。159は一抱えもあるような大鉢である。腰部以下の形状は不明、外面には大輪の牡丹が丁寧に染付されている。特徴的な形状の口縁部は、内面が牡丹唐草、外面が唐草文である。用途は不明であるが、見込みにも文様があるようなので、水鉢のようなものかもしれない。

160～165は陶器である。163は鉄軸の半胴甕で、底部中央付近に内側からの穿孔があり、高台内には墨書が見られる。判読できる部分は「文月七口付」と読めそうである。164は焼締陶で、底部外面にはかなりくっきりとした回転糸切様の痕跡が見られる。円弧状の条線は一定幅で均等、通常は見られる糸尻の乱れもない。全体の形状なども考え合わせると、建水などの茶陶と考えられ、意識的に施した可能性もある。備前産であろう。165は袋状の脚部を持つ灰軸の灯火受皿である。19世紀以降の京・信楽産のもの類似しているが、胎土や形状のディテールを見ると、京・信楽産とは言い難く、産地は不明である。

166～168は土器である。166のロクロ成形塩壺は底部中央付近に外側からの焼成後穿孔が見られ、植木鉢に転用されたものと考えられる。

【Ⅲ面】

第4層出土(第90～92図) 磁器14点、陶器9点、土器8点の計31点を報告する。

169～182は磁器である。170は花唐草文の端反りの小碗で、19世紀中葉以降の中国産である。

179は青磁の皿で、高台は低く、鉢筒底に近い形状である。

183～191は陶器である。185～189、191は灰釉の徳利で、美濃高田産である。口縁部と肩部の形状、胴部の膨らみ具合などから、いずれも18世紀後葉～19世紀前葉の幅に収まる時期のものと考えられる。胴部には釘書が見られるものも多く、185が「…屋」、186が「○」、187が「へ本／イ」、188・189が「七々ちし」と読める。

192～199は土器である。192は大きさと体部の直な立ち上がりから17世紀後葉の灯火皿と考えられる。193、194は瓦質植木鉢で、前者は、ロクロ目が著しく、指頭によって底部中央付近に穿孔されている点などから近世のものと考えられ、後者は回転糸切痕が見られないこと、筒状工具によって底部に穿孔されていること、内外面が回転ナデによって滑らかに調整されていることなどから近代のものと考えられる。195、196は口縁に段のある板づくり成形の塩壺である。いずれも内芯の離材痕である布目圧痕が見られ、底は外側から塞がれている。銘部分は遺存していないが、形状から18世紀前～中葉のものと考えられる。199は焙烙である。口径復元は困難ながら、全体に小振りの印象で、体部も浅いことから18世紀末～19世紀中葉ごろのものと考えられる。

■遺構出土の陶磁器・土器

【II面確認の遺構】(第93～96図)

7号遺構(200～205) 磁器5点、陶器2点、土器1点の計8点を報告する。201、202、204、205は、明治後半～大正期(19世紀第4四半期から20世紀第1四半期)を中心とした近代の製品である。201は磁器、器高がやや低い端反りの小碗で、コバルト染付の銅板転写で松竹梅に亀甲を配した文様を施している。20世紀第1四半期の製品と考えられる。202は磁器の飯碗である。体部は直に開き、コバルト染付で手描きの木賊文が施されている。器形と軸から19世紀第4四半期のものと考えられる。204は磁器、色絵葡萄文の急須の蓋である。内面に染付スタンプによる「岐870」の統制番号があることから、昭和10年代後半～20年前後(20世紀第2四半期)のもの判断できる。205は陶器の土瓶の蓋である。通気孔があり、白泥を施した上にコバルト染付で施文している。19世紀第4四半期のものであろう。その他は18世紀葉～19世紀前葉を中心とする時期のものである。

14号遺構(208～209) 磁器2点を報告する。208は染付草花文の厚手底碗で、見込中央の五弁花はコンニャク印判である。18世紀中～後葉のものであろう。209は高台が高く、丸味のある蓋物の身である。染付で、丸文仕立ての松竹梅文が施されている。胎土から肥前産と考えられるが、時期は不明である。

63号遺構(210) 陶器1点を報告する。210は高台周りに段があり、体部が直に開く、灰釉の皿で、17世紀後葉～18世紀の瀬戸美濃産であろう。

13号遺構(211) 土器1点を報告する。211は灯火受皿で、透明釉が施されている。18世紀末から19世紀前葉の江戸産である。

46号遺構(212) 陶器1点を報告する。212は灰釉の脚付灯火受皿で、脚部は袋状である。19世紀中葉の信楽産である。

35号遺構(213～248) 磁器16点、陶器17点、土器3点の計36点を報告する。

213～228は磁器である。214、215、219、222、223、244は近代以降の製品である。214は

薄手酒杯で、いわゆる記念杯である。見込に朱色の上絵付で日章旗と旭日旗が描かれているが、遺存部分が小さく、記念文字は確認できない。杯の形態から20世紀第1四半期までのものと考えられ、日露戦争など該期の戦勝などを記念したものの可能性が高い。215は薄手の端反り小碗である。中国の製品を模倣したであろう花鳥文が染付で施されているが、絵柄はかなり崩れている。高台内に「大明成化年製」銘が見られ、19世紀第4四半期の瀬戸産である。219は小皿で、コバルト染付型紙刷で松と鶴らしきモチーフが描かれている。口縁端部に巡らされた太い圈線が特徴的で、19世紀第4四半期のものであろう。223はクロム青磁の皿で、型紙刷で色絵の花鳥文が施されている。19世紀第4四半期のものであろう。

229～245は陶器である。232は太白手染付施文の皿で、縁帯には割菊文を配し、圈線で見込を区画している。これは該期の磁器皿と同様の文様構成で、18世紀後葉の瀬戸美濃産である。283は瀬戸美濃の大皿の口縁部破片である。体部があまり開かず立ち上がる器形は近世のものである。237は炆器質の鉢で、胴部にくびれとくぼみのある特徴的な器形、白泥の刷毛目文が施されている。池遺構上層でも同様のもの(367)が出土している。煎茶道で用いる湯冷ましなどであろうか。

246～248は土器である。246は「泉州麻生」銘の板作り壺である。銘は内側二段角枠である。37号遺構(249) 陶器1点を報告する。249は鉄釉の灯火受皿である。受部の切り込みは四角く、外面腰付近に環状の重焼痕が巡る。18世紀末～19世紀初頭の瀬戸美濃産である。

52号遺構(250～252) 磁器1点、陶器2点の計3点を報告する。250は陶器のいわゆる柳茶碗である。18世紀後葉の瀬戸美濃産である。251、252は油壺である。251は陶器の灰釉鉄絵で肩部に文様がある。252は磁器で染付葡萄文である。前者は17世紀後葉～18世紀前葉の瀬戸美濃産、後者は18世紀の肥前産である。

56号遺構(253) 陶器1点を報告する。253は白地で口縁部に青い圈線を巡らせた洋皿、硬質陶器である。胎土は均質で多孔質、サイズ感の割に軽い印象である。硬質陶器は明治末～大正にかけて開発されていることや、口縁部に圈線を巡らせた意匠が集団食器などに多用される時期などを考え合わせると、昭和初期(20世紀第2四半期)のものと考えられる。

55号遺構(254) 磁器1点を報告する。254は小形で、口縁がわずかに玉縁状の皿である。染付梅花水裂文で、19世紀前～中葉の瀬戸美濃産である。

59号遺構(255) 磁器1点を報告する。255は丸みを帯びた筒形の鉢である。外面には染付で微塵唐草文が施され、見込みに環状松竹梅文が細筆書きされている。高台内に「太明年製」銘あり。

86号遺構(256) 土器1点を報告する。256は丸底の背の低い焙烙である。底部外面にチヂレ目が見られる。背の低さから18世紀後葉～19世紀前葉の江戸産と考えられる。

【Ⅲ面、Ⅲ～Ⅳ面確認の遺構】(第97～123図)

77号遺構(257) 陶器1点を報告する。257は無釉、円板に手づくねの三足を付けたもので、円板部分と三足部分では胎土が異なる。前者は明赤褐色で粗い粒子に白色粒子が目立ち、後者は橙褐色で粒子が細かい。上面に環状の焼痕のようなものが見られ、小形製品を焼くための窯道具である可能性が指摘できる。時期、産地ともに不明。同様のものが池遺構上層でも出土している。

75号遺構(258～260) 磁器3点を報告する。258は角皿である、型打ち成形で、貼り付け高台。小破片のため全容は不明であるが、四辺の内の一辺側に溝状の区画がしつらえてある。この区画の機

能・用途は不明である。胎土や細部の作りなどから17世紀後葉の肥前産と考えられる。259は輪花の染付大皿である。緑帯部は微塵花唐草文、二重圏線で画された見込には環状松竹梅文が配されている。また、弧状に残る重焼痕が見られる。18世紀後葉～19世紀前葉の肥前産である。260は大振りの輪花の鉢である。外面には染付牡丹唐草文が施され、見込みには環状の繫ぎ文、口縁内側には蛸唐草文が配されている。17世紀後葉の肥前産である。

87号遺構(261～264) 磁器2点、陶器1点、土器1点の計4点を報告する。261、262は磁器染付の皿である。前者は蛇の目軸ハギで18世紀後葉のもの、後者は輪花で、緑帯は染付微塵花唐草文、二重圏線で区画された見込にも文様があり、18世紀末～19世紀前葉のものと考えられる。いずれも肥前の製品である。263は陶器胎軸、見込に胎土目痕が見られる。捏鉢と思われるが、片口鉢の可能性もある。高台内に墨書があるが、「…沢」と読める部分しか遺存しておらず、意味は不明である。底部中央付近に焼成後内側からの穿孔が見られ、植木鉢に転用されたと考えられる。18世紀後葉以降の瀬戸美濃産。264は土器で焔炉類であろう。口縁端部を中心に、所々にススが付着している。18世紀後葉以降の江戸産である。

池遺構 上層(265～447) 磁器79点、陶器71点、土器33点の計183点を報告する。

265～343は磁器である。289はやや大ぶりの筒形碗で青磁染付、見込中央の五弁花は手描きである。高台内の銘は二重角枠の渦「福」もしくは異体字銘であろう。290、291も青磁染付の筒形碗である。見込中央の五弁花はかなり崩れており、最早五つの点の集まりにしか見えない。手描きかコンニャク印判かの判別は難しいが、290についてはコンニャク印判の可能性があろう。292は背の高い腰張り筒状の碗である。軸は厚く生掛けされおり、口縁部と腰部に二重圏線を施して区画した中に草花文と思われる文様を配している。畳付には砂の付着が著しい。1630年代の初期伊万里である。295は角形の小皿の隅部分である。高台は幅広の畳付が特徴的で、楕円形と思われる。長方形の角皿と考えられよう。302～307はいずれも輪花の小皿である。302、304、305は、器形は底厚で腰折れ、体部は急激に薄くなりながら真っ直ぐに開き、口縁部に至ってさらに開いて端部の薄い輪花となる。器面装飾は、体部内面に内型を用いて錦や草文などの地文を打ち出し、二重圏線で区画した内窓状の見込に文様を配す。これらは、該期の輪花小皿にはあまり見られない特徴である。一方、306、307は、底部～口縁部まで比較的厚みが均一で内面いっぱい一枚絵の施文がされるという、該期によく見られる輪花小皿の特徴を持つ。313の皿は一枚絵で反物のモチーフが施文されているが、反物の文様表現に墨弾きを用いられている手の込んだ製品である。315は付着物によって内面の様子が観察できないが、器形や破断面の胎土から肥前産と考えられる。付着しているのは土壌と思われるが、発泡して軽くなっている。かなりの高温に晒されたものであろう。317は櫛高台で、肥前鍋島の柳文の皿である。同様のものが第1層でも出土しているが、櫛高台の描き方がやや異なるので、別個体である。第1層出土のものとはほぼ同じ時期、18世紀後葉～19世紀前葉のものであろう。323の鉢はコバルト染付で手描き文様を施文しており、幕末～明治初頭のもと考えられる。蛇の目高台内に見られる圏線状の痕跡は、高台の高さを考慮すると、重焼痕というより窯道具の痕跡かもしれない。325は青磁で、内面無軸である。径が小さく器高が高いので花瓶としたが、上端付近の内面に軸だれが見られるので、花瓶としてはやや背が低い感もある。深手の香炉などの可能性もあろう。332は器形から厚手底碗の蓋と考えられるが、縁辺部を打ち欠いて丁寧に調整し、円盤状に形を整えている。転

用品であろうか。338は器形から朝顔形の厚手底碗の蓋と考えられる。青磁染付で、二重圈線で区画された見込中央にコンニャク印判の五弁花、高台内に角椀の渦「福」銘が見られる。

344～414は陶器である。344は腰部以下しか遺存していない。外面は線刻の文様（木葉文か）の上に透明釉が施されており、内面にも透明釉が施されている。高台内に小判椀の「萬古」銘が見られる。万古産であろうか。353は隅切りの変わり角皿の口縁部破片である。胎土、特徴的な形状、鉄釉使いの文様などから、18世紀後葉の京焼と考えられる。358は瀬戸美濃の大皿で、体部が浅く開いた器形から近代以降のものと考えられる。吹墨と型紙刷を用いた草文は一見鉄釉に見えるが、わずかに青みがかかっておりコバルト染付と考えられる。364、365、367はいずれも深手の鉢で、胴部にくびれとくぼみのある特徴的な器形である。煎茶道で用いられる湯冷ましの可能性がある。371はいわゆる青土瓶、377、380はその蓋で、いずれも19世紀第2四半期のものと考えられる。380は内面に「寅／六月」の墨書がある。「寅」が「寅年」を指すとする、天保元（1830）年庚寅年、天保13（1842）年壬寅年あたりが候補となろうが、サイズがやや大きく、摘みのつくりなども丁寧で、19世紀第1四半期末ぐらいまで遡る可能性もあり、文政元（1818）年もしくは天保元（1830）年を「寅」年として想定しておきたい。384、386は無釉である。384は円板に手づくねの三足を付けたもので、円板部分と三足部分の胎土は異なる。円板部分の胎土は明赤褐色で粗く、径1mm以下の白色粒子が目立つ。一方、三足部分の胎土は橙褐色で粒子は細かい。同様のものが77号遺構でも出土している。386はかなり粗い胎土。いずれも窯道具の可能性が高い。384は焼台、386は匣鉢であろう。398は美濃高田産の灰釉徳利で頸部を打ち欠いて除去している。破断面の処理も丁寧で、内面に鉄錆が付着していることから、鉄漿壺に転用したと考えられる。408は美濃高田産の胎土で上半は欠損している。胴部の一部は窓状に打ち欠いて除去されており、破断面の処理も丁寧である。互灯もしくは手焙りに転用したと考えられる。

415～447は土器である。415、416、418～422は大きさから言って灯火皿であろう。415は底部外面に墨書がある。おそらく「中」であろう。423～427は植木鉢である。423、424は、体部に顕著なロクロ水挽痕が見られること、口縁端部のエッジが鋭角であることなどから近世のものと考えられるが、425～427は、体部が内面～外面にかけて連続的にナデ調整されており、口縁端部が滑らかに整えられているながらも、底部の穿孔が内側から指によって施されていることから、幕末～明治初頭のものと考えられる。429は器壁がかなり薄く、三足も小型化してボタン状になっていることから、幕末～明治初頭のものと考えられる。431、432は壺壺で、形状や内面の離材痕から、前者は17世紀にまで遡る輪積成形のもの、後者は18世紀中葉～後葉の板作り成形のものと考えられる。442は胴部破片で、色絵で赤い実のついた木の枝のモチーフが描かれ、透明釉が施されている。口縁部を中心に、スズやタールの付着が著しい。直接火にかける鍋であろう。447は無釉で、底部の外周縁辺部が面取りされている。体部の形状は不明、底部は、面取りされた部分の内側に高台があるのかもしれないが、詳細は不明である。

池遺構 下層（448～508）磁器20点、陶器29点、土器12点の計61点を報告する。

448～466は磁器である。466は碗蓋であるが、高台の内側隙がやや滑らかで深い器形が、望料碗の蓋に近い。

467～496は陶器である。470は碗で、腰部以下しか遺存していない。灰釉で、高台部は無釉、

丸みを帯びた高台の例りと「瀬戸助」の刻印が特徴である。枠なしだが、「瀬戸助」の文字周りには長方形の印体の痕跡が見える。特徴的な胎土は、にぶい橙色(7.5YR7/4)で、均質だが砂っぽく、破断面は粗い印象。胎土分析の結果、京焼と類似性の高い土であった。474は大皿で、口縁部が「く」の字状に内湾する特徴的な器形である。遺存部分が小さく、文様全体の様相は不明だが、鉄軸の渦文などが配されているのがわかる。17世紀第1四半期の織部である。478は大ぶりの灰釉の香炉である。上端部に顕著な敲打痕が見られ、灰落としとして利用されたものと思われるが、全体的な器形としてはやや浅いので、口縁部をある程度打ち欠いて背を低く整えた可能性もある。479は大皿で、体部が立って深さのある器形から近世のものと考えられる。高台内に「表／御臺所」とあり、注目される。表御殿(藩主の執務空間)の台所ということであろうか。487は美濃高田産の灰釉徳利で、底部に外側から打ち欠いて穿孔がされている。孔の大きさが底面の大きさに比して大きい印象。破断面の処理は丁寧である。転用品と考えられるが、頸部が遺存しているので、口が狭く、植木鉢には向かない器形である。

497～508は土器である。498、500、501は植木鉢である。498は外面がナデ調整で、底は指による穿孔なので、幕末～明治初頭のもの、500は内面～外面の連続的なナデ調整と外面の波線刻文から近代以降のもの、501は内面の顕著なロクロ水挽痕、エッジの立った口縁端部、指による底の穿孔などから近世のものと考えられる。499は灯火皿であろうが、底から体部へ立ち上る部分が厚く、口縁に向かって急激に薄くなる器形が江戸のものとは異なる。17世紀初頭まで遡る可能性もある。505、506の塩蓋は内面に布目圧痕が残る。いずれも布は平織りのようである。

93号遺構(509～542) 磁器15点、陶器11点、土器8点の計34点を報告する。

509～523は磁器である。515は丸碗だが、やや高く、径が大きい高台と底部中央が下がる器形は広東碗に近く、特徴的である。高台内に「大明年製」銘が見られ、18世紀末～19世紀前葉の肥前産である。

524～534は陶器である。525は腰張の碗で、高台内に「中金」の刻印がある。体部外面にかなり暗い色調の呉須で文様を描いている。17世紀末～18世紀前葉の肥前産、京焼写しである。526は三鳥手の大皿で、肥前産17世紀末～18世紀前葉のものである。陰刻文様の線に溜まっている白泥が薄いことから、18世紀に入ってからのものと考えられる。527は発色がやや鈍く、白濁した印象だが、17世紀末～18世紀前葉の肥前産青緑釉の大皿である。532～534は美濃高田産の徳利である。532は18世紀前葉のもので、胴部を打ち欠いて、縦楕円形の窓状にしている。破断面は丁寧に敲打して調整しており、内面にはススが付着している。瓦灯もしくは手焙りなどに転用したのであろう。533、534は18世紀後葉～19世紀前葉の幅に収まる時期のものである。「久・」「市一」の釘書きがある。

535～542は土器である。535は型打ち成形の皿形土器である。中央部を意識的に黒く焼いてある。536はロクロ成形で、口縁部にスス・タールが著しく付着しており、灯火皿と考えられる。底部外面に墨書が見られるが、遺存状態が悪くて判読できない。口径15cmとサイズが大きく18世紀以降のもの可能性が高い。

32号遺構(543) 磁器1点を報告する。543は32-1号遺構出土で、蓋である。コバルト染付で同心円を内外両面に施す。飯碗の蓋であろうか、やや丸みが強く、深手なので、丸みのある飯碗と対

になるのかもしれない。近代以降の製品と思われるが、時期、産地ともに不明。

90号遺構(544) 土器1点を報告する。544は円板状の塩壺の蓋である。ロクロ成形の塩壺と対になる。18世紀後葉～19世紀前葉の江戸産である。

94号遺構(545) 磁器1点を報告する。545は皿で、柿苜底、染付で施文。17世紀後半の肥前産である。

66号遺構(546～548) 磁器2点、土器1点の計3点を報告する。546は染付で周縁部に紅葉文を巡らす皿で、17世紀後葉～18世紀初頭の肥前産。547は内面一面に型打ちでレリーフ文を施した白磁の輪花皿である。見込みは花文、周縁部は葡萄文、口縁端部には口錆が巡る。高台内中央付近に目痕が見られる。17世紀後葉の肥前産である。548は土器で大形の皿である。推定口径15.5cmと、灯火皿としてはやや大きい。口縁端部のスズ・タール付着が著しいことから灯火皿とした。

【IV面確認の遺構】(第124～130図)

2号遺構(549～555) 磁器3点、陶器1点、土器3点の計7点を報告する。549、550は磁器の碗である、いずれも染付で施文しており、肥前産。前者は19世紀以降、後者は18世紀末～19世紀前葉のものである。551は磁器の中皿である。染付山水楼閣文の輪花皿で、口縁端部には口錆が施されている。19世紀前～中葉の肥前産である。552は陶器大皿である。高台が高く、見込みに染付の施文がある。おそらくは形骸化した山水楼閣文であろう。また、高台内に「中／金村」の刻印がある。17世紀後葉の肥前産、いわゆる京焼写しである。553、554、555はいずれも土器で、江戸産、553は灯火皿、554は瓦質の植木鉢、555は口縁部が内湾し、全体に丸みを帯びたタイプの火鉢である。後二者は、それぞれ18世紀末～19世紀中葉、19世紀前～中葉のものである。灯火皿は時期による変化に乏しく、553は18世紀以降のものとしか言えない。

3号遺構(556) 磁器1点を報告する。556は縁帯に蔓草文を巡らせ、二重圏線で見込を区画した蛇の目軸ハギの皿である。見込中央にコンニャク印判の五弁花が見られ、18世紀後葉の肥前産と考えられる。

6号遺構(557～566) 磁器17点、陶器15点、土器11点の計43点を報告する。

557～573は磁器である。557は薄手極小の小杯で、染付で「み■■ □町紅」とある。欠損してはいるが、おそらく「町」字の前は「小」字で、高級ブランド紅「小町紅」の容器と考えられる。18世紀末以降の肥前産であろう。562、563、565、566は、18世紀末～19世紀前葉の端反碗であるが、562はやや大ぶりて文様も丁寧に描かれていることから古め、566は文様の崩れ具合などから新しめのものと思われる。567は深目の鉢である。欠損部分が多く文様の全容は不明だが、文人風の人物の足元が確認できる。二重圏線で画された見込に松樹が描かれ、高台内には異形字路がある。体部から底部にかけて幾筋もの焼継痕が見られ、高台内に焼継印が記されているが、破損して判読不可である。中国産の舶載磁器で、18世紀後葉～19世紀前葉のものである。

574～587は陶器である。579～581は大振りの灰軸丸碗である。高台のつくりや高台周りの処理、施軸範囲などからいずれも17世紀末のもの判断される。瀬戸美濃産である。581は高台内側の際に墨書で圏線が描かれている。582は流し胎軸の碗である。腰部から直に開く体部の中ほどに屈曲のある特徴的な器形で、高台は兜巾ケズリ。1760～70年代の萩焼である。584は白色軸、口縁から緑軸を流し掛けした灰落として、18世紀末～19世紀前葉の京焼である。586、587は徳利である。前者は灰軸で19世紀前葉、後者は胎軸で17世紀末のもの、いずれも瀬戸美濃産である。胴部に釘

書があり、586は「久〇」、587は「市ㄣ」と読める。前者は点書で、一見ただけでは認識できないが、後者はしっかり軸が削り取られた線書で、はっきりと読み取れる。釘書については、より新しい時期になると簡略化が進むことが知られているが、この二点はそれぞれの時期の釘書の実態を反映していると言える。

588～599は土器である。588は外面が鬼面のモチーフの小杯である、内面中央には宝珠が刻まれており、外面に鉄軸、内面に透明釉が施釉されている。鬼の顎部分にあたる側面に「賤機」と刻まれていることから、駿府城近郊で焼かれた賤機焼と考えられる。賤機焼は静岡県静岡市で生産されてきたやきもで、現在は静岡県伝統工芸品に認定されている。静岡県郷土工芸品振興会や静岡市のHPなどによると、江戸時代初期、駿府に隠棲した徳川家康の家臣太田七郎右エ門によって賤機山麓に開窯されたという。家康から朱印地と「賤機焼」の呼称を賜り、徳川家の御用窯として茶陶などを生産したが、文政年間(1818～31年)末頃、付近を流れる安倍川の水害によって窯場が流され、途絶えた。明治に入ってから、太田家の後継萬治郎が再興を試みるも、不調に終わり、その後、静岡市内の陶工青島庄助によって、ようやく現在の復興賤機焼が生産されるようになったという。

賤機焼には、外面が鬼面、内面が福面の「鬼福」と称される伝統的なモチーフが伝わっており、これは、家康が武田信玄に攻められ、窮地に陥った際に、「鬼は外、福は内」と叫びながら打って出て勝利したことに因んだものとされている。本資料は、内面が福面ではないものの、この「鬼福」に準じるものと考えられる。また、初期の製品は900℃程度の比較的低い温度で焼成され、釉薬と胎土のなじみが悪く脆いとされ、本資料の土師質の胎土や低温で融解する鉛釉に類似点を見出すことができるが、埋蔵文化財としての窯や製品は確認されておらず(静岡市教育委員会による)、検証することはできない。本資料は、共存遺物の年代観が概ね19世紀前半以前であることに照らすと、窯が一旦途絶える文政年間以前のものと考えられよう。

591は塩壺の蓋で、口縁に段のある板づくり成形の塩壺に対応する。内面は一面にスス・タールが付着しており、外面に十字の刻みが見られる。また、十字の交点には、もみ切りのようにして凹ませた径6mm程の凹みがある。孔をあけようとして、途中であきらめた痕跡であろうか。また、側面の下端部を磨って面取りしたような痕跡も見られる。温石などに転用しようとした可能性が指摘できる。594は灰落としてであろう。外面に松樹のモチーフがレリーフ状に施され、漆を塗った痕跡が見られる。近代に入ってからのものである。595は灯火皿である。江戸産で、直に開く体部とサイズから、17世紀後半のものと考えられる。596は大きさから胞衣皿として使われたものと考えられる。胞衣皿は近代になっても継続する器種であるが、近代には底部の切り離しに糸を使わなくなることから、近世のものと考えられる。

9号遺構(600～601) 陶器1点、土器1点の計2点を報告する。600は陶器鉄軸の土瓶の蓋である。19世紀前半のものであろう。601は土器の焙烙である。非常に浅く、復元はできないものの口径も焙烙としてはかなり小さい印象である。江戸産ではあるが19世紀中葉以降のもので、近代の製品の可能性もある。

12号遺構(602) 土器1点を報告する。602は火消し壺か、袋状の灰落としてである。胎土からは江戸産と考えられ、同様の器形のもので18世紀中葉ごろに出現することから18世紀中葉以降のものとしたが、ロクロ成形で底部の切り離し道具として糸を使っていない点を考慮すると近代以降のもの

である可能性が高い。

17号遺構(603～第128図609) 磁器4点、陶器2点、土器1点の計7点を報告する。605は磁器の染付皿で、海浜文であろう。輪花皿で口縁端部には口錆が施され、高台内に「頭」と読める墨書が見られる。606は磁器の植木鉢で、装飾的な三足を持つ。染付のモチーフは山水楼閣文と思われ、絵付けは丁寧で発色も鮮やかである。19世紀前葉以降の瀬戸美濃産と考えられる。609は土器の焙烙で、浅く、口径が小さい印象。19世紀中葉以降の江戸産である。近代のものである可能性もある。

24号遺構(610～614) 磁器1点、陶器1点、土器3点の計5点を報告する。610は染付の磁器大皿で、葡萄短冊文を施す。やや腰の張る器形で、高台内中央付近に二重の角枠が見られる。渦「福」銘であろう。17世紀後葉～18世紀前葉の肥前産である。611は陶器である。焼き締めのようなようであるが、被熱による器表の剥離が著しく、断言はできない。底部のみで器種は不明であるが、底部外面に「◇」の刻印がある点、体部がかなり開いて立ち上がる点を考慮すると挿目は確認できないものの、挿鉢の可能性もあろう。時期・産地は不明である。612～614は土器で江戸産、それぞれ埴形土器、焙烙、灯火皿である。612の埴形土器は民具に見られるコタツ(掘りごたつ)のオトシのように、床の一部に設けた方形の穴に落とし込んで用いる。外側に張り出した埴縁によって穴の中に落ち込んでしまうことなく設置でき、茶室の炉などとして用いたと考えられる。

25号遺構(615) 土器1点を報告する。615は浅く口縁の開いた焙烙で、18世紀後葉～19世紀前葉の江戸産である。底部外面にチヂレ目が遺る。

33号遺構(616) 磁器1点を報告する。616は内面縁部を型打ち成形した輪花の大皿である。見込に染付の施文がある。被熱によって細かい破片が融着している。17世紀後葉～18世紀初頭の肥前産である。

68号遺構(617～623) 磁器1点、陶器5点、土器1点の計7点を報告する。617は磁器小碗で染付草文、見込には一重圏線が巡り中央に五弁花が手描きされる。17世紀後葉～18世紀前葉の肥前産である。619、620、621、622は陶器で、619は灰釉鉄絵の若松碗で文様の崩れ具合などから18世紀後葉～19世紀前葉の京・信楽産と考えられる。620は、鎧手碗である。体部外面は無釉、内面→口縁部外側にかけて鉄釉が施される。19世紀前葉の瀬戸美濃産である。622は鉄釉の灯火皿で、内外両面に環状の重ね焼き痕が遺る。18世紀末～19世紀前葉の瀬戸美濃産である。また、621は徳利で、底部だけの破片である。時期は絞り切れないが、19世紀以降、美濃産である。底部に墨書があるが、薄くなってしまっており判読不可である。

69・74号遺構、70号遺構(624～637) 磁器5点、陶器1点、土器8点の計14点を報告する。624、625、626は磁器である。624は極めて薄手で、体部が直に開く特徴的な器形である。小杯であろうか。高台内に「雅」とある。18世紀後葉～19世紀前葉、中国産の舶載磁器である。629は陶器の三島手大皿である。17世紀後葉～18世紀前葉の肥前産であるが、陰刻文様の上から施された白泥が薄いので18世紀前葉のものであろう。高台内に「脂所」の墨書がある。630～636は土器の灯火皿である。いずれもサイズから17世紀後葉のものと考えられる。634、635は底部外面に墨書があるが、薄くなっており判読不可である。637は土器の火鉢である。サイズが大きいため、17世紀代のももの可能性がある。

70号遺構(638) 磁器1点を報告する。638は丸碗で、染付で藤文を描く。18世紀中葉の肥前産

である。

71号遺構(639) 土器1点を報告する。639は焙烙で、一定の深さがあり、体部が底部からしっかり立ち上がる器形である。17世紀末～18世紀初頭の江戸産で、底部外面にチヂレ目が遺る。

72号遺構(640) 磁器1点を報告する。640は小振りの丸碗で、染付で花形窓に草花文を配した文様である。18世紀後葉～19世紀前葉の肥前産である。

85号遺構(641～647) 磁器2点、陶器3点、土器2点の計7点を報告する。644は陶器の碗、高台内に「瀬戸助」(枠なし)の刻印がある。胎土は明褐灰色(7.5YR7/2)で均質だが、やや粗い印象で、特徴的である。腰部に段状の沈線が巡らされており、鉢筒底状の高台にはかまぼこ形の切れ込みがあり、畳付以外は施釉されている。胎土分析の結果、京焼と類似性の高い土であった。遺構下層でも「瀬戸助」銘の陶器碗が出土しているが(470)、銘の形状は異なる。647は陶器胎釉の徳利で、胴部に「サ」の釘書がある。軸がしっかり削り取られ、文字の形も崩れていない古い時期の釘書と考えられる。また、胴部破断部分にわずかに整えた痕跡が見られ、楕円形の窓をあけて瓦灯もしくは手焙りなどに転用した可能性がある。

■文字や記号が記された陶磁器・土器(第38表、図版36～37)

釘書、墨書、焼継印、刻印などの、文字や記号が記されたもの183点(184例/墨書の上に釘書を施したものが1点あるため)を報告する。内訳は、釘書114点(115例)、墨書46点(46例)、焼継印11点(11例)、刻印12点(12例)である。釘書・墨書・焼継印は製品が利用される過程で付加されたもので、使用痕として捉えられるが、刻印は製品の一要素である。両者の性質は異なるが、ここでは文字や記号を「マーク」として捉え、同列に扱うこととする。以下、「マーク」の示す内容について報告する。なお、それぞれの「マーク」を個別に検討するため、例数を以て数量を検討することとする。また、一覧表のうち、挿図番号あるものは、実測図を掲載したもので、図化しなかった破片については、判読できたものを中心に写真図版(図版36～37)を以て報告する。

釘書(Kg1～114) 釘書の施された製品の内訳は、美濃高田産の徳利が111例(95.7%)、磁器皿が4例(3.5%)、磁器小鉢が1例(0.8%)と、器種に著しい偏りが見られる。

徳利111例の釘書内容の内訳は以下の通りである。①「久〇」17例+これに準ずるもの(「久」「久・」など)9例=26例(23.6%)②「七々ちし」9例+これに準ずるもの10例=19例(17.3%)③「市ー」9例+これに準ずるもの(「市」など)3例=12例(10.9%)④「サ」5例(4.5%)⑤「木■」2例(1.8%)、「上」1例+これに準ずるもの(「へ上」など)1例=2例(1.8%)、上記以外15例(13.6%)、判読不可29例(26.4%)。判読不可のものが最も多いのは、釘書の書体がかなり難な列点状のものが多いことに起因しているであろう。判読できたものの中で、最も多いのは「久〇」に類するもので、「久〇」の他、これに準ずるものとして「久」6例(Kg14、53、65、68、78、84)、「久>」「久ト」「久・」が各1例づつ(Kg5、15、17)見られる。「久・」については、木製品の中に「久・」の焼き印のある蓋(第137図44)があり、関連があると考えられる。なにかしらの業者もしくは店舗を指し示すものであろうか。次に多いのは「七々ちし」に類するものである。肩部のすぐ下に、横書きで一周するように4文字が配されており、恐らくは「七/々/ちし」(右読みで「しち/々/七」)、すなわち「七」の繰り返すと推測される。当地が「七軒町」であることを勘案すると興味深い、具体的に指し示すものについては不明である。屋号の一部であろうか。これに準ずるものとして、肩

部のすぐ下に「七」「々」「ち」「し」の四文字のうちのいずれかが見られるもの10例(Kg10、25、42、55、58、60、67、80、96、108)がある。三番目に多いのは「市一」に類するもので、これに準ずるものとして「市」が3例(Kg74、95、103)見られる。「市一」については、墨書の中にも2例(B17、34)が見られる。いずれも徳利の底部に記されている。屋号であろう。また、前述の「久〇」類や「七々ちし」類の書体は列点状の点書ものがほとんどであるが、「市一」類の書体については線状もしくは太線状の線書ものが目立つ。これら3類で57例(51.4%)になり、以下は「サ」5例、「木■」類2例、「上」類2例、1例のみのものが16類16例となる。「サ」は磁器にも2例見られ(Kg36、85)、「上」に準じる「へに上」は墨書にも見られる(B32)。各1例のものは、「へに本イ」「へにト」「へに三」「へに清」「山笠に五」「〇」「〇にさ」「〇に川」「〇十」「…屋」「…や」「丹」「四方」「や…」「り」である。「丹」については、木製品の中に「松平丹後守様／御おくに面／八千代■」の墨書のある荷札があり、丹後守屋敷の使用人にあてたものと考えられるので、丹後守屋敷に関するものを指し示すものかもしれない。それ以外については、屋号もしくはその一部と考えられよう。また、「…や」はB3の墨書の上に釘書きを施したものである。

磁器については、「六芒星に右」(Kg105／皿高台内)、「松」(Kg106／皿見込)、「イ」(Kg37／皿高台内)、「サ」(Kg85／皿高台内)、「サ」(Kg36／小鉢胴部外面)の5例で、「サ」が2例見られる。「サ」は前述の徳利にも5例見られ、料理屋などを指し示すものかもしれない。

なお、第1次調査では、美濃高田産灰釉徳利の釘書きとして、「久〇」97例、これに類するもの(「久」「久〇サ」「久〇ち」「久ト」「久上」「サ久〇」など)8例の計105例、「七しち々」1例、「市一」1例、「〇に二」1例、「サ」1例、「丹」1例、「四方」1例が確認されている。

墨書(B1～46)確認された46例のうち判読不可のものが19例(41.3%)、一部が判読できたものの意味が分からないものが9例(19.6%)であった。判読できたものの内訳は、屋号もしくはその一部を示すと思われるものが8例(17.4%/B1、3、17、24、32、34、36、39)、場所を示すと思われるものが4例(8.7%/B22、26、30、37)、日付を示すと思われるものが4例(8.7%/B4、16、19、20)、その他が2例(4.3%/B5、14)である。屋号を示すものの中には「市一」2例、「へに上」1例など、釘書にも見られるものが確認された。場所を示すもの4例の中には、「表／御臺所」(B22)、「臺所」(B30)、「膳所」(B37)と、3例の食事を整える場所を示すものが見られた。これらの器物が用いられた場所であろう。「表」が表御殿(藩主の執務空間)を示すのであれば、これに対して「奥」=奥御殿(藩主家族の居住空間)が想定でき、それぞれに食事を整える場所があったとも考えられよう。日付を示すものの中では「文化八末年／三月三日／■之」(B16)が目される。鉄軸の陶器土瓶蓋で19世紀前葉のものと推定できるが、文化八年は1811年で、時期的に合致する。また、「寅／六月」(B20)については、京焼の緑釉土瓶蓋で19世紀第2四半期ぐらいのもので、天保元(1830)年庚寅、天保13(1842)年壬寅あたりが候補となろうが、器形がやや古めで19世紀第1四半期にまで遡る可能性もあるので、文政元(1818)年もしくは天保元(1830)年を想定しておきたい。第1次調査でも「天明三年〇所五月」「茶文化三年九月〇」「文化十年御門とり七月五日」「文化十年〇澤〇片口正求之」など(天明三年は1783年、文化三年は1806年、同十年は1813年)、18世紀後葉～19世紀前葉の同じような時期を示す墨書が確認されている。その他、「火キ」(B5)は灰落としに書かれた墨書で、火器の意であろう。

焼継印 (Y1 ~ 12, Y7 は欠番) 11 例中、焼継印かどうか断言できないものが 2 例、判読不可のものが 3 例である。判読できた 6 例の内訳は、「イ」「一」が各 2 例、「ハ」「大」が各 1 例である。6 例のうち、焼継痕の見られたものは 4 例である。

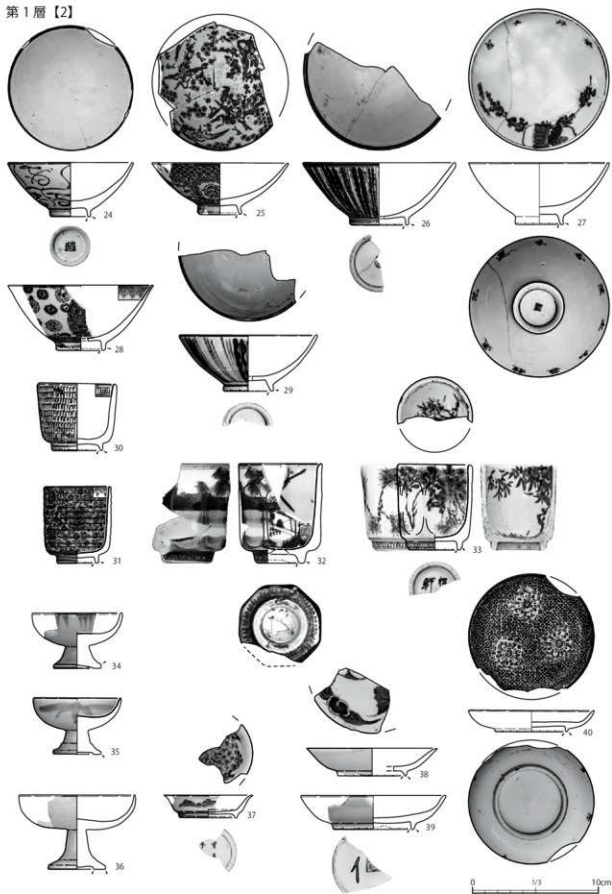
刻印 (Ko1 ~ 15, 5・7・9 は欠番) 12 例中、判読不可のものが 1 例 (Ko2)、産地を表すと思われるものが 2 例 (Ko3, 6)、生産者を表すと思われるものが 10 例 (Ko1, 4, 8, 10 ~ 15) である。Ko2 は円椀で、印影はハッキリとしているが、椀内の文字が判読できない。なじみのない盤状の器形だが、胎土から志戸呂産と考えられる。Ko8, 15 の「瀬戸助」については、いずれも椀なしだがタイプが異なる。第 1 次調査でも 1 例 (底部小破片のため器種不明) が確認されており、印体は Ko8 と類似している。Ko1 の「中金」、10 の「中／金村」は、いずれも京焼写しの肥前陶器である。

第1層【1】



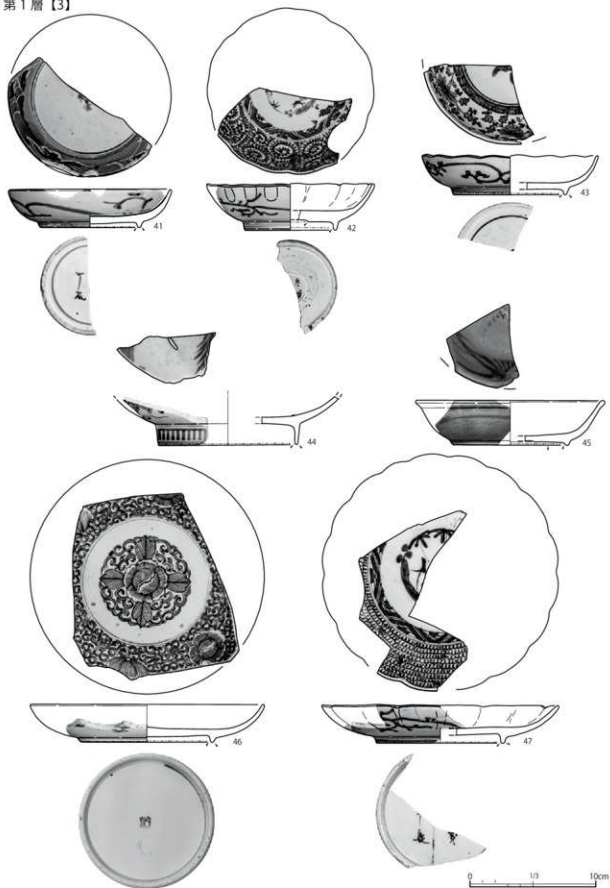
第77圖 陶磁器・土器(1)

第1層【2】



第78図 陶磁器・土器(2)

第1層【3】



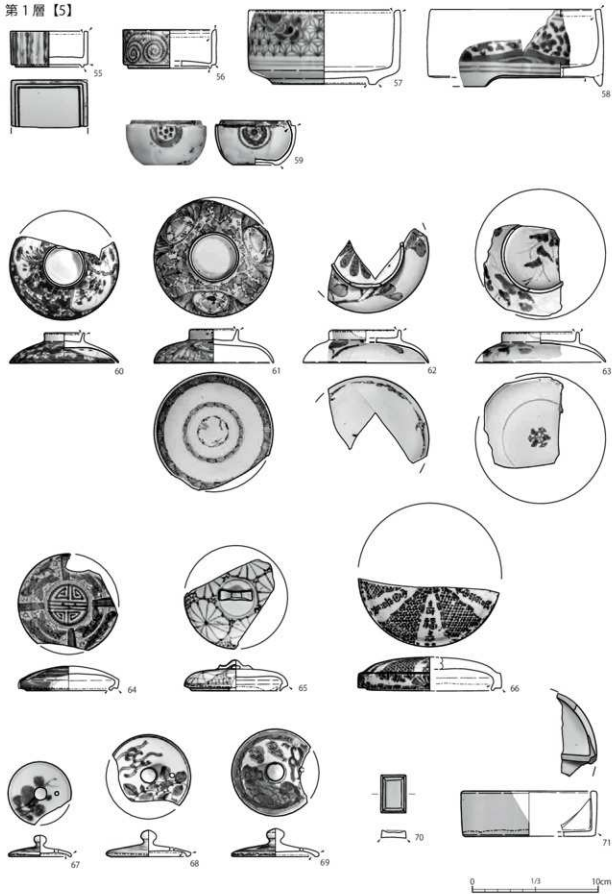
第79図 陶磁器・土器(3)

第1層【4】



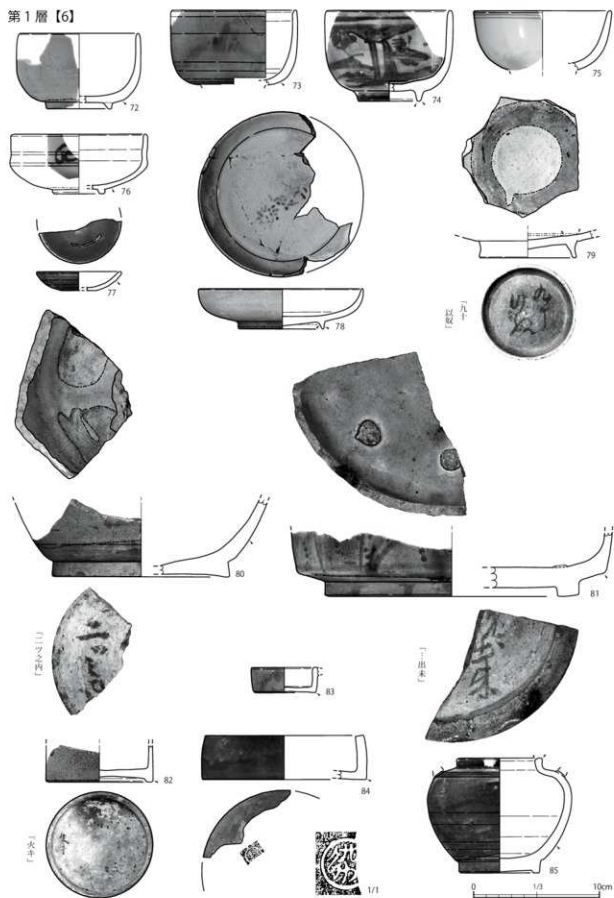
第80図 陶磁器・土器(4)

第1層【5】



第81圖 陶磁器・土器(5)

第1層【6】



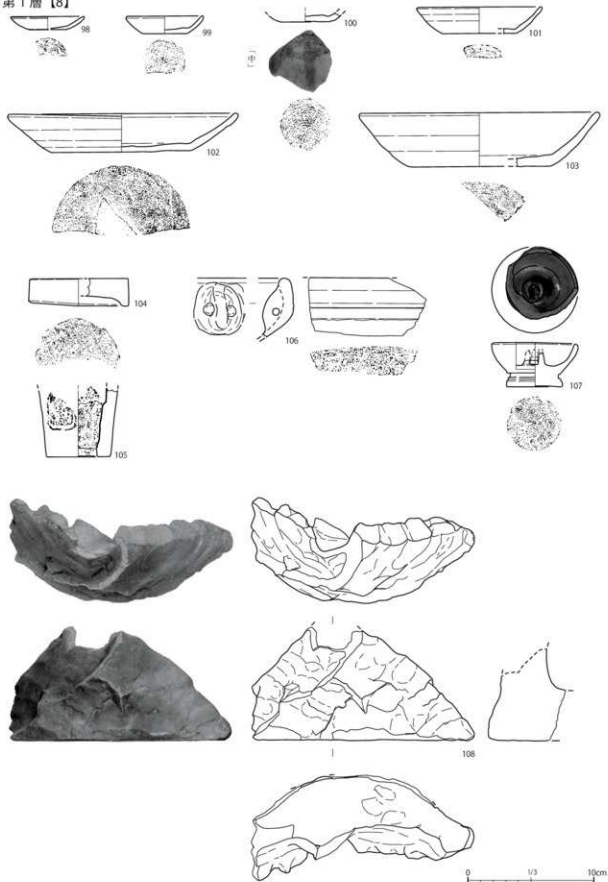
第82図 陶磁器・土器 (6)

第1層【7】



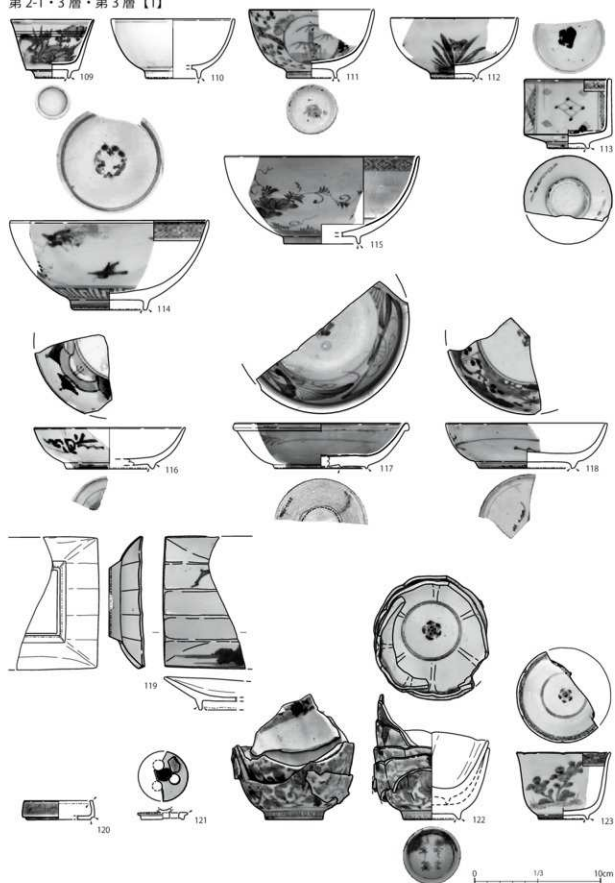
第83図 陶磁器・土器 (7)

第1層【8】



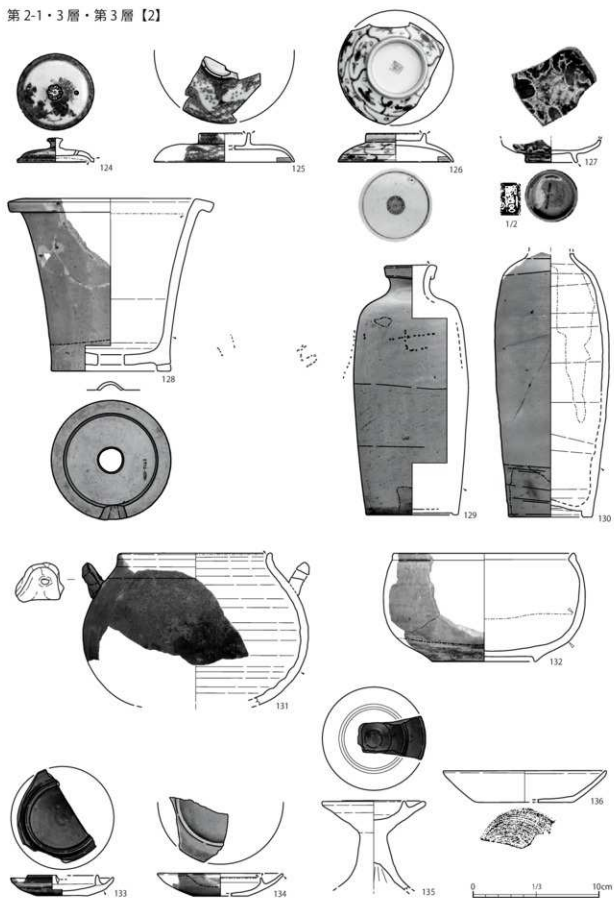
第84図 陶磁器・土器(8)

第2-1・3層・第3層【1】



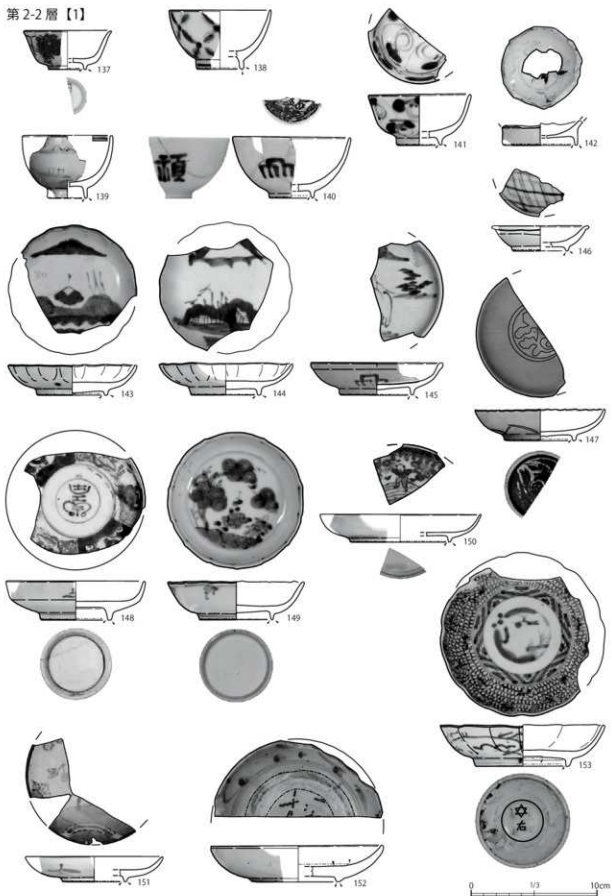
第85図 陶磁器・土器 (9)

第2-1・3層・第3層【2】



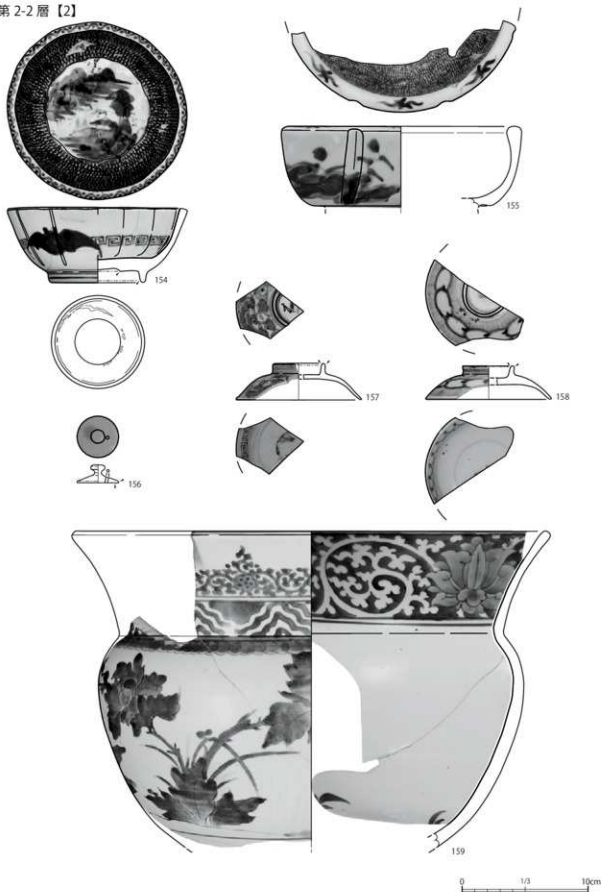
第86図 陶磁器・土器 (10)

第2-2層【1】



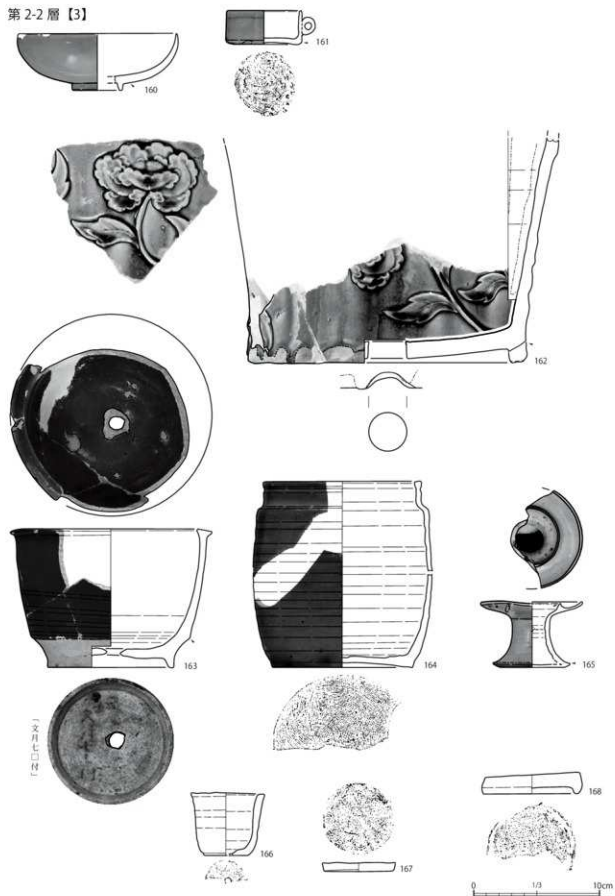
第 87 図 陶磁器・土器 (11)

第2-2層【2】



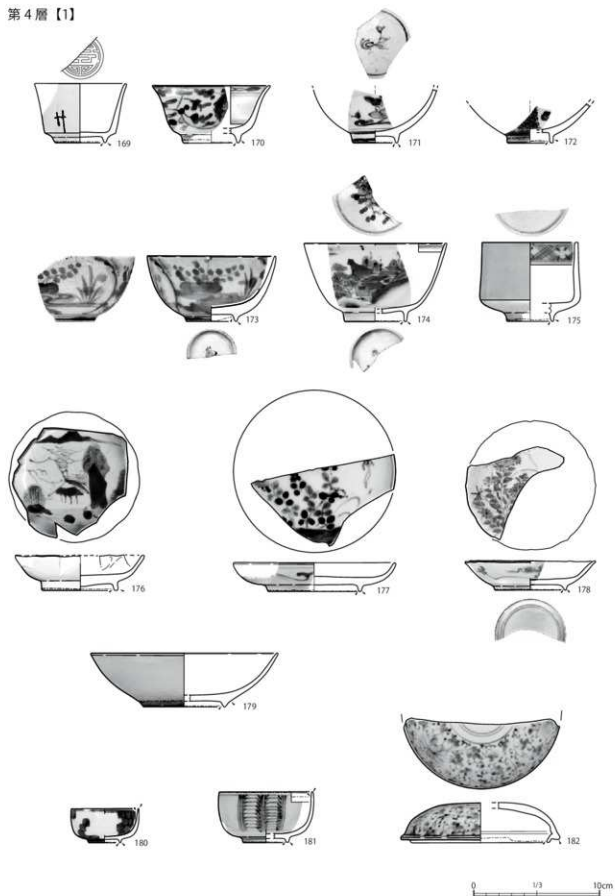
第88図 陶磁器・土器 (12)

第2-2層【3】



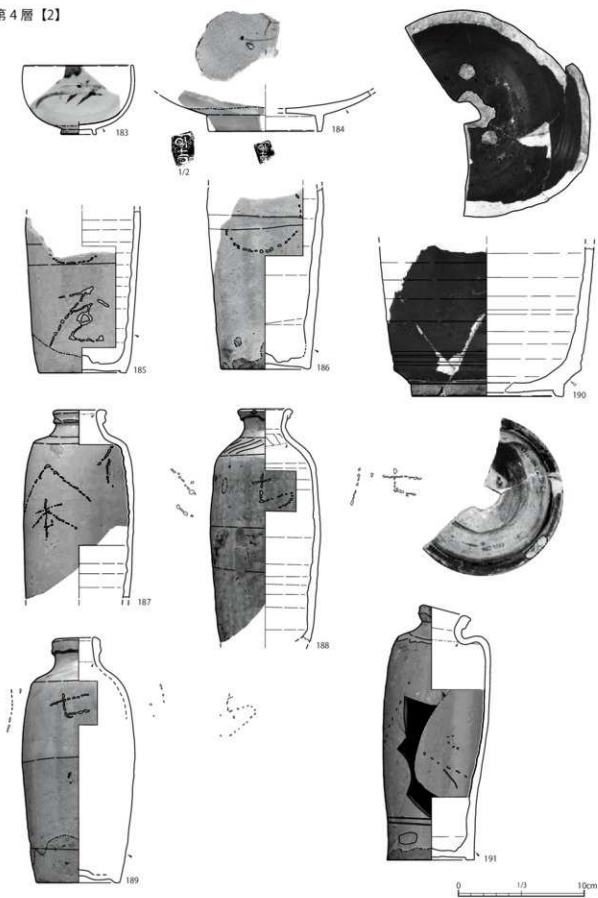
第89圖 陶磁器・土器 (13)

第4層【1】



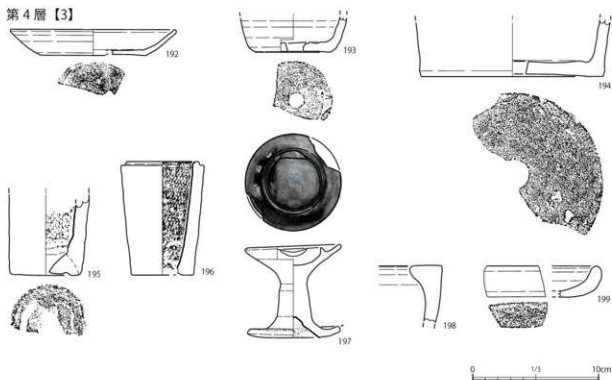
第90図 陶磁器・土器 (14)

第4層【2】



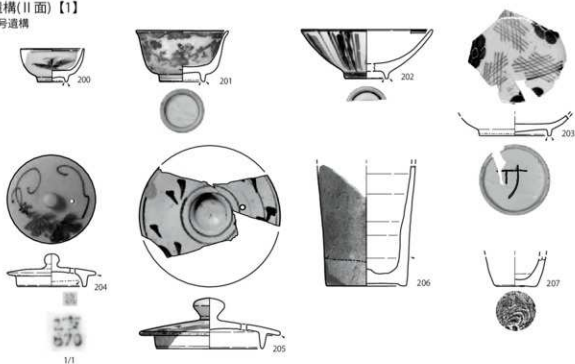
第91図 陶磁器・土器 (15)

第4層【3】

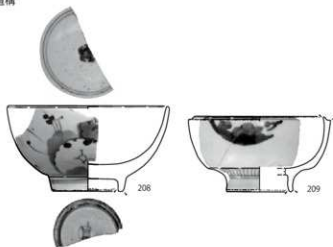


第92図 陶磁器・土器 (16)

遺構(II面)【1】
7号遺構



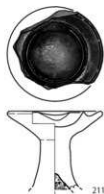
14号遺構



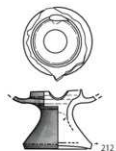
63号遺構



13号遺構



46号遺構

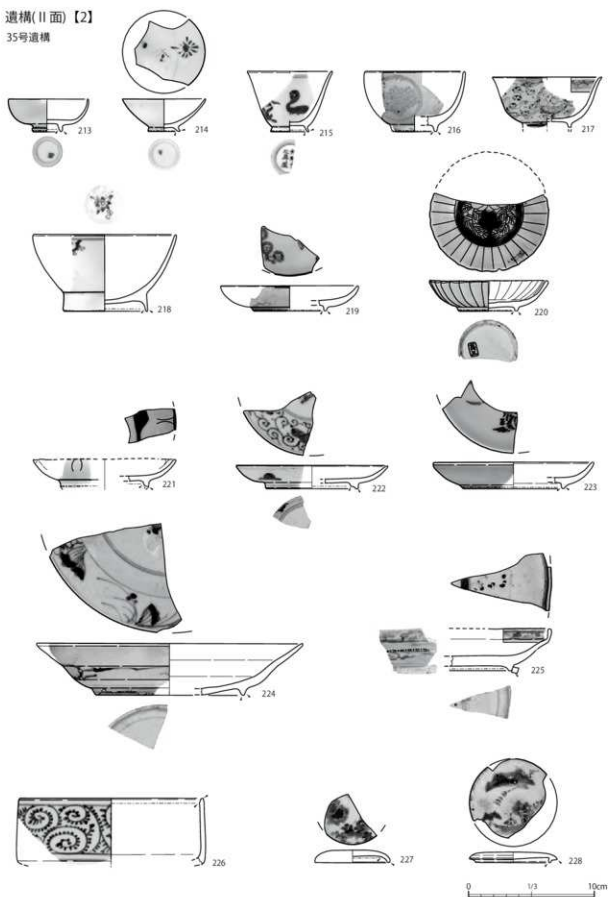


第93図 陶磁器・土器 (17)



遺構(II面)【2】

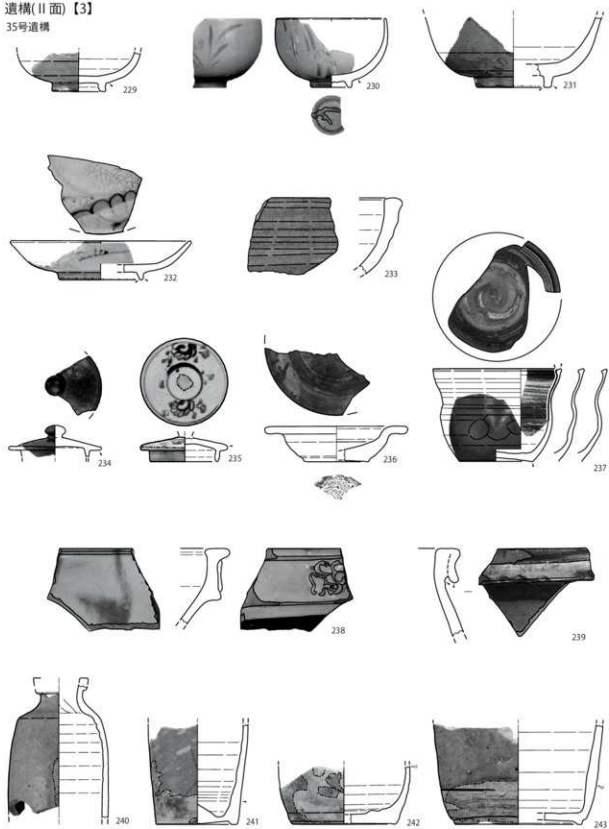
35号遺構



第94図 陶磁器・土器 (18)

遺構(II面)【3】

35号遺構

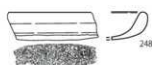


0 1/3 10cm

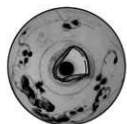
第95图 陶磁器・土器 (19)

遺構(II面)【4】

35号遺構



37号遺構



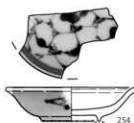
52号遺構



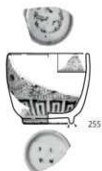
56号遺構



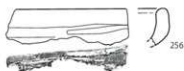
55号遺構



59号遺構



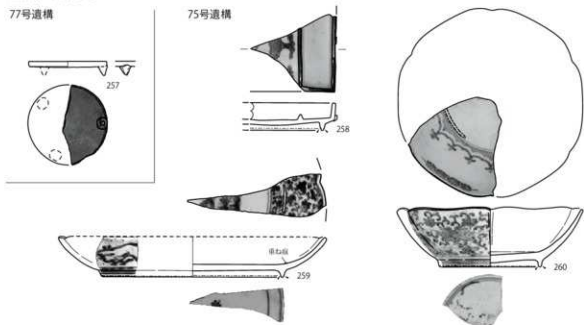
86号遺構



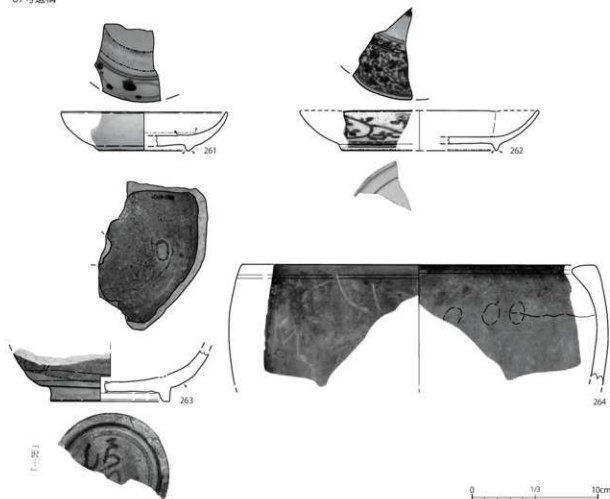
第96図 陶磁器・土器(20)

遺構(Ⅲ面)【1】

77号遺構



87号遺構



第97図 陶磁器・土器 (21)

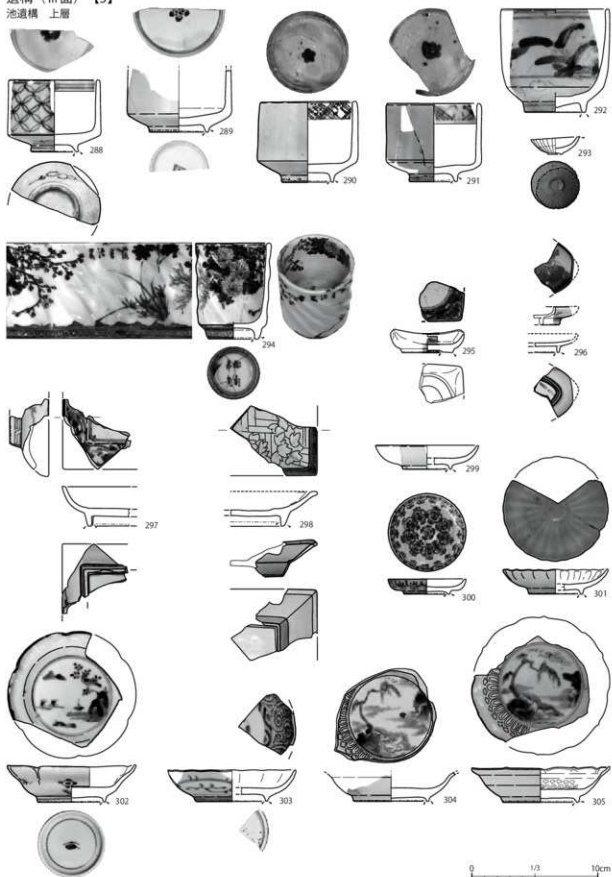
遺構 (川面) 【2】

池遺構 上層

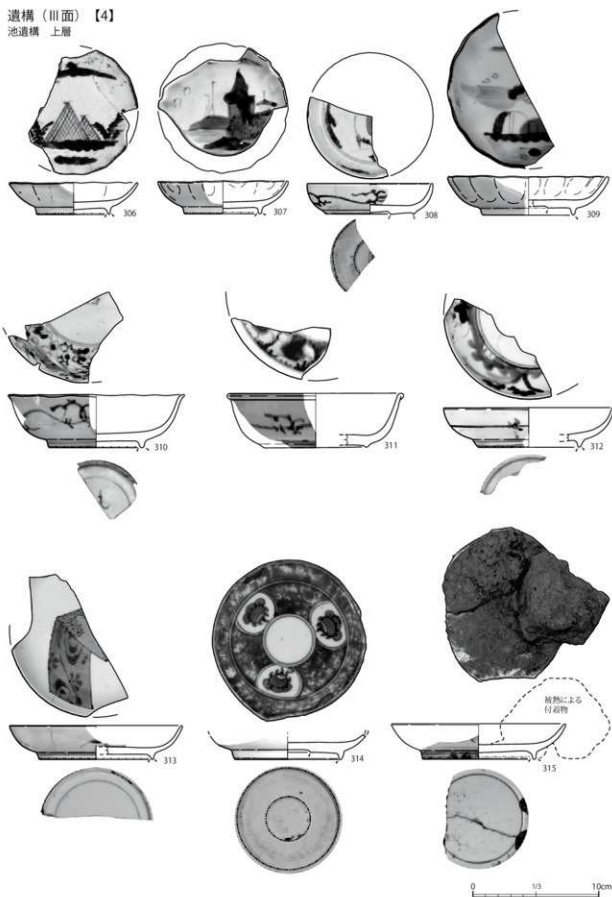


第 98 図 陶磁器・土器 (22)

遺構(川面) [3]
池遺構 上層

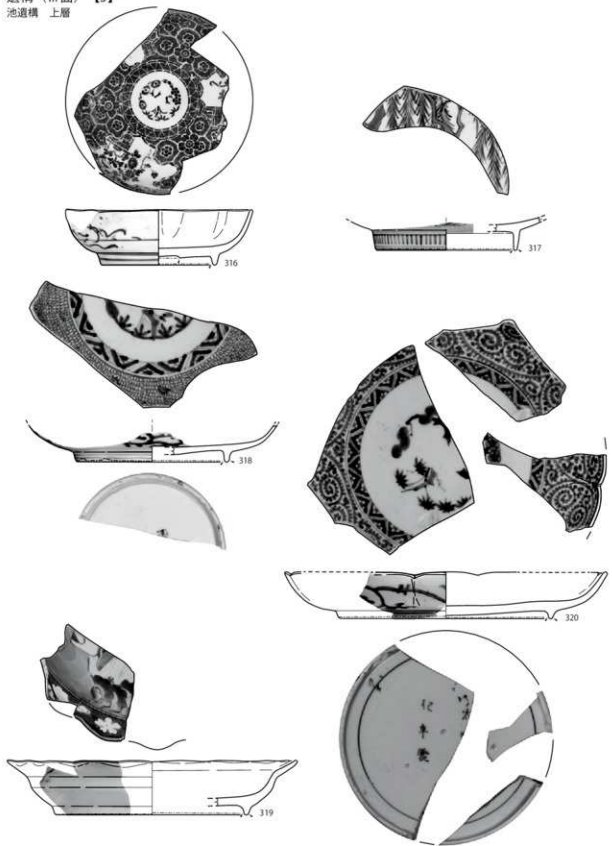


第99図 陶磁器・土器 (23)

遺構(Ⅲ面)【4】
池遺構 上層

第100図 陶磁器・土器(24)

遺構 (川面) 【5】
池遺構 上層

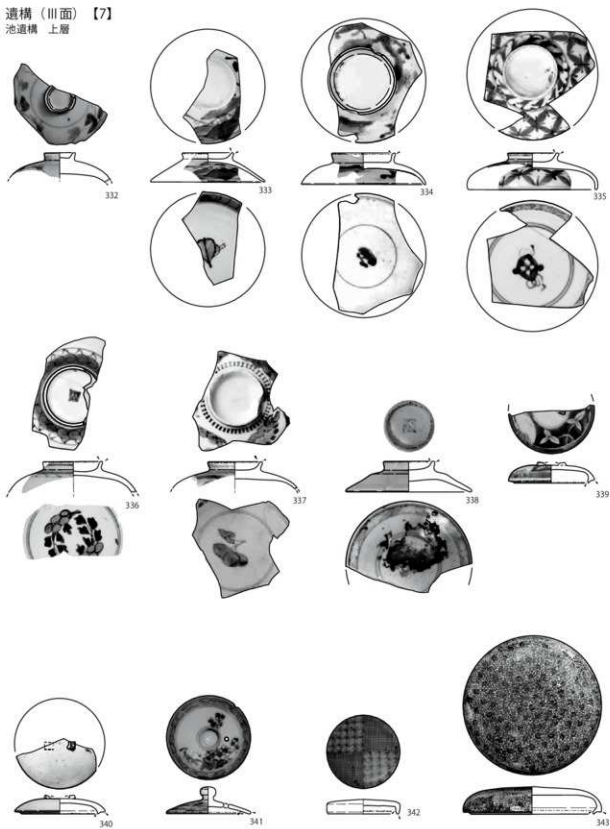


第101図 陶磁器・土器 (25)

遺構(川面)【6】
池遺構 上層

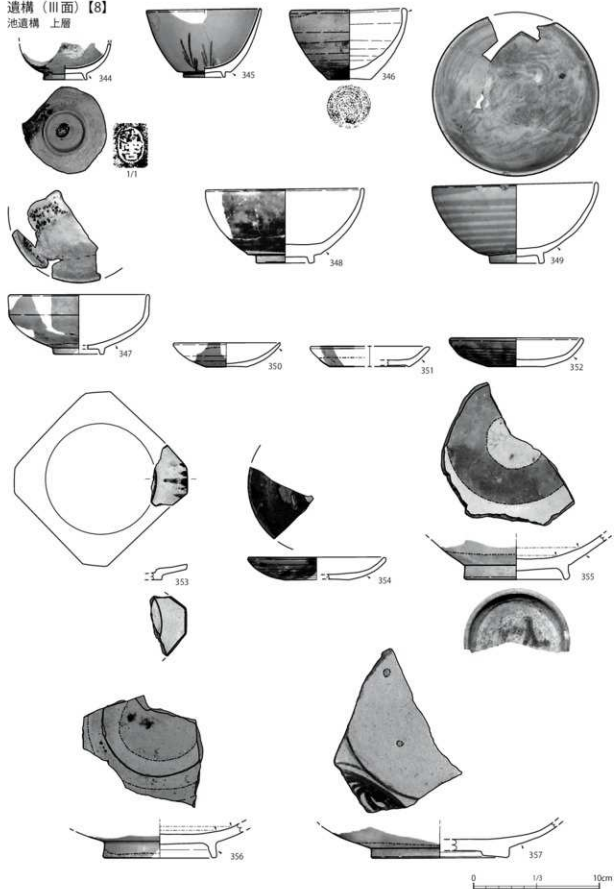
第102図 陶磁器・土器(26)

遺構 (川面) 【7】
池遺構 上層



第 103 図 陶磁器・土器 (27)

0 1/3 10cm

遺構 (III面) 【8】
池遺構 上層

第104図 陶磁器・土器 (28)

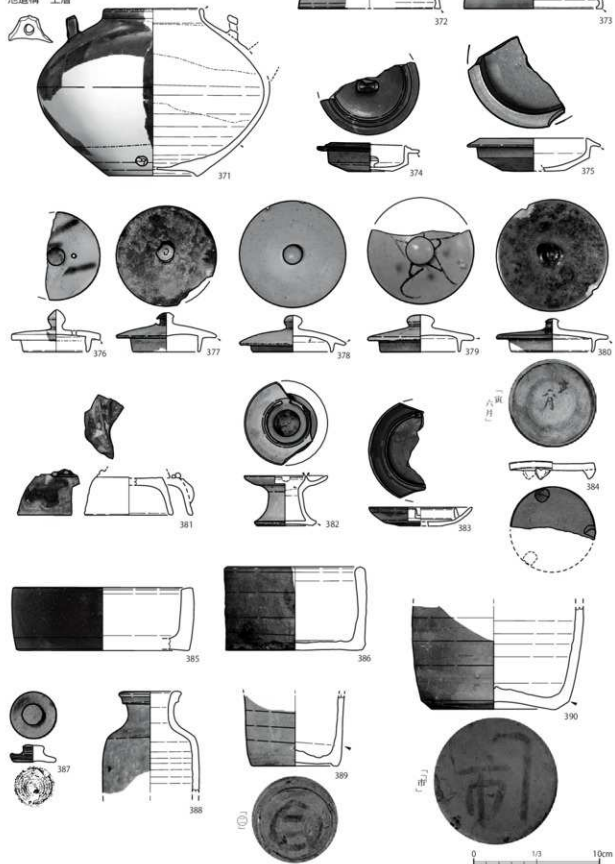
遺構 (Ⅲ面) 【9】
池遺構 上層



第105図 陶磁器・土器 (29)

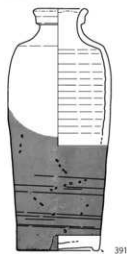
遺構(Ⅲ面)【10】

池遺構 上層

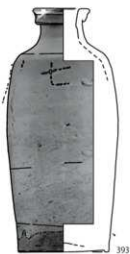
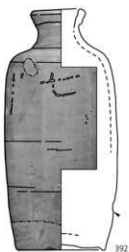


第106図 陶磁器・土器(30)

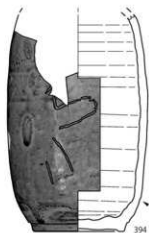
遺構 (III面) 【11】
池遺構 上層



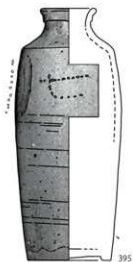
1/5



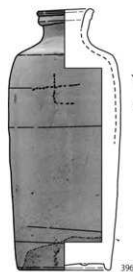
1/5



1/5



1/5



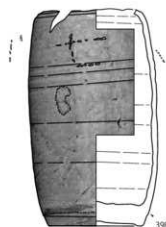
1/5



1/5



1/5



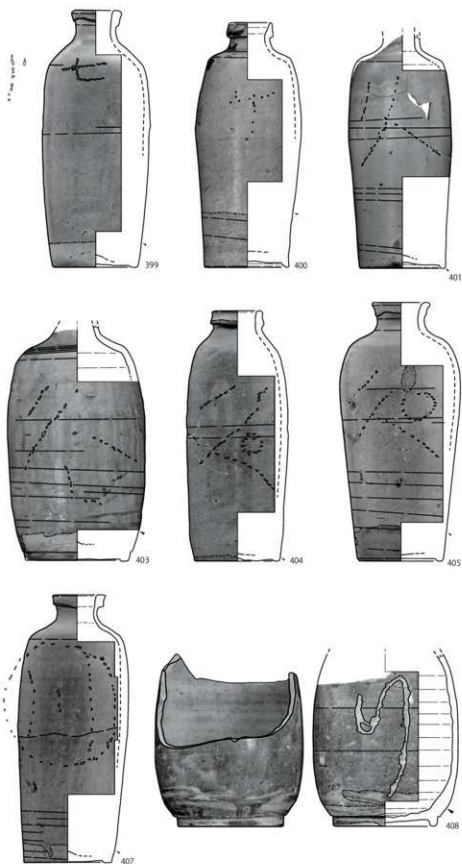
1/5

0 1/3 10cm

第107図 陶磁器・土器 (31)

遺構 (III面) 【12】
池遺構 上層

山 ち

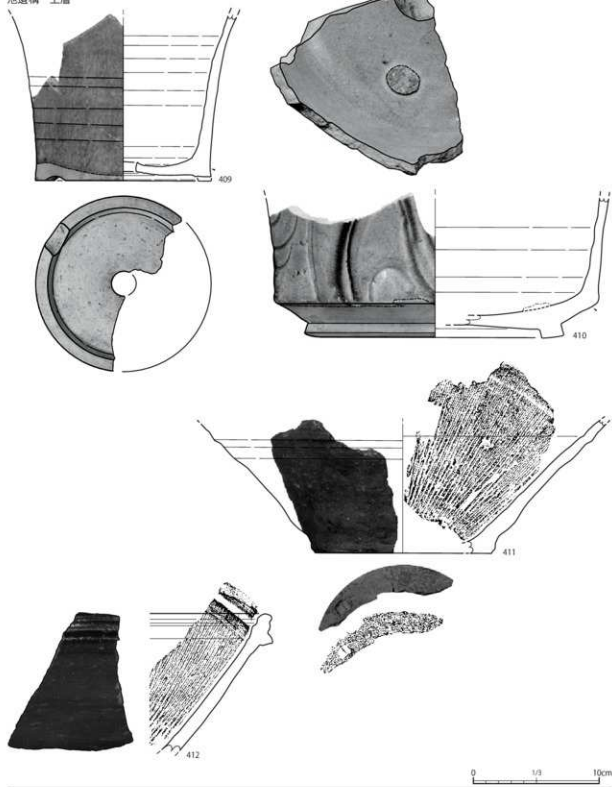


第108図 陶磁器・土器 (32)

0 1/3 10cm

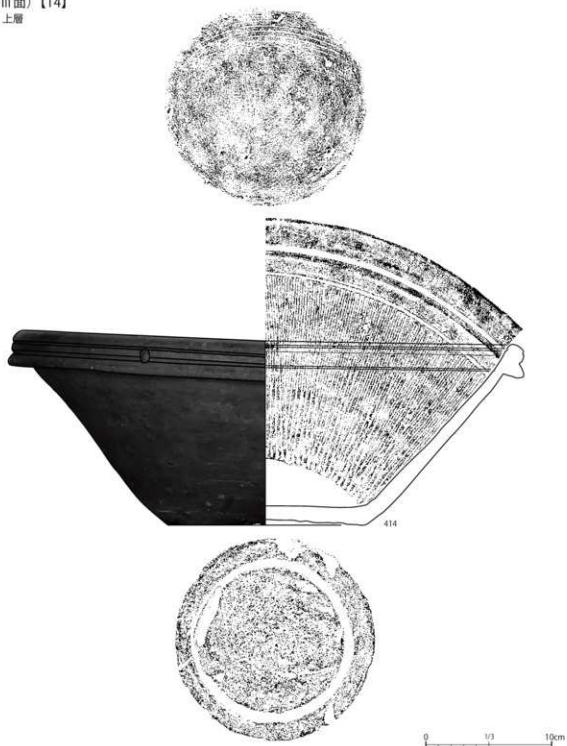
遺構(Ⅲ面)【13】

池遺構 上層



第109図 陶磁器・土器(33)

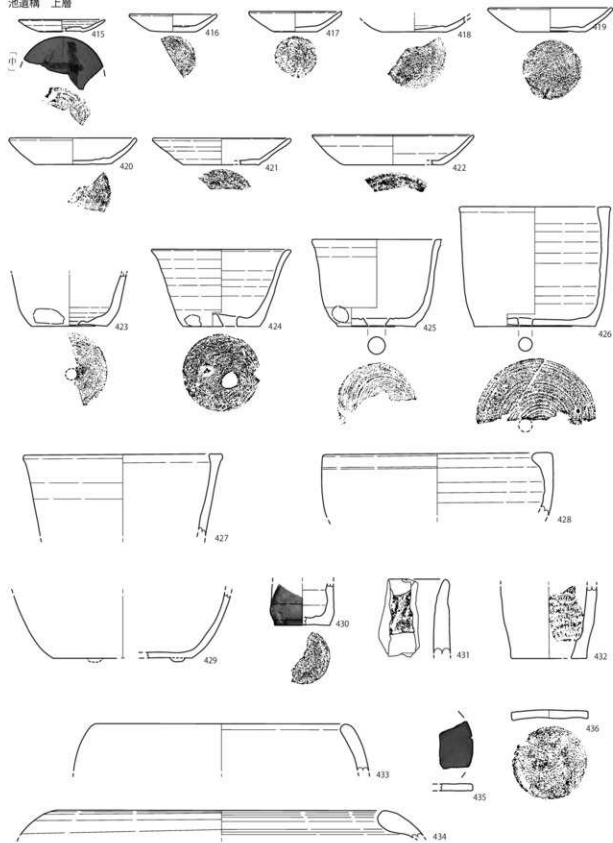
遺構（Ⅲ面）【14】
池遺構 上層



第110図 陶磁器・土器 (34)

遺構 (川面) 【15】

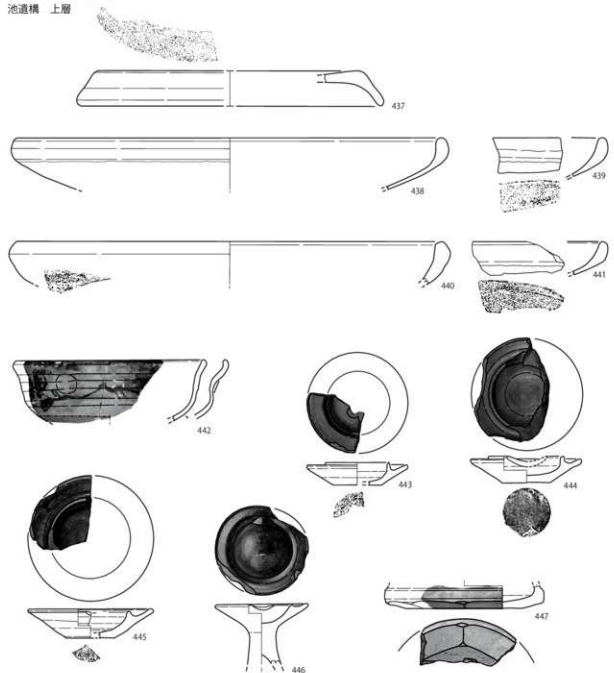
池遺構 上層



第 111 図 陶磁器・土器 (35)

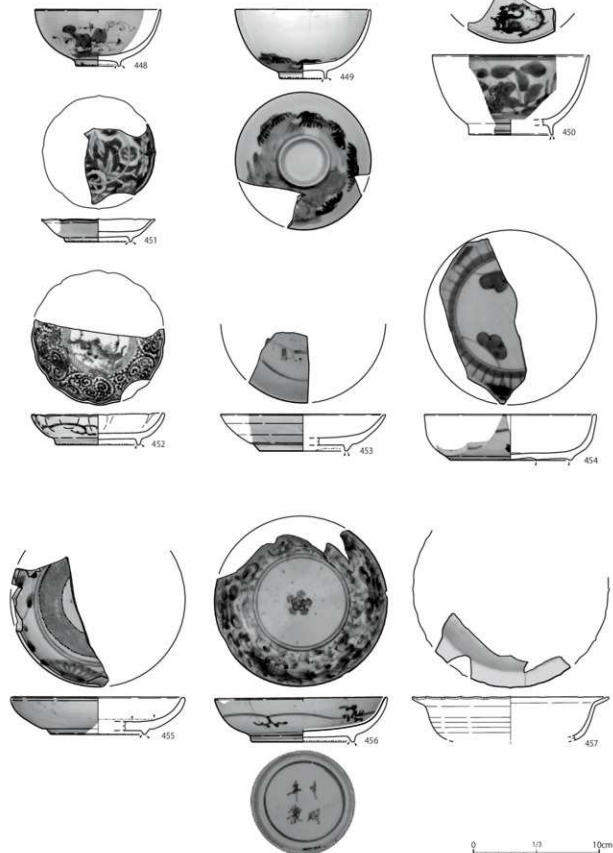
遺構(Ⅲ面)【16】

池遺構 上層

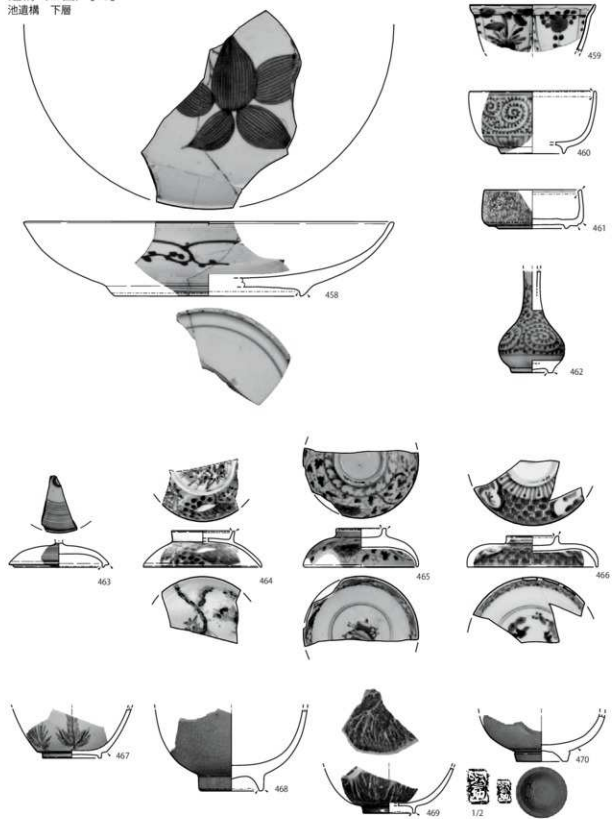


第112図 陶磁器・土器(36)

遺構 (川面) 【17】
池遺構 下層



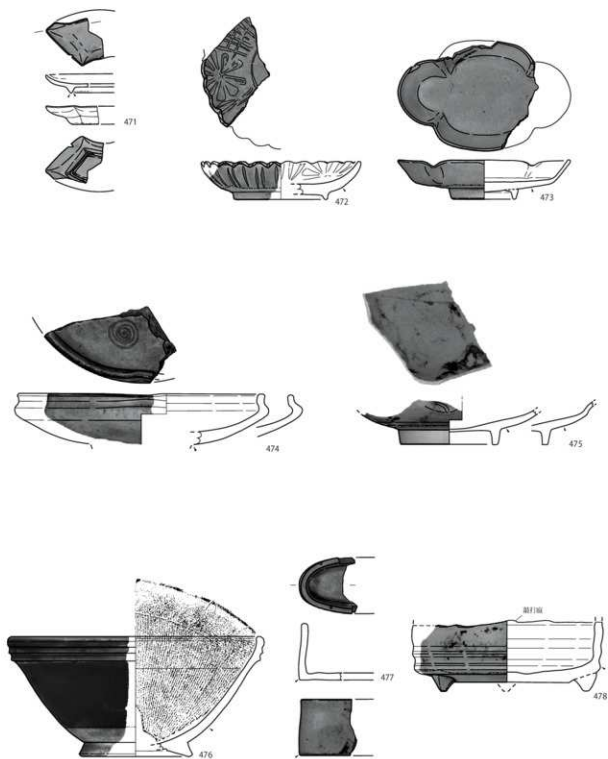
第113図 陶磁器・土器 (37)

遺構 (川面) 【18】
池遺構 下層

第 114 図 陶磁器・土器 (38)

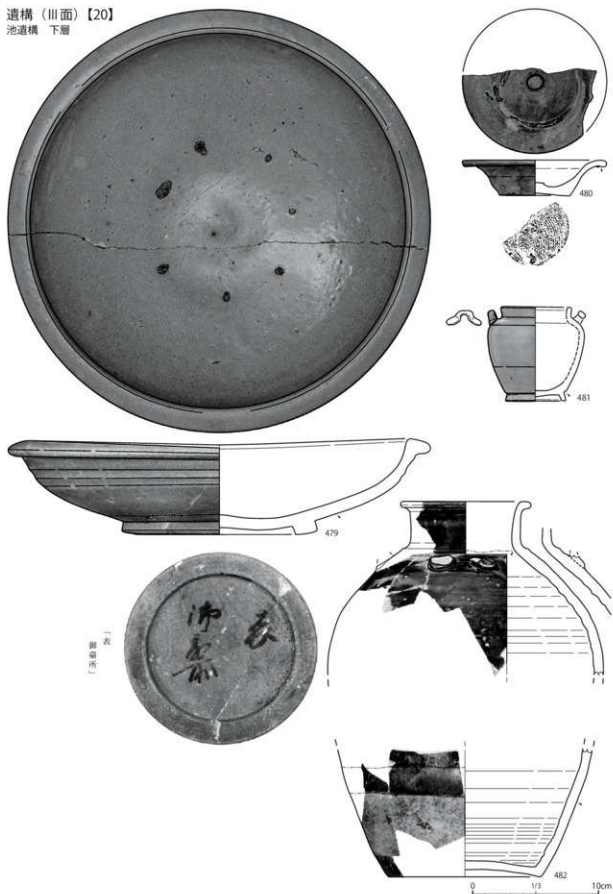
0 1/3 10cm

遺構 (III面) 【19】
池遺構 下層



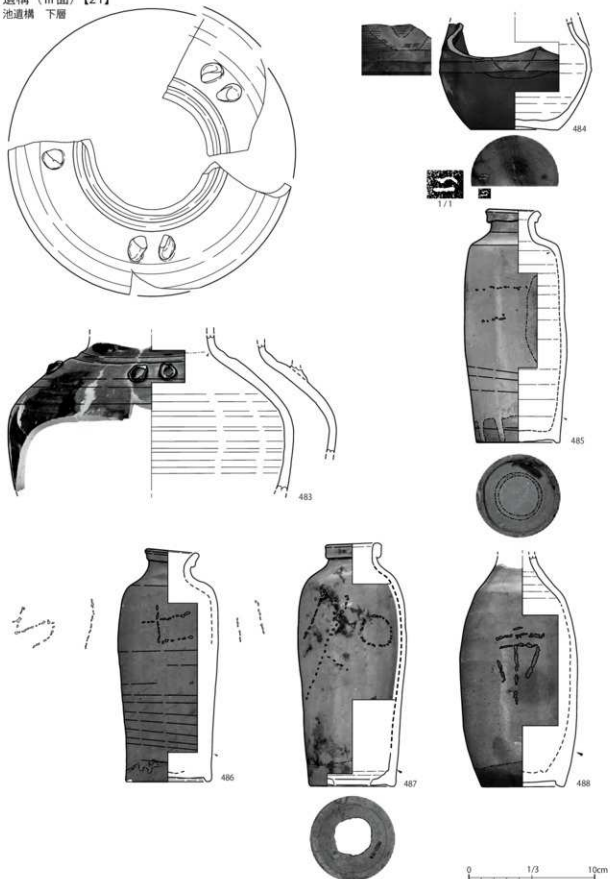
第115圖 陶磁器・土器 (39)

遺構 (Ⅲ面) 【20】
池遺構 下層

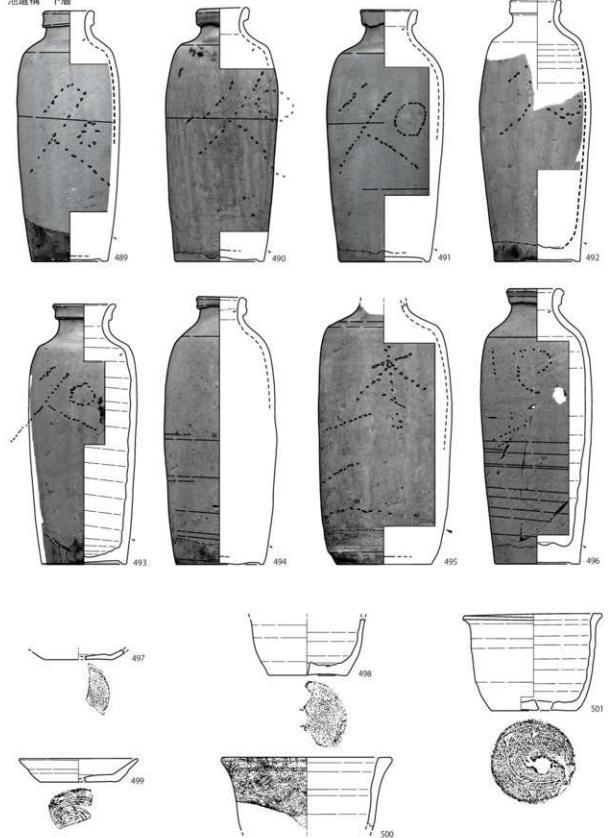


第116図 陶磁器・土器 (40)

遺構 (III面) 【21】
池遺構 下層

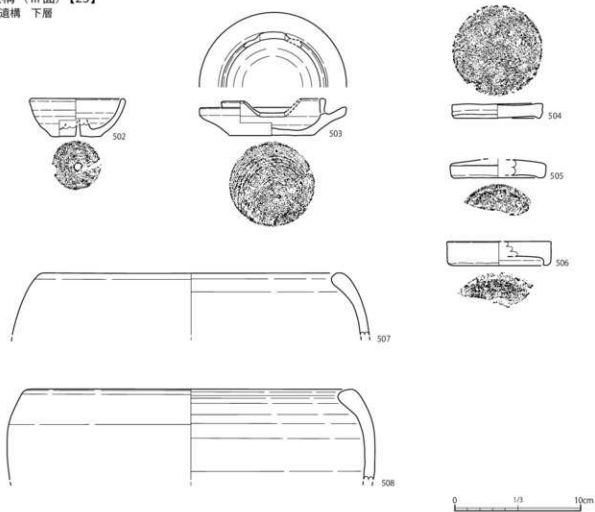


第117図 陶磁器・土器 (41)

遺構 (III面) 【22】
池遺構 下層

第118図 陶磁器・土器 (42)

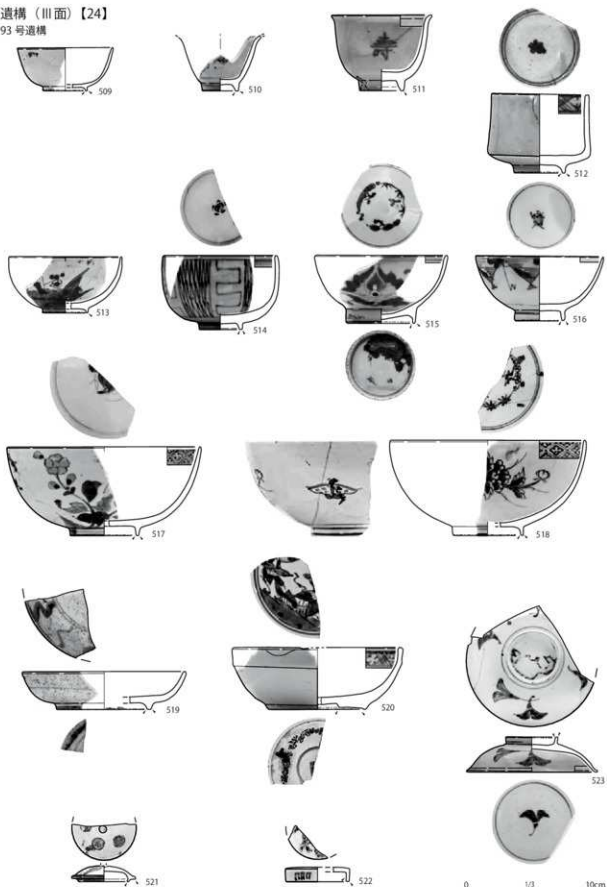
遺構 (川面) 【23】
池遺構 下層



第 119 図 陶磁器・土器 (43)

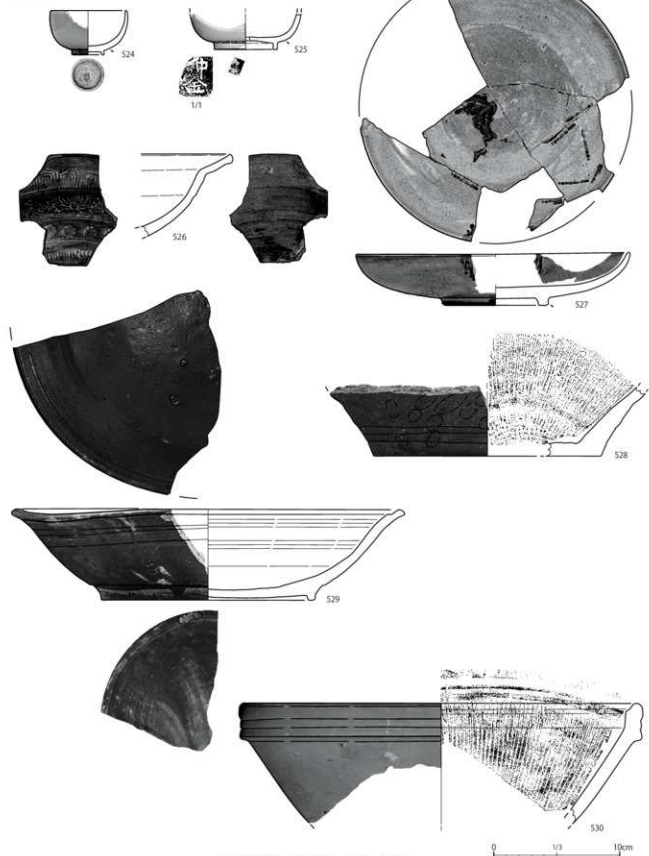
遺構(Ⅲ面)【24】

93号遺構



第120図 陶磁器・土器(44)

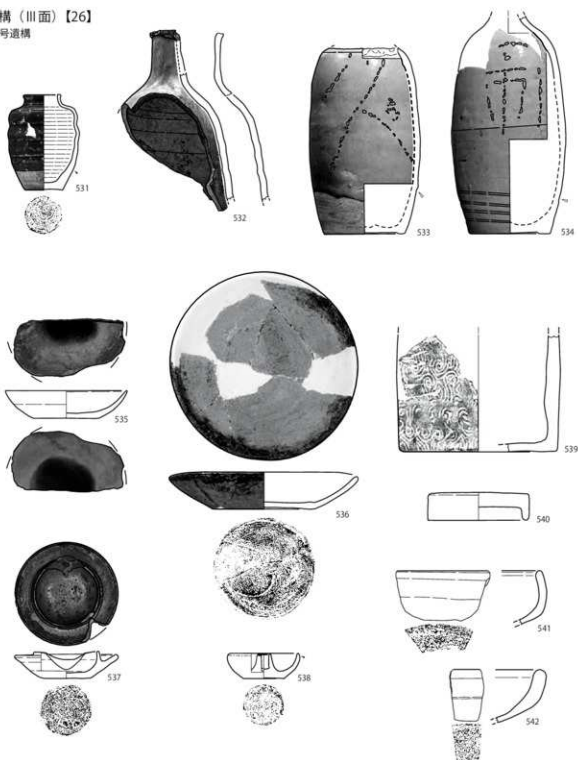
遺構(III面)【25】
93号遺構



第121図 陶磁器・土器(45)

遺構 (III面) 【26】

93号遺構

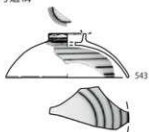


第122図 陶磁器・土器 (46)

0 1/3 10cm

遺構(Ⅲ～Ⅳ面)

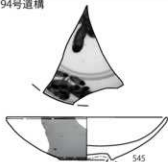
32号遺構



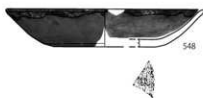
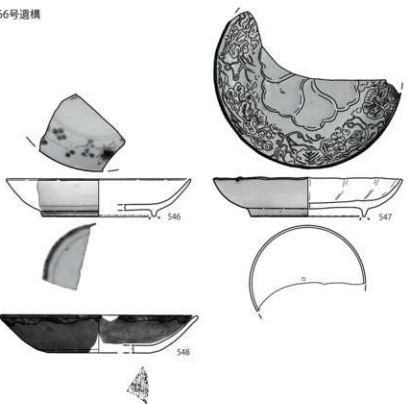
90号遺構



94号遺構



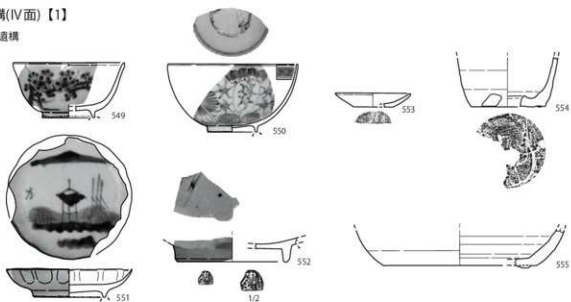
66号遺構



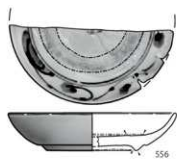
第123図 陶磁器・土器(47)

遺構(IV面)【1】

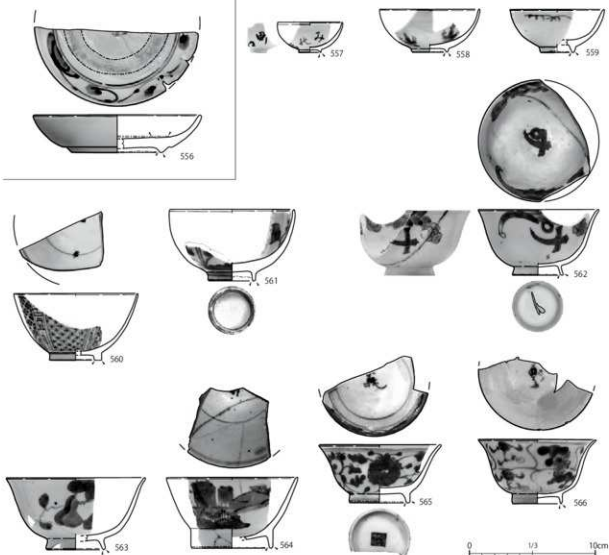
2号遺構



3号遺構

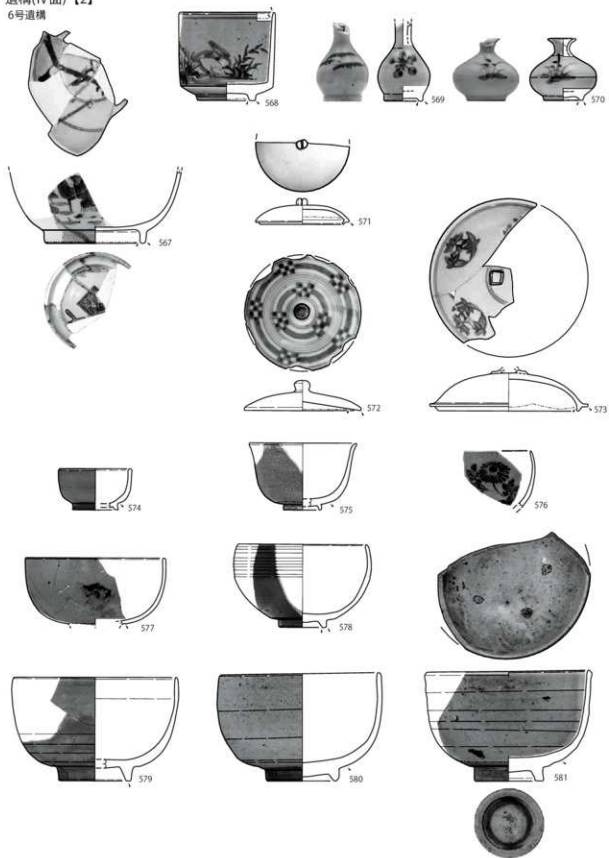


6号遺構



第124図 陶磁器・土器(48)

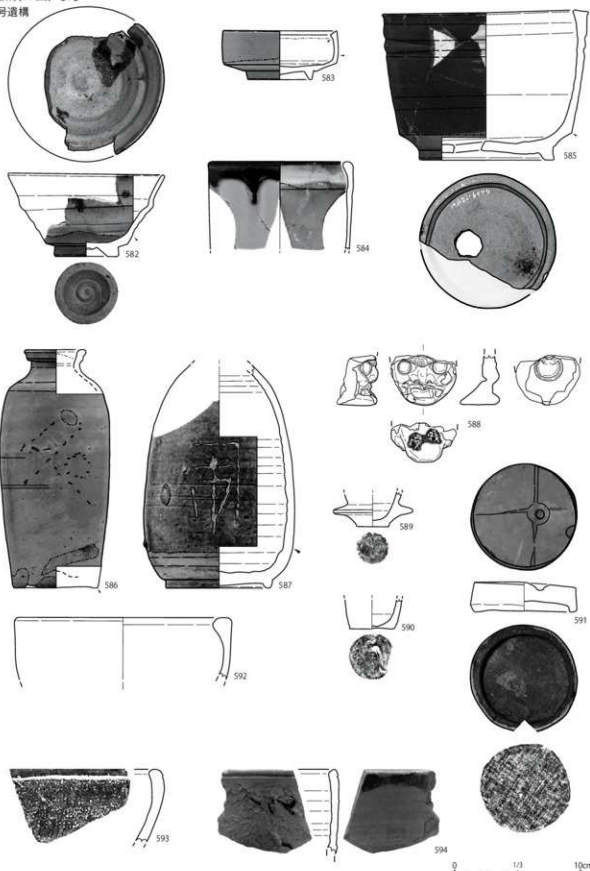
遺構(IV面)【2】
6号遺構



第125図 陶磁器・土器 (49)

遺構(IV面)【3】

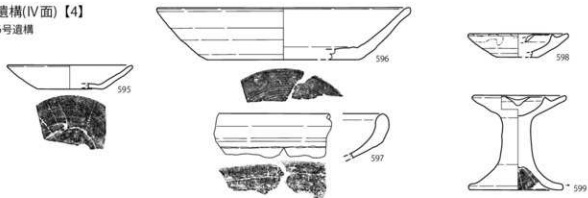
6号遺構



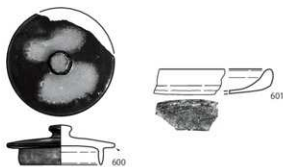
第126図 陶磁器・土器 (50)

遺構(IV面)【4】

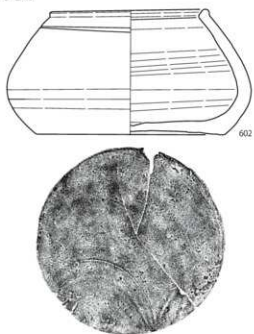
6号遺構



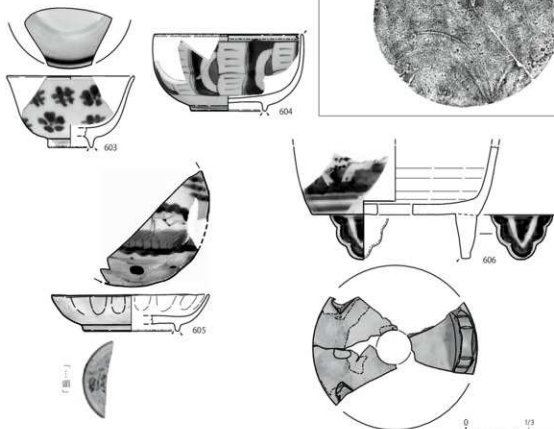
9号遺構



12号遺構



17号遺構

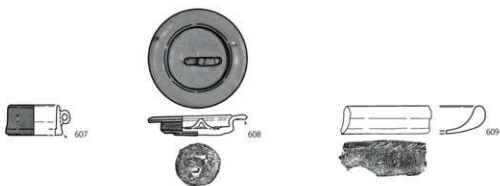


第127図 陶磁器・土器 (51)

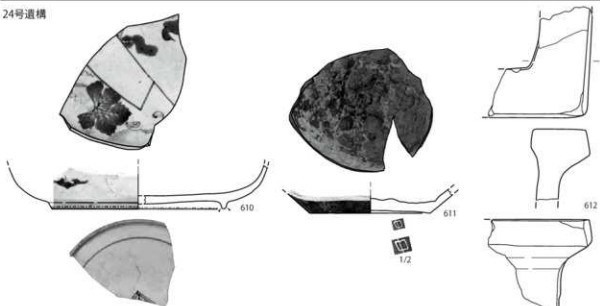
0 1/3 10cm

遺構(IV面)【5】

17号遺構



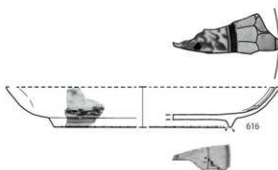
24号遺構



25号遺構



33号遺構



0 1/3 10cm

第128図 陶磁器・土器(52)

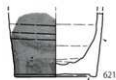
遺構(IV面)【6】
68号遺構



617



618



621



619



620



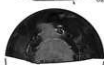
69・74・70号遺構



624



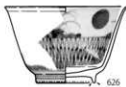
622



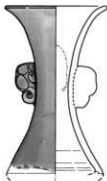
623



625



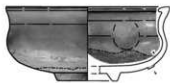
626



627



629



628



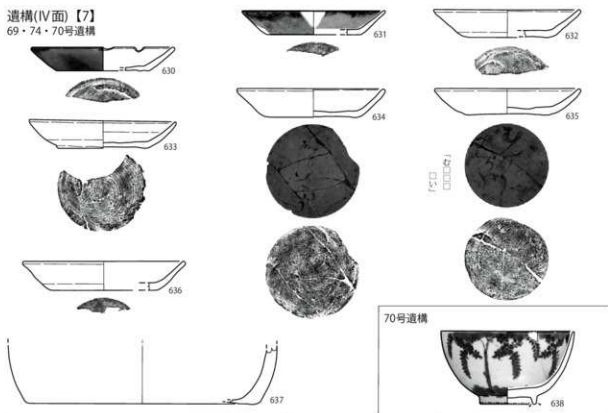
二面
一画

第129図 陶磁器・土器 (53)

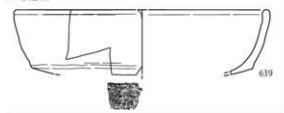
0 1/3 10cm

遺構(IV面)【7】

69・74・70号遺構



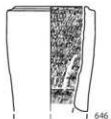
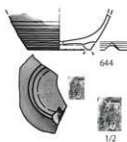
71号遺構



72号遺構



85号遺構



0 1/3 10cm

第130図 陶磁器・土器 (54)

第37表 陶磁器・土器観察表

観覧番号	出土地点	注記	素材	形状	通存部位	寸法			重量 (g)	番号	観察内容	産地	時期
						h	φ	d					
77-1	第1層	Ⅰ区目取舎	磁器	小鉢 酒杯	口→底	3.9	1.8	2.6	—	103号コトメト1区目取付 外装彫刻文	—	古代	
77-2	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小鉢	口→底	△5.2	△1.5	2.3	—	12号陶片 外装彫文	肥前	18c中葉~後葉	
77-3	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小鉢 厚底	口→底	△7.6	2.6	2.9	—	37号陶片 外コトメト印の彫文	肥前	18c中葉~後葉	
77-4	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小鉢 酒杯	口→底	△5.2	△2.2	2.9	—	113号コトメト印の彫文	—	古代 (20c20頃 ~)	
77-5	第1層	Ⅰ区目取舎	磁器	小鉢	口→底	△7.9	△3.7	3.8	—	227号付 外装彫刻文	瀬戸美濃	18c末~19c前葉	
77-6	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小碗 飯碗	口→底	6.7	3.2	4.4	—	32号陶片 外装彫文	瀬戸美濃	瀬来~明治初頃	
77-7	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小鉢	口→底	6.9	2.6	2.7	—	28号コトメト印付 外装彫刻文 内装刻印文(緑釉)	—	古代 (19c40頃)	
77-8	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小鉢	口→底	6.7	2.7	4.3	—	66号陶片 外装彫文 内装緑釉。見込緑釉区画線草文	肥前	瀬来~明治初頃	
77-9	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小碗 飯碗	口→底	6.7	3.1	4.4	—	56号コトメト印付 内装緑釉。草文	—	瀬来~明治初頃	
77-10	第1層	シトレ2	磁器	小鉢	口→底	6.9	3.2	3.6	—	31号陶片 外装彫刻文 内装刻印文(緑釉)	肥前	18c末~	
77-11	第1層	Ⅰ区目取舎	磁器	小鉢	口→底	△7.5	3	3.7	—	33号タロム産 高岡市ケズリ	—	古代 (19c40頃 ~20c18頃)	
77-12	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小鉢	口→底	△7.7	3.4	4.2	—	31号白陶	—	古代	
77-13	第1層	シトレ2	磁器	小鉢	口→底	△8.0	△3.9	4.5	—	26号上色 外草文 内装緑釉内環草文	—	古代	
77-14	第1層	Ⅰ区目取舎	磁器	飯 碗	口→底	△9.3	△4.1	5.4	—	29号白陶 外上地焼草文	肥前	17c後葉	
77-15	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小鉢	口→底	△9.8	△4.1	5	—	30号陶片 外装彫文	肥前	18c中葉~後葉	
77-16	第1層	Ⅱ区目取舎	磁器	飯 碗	口→底	△9.0	△5.5	6.3	—	28号陶片 外装彫文	肥前	17c中葉	
77-17	第1層	Ⅰ区目取舎	磁器	飯 碗	口→底	△9.0	△3.6	4.7	—	48号陶片 外草文 内装緑釉。見込緑釉区画線草文	瀬戸美濃	19c前葉	
77-18	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△9.6	4.6	4.6	—	69号陶片 内装刻印酒草文	瀬戸美濃	19c前葉	
77-19	第1層	Ⅰ区目取舎	磁器	飯 碗	口→底	9.4	3.8	5.2	—	30号付 外草文 内装緑釉。見込~赤線区画文 線有	瀬戸美濃	19c前葉	
77-20	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△9.6	△4.3	5.2	—	26号陶片 外草文 内装緑釉。見込~赤線区画 線有	瀬戸美濃	19c前葉	
77-21	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△9.6	△4.1	5.3	—	26号陶片 外草文 内装緑釉	瀬戸美濃	19c前葉	
77-22	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△11.4	△4.8	5.8	—	22号陶片 外上地焼草文 内装緑釉区画線草文 線有	瀬戸美濃	19c前葉	
77-23	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△11.1	6.2	6.1	—	67号陶片 外草文 内装緑釉。見込緑釉区画 線有	肥前	18c末~19c前 葉	
78-24	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	9.8	3.2	4.3	—	103号コトメト印付 外装彫刻文 内装緑釉区画線草文	—	古代 (19c40頃)	
78-25	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△10.8	△3.5	4.1	—	78号コトメト印付 外装彫刻文(外装草文) 内装緑釉草文 (緑釉区画線) 内面に付草文	—	古代 (19c40頃)	
78-26	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△12.0	△4.7	5	—	86号コトメト印付 外装彫文(緑釉区画線) 高岡有	—	古代 (19c40頃)	
78-27	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	11	3.8	4.9	—	140号タロム産コトメト印付 外上地焼草文(高岡市ケズリ) 内装緑釉(高岡市ケズリ) 高岡市ケズリ有	—	古代 (19c40頃)	
78-28	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△11.4	△3.9	5.2	—	24号コトメト印付 外装彫刻文(外装草文) 内装緑釉草文	—	古代 (19c40頃)	
78-29	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△10.8	△4.0	4.5	—	44号コトメト印付 外装彫文(緑釉区画線)	—	古代 (19c40頃)	
78-30	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	6	4	5.4	—	103号コトメト印付 外装彫刻文 内装緑釉草文	—	古代 (19c40頃 ~)	
78-31	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	5.1	3.3	6.1	—	85号コトメト印付 外装彫刻文(内装草文) 内装緑釉草文	—	古代 (19c40頃 ~)	
78-32	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△6.5	3.9	7.9	—	37号コトメト印付 外装彫文(外装草文) 内装緑釉区画線 高岡有(高岡市ケズリ)	—	古代 (20c14頃 ~)	
78-33	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△7.5	△4.6	6.8	—	62号コトメト印付 内装彫文 高「能」字 彫	—	古代 (20c14頃 ~)	
78-34	第1層	Ⅰ区目取舎	磁器	飯 碗	口→底	△7.0	3.8	4.4	—	52号陶片 外装彫文 内装彫文	肥前	18c中葉~後葉	
78-35	第1層	Ⅰ区目取舎	磁器	飯 碗	口→底	6.9	3.8	4.5	—	83号陶片 外装彫文 内装彫文	肥前	18c中葉~後葉	
78-36	第1層	Ⅰ区目取舎	磁器	飯 碗	口→底	△9.2	4.6	5.9	—	63号陶片 外装彫文 内装彫文 高「宜吉」字 彫 高「まより」(焼物)	肥前	18c	
78-37	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小鉢 酒杯	口→底	△7.0	△4.9	1.8	—	107号陶片 外装彫文 高岡市ケズリ有	—	17c末~18c前 葉	
78-38	第1層	Ⅰ区	磁器	小鉢	口→底	△10.3	△5.5	2.2	—	18号陶片 内装彫文 高岡市ケズリ有。彫高「イ」 (高岡市ケズリ)	肥前	19c前葉	
78-39	第1層	Ⅱ区表土	磁器	小鉢	口→底	△11.4	△6.5	2.7	—	30号付 内装彫文	—	古代 (19c40頃 ~)	
78-40	第1層	Ⅰ区目取舎	磁器	飯 碗	口→底	9.8	5.7	1.7	—	70号コトメト印付 内装彫刻文(緑釉区画線)	—	古代 (19c40頃 ~)	
79-41	第1層	Ⅰ区目取舎	磁器	飯 碗	口→底	△12.8	△8.1	3	—	93号付 内装彫刻文。見込~赤線区画線コトメト印 付(高岡市ケズリ) 外装焼草文(高岡市ケズリ)	肥前	18c後葉	
79-42	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△13.2	△7.3	3.7	—	78号陶片 内装彫刻文。見込赤区画線彫文(外装彫文) 外装 外装彫刻文 高岡市ケズリ有(高岡市ケズリ)	肥前	18c後葉~19c 前葉	
79-43	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△13.8	△9.1	3.2	—	40号付 内装彫刻文。見込赤区画線彫文(外装彫文) 外装 外装彫刻文 高岡市ケズリ有	肥前	17c末~18c中 葉	
79-44	第1層	Ⅱ区目取舎	磁器	飯 碗	口→底	△11.2	△6.0	—	29号陶片 内装彫文 外上地焼 高「能」字 彫(高岡市ケズリ) 高岡市ケズリ有	肥前(瀬島)	18c末~19c前 葉		
79-45	第1層	シトレ2	磁器	飯 碗	口→底	△14.8	△9.3	3.6	—	69号陶片 外装彫文。見込赤区画線彫文(外装彫文) 外装 外装彫刻文 高岡市ケズリ有	瀬戸美濃	18c後葉~19c 前葉	
79-46	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△18.5	10.6	3	—	220号付 内装彫刻文(外装彫文) 見込~赤線区画線彫文 (外装彫文) 高岡市ケズリ有	—	18c末~19c前 葉	
79-47	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△8.8	△10.2	3	—	86号付 内装彫刻文。見込赤区画線彫文(外装彫文) 外装 外装彫刻文 高「一」(高岡市ケズリ)	肥前	18c後葉~19c 前葉	
80-48	第1層	Ⅱ区表土	磁器	飯 碗	口→底	△10.8	△9.4	6.7	—	32号陶片 外装彫文	—	18c	
80-49	第1層	Ⅱ区目取舎	磁器	小鉢 飯碗	口→底	△7.7	4.7	5.8	—	99号陶片 外装彫文 内装緑釉草文。見込~赤線区画 線有(高岡市ケズリ) 高「成」字 彫(高岡市ケズリ)	肥前	18c後葉~19c 前葉	
80-50	第1層	Ⅱ区表土	磁器	鉢	口→底	△11.9	6.8	4.5	—	128号コトメト印付 内装彫刻文。見込赤区画線彫文(外装 彫文) 外装彫文 高岡市ケズリ有	肥前	瀬来~明治初頃	
80-51	第1層	Ⅱ区表土	磁器	鉢	口→底	12.7	7.3	5	—	207号コトメト印付 内装彫刻文。見込赤区画線彫文(外装 彫文) 外装彫文 高岡市ケズリ有	肥前	瀬来~明治初頃	
80-52	第1層	Ⅱ区表土	磁器	鉢	口→底	△14.5	△5.5	5.8	—	95号コトメト印付 内装緑釉。高岡市ケズリ有(高岡市ケズリ)	—	古代 (19c40頃 ~20c18頃)	
80-53	第1層	Ⅱ区表土	磁器	鉢	口→底	△13.9	△6.0	5.9	—	165号タロム産 内装彫刻文 内装彫刻文 高岡市ケズリ有	—	古代	
80-54	第1層	Ⅰ区	磁器	鉢	口→底	△17.7	△8.6	6	—	131号コトメト印付 内装彫刻文。見込赤区画線彫文(外装 彫文) 外装彫刻文 高岡市ケズリ有	—	古代 (20c14頃 ~)	
81-55	第1層	Ⅱ区表土	磁器	鉢	口→底	—	—	2.8	—	49号コトメト印付 外装彫文	—	古代	
81-56	第1層	Ⅱ区表土	磁器	鉢	口→底	△7.5	△6.6	3.1	—	30号陶片 外装彫刻文	肥前	18c後葉	

陽台番号	出土地域	注記	素材	種類	遺存部位	数量 (個)			長さ (cm)	取柄内面	遺物	時期			
						本	付	付							
81.57	第1層	Ⅰ区目報告	磁器	筒筒	口縁	△11.9	△2.2	5.9	—	154.2	染付 外付片断染文	18c末~19c前半			
81.58	第1層	Ⅱ区目報告	磁器	筒筒	口縁	△13.4	△13.8	6.1	—	62.2	染付 外草文	18c後半			
81.59	第1層	Ⅱ区目報告	磁器	筒筒	口縁	完	3.5	3.5	3.5	6.8	49.5付△75.5上染付 外無染焼瓦丸	—	近代		
81.60	第1層	Ⅱ区目報告	磁器	筒筒	口縁	完	8.7	3.1	2.4	—	35.8	染付 外赤地朱文交わり窓草文	18c末~19c前半		
81.61	第1層	Ⅱ区目報告	磁器	筒筒	口縁	9.4	3.8	2.2	—	61.4	染付 外草文 内白無染焼印文、見込部外区画区画焼印文	18c末~19c前半			
81.62	第1層	Ⅱ区目報告	磁器	筒筒	口縁	△9.9	△5.4	2.6	—	29.4	染付 外草文 高草文 内白無染焼印文、見込部外区画区画焼印文	18c末~19c前半			
81.63	第1層	Ⅱ区目報告	磁器	筒筒	口縁	△10.3	6	2.4	—	32.5	染付 外草文 高草文 内白無染焼印文、見込部外区画区画焼印文	18c末~19c前半			
81.64	第1層	Ⅰ区	磁器	筒筒	口縁	6.7	—	2	8	46.5	染付 外無染焼印文草文	18c末~19c前半			
81.65	第1層	Ⅰ区目報告	磁器	筒筒	口縁	△7.1	3	2.5	2.8	37.2	染付 外無染焼印文	18c後半			
81.66	第1層	Ⅱ区目報告	磁器	筒筒	口縁	△10.0	—	2.6	△11.4	77.5	△75.5付 聖徳太子御誕生御宇草文	近代 (19c400~)			
81.67	第1層	Ⅰ区	磁器	筒筒	口縁	4.9	1	1.7	—	12.6	△75.5付 聖徳太子御誕生御宇草文	—	近代		
81.68	第1層	Ⅱ区目報告	磁器	筒筒	口縁	6.7	1.3	2.1	—	20.0	染付 外朱文交わり 窓草文	—	近代		
81.69	第1層	Ⅱ区目報告	磁器	筒筒	口縁	6.9	1.4	2.2	—	30.0	染付 外草文	近代 (19c400~)			
81.70	第1層	Ⅱ区目報告	磁器	筒筒	口縁	1.8	2	0.6	—	6.0	口縁	—	近代		
81.71	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	△19.5	△10.4	3.6	—	31.0	口縁	—	近代		
81.72	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	△9.3	△5.1	3	—	6	62.9	内外一帯外高、貫入 高脚瓶、肩付高台	江戸美濃	18c後半	
82.73	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	△9.8	—	▲5.8	—	64.0	内外一帯外高、染付文様有 高土加飾	江戸美濃	18c後半		
82.74	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	△9.8	△4.9	7.2	—	104.4	内外外高脚 外紫染朱文交わり 高土付に付着	江戸美濃	17c末~18c前半		
82.75	第1層	Ⅱ区目報告	陶器	筒筒	口縁	△10.8	—	▲4.7	—	56.5	クワム口縁 外土加飾一帯	—	近代 (20c200)		
82.76	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	△10.6	△4.2	4.7	—	49.0	内外一帯外高、鉄線染朱文 高脚瓶	京	18c		
82.77	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	△6.6	△2.9	1.5	—	14.0	内外高脚、赤地染朱文 高脚瓶	江戸美濃	19c前半		
82.78	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	12.9	6.8	3.2	—	139.0	内外外高脚鉄線染朱文 高土付の外加飾	江戸美濃	17c後半~18c前半		
82.79	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	—	7.8	▲2.1	—	108.0	内外高脚、鉄の口縁 高脚瓶「九ノノ以」(B1)	江戸美濃	18c末~19c前半		
82.80	第1層	Ⅱ区目報告	陶器	筒筒	口縁	—	△14.0	▲8.5	—	180.1	内外一帯外高、見込部土目有 高脚瓶、肩付「ツツ」(B6)	江戸美濃	18c後半~19c前半		
82.81	第1層	Ⅱ区目報告	陶器	筒筒	口縁	—	△20.2	▲5.0	—	417.2	内外高脚、鉄線染朱文、見込部土目有 高脚一帯外高脚 高脚瓶「志来」(B2)	江戸美濃	18c末~19c前半		
82.82	第1層	Ⅱ区目報告	陶器	筒筒	口縁	—	8.5	—	—	100.1	外白地土目 内外高脚 鉄線染朱文付着、肩付「志来」(B5)	京	18c末~19c前半		
82.83	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	5.3	4.8	2	—	34.0	内外一帯外高脚 高脚瓶	江戸美濃	18c前半~中葉		
82.84	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	△12.5	△12.9	3.5	—	61.0	内外一帯外高脚、高脚瓶、肩付有 (Koz)	志野	—		
82.85	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	6.4	6.4	9.1	11.5	307.6	130.9	内外一帯外高脚、高脚一帯外高脚、高脚瓶、肩付有 (Koz)	江戸美濃	18c	
83.86	第1層	Ⅱ区	陶器	筒筒	口縁	3.7	5.6	19.1	8.4	524.4	130.9	内外一帯外高脚、肩付「七」(Kg103) 高脚一帯外高脚、高脚瓶、肩付有、无付着	高脚 (高脚)	18c中葉	
83.87	第1層	Ⅱ区	陶器	筒筒	口縁	完	3.4	6.6	19.6	8	518.4	130.9	内外一帯外高脚、肩付「七」(Kg104) 高脚一帯外高脚、高脚瓶、肩付有	高脚 (高脚)	18c中葉
83.88	第1層	Ⅱ区	陶器	筒筒	口縁	完	4.5	6.6	19.6	8.7	524.4	130.9	内外一帯外高脚、肩付「七」(Kg101) 高脚一帯外高脚、高脚瓶、肩付有	高脚 (高脚)	19c前半
83.89	第1層	Ⅱ区	陶器	筒筒	口縁	完	4.2	6.9	20.4	8.2	544.8	130.9	内外一帯外高脚、肩付「四」(Kg100) 高脚一帯外高脚、高脚瓶、肩付有	高脚 (高脚)	19c前半
83.90	第1層	Ⅱ区目報告	陶器	筒筒	口縁	完	3.2	7.3	20.2	8.8	568.2	130.9	内外一帯外高脚、肩付「五」(Kg102) 高脚一帯外高脚、高脚瓶、肩付有	高脚 (高脚)	19c前半
83.91	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	2.4	△9.1	22.5	△13.8	351.1	130.9	内外一帯外高脚、肩付「五」(Kg102) 高脚一帯外高脚、高脚瓶、肩付有	高脚 (高脚)	17c末	
83.92	第1層	Ⅱ区目報告	陶器	筒筒	口縁	3.4	10	22.5	13.7	982.0	130.9	内外一帯外高脚、肩付「三」(Kg109) 高脚一帯外高脚、高脚瓶、肩付有	高脚 (高脚)	19c前半~中葉	
83.93	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	完	5.3	1.8	3.6	7	44.0	内外一帯外高脚、高脚一帯外高脚、高脚瓶、肩付有	—	19c中葉~	
83.94	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	完	9.6	—	▲2.0	11.7	63.0	内外高脚、高脚一帯外高脚、高脚瓶、肩付有	江戸美濃	18c	
83.95	第1層	Ⅱ区目報告	陶器	筒筒	口縁	△8.1	1.6	△3.2	△10.9	51.6	—	—	—	19c前半	
83.96	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	8.8	3.5	4.2	11	136.0	内外高脚、高脚一帯外高脚、高脚瓶、肩付有	江戸美濃	17c末		
83.97	第1層	Ⅰ区目報告	陶器	筒筒	口縁	5.6	4.4	2.1	8.8	52.8	内外高脚 受胎タテ付着 外加飾	志野	17c末~18c前半		
84.98	第1層	Ⅰ区目報告	土器	筒筒	口縁	△3.7	△3.0	1	—	4.2	内外一帯外高脚土器 既外加飾	江戸	18c~		
84.99	第1層	Ⅰ区目報告	土器	筒筒	口縁	△6.0	3.1	1.4	—	7.5	内外一帯外高脚土器 既外加飾	江戸	18c~		
84.100	第1層	Ⅰ区目報告	土器	筒筒	口縁	—	△3.0	▲0.7	—	11.8	内外一帯外高脚土器 既外加飾	江戸	18c~		
84.101	第1層	Ⅱ区目報告	土器	筒筒	口縁	△9.8	△6.0	2.1	—	11.2	内外一帯外高脚土器 既外加飾	江戸	17c後半		
84.102	第1層	Ⅱ区目報告	土器	筒筒	口縁	△18.1	11.2	3.1	—	111.2	内外一帯外高脚土器 既外加飾	江戸	18c末~19c中葉		
84.103	第1層	Ⅰ区目報告	土器	筒筒	口縁	△19.0	△11.0	4.3	—	71.8	内外一帯外高脚土器 既外加飾	江戸	18c末~19c中葉		
84.104	第1層	Ⅱ区目報告	土器	筒筒	口縁	△9.0	—	3.2	—	67.0	内外一帯外高脚土器 既外加飾	江戸	18c前半		
84.105	第1層	Ⅰ区目報告	土器	筒筒	口縁	—	△5.0	—	△5.5	32.4	内外一帯外高脚土器 既外加飾	江戸	18c前半		
84.106	第1層	Ⅰ区目報告	土器	筒筒	口縁	—	—	▲4.8	—	62.2	内外一帯外高脚土器、中央内付有 既外加飾	江戸	17c後半~18c前半		
84.107	第1層	Ⅱ区目報告	土器	筒筒	口縁	△6.6	4.5	3.5	—	47.0	内外高脚 既外加飾	江戸	18c末~19c前半		
84.108	第1層	Ⅰ区目報告	土器	筒筒	口縁	完	▲17.6	▲9.0	—	356.0	—	—	—	近代 (19c400~)	
85.109	第1層・3層・第3層	35c西	磁器	小瓶	口縁	完	5.6	2.8	4.7	—	58.8	△75.5付 外草文	—	近代 (19c400~)	
85.110	第1層・3層・第3層	35c西	磁器	小瓶	口縁	完	△9.0	△4.4	4.8	—	19.0	染付 外草文	江戸美濃	18c	
85.111	第1層・3層・第3層	36c中	磁器	筒筒	口縁	完	△9.6	4	5.5	—	94.3	染付 外無染焼印文 高脚台「七」(B)	江戸美濃	18c200	
85.112	第1層・3層・第3層	36c中	磁器	筒筒	口縁	完	△10.0	3.8	4.9	—	75.2	染付 外草文 内面付着物	江戸美濃	18c中葉~後半	
85.113	第1層・3層・第3層	37c2	磁器	筒筒	口縁	完	△6.7	3.4	5.5	—	83.4	染付 外内面付着物 内白無染焼印文	江戸美濃	18c中葉~後半	
85.114	第1層・3層・第3層	37c2	磁器	筒筒	口縁	完	△15.7	6	7.1	—	223.0	染付 外草文 内白無染焼印文、見込部外区画区画焼印文	江戸美濃	19c前半	

調査番号	出土物名	注記	素材	形状	保存状況	寸法 (cm)			測定	観察内容	産地	時期		
						h	b	d						
110-414	流溝鏡 土層	47-07	陶器	鏡鉢	破砕	38.9	15.6	15.5	-	39-1010鏡	内藤白耳の12葉 1編物流溝鏡 鏡外一編物、銅印、銅鏡の鏡蓋の上にタテ書きあり	弥生中(19)2期		
111-415	流溝鏡 土層	111-401	土層	鏡鉢	完	11-01	6.8	5.1	1	-	81-1内一体系別鏡子 鏡外別鏡形、逆造形 (鏡蓋)	江戶	16c-1	
111-416	流溝鏡 土層	111-425	土層	鏡鉢	完	11-01	5.6	3	1.4	-	14-7内一体系別鏡子 鏡外別鏡形	江戶	16c-1	
111-417	流溝鏡 土層	47-07	土層	鏡鉢	完	11-01	5.2	3.6	1.6	-	16-00全鏡形 内一体系別鏡子 鏡外別鏡形 (鏡蓋)	江戶	17c末-19c前半	
111-418	流溝鏡 土層	47-07	土層	鏡鉢	完	11-01	5.1	▲1.2	-	-	16-40内一体系別鏡子 鏡外別鏡形 (鏡蓋)	江戶	16c-1	
111-419	流溝鏡 土層	111-401	土層	鏡鉢	完	11-01	5.0	5.4	1.0	-	22-4内一体系別鏡子 鏡外別鏡形 (鏡蓋)	江戶	17c 後半	
111-420	流溝鏡 土層	111-405	土層	鏡鉢	完	11-01	5.0	5.0	2.1	-	10-0内一体系別鏡子 鏡外別鏡形	江戶	17c 後半	
111-421	流溝鏡 土層	111-402	土層	鏡鉢	完	11-01	5.0	5.6	2.1	-	13-0内一体系別鏡子 鏡外別鏡形 逆造形、変形 (鏡蓋)	江戶	17c 後半	
111-422	流溝鏡 土層	111-401	土層	鏡鉢	完	11-01	5.1	5.7	2.4	-	10-0内一体系別鏡子、1編物鏡蓋、タテ書き 鏡外別鏡形	江戶	17c 後半	
111-423	流溝鏡 土層	111-424	土層	鏡鉢	完	11-01	5.0	▲4.1	-	-	63-0内藤白耳タテ書き鏡蓋 鏡外別鏡子 鏡外別鏡形、中央付蓋	江戶	17c末-19c中葉	
111-424	流溝鏡 土層	91-05	土層	鏡鉢	完	11	6	6	1	-	17-4内一体系別鏡子タテ書き鏡蓋 鏡外別鏡形、中央付蓋	江戶	17c末-19c中葉	
111-425	流溝鏡 土層	51-07	土層	鏡鉢	完	11-01	5.0	6.2	6.0	-	88-7内藤白耳タテ書き鏡蓋 鏡外一体系別鏡子、鏡蓋の上下にタテ書き鏡蓋 鏡外別鏡形、中央付蓋	江戶	17c末-明治前期	
111-426	流溝鏡 土層	47-07	土層	鏡鉢	完	11-01	5.1	5.0	5.5	-	124-1内藤白耳タテ書き鏡蓋 鏡外一体系別鏡子 鏡外別鏡形、中央付蓋	江戶	17c末-明治前期	
111-427	流溝鏡 土層	111-425	土層	鏡鉢	完	11	5.7	-	▲6.5	-	27-0内一体系別鏡子	江戶	17c末-明治前期	
111-428	流溝鏡 土層	111-403	土層	鏡鉢	完	11	5.7	-	▲5.0	-	41-9内藤白耳タテ書き鏡蓋鏡蓋付	江戶	17c後半-19c中葉	
111-429	流溝鏡 土層	111-423	土層	鏡鉢	完	11-01	5.0	-	▲5.0	-	86-0内藤白耳	江戶	17c末-明治前期	
111-430	流溝鏡 土層	47-07	土層	鏡鉢	完	11	5.0	-	▲4.3	-	20-0内一体系別鏡子タテ書き鏡蓋 鏡外別鏡形 (鏡蓋)	江戶	17c末-19c中葉	
111-431	流溝鏡 土層	61-27	土層	鏡鉢	完	11-01	5.0	-	▲6.2	-	28-5内藤白耳鏡蓋、打丸鏡蓋	関西	17c中葉-19c中葉	
111-432	流溝鏡 土層	47-07	土層	鏡鉢	完	11-01	5.0	-	▲5.8	-	24-40内藤白耳鏡蓋、打丸鏡蓋	関西	16c中葉-17c後半	
111-433	流溝鏡 土層	47-07	土層	鏡鉢	完	11-01	5.0	-	▲5.7	-	30-30内藤白耳付	江戶	17c後半	
111-434	流溝鏡 土層	47-07	土層	鏡鉢	完	11	5.0	-	▲2.1	-	94-10内藤白耳タテ書き	近代	-	
111-435	流溝鏡 土層	47-07	土層	鏡鉢	完	11-01	5.0	-	0.6	-	7-00内藤白耳	江戶	17c後半-19c中葉	
111-436	流溝鏡 土層	111-401	土層	鏡鉢	完	11	5.0	-	0.8	-	20-0中葉	江戶	17c後半-19c中葉	
112-437	流溝鏡 土層	47-27	土層	鏡鉢	完	11-01	5.2	5.2	2.8	-	72-30内一体系別鏡子 土層付	江戶	17c後半	
112-438	流溝鏡 土層	111-400	土層	鏡鉢	完	11-01	5.3	4	-	▲4.1	-	337-2内一体系別鏡子 鏡外タテ書き	江戶	17c後半-19c中葉
112-439	流溝鏡 土層	35-27a	土層	鏡鉢	完	11-01	5.2	-	-	-	23-0内一体系別鏡子 変形付	江戶	17c後半-19c中葉	
112-440	流溝鏡 土層	47-07	土層	鏡鉢	完	11-01	5.3	-	-	▲3.4	-	28-0内一体系別鏡子 鏡外付、又タテ書き付	江戶	17c後半-19c中葉
112-441	流溝鏡 土層	111-401	土層	鏡鉢	完	11-01	5.2	-	▲2.6	-	32-0内一体系別鏡子 鏡外付	江戶	16c中葉	
112-442	流溝鏡 土層	111-400	土層	鏡鉢	完	11-01	5.1	-	▲4.8	-	37-0内一体系別鏡形、鏡蓋付、又タテ書き付	江戶	17c末-明治前期	
112-443	流溝鏡 土層	111-401	土層	鏡鉢	完	11-01	5.0	5.3	1.8	▲8.0	-	17-0鏡形 内一体系別鏡子 鏡外別鏡形、中央付蓋	江戶	17c末-19c前半
112-444	流溝鏡 土層	111-405	土層	鏡鉢	完	11-01	5.0	3.8	2.3	▲8.4	-	41-4全鏡形 内一体系別鏡子 鏡外別鏡形 (鏡蓋)	江戶	17c末-19c前半
112-445	流溝鏡 土層	111-404	土層	鏡鉢	完	11-01	5.2	5.3	2.5	▲10.0	-	21-0全鏡形 内一体系別鏡子 鏡外別鏡形	江戶	17c末-19c前半
112-446	流溝鏡 土層	111-401	土層	鏡鉢	完	11-01	4.7	-	▲4.8	-	59-0内一体系別鏡形 鏡内タテ書き	江戶	17c末-19c前半	
112-447	流溝鏡 土層	111-426	土層	鏡鉢	完	11-01	5.0	-	▲1.8	-	31-0鏡外付 鏡蓋付、銅鏡付鏡子の銅印、打丸鏡蓋の付録にタテ書き	-	-	
113-448	流溝鏡 下層	池内3	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.0	5.3	4.5	-	45-60鏡付 外周部付文	肥前	16c後半	
113-449	流溝鏡 下層	(池内3東方)	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.0	3.8	5.5	-	130-00鏡付 外周部付文	肥前	16c後半	
113-450	流溝鏡 下層	(池内3東方)	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.2	5.7	6.4	-	27-20鏡付 外周部付文、内1編物鏡蓋、見取鏡内周部 鏡蓋タテ書き (鏡蓋)、内周部付文	肥前	17c後半	
113-451	流溝鏡 下層	池内	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.8	5.3	1.8	-	22-50鏡付 内周部付文、1編物鏡蓋	肥前	17c後半	
113-452	流溝鏡 下層	池内	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.0	6.8	2.5	-	57-60鏡付 内周部鏡蓋付文、見取鏡内周部鏡蓋付文	肥前	16c後半-19c中葉	
113-453	流溝鏡 下層	池内	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.2	5.7	2.9	-	26-90鏡付 内周部鏡蓋付文、高足付鏡蓋付文	肥前	17c前半	
113-454	流溝鏡 下層	池内3	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.3	9.8	3.7	-	77-70鏡付 内周部付文、見取鏡内周部付文、外周部鏡蓋付文、高足付鏡蓋付文、高足付鏡蓋付文、高足付鏡蓋付文、高足付鏡蓋付文	肥前	16c末-19c前半	
113-455	流溝鏡 下層	池内	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.3	5.7	3	-	71-90鏡付 内周部鏡蓋付文、見取鏡内周部鏡蓋付文、高足付鏡蓋付文	肥前	16c後半	
113-456	流溝鏡 下層	池内	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.0	8.2	3.6	-	166-00タテ書き付文 外周部鏡蓋付文、高(大)足付鏡蓋付文	肥前	16c-20c	
113-457	流溝鏡 下層	池内	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.5	-	▲3.4	-	22-40鏡蓋	肥前	17c後半	
114-458	流溝鏡 下層	池内3	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.2	5.1	5.0	-	228-20鏡付 内周部付文 外周部鏡蓋付文、高足付鏡蓋付文	肥前	16c後半-19c中葉	
114-459	流溝鏡 下層	池内	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.0	-	▲3.8	-	109-20鏡蓋付 内周部鏡蓋付文 鏡蓋タテ書き (鏡蓋)	肥前	17c後半	
114-460	流溝鏡 下層	池内3	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.0	5.3	5	-	17-70鏡付 内周部鏡蓋付文、見取鏡内周部鏡蓋付文、鏡蓋付文	肥前	16c末-19c前半	
114-461	流溝鏡 下層	池内3	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.7	7.7	3.1	-	35-90鏡付 外周部鏡蓋付文	肥前	16c末-19c前半	
114-462	流溝鏡 下層	池内	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.0	-	▲3.3	▲5.3	55-00鏡付 外周部付文 鏡蓋タテ書き (鏡蓋)	肥前	16c後半-19c前半	
114-463	流溝鏡 下層	池内	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.2	-	▲1.8	8	82-20鏡付 外周部付文	肥前	16c末-19c前半	
114-464	流溝鏡 下層	池内	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.3	5.4	2.9	-	20-50鏡付 内周部付文、高足鏡蓋付文、鏡蓋付文	肥前	16c末-19c前半	
114-465	流溝鏡 下層	池内3	銅器	鏡蓋	完	11-01	4.8	5.3	3.1	-	75-30鏡付 外周部付文、鏡蓋付文、外周部鏡蓋付文、鏡蓋付文	肥前	16c後半	
114-466	流溝鏡 下層	池内	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.0	5.4	2.5	-	31-40鏡付 外周部付文、内周部鏡蓋付文、見取鏡内周部鏡蓋付文	肥前	16c後半-19c前半	
114-467	流溝鏡 下層	池内3	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.0	-	▲3.9	-	31-50内一体系別鏡形、鏡蓋付付録	江戶	16c後半	
114-468	流溝鏡 下層	池内	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.1	-	▲6.5	-	141-40全鏡形、貫入、鏡蓋付付録	肥前	17c後半-19c中葉	
114-469	流溝鏡 下層	池内3	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.2	-	▲3.6	-	20-20内藤白耳打丸鏡蓋	肥前 (池内)	17c後半-19c中葉	
114-470	流溝鏡 下層	池内	銅器	鏡蓋	完	11-01	5.1	▲3.7	-	71-50内一体系別鏡形 高足鏡蓋、銅印 (鏡蓋付) (鏡蓋)	江戶	-		

題名 番号	出土 地点	注記	素材	種類	透写 部位	流量 (cm)			筆速 (cm)	書法 内容	書体	時期	
						a	b	d					
126-596	6号遺構	6/9	土器	磁器	底	—	3.5	▲2.3	—	17.00	内一内外ワケの本表紙 既外封紙未刷 (左)	江戸 18c末～19c前	
126-598	6号遺構	6/9	土器	磁器	底	8	2.4	—	—	153.2	内一磁子子。裏面部分。中央より中央編って厚紙(既用)。内紙目録。スス・ター付付	国内 18c前～中葉	
126-592	6号遺構	6/9	土器	式鉢	口	△16.7	—	▲4.9	—	64.8	内封紙付。スス・ター付付 外七片キ (口縁部)既用	江戸 18c後葉～19c前	
126-593	6号遺構	6/9	土器 瓦葺	瓦葺	口	—	▲5.7	—	—	59.2	内封紙付。スス・ター付付 既外封紙付(口縁部)既用	江戸 18c後葉～19c前	
126-594	6号遺構	6/9	土器	瓦葺	口	—	▲0.7	—	—	59.0	内封紙付。スス・ター付付 既外封紙付(口縁部)既用	江戸 18c後葉～19c前	
127-595	6号遺構	6/9	土器	磁	底	△9.8	△5.2	1.9	—	11.7	内一内外封紙付。既外封紙付 既外封紙未刷 (左)。中央底底既用	江戸 17c	
127-596	6号遺構	6/9	土器	磁器	口	△20.0	△12.0	4.1	—	96.20	内一内外封紙付。既外封紙未刷	江戸 18c後葉～19c中葉	
127-597	6号遺構	6/9	土器	磁器	口	—	▲8.9	—	—	37.90	内一内外封紙付。既外封紙未刷	江戸 18c後葉～19c前	
127-598	6号遺構	6/9	土器	磁器	口	△5.2	△3.2	1.8	△8.0	19.75	内一内外封紙付。既外封紙未刷 (左)	江戸 18c末～19c前	
127-599	6号遺構	6/9	土器 陶磁	磁器	底	4.7	7.5	7.5	7.5	103.90	内一内外封紙付。既外封紙未刷	江戸 18c末～19c前	
127-600	6号遺構	6/9	陶磁	磁器	底	6.4	1.8	3.2	8.6	73.9	内一内外封紙付。既外封紙未刷	江戸 19c前	
127-601	6号遺構	6/9	土器	磁器	口	—	▲1.9	—	—	17.7	内一内外封紙付。既外封紙未刷 (口縁部)既用	江戸 19c前	
127-602	12号遺構	12/9	土器	瓦葺	口	12.3	1.5	10	10.4	99.3	内封紙付(口縁部)既用。スス・ター付付 既外封紙未刷	江戸 18c中葉～中葉	
127-603	17号遺構	17/9	磁器	磁器	口	△10.0	△3.6	5.7	—	41.5	封付 外紙付(口縁部)既用。既外封紙未刷	江戸 19c前	
127-604	17号遺構	17/9	磁器	磁器	底	△11.7	△6.0	6.1	—	76.6	封付 外紙付	江戸 19c前	
127-605	17号遺構	17/9	磁器	磁器	口	△12.3	△7.6	2.9	—	50.1	封付 内紙付(口縁部)既用。高麗書一紙(口縁部)既用	江戸 19c前～中葉	
127-606	17号遺構	17/9	磁器	磁器	底	—	▲13.1	▲9.0	—	24.2	封付 外紙付(口縁部)既用。既外封紙未刷	江戸 19c前	
128-607	17号遺構	17/9	陶磁	磁器	底	△3.8	△4.5	2.4	5.1	6.9	内一内外封紙付。既外封紙未刷	江戸 18c～	
128-608	17号遺構	17/9	陶磁	磁器	底	△3.8	2.9	1.6	7.8	50.7	内外封紙付	江戸 19c前	
128-609	17号遺構	17/9	土器	磁器	口	—	▲2.2	—	—	24.0	内一内外封紙付。既外封紙未刷 (口縁部)既用	江戸 19c中葉～	
128-610	24号遺構	24/9	陶磁	大皿	底	—	△13.9	▲1.5	—	101.9	封付 外紙付(口縁部)既用。既外封紙未刷 (口縁部)既用	江戸 17c後葉～18c前	
128-611	24号遺構	24/9	土器	磁器	不明	—	9.5	▲1.9	—	116.6	内外封紙付。既外封紙未刷 (口縁部)既用	江戸 19c前	
128-612	24号遺構	24/9	土器	磁器	口	—	▲7.8	—	—	242.3	内封紙付。スス付	江戸 17c末～18c前	
128-613	24号遺構	24/9	土器	磁器	口	—	▲4.5	—	—	48.0	内一内外封紙付。既外封紙未刷 葉紙・赤紙(既用)	江戸 17c末～18c前	
128-615	25号遺構	25/9	土器	磁器	口	△9.0	△5.3	1.7	—	7.7	内一内外封紙付。口縁部スス・ター付付 既外封紙未刷	江戸 17c後葉～	
128-616	33号遺構	33/9	土器	磁器	口	—	▲3.2	—	—	27.5	内一内外封紙付。既外封紙未刷	江戸 18c後葉～19c前	
128-617	68号遺構	68/9	磁器	大皿	口	△21.5	△14.1	3.2	—	134.6	封付 内紙付(口縁部)既用。既外封紙未刷 (口縁部)既用。既外封紙未刷 (口縁部)既用	江戸 17c後葉～18c前	
129-618	68号遺構	68/9	磁器	小皿	口	7.4	3.7	3.4	—	39.1	封付 外紙付	江戸 18c前	
129-618	68号遺構	68/9	陶磁	小皿	口	6.6	2.7	4.1	7	46.0	内一内外封紙付。既外封紙未刷	江戸 18c後葉～19c前	
129-619	68号遺構	68/9	陶磁	小皿	口	△9.5	4	5	—	49.4	内一内外封紙付。既外封紙未刷	江戸 18c後葉～19c前	
129-620	68号遺構	68/9	陶磁	小皿	口	7.1	4.1	6	—	99.2	内一内外封紙付。既外封紙未刷	江戸 19c前	
129-621	68号遺構	68/9	陶磁	磁器	底	—	6.9	▲5.0	—	134.3	内封紙付。既外封紙未刷 (口縁部)既用。既外封紙未刷 (口縁部)既用	江戸 18c～	
129-622	68号遺構	68/9	陶磁	磁器	口	7.7	2.9	1.5	—	23.0	内一内外封紙付。葉紙付 既外封紙未刷	江戸 18c末～19c前	
129-623	68号遺構	68/9	土器	磁器	口	—	△7.4	▲2.3	—	40.9	内一内外封紙付。スス付付 既外封紙未刷	江戸 17c後葉～	
129-624	69・74号遺構	69・74/9	磁器	小皿	底	—	3.4	▲3.3	—	16.9	封付 外紙付(口縁部)既用	中国 18c後葉～19c前	
129-625	69・74号遺構	69・74/9	磁器	小皿	口	△13.0	5.9	5.9	—	73.2	封付 外紙付	江戸 17c後半	
129-626	72号遺構	69・74/9	陶磁	磁器	底	△9.5	4.7	6.1	—	52.9	封付 外紙付(口縁部)既用	江戸 17c後葉～18c前	
129-627	69・74号遺構	69・74/9	磁器	小皿	口	7.9	—	▲13.4	—	—	29.9	既外封紙未刷	江戸 18c前
129-628	69・74号遺構	69・74/9	陶磁	青紙	口	△12.9	△4.7	5.9	—	94.3	封付 既外封紙未刷	江戸 18c前	
129-629	69・74号遺構	69・74/9	陶磁	小皿	口	△21.8	9.7	9.5	—	52.7	内封紙付(口縁部)既用。既外封紙未刷 (口縁部)既用	江戸 18c前	
130-630	69・74号遺構	69・74/9	土器	磁器	口	△11.8	△8.0	1.8	—	22.6	内一内外封紙付。既外封紙未刷 (口縁部)既用	江戸 17c後葉～	
130-631	69・74号遺構	69・74/9	土器	磁器	口	△11.2	△7.4	1.9	—	17.5	内一内外封紙付。口縁部スス・ター付付 既外封紙未刷	江戸 17c後葉～	
130-632	69・74号遺構	69・74/9	土器	磁器	口	△11.5	△6.0	2.2	—	19.9	内一内外封紙付。既外封紙未刷 (左)	江戸 17c後葉～	
130-633	69・74号遺構	69・74/9	土器	磁器	口	△16.7	7	2.5	—	56.1	内一内外封紙付。既外封紙未刷 (口縁部)既用	江戸 17c後葉～	
130-634	69・74号遺構	69・74/9	土器	磁器	口	11.6	7.5	2.5	—	55.9	内一内外封紙付。既外封紙未刷 (口縁部)既用	江戸 17c後葉～	
130-635	69・74号遺構	69・74/9	土器	磁器	底	11.4	6.7	2	—	107.6	内一内外封紙付。口縁部スス・ター付付 既外封紙未刷 (口縁部)既用。既外封紙未刷 (口縁部)既用	江戸 17c後葉～	
130-636	69・74号遺構	69・74/9	土器	磁器	口	△12.7	△8.4	2.3	—	18.8	内一内外封紙付。既外封紙未刷	江戸 17c後葉～	
130-637	69・74号遺構	69・74/9	土器	磁器	底	—	△18.3	▲4.2	—	121.6	内封紙付。既外封紙未刷 (口縁部)既用	江戸 17c後葉～	
130-638	70号遺構	70/9	磁器	小皿	口	10.5	4.5	5.8	—	23.9	封付 外紙付	江戸 18c中葉	
130-639	71号遺構	71/9	土器	磁器	口	△19.8	—	▲5.2	—	28.8	内一内外封紙付。既外封紙未刷	江戸 17c末～18c前	
130-640	72号遺構	72/9	磁器	小皿	口	△8.0	△3.1	3.9	—	18.6	封付 外紙付(口縁部)既用	江戸 18c後葉～19c前	
130-641	85号遺構	85/9	磁器	小皿	口	△5.5	2.5	2.2	—	19.5	封付 外紙付	江戸 17c末～18c後葉	
130-642	85号遺構	85/9	磁器	小皿	口	△8.2	3.8	4.9	—	72.2	封付 外紙付	江戸 17c末～18c後葉	
130-643	85号遺構	85/9	陶磁	青紙	底	4.5	2.9	1.7	7.4	44.4	内外封紙付	江戸 19c前	
130-644	85号遺構	85/9	陶磁	磁器	底	—	△5.0	▲2.6	—	27.4	内封紙付。既外封紙未刷 (口縁部)既用	江戸 18c～	
130-645	85号遺構	85/9	土器	磁器	口	△8.3	4.4	1.6	—	19.4	内一内外封紙付。既外封紙未刷 (左)	江戸 17c中葉～	
130-646	85号遺構	85/9	土器	磁器	口	△5.4	—	▲8.4	—	78.9	内封紙付。既外封紙未刷 (口縁部)既用。既外封紙未刷 (口縁部)既用	国内 18c後葉～中葉	
130-647	85号遺構	85/9	陶磁	磁器	底	—	8.4	▲21.0	12.1	668.0	内外封紙付。既外封紙未刷 (口縁部)既用。既外封紙未刷 (口縁部)既用	江戸 17c末～18c前	

第 38 表 文字や記号が記された陶磁器・土器の一覧表

資料番号	採掘番号	発掘番号	出土地点	注記	素材	器種	部位	内容	備考
Ka1	129		第 2・3 群・第 3 層	H 4 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka2	189		第 4 層	H 4 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka3	392		地溝群 1 群	H 4 4 南 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka4	402		地溝群 1 群	47 4 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka5	413		地溝群 1 群	H 4 4 西	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka6	188		第 4 層	H 4 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka7	91		第 1 層	1 103 27a	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka8	187		第 4 層	H 4 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka9	186		第 4 層	H 4 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka10	394		地溝群 1 群	H 4 4 西 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka11			第 4 層	H 4 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka12	185		第 4 層	H 4 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka13		36 Kp13	地溝群 1 群	H 4 4 南 6	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka14		36 Kp14	地溝群 1 群	H 4 4 南 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka15	408		地溝群 1 群	H 4 4 南 1	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka16	408		地溝群 1 群	H 4 4 西 1	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka17		36 Kp17	第 4 層	H 4 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka18		36 Kp18	第 4 層	H 4 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka19		36 Kp19	第 4 層	H 4 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka20		第 4 層	H 4 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳	
Ka21		36 Kp21	地溝群 1 群	H 4 4 南 6	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka22			第 4 層	H 4 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka23		36 Kp23	地溝群 1 群	H 4 4 西 1	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka24		36 Kp24	第 1 層	1 103 27a	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka25			第 1 層	1 103 27a	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka26			第 1 層	1 103 27a	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka27			第 1 層	1 103 27a	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka28			第 1 層	1 103 27a	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka29			地溝群 1 群	H 4 4 南 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka30			地溝群 1 群	H 4 4 南 1	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka31			第 1 層	H 4 4 西	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka32			第 1 層	1 103 27a	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka33			第 1 層	1 103 27a	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka34			地溝群 1 群	H 4 4 西	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka35			地溝群 1 群	H 4 4 南 6	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka36	169		第 4 層	H 4 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka37	39		第 1 層	1 103 27a	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka38			地溝群 下層	地溝西	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka39	186		瓦写遺構	6 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka40		36 Kp40	瓦写遺構	6 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka41		36 Kp41	瓦写遺構	6 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka42			瓦写遺構	6 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka43			瓦写遺構	6 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka44			地溝群 1 群	61 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka45			地溝群 1 群	21 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka46	533		93 号遺構 下層	93 号西下	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka47	534		93 号遺構 1 層	93 号西上	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka48			93 号遺構 1 層	93 号西上	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka49		36 Kp49	93 号遺構 1 層	93 号西上	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka50			93 号遺構 1 層	93 号西上	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka51			地溝群 1 群	47 4 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka52			地溝群 1 群	47 4 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka53		36 Kp53	地溝群 1 群	47 4 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka54			地溝群 1 群	47 4 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka55			地溝群 1 群	47 4 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka56			地溝群 1 群	47 4 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka57			地溝群 1 群	47 4 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka58	397		地溝群 1 群	61 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka59	424		地溝群 1 群	61 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka60	396		地溝群 1 群	61 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka61	399		地溝群 1 群	61 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka62	393		地溝群 1 群	61 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka63	405		地溝群 1 群	61 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka64	407		地溝群 1 群	61 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka65	401		地溝群 1 群	61 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka66		36 Kp66	地溝群 1 群	61 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka67			地溝群 1 群	61 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka68			地溝群 1 群	61 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka69	486		地溝群 下層	地溝	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka70	491		地溝群 下層	地溝	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka71	489		地溝群 下層	地溝	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka72	487		地溝群 下層	地溝	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka73	492		地溝群 下層	地溝	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka74	488		地溝群 下層	地溝	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka75	496		36 Kp75	地溝群 下層	地溝	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka76	496		地溝群 下層	地溝群 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka77	495		地溝群 下層	地溝群 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka78		36 Kp78	地溝群 下層	地溝群 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka79		36 Kp79	地溝群 下層	地溝群 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka80			地溝群 下層	地溝群 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka81		36 Kp81	地溝群 下層	地溝群 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka82			地溝群 下層	地溝群 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka83		36 Kp83	72 号遺構	72 号	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka84			71 号遺構	71 号	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka85	203		71 号遺構	71 号	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka86			第 2・3 群・第 3 層	104 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka87			52 号遺構	52 号南東下	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka88		36 Kp88	85 号遺構	85 号	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka89			85 号遺構	85 号	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka90		36 Kp90	87 号遺構	87 号	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka91	391		地溝群 1 群	61 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka92	647		85 号遺構	85 号	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka93			85 号遺構	85 号	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka94		37 Kp94	地溝群 下層	H 4 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka95			地溝群 下層	H 4 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka96			地溝群 下層	51 1 2	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka97		37 Kp97	地溝群 下層	地溝群 3	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka98			第 1 層	1 103 27a	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka99	92		第 1 層	1 103 27a	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳
Ka100	89		第 1 層	1 103 27a	陶器	埴輪	腹部	に、ち、ち、し	古墳

資料番号	神田番号	図面番号	出土地点	注記	素材	器種	部位	内容	備考
K0101	86		第1層	Ⅱ区	陶器	埴輪	胴部	上・中・下	古墳
K0102	86		第1層	Ⅱ区	陶器	埴輪	胴部	中	古墳
K0103	86		第1層	Ⅱ区	陶器	埴輪	胴部	中	古墳
K0104	87		第1層	Ⅱ区西土	陶器	埴輪	胴部	上・中	古墳
K0105	153		第2-2層	Ⅱ区西土	陶器	埴輪	胴部	上・中	古墳
K0106	152		第2-2層	Ⅱ区西土	陶器	埴輪	胴部	上・中	古墳
K0107	191		第4層	Ⅱ区西土	陶器	埴輪	胴部	中	古墳
K0108	391		地蔵橋上層	Ⅱ区西土	陶器	埴輪	胴部	中	古墳
K0109	400		地蔵橋上層	Ⅱ区西土	陶器	埴輪	胴部	中	古墳
K0110	398		地蔵橋上層	Ⅱ区西土	陶器	埴輪	胴部	中	古墳
K0111	493		地蔵橋上層	Ⅱ区西土	陶器	埴輪	胴部	中	古墳
K0112	494		地蔵橋上層	Ⅱ区西土	陶器	埴輪	胴部	中	古墳
K0113	499		地蔵橋上層	Ⅱ区西土	陶器	埴輪	胴部	中	古墳
K0114	586		石弓遺構	6 F 2	陶器	埴輪	胴部	中	古墳
R1	—	37-B1	地蔵橋上層	47 F 2	陶器	香鉢または石川鉢	高円内	—	—
R2	—		地蔵橋上層	Ⅱ区4北3	陶器	埴輪	胴部	中	中継不可
R3	—	37-B3	地蔵橋上層	Ⅱ区4南5	陶器	埴輪	胴部	—	—
R4	360		地蔵橋上層	Ⅱ区4北1	埴部	埴土	内	丸ノ内、丸ノ内	—
R5	82		第1層	Ⅱ区西土	陶器	埴輪	胴部	上・中	—
R6	80		第1層	Ⅱ区西土	陶器	埴輪	胴部	上・中	—
R7	—	37-B7	地蔵橋上層	61 F 2	陶器	埴輪	胴部	中	中継不可
R8	—		地蔵橋上層	Ⅱ区4北5	陶器	埴輪	胴部	中	中継不可
R9	—		地蔵橋上層	61 F 2	陶器	埴輪	胴部	中	中継不可
R10	—		地蔵橋上層	61 F 2	陶器	埴輪	胴部	中	中継不可
R11	—		地蔵橋上層	51 F 2	陶器	平盤	高円内	中継不可	—
R12	355		地蔵橋上層	Ⅱ区4北4	陶器	埴輪	胴部	中	中継不可
R13	—	37-B13	地蔵橋上層	Ⅱ区4北4	陶器	埴輪	胴部	中	中継不可
R14	79		第1層	Ⅱ区西土	陶器	埴輪	胴部	上・中	—
R15	—	37-B15	地蔵橋上層	47 F 2	陶器	埴輪	高円内	—	—
R16	95		第1層	Ⅱ区西土	陶器	平盤	高円内	文政5年庚子(月)三日	—
R17	386		地蔵橋上層	Ⅱ区4北1	陶器	埴輪	胴部	中	—
R18	81		第1層	Ⅱ区西土	陶器	埴輪	胴部	上・中	—
R19	163		第2-2層	Ⅱ区西土	陶器	平盤	高円内	文政7年	—
R20	380		地蔵橋上層	Ⅱ区4北1	陶器	文様	高円内	文政7年	—
R21	373		地蔵橋上層	Ⅱ区4南2	陶器	土器	高円内	中継不可	—
R22	479		地蔵橋上層	Ⅱ区4南2	陶器	土器	高円内	中継不可	—
R23	524		Ⅱ区西土上層	Ⅱ区西土上	陶器	埴輪	胴部	中	中継不可
R24	244		Ⅱ区西土上層	Ⅱ区西土上	陶器	埴輪	胴部	中	中継不可
R25	415		地蔵橋上層	Ⅱ区4北1	土器	カワラケ	高円内	中継不可	—
R26	100		第2-1・3層・第3層	Ⅱ区西土上	土器	カワラケ	高円内	中継不可	—
R27	—		第2-1・3層・第3層	Ⅱ区西土上	陶器	土器	高円内	中継不可	—
R28	—	37-B28	Ⅱ区西土上層	Ⅱ区西土上	陶器	土器	高円内	中継不可	—
R29	—	37-B29	Ⅱ区西土上層	Ⅱ区西土上	陶器	土器	高円内	中継不可	—
R30	—	37-B30	地蔵橋上層	47 F 2	陶器	土器	高円内	中継不可	—
R31	—		地蔵橋上層	47 F 2	陶器	土器	高円内	中継不可	—
R32	—	37-B32	地蔵橋上層	Ⅱ区西土上	陶器	埴輪	胴部	中	—
R33	—		地蔵橋上層	Ⅱ区西土上	陶器	埴輪	胴部	中	—
R34	—	37-B34	地蔵橋上層	Ⅱ区西土上	陶器	埴輪	胴部	中	—
R35	263		石弓遺構	6 F 2	陶器	埴輪	高円内	中継不可	—
R36	386		地蔵橋上層	61 F 2	陶器	埴輪	高円内	中継不可	—
R37	629		石弓遺構	69・74 F 2	陶器	埴輪	高円内	中継不可	—
R38	—		石弓遺構	6 F 2	陶器	埴輪	高円内	中継不可	—
R39	220		Ⅱ区西土上層	Ⅱ区西土上	陶器	土器	高円内	中継不可	—
R40	373		地蔵橋上層	Ⅱ区4北2	陶器	平盤	高円内	中継不可	—
R41	—		地蔵橋上層	Ⅱ区西土上	陶器	埴輪	高円内	中継不可	—
R42	604		Ⅱ区西土上層	Ⅱ区西土上	陶器	埴輪	高円内	中継不可	—
R43	621		石弓遺構	68 F 2	陶器	埴輪	高円内	中継不可	—
R44	635		石弓遺構	69・74 F 2	土器	土器	高円内	中継不可	—
R45	634		石弓遺構	69・74 F 2	土器	土器	高円内	中継不可	—
R46	536		石弓遺構	63 F 2北土上	土器	石瓦	高円内	中継不可	—
V1	562		石弓遺構	6 F 2	埴部	埴	高円内	—	—
V2	567		石弓遺構	6 F 2	埴部	埴	高円内	—	—
V3	—	37-V3	地蔵橋上層	Ⅱ区4北1	埴部	土器	高円内	中継不可	—
V4	—	37-V4	地蔵橋上層	Ⅱ区西土上	埴部	土器	高円内	中継不可	—
V5	—		地蔵橋上層	47 F 2	埴部	土器	高円内	中継不可	—
V6	—	37-V6	地蔵橋上層	47 F 2	埴部	土器	高円内	中継不可	—
V7	—		地蔵橋上層	Ⅱ区4南2	埴部	土器	高円内	中継不可	—
V8	319		第2-2層	Ⅱ区西土	埴部	土器	高円内	中継不可	—
V9	157		第1層	Ⅱ区西土	埴部	土器	高円内	中継不可	—
V10	—	37-V10	地蔵橋上層	Ⅱ区西土上	埴部	土器	高円内	中継不可	—
V11	—	37-V11	地蔵橋上層	Ⅱ区西土上	埴部	土器	高円内	中継不可	—
V12	—	37-V12	地蔵橋上層	Ⅱ区西土上	埴部	土器	高円内	中継不可	—
K01	525		Ⅱ区西土上層	Ⅱ区西土上	陶器	土器	高円内	中継不可	—
K02	84		第1層	Ⅱ区西土上	陶器	土器	高円内	中継不可	—
K03	129		第2-1・3層・第3層	Ⅱ区西土上	陶器	土器	高円内	中継不可	—
K04	184		第4層	Ⅱ区西土上	陶器	土器	高円内	中継不可	—
K05	344		地蔵橋上層	Ⅱ区4北0	埴部	埴	高円内	中継不可	—
K06	470		地蔵橋上層	Ⅱ区西土上	土器	土器	高円内	中継不可	—
K07	552		石弓遺構	2 F 2	陶器	土器	高円内	中継不可	—
K08	611		石弓遺構	2 F 2	陶器	土器	高円内	中継不可	—
K09	220		Ⅱ区西土上層	Ⅱ区西土上	陶器	土器	高円内	中継不可	—
K10	411		地蔵橋上層	Ⅱ区4北0	陶器	埴輪	高円内	中継不可	—
K11	484		地蔵橋上層	Ⅱ区西土上	陶器	埴輪	高円内	中継不可	—
K12	644		石弓遺構	65 F 2	陶器	埴輪	高円内	中継不可	—

3) 木製品 (第 131～144 図、第 39 表、図版 38～42)

水分を多く含む土壌特性のため、遺存状態は比較的良好である。用途不明の木材片や木っ端、著しく破損したものを除く 157 点を取り上げ、うち 103 点を報告する。

履物 (1～17) 下駄 (13 点) とその他の履物 (4 点) に大別する。民具学なども含めて様々な視点からの履物分類が知られるが、本稿では、鼻緒をすげるための孔＝坪があるものを下駄とし、坪のないものをその他の履物として報告する。下駄については、連歯下駄 8 点、露卯の差歯下駄が 4 点 (うち 1 点は歯)、陰卯の差歯下駄が 1 点である。いずれも横木取り板目の素材を用いており、連歯下駄は長方形もしくは隅丸長方形、差歯下駄は舟形のものが多い。前坪はいずれもつま先の真真中に穿たれており、後坪が後歯より前方のものが 7 点、後方のものが 5 点である。連歯下駄には前方のものも後方のものも見られるが、差歯下駄はすべて後方である。

特徴的なものとしては、8、12 があげられる。8 は幅に対して長さがかなり短く、著しく稚拙なつくりである。特に後歯から踵部分にかけては非対称に削り出され、鑿痕は粗い。職人の手業とはとうてい思えない品で、素人が下駄以外の木製品を加工して自作した再生品であろう。12 は差歯下駄の台だが、差歯溝が前歯用の 1 条しかなく、後歯用の溝があったと思われる部分は切断されている。元は舟形だったと思われるが、一端が不自然に平坦な形になっており、後坪が新たに穿たれている。歯が破損した台を加工した再生品で、子供用と考えられる。また、10 と 11 は出土遺構が同じで、形状、大きさなどもほぼ同様であることから、対の可能性がある。

下駄以外のものについても、周縁部や縁辺に複数の穿孔がみられ、何らかの装着物が想定されるが、鼻緒を想定できる形状ではなく、具体的には不明である。16 は半楕円形の厚手板を平坦な部分でつぎ合わせたような形状で、全体としては長楕円形を呈している。2 孔 1 対の小孔が周縁に沿って 14 ケ所に配され、下面では対になる 2 孔をつなぐような細い溝がみられる。前後の半楕円板が接した状態で出土しており、本来は何らかの方法で両者を結束した上で一個体として機能したのと考えられよう。周縁に配された小孔の機能は明らかでないが、下面の溝と合わせて考えると、糸もしくは紐などを通して被甲物を縫い付けた可能性も考えられよう。あるいは、これらの小孔のうちの幾つかについては、前後を結束するために用いたのかもしれない。特徴的な形状や周縁に小孔を配す点が『尾張藩上屋敷跡遺跡 X』無歯下駄 VI D2e 類と似ているが、尾張藩上屋敷跡資料が使用後に切断されたと考えられているのに対し、本資料は全周が調整されており、別々に作られた上で結束されたと考えられることから、ひとまず異なる背景を持つものと考えておくこととする。17 も 16 と同種のものであろう。

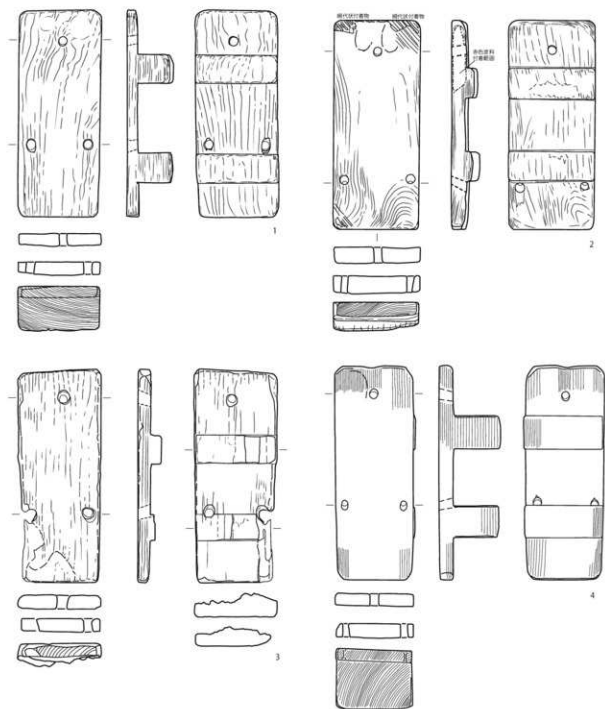
椀 (18～26、29)・椀蓋 (27、28、30) いずれも漆塗りである。椀のほとんどが腰丸椀で、平椀は 2 点のみである。腰丸椀 7 点のうち 5 点が高台の高いタイプである。椀は横木取り 7 点、縦木取り 3 点、椀蓋は横木取り 2 点、縦木取り 1 点で、横木取りの方が多い。18 は高台内に「十」もしくは「×」の刻みがある。何かの目印であろうか。

高足膳 (34～40) いずれも黒漆塗りである。底板 1 点、脚 5 点、底板の中央下面に渡す棧と考えられる木片が 1 点ある。脚は口の字形であるが、一枚の素材板から切り出すのではなく、コの字形の部材を上下に継いで口の字形にする構造である。35、39 は破断部分に刃物による加工がみられ、他器種に再生しようとしたと考えられる。

曲物(50～59) 柄杓1点、容器胴2点、容器底板3点、容器蓋4点である。中央に摘みの痕跡があるものを蓋とし、縁辺に胴を留めた痕跡(釘や木釘、釘穴などの残存)が見られるものを底板とした。柀目のものも板目のものもみられる。

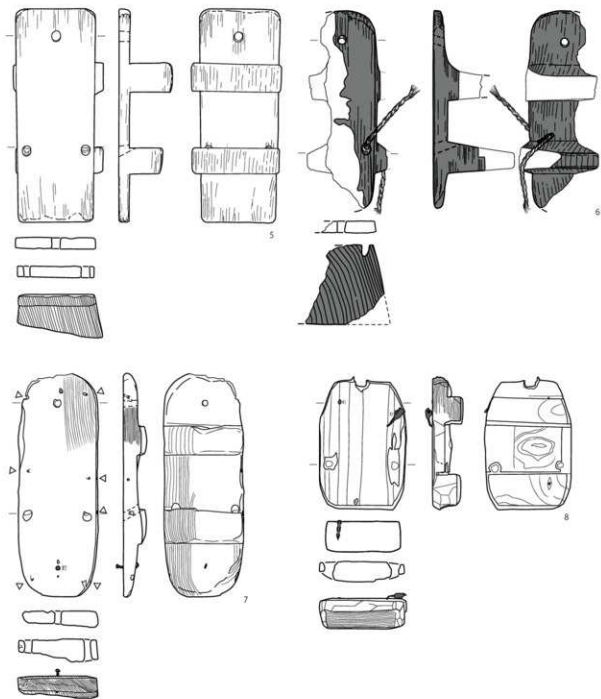
結物(60～66) 注ぎ口となる穴があるものを天板、ないものを底板ととらえ、天板のあるものを樽、天板のないものを桶とする。樽については、天板、底板ともに、径10cm程度の小型のものが多い。また、底板は縁辺が摩耗しているものが多い。60は側板で、3枚が接するような状態で出土した。内面の底板痕跡が顕著であるのに比して天板の痕跡がみられないこと、付着物が底付近から縁まで連続的に観察されることから、天板がない桶と判断した。

その他 32は漆塗りの合子の蓋で、下面に見られる同心円状の凹凸は、木地や漆を加工して作り出したものではなく、木目である。41、42は脚付の丸盆の盆と脚である。やや距離はあるが、同じ池遺構上層からの出土で、41下面の脚の痕跡と42の上端(盆と接する部分であろう)の形状や大きさが同じであることから、同一個体と考えられよう。盆の縁は曲物で、木釘で底板に装着した上で漆を塗布している。下面の脚の痕跡は3カ所、木釘などの痕が見られないことから、漆や膠で接着したものと考えられる。44は蓋で、焼印の「久・」は徳利の釘書にも散見される。49は長方形の箱蓋で、「坂本/岡壁製」と焼印がある。明治後半以降、現台東区根岸1丁目交差点角(旧坂本通り沿い)に店舗を構えていた和菓子店「岡壁榮泉」の菓子折り箱と考えられる。71は破断面にはっきりした木目が観察できなかったが、側面に節が観察されたため木製品とした。重さや硬さといった質感からは、炭化しているように思われる。扁平な孔が貫通しており、刃物の柄の可能性はあるが、断面の長軸と孔の軸がややずれるため断言はできない。75は独楽で、芯は鉄製、一本が貫通しているのではなく、上下から別々のものが差し込まれている。76～80は札である。76には「平向平治様/新町/桑地より」の墨書があり、荷札と考えられる。77にも「松平丹波守様/御おくに面/八千代■(殿カ)」「西■(浦カ) [] / [] 小兵衛」との墨書がある。これも、荷札であろう。小兵衛という人物から、松平丹波守邸奥向きの八千代という人物に宛てたものであろうか。近世以降、松平丹波守を名乗る大名家はいくつかあるが、18世紀後半から幕末までは、駿河小島藩流脇松平家がほぼ世襲的に丹波守に叙せられ、現文京区春日一丁目の地下鉄後楽園駅付近に上屋敷を構えていた。本資料の出土層位は第1層(第2～4層攪乱土)で、第2層以下が他所からの搬入土であろうことを考え合わせると興味深い。79にも墨書が見られるが、判読できない。86、87は半杓文字形のへらである。86は左利き用、87は右利き用であろうか。いずれも、柄に細い穿孔があるが、紐などを通すにはいざさか細すぎるので、木釘などの痕跡と考えた方よいだろう。他器種からの再生、転用品の可能性もある。89は羽子板で、一方の面にはわずかに凹凸がみられた。羽根の痕であろうか。90は馬の脚をかたどった木彫である。上端に径3mm程の穴があり、木釘などで胴体に装着されていたと考えられる。91は蓮華の箸をかたどった木彫である。仏具であろう。あるいは仏像の部品かもしれない。92～103は、機能、用途ともに不明のものである。92は黒漆塗りで、赤漆で松葉文が描かれている。下端に木釘が残っていることから、底板があったと考えられるが、全体の形状は不明である。93も黒漆塗りで、側面は漆を塗布した後に切り出されており、再生品である可能性が高い。98には鑿痕がみられ、波型の形は意図的なものと考えられる。103は、不規則に凹凸が作り出されたような形状で、所々に切り込んで放置したような細い溝がみられる。建材の一端、もしくは破損品の可能性がある。

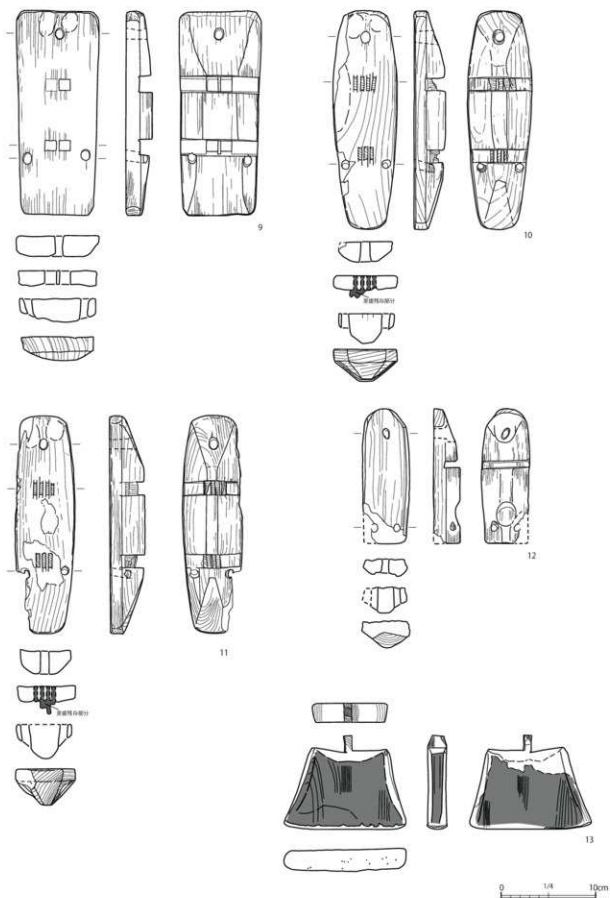


0 1/4 10cm

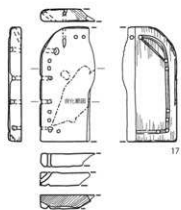
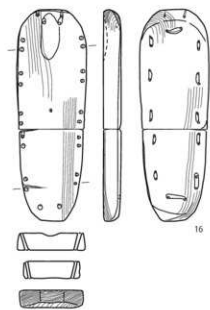
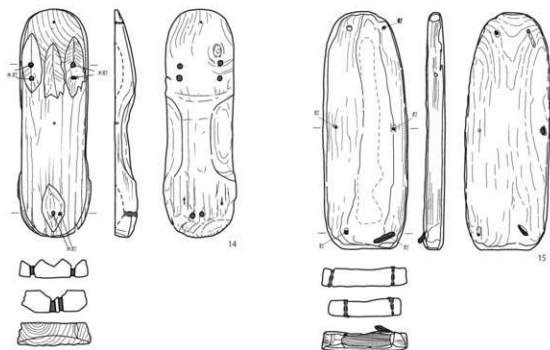
第 131 図 木製品 (1)



第 132 図 木製品 (2)

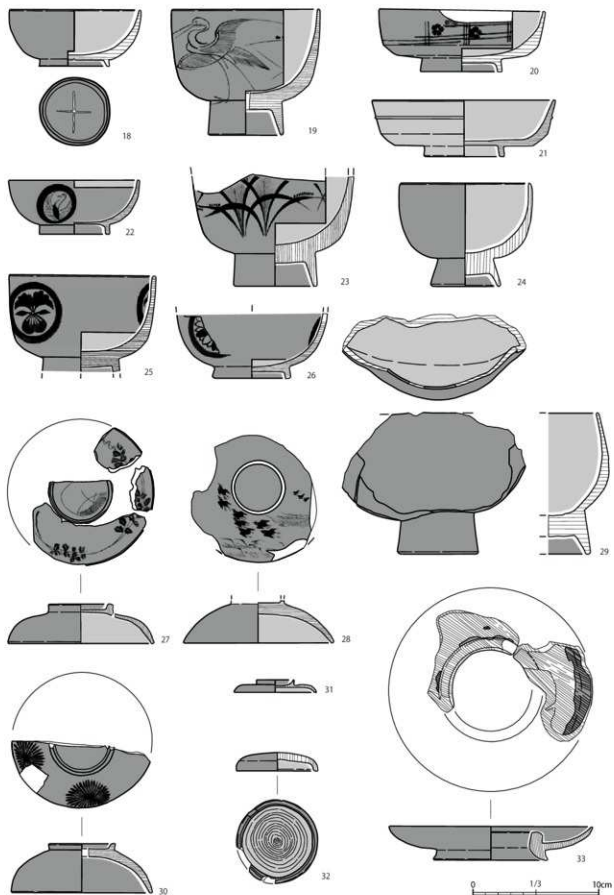


第 133 図 木製品 (3)

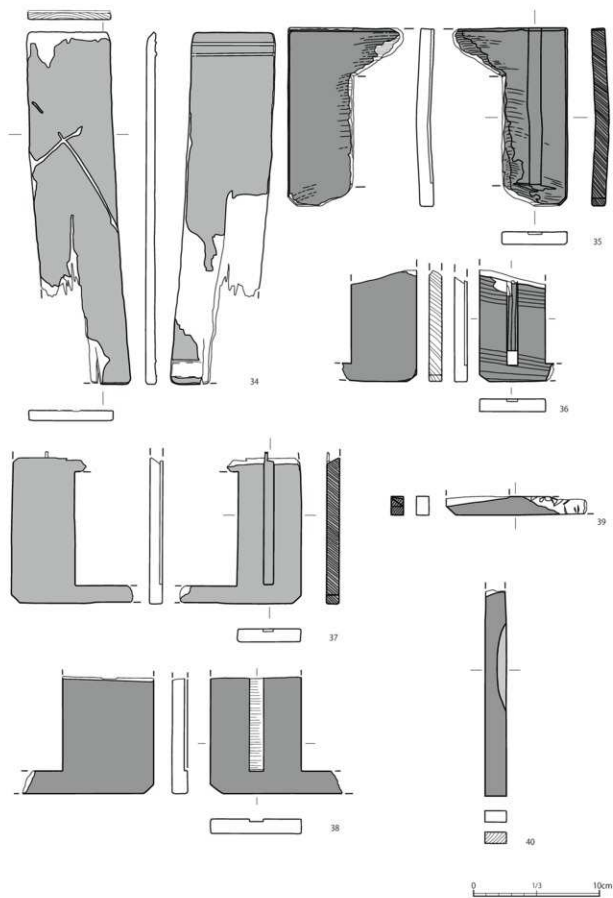


0 1/4 30cm

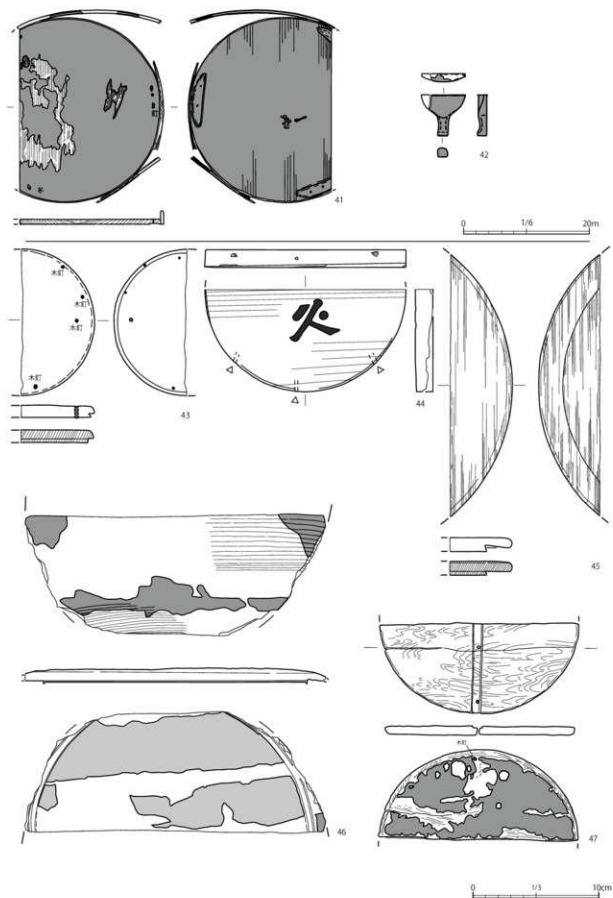
第 134 図 木製品 (4)



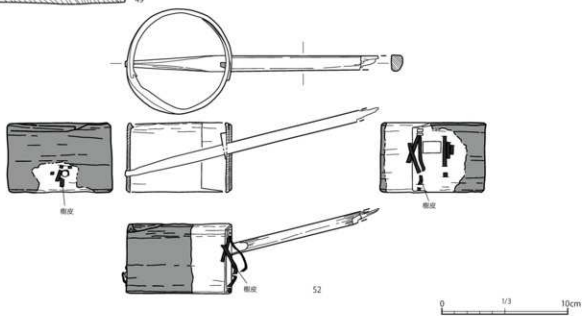
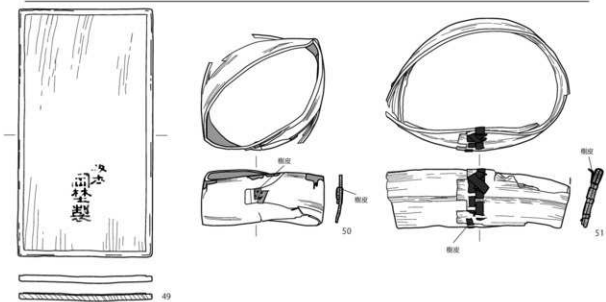
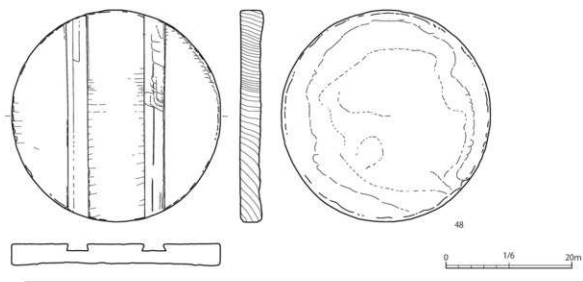
第135図 木製品(5)



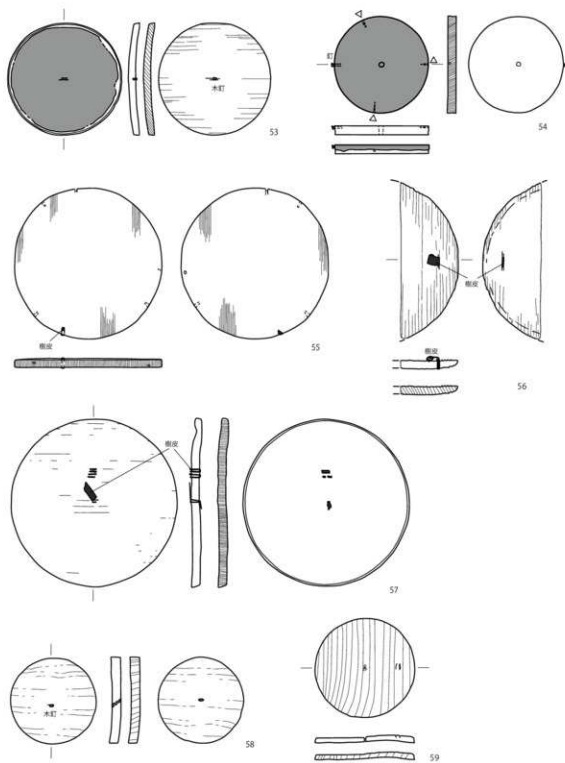
第 136 図 木製品 (6)



第 137 図 木製品 (7)

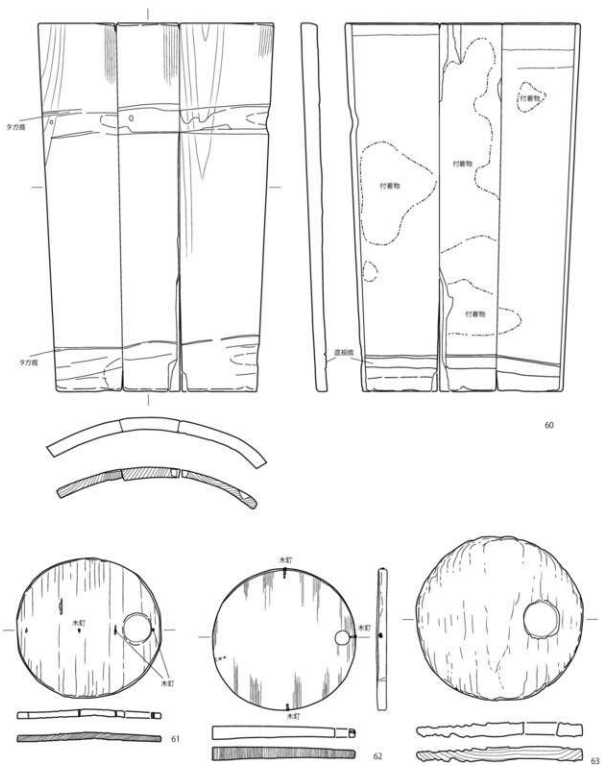


第 138 図 木製品 (8)

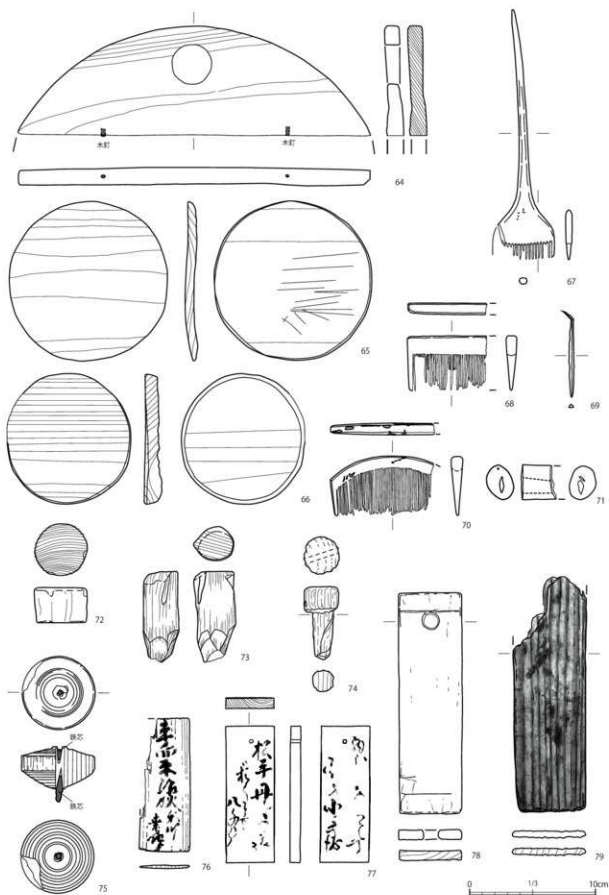


第 139 図 木製品 (9)

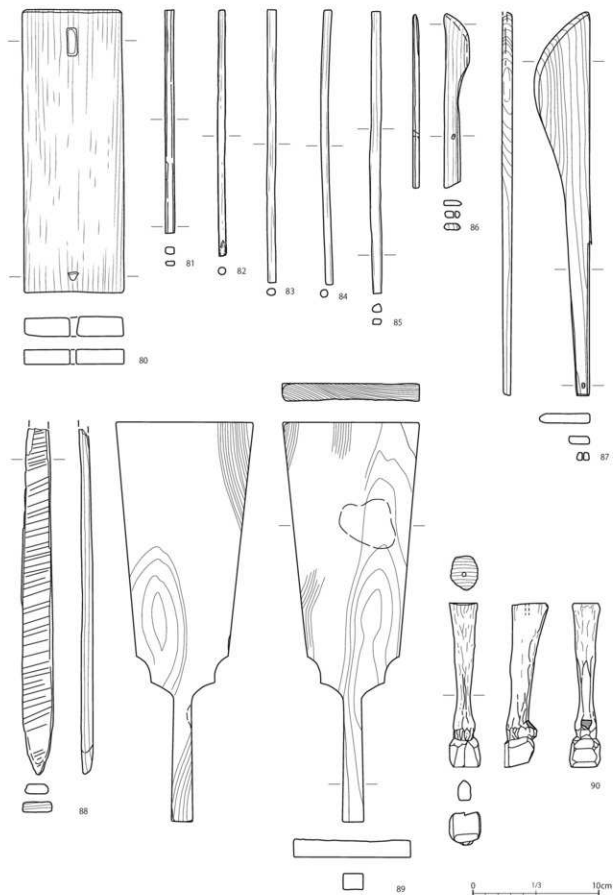
0 1/3 10cm



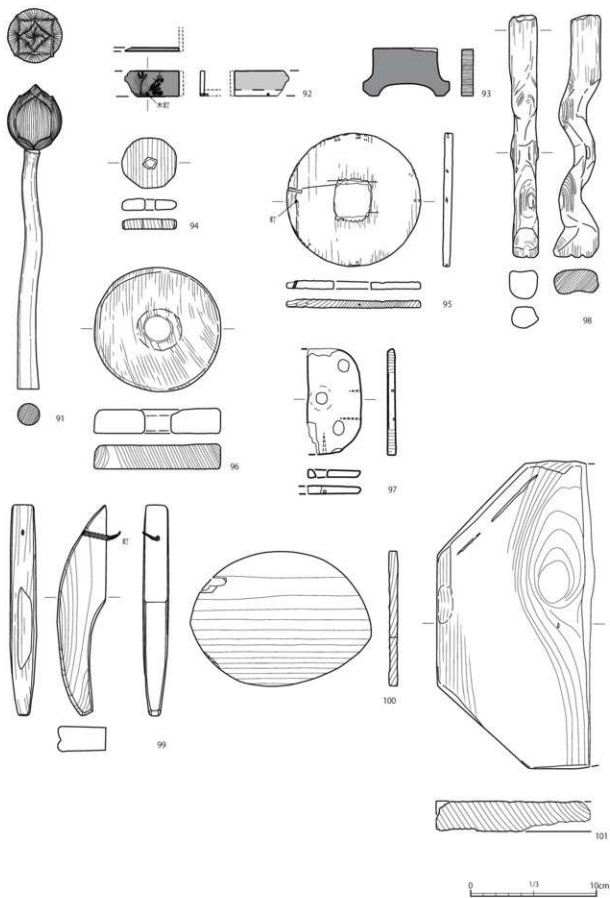
第 140 図 木製品 (10)



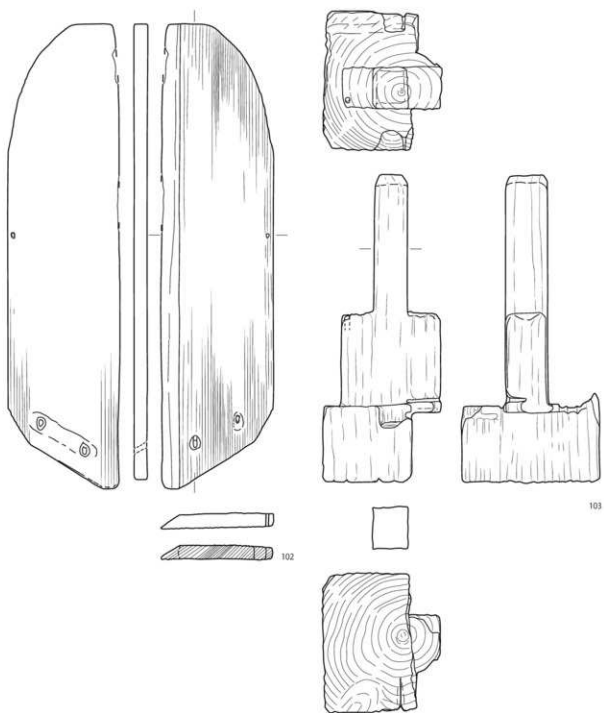
第 141 図 木製品 (11)



第 142 図 木製品 (12)



第 143 図 木製品 (13)



0 1/3 10cm

第 144 図 木製品 (14)

第 39 表 木製品観察表

調査番号	写真番号	出土地点	建記	種類	遺存状態	寸法 (cm)			備 考
						a	b	c	
131-1	38-1	流漕橋 下層	池西	棺物(下駄/遺物)	完形	21.8	8.6	4.7	長方形 胴押中心、埋理後奥面方 胴押両面に強い凹痕 榎木張り敷目
131-2	38-2	60・74号遺構	60・74号	棺物(下駄/遺物)	完形	22.1	9.0	3.0	長方形 胴押中心、埋理後奥面方、奥端上面に斜状釘痕跡(釘痕跡の面) 1箇所あり。胴底の一部に赤色塗料付着 胴押両面に凹痕 榎木張り敷目
131-3	38-3	第2層	付土	棺物(下駄/遺物)	ほぼ完形	22.5	8.8	2.5	長方形 胴押中心、埋理後奥面方 胴押両面に凹痕 榎木張り敷目
131-4	38-4	流漕橋	池東キナシ	棺物(下駄/遺物)	完形	22.6	8.0	6.5	長方形 胴押中心、埋理後奥面方 胴押両面に強い凹痕 榎木張り敷目
132-5	38-5	6号遺構	6号	棺物(下駄/遺物)	ほぼ完形	22.6	8.2	5.6	長方形 胴押中心、埋理後奥面方 胴底表面に凹痕 榎木張り敷目
132-6	38-6	第4層	付土	棺物(下駄/遺物)	約1/2	20.9	5.7	8.4	7.1 胴底面凹化 榎木張り敷目
132-7	38-7	第1層	1R301号	棺物(下駄/遺物)	完形	23.6	8.4	2.4	1.6 胴底凹化 胴長方形 胴押中心(貫通していない)、埋理後奥面方 胴底著しく凹痕 榎木張り敷目
132-8	38-8	流漕橋 下層	池北キナシ	棺物(下駄/遺物)	完形	14.0	9.2	3.0	胴長方形 胴底に対して長さかなり短い。胴押中心(凹痕)。埋理後奥面方 胴底著しく凹痕 下駄以外の製品(埋理品)を利用して自作した両片あり 榎木張り敷目
132-9	38-9	60・74号遺構	60・74号	棺物(下駄/遺物)	存 完形	21.5	8.7	2.8	1.1 長方形 胴押中心、埋理後奥面方 胴押両面に凹痕 榎木張り敷目
133-10	38-10	60・74号遺構	60・74号	棺物(下駄/遺物)	存 完形	23.1	6.7	3.4	1.3 下層 胴押中心、埋理後奥面方 胴押両面に凹痕 榎木張り敷目 短少1片あり
133-11	38-11	60・74号遺構	60・74号	棺物(下駄/遺物)	存 完形	23.0	6.3	3.8	1.6 長方形 胴押中心、埋理後奥面方 胴押両面に凹痕 榎木張り敷目 短少1片あり
133-12	38-12	6号遺構	6号	棺物(下駄/遺物)	存 完形	14.0	5.1	2.8	1.2 短少1片あり。胴底著しく凹痕となり、胴底方が平らになり切断されている。胴が胴底した部分の釘の付合した部分あり 榎木張り敷目
133-13	38-13	93号遺構 下層	93号の西下	棺物(下駄/遺物)	蓋 完形	12.9	9.9	2.0	1.8 榎木張り敷目
134-14	38-14	第1層	1R301号	棺物(その他)	ほぼ完形	24.0	7.7	2.4	1.0 胴内面 胴縁部に斜向きに釘痕跡が若干あり、両側面に縦2か所の釘痕跡がある 一 凡手木釘痕跡 榎木張り敷目
134-15	38-15	60・74号遺構	60・74号	棺物(その他)	完形	23.1	9.9	2.0	1.0 胴内面 胴縁部の4か所に釘痕跡、胴縁の2か所に穿孔 榎木張り敷目
134-16	38-16	60・74号遺構	60・74号	棺物(その他)	完形	22.3	6.7	1.8	1.0 胴内面(下層側面を参照) 胴縁部14か所に2か所の穿孔。下面では2か所となり、下面に凹みが見られる 榎木張り敷目
134-17	38-17	70号遺構	70号	棺物(その他)	約1/2	12.1	▲5.8	1.3	1.0 胴押中心 胴縁部2か所に2か所の穿孔。下面ではこれらの穴をつなぐように凹み溝が刻み込まれている 榎木張り敷目
135-18	39-18	流漕橋 上層	61号	板(楡丸板)	約1/2	10.5	5.6	4.5	0.9 内面：胴縁部より、内面：赤漆塗り 高内面(短み「下」) 榎木張り敷目
135-19	39-19	93号遺構 下層	93号の西下	板(楡丸板)	約1/3	11.8	6.0	10.0	2.8 内面：胴縁部より、赤漆塗り 内面：赤漆塗り 榎木張り敷目
135-20	39-20	第2-2層	付土	板(平板)	ほぼ完形	13.3	6.5	5.0	1.6 内面：胴縁部より、赤漆塗り 高内面(短み「下」) 榎木張り敷目
135-21	39-21	33号遺構	33号の板	板(平板)	約1/2	14.5	6.4	4.5	0.8 内面：胴縁部より、赤漆塗り 1層(短み)胴縁部より 榎木張り敷目
135-22	39-22	33号遺構	31R333号	板(楡丸板)	約1/2	10.4	5.6	4.5	0.8 内面：胴縁部より、赤漆塗り丸丸 内面：赤漆塗り 榎木張り敷目
135-23	39-23	93号遺構 下層	93号の北東下	板(楡丸板)	ほぼ完形	▲10.8	8.7	8.7	2.6 内面：胴縁部より、赤漆塗り丸丸 内面：赤漆塗り 榎木張り敷目
135-24	39-24	33号遺構	31R333号	板(楡丸板)	ほぼ完形	10.5	5.1	8.2	3.2 内面：胴縁部より、内面：赤漆塗り 榎木張り敷目
135-25	39-25	第4層	付土	板(楡丸板)	ほぼ完形 高台穴あり	11.7	6.3	▲7.5	▲1.8 内面：胴縁部より、赤漆塗り丸丸 内面：赤漆塗り 榎木張り敷目
135-26	39-26	33号遺構	31R333号	板(楡丸板)	約1/3	▲12.0	6.3	5.0	0.8 内面：胴縁部より、赤漆塗り丸丸 内面：赤漆塗り 榎木張り敷目
135-27	39-27	33号遺構	33R333号板	板蓋	約1/2	11.6	5.1	3.2	1.7 内面：胴縁部より、短草花丸 内面：赤漆塗り 高内面：短草花丸 榎木張り敷目
135-28	39-28	17号遺構	17号	板蓋	ほぼ完形 高台穴あり	11.9	4.2	3.2	3.0 内面：胴縁部より、赤漆塗り丸丸 内面：赤漆塗り 榎木張り敷目
135-29	39-29	93号遺構 下層	93号の北東下	板(楡丸板)	約1/2	▲14.7	6.8	11.2	3.3 内面：胴縁部より、内面：赤漆塗り 変形が著しい 榎木張り敷目
135-30	39-30	33号遺構	31R333号	板蓋	約1/2	11.2	5.3	3.9	0.6 内面：胴縁部より、赤漆塗り丸丸 内面：胴縁部より(短草花丸) 赤漆塗り 榎木張り敷目
135-31	39-31	流漕橋 上層	91号	釘付蓋	ほぼ完形	9.6	3.0	1.0	0.4 内面：胴縁部より、内面：赤漆塗り 榎木張り敷目
135-32	39-32	流漕橋 上層	61号	合子蓋	完形	6.5	—	1.5	— 内面：胴縁部より、内面：赤漆塗り 榎木張り敷目
135-33	39-33	60・74号遺構	60・74号	天井板	約1/3	16.2	9.1	2.7	0.6 赤漆塗り 榎木張り敷目
136-34	39-34	第1・3層・第3層	付土	高足脚 板蓋	破片	27.9	6.6	0.8	— 赤漆塗り 一 下部胴縁付に脚の跡あり 板目
136-35	39-35	流漕橋 上層	91号	高足脚 脚	破片	14.1	▲8.1	1.0	— 赤漆塗り 一 変形 上下の板間に方向による凹み(胴縁側への転倒)あり 板目
136-36	39-36	流漕橋 下層	池西	高足脚 脚	破片	▲8.8	▲5.2	1.0	— 赤漆塗り 胴底は漆が剥離 板目
136-37	39-37	流漕橋 上層	付土44号	高足脚 脚	破片	▲11.5	▲9.7	1.0	— 赤漆塗り 板目
136-38	39-38	流漕橋 上層	付土4号	高足脚 脚	破片	▲10.4	▲8.3	1.1	— 赤漆塗り 板目
136-39	39-39	流漕橋 上層	付土4号	高足脚 脚	破片	▲11.1	▲1.5	1.0	— 赤漆塗り 一 一部凹みによる凹み(胴縁側への転倒)あり 板目
136-40	39-40	流漕橋 下層	池西	高足脚 板蓋残片	破片	▲16.9	1.6	0.9	— 赤漆塗り 一部胴縁部に赤漆塗り 板目
137-41	40-41	流漕橋 上層	付土4号	脚付丸板 蓋	ほぼ完形	<29.3	—	0.8	— 赤漆塗り 一 上部の胴縁部は凹痕 板目に嵌められていた脚の残片が高い 榎底の4か所に木釘痕跡あり
137-42	40-42	流漕橋 上層	付土4号	脚付丸板 脚	完形	△7.2	5.5	1.5	— 赤漆塗り
137-43	40-43	流漕橋 下層	池北キナシ	蓋	約1/2	11.7	10.8	1.0	— 榎底の4か所に木釘痕跡あり

調査番号	写真 図番	出土地点	注記	種類	遺存状態	重量 (g)				備 考
						a	b	c	d	
137.44	40-44	6号遺構	6F7	瓦	約1/2	16.9	16.9	1.4		縁飾のなかみに本釘付存 上部に「九・」の烙印 残存
137.45	40-45	93号遺構 下層	93号瓦葺床下	瓦	約1/5	27.0	28.3	1.1		残存
137.46	40-46	6号遺構 下層	池北キムシ6	瓦	約1/2	△24.3		1.1		一部「東漢書」下層に赤塗あり 上部の一部に灰がみられる 残存
137.47	40-47	93号遺構 上層	93号瓦葺床上	瓦葺	約1/2	△15.8		0.7		下層「東漢書」下層に粘み瓦葺存の遺構(瓦葺 残存)
138.48	40-48	6号遺構 上層	61F7	石製蓋	ほぼ完全 破片あり	33.5		3.7		上部に粘み瓦葺存の遺構(瓦葺) 下部には不整層の中間層に厚板による内穴がみられる 残存
138.49	40-49	6号遺構 上層	47F7	瓦葺	完全	19.6	10.8	0.5		上部に「復木/同型瓦」の烙印 残存
138.50	40-50	第4層	付土3	瓦物(瓦葺)	瓦	9.7		4.3		粘土製瓦葺存 残存
138.51	40-51	6号遺構	6F7	瓦物(瓦葺)	瓦	13.2		4.8		粘土製瓦葺存 残存
138.52	40-52	6号遺構 下層	池西キムシ	瓦物(瓦葺)	ほぼ完全 破片あり	8.4		5.5	2.0	割外蓋: 赤塗あり 粘土製瓦葺存 残存
139.53	40-53	第4層	付土3	瓦物(瓦葺)	瓦葺	9.1		0.6		下部のみ赤塗あり 下部中央に本釘付存 残存
139.54	40-54	6号遺構 下層	池西キムシ	瓦物(瓦葺)	瓦葺	7.8		0.7		下部のみ赤塗あり 縁飾の4cm所に本釘、中央に径4cmの穿孔 残存
139.55	40-55	33号遺構	33号33F7	瓦物(瓦葺)	瓦葺	11.9		0.6		縁飾の6cm所に本釘 残存
139.56	40-56	6号遺構 上層	付土北1	瓦物(瓦葺)	瓦	△12.9		0.6		上部に粘土製の破片あり 残存
139.57	40-57	90・74号遺構	90・74F7	瓦物(瓦葺)	瓦	13.3		0.7		上部に粘土製の破片あり 残存
139.58	40-58	6号遺構 上層	47F7	瓦物(瓦葺)	瓦葺	6.8		0.8		一部 赤色塗あり 上部中央に本釘付存 残存
139.59	40-59	6号遺構	6F7	瓦物(瓦葺)	瓦葺	7.8		0.4		中央に径2.5cmの穿孔 残存
140.60	41-60	6号遺構	6F7	瓦物(磚)	瓦葺	29.2	▲18.7	1.3		一枚の縁飾した状態で出土 内側に淡黄色の付着物 残存
140.61	41-61	33号遺構	33号33F7	瓦物(磚)	瓦葺	11.1		0.5	2.3	縁飾の厚りに径2.3cmの穿孔 残存
140.62	41-62	90・74号遺構	90・74F7	瓦物(磚)	瓦葺	11.2		1.0	1.2	縁飾の厚りに径1.2cmの穿孔 残存
140.63	41-63	93号遺構	93F7	瓦物(磚)	瓦葺	12.9		1.0	3.0	縁飾の厚りに径3.0cmの穿孔 残存
141.64	41-64	90・74号遺構	90・74F7	瓦物(磚)	瓦葺	△30.0		1.2	3.0	縁飾の厚りに径3.0cmの穿孔 2か所に本釘付存 残存
141.65	41-65	6号遺構	6F7	瓦物(磚)	瓦葺	12.6		0.7		残存
141.66	41-66	93号33号・新築	93号33F7	瓦物(磚)	瓦葺	19.3		1.4		残存
141.67	41-67	第4層	付土3	瓦(瓦葺)	ほぼ完全 破片あり	△7.8	19.8	0.5		残存
141.68	41-68	90・74号遺構	90・74F7	瓦(瓦葺)	ほぼ完全 破片あり	▲2.4	4.3	0.9		残存
141.69	41-69	6号遺構 上層	付土北2	瓦葺	瓦葺	7.2	0.4			残存
141.70	41-70	70号遺構	70F7	瓦(瓦葺)	縁飾あり	△10.7	4.7	0.9		赤塗あり 残存
141.71	41-71	6号遺構 下層	61F7	瓦(瓦葺)	瓦葺	2.6	2.1			赤塗あり 残存
141.72	41-72	6号遺構 下層	61F7	瓦(瓦葺)	瓦葺	4.1		2.8		赤塗あり 残存
141.73	41-73	6号遺構	6F7	瓦(瓦葺)	瓦葺	3.2		7.2		残存
141.74	41-74	93号遺構	93F7	瓦(瓦葺)	瓦葺	5.8	2.7	1.7		残存
141.75	41-75	6号遺構 上層	61F7	瓦葺	完全	5.8		4.4	3.4	残存
141.76	41-76	6号遺構	6F7	瓦	ほぼ完全	10.6	4.0	0.3		残存
141.77	41-77	第1層	11F	瓦(瓦葺)	完全	10.8	3.9	0.8		残存
141.78	41-78	6号遺構 上層	51F7	瓦	完全	17.5	5.0	0.7		上部に径1.2cmの穿孔 残存
141.79	41-79	6号遺構	6F7	瓦	破片	▲18.6	5.8	0.5		赤塗あり(厚板下部) 残存
142.80	41-80	93号遺構 下層	93号西下	瓦	完全	22.4	7.9	1.6		上部に径1.6×2.1cmの近方形の穿孔。下部に径1.8cmの穿孔 残存
142.81	42-81	6号遺構	6F7	瓦	完全	17.7		0.7		残存
142.82	42-82	6号遺構 上層	47F7	瓦	完全	13.5		0.6		残存
142.83	42-83	90・74号遺構	90・74F7	瓦	完全	21.7		0.7		残存
142.84	42-84	85号遺構	85F7	瓦	完全	21.8		0.6		残存
142.85	42-85	33号遺構 附知石 敷き	11F33号遺	瓦	完全	22.2		0.8		残存
142.86	42-86	6号遺構	6F7	ペラ	完全	13.9	1.9	0.5		粘土中に径3cmの穿孔。左右両側 残存
142.87	42-87	95号遺構	95F7	ペラ	完全	30.5	4.5	0.8		粘土中に径3cmの穿孔。右側両側 残存
142.88	42-88	17号遺構	17F7	ペラ	完全	▲27.4	2.4	0.9		残存
142.89	42-89	90・74号遺構	90・74F7	付土敷	完全	31.7	10.8	1.3		残存
142.90	42-90	第1層	66号付土	木製(瓦葺)	完全	13.0	2.7	2.3		残存
143.91	42-91	第1層	付土北土	木製(遺物の蓋)	完全	24.2	4.3	1.7		一部分もしくは瓦葺の一部 残存
143.92	42-92	6号遺構	6F7	不明	縁飾あり	▲4.3	2.0	0.3		内径3cmの穿孔。赤塗あり。内径2cmの穿孔。下部に径1cmに本釘付存 残存
143.93	42-93	66号遺構	66F7	不明	瓦葺あり	6.9	3.7	0.9		残存
143.94	42-94	6号遺構	6F7	不明	完全	4.0		0.9		厚板状 中央に径5cmの穿孔 残存
143.95	42-95	6号遺構 下層	池南	不明	完全	10.4		0.7		厚板状 中央に径2cm×2cmの方形の穿孔。縁飾の6cm所に本釘 残存
143.96	42-96	94号遺構	94F7	不明	完全	10.1		0.2		厚板状 中央に径2.1cmの穿孔 残存
143.97	42-97	35号遺構	35号割木下	不明	約1/2	8.4	▲2.2	0.6		瓦を破りかじらしたような本蓋あり 残存
143.98	42-98	32号遺構上	32号遺構上	不明	完全	19.1	3.5	2.1		残存
143.99	42-99	93号遺構 下層	93号西下	不明	約1/2	16.7	3.8	2.0		残存
143.100	42-100	36号遺構	226F7	不明	完全	10.7	14.3	0.6		内径10cmの瓦 残存
143.101	42-101	第1層	11F33号付土	不明	約1/2	24.3	▲2.2	2.4		瓦葺の瓦 残存
144.102	42-102	90・74号遺構	90・74F7	不明	瓦葺あり	36.8	8.9	1.1		陶器の瓦 残存
144.103	42-103	6号遺構	6F7	不明	ほぼ完全	21.9	19.0	68.5		残存

4) 金属製品 (第 145～150 図、第 40 表、図版 43～46)

水分を多く含む粘土質の土で、遺存状態は、銅合金製品は良好な一方、鉄製品についてはかなり悪かった。破損や腐食によって原形をとどめていないもの以外の 223 点を取り上げ、うち、116 点を報告する。なお、素材については、磁石に付くものは鉄を主体とすると判断し、それ以外のものについては、蛍光 X 線分析 (エネルギー分散型/表面照射) によって、素材同定を行った。

銭貨 (1～35) 1～32 は寛永通寶、33 は文久永寶、35 は天保通寶、34 は明治政府発行の半銭硬貨である。9 は 3 枚が重なって錆び着いており、分離することができなかったが、CT と X 線撮影によって銭文を読むことができた。これら 3 枚も含めて寛永通寶は 34 枚、うち古寛永が 9 枚、新寛永が 25 枚である。古寛永は、銭文「寶」字の下のはらいが「ス」の字状になっている (俗に「ス」寶と称される) もので、一文銭である。新寛永については、裏面背に「文」の文字が入る文銭が 8 枚、裏面に青海波文がみられる波銭が 9 枚 (21 波 1 枚、11 波 8 枚)、銭文以外に文字や文様が入らないものが 8 枚である。波銭は四文銭、それ以外は一文銭である。鑄造年代は、古寛永が寛永 13 (1636) 年～明暦頃 (1650 年代)、新寛永が寛文頃 (1660 年代) 以降、33 の文久永寶は、銭文「文」字が「女」となっている草文のものである。11 波の波銭で、四文銭である。鑄造期間は文久 3 (1863) 年 2 月～慶応 3 (1867) 年で、昭和 28 (1953) 年通用停止になるまで法的には通用した。また、天保通寶は天保 6 (1835) 年初鑄で、明治 24 (1896) 年に通用停止となった。半銭硬貨は明治 6～21 (1873～88) 年の間製造されており、本資料は明治 10 年銘である。

煙管 (36～46) 36～42 は雁首、43～46 は吸口である。いずれも真鍮製で鍍金によって成形されている。蝸着けは概ね脇合せだが、37 のみ上合わせである。また、38 は外面からは蝸着痕が全くわからないが、小口から内側を見ると、脇に合わせ目があることがわかる。39、44 には淡い凹凸が見られ、文様が打ち出されていたと思われるが、摩滅してしまっており、モチーフは不明である。44 には、さらに鍍金の痕が見られ、蛍光 X 線分析によって、蝸着とともに錫が用いられたことがわかった。それぞれの形状を検討すると、雁首については、いずれも油返しが顕著ではなく、火皿は大きめの半球状 (39、41)、やや小ぶりで漏斗のような形状 (40)、補強帯とまでは言えないが、太めのしっかりした蝸着痕といった特徴から、18 世紀前葉～後葉頃のものと考えられる。また、吸口については、いずれも、肩がなく比較的直直ぐであり、18 世紀後葉頃のものと考えられよう。

釘 (47～70、72～77) 角釘を中心に取り上げた。角釘は断面形が方形の、日本古来の釘で、近世以前の日本の釘はすべて角釘であった。様々な種類があるが、ここでは端部の形状によって、頭部を平たく打ち広げて巻いた巻頭釘、端部をそのままの太さに折り叩いて頭部とした皆折釘、両端が尖らせてある合釘の 3 種に分類した。47、48 は頭部欠損のため不明、49～66 は巻頭釘、67～69 は合釘、70～72、77 は皆折釘である。なお、56 (巻頭釘)、69 (合釘)、72 (皆折釘) は 92 号遺構の木製椀、70 (皆折釘) は 88 号遺構の木桶蓋、59 (巻頭釘) は 96 号遺構の木桶蓋、64 (巻頭釘) は 35 号遺構の煉瓦製建物基礎の胴木に、それぞれ打たれていたものである。

工具類 (71、78～81) 71 はタガネ、78 はカスガイ、79 は片切の金槌、80、81 は錐状の工具と考えられる。

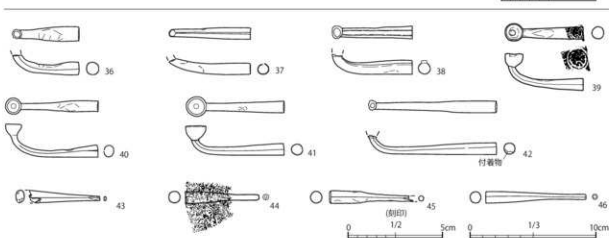
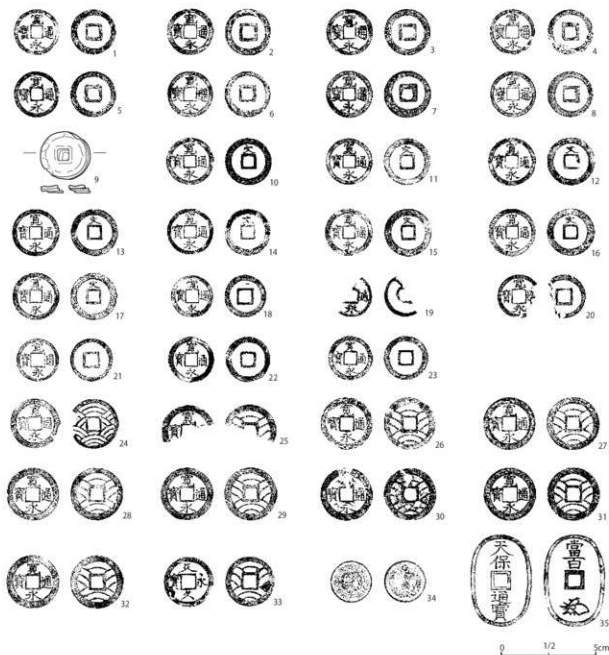
建具類 (82～87) 82 は鉄製で、建具の金具と考えられる。83 は襖などの引手金具で純銅製である。一部は黒ずんだ色調になる煮色加工が施されているようである。84 は純銅製で、L 字状を呈す。葵唐

草文の線刻が施されており、径2mm弱の釘穴が各辺にみられる。襖屏風などの建具の角を補強・装飾する金具であろう。85は錠前付きの指物金具である。鉄製で全体に黒光りする色調の煮色加工が施されている。筆筒などの開き戸に取り付けられたものであろうか。86、87は具体的な用法は不明であるが、建具などの金具であろう。

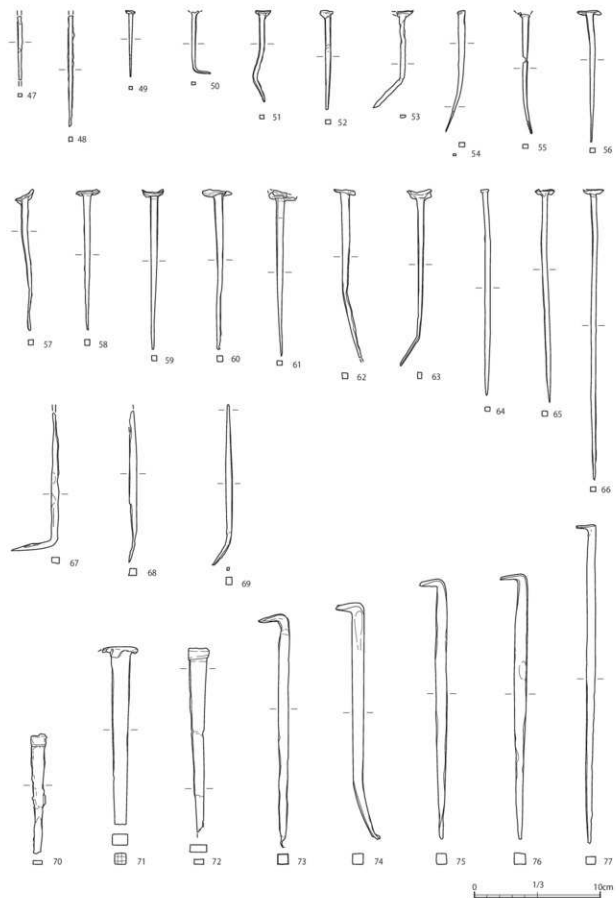
刀装具(88、89、91) 88は鐙である。下地である下貝部分は純銅、台反側を覆う上貝部分は真鍮製である。89は鞘口で、純銅製。91は小柄で、刀身は鉄製、柄は純銅製である。柄の表側には達磨和尚のモチーフが刻まれており、和尚の着物の襟部分には真鍮の象嵌が施されている。裏側には「光■」の銘が刻まれている。

その他(90、92～113) 90は端部に向かって太くなる円管である。太い方の端部は閉じられており、小さな球状の突起が付く。もう一方の端部には棒状の管が差し込まれていたようだが、根元から折れているため、全体の形は不明である。打ち出して文様が施された扇形の青銅板を巻いて成形されている。92は純銅製の杓子、96は純銅製のスプーンである。94、95は真鍮製の洋食用ナイフであろう。同じセットのうちの2本の可能性が高い。93は鉄製で、錆の付着が著しい。X線撮影によって金属部分の形状を確かめたところ、先端が丸く断面の中央に厚みのある形状であった。へらなどの刃の付かない器種の可能性が高い。97は純銅製用途不明の筒である。両端が銅円板によって閉じられていたようであるが、現状では一方のみが閉じられている。閉じられていない方の端部にも、切り取り痕などの破断はみられない。98は真鍮製の水滴である。99は鈴である。CT撮影し、構造を確認したところ、半球状の上下を組み合わせて作られており、胴の上寄りに修復痕が確認できた。破損は表からはほとんど認識できない状態であったが、内側から方形の薄板を貼り付けて溶接し、丁寧に補修したようである。胴は真鍮製、中の玉は細かい多面体で純銅製である。100は純銅製で、表裏に極細い線刻で、亀甲文や鏡面文字が刻まれている。銅版かと思われる。101、102は火箸で真鍮製である。103～105は純銅製の蓋である。薬缶などのものであろうか。106～108は用途不明である。106は真鍮製、107は鉄製。108も鉄製で、箕のような形状で底がスリット状になっている。環がついていて提げられるようになっているが、詳細は不明である。109、110は、いずれも純銅製の網である。109にはややたるみがあり、円形の枠に張って、漉し網としたものであろう。110は92号遺構の木製橋から出土したもので、水廻り施設に用いられていた可能性もある。111～113は53号遺構-1(十字形の土坑)から出土したもので、土坑施設に設置された部材の可能性が高い。111は長尺のボルト、112、113はで長めの釘で、いずれも、もともとは板状であったと思われる木質が付着している。その木目が不規則な方向を向いていることから、複数枚の板が使われており、ボルトや釘は、それらを側面から貫通するように留める役割を果たしていたと考えられる。同じ土坑内には、他にもやや小ぶりと同様の状態の釘などが検出されたが、相互の関係性は不明である。

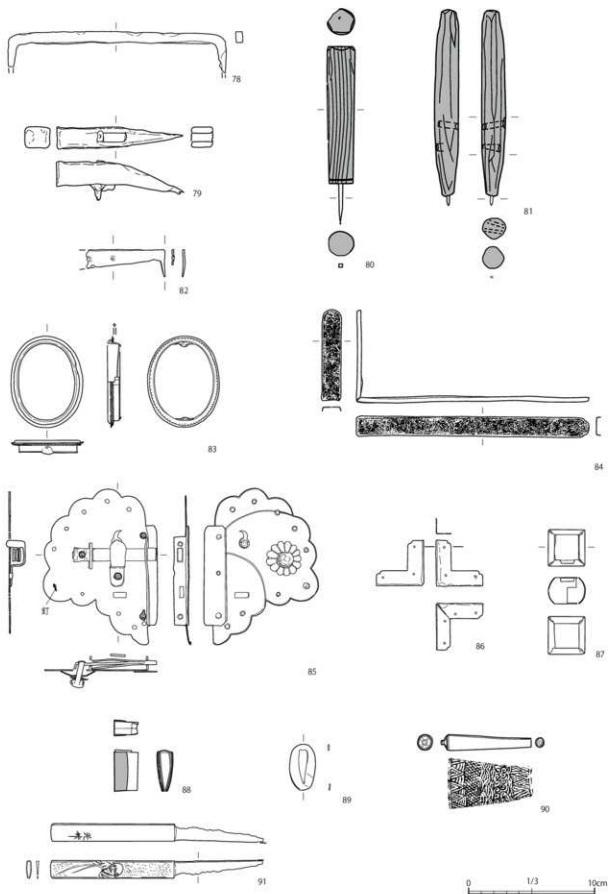
以下は、写真図版のみでの報告である。114は鉄と銅を用いた避雷針のアース部分、115は建築金具と考えられる。116はコンクリートの鉄筋で、丸鋼と呼ばれる、凹凸のないものである。1960年代後半以降には、表面に凹凸の付けた異形鉄筋が普及すること、昭和3(1928)年竣工の旧校舎跡出土であることなどから、同校舎のものと考えられる。同校舎は大正12(1923)年の関東大震災で焼失した明治35年竣工の校舎に替わって建設された、いわゆる復興建築である。復興建築の部材として貴重である。



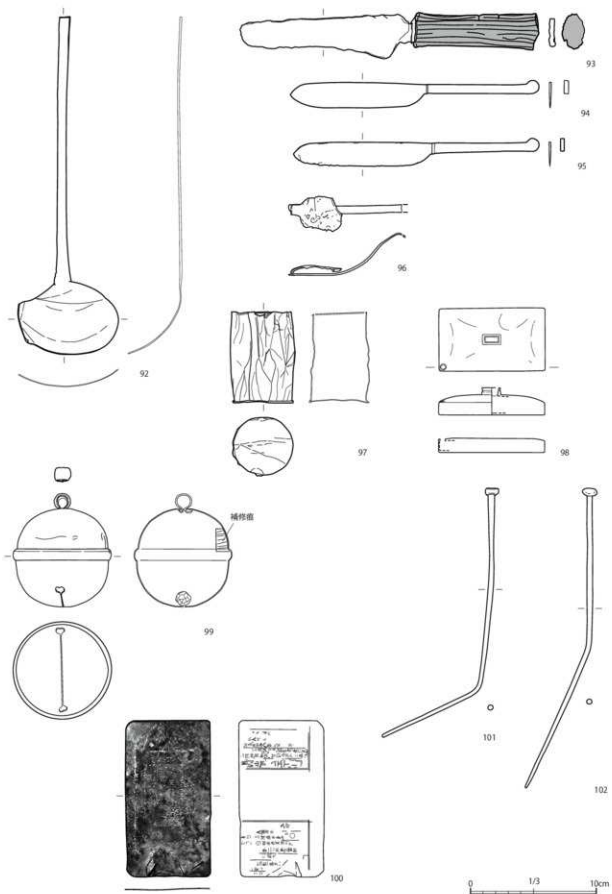
第145図 金属製品(1)



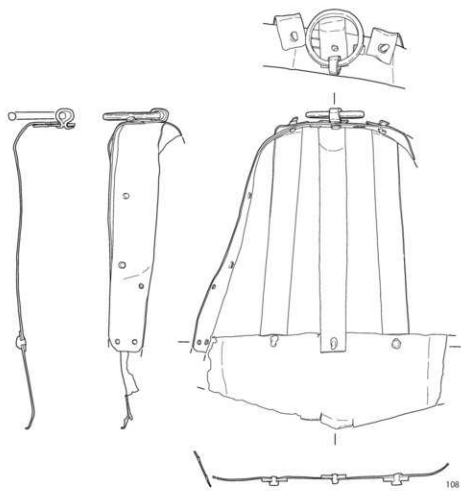
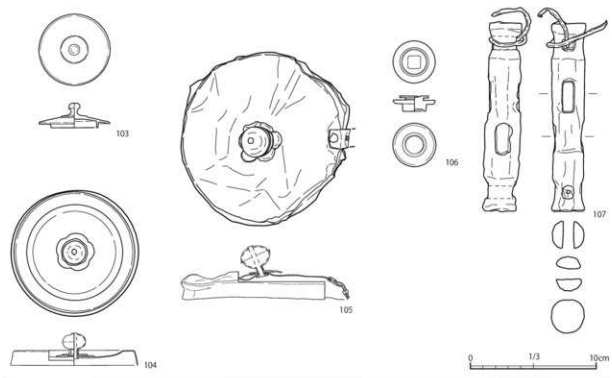
第 146 図 金属製品 (2)



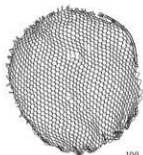
第 147 図 金属製品 (3)



第148図 金属製品(4)



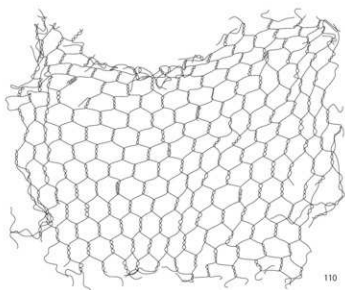
第149図 金属製品(5)



109



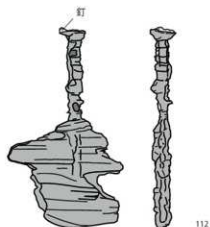
網目 1/1



110



111



112



113

0 1/3 10cm

第150図 金属製品(6)

第40表 金属製品観察表

調査 番号	写真 図版	出土地点	注記	器 種	遺存状態	寸法 (cm)			重 量 (g)	備 考	
						a	b	d			
145-1	43-1	第1層	I区9707	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.42	0.55	0.09	2.2	青銅(銅鉛)製 1.5x貫金 透幣(銅鉛)製	
145-2	43-2	第3層	9307	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.50	0.64	0.09	2.8	1.5x貫金 透幣(銅鉛)製	
145-3	43-3	第1層		鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.47	0.55	0.12	3.7	青銅(銅鉛)製 1.5x貫金 透幣(銅鉛)製	
145-4	43-4	第4層	9753	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.44	0.57	0.13	3.2	青銅(銅鉛)製 1.5x貫金 透幣(銅鉛)製	
145-5	43-5	透遺構 下層	海東キシ1	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.44	0.58	0.13	3.7	青銅(銅鉛)製 1.5x貫金 透幣(銅鉛)製	
145-6	43-6	透遺構 上層	6107	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.45	0.54	0.13	4.6	青銅(銅鉛)製 1.5x貫金 透幣(銅鉛)製	
145-7	43-7	80号遺構	8007	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.50	0.6	0.11	3.4	青銅(銅鉛)製 1.5x貫金 透幣(銅鉛)製	
145-8	43-8	透遺構 上層	6107	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.43	0.54	0.12	3.5	青銅(銅鉛)製 1.5x貫金 透幣(銅鉛)製	
145-9	43-9	82号遺構	8227	鉄貨	3枚残片	2.37	0.55	—	5.0	青銅(銅鉛)製	
				貫金透幣(筒)		—	—	—		青銅(銅鉛)製	
				貫金透幣(筒)		—	—	—		1.5x貫金透幣(銅鉛)製	
				貫金透幣(筒)		2.22	0.66	—		青銅(銅鉛)製	
145-10	43-10	透遺構 下層	海東キシ1・2	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.53	0.57	0.13	3.6	青銅(銅鉛)製 透幣(文)	
145-11	43-11	透遺構 上層	9744海4	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.40	0.60	0.12	3.1	青銅(銅鉛)製 透幣(文)	
145-12	43-12	35号遺構	3507	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.58	0.57	0.11	2.7	青銅(銅鉛)製 透幣(文)	
145-13	43-13	透遺構 上層	海西キシ3	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.55	0.58	0.12	3.5	青銅(銅鉛)製 透幣(文)	
145-14	43-14	透遺構 上層	6107	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.50	0.57	0.11	2.7	青銅(銅鉛)製 透幣(文)	
145-15	43-15	93号遺構	9307	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.53	0.57	0.12	3.3	青銅(銅鉛)製 透幣(文)	
145-16	43-16	93号遺構	9307	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.53	0.58	0.10	2.7	青銅(銅鉛)製 透幣(文)	
145-17	43-17	93号遺構	9307	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.52	0.56	0.12	3.5	青銅(銅鉛)製 透幣(文)	
145-18	43-18	透遺構 上層	9744海1	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.25	0.64	0.08	1.8	青銅(銅鉛)製(海西系)銅製	
145-19	43-19	透遺構 上層	9744海4	鉄貨 貫金透幣(筒)	1/2	2.20	0.59	0.09	1.2	青銅(銅鉛)製	
145-20	43-20	透遺構 上層	5107	鉄貨 貫金透幣(筒)	ほぼ完形	2.30	0.65	0.08	1.8	青銅(銅鉛)製(海西系)銅製	
145-21	43-21	透遺構 上層	5107	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.23	0.65	0.08	1.8	青銅(銅鉛)製	
145-22	43-22	37号遺構	3707	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.42	0.60	0.10	2.0	青銅(銅鉛)製(アナンモンヒ素)銅製	
145-23	43-23	85号遺構	8507	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.36	0.60	0.08	2.2	青銅(銅鉛)製(海西系)銅製	
145-24	43-24	第2層	3507海	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.66	0.60	0.12	3.4	青銅(銅鉛)製(海西系)銅製 透幣(文)	
145-25	43-25	透遺構 上層	4707	鉄貨 貫金透幣(筒)	1/2	2.78	0.63	0.13	2.8	透幣(文)	
145-26	43-26	透遺構 上層	5107	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.79	0.63	0.13	3.0	青銅(銅鉛)製(海西系)銅製 透幣(文)	
145-27	43-27	93号遺構	9307	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.80	0.64	0.10	3.0	青銅(銅鉛)製(アナンモンヒ素)銅製 透幣(文)	
145-28	43-28	透遺構 上層	5107	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.80	0.65	0.12	4.0	青銅(銅鉛)製(海西系)銅製 透幣(文)	
145-29	43-29	透遺構 下層	海西	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.82	0.60	0.13	5.0	青銅(銅鉛)製(アナンモンヒ素)銅製 透幣(文)	
145-30	43-30	透遺構 上層	5107	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.80	0.64	0.11	3.6	青銅(銅鉛)製(海西系)銅製 透幣(文)	
145-31	43-31	透遺構 上層	9744海4	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.82	0.68	0.12	4.7	青銅(銅鉛)製(海西系)銅製 透幣(文)	
145-32	43-32	透遺構 上層	海西	鉄貨 貫金透幣(筒)	完形	2.82	0.62	0.12	4.7	青銅(銅鉛)製(海西系)銅製 透幣(文)	
145-33	43-33	53号遺構	53・107	鉄貨 文金透幣(筒)	完形	2.64	0.66	0.10	3.0	青銅(銅鉛)製(文系アナンモンヒ素)銅製 透幣(文)	
145-34	43-34	第2層	3507海	鉄貨 平銭銅貨	完形	2.23	—	—	0.12	3.4	1.5x貫金透幣(銅鉛)製 透幣(文)
145-35	43-35	透遺構 上層	4707下	鉄貨 文金透幣	完形	3.25	0.62	0.25	4.80	20.7	青銅(銅鉛)製 透幣(文)
145-36	43-36	6号遺構	607	貨幣 黄銅	大破欠	▲5.3	1.0	▲0.7	▲1.6	6.57	透幣(文)
145-37	43-37	透遺構 上層	6107	貨幣 黄銅	大破欠	▲5.5	0.8	▲0.5	▲1.3	10.1	透幣(文)
145-38	43-38	6号遺構	607	貨幣 黄銅	大破欠	▲5.3	1.1	0.8	▲1.0	10.7	透幣(文)
145-39	43-39	6号遺構	607	貨幣 黄銅	完形	6.2	1.0	1.4	2.9	8.0	透幣(文)
145-40	43-40	80号遺構 下層	8007下 東海上	貨幣 黄銅	完形	7.3	1.0	1.25	2.5	7.0	透幣(文)
145-41	43-41	透遺構 上層	海東キシ1	貨幣 黄銅	完形	7.8	0.8	1.0	2.8	12.1	透幣(文)
145-42	43-42	99号・14号遺構	99・1407	貨幣 黄銅	大破欠	▲10.2	0.0	▲0.7	▲2.1	11.8	透幣(文)
145-43	43-43	53号遺構	31区5307	貨幣 黄銅	破欠	▲5.7	▲1.0	0.4	—	1.5	透幣(文)
145-44	43-44	第1層	Ⅱ区	貨幣 黄銅	破欠	5.8	0.9	0.4	—	4.9	透幣(文)
145-45	43-45	第4層	9744	貨幣 黄銅	ほぼ完形	6.7	1.0	0.4	—	4.5	透幣(文)
145-46	43-46	透遺構 下層	海東キシ1	貨幣 黄銅	完形	8.6	0.9	0.4	—	6.1	透幣(文)
146-47	44-47	25号遺構	2507	貨幣 黄銅	破欠	▲5.0	▲0.3	—	—	5.6	透幣(文)
146-48	44-48	30号遺構	3007	貨幣 黄銅	破欠	▲5.5	▲0.3	—	—	6.1	透幣(文)
146-49	44-49	透遺構 下層	海西	貨幣 黄銅	破欠(巻部)	5.2	0.8	0.3	—	2.0	透幣(文)
146-50	44-50	80号遺構	8007	貨幣 黄銅	破欠(巻部)	4.9	▲0.6	0.2	—	2.0	透幣(文)
146-51	44-51	透遺構 上層	海西	貨幣 黄銅	破欠(巻部)	7.4	2.0	0.3	—	4.0	透幣(文)
146-52	44-52	75号遺構	7507	貨幣 黄銅	破欠(巻部)	8.9	1.0	0.3	—	6.0	透幣(文)
146-53	44-53	透遺構 上層	9744海4	貨幣 黄銅	破欠(巻部)	7.1	▲1.3	0.2	—	4.0	透幣(文)
146-54	44-54	80号遺構	8007	貨幣 黄銅	破欠	9.6	0.6	0.4	—	6.5	透幣(文)
146-55	44-55	80号遺構	8007	貨幣 黄銅	ほぼ完形	▲5.6	▲1.0	0.3	—	5.0	透幣(文)

調査番号	写真記録	出土地点	法尺	器種	遺存状態	寸法 (cm)			重さ (g)	備考	
						a	b	c			
146.56	44.56	32号遺跡	9927号	角釘 (鉄部)	完了	10.4	1.9	0.3	90	釘に打たれていた	
146.57	44.57	32号遺跡	867号	角釘 (鉄部)	ほぼ完了	10.0	1.5	0.4	87	釘に打たれていた	
146.58	44.58	32号遺跡	757号	角釘 (鉄部)	完了	10.1	2.0	0.3	14	釘に打たれていた	
146.59	44.59	36号遺跡	9967号	角釘 (鉄部)	完了	12.7	1.7	0.4	16	本體の蓋を打ち付けていた	
146.60	44.60	38号遺跡	38号遺跡	角釘 (鉄部)	完了	12.7	2.3	0.4	20	38号遺跡	
146.61	44.61	35号遺跡	857号	角釘 (鉄部)	完了	13.1	▲1.1	0.3	13	35号遺跡	
146.62	44.62	35号遺跡 上層	517号	角釘 (鉄部)	完了	13.3	2.2	0.5	20	35号遺跡	
146.63	44.63	35号遺跡	857号	角釘 (鉄部)	完了	14.0	2.0	0.3	14	35号遺跡	
146.64	44.64	35号遺跡	35号遺跡	角釘 (鉄部)	ほぼ完了	15.4	0.7	0.3	17	35号遺跡 樹木に打たれていた	
146.65	44.65	35号遺跡 上層	477号	角釘 (鉄部)	完了	16.9	1.6	0.4	20	35号遺跡	
146.66	44.66	35号遺跡 上層	1742号	角釘 (鉄部)	完了	23.0	1.6	0.4	20	35号遺跡	
146.67	44.67	73号遺跡	737号	角釘 (鉄)	完了	▲12.0	3.8	0.5	14	73号遺跡	
146.68	44.68	84号遺跡	847号	角釘 (鉄)	破損	▲11.8	0.5		15	84号遺跡	
146.69	44.69	92号遺跡	9927号	角釘 (鉄)	完了	12.2	0.5		16	92号遺跡 釘に打たれていた	
146.70	44.70	38号遺跡	38号遺跡	角釘 (鉄部)	ほぼ完了	▲0.5	▲1.2	0.3	14	38号遺跡 本體の蓋を打ち付けていた	
146.71	44.71	38号遺跡 上層	887号	角釘 (鉄部)	完了	▲14.1	▲2.8	0.3	110	38号遺跡 本體の蓋を打ち付けていた	
146.72	44.72	32号遺跡	9927号	角釘 (鉄部)	完了	▲14.7	1.2	1.4	0.6	38	32号遺跡 釘に打たれていた
146.73	44.73	32号遺跡 上層	817号 遺棄土	角釘 (鉄部)	完了	18.3	2.4	0.6	23	32号遺跡	
146.74	44.74	32号遺跡	35号遺跡	角釘 (鉄部)	完了	18.8	2.2	0.9	91	32号遺跡	
146.75	44.75	35号遺跡 下層	池内	角釘 (鉄部)	完了	20.5	2.2	0.9	77	35号遺跡	
146.76	44.76	32号遺跡	32号遺跡	角釘 (鉄部)	完了	21.0	2.2	1.6	81	32号遺跡	
146.77	44.77	35号遺跡 上層	1742号	角釘 (鉄部)	完了	25.3	1.6	0.6	61	35号遺跡	
147.78	44.78	34号遺跡	847号	角釘 (鉄)	ほぼ完了	27.4	3.2	0.3	53	34号遺跡	
147.79	44.79	35号遺跡 上層	1742号	角釘 (鉄部)	ほぼ完了	10.0	1.6	2.0	126	35号遺跡	
147.80	44.80	35号遺跡	857号	角釘 (鉄)	完了	13.8	2.3	▲0.3	19	35号遺跡	
147.81	44.81	32号遺跡	927号	角釘 (鉄)	完了	15.5	1.7	0.7	9	32号遺跡	
147.82	44.82	35号遺跡 上層	MA21-遺土	建具の金具	完了	▲5.3	▲1.3	0.2	5	35号遺跡	
147.83	44.83	35号遺跡 上層	1742号	引手金具	完了	7.3	5.3	1.1	33	35号遺跡 釘に着色加工	
147.84	44.84	35号遺跡 上層	遺棄土	縁金具	完了	18.45	7.2	1.6	32	35号遺跡 釘に着色加工	
147.85	44.85	35号遺跡 下層	池内	角釘 (鉄部)	完了	12.5	9.0	2.6	96	35号遺跡 釘に着色加工	
147.86	44.86	34号遺跡	847号	建具の金具	完了	3.6	3.6	3.6	41	34号遺跡	
147.87	44.87	32号遺跡	32号遺跡	建具の金具	完了	2.9	2.9	2.9	12	32号遺跡	
147.88	44.88	35号遺跡 下層	池内	釘	完了	2.9	3.2	1.3	0.4	17	35号遺跡 下層は銅製釘、下層は鉄製釘
147.89	44.89	35号遺跡 上層	1742号	釘	ほぼ完了	3.6	2.0	0.1	3	35号遺跡	
147.90	45.90	35号遺跡	35号遺跡	釘	完了	7.2	1.3	0.8	14	35号遺跡 釘に着色加工	
147.91	45.91	35号遺跡 上層	1742号	小釘	ほぼ完了	16.9	1.4		34	35号遺跡 釘に着色加工 釘は鉄製だが、表面 文様彫刻の跡のみは銅製の金具、釘は「欠」の釘	
148.92	45.92	35号遺跡 上層	池内	釘	完了	26.8	7.8	6.8	41	35号遺跡	
148.93	45.93	35号遺跡 上層	517号	ペラカ	完了	23.6	3.8	13.8	0.6	76	35号遺跡
148.94	45.94	35号遺跡 下層	池内	ナイフ	完了	19.6	2.0	10.5	0.1	37	35号遺跡
148.95	45.95	35号遺跡 下層	池内	ナイフ	完了	19.5	1.9	10.8	0.1	31	35号遺跡
148.96	45.96	32号遺跡 1	32号遺跡 1	スプーン	完了	2.8	▲14.0	3.2	10	32号遺跡	
148.97	45.97	35号遺跡 上層	1742号	鏡	ほぼ完了	5.1	7.2		15	35号遺跡 釘に着色加工	
148.98	45.98	35号遺跡 下層	池内	木鏡	完了	5.0	8.4	2.2	98	35号遺跡	
148.99	45.99	35号遺跡 下層	池内	鏡	完了	7.8	7.7	1.2	118	35号遺跡 木は銅製	
148.100	45.100	32号遺跡	35号遺跡	銅製	完了	12.4	6.8	0.1	27	32号遺跡 釘に着色加工	
148.101	45.101	35号遺跡 上層	477号	水箸	完了	24.5	1.1	0.4	27	35号遺跡	
148.102	45.102	35号遺跡 上層	1742号	水箸	完了	25.0	1.2	0.4	28	35号遺跡	
149.103	45.103	35号遺跡 上層	1742号	蓋	完了	3.6	3.7	2.8	45	35号遺跡	
149.104	45.104	32号遺跡 1・3期・東3期	1742号	蓋	完了	10.9	2.9		57	32号遺跡	
149.105	45.105	35号遺跡 下層	池内	蓋	ほぼ完了	15.4	13.7	4.2	86	35号遺跡	
149.106	45.106	39号遺跡 4	59-57号	不明	不明	3.4	1.9	1.2	32	39号遺跡	
149.107	45.107	35号遺跡 上層	917号 遺棄土	不明	不明	15.0	2.7		410	35号遺跡	
149.108	45.108	39号遺跡	917号	不明	ほぼ完了	33.8	▲27.0	6.0	1018	39号遺跡	
150.109	46.109	35号遺跡 上層	1742号	銅製	完了	1.8	10.9		63	35号遺跡	
150.110	46.110	32号遺跡	9927号	銅製	完了	▲22.4	▲27.0		63	32号遺跡	
150.111	46.111	33号遺跡 1	53-107号	不明	不明	▲25.0	▲17.7	▲5.1	22	429号 本方が付着 土質内に認められていた	
150.112	46.112	33号遺跡 1	53-107号	不明	不明	▲15.8	▲0.2	▲2.0	0.6	74	429号 本方が付着 土質内に認められていた
150.113	46.113	33号遺跡 1	53-107号	不明	不明	▲13.2	▲5.7	▲5.7	0.6	45	429号 本方が付着 土質内に認められていた
—	46.114	31期 1層	11区目	銅製	破損					370	31期
—	46.115	32号遺跡	32号遺跡	銅製	破損					401	32号遺跡
—	46.116	32号遺跡	32号遺跡	銅製	破損					1194	32号遺跡

5) 石製品 (第151図、第41表、図版47)

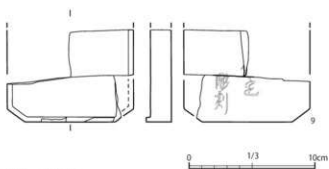
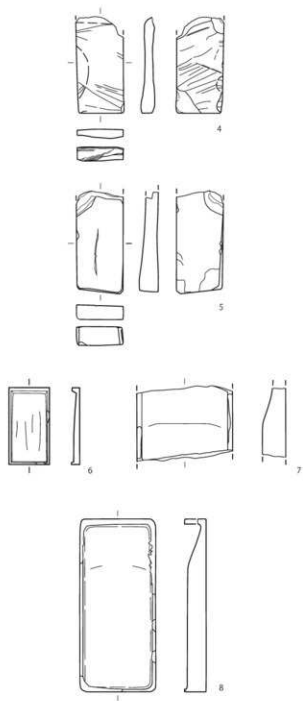
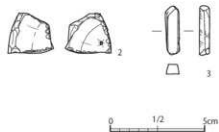
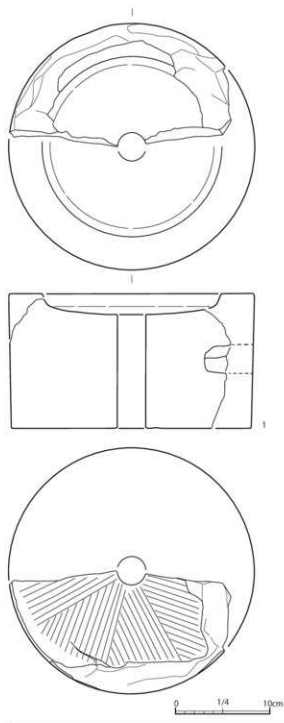
硯10点、砥石12点、石筆1点、火打石1点、石臼様石製品1点、その他7点の計32点が出土した。うち、9点を報告する。

1は挽き石臼 (上臼) の形状を示す石製品である。通常、上臼の下面は凹面となり、回転させるための木製ハンドルを差し込む穴が上面の縁付近近くに設けられるが、本資料は下面が平坦で、ハンドルの差し込み穴に相当すると思われる菱形の穴が側面から穿たれている。また、切つてある目は細く浅

いため、製粉には適さない。石臼としての機能を果たし得るかどうか、構造的に極めて疑問である。石臼そのものではなく、石臼を模したものである可能性が高い。2は石英製の火打石である。厚みが6mm程度の三角形で、縁辺に連続する細かい不規則剥離は敲打によって潰れている。3は滑石製の石筆である。両端を除く四面には、石材からの切り出し痕と考えられる斜行線条痕がみられ、両端は斜めに減っている。端部には擦痕がうすすら認められ、石板への板書によってすり減ったと考えられる。4、5は珪質頁岩製で、京都産の鳴滝砥石であろう。いずれも長方形の置き砥で、砥面中央が摩滅のため湾曲している。擦痕は肉眼ではほとんどみられず、手触りは極めて滑らかである。4は磨り面が破断面にも及んでおり、破損後は持ち砥として使用したと考えられる。下面全体に斜位の平刃の工具痕がみられる。5は下面に断面V字の深い線が一筋刻まれているが、意味するところは不明である。6～9は硯である。6は黒色粘板岩製、平面形は小ぶりの長方形を呈す。陸と海の高さがほとんど同じで、実際に墨をするのには適さないで、墨置きなどに使われたのかも知れない。内面全体には縦方向の細い線条痕がまとまってみられるが、著しい摩滅は見られず、隅にわずかに朱墨の痕跡がみられる。7は輝緑凝灰岩製で、陸から海にかけての部分の破片である。線条痕は認められないが、内面の滑らかな手触りは摩滅のためと考えられ、ある程度使い込まれたものと思われる。外面には黒色の着色が見られる。元々の石材の色調が白っぽいことから、意図的なものと考えられるが、使用による墨の付着である可能性も否定できない。また、陸側の破断面全面にスズ様の黒色付着物がみられるが、外面の着色とはやや異質のように思える。8は黒色粘板岩製で、平面形は長方形、海側の縁辺が破損している。陸部分を中心に縦方向の線条痕がみられるが、摩滅はほとんどしていない。9は輝緑凝灰岩(紫雲石)製で、山口県下関周辺産の赤間硯と考えられる。陸側の一郭の2片が接合したものである。各々の破片の形状は角柱状の直方体に近く、縁辺部に残る硯縁を打ち欠いて形を整えていることから、意図的に分割されたものと考えられる。方形印款の素材として再利用しようとしたのであろう。全体の平面形状は、おそらく隅切の長方形で、線条痕や摩滅はほとんどみられない。また、底部外面には「…定/彫刻」と陰刻されている。職人の銘であろうか。断面V字状の刻み内には部分的に薄い付着物がみられ、文字が彩色されていた可能性が指摘できる。

6) ガラス製品(第152図、第42表、図版47)

瓶類を中心に35点を取り上げた。うち、簪2点、瓶5点、乳棒1点の8点を報告する。1、2は簪である。いずれも随甲色で、表面に弱い曇りが出ている。1は断面形がほぼ正方形で、両端を欠損する破片である。2は先端部の小破片である。側面を螺旋状に巻き上げるように6本の条線がめぐらされており、断面形が6弁の花形になっている。3～6は瓶で、いずれも商品容器と考えられる。3は無色透明の小型寸胴形の瓶である。透明度は高く、割り型痕が底部縁周部と脇2カ所にみられる。口縁部にはネジヤマが作出されており、スクリュウ蓋であったことがわかる。中に濃紺の固形物が残存していることから、内容物は絵具もしくは染料などと考えられよう。4、5はインク瓶である。いずれも、気泡を多く含み、割り型痕が底部縁周部と脇2カ所にみられる。口縁部は玉縁状で、コルク栓と考えられる。4は薄水色透明、5は無色透明。5には、肩に「MARUZEN'S INK ATHENES INK」の文字、底部外面に丸善マークがエンボスで記されており、丸善のアテナインクの容器と知れる。ガラスの質などからみて、大正6(1917)年の発売に近い時期のものであろう。6は無色透明の背の低い寸胴形の瓶である。透明度が高く、割り型の痕跡はみられない。口縁部にはネジヤマが作出さ



第151図 石製品

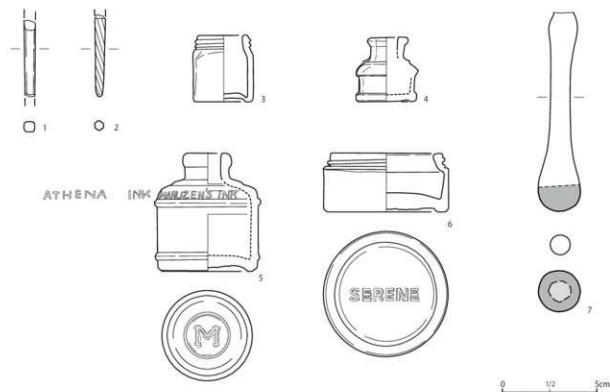
第 41 表 石製品観察表

発掘番号	写真図版	出土地点	注記	種 類	遺存状態	寸法 (cm)			重さ (g)	備 考
						a	b	c		
151-1	47-1	93号遺構 上層	93号内西土	石臼 (11号) 破石製品	1/2	△26.0	13.6	—	6350g	下部は平削。断面から裏削の跡が見られる。口は細く(注)。
151-2	47-2	池遺構 上層	91号土層1	石臼	完形	2.4	2.2	1.4	5.6g	5.6g
151-3	47-3	17号遺構本器庫 a	17号土層2	石臼	完形	0.9	2.3	—	1.5g	1.5g
151-4	47-4	第1層	窪状土	砥石	1/4	3.6	▲7.7	1.2	42.2g	14号土層から出土。噴出石(京都産)製と思われる。
151-4	47-5	池遺構 上層	51号土層2	砥石	1/3	3.6	▲7.8	1.5	67.9g	14号土層から出土。噴出石(京都産)製と思われる。
151-6	47-6	池遺構 上層	91号土層4	瓶	完形	3.3	6.0	0.8	23.2g	25号土層から出土。噴出石(京都産)製と思われる。
151-7	47-7	6号遺構	6号土	瓶	1/4	7.8	▲5.4	1.5	127.8g	25号土層から出土。噴出石(京都産)製と思われる。
151-8	47-8	池遺構 上層	47号土	瓶	完形	6.0	13.8	1.7	209.6g	25号土層から出土。噴出石(京都産)製と思われる。
151-9	47-9	池遺構 上層	91号土層1×2	瓶	1/3	10.1	▲7.2	2.0	205.1g	25号土層から出土。噴出石(京都産)製と思われる。文字の色が白く、底面が黒くして模様がある。

れており、スクリー蓋であったことがわかる。底部外面に「SERENE」のエンボスがある。内容物は不明である。7は無色透明の乳棒である。全体の透明度は高く、肥厚した先端は磨り潰しに適した粗面に仕上げられている。持ち手側もグリップがよいように小さく肥厚しているが、端部はざらついており、円形の粗面がみられる。以下、写真図版のみでの報告である。8は無色透明の瓶で、なで肩で首の長い器形、頸部には縦に筋状の凹凸がデザインされている。油膜様の光沢があり、割り型痕が底部縁周部と脇2カ所にみられる。口縁部にはネジヤマが作出されており、スクリー蓋であったと考えられる。胴部にはエンボスでヒゲタマークと「HIGETA」「ヒゲタしょうゆ」の文字がみられるほか、黄色で坊やモチーフとヒゲタマークがプリントされている。同様の柄のホーロー看板があることから、戦後のものと考えられる。

7) 植物質製品 (第 43 表、図版 48)

ここでは、木製品を除く植物質素材の製品を報告する。繊維製品 17 点、炭 10 点の計 27 点を取り上げ、うち 16 点を報告する。いずれも、図化が困難な遺存状態であるため、写真図版のみで報告する。



第 152 図 ガラス製品

第42表 ガラス製品観察表

標記 番号	写真 図説	出土地点	注記	器 種	遺存状態	寸法 (cm)			重量 (g)	備 考
						a	b	c		
152-1	47.1	354遺構	2572	瓶	高残欠	69	4.9	—	3.7	■着色
152-2	47.2	第1層	1区3729	瓶	底面欠	65	▲4.2	—	2.4	■着色、ぬじり
152-3	47.3	第1層	2区表土	瓶	完形	27	3.1	3.5	33.0	■着色透明 スクリュー蓋 小穴遺構の残存物
152-4	47.4	第1層	2区3729	瓶	完形	2.1	3.6	3.7	20.7	■着色透明 コルク栓 薄青色透明
152-5	47.5	7号遺構	717	瓶	完形	25	4.9	6.2	92.2	■着色透明 エポス目 (MARUZENS INK ATHENS INK) 底丸 マーク
152-6	47.6	第2遺構	1111	瓶	完形	5.9	6.3	3.1	90.4	■着色透明 スクリュー蓋 底コンボス (底面欠)
152-7	47.7	7号遺構	717	瓶	完形	2.2	10.5	—	43.5	■着色透明
—	47.8	第1層	1区3729	瓶	完形	1.6	4.4	12.7	95.0	■着色透明 スクリュー蓋 底コンボス (ヒタマーク/HICETA「ヒタタリ/しょう 目」蓋プリント「ヒタマーク」型やヒタマーク)

1は縦型のタワシである。棕櫚製であろう。径2.8cmほどの太さで、長さは6.3cmほど、先端は揃っている。棕櫚繊維を束ね、さらにひっくり返して逆方向へ向けた上で、再度束ねて作られている。束ねているのはやはり棕櫚製と思われる細縄である。2も棕櫚繊維を束ねたものである。径2.0cmほどの太さで穂先はあまり揃っていない。刷毛のようなものであろうか。中心に径0.2cmほどの竹串状の棒が折れて遺っている。3～13は縄である。単純に2～3束の繊維束を燃ったものがほとんどだが、8などは燃ったものをさらに2～3本燃り合わせて太い縄にしている。いずれも造園などで用いられる、いわゆる荒縄である。棕櫚製であろう。14、15は繊維束である。造園資材であろうか。

なお、池遺構の上層、93号遺構南側の土留板列、48号遺構・南1と南2の間で検出されたコモ状繊維については、面的に広がっていたこと、筵のように繊維が交差する部分があったこと、繊維の下に小砂利の混ざった粘土状の塊がまとまって見られたこと、さらにその下にも繊維が面的に広がっていたことから、吠を用いた土囊であったろうと考えられる。土から剥がして取り上げることが困難であったため、土ごとサンプルとして採取・保存した。

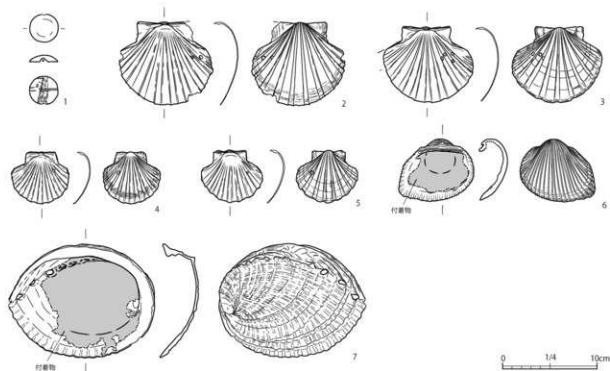
第43表 植物質製品観察表

写真 図説	出土地点	注記	器 種	遺存状態	寸法 (cm)			重量 (g)	備 考
					a	b	c		
48-1	第1層	2区表土	タワシ	完形	2.8	6.3	—	14.4	■観察
48-2	池遺構 1層	1114(2)	網子	網子欠	2.0	▲10.1	—	5.0	■観察
48-8	15号遺構	1127	縄	—	0.8	—	—	22.0	■観察
48-10	7号遺構	717	縄	—	0.6	—	—	0.8	■観察
48-11	池遺構 2層	4727	縄	—	0.6	—	—	12.1	■観察
48-3	池遺構 1層	4727上	縄	—	0.3	—	—	1.9	■観察
48-6	池遺構 1層	4727下	縄	—	0.3	—	—	13.8	■観察
48-7	池遺構 1層	4727下	縄	—	0.2	—	—	12.2	■観察
48-4	池遺構 1層	1114(2-3)	縄	—	0.2	—	—	10.0	■観察
48-9	池遺構 1層	1114(2)	縄	—	0.3	—	—	0.9	■観察
48-5	池遺構 1層	1114(4)	縄	—	0.3	—	—	11.0	■観察
48-12	93号遺構 上層	9329(西上)	縄	—	0.3	—	—	0.6	■観察
48-13	93号遺構	9329	縄	—	0.2	—	—	0.9	■観察
48-15	69・74号遺構	69・74(2)	繊維束	—	—	—	—	62.2	■観察
48-14	池遺構 下層	池遺	繊維束	—	—	—	—	23.5	■観察
—	6号遺構	617	縄	完形	1.7	7.4	—	12.3	—

8) 骨角貝製品 (第153図、第44表、図版48)

ボタン1点、貝柄杓4点、パレット2点の計7点が出土し、すべてを報告する。1は鹿角製のボタンである。ドーム状で、上面には光沢があり滑らかな手触りである。下面は概ね平坦だが、中心付近を縦断するように鹿角表面の凹凸が弱く残っている。また、中央には径2mmほどのトンネル状の糸通し孔がある。着色の痕跡はみられない。2～5はイタヤガイ製の貝柄杓である。イタヤガイは左右の殻の形状が非対称で、左殻が平たく、右殻に丸みがある。その右殻を利用して作られており、柄を装着するための孔はいずれも右寄りに穿たれている。2、3は幅75mm前後、着柄孔は2は2カ所、3は2孔1対が2カ所の計4カ所にみられる。4、5は幅50mm弱と小ぶりであり、いずれも径2mm程度の着柄孔が1カ所で、5の孔には角釘様の鉄製部品の破片が残存している。6、7は内面の広い

範囲に顕著な付着物がみられることから、パレットと考えられる。6はアカガイの左殻、7はアワビの殻を利用したものである。いずれも、内面のほぼ全面に付着物がみられる。漆もしくは膠の可能性があろう。



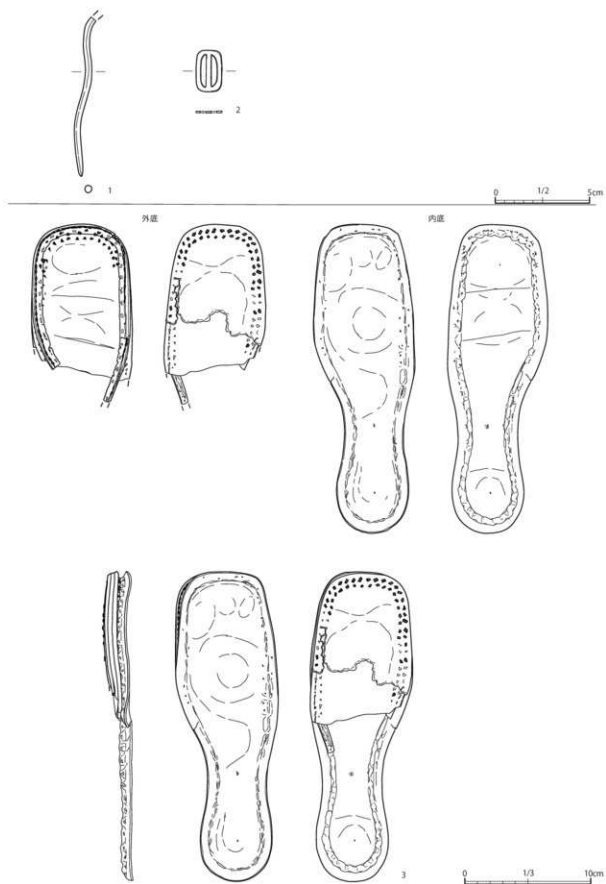
第153図 骨角貝製品

第44表 骨角貝製品観察表

調査番号	写真図版	出土地点	注記	種 類	遺存状態	寸法 (cm)			備考	
						a	b	c		
153.1	48.1	第4層	付13	ボタン	完全	3.0	0.7	—	5.3 骨角製	
153.2	48.2	海遺層 上層	991付	貝製の	完全	7.5	3.8	2.0	25.6	イタギガイ製
153.3	48.3	砂付遺層 下層	65付2の西下	貝製の	完全	7.2	6.0	1.8	23.7	イタギガイ製
153.4	48.4	新1層	1区5付10	貝製の	完全	4.5	4.1	1.4	10.9	イタギガイ製
153.5	48.5	新2・3層	56付9下	貝製の	完全	4.8	4.2	1.5	11.9	イタギガイ製
153.6	48.6	砂付遺層	90付遺層 90付10	パレット	完全	6.0	5.1	2.3	49.5	アカガイ製 内面に付着物 ありて製
153.7	48.7	海遺層 上層	付14.2.3	パレット	完全	11.7	9.2	3.0	157.0	内面に付着物

9) その他の素材の製品 (第154図、第45表、図版48)

皮革、ゴム、合成樹脂などの素材を用いた製品4点を報告する。1はセルロイド製と思われるヘアピンである。本来はU字状を呈するものだが、本資料はゆるく波打っており、屈曲部で破損してしまっている。2はバックルである。これもセルロイド製と思われる。留め金はなく、孔のない細身のベルトに装着し、長さ調整などを目的としたものと考えられる。3は革靴の底である。先端がスクエアなデザインで、3枚の革を合わせて縫い、外側から角釘様の釘を二重に巡らせて打った堅牢なつくりである。また、外側2枚と内側の1枚の間の縁辺部分は細い平紐状の革を挟むように縫製されている。長さ25.0cm、最大幅7.6cmである。4は、遺存状態が悪く、図化が困難であったため写真図版のみで報告する。底部分はゴム製であろうか、幾重にも重ねられた内底と爪先に少しだけ残る被甲部分は布製のようなのでスック靴と考えられる。長さ23.5cm、最大幅9.4cm。靴底の大きさはいずれも外法であることを考慮すると、内法は0.5～1cm程小さいと考えられる、3は微妙な大きさであるが4は女性用と考えてよいであろう。



第 154 図 その他の素材の製品

第45表 その他の素材の製品観察表

調査 番号	写真 図版	出土地点	注記	素材	産種	遺存状態	寸法 (mm)			備考	
							長さ	幅	厚		
154-1	48-1	37号遺構	354号	介殼類	ヘアピン	1点	9.4	8.4	—	1.0	中央ロイデ型か
154-2	48-2	4号	141号	介殼類	ハシケル	1点	2.0	1.9	0.1	—	中央ロイデ型か
154-3	48-3	37号遺構 土層	177号	ガラス	鏡	1枚	25.0	7.0	—	—	—
—	48-4	37号遺構木製棺	37号外壁	布など	襦袢	1枚-1点	23.5	9.4	—	1.42	—

10) 瓦 (第155～158図、第46表、図版49)

瓦当のあるものを中心に、遺存状態のよいもの、変わった形状のものなども含め203点を取り上げた。ほとんどが盛土や遺構覆土に含まれていたものであるが、24号遺構と82号遺構は瓦の破片を構築材として用いていたため、ある程度まとまった量を取り上げた。24号遺構は破片を敷き詰めた長方形の溝で建物基礎と考えられ、82号遺構は木製の拵形で、覆土中に幾重にも積まれた平瓦の破片と炭化材が検出された。

これらのうち、丸瓦26点、平瓦5点、棧瓦42点、平瓦もしくは棧瓦27点、蠟燭棧瓦3点、廻間瓦3点、棟瓦3点、鬼瓦6点の計115点を報告する。なお、軒平瓦・軒丸瓦瓦当の文様パターンについては加藤晃氏による論考(加藤1989)に則って分類する。

1～26は丸瓦で、うち21までは瓦当が遺存する。瓦当文様は、ほとんどが三つ巴の周りに連珠を配した連珠三つ巴文だが、1、4～7の5点は揚羽蝶紋である。三つ巴は19のみが左巻きで、他は右巻き、尾はいずれも長く引く。また、3、8、10、13、15、18、19には連珠との間に圏線が巡る。連珠の数は16珠が10点、14珠が4点、12珠が1点(推定含む)で、16珠が多い。22～26は胴から瓦尻にかけての破片で、瓦当の有無は不明である。24の背には、円枠に「一」の刻印がみられる。これらの丸瓦のうち、胴内面を観察できるものは11点、うち1、2、4、21、22、24～26の9点にはムシロ様の圧痕がみられ、2、21、22、25、26の5点には、さらに幅0.5cmほどの縦位の帯条痕がみられる。内型成形で、ムシロ様の繊維を離材とし、これを剥がす際の工具痕が帯条痕として残ったのであろう。一方、3には帯条痕のみがみられ、ムシロ様の圧痕はみられない。胴外面については、いずれの個体も丁寧に縦位のケズリを施して仕上げている。27～31は平瓦である。瓦当が遺存するものは31のみで、江戸式文様、中心飾りのみが二重線表現である。27には、円枠に「一」、28には円枠に「合」、29には「吉」の刻印がある。30は82号遺構出土で、9点の小破片が接合したものである。33は蠟燭棧瓦である。34も蠟燭棧瓦の可能性が高いが、玉縁の形状と左切れである点が典型的ではない。また、32は全体の形状が不明であるが、反りがなく平坦であることから、蠟燭棧瓦の可能性が高いと考えられよう。35～76は棧瓦で、35～49は小丸部から平部にかけて、50～76は小丸部のみが遺存している。77～103は軒平部周辺のみ破片で、軒平瓦か軒棧瓦かの判別が難しい。棧瓦は基本的に右切れなので、左端部が切れている85～90は平瓦である可能性が高いと言えるが、80～84は右端部が切れている破片、77～79、91～103は端部のない破片なので、いずれとも言い難い。瓦当文様については、小丸部は三つ巴文24点、連珠三つ巴文13点、無文1点。三つ巴は連珠三つ巴も含めた38例中36例が右巻きで、右巻きが圧倒的に多い。連珠三つ巴の連珠の数は8珠3点、9珠4点、10珠3点、12珠1点、15珠1点、不明1点と、特に大きな傾向はみられない。平部は、35、38が大坂式文様、79が東海式文様で、その他はいずれも江戸式文様である。中心飾り・唐草・子葉のいずれもが二重線で表現される古手のものからすべてが肥大化した太線表現のものまで様々な組み合わせのものが認められる。なお、46には長方形枠に「鬼平」、79には円枠に「一」の刻印がみられる。

104～106、112は奇棟屋根の隅に用いる廻隅瓦である。104は小丸部が12珠の連珠右巻き三つ巴文、平部が江戸式文様である。107～109は棟瓦で、いずれも比較的平たい形状の伏間瓦であろう。110、111、113～115は鬼瓦の小破片であろう。いずれも、小破片すぎて、全体のモチーフがイメージできないが、114は鬼の口元、115は鬼の髭もしくは髪を表現したものであろう。

■構築材として用いられた瓦の特徴

24号遺構には大量の破片が敷きこまれていたため、瓦当のあるものを中心に、12点をサンプルとして取り上げた。1、4～7、22、23が丸瓦、27が平瓦、77、78、94、97については平瓦か棧瓦か判断がつかない。丸瓦の瓦当はすべて揚羽蝶紋である。また、平瓦か棧瓦か判断のつかないものも含め、平部瓦当の文様はすべて二重線表現の江戸式文様なので、これらは古手の時期のものと考えられる。この時期は、棧瓦がほとんど見られない時期に当たるので、形状からは平瓦か棧瓦か判断できないものの、平瓦である可能性が高い。種類にかかわらず赤化しているものが多く、被熱したと考えられる。

82号遺構からは82点の平瓦小破片が出土しており、10個体の接合資料と13点の小破片に収斂する。出土状態をみると、埋没後に割れたと思われる状況が複数カ所に見られることから、完形の平瓦と小破片を取り混ぜて積んだものと思われる。覆土は灰層ではなく、焼土を主体としていたこと、瓦積みの上には炭化材が乗っていたことなどを考え合わせると、瓦片が桁の枠や底の材を被熱から遠ざける役割りを果たしていたものと考えられる。

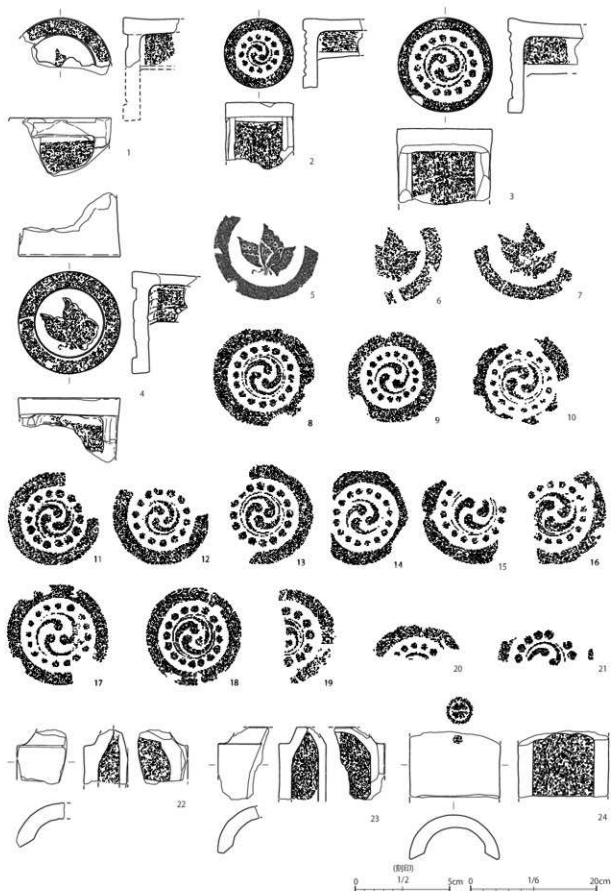
11) 煉瓦 (第159～164図、表47・48、図版50～56)

遺構の構築材として用いられているもの145点について、属性の観察と記録を行った上で胎土分析用サンプルを採取した。また、そのうちの代表的なもの38点については個体ごと保存することとした。

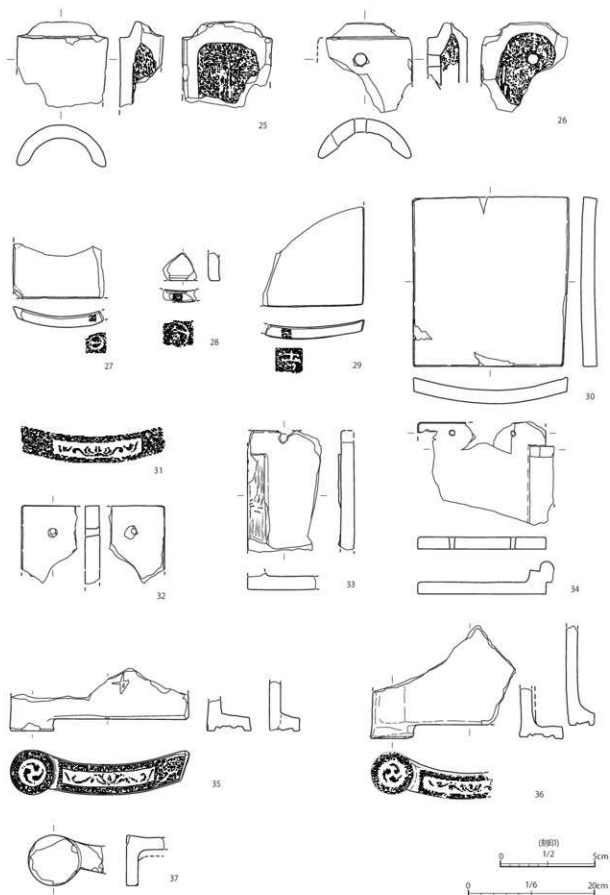
35号遺構(煉瓦製建物基礎)については、現場段階で既に東京府立第一高等女学校(白鷗高校の前身)の講堂基礎であることが判明しており、種類や積み方も含めた施工状況に顕著な特徴が認められたため、可能な限り詳細に調査を行った。調査を進める中で、①確認初段は外側面に露出する部分が黒く焼き締まった特徴的な煉瓦を中心に構成されていること、②次段内側には初段とは異なる種類の煉瓦が利用されていること、③次々段以下および南辺についてはさらにまた異なる種類の煉瓦が主体となっていることが看取されたため、各段各種類について、ある程度まとまった数の個体を取り上げることとした。また、平手面が露出している初段については、刻印の見られるものすべてを取り上げるとともに、「イ」「ロ」「ハ」などの炭書きが見られるものも適宜取り上げることとした。このようにして取り上げた80個体については、位置情報の詳細な三次元記録を行い(159図)、上記の資料群を補完するような特徴を持った資料29点を35号遺構一括資料として取り上げた。その結果、35号遺構については計109点のサンプルを採取することとなった。

観察項目は、成形痕、形状、器表の状態、法量(長手、小口、厚さ)、重さ、胎土(色調、特徴)、刻印(種類、大きさ、位置)、炭書(文字、位置)で、大別8項目、細別14項目である。また、観察から導き出された胎土の種類、総合的な類型も記載した。

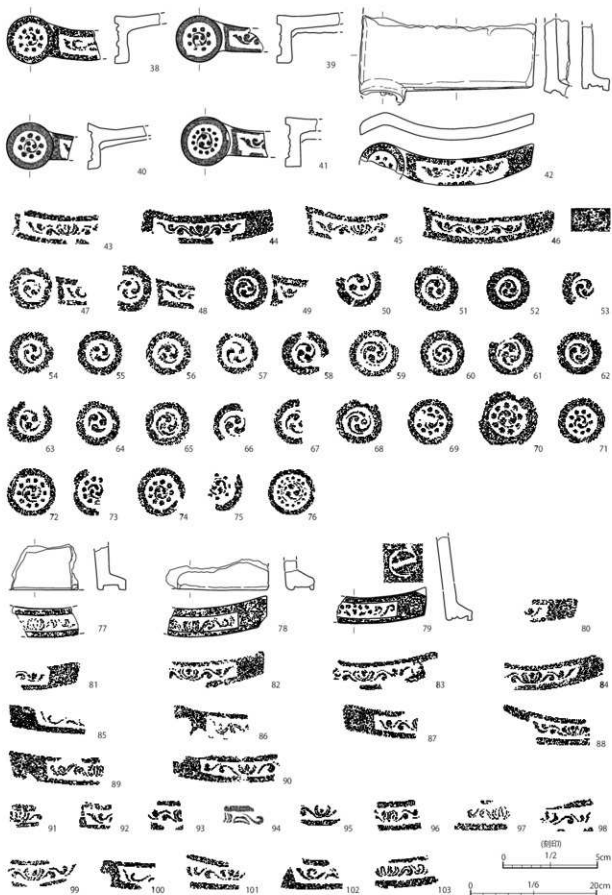
以下、各観察項目について説明を加える。刻印の大きさは、円枠のものについて、その大きさと歪み具合を検討するために計測したもので、枠内の文字を正置して縦×横(幅)を測ったものである。



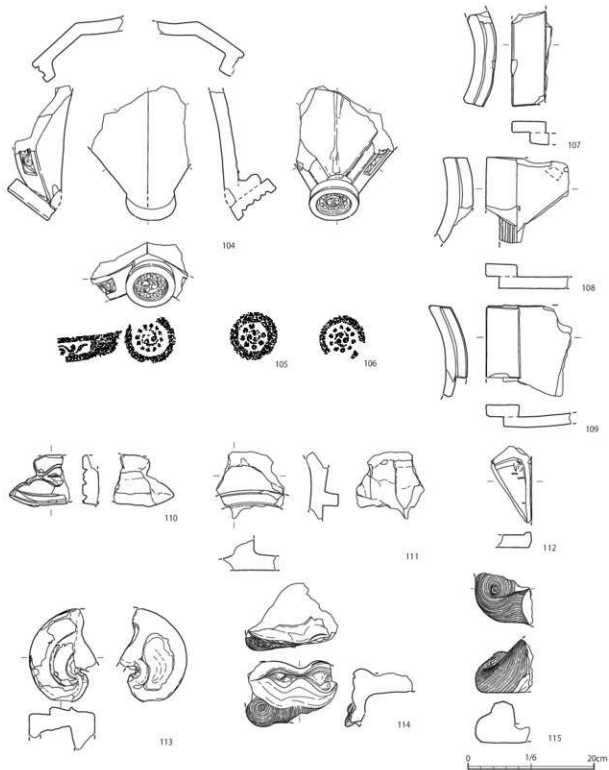
第155図 瓦 (1)



第156图 瓦(2)



第157図 瓦(3)



第158图 瓦(4)

第46表 互視察表

調査 番号	写真 図面	出土地点	注記	種類	調査状態	距離 (cm)											備考		
						A	B	C	D	a	b	c	d	e	f				
155-1	49-1	24号遺構	24㌦	軒丸	瓦当付道	▲14.6	▲9.0	2.2		7.9	2.6	0.8					525.0	須賀院蔵 堀内庭土少シ破瓦前+礎石 礎石 右二ツ巴2段	
155-2	49-2	第1層	掘区	軒丸	瓦当付道	11.1	▲9.7	1.8	11.1							7.1	813.4	堀内庭土少シ破瓦前+礎石 礎石	
155-3	49-3	93号遺構 上層	93㌦の南西上	軒丸	瓦当付道	14.9	▲12.3	2.4	15.3	2.1	3.0						1270.7	右二ツ巴10段 掘区南西遺構	
155-4	49-4	24号遺構	24㌦	軒丸	瓦当付道	16.2	▲10.3	1.7	16.2	2.6	0.7						951.5	右二ツ巴10段 須賀院蔵	
155-5	—	24号遺構	24㌦	軒丸	瓦当のみ 2㌦	16.5	▲2.7	▲—	16.5	2.8	0.6						586.6	須賀院蔵 礎石 須賀院蔵	
155-6	—	24号遺構	24㌦	軒丸	瓦当のみ 1㌦	▲11.6	▲5.5	▲2.1	▲13.7	2.6	0.7						450.6	須賀院蔵 礎石 須賀院蔵	
155-7	—	24号遺構	24㌦	軒丸	瓦当のみ 1㌦	△16.3	▲2.8	▲—	▲13.3	▲2.5	0.7						516.8	須賀院蔵 礎石 須賀院蔵	
155-8	—	池遺構 下層	池	軒丸	瓦当のみ	16.2	▲3.2	▲2.4	16.2	2.8	0.8						724.4	右二ツ巴10段 掘区あり 礎石	
155-9	—	池遺構 上層	池土4層4	軒丸	瓦当のみ	14.7	▲3.8	2.2	14.6	2.5	0.5						603.3	右二ツ巴10段 礎石	
155-10	—	第2-1・3層+第3層	軒上2	軒丸	瓦当のみ	15.5	▲5.2	2.3	15.0	▲2.3	▲0.7						876.3	右二ツ巴10段 礎石	
155-11	—	6号遺構	6㌦	軒丸	瓦当のみ	▲12.5	▲4.1	2.4	14.3	2.4	0.5						553.9	右二ツ巴14段 礎石	
155-12	—	17号遺構	17㌦	軒丸	瓦当のみ	▲12.8	▲3.6	2.5	▲12.5	2.3	0.4						499.7	右二ツ巴14段 礎石	
155-13	—	93号遺構 下層	93㌦の南東下	軒丸	瓦当のみ	▲14.4	▲2.6	▲1.6	15.8	2.3	0.6						502.5	右二ツ巴10段 掘区あり 礎石	
155-14	—	池遺構 下層	池西	軒丸	瓦当のみ	▲12.7	▲3.1	▲2.6	▲15.0	▲2.6	▲0.5						573.7	右二ツ巴10段 礎石	
155-15	—	93号遺構 上層	93㌦の南東上	軒丸	瓦当のみ 2㌦	▲11.7	▲2.1	▲—	▲13.3	▲—	▲—						418.0	右二ツ巴10段 掘区あり 礎石	
155-16	—	池遺構 下層	池北2㌦4	軒丸	瓦当のみ 2㌦	▲12.4	▲2.6	▲—	▲13.0	▲—	▲—						495.0	右二ツ巴10段 掘区あり 礎石	
155-17	—	33号遺構	33段K33の遺構	軒丸	瓦当のみ	15.7	4.1	2.8	16.0	2.3	0.8						619.9	右二ツ巴10段 礎石	
155-18	—	池遺構 上層	61㌦	軒丸	瓦当のみ	15.5	▲3.6	▲2.1	15.7	2.3	0.7						632.1	右二ツ巴10段 掘区あり 礎石	
155-19	—	池遺構 上層	91㌦	軒丸	瓦当のみ 1㌦	▲8.0	▲3.4	▲2.4	15.0	2.3	0.8						451.0	右二ツ巴14段 掘区あり 礎石	
155-20	—	37号遺構	37㌦	軒丸	瓦当のみ 1㌦	▲13.0	▲3.2	▲2.5	▲10.0	2.3	0.6						240.8	中央穴16層 掘区あり 礎石	
155-21	—	池遺構 上層	47㌦下	軒丸	瓦当のみ 1㌦	▲8.6	▲14.5	2.1	▲10.2	2.6	▲0.2						612.6	右二ツ巴10段 掘区あり 堀内庭土少シ破瓦前+礎石 礎石	
155-22	49-5	24号遺構	24㌦	丸	瓦当付道	▲7.7	▲8.6	2.4								4.7	270.7	堀内庭土少シ破瓦前+礎石 礎石	
155-23	49-6	24号遺構	24㌦	丸	瓦当付道	▲7.4	▲11.5	2.1								4.5	256.9	堀内庭土少シ破瓦前+礎石 礎石	
155-24	49-7	池遺構 上層	51㌦	丸	欄のみ	14.5	▲10.3	2.3									576.0	堀内庭土少シ破瓦前+礎石 礎石	
155-25	49-8	池遺構 上層	47㌦	丸	瓦当付道	14.4	▲13.6	2.0							3.6		611.5	堀内庭土少シ破瓦前+礎石 礎石	
155-26	49-9	93号遺構 上層	93㌦の南西上	丸	瓦当付道	▲13.8	▲14.2	2.2							3.8		448.9	堀内庭土少シ破瓦前+礎石 礎石	
156-27	49-10	24号遺構	24㌦	平	土層	▲14.3	▲5.7	1.7	▲14.0								270.5	堀内庭土少シ破瓦前+礎石 礎石	
156-28	49-11	第1層	11㌦K1残存	平	土層	▲5.2	▲4.8	1.8									28.7	堀内庭土少シ破瓦前+礎石 礎石	
156-29	49-12	17号遺構	17㌦	平	土層	▲16.0	▲13.9	1.9									494.5	堀内庭土少シ破瓦前+礎石 礎石	
156-30	49-13	92号遺構	92㌦	平	土層	24.1	26.9	2.2	2.5								2136.4	堀内庭土少シ破瓦前+礎石 礎石	
156-31	—	75号遺構	75㌦	軒平	瓦当のみ	▲24.0	▲11.3	2.1	4.4						2.1		956.0	江戸式文様 1段 2段	
156-32	49-14	第1層	11㌦東1層	軒瓦残存	1.6	▲12.4	▲9.9	2.3									292.7	掘区あり 礎石	
156-33	—	33号遺構	33㌦	軒瓦残存	江戸式	▲10.3	▲19.3	2.2	11.6								634.9	掘区あり 礎石	
156-34	49-15	第1層	11㌦上1	軒瓦残存	2㌦	▲21.6	▲16.8	1.9									841.6	堀内庭土少シ破瓦前+礎石 礎石	
156-35	49-16	26号遺構	26㌦	軒瓦	瓦当付道	28.3	▲9.3	1.8	7.0	0.5				2.5		701.2	右二ツ巴12段 大瓦式文様 大瓦		
156-36	49-17	池遺構 上層	池土4層3	軒瓦	瓦当付道	▲23.0	▲17.8	1.8	6.7							2.1	827.4	右二ツ巴 江戸式文様 目 目	
156-37	49-18	35号遺構	35㌦掘土下	軒瓦	瓦当付道 1㌦	▲11.7	▲7.4	1.7	8.9							▲	314.4	右二ツ巴10段 礎石	
157-38	49-19	池遺構 上層	47㌦下	軒瓦	瓦当付道	▲14.8	▲9.4	1.9	7.5					5.2		480.4	右二ツ巴9段 大瓦式文様 大瓦		
157-39	49-20	第2-2層	35㌦外壁	軒瓦	瓦当付道 1㌦	▲14.3	▲15.6	1.9	7.3					4.9		528.6	右二ツ巴9段 江戸式文様 大瓦		
157-40	49-22	池遺構 上層	池土4層1	軒瓦	瓦当付道 1㌦	▲11.9	▲10.4	1.7	7.3					4.6		365.7	右二ツ巴9段 江戸式文様 大瓦		
157-41	49-23	池遺構 上層	池土4層2	軒瓦	瓦当付道 1㌦	▲15.0	▲9.1	1.9	7.8					5.2		361.7	右二ツ巴12段 江戸式文様 大瓦		
157-42	49-21	35号遺構	35㌦中壁	軒瓦	瓦当付道	27.7	▲12.3	1.6	▲4.0							2.1	860.0	右二ツ巴9段 江戸式文様 大瓦	
157-43	—	池遺構 上層	池土4層4	軒瓦	平瓦瓦当のみ 2㌦	▲16.1	▲6.4	1.6	4.2							2.2	286.1	江戸式文様 1段	
157-44	—	池遺構 上層	池土4層4	軒瓦	平瓦瓦当のみ 2㌦	▲22.0	▲10.3	1.6	4.4							2.4	569.4	江戸式文様 1段	
157-45	—	池遺構 上層	池土4層3	軒瓦	平瓦瓦当のみ 2㌦	▲15.5	▲8.1	1.6	4.3							2.2	352.1	江戸式文様 1段	
157-46	—	17号遺構	17㌦	軒瓦	平瓦瓦当のみ	28.2	▲22.0	2.1	4.3					1.9		1836.4	江戸式文様 目 目		
157-47	49-24	6号遺構	6㌦	軒瓦	瓦当のみ 1㌦	▲12.5	▲5.9	1.9	7.7							4.2	306.2	右二ツ巴10段 礎石	
157-48	49-25	池遺構 上層	池土4層0	軒瓦	瓦当のみ 1㌦	▲14.1	▲5.4	▲—	7.4								4.5	275.2	右二ツ巴 江戸式文様 大瓦 大瓦
157-49	49-26	池遺構 上層	47㌦下	軒瓦	瓦当のみ 1㌦	▲14.9	▲5.7	1.7	7.2							4.1	327.7	右二ツ巴 江戸式文様 大瓦 大瓦	
157-50	—	6号遺構	6㌦	軒瓦	小瓦瓦当のみ	▲11.7	▲6.8	2.0	7.6							2.7	253.3	右二ツ巴 礎石	
157-51	—	37号遺構	37㌦	軒瓦	瓦当のみ	7.4	▲8.2	2.0	7.3								118.0	右二ツ巴 礎石	

成形痕については、一定幅のパターンを持った帯条痕を「板目」、縮れたような粘土の皺を「チヂレ目」とした。胎土については、肉眼観察とともにデジタル実態顕微鏡による24倍拡大写真を用いて観察を行った。観察表の胎土欄、色調および特徴欄は上段が肉眼、下段が拡大写真による観察結果を記したものである。「白」は白色鉱物粒子、「黒」は黒色鉱物粒子、「隙」は細かい気泡、「縮」は縮状のムラを示し、×・△・○・◎で視認程度を示した。さらに「ざりざり」「ガサガサ」は手触りで、前者は粘土粒子が粒立って硬く角の立った手触り、後者は触ると容易に粘土粒子が脱落するような脆い手触りを表す。また、成形痕やディテールの形状、調整痕などから総合的な類型分けを行った。なお、35号遺構を中心に、特定の面を細かく打ち欠いて整え（便宜的に「ハツリ」と表現する）、サイズダウンしたと考えられる個体はかなり多くみられた。本稿では、この「ハツリ」をサイズ調整を目指した意図的な加工と捉え、ハツリ個体を元々の製品からすると完形ではないが破損品ではないという意味で「準完形」とした（観察表の法量欄で太字表記した値はハツリ後の数値）。

■総合的な類型

成形痕、形状、器表状態を中心に、細かい器形のディテールを併せ検討し、a～cの3類型を抽出した。各類型は、a：堅く、よく焼き締まっており、平手面に板目がみられ、片小口もしくは片長手に焼成による黒変とにふいつやがみられる。縁辺のエッジはやや鈍く、全体の形状としては端正さに欠ける（77点）。b：平手面に板目がみられる。縁辺はエッジが立っており、端正な直方体。全面が同じような色味に焼成されている（7点）。c：焼成がやや脆く、平手面にチヂレ目が見られる。縁辺のエッジは鈍く、つくりが雑な印象である（30点）。である。a類型については、胎土に縮状のムラが見られるものも多く、小口、長手面の孕みや傾斜などの歪み、積み痕と思われる変形や焼ムラがあるものが一定量あり、円枠に「サ」もしくは「さ」の刻印（大・中・小・極小の4サイズ）を持つものが多い。また、黒変のある面に直交する側面（黒変が小口面なら長手面、黒変が長手面なら小口面）にハツリがみられるものが多い。

■類型別の大きさについて

完形・準完形のを対象に、上記の類型別に法量を検討した。

a類型完形のもの15点、長手平均が22.12cm、小口平均が10.33cm、厚さ平均が5.62cmで、それぞれの標準偏差は0.46、0.31、0.15である。準完形で長手にハツリのあるもの（小口が短くなるように調整されている）は、長手平均が22.14cm、小口平均が9.68cm、厚さ平均が5.73cm、それぞれの標準偏差は0.46、0.24、0.25である。準完形で小口にハツリのあるもの（長手が短くなるように調整されている）は、長手平均が20.26cm、小口平均が10.60cm、厚さ平均が5.66cmで、それぞれの標準偏差は0.69、0.28、0.20である。即ち、a類型のものは完形品が22.1×10.3×5.7cm程度で、準完形のもの長手0.7cm、小口1.9cm程度がそれぞれハツリによって短く調整されていることになる。また、標準偏差を見ると、長手については小口ハツリの準完形が、他の小口に手を加えていないもの（完形0.46、長手ハツリ準完形0.46）に比して、0.69とばらつきが大きく、小口については長手ハツリの準完形が、他の長手に手を加えていないもの（完形0.31、小口ハツリ準完形0.28）に比して、0.21とばらつきが小さいことがわかる。これは、長手ハツリ後の小口の長さがハツリ前より揃っており、反対に、小口ハツリ後の長手の長さはハツリ前より揃っていないということであり、ハツリ作業に際して、長手と小口では精度に差があったことを示している。その要因につい

ては、今のところ不明である。また、以上はあくまでも単純な数値上の話なので、これらの数値が実態をある程度反映しているのかも含めて、より具体的な検討が必要であろう。

b 類型は 7 点すべてが完形、長手平均が 22.35cm、小口平均が 10.55cm、厚さ平均が 5.80cmで、それぞれの標準偏差は 0.29、0.08、0.00 である。長手、小口、厚さいずれにおいても、標準偏差が非常に小さく、全体的に整っていて斉性が高いことがわかる。

c 類型は 30 点、遺存部位が小さく分析に適さない 2 点を除いて検討した。長手平均は 22.34cm、小口平均は 10.56cm、厚さ平均は 5.67cmで、それぞれの標準偏差は 0.42、0.27、0.21 であった。

3 類型を比較すると、b、c 類型は概ね $22.3 \sim 4 \times 10.6 \times 5.7 \sim 8$ cmで、いずれの辺も a 類型の完形品に比して 2mmほど大きいことがわかる。標準偏差については、b 類型において格段に小さい点が類型分けの要件でもある端正な印象に合致する一方、a 類型完形品と c 類型はほとんど変わらず、c 類型の方が a 類型よりつくりが雑な印象とは合致しないことがわかった。「つくりが雑な印象」は単に大きさが揃っているということだけではない、細部のディテールにも起因しているのであろうか。今後も検討を続けたい。

■胎土の観察と類型化について

通常の内眼観察だけでは、個体間の類似性を端的に把握し難いと考え、デジタル実態顕微鏡による拡大写真を併用して類型化を試みた。内眼観察では、土色帳（主に 2.5YR）と直接比較した色調、鉱物粒子の色や大きさ、縞状の色ムラ、手触りなど、各個体の目立った特徴を抽出して記述した。一方、拡大写真については、第一印象における視覚的特徴によって類型分けし、粘土粒子の粗さ、鉱物粒子の種類（白、黒）と量、細かい気泡（隙）の有無、縞状の色ムラについても観察した。認識できた類型は、「縞」「粗」「細」「砂」の 4 類型（縞：最も大きな特徴は縞状の色ムラがある点である。中小の白色鉱物粒子が目立ち、細かい気泡がしばしば見られる。粗：粘土粒子が粗く、中～大の白色鉱物粒子を多く含む。細：粘土粒子が細かく、白色鉱物粒子は少なく、小さい。細かい気泡もほとんど見られない。砂：粘土粒子は比較的細かく砂っぽい。中小の白色鉱物粒子が満遍なくかなりの量見られる。）で、各類型の名称には最も特徴的な点を表す語を用いた。また、これらの類型に当てはまらないものは類型外とした。こうしてグルーピングした視覚的類型と胎土分析によるグルーピングが整合するようであれば、いずれ、全資料を分析せずとも、類型毎の選択的な分析で大方の資料をグルーピングすることが可能になるであろう。

また、内眼観察と拡大写真、それぞれの方法で得られた情報を併せ検討した結果、拡大写真を並べて比較することで、鉱物粒子の種類や大きさ、分布状態といったマトリックスの類似性を把握することが容易になることが確認できた。しかし、一方で、拡大写真はカバーする範囲が小さいため、縞状の色ムラのような局所的な特徴は、全体を見渡せる内眼観察でしか確認できない場合があること、内眼観察、拡大写真いずれによっても、黒色鉱物粒子と細かい気泡のように形状や色調の類似するものは判別が難しく、色調のはっきりしない鉱物粒子は視認が難しいこともわかった。従って、当面は注意深く両者を併用しながら、胎土に関する記載と類型化にあたってゆくことが必要であろう。なお、「ざりざり」「ガサガサ」といった手触りについては、粘土粒子や鉱物粒子の粗さや種類、多寡などと特に相関はないようであったが、焼成具合など、他の要素に関連性がある可能性も見据え、今後も注目して情報を集積してゆきたい。

■刻印の種類について（第 164 図）

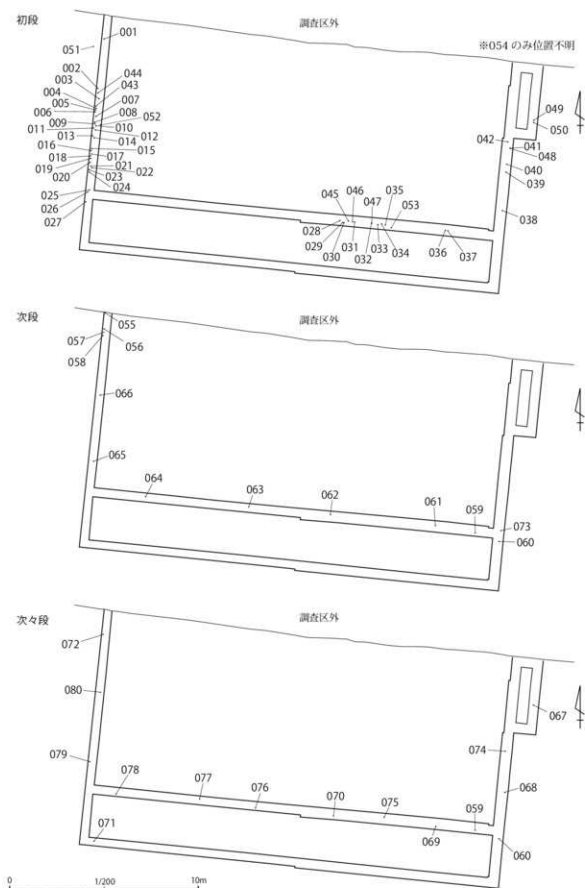
145 点中刻印のあるものは 98 点、主な刻印の印影を図にあげた。ほとんどが「サ」「さ」に類するもので、内訳は大円枠「サ」（径 2.5cm 程度）が 29 点、中円枠「さ」（径 2.0cm 程度）が 2 点、小円枠「サ」（径 1.5cm 程度）が 26 点、小円枠「さ」（径 1.5cm 程度）が 1 点、極小円枠「さ」（径 1.0cm 程度）が 3 点である。その他、円枠「吉」（板目 / 1 点）、円枠「千」（1 点）、角枠「千葉本家」（板目 / 2 点）、菱十字+「二」「〇」（板目 / 1 点）、「◇」（板目 / 1 点）、扇形枠（板目カ / 1 点）、「□」（チヂレ目 / 2 点）、楕円枠（チヂレ目 / 3 点）、輪違+?（チヂレ目 / 1 点）、「ス」カ（チヂレ目 / 1 点）、「ク」カ（チヂレ目 / 1 点）、「フ」カ（チヂレ目 / 1 点）が確認され、印影がはっきりしないため不詳のもの（板目 / 1 点）もあった。「サ」「さ」に類する刻印は、煉瓦研究ネットワーク関東による清泉女子大学事務棟の調査でも、大円枠「サ」、小円枠「サ」、小円枠「さ」の 3 種が確認されており、足立区鹿浜で作業していた斎藤煉瓦工場のものであるとされているが（1992 足立区）、同報告でも触れられているように、足立区から北区にかけての荒川沿いには斎藤姓の煉瓦製造者が複数確認されること、そもそも「サ」「さ」は「斎藤」を示しているのではなく「佐藤」など、他の「さ」を頭文字を持つ生産者を示す可能性もあることを併せ考えると、胎土分析の結果なども踏まえて慎重に考えてゆく必要があろう。同地域には、千葉姓の煉瓦製造者も複数確認されることから、円枠「千」と角枠「千葉本家」の刻印はそれらの製造者のものである可能性が、輪違に付属印（不詳）の見られる刻印については、葛飾区金町で作業していた金町煉瓦製造所のものである可能性が指摘できるが、いずれについても断定することはできない。

なお、140～145 については破片資料のため刻印の有無を確認することができず不明とした。

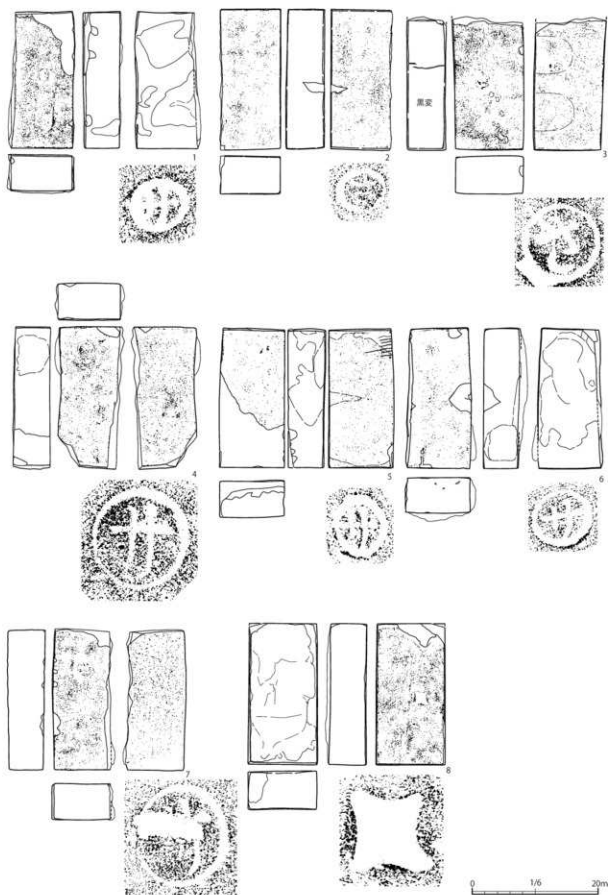
■刻印の歪みと押印の作業方向について（第 48 表）

刻印の中でも、特に円枠を用いるタイプのものについて、枠と文字が共につぶれて楕円形に変形し、枠の際に粘土が押されて盛り上がったような痕跡が見られるものが多く確認された。そこで、円枠のものについては、歪み具合を検査するために枠の縦横を計測した。円枠のものは全部で 63 点、内訳は、大円枠「サ」29 点、中円枠「さ」2 点、小円枠「サ」26 点、小円枠「さ」1 点、極小円枠「さ」3 点、円枠「吉」1 点、円枠「千」1 点である。うち、破損などによって刻印の縦横を計測できなかった 5 点を除いた 58 点のうち、歪みがなく縦横の長さが等しいものは 13 点で、それ以外の 45 点には、歪みがあることが分かった。次に、歪みのあるものについて、文字を正置した場合、縦横どちらの方向に歪みが生じているのかを検討した。縦が長く横が短い楕円形に変形しているのであれば縦歪み、逆に横が長く縦が短い楕円形に変形しているのであれば横歪み、斜め方向に変形しているのであれば斜歪みとしたところ、縦歪みが 23 点、横歪みが 21 点、斜歪みが 1 点であった。これを刻印種類別に見ると、大円枠「サ」の検討可能個体 26 点中、歪みなしが 5 点、縦歪みが 20 点、横歪みが 1 点、中円枠「さ」2 点中、歪みなしと縦歪みが各 1 点、小円枠「サ」の検討可能個体 24 点中、歪みなしが 4 点、縦歪みが 1 点、横歪みが 18 点、斜歪みが 1 点、小円枠「さ」1 点は歪みなし、極小円枠「さ」3 点中、歪みなしが 2 点、横歪みが 2 点、円枠「吉」は縦歪み、円枠「千」は歪みなしである。総じてみれば、大円枠「サ」は、ほとんどが縦歪みもしくは歪みなしで、横歪みのものはほとんどなく、小円枠「サ」は、ほとんどが横歪みもしくは歪みなしで、縦歪みのものはほとんどないということが言えよう。こういった歪みがどのようにして生じるかを推測すると、刻印の印体を真上から推す

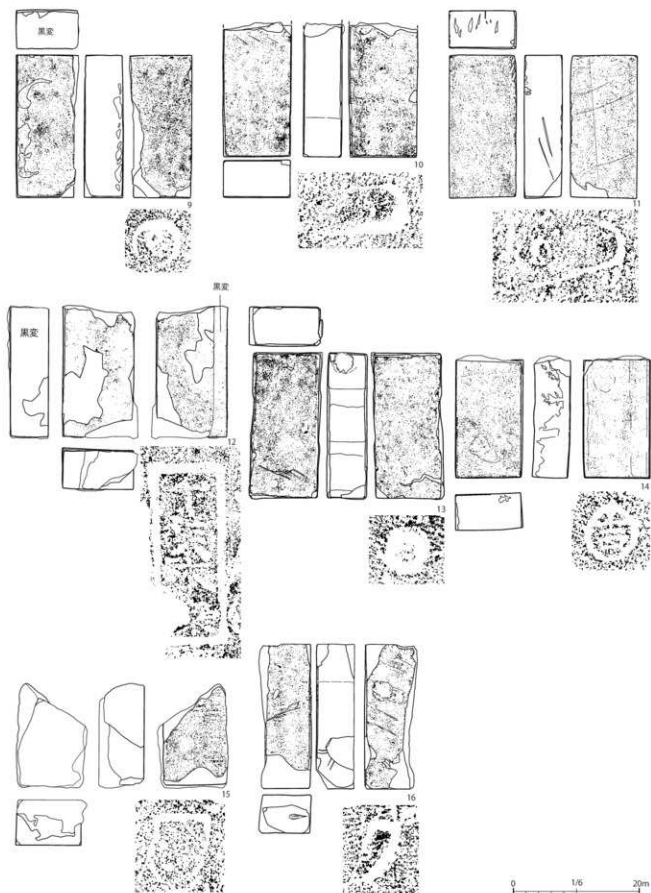
のではなく、上から下（もしくは下から上）というように縦方向に動かしながら打つと縦歪みが、右から左（もしくは左から右）というように動かしながら打つと横歪みが生じると考えられるので、刻印種類によって歪み方向が異なるということは、工具に対する扱い方が異なる集団がそれぞれの刻印を用いていたことを示唆しているのではないだろうかと考えた。そこで、この点をさらに検討するために、刻印が煉瓦の軸に対してどのような方向で押されているかを確認した。刻印文字の縦軸が煉瓦の長手方向と一致する場合は長手軸、小口方向と一致する場合は小口軸とし、それぞれの軸から右方向にやや振れている場合は「+」、左方向にやや振れている場合は「-」を付して記載した。その結果、縦歪みの刻印 23 点中、長手軸押印は 21 点、小口軸押印のものは 2 点に過ぎず、横歪み刻印 21 点中、小口軸押印のものが 20 点、長手軸押印のものは 1 点に過ぎないことがわかった。つまり縦歪み刻印は、長手を縦にして置いた煉瓦に、印体を縦方向に動かしながら打刻されたと考えられ、ヒトの身体構造（特に体幹と腕）にとって最も合理的な動作を想定すると、打刻者は並べられた煉瓦の長手方向に沿って煉瓦列の脇を縦に移動しながら打刻を行ったと考えられるのである。同様に、横歪み刻印は、小口を縦にして置いた煉瓦に、印体を横方向に動かしながら打刻されたと考えられ、打刻者は並べられた煉瓦の長手方向に沿って煉瓦列の脇を横に移動しながら打刻を行ったと考えられるのである。こういった、作業動作は、個々の作業場の広さやレイアウトなどに影響を受けていると考えられるだけでなく、作業集団ごとに工具の種類や形状とともに継承されていく可能性もあり、大円杵「サ」の刻印を用いる集団と小円杵「さ」の刻印を用いる集団は、異なる集団であった可能性が指摘できる。そういった意味では、大円杵「サ」と同様、縦方向長手軸の歪みが見られる中円杵「さ」の刻印を用いる集団は、大円杵「サ」の刻印を用いる集団と類縁性がある可能性があり、小円杵「サ」と同様、横方向小口軸の歪みが見られる極小円杵「さ」の刻印を用いる集団は、小円杵「サ」の刻印を用いる集団と類縁性がある可能性がある。



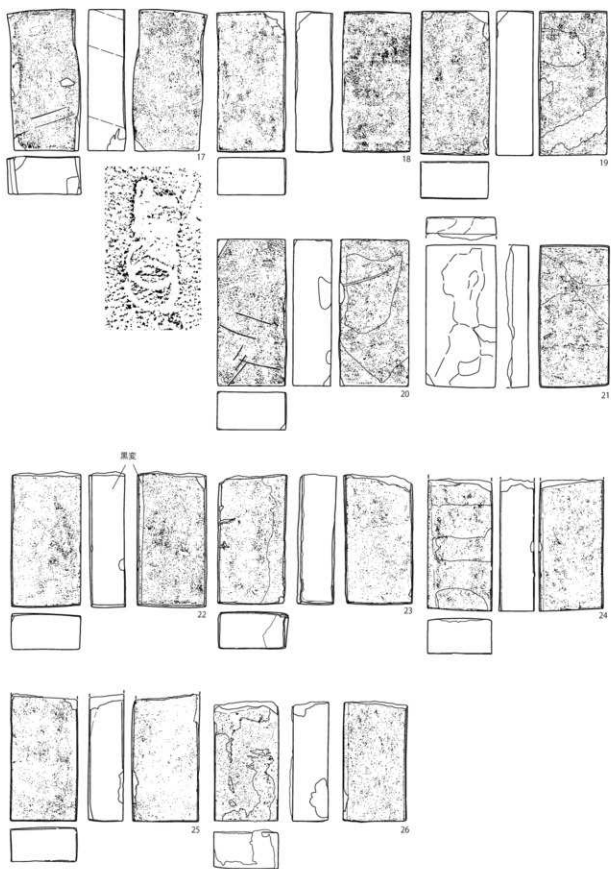
第159図 煉瓦サンプル採取位置



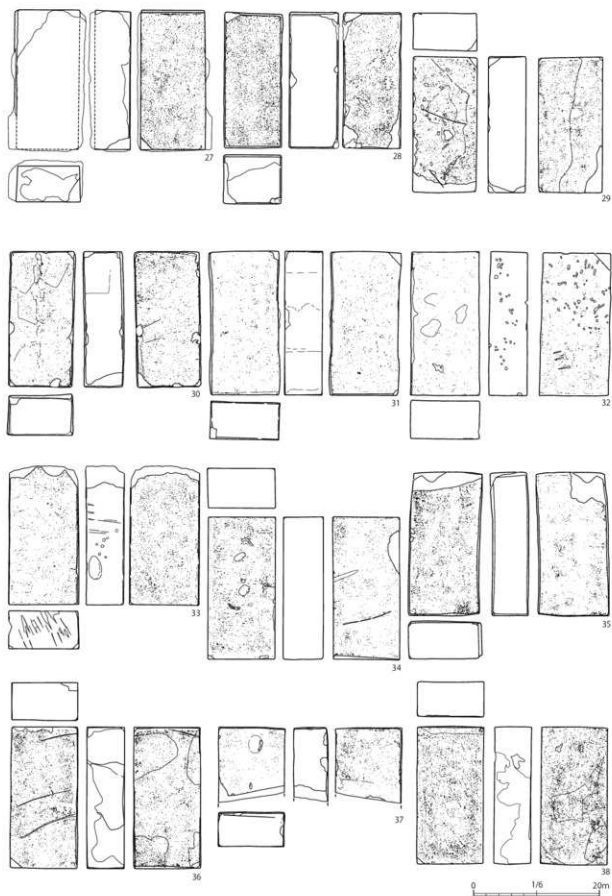
第160图 煉瓦(1)



第161図 煉瓦(2)



第 162 図 煉瓦 (3)



第 163 図 煉瓦 (4)



1. 001 35号遺構
○サ 小円枠



2. 017 35号遺構
○さ 小円枠



3. 027 35号遺構
○サ 中円枠 (傷あり)



4. 041 35号遺構
○サ 大円枠



5. 046 35号遺構
○サ 小円枠 (歪み)



6. 048 35号遺構
○サ 小円枠 (歪み)



7. 051 35号遺構
◇



8. 053 35号遺構
○さ 極小円枠



9. 057 35号遺構
○サ 小円枠



10. 058 35号遺構
○サ 大円枠



11. 072 35号遺構
楕円枠



12. 075 35号遺構
(不詳)



13. 078 35号遺構
楕円枠



14. 084 35号遺構
角枠「千葉本家」



15. 086 35号遺構
○さ 中円枠



16. 087 35号遺構
□ (片側に印体縁)



17. 088 35号遺構
□ (片側に印体縁)



18. 089 35号遺構
(不詳)



19. 093 35号遺構
○吉



20. 103 8号遺構
「ク」力



21. 107 10号遺構
扇型枠力



22. 129 42号遺構
菱十字+「二」 □



23. 136 56号遺構
輪連+7

第164図 刻印の種類

第47表 得五副表表

資料番号 番号	標記	出土位置		位置 距離	位置 距離	形状	構成の土質	重量		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	色澤 (JIS)	土質	製造時期	年代	出土層	位置	面積	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	色澤 (JIS)	土質	製造時期	年代	出土層	位置	面積
		長さ (cm)	幅 (cm)																											
001	100.1	縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	21.5	10.0	3.7	2.80	4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	26~23	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	26~23	上層	上層	上層
002		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.0	9.9	6.0	2500	4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	26~23	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	26~23	上層	上層	上層
003		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.0	9.8	6.0	2500	4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	26~23	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	26~23	上層	上層	上層
004		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.0	9.7	6.0	2500	4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	26~23	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	26~23	上層	上層	上層
005		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.4	9.7	6.6	2550	5/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	25~24	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	25~24	上層	上層	上層
006		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.3	10.0	6.4	2050	4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	25~24	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	25~24	上層	上層	上層
007		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.4	10.0	5.8	2100	5/6~4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	14~13	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	14~13	上層	上層	上層
008		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.3	9.8	6.0	2100	4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	26~24	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	26~24	上層	上層	上層
009		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.6	10.5	6.0	2130	5/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	26~26	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	26~26	上層	上層	上層
010		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.5	10.9	5.8	2250	5/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	27~25	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	27~25	上層	上層	上層
011		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.0	10.0	6.0	2170	5/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	14~11	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	14~11	上層	上層	上層
012		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.0	9.9	5.9	1980	5/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	28~25	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	28~25	上層	上層	上層
013		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	21.7	9.8	5.8	2170	4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	14~11	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	14~11	上層	上層	上層
014		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	21.5	9.5	5.9	2050	6/6~5/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	28~24	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	28~24	上層	上層	上層
015		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	21.7	6.3	5.9	1300	6/6~5/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	28~24	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	28~24	上層	上層	上層
016		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.5	9.7	5.7	2150	6/6~5/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	28~24	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	28~24	上層	上層	上層
017	100.2	縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.3	9.8	5.7	2110	6/6~5/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	16~1.6	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	16~1.6	上層	上層	上層
018		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.0	9.5	5.8	2060	6/6~5/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	14~1.5	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	14~1.5	上層	上層	上層
019		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.3	9.6	5.8	2110	4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	12~1.5	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	12~1.5	上層	上層	上層
020		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	21.8	9.8	5.7	2100	5/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	27~24	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	27~24	上層	上層	上層
021		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	21.8	9.8	5.6	2100	4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	14~1.6	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	14~1.6	上層	上層	上層
022		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.6	9.8	5.6	2040	4/6~5/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	27~25	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	27~25	上層	上層	上層
023		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.0	9.5	5.8	2020	4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	14~1.5	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	14~1.5	上層	上層	上層
024		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.2	9.7	5.8	2030	4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	13~1.5	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	13~1.5	上層	上層	上層
025		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.1	9.5	5.8	2060	4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	23~23	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	23~23	上層	上層	上層
026		縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.5	10.9	6.0	2010	5/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	23~23	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	23~23	上層	上層	上層
027	100.3	縄文前期中葉	内庭 3)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	20.7	10.8	6.0	2430	4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	20~20	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	20~20	上層	上層	上層
028		縄文前期中葉	中庭 2)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.5	10.3	5.7	1970	4/6~5/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	25~23	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	25~23	上層	上層	上層
029		縄文前期中葉	中庭 2)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.0	10.3	5.7	2020	4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	25~24	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	25~24	上層	上層	上層
030		縄文前期中葉	中庭 2)	611	平定型 内庭チヨウリ	片小段	片小段	22.0	10.0	5.8	2180	4/6	黒 (F2)	黒土	弥生前期	26~24	上層	上層	上層	上層	15~1.6	1.8	1.8	上層	黒土	弥生前期	26~24	上層	上層	上層

資料番号 番号	出土位置		位置	形状	形式	備考の分類	寸法 (mm)		重さ (g)	土質	特徴	形状	出土層 (層)	位置	文字	図章	備考
	遺構	遺物					長さ	幅									
061		堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	破正	22.0	10.6	3.8	2280	5/8	赤土	—	—	—	—	b
062		堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	破正	22.5	11.0	3.8	2270	5/8	赤土	—	—	—	—	b
063	162.19	堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	破正	22.7	10.7	4.0	2270	5/8	赤土	—	—	—	—	b
064		堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	両折下駄跡	22.4	10.5	3.8	2220	4/8	赤土	—	—	—	—	b
065		堀込割物片礎	内2 次	板石	瓦形	破正	21.8	10.5	3.8	2140	4/8	赤土	—	—	—	—	b
066		堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	破正	22.5	10.5	4.0	2270	4/8	赤土	—	—	—	—	b
067	162.20	堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	破正	23.2	11.0	4.0	2310	5/8	赤土	—	—	—	—	c
068		堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	破正	22.0	10.3	4.0	2270	4/8	赤土	—	—	—	—	c
069		堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	破正	22.7	11.0	3.8	2320	5/8	赤土	—	—	—	—	c
070		堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	破正	23.0	10.8	5.4	2380	4/8	赤土	—	—	—	—	c
071		堀込割物片礎	内2 次	板石	4.5 片板状	破正	▲22.0	11.0	3.7	2180	5/8	赤土	—	—	—	—	c
072	161.10	堀込割物片礎	内2 次	板石	4.5 片板状	破正	▲21.1	10.8	3.9	2050	5/8	赤土	—	—	—	—	c
073	162.21	堀込割物片礎	中2 次	板石	華元形 片板状	両折下駄跡	22.2	11.0	2.3	1310	4/8	赤土	—	—	—	—	a
074		堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	破正	23.0	11.2	4.0	2200	5/8	赤土	—	—	—	—	c
075		堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	破正	22.5	10.5	4.0	2200	4/8	赤土	—	—	—	—	c
076		堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	両折下駄跡	21.5	10.5	3.8	2190	4/8	赤土	—	—	—	—	c
077		堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	両折下駄跡	22.4	10.5	3.9	2290	4/8	赤土	—	—	—	—	c
078	161.11	堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	両折下駄跡	22.8	10.6	4.0	2220	4/8	赤土	—	—	—	—	c
079		堀込割物片礎	内2 次	板石	瓦形	両折下駄跡	22.7	10.4	4.2	2190	4/8	赤土	—	—	—	—	c
080		堀込割物片礎	内2 次	板石	瓦形	破正	22.2	10.8	4.0	2190	4/8	赤土	—	—	—	—	c
081		堀込割物片礎	中2 次	板石	華元形 片板状	両折下駄跡	20.0	10.5	3.5	2000	4/8	赤土	—	—	—	—	a
082		堀込割物片礎	中2 次	板石	華元形 片板状	両折下駄跡	20.7	10.5	3.5	2210	4/8	赤土	—	—	—	—	a
083	162.22	堀込割物片礎	中2 次	板石	華元形 片板状	両折下駄跡	21.0	11.0	3.5	2340	4/8	赤土	—	—	—	—	a
084	161.12	堀込割物片礎	中2 次	板石	華元形 片板状	両折下駄跡	20.7	11.2	4.2	2300	5/8	赤土	—	—	—	—	a
085		堀込割物片礎	中2 次	板石	華元形 片板状	両折下駄跡	20.5	10.8	4.0	2260	4/8	赤土	—	—	—	—	a
086		堀込割物片礎	中2 次	板石	華元形 片板状	両折下駄跡	20.3	10.8	4.0	2240	4/8	赤土	—	—	—	—	a
087		堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	破正	22.5	11.0	4.0	2110	4/8	赤土	—	—	—	—	c
088	161.13	堀込割物片礎	中2 次	板石	瓦形	両折下駄跡	23.0	10.8	4.0	2300	4/8	赤土	—	—	—	—	c
089	162.23	堀込割物片礎	内2 次	板石	華元形 片板状	両折下駄跡	20.5	10.6	3.7	2020	3/8	赤土	—	—	—	—	a

資料番号	種別 番号	題名	著者	体裁	形式	備考	請求 番号	冊数	冊数 区分	冊数 区分	価格 区分	特種 事項	形態	種別	文字	位置	種別 区分
000	102.24	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]		20.4	100	5.5	1966	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
001	102.25	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047] 502.9.9		10.8	5.5	2000		4.6	目次	紙	—	—	—	下部
002	101.14	楳栗天狗物語	中野 次	短編	1/2 [1046-1047]		22.3	▲15.5	5.8	1530	3.8	目次	紙	—	—	—	下部
003	101.14	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047] 502.9.9		14.6	10.8	5.7	2320	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
004	102.26	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]		21.1	10.5	5.8	2460	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
005	102.26	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	14.7	10.2	3.8	2040	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
006	103.27	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	22.3	10.5	5.5	2720	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
007	103.27	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	21.8	10.3	5.4	2900	3.8	目次	紙	—	—	—	下部
008	100	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	21.8	10.3	5.4	2810	3.8	目次	紙	—	—	—	下部
009	100	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	21.8	10.3	5.4	2800	3.8	目次	紙	—	—	—	下部
100	100	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	22.2	10.6	5.4	2760	3.8	目次	紙	—	—	—	下部
101	101	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	22.0	10.6	3.7	2800	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
102	101.16	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	22.2	▲10.6	5.6	2450	—	目次	紙	—	—	—	下部
103	101.16	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	23.0	▲10.6	6.0	1800	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
104	101.16	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	21.6	9.0	6.0	3120	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
105	101.16	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	▲12.3	11.0	6.0	1290	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
106	101.16	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	▲13.5	10.5	5.2	1410	6.0	目次	紙	—	—	—	下部
107	101.15	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	▲21.8	11.0	6.2	2530	—	目次	紙	—	—	—	下部
108	103.28	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	21.2	0.2	7.6	3190	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
109	103.29	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	22.6	10.0	6.0	2010	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
110	103.29	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	21.8	10.0	6.0	2200	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
111	103.30	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	21.6	10.3	6.0	2260	5.8	目次	紙	—	—	—	下部
112	103.30	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	21.5	10.0	6.0	2200	3.8	目次	紙	—	—	—	下部
113	103.30	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	21.3	10.1	6.2	2280	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
114	103.31	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	22.4	10.8	3.7	1950	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
115	103.31	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	22.3	10.6	6.0	2500	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
116	103.32	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	22.6	10.5	6.0	2220	4.6	目次	紙	—	—	—	下部
117	103.33	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	22.5	11.3	5.8	2440	明細	目次	紙	—	—	—	下部
118	103.32	楳栗天狗物語	中野 次	短編	単行本 [1046-1047]	5-6-9-6-6付録	22.6	10.8	6.0	2270	4.6	目次	紙	—	—	—	下部

資料番号	出土状況		位置	遺物	産出層	形状・寸法	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	色澤	土質	胎土		形状	文字	位置	産層	備考	
	遺構	位置											本文	(cm)						
119	307/遺構																			
120	303-33	304/遺構																		
121	303-33	341/遺構																		
122	303-33	341/遺構																		
123	303-33	341/遺構																		
124	303-33	341/遺構																		
125	303-33	341/遺構																		
126	303-35	342/遺構																		
127	303-36	343/遺構																		
128	303-36	343/遺構																		
129	303-37	344/遺構																		
130	303-37	344/遺構																		
131	303-37	344/遺構																		
132	303-37	344/遺構																		
133	303-37	344/遺構																		
134	303-38	345/遺構																		
135	303-38	345/遺構																		
136	302-17	346/遺構																		
138	302-17	346/遺構																		
139	302-17	346/遺構																		
140	302-17	346/遺構																		
141	302-17	346/遺構																		
142	302-17	346/遺構																		
143	302-17	346/遺構																		
144	302-17	346/遺構																		
145	302-17	346/遺構																		

第48表 煉瓦刻印の歪みと押印の作業方向

形印種類	銘柄	押印の種類	歪み方向	形印サイズ (mm)			形印位置	成形面
				縦	横	厚		
大分県 1号	015	右打	縦	2.5	2.4	0.1	上面	横打
大分県 1号	020	右打	なし	2.5	2.5	0.0	上面	横打
大分県 1号	030	右打	なし	2.6	2.4	0.2	上面	横打
大分県 1号	038	右打	なし	2.5	2.5	—	上面	横打
大分県 1号	002	右打	横	2.6	2.3	0.3	上面	横打
大分県 1号	006	右打	横	2.5	2.4	0.1	上面	横打
大分県 1号	010	右打	横	2.7	2.5	0.2	上面	横打
大分県 1号	025	右打	横	2.7	2.5	0.2	上面	横打
大分県 1号	032	右打	横	2.5	2.3	0.2	上面	横打
大分県 1号	049	右打	横	2.6	2.3	0.3	上面	横打
大分県 1号	054	右打	なし	2.5	2.5	0.0	上面	横打
大分県 1号	058	右打	なし	2.5	2.5	0.0	上面	横打
大分県 1号	005	右打	横	2.5	2.4	0.1	上面	横打
大分県 1号	009	右打	なし	2.6	2.6	0.0	上面	横打
大分県 1号	036	右打	横	2.6	2.4	0.2	上面	横打
大分県 1号	016	右打	横	2.8	2.5	0.3	上面	横打
大分県 1号	022	右打	なし	2.6	2.6	—	上面	横打
大分県 1号	043	右打	なし	2.3	—	—	上面	横打
大分県 1号	041	右打	横	2.7	2.5	0.2	上面	横打
大分県 1号	043	右打	なし	2.5	2.3	0.2	上面	横打
大分県 1号	003	右打	横	2.6	2.5	0.1	上面	横打
大分県 1号	004	右打	横	2.5	2.6	0.1	上面	横打
大分県 1号	008	右打	横	2.6	2.4	0.2	上面	横打
大分県 1号	028	右打	横	2.5	2.3	0.2	上面	横打
大分県 1号	029	右打	横	2.5	2.4	0.1	上面	横打
大分県 1号	013	右打	横	2.8	2.5	0.3	上面	横打
大分県 1号	031	右打	横	2.5	2.3	0.2	上面	横打
大分県 1号	034	右打	なし	2.4	2.6	-0.2	上面	横打
大分県 1号	030	右打	横	2.7	2.4	0.3	上面	横打
大分県 1号	006	右打	横	2.0	1.9	0.1	上面	横打
大分県 1号	027	右打	なし	2.0	2.0	0.0	上面	横打
大分県 1号	021	右打	横	1.4	1.6	-0.2	上面	横打
大分県 1号	022	右打	横	1.4	1.5	-0.1	上面	横打
大分県 1号	024	右打	横	1.5	1.5	-0.2	上面	横打
大分県 1号	035	右打	横	1.4	1.5	-0.1	上面	横打
大分県 1号	042	右打	横	1.4	1.5	-0.1	上面	横打
大分県 1号	039	右打	横	1.4	1.5	-0.1	上面	横打
大分県 1号	011	右打	横	1.4	1.7	-0.3	上面	横打
大分県 1号	132	右打	横	1.3	1.0	0.6	上面	横打
大分県 1号	045	右打	横	1.4	1.5	-0.1	上面	横打
大分県 1号	057	右打	なし	1.5	1.5	0.0	上面	横打
大分県 1号	059	右打	横	1.5	1.6	-0.1	上面	横打
大分県 1号	018	右打	横	1.4	1.5	-0.1	上面	横打
大分県 1号	050	右打	横	1.5	1.6	-0.1	上面	横打
大分県 1号	039	右打	横	1.2	1.7	0.5	上面	横打
大分県 1号	044	右打	横	1.3	1.5	-0.2	上面	横打
大分県 1号	056	右打	横	1.5	1.6	-0.1	上面	横打
大分県 1号	007	右打	横	1.4	1.8	0.4	上面	横打
大分県 1号	012	右打	なし	1.5	1.5	0.0	上面	横打
大分県 1号	014	右打	横	1.4	1.7	-0.3	上面	横打
大分県 1号	001	右打	横	1.5	1.6	-0.1	上面	横打
大分県 1号	033	右打	横	1.4	1.6	-0.2	上面	横打
大分県 1号	048	右打	横	1.3	1.5	-0.2	上面	横打
大分県 1号	046	右打	横	1.7	1.5	0.4	上面	横打
大分県 1号	047	右打	なし	1.5	1.5	0.0	上面	横打
大分県 1号	023	右打	なし	1.5	1.5	0.0	上面	横打
大分県 1号	055	右打	なし	—	—	—	上面	横打
大分県 1号	017	右打	なし	1.6	1.6	0.0	上面	横打
大分県 1号	002	右打	横	1.0	1.1	-0.1	上面	横打
大分県 1号	131	右打	なし	1.1	1.1	0.0	上面	横打
大分県 1号	053	右打	横	1.1	1.2	-0.1	上面	横打
大分県 1号	003	右打	横	1.3	1.2	0.1	上面	横打
大分県 1号	139	—	なし	1.7	1.7	0.0	上面	横打

12) その他の建材など (第165図、第48表、図版57)

タイル27点、衛生陶器16点、罫子5点、便器1点、その他3点の計52点を採取した。うち、タイル5点、絶縁体2点、便器1点、器種不明1点の計9点を報告する。また、詳細に言及しないが、棒状の植物質繊維の痕跡が見られることから、壁士の破片と推定される未焼成の粘土塊が18点、381.5g出土している。

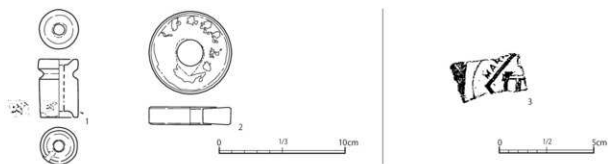
1は破裂の絶縁体、ノップ罫子である。ノップ罫子は電線を他の建材から隔離するために用いるもので、罫子の中でもスタンダードなものである。裾近くに陽刻があるが、不明瞭で、何が記されているかは判読できない。2は環状の破裂品で用途不明である。白一色であることや素材の質感などから絶縁体の一種の可能性もある。3はタイルである。3は白色タイルの破片で、硬質陶器製である。裏面に断片的に残るシャチホコマークの商標から、岐阜県多治見に本社を置く不二見タイルの製品とわかる。大正期のものであろうか。

以下もタイルであるが、写真図版のみでの報告である。4、5はスクラッチタイルである。いずれも橙褐色で、粒子の粗い、陶器質の胎土である。縦方向にひっかいたような櫛歯状の文様モチーフ(スクラッチ)が特徴的である。6、7はセメント原料の焼塊であるクリンカーを材料としたもので、釉薬を塗布して焼成した後に表面をブラッシングして仕上げている。外装用で、透水性がないため、滑り止めの意味もあって、凹凸のある文様モチーフのものが多い。他に、破裂手描コバルト染付の和式大便器の縁辺部極小破片(瀬戸本業焼)が出土しており、注目される。

13) 玩具・ミニチュア・人形 (第166～169図、第49表、図版57)

ミニチュア、人形などを中心に92点を取り上げた。うち、玩具14点、ミニチュア17点、人形2点、カタ3点、根付1点、用途不明土製品1点の計38点を報告する。

1、2は円板状を呈す、俗に「面打」と呼称される泥面子である。1は円粋に「吉」、2は三重弁のモチーフである。3は土製、4は石製の碁石である。4は粘板岩製と考えられ、片面が層状にはかれるように欠損している。また、縁辺にも抉り状の破損がみられる。5はガラス製のビー玉で、薄青緑色透明



第165図 その他の建材など

第49表 その他の建材など観察表

発掘 番号	写真 図番	出土地点	注記	素材	器種	遺存状態	寸法 (cm)			重さ (g)	備考
							a	b	c		
165-1	57-1	第1層	京区表土	細部	総縁鉢(甕子)	完形	3.1	4.5	0.8	67.0	フック部が 剥離あり
165-2	57-2	第1層	清灰	細部	手摺	完形	6.5	1.2	2.1	89.2	
165-3	57-3	第1層	京区表土	陶器(硬質陶 器)	タイル	小破片	—	—	—	11.6	本-瓦タイル
—	57-6	第2-2層	砂土	タリカー	タイル	17-2	18.1	▲11.2	2.6	724.4	
—	57-7	第2-2層	砂土	タリカー	タイル	17-3	▲15.2	▲10.0	2.6	488.5	
—	57-4	第2-2層	砂土	陶器	タイル	57-4	▲9.1	8.1	1.9	160.8	スクラッチタイル
—	57-5	第1層	465C	陶器	タイル	57-5	▲9.2	5.7	2.1	95.3	スクラッチタイル
—	—	第1層		細部	和式大炊鍋 手摺部 小破片	—	—	—	—	91.8	手摺コバト染付母文字

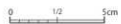
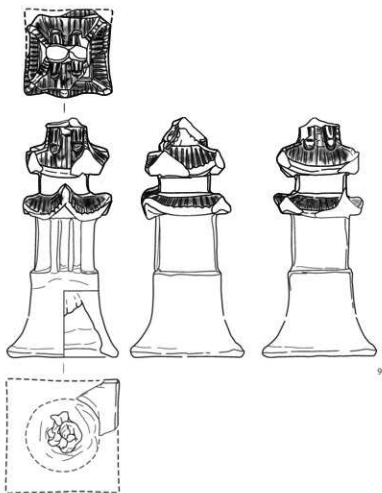
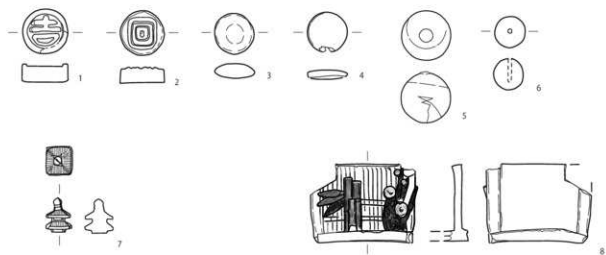
である。1カ所に径0.7cmの素材切り離し痕がみられ、これを中心に渦を巻くように表面が弱く波打っていることから、ガラス棒の端部を溶かして回転させることによって作られたと考えられる。また、硬いものに当たったことによると思われるドット状の破損が多く観察される。6は土製で、用途不明である。明褐色で粒子は極めて細かく、よく焼き締まっている。径1.6cmの球状で、中央に径0.2cm、深さ1.3cmの貫通しない孔がある。7、9は土製の椀のミニチュアである。7は、屋根部分のみで、下面の角に径0.1cmの孔がある。合わせ型作りで、屋根を斜めに横断するように貼り合わせ痕が観察される。胎土は、乳橙褐色で、緻密、焼成もよい。9は台座のある椀である。台座から建物部分にかけてを外型で作り、手摺の屋根部分を後から貼り付けて造形している。また、台座部分の内側は工具を使って円錐状に削り取り、中空にしている。屋根には瓦葺きの表現がみられ、黒色塗料で着色されている。胎土はやや暗い乳橙褐色で、粒子はやや粗い。8は竹垣を模したミニチュアである。透明釉施軸の土製で、褐色、緑色、白色の彩色が施されている。竹垣手前の植栽は梅と竹だが、破損している手前側には、さらに松が配されていた可能性もあろう。各部位は型作りで、それらを組み合わせて全体が作られている。胎土は明橙褐色で粒子は細かい。10は土製の碗のミニチュアである。外型作りと考えられるが、高台内は工具を使って削り出した可能性がある。白化粧土と黒い斑状の彩色の上から透明釉が施軸されている。胎土は橙褐色で、粒子は細かい。11は土製の鉢のミニチュアである。底部外面に左回転の回転糸切痕がみられることから、ロクロ成形であると知れる。胎土は明橙褐色で、粒子は細かい。12は陶製で瓢箪型の袋物のミニチュアと考えられる。合わせ型作りで、貼り合わせ箇所にはヒビがみられる。灰釉鉄絵笹文。13も陶製で、碗のミニチュアである。ロクロ成形で、ごく薄い灰釉、口縁部から白化粧土を掛け流している。14は土製の徳利のミニチュアである。ロクロ成形。胎土は橙褐色で、やや砂っぽく、透明釉が施軸される。15は土製で、火鉢のミニチュアの可能性がある。外型成形で内面には指頭圧痕が顕著である。底にあたる部分はほとんど失われているが、胴部や口縁部の形状から火鉢であろうと思われる。胎土は橙褐色で、粒子は細かい。16は陶製で、両手鍋のミニチュアである。ロクロ成形で、鉄釉が施される。17は土製の両手鍋のミニチュア

である。器高が低い、いわゆる柳川鍋の形状である。ロクロ成形で、底部外面に、支点が中央付近にある回転糸切痕がみられる。回転方向は左のようである。胎土は灰白色で、いわゆる白色粘土である。粒子はやや粗く、粉っぽい。薄く透明釉が施軸されている。18は陶器の植木鉢のミニチュアである。ロクロ成形で、底部外面に右回転の回転糸切痕がみられる。穿孔はないようである。鉄釉が施軸されている。19は土製の蓋のミニチュアである。外型成形。全面に白化粧土が施され、緑色および黒色の斑状の彩色がみられる。胎土は、明橙褐色で粒子は細かい。形状と彩色から土瓶の蓋と考えられる。20は陶製の蓋のミニチュアである。握みは取手状で、空気抜きの孔が表現されている。鍋の蓋であろう。21は土製の天目台のミニチュアである。接地部分に回転糸切痕の一部が遺っており、ロクロ成形であることがわかる。皿状に成形後、底部部分を削り抜いて造形したと考えられる。全面に透明釉を施軸し、白色・黒色・緑色の釉を斑状に配している。胎土は明橙褐色で粒子は細かい。

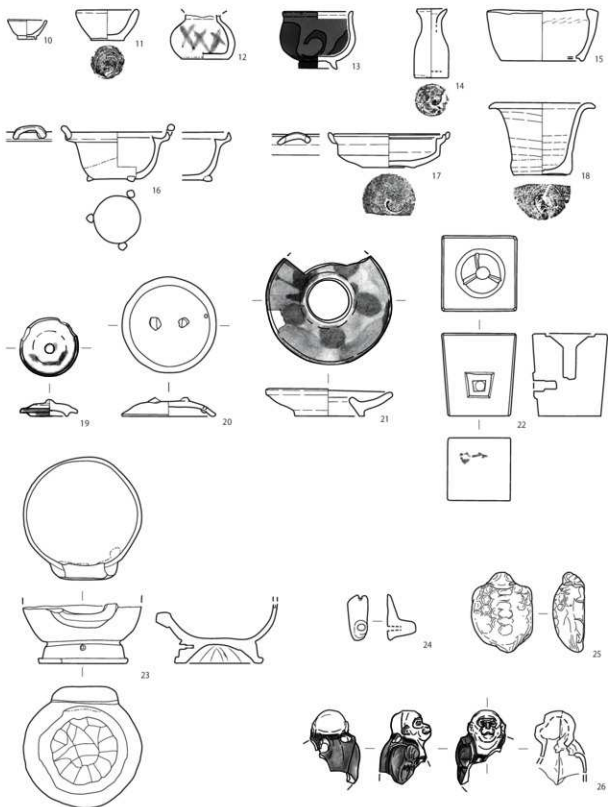
22は石製七輪のミニチュアである。石材は細粒緑色凝灰岩であろうか。底部外面に墨書がみられるが、判読できない。23は土製の置竈のミニチュアである。合わせ型成形で、上半が欠損、灰出し口の下の側のみが遺っている。全体に丸みを帯び、高めの高台が付く形状は、江戸在地のものとは異なる。胎土は灰白色の、いわゆる白色粘土で、やや粉っぽい。24は土製でプラ人形の足先である。外型成形で、足の裏には指頭圧痕と径2mmほどの孔がみられる。胎土は明橙褐色で、粒子は細かい。25は土製で亀の人形である。透明釉が施されているが、かなり摩耗している。胎土は乳橙褐色で、かなり砂っぽい。

26は陶製で、サルを模している。合わせ型成形で、背に2カ所並んで設けられた孔には、紐などを通したものと考えられる。赤・緑・褐色などで猿の目鼻立ちや着衣が丁寧に上絵付されていることや、背中の孔の存在などから根付と考えられる。27～33は土製の鳩笛である。合わせ型成形で、通気孔は工具を使って円形に削り取られている。吹き口は内面が比較的平滑で、粘土が押しつぶされた形跡もみられないことから、棒状のものを咬ませた上で、割り型を合わせたと考えられる。29、30は透明釉を施軸し、羽に白色と緑色の彩色がされている。サイズや細部のディテールからみると、28と32は同じ型から成形された可能性があるが、いずれも表面が摩耗しているため確実ではない。胎土は橙褐色で粒子は細かい。34～36は土製のカタである。34は鳩笛、35は福助、36は飾り馬のモチーフである。いずれも合わせ型の片方で、35、36の側面には、もう一方の型と合わせるための合印が複数みられる。また、背面にも何らかの印と思われる刻みや文字が記されている。35は破損のため全体がわからないが、36は先端が不揃いな工具で「福」と記されている。これらが示す意味は不明であるが、民具の聞き取り調査などからは、所有者を示す場合があることが知られている。いずれも胎土は橙褐色で粒子は細かい。以下は、写真図版のみでの報告である。37、38ともに、成形痕が残っておらず、表面が極めて滑らかに仕上げられている点などから、戦後のものと思われるビー玉である。37は薄青緑色透明、38は乳白色である。

(両角まり)

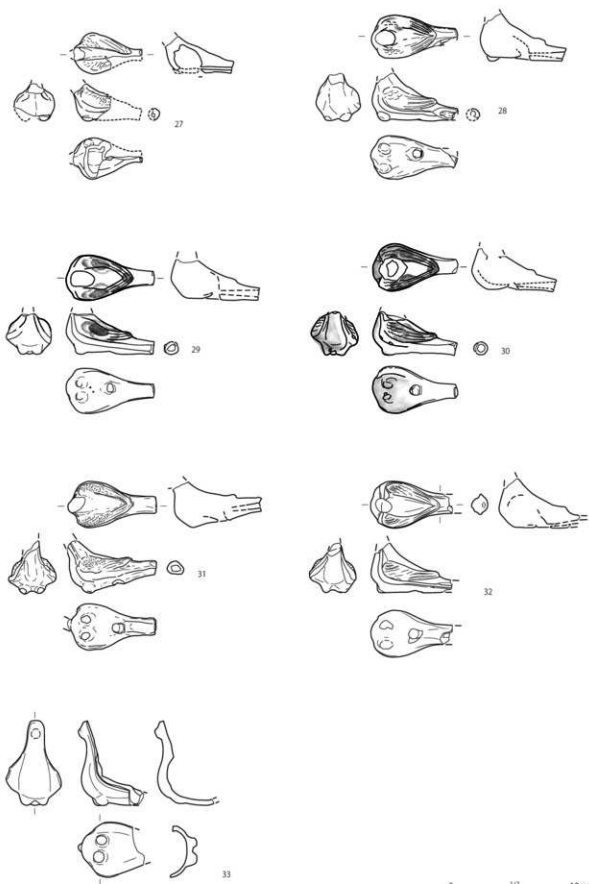


第 166 図 玩具・ミニチュア・人形 (1)

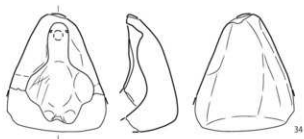


0 1/2 5cm

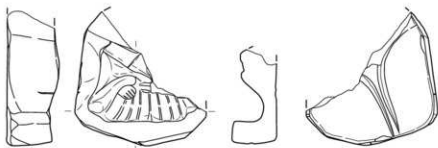
第 167 図 玩具・ミニチュア・人形 (2)



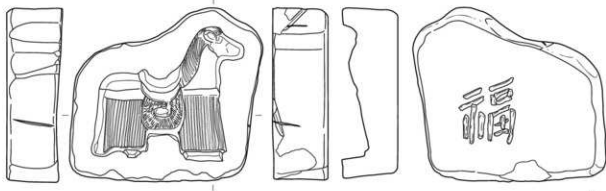
第 168 図 玩具・ミニチュア・人形 (3)



34



35



36



第 169 図 玩具・ミニチュア・人形 (4)

第50表 玩具・ミニチュア・人形観察表

調査 番号	写真 図版	出土地点	注記	素材	種類	遺存状態	寸法 (mm)				備考
							全	高	径	寸	
166-1	57-1	浅瀬橋 上層	977D	土器	玩具 (丸め込こ (二重))	完好	2.4	1.9	—	—	13
166-2	57-2	17号遺構	177D	土器	玩具 (丸め込こ (二重))	完好	2.4	0.9	—	—	13
166-3	57-3	浅瀬橋 上層	477D下	土器	玩具 (柱石)	完好	2.1	0.9	—	—	13
166-4	57-4	第4層	977D	石	柱石	欠	2.1	0.5	—	—	26
166-5	57-5	93号遺構	59-57D	ガラス	ビー玉	完好	2.6	—	—	—	26
166-6	57-6	第1層	177D(77D)	土器	不倒	完好	1.6	—	—	—	41
166-7	57-8	浅瀬橋 上層	617D	土器	ミニチュア (燧燧脚)	完好	1.4	1.5	1.8	—	24
166-8	57-8	17号遺構	177D	土器	ミニチュア (竹筒)	ほぼ完好	4.2	5.5	1.3	—	232
166-9	57-9	第4層	977D	土器	ミニチュア (燧燧)	ほぼ完好	5.9	6	12.6	—	1743
167-10	57-10	浅瀬橋 上層	97740B1	土器	ミニチュア (燧)	完好	2.1	1	1	—	15
167-11	57-11	32号遺構	52-47D	土器	ミニチュア (燧)	完好	3.4	1.8	1.6	—	852
167-12	57-12	第4層	977D	陶器	ミニチュア (袋物)	燧燧下層→ 燧燧	1.8	4.2	▲2.3	3.4	13.3
167-13	57-13	68号遺構	687D	陶器	ミニチュア (燧)	完好	3.8	2	3	4	18.8
167-14	57-14	浅瀬橋 上層	97743B3	土器	ミニチュア (燧筒)	ほぼ完好	1.6	1.8	3.7	—	8.3
167-15	57-15	浅瀬橋 上層	617D	土器	ミニチュア (式具物)	ほぼ完好	5.9	4.4	2.7	—	191
167-16	57-16	68号遺構	687D	陶器	ミニチュア (高子燧)	ほぼ完好	5.5	2.4	2.5	—	22.2
167-17	57-17	35号遺構	357D	土器 (白磁土)	ミニチュア (燧)	ほぼ完好	5.9	2.8	1.8	—	10.1
167-18	57-18	第4層	977D	土器 (白磁土)	ミニチュア (燧燧脚)	燧燧→燧燧 上層	5.6	3.2	3.8	—	17.1
167-19	57-19	93号遺構	937D	土器	ミニチュア (土燧燧)	完好	3.1	0.9	—	—	4.7
167-20	57-20	第1層	自区表上	陶器	ミニチュア (燧燧)	ほぼ完好	5	1	—	—	10.9
167-21	57-21	浅瀬橋 上層	97740B1	土器	ミニチュア (天目物)	ほぼ完好	6.7	3.7	1.3	2.2	22.2
167-22	57-22	第1層	自区表上	石	ミニチュア (土燧)	完好	4	3.3	4.4	—	105.3
167-23	57-23	浅瀬橋 上層	97742E1	土器 (白磁土)	ミニチュア (燧燧)	燧燧下層→ 燧燧	6.3	4.7	▲3.1	—	43.6
167-24	57-24	浅瀬橋 上層	97742E4	土器	人形 (フタ人形の足)	完好	1.1	1.5	2.4	—	18.9
167-25	57-25	浅瀬橋 下層	浅西キシ2	土器	人形 (燧)	完好	3.2	4.2	1.7	—	18.6
167-26	57-26	93号遺構 上層	937D(北西上)	陶器	燧付 (燧)	燧→燧燧	▲2.6	▲3.8	▲2.5	—	11.1
168-27	57-27	32号遺構	327D	土器	玩具 (燧燧)	燧燧以下	3.2	▲3.9	▲3.4	—	18.9
168-28	57-28	17号遺構	177D	土器	玩具 (燧燧)	燧燧以下	3.5	▲3.8	0.9	—	29.0
168-29	57-29	第1層	177D(77D)	土器	玩具 (燧燧)	燧燧以下	3.8	▲3.2	7	—	25.8
168-30	57-30	第1層	177D(77D)	土器	玩具 (燧燧)	燧燧以下	3.7	▲3.4	6.7	—	28.4
168-31	57-31	浅瀬橋 上層	97740B1	土器	玩具 (燧燧)	燧燧以下	3.7	▲3.2	7	—	28.9
168-32	57-32	第1層	自区	土器	玩具 (燧燧)	燧燧以下	3.8	▲3.9	▲6.0	—	30.2
168-33	57-33	第1層	177D表上	土器	玩具 (燧燧)	燧燧	4.4	6.7	▲5.3	—	22.1
168-34	57-34	第1層	177D	土器	ガラス (燧燧)	燧燧	7.8	▲4.1	9.4	—	184.3
168-35	57-35	17号遺構	177D	土器	ガラス (燧燧)	燧燧以下	▲10.6	▲10.4	3.7	—	25.4
168-36	57-36	第1層	177D(77D)	土器	ガラス (燧燧)	燧燧	13.8	14.2	4.1	—	93.0
—	57-37	32号遺構	327D	ガラス	ビー玉	完好	1.6	—	—	—	6.5
—	57-38	第1層	177D	ガラス	ビー玉	完好	2.3	—	—	—	17.8

14) 動物遺体 (第170・171図、第51～60表、図版58～62)

動物骨、魚骨、貝などを検出した。採取されたものすべてについて同定を行い、動物骨については1点ごとに番号を付与した一覧表(第51表)、貝類については種別点数集計表(第53表)の形で以下に報告する。

第51表 動物遺体一覧表

資料番号	写真撮影	出土地点	注記	大分類	小分類	部位	左右	数量	遺存状態	備考
1	59-1	第1層	第1層	鳥類	マダイ	前脚骨		1		標準体長50cm
2	—	第1層	B区	鳥類	キジ科	跗足骨	右	1	骨体部一遠位端	キジ(EP-143)とはほぼ同大
3	59-19	第1層	遺区別検査	鳥類	マガロ属	尾椎		1		
4	—	第2・1・3層・第3層	層上2	鳥類	カモ科	胸骨		1	1 竜骨突起と胸口骨との関節部	クワガモ(EP117-01)とはほぼ同大 形態もクワガモ(EP117-01)と類似、マガモ属とは異なる
5	61-2	第4層	層上3	鳥類	キジ科	大翼骨	左	1	完全	ヤマドリ(EP-144)より小さい 大転子首関節なし、キジ同様
6	—	第4層	層上3	鳥類	キジ科	胸骨		1	1 胸口骨との関節部と竜骨突起	キジ(EP-143)より少し大きい
7	59-2	第4層	層上3	鳥類	マダイ	上腕骨	右	1		標準体長50cm
8	62-7	第4層	層上3	哺乳類	ウマ	上腕骨	右	1	三角筋断面部分	
9	62-6	第4層	層上3	哺乳類	ネコ	大翼骨	右	1	完全	
10	—	第4層	層上3	鳥類	ニトリ	跗足骨	右	1	完全	全長110.04mm キジ(EP-143)よりかなり大きい 後脚骨関節部付着部は線状 遠位端不完全、若鳥
11	62-5	池遺構	層上4西	哺乳類	ネコ	脛骨	左	1	遠位端欠損	遠位端部未癒合。
12	—	池遺構	層上4西	鳥類	カモ科	尺骨	左	1	骨体部	ヒツパシロ(EP-27)とはほぼ同大
13	—	池遺構	層上4中	鳥類	カモ科	尺骨	右	1	完全	ヒツパシロ(EP-27)とはほぼ同大
14	—	池遺構	層上4西2	鳥類	キジ科	上腕骨	右	1	高位端	キジ(EP-143)とはほぼ同大
15	59-9	池遺構	層上4南1	鳥類	メカシキ	腕骨		1		
16	62-4	池遺構	層上4南1	哺乳類	イルガ類	脛骨		1		
17	—	池遺構	層上4南1	鳥類	ガシ	手根中手骨	左	1	完全	カリガモ(EP90-2)とマガシ(EP-25)の間 近位端切断されている
18	—	池遺構	層上4南6	哺乳類	ネコ	上腕骨	左	1	両端部欠損	断裂
19	—	池遺構	層上4北1	鳥類	ガシ	上腕骨	右	1	骨体部破片	カリガモ(EP90-2)とはほぼ同大
20	62-3	池遺構	層上4北1	哺乳類	ネコ	上腕骨	右	1	完全	左(●)×CP34M ●●●●●●●●
21	59-23	池遺構	層上4北1	鳥類	フサコ	腕骨		1		
22	59-22	池遺構	層上4北1	鳥類	フサコ科	前腕骨	右	1		
23	—	池遺構	層上4北1	鳥類	カモ科	上腕骨	左	1	骨体部破片	オナガガモ(EP-4)とはほぼ同大
24	59-27	池遺構	層上4北1	鳥類	木同定	不明		1		
25	62-1	池遺構	層上4北1	爬虫類	スッポン	下顎骨	右	1	中央側	
26	59-24	池遺構	層上4北1	鳥類	ハシロ	尺骨	右	1		
27	—	池遺構	層上4北1	鳥類	カモ科	趾骨	右	1	完全	オナガガモ(EP-4)とはほぼ同大
28	62-2	池遺構	層上4北1	哺乳類	ウサギ類	脛骨	右	1	1 遠位から中位にかけて	
29	—	池遺構	層上4北1	鳥類	カモ科	胸口骨	左	1	完全	オナガガモ(EP-4)とはほぼ同大
30	60-2	池遺構	層上4北2	鳥類	キジ科	上腕骨	左	1	完全	ヒツパシロ(EP-27)よりかなり大きい 骨髄腔は一部閉鎖されている
31	60-5	池遺構	層上4北2	鳥類	カモ科	胸口骨	右	1	完全	クワガモ(EP116-1)より少し小さい。カルガモ(EP-84)よりかなり大きい
32	—	池遺構	層上4北2	鳥類	ニトリ	足脛中足骨	左	1	骨体部一遠位端	キジ(EP-143)より大きい 内側直線あり。形変なし
33	61-6	池遺構	層上4北2	鳥類	クワガモ	足脛中足骨	左	1	完全	ヒツパシロ(EP-27)より少し小さい。内側直線あり
34	—	池遺構	層上4北2	鳥類	ガシ	跗足骨	右	1	骨体部破片	マガシ(EP-25)とはほぼ同大
35	—	池遺構	層上4北2	鳥類	キジ科	足脛中足骨	左	1	完全	キジ(EP-143)とはほぼ同大。内側直線の有無不明。形変なし。遠位端不完全、若鳥
36	—	池遺構	層上4北2	鳥類	キジ科	足脛中足骨	右	1	完全	キジ(EP-143)より少し小さい。内側直線の有無不明。形変なし。遠位端不完全、若鳥
37	61-7	池遺構	層上4北2	鳥類	キジ科	足脛中足骨	右	1	完全	ヤマドリ(EP-144)より少し大きい 内側直線あり。形変なし
38	—	池遺構	層上4北2	鳥類	カモ科	尺骨	右	1	高位端一骨体部	オナガガモ(EP-4)とはほぼ同大
39	—	池遺構	層上4北2	鳥類	カモ科	上腕骨	右	1	骨体部一遠位端	カルガモ(EP-84)よりかなり大きい 高位端は切断されている
40	59-6	池遺構	層上4北2	鳥類	クワガモ	腕骨	左	1		標準体長30cm
41	59-11	池遺構	層上4北2	鳥類	マガロ属	尾椎		1		
42	59-4	池遺構	層上4北3	鳥類	マダイ	脛骨		1		
43	—	池遺構	層上4北3	哺乳類	ネコ	跗足骨	右	1	完全	標準体長40cm
44	61-8	池遺構	層上4北3	鳥類	ニトリ	足脛中足骨	右	1	完全	ヤマドリ(EP-144)より小さい 内側直線なし。形変なし
45	60-4	池遺構	層上4北3	鳥類	ヒロドキンクウ属	上腕骨	右	1	完全	カルガモ(EP-84)とはほぼ同大
46	59-28	池遺構	層上4北4	鳥類	木同定	腕骨		1		
47	—	池遺構	層上4北4	鳥類	クワガモ	尺骨	右	0	骨体部破片	ヒツパシロ(EP-27)とはほぼ同大
48	61-4	池遺構	層上4北4	鳥類	フクロウ科	跗足骨	右	1	完全	フクロウ(EP-36)より大きい
49	—	池遺構	層上4北4	鳥類	カモ科	腕骨		1	癒合状態	カルガモ(EP-84)より少し大きい
50	—	池遺構	層上4北4	鳥類	マガモ属	上腕骨	左	1	完全	オナガガモ(EP-4)より少し小さい
51	—	池遺構	層上4北4	鳥類	種不明鳥類	肋骨		1		
52	—	池遺構	層上4北4	鳥類	カモ科	前脚骨	右	1	完全	カルガモ(EP-84)とはほぼ同大だが大きい 55と癒合
53	—	池遺構	層上4北4	鳥類	種不明鳥類	肋骨		1		
54	—	池遺構	層上4北4	鳥類	種不明鳥類	肋骨		1		
55	—	池遺構	層上4北4	鳥類	カモ科	前脚骨	右	0		カルガモ(EP-84)とはほぼ同大だが大きい 52と癒合
56	60-6	池遺構	層上4北4	鳥類	カモ科	腕骨	右	1	完全	ヒツパシロ(EP-27)とはほぼ同大
57	61-1	池遺構	層上4北4	鳥類	カモ科	大翼骨	右	1	完全	カルガモ(EP-84)とはほぼ同大だが大きい 小動物の咬痕あり

資料番号	写真	出土地点	透視	大分類	小分類	部位	左右	数量	遺存状態	備考
58	60分	池遺構 上層	19・14北4	鳥類	カモ骨料	手掘中子骨	左	1	完存	ヒドリガモ (EP-6) より少し大きい
59	60分	池遺構 上層	19・14北4	鳥類	カラス科	尺骨	右	1	完存	ハシブトカラス (EP-13) とほぼ同大
60	—	池遺構 上層	19・14北4	鳥類	カモ骨料	尺骨	右	1	完存	オナガガモ (EP-83) とほぼ同大くらい
61	59-18	6号遺構	67分	鳥類	マガロ属	尾椎		1		
62	59-16	6号遺構	67分	鳥類	マガロ属	尾椎		1		
63	61-3	6号遺構	67分	鳥類	カモ科	大翼骨	左	1	骨体部	シシモロウ (Holz/MVC31280) より大きい
64	60-10	70号遺構	70分	鳥類	ガン属	手掘中子骨	右	1	完存	マガシ (EP-25) とほぼ同大
65	—	75号遺構	75分	鳥類	カモ骨料	上腕骨	左	1	骨体部破片	カウルガモ (EP-84) とほぼ同大
66	60-1	80号遺構	80分	鳥類	ツル科	上腕骨	左	1	完存	ナベツル (EP-99) とほぼ同大 後脚骨は切断されている
67	59-5	85号遺構	85分	鳥類	マガシ	尾椎		1		標準体長50cm 切断面あり
68	59-26	91号遺構	91分	鳥類	カレイ科?	尾椎		1		
69	62-9	池遺構 上層	47分2分	哺乳類	ウシ	肋骨	右	1	右側のみ残存	右よりで尖上方向に切断。第4骨
70	59-13	池遺構 上層	47分2分	鳥類	マガロ属	尾椎		1		
71	59-7	池遺構 上層	47分2分	鳥類	マガシ科	胸椎		1		標準体長200cm以上
72	59-8	池遺構 上層	47分2分	鳥類	マガシ科	胸椎		1		標準体長200cm以上
73	—	池遺構 上層	61分	鳥類	ガン属	上腕骨	右	1	骨体部～遠位端	マガシ (EP-25) とコハクチョウ (EP-200) の中間、コハクチョウ (EP-200) より大きい
74	—	池遺構 上層	61分	鳥類	ニワトリ	脚長骨	左	1	遠位端～骨体部	キジ (EP-143) より少し大きい 後脚骨遠位部の付着は断片
75	59-3	池遺構 上層	61分	鳥類	マガシ	上腕骨	左	1	完存	標準体長40cm
76	59-12	池遺構 上層	61分	鳥類	マガロ属	尾椎		1		
77	—	池遺構 上層	61分	鳥類	カモ骨料	大翼骨	左	1	完存	オナガガモ (EP-4) とカウルガモ (EP-84) の中間
78	59-15	池遺構 上層	61分	鳥類	マガロ属	尾椎		1		
79	60-3	93号遺構	93分	鳥類	マガモ属	上腕骨	左	1	完存	ヒドリガモ (EP-6) より少し大きい
80	59-14	93号遺構	93分	鳥類	マガロ属	尾椎		1		
81	—	93号遺構	93分	鳥類	カラス科	足趾中足骨	右	1	骨体部	ハシブトカラス (EP-13) とほぼ同大
82	—	93号遺構	93分	鳥類	マガモ属	上腕骨	右	1	高位端～骨体部	オナガガモ (EP-4) とほぼ同大
83	—	93号遺構	93分	鳥類	同定不能鳥類	尺骨	右	1	骨体部破片	
84	59-17	93号遺構	93分	鳥類	マガロ属	尾椎		1		
85	62-8	93号遺構	93分	哺乳類	ウシ	胸椎		1	完存	椎体遠位端部分未破片。第5骨 キジ (EP-143) よりかなり大きい 後脚骨遠位部の付着は断片
86	池遺構 下層	池西		鳥類	ニワトリ	脚長骨	左	1	近位端～骨体部	キジ (EP-143) よりかなり大きい 後脚骨遠位部の付着は断片
87	池遺構 下層	池西		鳥類	キジ科	脚長骨	左	1	近位端～骨体部	キジ (EP-143) とほぼ同大。後脚骨遠位部の付着は断片ではない。ニワトリ以外
88	池遺構 下層	池西		鳥類	キジ科	脚長骨	左	1	遠位端	キジ (EP-143) とほぼ同大
89	61-9	池遺構 下層	池西	鳥類	フクロウ科	足趾中足骨	右	1	完存	フクロウ (EP-36) より大きい
90	59-20	池遺構 下層	池西	鳥類	メカシキ	胸椎		1		
91	59-15	池遺構 下層	池西	鳥類	未同定	鹿骨		1		
92	61-19	池遺構 下層	池南	鳥類	ニワトリ	脚長骨	右	1	完存	キジ (EP-143) よりかなり大きい 後脚骨遠位部の付着は断片
93	—	池遺構 下層	池南	哺乳類	ネコ	上腕骨	右	1	完存	SL: 95.1mm
94	—	池遺構 下層	池北西	鳥類	ガン属	脚長骨	右	1	遠位端	カウルガモ (EP-80) より少し大きい
95	60-7	池遺構 下層	池南内3	鳥類	カモ骨料	尺骨	右	1	完存	オナガガモ (EP-4) より少し大きい
96	第1層	池北		哺乳類	同定不能鳥類	肋骨		1		サイズからイヌと推定される
97	59-20	池遺構 下層	19・14北2	鳥類	マガロ属?	尾椎		1	破損	
98	59-21	池遺構 下層	19・14北2	鳥類	マガロ属?	尾椎		1	破損	
99	—	池遺構 下層	19・14北3	鳥類	カモ骨料	脚骨		1	鳥口骨との距離部	カウルガモ (EP-84) とほぼ同大

A. 貝類・魚類

■資料と方法

資料はすべて、発掘調査中に目視確認され遺構一括で取り上げられたもので、土壌の篩がけは行っていない。調査時の所見によると、取り上げたもの他にもアワビ類などの貝殻片は出土していたが、意図的な破砕の痕跡は認められなかったとのことである。

種同定と魚類の体長推定は現生標本との比較による。最小個体数は遺構ごとに最も大きな数を見定める部位を用い、二枚貝の場合は左殻と右殻のうち多い方を数える。計測可能な資料の多かった種(ハマグリ、バイ、オオタニシ)については殻サイズの計測を行い、結果を5mm単位で示す。

■分析結果

未同定とした資料を除き、貝類16種359点(336個体)、魚類9群28点を同定した(第52表、図版58・59)。取り上げ単位ごとの同定結果は貝類が第53表、魚類が第54表の通りである。貝類の殻サイズの計測結果は第55～57表及び第170・171図に示した。以下では取り上げ単位を遺構ごとにとまとめ、同定資料数の多い遺構を中心に分析結果を記す。

【近世(池遺構構築以前)の遺構に伴う資料】

6号遺構

[貝類] 同定資料数は10種31点(26個体)で、内訳はバイ10個体、アカガイ4個体、サザエ

第 52 表 貝類・魚類種名表

軟体動物門 MOLLUSCA	マルスダレガイ目 Veneroida
腹足綱 Gastropoda	シジミ科 Corbiculidae
古腹足目 Vetigastropoda	ヤマトシジミ <i>Corbicula japonica</i>
サザエ科 Turbinidae	マルスダレガイ科 Veneridae
ヤコウガイ <i>Turbo marmoratus</i>	アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>
サザエ <i>Turbo (Batillus) comutus</i>	ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>
ミミガイ科 Haliotidae	脊索動物門 CHORDATA
メカイアワビ <i>Haliotis (Nordotis) gigantea</i>	硬骨魚綱 Osteichthyes
マダカアワビ <i>Haliotis (Nordotis) madaka</i>	スズキ目 Perciformes
クロアワビ <i>Haliotis (Nordotis) discus discus</i>	フササゴ科 Scorpaenidae
中腹足目 Mesogastropoda	フササゴ科の一種 Scorpaenidae gen. et sp. indet.
タニシ科 Viviparidae	コチ科 Platycephalidae
オオタニシ <i>Cyprangopaludina japonica</i>	コチ科の一種 Platycephalidae gen. et sp. indet.
新生腹足目 Caeno gastropoda	ハタ科 Serranidae
バイ科 Babyloniidae	ハタ科の一種 Serranidae gen. et sp. indet.
バイ <i>Babylonia japonica</i>	タイ科 Sparidae
アッキガイ科 Muricidae	クロダイ属の一種 Acanthopagrus sp.
アカニシ <i>Rapana venosa</i>	マダイ <i>Pagrus major</i>
二枚貝綱 BIVALVIA	マカジキ科 Istiophoridae
フネガイ目 Arcoida	マカジキ科の一種 Istiophoridae sp.
フネガイ科 Arcidae	メカジキ科 Xiphiidae
アカガイ <i>Scapharca broughtonii</i>	メカジキ <i>Xiphias gladius Linnaeus</i>
サトウガイ <i>Scapharca satowi</i>	サバ科 Scombridae
ウグイスガイ目 Pterioida	マグロ属の一種 Thunnus sp.
イタボガキ科 Ostreidae	カレイ目 Pleuronectiformes
マガキ <i>Cassostrea gigas</i>	カレイ科 Pleuronectidae
ハボウキガイ科 Pinnidae	カレイ科の一種? Pleuronectidae gen. et sp. indet.
タイラギ <i>Atrina (Sensatrina) japonica</i>	
イシガイ目 Unionoifa	
イシガイ科 Unionidae	
ドブガイ (ヌマガイ) <i>Anodonta woodiana</i>	

*学名表記は以下の文献による。海水産貝類：奥谷壽司 2017『日本近海産貝類』(第二版) 東海大学出版部。淡水産貝類：世界文化社 2004『改訂新版世界文化生物大鑑』。魚類：東海大学出版会 1993『日本産魚類検索—全種の同定』(第三版)

3 個体 (殻 1 点、蓋 3 点)、アサリ、ハマグリが各 2 個体、メカイアワビ、マダカアワビ、クロアワビ、アカニシ、ヤマトシジミが各 1 個体であった。バイは殻高 60mm 台を主体として 40 ~ 69mm、ハマグリは殻長 70 ~ 89mm のものが含まれた。

【貝類】 同定資料数は 1 群 2 点で、内訳はマグロ属尾椎 2 点であった。

85 号遺構

【貝類】 同定資料数は 4 種 8 点 (6 個体) で、内訳はアカガイ、ハマグリが各 2 個体、クロアワビ、マガキが各 1 個体であった。

【魚類】 同定資料数は 1 種 1 点で、マダイ尾椎であった。推定体長は 50cm で、三枚おろしの痕跡と思われる切断痕が認められた。

その他の 3 遺構からは貝類のみが各 1 ~ 2 点検出された。内訳はサザエ、バイ、メカイアワビ、ハマグリが各 1 点であった。

【Ⅲ面の遺構に伴う資料】

以下の資料は池遺構の覆土から出土したものである。

第 4 層

【貝類】 同定資料数は 7 種 18 点 (15 個体) で、内訳はバイ 8 個体、アサリ 2 個体、メカイアワ

ビ、アカガイ、マガキ、ヤマトシジミ、ハマグリが各1個体であった。バイは殻高50～69mm、ハマグリは殻長50mm台・90mm台のものが含まれた。

〔魚類〕 同定資料数は1種1点で、推定体長約50cmのマダイ右上顎骨であった。

池遺構 上層

47号遺構

〔貝類〕 同定資料数は11種99点(97個体)で、内訳はバイ76個体、サザエ4個体、アカニシ、マガキ、オオタニシが各3個体、メカイアワビ、ハマグリが各2個体、サトウガイ、ヤマトシジミ、アサリ、ヌマガイが各1個体であった。バイは殻高50～60mm台を主体として25～69mm、ハマグリは殻長55～74mm、オオタニシは殻高45～54mmのものが含まれた。

〔魚類〕 同定資料数は2群3点で、内訳はマグロ属尾椎1点、推定体長は200cm以上のマカジキ科腹椎2点であった。

48号遺構

〔貝類〕 同定資料数は11種64点(61個体)で、内訳はバイ29個体、オオタニシ15個体、サザエ、マガキが各4個体、メカイアワビ、クロアワビが各2個体、アカニシ、アカガイ、ヤマトシジミ、アサリ、ハマグリが各2個体であった。バイは殻高50～60mm台を主体として40～69mm、ハマグリは殻長40・90mm台、オオタニシは殻高4～6mmの胎貝と20～65mmの成員が含まれた。殻高4～6mmのオオタニシ4個体は、いずれも殻高50mm以上の大形個体の殻内に詰まっていた土の中に遺存していた。使用痕の認められるものには、パレットとして利用された可能性のあるハマグリ(殻長90mm台)と、熱を受けたマガキがあった。

〔魚類〕 同定資料数は10群11点であった。内訳はフサカサゴ科右前鰓蓋骨1点、コチ科腹椎1点、ハタ科右方骨1点、推定体長約30cmのクロダイ属左歯骨1点、推定体長約40cmのマダイ尾椎1点、メカジキ腹椎1点、マグロ属尾椎1点、マグロ属?の破損した椎骨2点、未同定の擬鎖骨?と部位不明が各1点であった。以上のうち腹椎・尾椎以外はいずれも魚の鰓周りを構成する部位である。

51号遺構

〔貝類〕 同定資料数は3種8点(8個体)で、内訳はバイ4個体、オオタニシ3個体、クロアワビ1個体であった。バイは殻高50～69mm、オオタニシは殻高25～39mmのものが含まれた。

61号遺構

〔貝類〕 同定資料数は2種8点(7個体)で、内訳はバイ6個体、ヌマガイ1個体であった。バイは殻高50～69mmのものが含まれた。

〔魚類〕 同定資料数は2群3点で、内訳は推定体長約40cmのマダイ上後頭骨1点、マグロ属尾椎2点であった。

91号遺構

〔貝類〕 同定資料数は1種4点(4個体)で、すべてバイであった。殻高は50mm台を主体として50～75mmのものが含まれた。

〔魚類〕 同定資料数は1群1点でカレイ科?尾椎であった。

池遺構 下層

〔貝類〕 同定資料数は4種14点(14個体)で、内訳はオオタニシ10個体、バイ2個体、アカガイ、

ハマグリが各1個体であった。バイは殻高55～64mm、ハマグリは殻長80～84mm、オオタニシは殻高40～50mm 台を主体として25～59mmのものが含まれた。

【魚類】 同定資料数は2群2点で、内訳はメカジキ尾椎1点、未同定鰓条骨1点であった。

93号遺構

【貝類】 同定資料数は4種7点(6個体)で、内訳はバイ3個体、ヤマトシジミ、ハマグリ、オオタニシが各1個体であった。バイは殻高45～64mm、ハマグリは殻長70～74mm、オオタニシは殻高35～39mmのものが含まれた。

【魚類】 同定資料数は1群2点で、内訳はマグロ属尾椎2点であった。

【II面の遺構に伴う資料】

第2-1・3層・第3層

【貝類】 同定資料数は5種6点(6個体)で、内訳はバイ2個体、ヤコウガイ(殻)、サザエ(殻)、タイラギ、サトウガイが各1個体であった。バイは殻高40～64mmのものが含まれた。ヤコウガイは殻口のみが残存しており、螺層と体層は打ち割られたものと推定される。今回の分析資料のうちヤコウガイはこの1点のみである。

35号遺構

【貝類】 同定資料数は5種22点(22個体)で、内訳はバイ18個体、サザエ、アカニシ、マガキ、ヤマトシジミが各1個体であった。ヤマトシジミは殻長10mm程度と小形であった。バイは殻高35～69mmのものが含まれた。

86号遺構

【貝類】 同定資料数は2種8点(5個体)で、内訳はハマグリ4個体、ヤマトシジミ1個体であった。ハマグリは殻長40mm 台を主体として40～74mmのものが含まれた。

その他の9遺構からは貝類のみが各1～3点検出された。内訳はバイ、サザエ、マガキ、ヤマトシジミ、ハマグリのうちいずれかを1～2個体ずつ含む組成で、8遺構からバイが出土している。

【表土および攪乱部から検出された資料】

第1層

【貝類】 同定資料数は3種19点19個体で、内訳はI区でサザエ、バイ、ハマグリ各1個体、II区でバイ15個体、ハマグリ1個体であった。II区のバイは殻高50～60mm 台を主体として50～75mmのものが含まれた。ハマグリはI区で30mm 台、II区で70mm 台のものが含まれた。

第1層(昭和校舎跡)

【貝類】 同定資料数は6種22点(20個体)で、内訳はI区でバイ12個体、アカガイ、ヤマトシジミが各2個体、サザエ、メカイアワビが各1個体、III区でバイ2個体であった。バイの殻高はI区では50mm 台を主体として45～64mm、III区では60～64mmのものが含まれた。

【魚類】 同定資料数は1群1点で、マグロ属尾椎であった。

その他、I区(1層)から殻高70mm 台のバイ1個体、ヤマトシジミ1個体、殻長40mm 台のハマグリ1個体、推定体長50cmのマダイ前頭骨1点が得られている。

■考察

今回同定した貝類と魚類の多くは、市場などで手に入れ、消費した食糧残滓と考えられる。ただ

し、淡水に棲息する貝類のヌマガイとオオタニシは、ヌマガイがあまり食用に向かないことや、雌と考えられる大型のオオタニシの殻内に胎貝⁽¹⁾が残存していたと考えられること、殻サイズの分布に人為的な偏りが認められないことから(第171図)、池に自然に棲息していたものと考えられる。この2種は池遺構出土資料にしか確認されていない。(宮本由子)

【謝辞】

種同定に際しては千葉県立中央博物館の黒住耐二氏、東海大学の丸山真史氏、帝京大学の植月学氏に現生標本をお見せいただき、ご助言を賜りました。また、整理作業員の皆さまには殻サイズの計測、図版作成をしていただきました。厚く御礼申し上げます。

【注釈】

(1) 大型のオオタニシは長寿の雌である。産まれた直後の新生貝の殻高は7mm程度であるため、4～6mmの本資料は胎貝であったと考えられる。

【参考文献】

黒住耐二 2021『くらべてわかる貝殻』山と溪谷社

第54表 出土魚類遺体同定結果

出土地点		時期	取り上げ単位 (法記)	小分類	部位	左右	数量	遺存状態	内容	
4号遺構		近世～近代	57号	マゴロ飯	尾端		2			
55号遺構			58号	マゴイ	尾端		1	1/2壊滅あり	標定体長50cm	
池遺構	上層		47号遺構	47号下	マカシ生貝	尾端		2		標定体長200mm以上
					マゴロ飯	尾端		1		
					マカシ生貝	尾端	右	1		
					コナシ	尾端		1		
					マゴイ	尾端	右	1		
					不明	不明		1		
			48号遺構	48上4北1	マゴイ	尾端		1		
			48上4北2	マゴロ飯	尾端		1		標定体長30cm	
			48上4北3	マゴイ	尾端		2	破損		
			48上4北4	不明	不明		1			
	48上4南1		マゴイ	尾端		1		標定体長40cm		
	61号遺構		61号	マゴロ飯	尾端		2		標定体長40cm	
下層	61号遺構	61号	マゴイ	尾端		1				
	93号遺構	93号	マカシ生貝	尾端		1				
		93号	不明	不明		1				
第4層	近代	93号	マゴロ飯	尾端		2		標定体長50cm		
94号		マゴイ	尾端	右	1			標定体長50cm		
第1層	近代	94号	マゴロ飯	尾端		1				
不明		不明	不明		1					

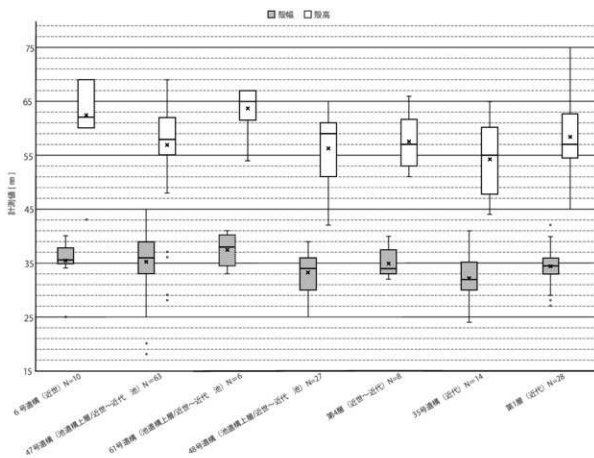
第55表 出土ハマグリ計測結果

出土地点		層高 [mm]	殻 長 [mm]											
			30-34	40-44	45-49	55-59	60-64	65-69	70-74	75-79	80-84	85-89	90-95	範囲
4号遺構 (近世)		45-49							1					1
		50-54								1				1
		55-59									1	1		2
池遺構	上層	47号遺構 (近世～近代)	35-39				1							
			40-44					1	1					2
			30-34			1								1
	下層 (近世～近代)	48号遺構 (近世～近代)	60-65										1	1
			55-59									1		1
			50-54								1			1
第4層 (近世～近代)		35-39				1								1
		50-54											1	1
66号遺構 (近代)		45-49							1					1
		25-29		1	1									2
86号遺構 (近代)		30-34			2									2
		45-49					1		1					2
第1層	1区表土 (近代)	15-19	1											1
	2区表土 (近代)	45-49								1				1
	不明 (近代)	35-39		1										1
総 計			1	2	4	2	2	2	4	1	2	1	2	23

第56表 出土バイ計測結果

遺構名、層名	層高 [mm]	厚 度 [mm]						
		15-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-43	総計
6号遺構 (近世)	40-44			1				1
	60-64				1	4		5
	65-69					2	2	4
33号遺構 (近世)	45-49				1			1
	25-29	1	1					2
47号遺構 (近世～近代)	35-39		1	2				3
	40-44		船破損1	船破損1				2
	45-49				1			1
	50-54			1・船破損2	7・船破損2	1・船破損1		14
	55-59				7・船破損3	14	2	26
	60-64				船破損1	11・船破損2	4	18
	65-69					3	7	10
	50-54			1	2			3
	60-64					2		2
	65-69					1		1
	40-44			1				1
	50-54				1			1
	55-59					2		2
	60-64				3	4		7
	55-59			1				1
60-64					1		1	
48号遺構 (近世～近代)	45-49			1				1
	60-64					1		1
	50-54					1		1
	55-59				1			1
	60-64							1
	40-44							1
	50-54				1			1
	55-59					1		1
	60-64					1		1
	65-69					1		1
51号遺構 (近世～近代)	50-54				2			2
	60-64					1		1
	65-69						1	1
	50-54				1			1
	60-64					1	1	2
	65-69					2	1	3
	50-54					3		3
	70-75						1	1
	55-59					1		1
	60-64					1		1
51号遺構 (近世～近代)	45-49			1				1
	55-59			1				1
	60-64					1		1
61号遺構 (近世～近代)	50-54				1			1
	60-64					1	1	2
	65-69					2	1	3
91号遺構 (近世～近代)	50-54					3		3
	70-75						1	1
	55-59					1		1
93号遺構 (近世～近代)	60-64					1		1
	45-49			1				1
	55-59			1				1
60-64	50-54				3			3
	55-59				1	1		2
	60-64				1	1		2
65-69	50-54						1	1
	55-59							1
	60-64							1
32号遺構 (近代)	50-54				船破損1			1
	45-49							1
	65-69					1		1
7号遺構 (近代)	45-49			1				1
	65-69					1		1
	50-54							1
36号遺構 (近代)	50-54				1			1
	35-39		船破損1		高・船破損1			1
	40-44		1	1				2
35号遺構 (近代)	45-49			1・船破損1	1			3
	50-54				1	1		2
	55-59					4		5
	60-64				1	2		3
	65-69						1	1
	40-44		2					1
43号遺構 (近代)	60-64					1		1
	50-54				1			1
	55-59				1			1
52号遺構 (近代)	55-59				1			1
	50-54				1			1
	55-59				1			1
55号遺構 (近代)	30-34		1					1
	50-54				1			1
	55-59					1		1
58号遺構 (近代)	50-54				1・高・船破損1			3
	55-59				3	1・高破損1		7
	60-64				1	4		5
表土	70-75						1	1
	45-49			2				2
	50-54				3			3
	55-59				3	2		5
	60-64					2		2
	60-64					2		2
	70-75						1	1
裏土	70-75			22	71	77	23	203
	60-64							1
	50-54							1
	45-49							1
	40-44							1
	35-39							1
	30-34							1

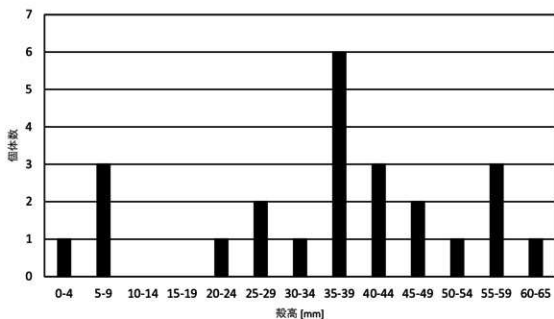
※破損部資料は残存長を示した。「高破損」は段高、「船破損」は段幅、「高・船破損」はいずれも残存長であることを示す



第 170 図 出土バイ殻高・殻幅分布 (N = 5 以上)

第 57 表 池遺構出土オオタニシ計測結果

出土地点		殻高 [mm]	殻幅 [mm]						総計	備考		
			0-4	5-9	25-29	30-34	35-39	40-44			45-50	
池遺構	上層	47号遺構	45-49						1	1		
			50-54						1	1		
			0-4	1							1	
		48号遺構	5-9		3						3	殻高最大6mm
			20-24			1					1	
			35-39					3			3	
			40-44						1		1	
	51号遺構	55-59							2	2		
		60-65							1	1		
		25-29				1				1		
	下層	35-39					1			1		
		25-29				1				1		
		30-34				1				1		
		35-39					1			1		
40-44							2		2			
45-49								1	1			
55-59							1		1			
93号遺構	35-39					1			1			
総計			1	3	1	3	8	3	5	24		



第171図 池遺構出土オオタニシ趾高分布

B. 鳥類

■資料と方法

分析対象に指定された鳥類遺体は56点であった。近世～近代に比定される。これらの資料のうち肋骨2点と椎骨1点を除く53点を分析対象とした。資料は現生骨標本との肉眼比較で同定した。現生標本として、北海道大学総合博物館の収蔵標本(HoUMVC)、川上和人氏(森林総合研究所;KP)および江田の所蔵標本(EP)を利用した。骨の部位の名称はBaumel et al (1993) および日本獣医解剖学会(1998)に、分類群名は基本的に日本鳥学会(2012)に従い、同書で言及されていないカモ科の亜科や族の分類はAmerican Ornithologist' Union (1998)に従った。資料の残存状態は、近位や遠位の関節が半分以上残っているものをそれぞれ近位端、遠位端とした。また、主要四肢骨では骨幹のほぼ中央にある栄養孔が残存している骨は骨体部として記載した。上記の近位端、遠位端、骨体部のすべてが残存している資料は完存とした。資料の破損が著しいために鳥綱以下の同定ができなかった資料は同定不能とした。各資料について骨の表面の粗さと骨端の癒合状態に基づく成長段階、同定時に目に付いた解体痕と加工痕を記載した。骨の成長段階は、すべての部位について未癒合のものは幼鳥、癒合しているものの形成が不完全な資料と骨体表面が粗い資料は若鳥とした。また、破損して髓腔を観察できた資料では骨髄骨の有無を記載した。

■結果

同定対象とした53点中、52点(98%)で科以下を単位とした同定ができた(第58・59表)。確認された分類群は、キジ科(ニワトリを含む)、カモ科(ガン族、マガモ属、ピロードキンクロ属、カモ亜科を含む)、ツル科、フクロウ科、カラス科の5目5科である。カモ科が同定破片数の約56%を占めて主体的で、キジ科が約33%でこれに続いた。他の分類群は3点以下の出土に留まった。若鳥の骨がキジ科で認められた。骨髄骨を含む骨はいずれの分類群でも認められなかった。解体痕はカモ科で2例、キジ科とツル科で各1例認められた。以下、分類群ごとに特徴を記す。

【カモ科（ガン族、マガモ属、ピロードキンクロ属、カモ亜科を含む）】

29点が確認された。そのうち6点はガン族、23点はカモ亜科と同定された。ガン族と同定された資料にはカリガネ(KP80-2)とほぼ同大の資料が2点、マガン(EP-25)とほぼ同大の資料が2点、両者の中間程度の大きさの資料が1点、マガン(EP-25)より大きな資料が1点認められた。複数種に由来すると考えられる。カモ亜科と同定された資料にはホシハジロ(EP-83)程度からオナガガモ(EP-4)程度、カルガモ(EP-84)程度、ケワタガモ(KP116-1)程度まで様々なサイズの資料が認められた。とくにオナガガモ(EP-4)程度とカルガモ(EP-84)程度の資料が多かった。複数種に由来すると考えられる。近位端の残存するカモ亜科の上腕骨を江田(2005)の基準で分析した結果、3点がマガモ属、1点がピロードキンクロ属と同定された。池遺構上層から出土したガン族の手根中手骨とカモ亜科の上腕骨では、ともに近位端が切断されていた。

【キジ科（ニワトリを含む）】

17点が検出された。そのうち後腓骨頭靭帯の付着部が線状を呈する脛足根骨4点と内側足底縁のない足根中足骨2点は江田・井上(2011)の基準からニワトリと同定された。ニワトリと同定できた資料のうち4点はキジ(EP-143)よりかなり大きい資料であった反面、ヤマドリ(EP-144)と同大の資料も1点認められた。ニワトリと同定された2点の足根中足骨にはいずれも距突起は認められなかった。一方、池遺構下層出土の脛足根骨は後腓骨頭靭帯の付着部が球状であることから、池遺構上層出土の足根中足骨は内側足底縁があることからニワトリ以外のキジ科と同定できた。後者では距突起は認められなかった。また4層出土の大腸骨は大転子含気窩がないことから、キジ以外のキジ科と同定された。同資料はヤマドリ(EP-144)より小さいものであった。池遺構上層からは骨幹の粗い若鳥の足根中足骨が2点検出された。両資料ともに内側足底縁はないものの、ニワトリと同定することは保留した。うち1点は距突起の基部のみが認められ、もう1点では距突起は認められなかった。キジ科と同定した資料中にもキジ(EP-143)より大きく、シャモロック(ニワトリ)(HoUMVC31280)程度の標本が含まれており、ニワトリが少なからず含まれていると考えられた。池遺構上層から出土した左上腕骨は背側頸背縁が一部切断されていた。

【その他の鳥類】

カラス科が3点、フクロウ科が2点、ツル科が1点認められた。カラス科はいずれもハシブトガラス(EP-13)とほぼ同大の資料であった。フクロウ科はいずれもフクロウ(EP-36)より大きい資料であった。ツル科はナベツル(EP-99)とほぼ同大の上腕骨で、腹側頸は切断されていた。(江田真毅・許開軒)

【謝辞】

川上和人氏(森林総合研究所)には所有する骨標本を閲覧させていただいた。北海道大学総合博物館のボランティアの皆様には比較骨標本の作成をお手伝いいただいた。記して御礼を申し上げる。

【引用文献】

- 江田真毅 2005「生活復原資料としての鳥類遺体の研究—カモ亜科遺体の同定とその考古学的意義—」海交史研究会考古学論集刊行会編『海と考古学』、六一書房、387-406。
- 江田真毅・井上貴央 2011「非計測形質によるキジ科遺存体の同定基準作成と弥生時代のニワトリの再評価の試み」動物考古学 28 : 23-33。
- 日本獣医解剖学会 1998『家畜解剖学用語』、日本中央競馬会、東京。
- 日本鳥学会 2012『日本鳥類目録改訂7版』、日本鳥学会、三田。

American Ornithologist' Union, 1998. The AOU Check-list of North American Birds, 7th Edition, American Ornithologist' Union, Washington, D.C.

Baumel, J.J., King, A.S., Breazile, J.E., Evans, H.E., Berge, J.C.V. 1993. Handbook of Avian Anatomy: Nomina Anatomica Avium, Nuttall Ornithological Club, Cambridge.

第 58 表 鳥類種名表

鳥類			
キジ目		ツル目	
キジ科		ツル科・属種不明	Gruidae sp.
ニワトリ	<i>Gallus gallus domesticus</i>	フクロウ目	
属種不明 [複数種]	Phasianidae spp.	フクロウ科・属種不明	Strigidae sp.
		スズメ目	
カモ目		カラス科・属種不明	Corvidae sp.
カモ科			
ガン属科			
ガン属・属種不明 [複数種]	Anserini spp.		
カモ属科			
マガモ属 [複数種]	Anas spp.		
ビロードキンクロ属	<i>Melanitta</i> sp.		
属種不明 [複数種]	Anatinae spp.		

※学名表記は、配列は日本鳥学会 (2012) および American Ornithologist' Union (1983) に従った。

第 59 表 元浅草遺跡における鳥類の出土量

整理遺構/勾当層	年代	小分類	部位	残存
6号遺構	近世	キジ科	大腿骨	Lm1
70号遺構	近世	ガン属	手船中手骨	Rw1 ±
75号遺構	近世~近代	カモ亜科	上腕骨	Lmfr1
80号遺構	近世~近代	ツル科	上腕骨	Lw1
池遺構	上層	ニワトリ	胫足骨	Ip-m1
			足船中足骨	Rw1 ±; Lm-d1
		キジ科	上腕骨	Rp1; Lw1
			足船中足骨	Rw1*, Rw1; Lw1*
		ガン属	上腕骨	Rm-d1; Rmfr1
			手船中手骨	Lw1
			胫足骨	Rmfr1
			卜腕骨	Lmfr1
		カモ亜科	胸骨	1
			鳥口骨	Rw1 ±; Lw1 ±
	蹠甲骨		Rw1 ±; Rw1	
	上腕骨		Rm-d1; Lm1	
	尺骨		Rw1; Rp-m1; Lw1 ±	
	桡骨		Rw1 ±	
	手船中手骨		Lw1 ±	
	腹骨		1	
	大腿骨		Rw1; Lw1	
	マガモ属		上腕骨	Lw1 ±
	ビロードキンクロ属	上腕骨	Rw1 ±	
	フクロウ科	胫足骨	Rw1	
カラス科	尺骨	Rm-d1		
	足船中足骨	Lw1 ±		
種不明鳥類	桡骨	1 ±		
	肋骨	2		
下層	近世~近代	ニワトリ	胫足骨	Rw1 ±; Ip-m1
		キジ科	胫足骨	Ld1; Ip-m1
	ガン属	胫足骨	Rd1	
	カモ亜科	尺骨	Rw1	
	フクロウ科	足船中足骨	Rw1	
93号遺構	近世~近代	マガモ属	上腕骨	Rp-m1; Lw1
		カラス科	足船中足骨	Rw1
		種不明鳥類	尺骨	mf1
第2・1・3層・第3層	近代	カモ亜科	胸骨	1
		ニワトリ	胫足骨	Rw1*
第4層	近世~近代	キジ科	胸骨	1
			大腿骨	Lw1
表段		キジ科	胫足骨	Rm-d1

※Rは右、Lは左の資料を示す。残存状態はw: 完好、p: 近位端 (鳥口骨では胸端)、d: 遠位端 (鳥口骨では跗端)、c: 骨体部、sfr: 骨体部破片。胸骨は竜骨突起のあるものを、翼骨は癒合仙骨のあるものをカウントした。また、* 若鳥、±: 骨輪部の有無不明を示す。

C. 爬虫類

スッポン (*Pelodiscus sinensis*) の下腹骨板・右の破片が 1 点出土している。食物残渣と推測される。

D. 哺乳類

6 群 12 点が出土している。ネコが 6 点で最も多く、50.0% を占める。そのほかに、ウシ (2 点・16.7%)、ウサギ科、マイルカ科、ウマ、同定対象外 (各 1 点・8.3%) が出土している。なお、同定対象外とした資料は中型哺乳類の肋骨で、サイズからイヌと推定される。種名表では「イヌ?」として掲載した。

その内、ウシとマイルカ科は食物残渣と推定される。ウサギ科もその可能性が高い。なお、ウシの頸椎 1 点 (No 69) は矢上方向に切断されている。 (阿部常樹)

第 60 表 爬虫類・哺乳類種名表

爬虫類		クジラ目	Order Cetacea
爬虫綱	Class Reptilia	ハクジラ亜目	Suborder Odontoceti
カメ目	Order Testudines	マイルカ科	Family Delphinidae
スッポン科	Family Trionychidae	属種不明	gen. et sp. indet.
ニホンスッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i>		
哺乳類		偶蹄目	Order Artiodactyla
哺乳綱	Class Mammalia	ウシ科	Family Bovidae
ウサギ目	Order Lagomorpha	ウシ	<i>Bos taurus</i>
ウサギ科	Family Leporidae		
属種不明	gen. et sp. indet.	奇蹄目	Order Perissodactyla
食肉目	Order Carnivora	ウマ科	Family Equidae
ネコ科	Family Felidae	ウマ	<i>Equus caballus</i>
イエネコ	<i>Felis silvestris catus</i>		
イヌ科	Family Canidae		
イヌ?	<i>Canis demillaris?</i>		

15) 植物遺体

植物学的同定は行っていない。モモまたはウメの内果皮、マテバシイの堅果、サルノコシカケなどとみられるものが数点出土している。一般的に、サルノコシカケは生育中に自然に宿主から離脱することは少ないと言われているので、本資料は人為的に剥がされたものの可能性もある。一部のサルノコシカケは漢方薬の材料として珍重されてきたので、保管されていたものかもしれないが、利用痕跡は見られないので、本項で扱った。なお、ここでは「サルノコシカケ」の語を、半円形から扇形の傘を持ち、木質で硬いキノコの総称として用いた。 (両角まり)

V 分析と考察

1 元浅草遺跡・白鷺高校地区の江戸時代における土地利用

渋谷 葉子

はじめに

本稿は台東区元浅草遺跡のうち、白鷺高校地区の発掘調査に伴う文献史料の調査である。本調査地は江戸時代には概ね武家地となっており、本稿では文献・絵図史料から、その所持者ごとに変遷と利用のあり方を明らかにしていく。また屋敷絵図の存在も確認されたので、これについても検討を加える。

なお屋敷地所持者等の履歴については「屋敷地所持者等履歴」(第61表)、各家及び屋敷地利用の変遷については「元浅草遺跡・白鷺高校地区江戸時代屋敷地関係年表」(第62表)にまとめたので、適宜参照されたい⁽¹⁾。

1. 幕府与力・同心組屋敷時代

【寛永～明暦期】

本調査地周辺の土地利用のあり方が判明する最初は、寛永19～20年(1642～1643)の様相とされる「江戸全図」(第172図)からである。それによれば調査地に比定される位置には、「御歩行衆」1筆、「御土蔵番衆」2筆、「新庄美作与力同心」1筆があり、つまり徒組と土蔵番、また新庄美作守直房は当時書院番頭を務めており、その配下の与力・同心の組屋敷があったと確認される。

次々明暦3年(1657)の様相とされる「江戸大絵図」(第173図)では、一带に「酒井飛騨与力足軽」となっている。酒井飛騨守重之は書院番頭であり、したがって調査地周辺にその配下の与力・同心組屋敷が広がったことが判明する。

しかし同じ明暦3年のうちに(月日は不詳)、この組屋敷地は備前岡山藩池田家へとわたることになったのである。

2. 岡山藩池田家屋敷時代

【明暦～万治期】

岡山藩池田家は備前・備中国内31万5,000石を領する大名家である。同家の江戸屋敷は当時、大名小路に上屋敷、その道を隔てた東側に「向屋敷」、向屋敷の道を隔てた南東に「新屋敷」と呼ぶ中屋敷と、さらに浅草鳥越にも中屋敷を所持していた。うち新屋敷が明暦3年正月18～19日に発生した明暦の大火後に幕府が行った大規模な武家屋敷の割り替えで上地となり、その代地として同年5月15日、浅草三十三間堂前の60間四方の土地が池田家に与えられた。

しかし時の藩主光政は、この地は不便だとして替地を望んで動いたようで、同じ明暦3年のうちに(月日は不詳)、下谷守町の酒井飛騨守与力同心屋敷との引き替えを約定し、幕府の許しも得てその獲

得に至った。池田家ではこの屋敷を「下谷屋敷」と呼称した。

獲得翌年の万治元年（1658）、下谷屋敷で土木^②が始まった。これは光政の世子綱政の屋敷を建造するためであった。着工時期ははっきりしないが、まず「地形築七申奉行並大工・役人・諸奉行入ノ小屋懸」が命じられ、それから作業が進められたもようである。同年7月に落成、同月15日に綱政が引き移った。下谷屋敷はこうして世子の居屋敷として利用されることとなり、それには格式に応じた殿舎、そして武家屋敷には必須の庭園も備えていたと推定される。また当時、綱政は板倉阿波守重郷女と婚約をしており、御殿奥向にはその住居も設けられていたとみられる。重郷女は同じ万治元年の8月9日に没したため入興には至らなかったが、同3年（1660）4月14日、綱政は丹羽左京大夫光重女と婚姻して、光重女が下谷屋敷に入興した。

【寛文期】

その後、寛文4年（1664）には下谷屋敷で新宅の作事が行われたもようである。同年3月11日、成就に当たり藩主光政より担当の奉行以下棟梁へ褒美が与えられている。

寛文8年（1668）2月4日、上野車坂からの出火により下谷屋敷は焼失した。在府中であった綱政は夫人とともに大名小路の上屋敷に退避し、同月19日に浅草新屋敷に移った。そして光政は同月中に麻布善福寺より寺地の一部を借地する約定を整えて早速作事に着工、それは程なく成就して世子綱政と夫人が入った。この屋敷は「麻布屋敷」と称され、以後綱政一家の住居となった。

一方焼失後の下谷屋敷では、藩主光政の命により土木が止められた。下谷屋敷は卑湿であるため予てより心に適わず、他所に替えたいと光政は思案していたという。そしてその旨を受けて家臣らが下谷屋敷に替わる土地を方々吟味し、上・下大崎村に跨る場所を見出して寛文10年（1670）春、その土地と下谷屋敷を替える出願を幕府にしたところ、同年3月1日に許可された。こうして池田家は大崎屋敷を獲得し、下谷屋敷は幕府へ上地されたのであった。

3. 泉藩本多家屋敷時代

【寛文～正徳期】

寛文10年、本多弾正少弼忠晴へ元竹蔵（浜町）より下谷新寺町に上屋敷を替えることが命じられた。忠晴は当時、陸奥浅川藩1万石の藩主を務めていた。屋敷替えの月日は不明だが、屋敷地は同年3月1日、岡山藩池田家より上地されたものであり、したがって本多家の拝領はそれ以降となる。規模は縦51間7寸5分・横86間5尺2寸5分（田舎間）、坪数は4,107坪5合で、本多家ではこの屋敷を「下谷屋敷」と呼称した。翌寛文11年（1671）の様相である「新板江戸外絵図」（第174図）に「本田（多）ダン正」と記載されており、所在が確認される。そして以後、この屋敷地は形を変えることなく、幕末まであり続ける（第175～180図「御府内往還其外沿革図書」）。

延宝7年（1679）10月5日、忠晴は千束龍泉寺村に2,499坪の土地を金150両で購入し、抱屋敷とした。下谷上屋敷に近く、その控えだったとみられ長屋を設けており、また隠居屋敷や保養地としても用いた。なお享保8年（1723）12月に「中屋敷」と呼称を定め、宝暦期（1751～）頃よりは「金杉中屋敷」と呼ぶようになっている。

さて忠晴は天和元年（1681）9月15日、三河伊保1万石に転封されて藩主となった。元禄5年（1692）6月27日には大番頭を命じられており、下谷上屋敷もこれに応じた機能を備えたものとみ

られる。

元禄11年(1698)9月6日、南鍋町からの出火が南風に煽られて千住にまで及んだ。これは俗に「勅願火事」また「中堂火事」と呼ばれた大火で、本多家下谷上屋敷も焼壊した。このとき忠晴は在府中だったか、避難した屋敷や被害のもようなど全く不明である。また下谷上屋敷は再建されたはずだが、そのようすや成就した時期なども明らかでない。

元禄14年(1701)2月5日には本所大横堀(本所三ツ目通)の拝領下屋敷を返上して、西葛西小梅村に3,000坪の代地を拝領した。「小梅下屋敷」と呼称して天明8年(1788)まで所持し、罹災時の臨時の居屋敷や隠居屋敷、また風光明媚な土地柄から療養や保養に訪れる別邸として利用した。

元禄15年(1702)6月10日、忠晴は奏者番兼寺社奉行に任じられた。寺社奉行は自宅に役屋敷を置くことになっており、したがって下谷上屋敷表向のうちに白洲などの施設が設けられたとみられる。

宝永2年(1705)12月11日、遠江・三河国内に5,000石が増加されて、本多家の領知は都合1万5,000石となった。また同7年(1710)閏8月、三河国内9,000石が遠江国内に改められて、忠晴は同国相良に移封となりその藩主となった。

正徳3年(1713)正月晦日、忠晴は立ち居が不自由となったため奏者番兼寺社奉行の辞任を願い、同年閏正月7日に許可された。そして同5年(1715)4月12日に江戸で没し、忠晴の嫡孫忠通が同年6月6日、遺領を継いで遠江相良1万5,000石の藩主となった⁵³⁾。

【享保～寛保期】

享保期に入ると、下谷上屋敷は度重なる火災に見舞われる。まず享保2年(1717)6月9日、小伝馬町三丁目からの出火で全焼、そして翌3年(1718)12月11日に上野屏風坂よりの出火でまた全焼した。この火災後、藩主忠通は小梅下屋敷に居住し、一方下谷上屋敷は再建が進められたもようで、途中享保4年(1719)3月10日には下谷七軒町からの出火で表長屋西角から裏門までと内長屋1棟を焼失したものの、同年6月11日に忠通は再建がなった下谷上屋敷へ引き移った。

しかしその翌年、享保5年(1720)3月27日、中橋箔屋町からの出火で下谷上屋敷は西長屋通りを焼失し、さらに翌6年(1721)3月3日には三河町からの出火でまたも全焼してしまった。これにより忠通は再び小梅下屋敷に引き移ったが、この年の6月から不快を訴えるようになり、そして7月2日、小梅下屋敷で没した。わずか数え17歳であった。

下谷上屋敷は焼失から約5ヶ月ののち、享保6年間7月9日に御殿向と表長屋、その他長屋向の新始が行われて再建に着手され、同年9月22日に出来た。この間、閏7月23日に忠通の遺領は本多家宗家より養子入りした忠如が継いだ⁵⁴⁾。忠如は相続後も宗家の幡随院下屋敷に滞在していたが、下谷上屋敷の成就に当り、実母自得院(忠直妾しげ)とともにそれへ引き移った。

享保12年(1727)5月25日、忠如と松浦肥前守篤信女吉との縁組が幕府に認められ、同年9月19日に結納が交わされた。享保20年(1735)2月24日、自得院(忠如実母)が下谷上屋敷より小梅下屋敷に引き移ったが、これは忠如の婚姻に伴い、その室に御殿奥向を明け渡すためだったとみられる。そして同年3月10日より下谷上屋敷奥御殿向の建築が開始されて6月までに出来し、同月27日に吉が入興した。

なおこの間、享保19年(1734)9月28日には、下谷上屋敷の庭園築山後ろの北方にあった稲荷

が、馬場北の末に宮を建てて遷された。

忠如と正室吉の間には、元文4年(1739)12月8日に長男忠壽(雄之進)が、寛保3年(1743)3月27日には長女房が誕生しており、下谷上屋敷奥向にはそれらの部屋が設けられたとみられる。

【延享～宝暦期】

延享3年(1746)9月25日、忠如は遠江相良より陸奥泉への転封を命じられ、翌4年(1747)2月27日にその受け取りが済んだ。そして以後、本多家が泉藩主を務めることとなる。

下谷上屋敷では延享4年8月16日より表長屋の建て直しに着手され、これまでの板屋根が瓦屋根に替えられた。同様の作事が宝暦元年(1751)9月に北長屋で、同4年(1754)4月3日には玄関向で、それぞれ行われた。当時の下谷上屋敷は享保6年閏7月から約2ヶ月半という短期間で出来したもので、また度重なる火災によって財政難だったとみられ、したがって材や格式の多くを簡略に済ませていたと考えられ、それを段々と本式の御殿に造り替えていたことが窺える。

寛延2年(1749)4月7日、忠如正室吉が病のため離縁となる。忠如の妾で男子忠貫(健之丞、八郎)を生んだ八重もまた同日暇を出された。これに伴ってとみられるが、同月21日に吉の女子房が中屋敷(千束龍泉寺村抱屋敷)へ、27日には八重の子忠貫が小梅下屋敷へ、それぞれ下谷上屋敷より移された。この結果、下谷上屋敷には世子忠壽のみが残った。

藩主忠如はこの翌年から病勝ちとなり、さまざま療治を試みたものの快癒せず、宝暦4年(1754)8月21日に幕府へ隠居を願い、同月29日に許されると同時に、世子忠壽へ家督が下し置かれた。

宝暦9年(1759)3月18日、小梅下屋敷に居住していた忠貫が下谷上屋敷のうち西長屋南角に引き移った。忠貫はのちの同年6月13日に藩主忠壽の仮養子と認められており、そのための移居だったとみられ、さらに宝暦11年(1761)12月晦日には下谷上屋敷の御殿内に移居した。

宝暦14年(明和元・1764)5月21日に、隠居忠如が下谷上屋敷より中屋敷(金杉抱屋敷)に引き移り、以後没するまで居住することになった。

そしてこの頃、下谷上屋敷の西長屋と北長屋、その他長屋も建て直しが行われて、宝暦14年3月4日までに出来、修復等も行われた。また同年中に中屋敷と小梅下屋敷でも長屋向の建て直しと修復等があった。こうした3屋敷にわたる大幅な長屋の改築は、述べてきたような藩主一家の住み替えと、さらに当時忠壽の婚姻も後述のように決まっておき、そういう状況に応じた家臣団の住まいの再構成であったと考えられる。

【明和～安永期】

明和元年6月13日、下谷上屋敷の奥御殿向で新始が執行されて作事が始まった。宝暦12年(1762)12月29日、忠壽と松浦肥前守誠信女富との縁組が幕府に認められ、翌宝暦13年(1763)6月5日に結納が交わされており、その入輿を控えての奥御殿建設であった。建物の修復に留める場所もあったといい、従来の御殿を利用しつつの作事だったもようで、明和元年9月21日、富がこの御殿に入った。なお先立つ同月16日には、忠貫が御殿住居から表長屋東角長屋に移居となった。

明和2年(1765)8月2日、富は長男忠雄(雄之進)を出産した。同5年(1768)3月9日には忠満(熊之助)を生んだが、その産後に浮腫を生じて同年5月15日に没した。翌明和6年(1769)5月29日には表長屋東角長屋に居住していた忠貫も没した。

明和9年(天明元・1772)2月29日、目黒行人坂よりの出火が延焼し、同夜下谷上屋敷が全焼した。

藩主忠壽は帰国中で、屋敷には忠雄と忠満がいたはずだが、退避のもようやその後の住まいなど一切不明である。被害は「若殿様（忠雄）御土蔵 式戸前」・「十番御土蔵」・「米土蔵」・「御服土蔵」・「建具土蔵」が焼失、「若番御土蔵」・「式番御土蔵」・「御枕土蔵」・「御小納戸土蔵」・「米土蔵」・「御殿土蔵」・「貸土蔵」が残り、稲荷社も焼失を免れたという。このように耐火性の土蔵も多くなが焼失しており、御殿や長屋はほぼ全滅だったと推察される。

焼失から5ヶ月足らずの明和9年7月、下谷上屋敷では長屋が出来て家臣が順次引き移り、仮御殿も造られて、同年9月7日には忠壽が参府しており、それへ入り居住したものとみられる。忠雄と忠満が何れに居住していたかは不明だが、忠満は松浦左京信豊の養子となり、安永7年（1778）閏7月5日に養家に移った。

そして安永8年（1779）11月22日、世子忠雄が下谷上屋敷普請出来につき引き移り、翌安永9年（1780）6月1日には忠壽が、住居向および表門通り玄関等普請出来につき参府と同時にそれへ移徙しており、焼失から約8年を経て漸く下谷上屋敷は本御殿の再建をみた。

【天明期】

天明2年（1782）3月、明和9年の焼失以来仮建てであった裏門が本建てとされ、その西方棟続きには長屋が設けられた。これは世子忠雄の婚姻に関わったものと考えられる。すなわち天明2年5～6月に忠雄と堀田豊前守正毅妹幸との縁組が進められたからで、6月1日には普請金500両のうち300両が堀田家より本多家へ渡されており、奥御殿建設のためだったとみられる。そして6月5日に結納を取り交したが、7月4日に忠雄が病気のため、暑中保養として中屋敷に内々に移った。そして12月9日に奥御殿向の普請が出来たものの、翌天明3年（1783）2月19日、両家熟談の上離縁となり、幸がその奥御殿に入ることはなかった。

忠雄は中屋敷に居続けて病は癒えたが再発も計り難く、当人もそう考えて世子退身を望み、天明5年（1785）3月4日にそれが容れられ、世子には忠誠（勇次郎）が立つこととなった。忠誠は忠壽の最初の子で妾腹のため二男とされ泉に暮していたが、忠雄の病によってか天明2年12月1日、突如江戸への引越しを命じられて、以来下谷上屋敷にあったとみられる。一方忠雄は引き続き中屋敷に暮すことになった⁵⁾。

天明5年12月23日、世子忠誠と板倉伊勢守勝暎女八百との縁組が決まり、翌6年（1786）3月21日、普請金300両のうち150両が板倉家より本多家へ渡され、4月4日には下谷上屋敷奥向の「修復」が終った。恐らく離縁となった幸の奥御殿を引き継いで八百に相応に修繕したものとみられ、八百は同月22日にそれへ入奥した。

天明6年7月12日より続いた大雨で出水が発生し、本多家は上・下・抱屋敷とも甚大な被害を蒙った。まず7月16日に小梅下屋敷と中屋敷が被災、忠雄は中屋敷門前の長国寺へ退避し、翌17日に娘の曾根らと下谷上屋敷に避難したが次第に増水したため、翌18日に中ノ口から乗船して湯島麟祥院に立ち退いた。そして同日夜四時半過ぎ、忠誠室八百が玄関から船に乗り蔵前より駕籠で実家板倉家の小川町上屋敷に退避、忠誠も同屋敷へ時刻過ぎ、蔵前まで船で、以後は平時の供立で入り、忠壽は翌日寅刻過ぎに馬で三河岡崎藩本多家の日比谷上屋敷に退避した。家中は家族らと主家が用意した雇船で17日夕より知己へ避難していた。同月23日に下谷上屋敷から大方水が引き忠壽が帰座、翌日から家中が、27日からは奥女中が追々戻り、28日に忠誠と八百も帰った。被害状況は不明だが、

戻った家中へは屋敷の所々に居風呂を設置して随意の入湯を命じ、奥女中へは長局多湿につき蒼朮⁶⁰を下し、以後も葉湯や煎じ葉を下賜するなど、復旧作業と浸水家屋に住み続けるに当り、衛生と湿気への対策に腐心したようすが窺われる。

天明7年(1787)7月17日、忠壽は若年寄を命じられた。そして同月25日、酒井大学頭忠崇の大手前屋敷を家作とも下された。その代替として下谷上屋敷の家作とも差し上げを命じられ、それが酒井に下された。大手前屋敷は幕閣の役屋敷で、若年寄を務めていた酒井忠崇の父忠体が没したため、同役となった忠壽に入れ替えられたものであった。同年8月7日、大手前屋敷を酒井家より受け取り、家中の移居が完了してのち、8月13日に忠壽と世子忠誠、八百とも引き移った。そしてこの翌々15日、下谷屋敷は酒井家に引き渡された。

4. 松山藩酒井家屋敷時代

【天明～寛政期】

天明7年7月25日、出羽松山藩主酒井大学頭忠崇へ大手前上屋敷の家作とも差し上げが命じられ、本多弾正少弼忠壽の浅草七軒町屋敷の家作とも下賜が伝えられた。若年寄を務めていた忠崇の父忠体が同年4月18日に没し、その役屋敷が新たに若年寄となった本多忠壽に与えられて入れ替えとなったのである。8月7日に本多家へ大手前屋敷を引き渡すことが決まり、先立つ8月5日に忠崇らは一旦扇橋枳屋敷に引き、同月15日、本多家より浅草七軒町屋敷を受け取ると翌々17日から家中の引越しが始まり、22日に忠崇一家の引き移りも済んだ。そして以後幕末まで酒井家上屋敷となるが、述べているように酒井家ではこの屋敷を「浅草七軒町屋敷」と称した。

寛政6年(1794)11月25日、忠崇の習養子、忠礼が浅草七軒町上屋敷に移り住んだ。忠崇は長男彥次郎を天明8年(1788)8月16日に亡くしていたため、宗家の出羽庄内藩本多家より藩主忠温二男忠順の長男忠礼(春之進)を、養女鉞と婚姻させるべく迎えたのである。鉞は忠休三男、つまり忠崇の実兄で旗本水野越中守忠榮の養子となった忠体の女で、時期は不詳だが忠崇の養女となり浅草七軒町屋敷に暮したとみられる。奥向では寛政8年(1796)11月11日に忠崇正室きい、翌9年(1797)8月19日には忠崇実母皆知院と立て続けに主人を失い、以後は鉞がその立場を担った可能性がある。

寛政10年(1798)6月15日、世子忠礼の婚礼が同年秋と定まった。そして翌7月に忠崇の新御殿が普請されることとなり、それが出来して9月24日、忠崇と忠礼の御殿の住居替えが行われた。後述の推移からすると、忠崇の新御殿はいわば隠居屋敷だったと理解され、忠崇はそれへ引き移り、表御殿を近く藩主となる忠礼に明け渡したものとみられる。すなわちその4日後、寛政10年9月28日に忠礼と鉞の結納と婚儀が執り行われて11月26日に忠崇は隠居し、忠礼が家督を継いだのであった。

【享和～文化期】

享和2年(1802)、浅草七軒町上屋敷の西長屋35間のところが建て直された。これには御用部屋、御物頭部屋、御家中部屋、御近習部屋、御手廻部屋、通部屋、弦木啓助・斉藤伝吾・阿部与兵衛の部屋、御小姓部屋、外明部屋があり、うち御用部屋と御物頭部屋は門付きで本多家時代の名残だったという。

文化3年(1806)3月4日の芝田町よりの出火が延焼し、翌5日未明に浅草七軒町上屋敷が類焼

した。藩主忠礼は大坂加番のため不在であった。この火災により隠居忠崇は幕府医師橋隆庵の上野池之端抱屋敷に退き、即日豊後府内藩松平長門守近備の本所石原中屋敷に移り、忠礼室鍼は息女たちと実家の旗本水野鑑之進本郷御弓町屋敷に立ち退いた。忠礼は本腹に3人の女子を儲けていた。また真鶴（忠休二男忠起女、忠休養女、のち勝）は同居していた皆如院の没後も浅草七軒町上屋敷に居残っていたが、この機に実兄忠夷（忠起長男）一家の住まいとなっていた酒井家四谷仲町中屋敷に退避した⁷⁷。

浅草七軒町上屋敷は、文化3年3月のうちに長屋向普請掛、4月になって仮住居・長屋向・隠居御殿普請御用掛が命じられた。5月には上州領桐生町・大間口村から長屋向普請のため御用金を徴収して着工・出来したもようが、同年中に在府・在勤の者へ新長屋への引移費用貸与があったことから推定される。文化3年8月21日に忠礼が大坂より帰府した際、何れの屋敷に入ったかは明らかでないが、その後10月に家中へ5ヶ年の寸志上米を命じ、領民に上屋敷類焼につき寸志金を上納させ、また手当金を得ようと幕府に大坂加番を内願し、文化4年（1807）2月に命じられて同年7月から翌文化5年（1808）8月8日まで勤めた。そうして調達した資金で御殿向の再建に着工したもようで、同年11月には仮御殿と長屋向、さらに隠居忠崇の御殿も建設を終えた⁷⁸。

それから6年後の文化11年（1814）10月、江戸屋敷の御殿普請が計画されて資金調達について調査のため家臣を上州陣屋に派遣し、翌11月には上州領分より冥加金1,550両が上納された。そして文化12年（1815）2月には御殿向普請御用取扱が任命されて着工したもようで、その普請が5ヶ月を経た7月に出来したこと引き移りが行われた。この御殿向普請とは、浅草七軒町上屋敷の仮御殿を正式な御殿に改めたものと考えられ、出来した御殿に引き移ったのは忠礼ら藩主一家とみられる。

【文政～嘉永期】

文政4年（1821）7月23日、藩主忠礼が江戸で没して、9月16日にその長男で世子となっていた忠方が遺領を継いだ。忠礼室の勇（鍼より改名）は光寿院と号しており剃髪したようである。また文政7年（1824）4月6日には、隠居忠崇も江戸で没した。前述のように忠崇は浅草七軒町上屋敷の隠居御殿に暮らしていた。

文政11年（1828）正月8日、浅草西蓮寺門前よりの出火が浅草七軒町上屋敷にも及んだが、裏手の北長屋と蔵が類焼するに留まった。同年8月25日には江戸に光寿院の御殿が出来て移居しており、これは浅草七軒町上屋敷のうちであった。

文政12年（1829）6月7日、藩主忠方の縁女、豊前中津藩主奥平大膳大夫昌高女鉄が、奥平家屋敷が類焼したため急速酒井家屋敷に逗留することとなった。既述のように光寿院は前年に別御殿に移居しており、したがって浅草七軒町上屋敷奥向に入ったものとみられる。そして天保2年（1831）6月、鉄は縁女のまま浅草七軒町上屋敷に引き移り、翌同3年（1832）閏11月26日に内輪の婚儀、さらに翌同4年（1833）4月22日に婚姻が整って正式に奥向の主人となった。鉄は天保6年（1835）6月14日、嫡子となる男子を生んだが同日に亡くし、以後子のないまま天保15年（弘化元・1844）6月晦日に没した。

弘化2年（1845）4月18日、忠方の長男忠良（曙七郎）が松山より江戸に着いた。忠良は天保2年5月24日に妾腹に出生した忠方最初の男子であった。忠良出府の命は俄だったようで、迎える

江戸屋敷では普請方が大騒ぎで当座の部屋を何とか間に合わせたといい。そして弘化2年9月5日に幕府へ忠良世子の届出を済ませ、10月1日に將軍家慶と世継家祥に初目見した。それから忠方は隠居を出願したもようで、11月20日に許可されて忠良が家督を継いだ。忠方は隠居に当り本所原庭の織田兵部少輔抱屋敷を譲り受けて、弘化2年12月25日に浅草七軒町上屋敷から移り以後居住した。

嘉永2年(1849)8月、藩主忠良は武蔵岩槻藩主大岡内膳正忠女晴と婚姻した。これに先立ち同年3月には浅草七軒町上屋敷の奥御殿向普請が行われ、4月に晴が引き移ったもようである。そして嘉永3年(1850)6月12日、晴は女子を生んだが死産で、自身も肥立ちが悪く同月20日に没した。翌嘉永4年(1851)2月、忠良は志摩鳥羽藩主稲垣津守長明の妹鋭と結婚、同月26日に鋭が浅草七軒町上屋敷に入興して4月3日には婚姻が成立したもようで、鋭は正式に忠良の継室となった。翌嘉永5年(1852)4月6日に鋭は嫡子となる長男春之進を生んだが、翌年7月15日にその子は没した。

【安政～文久期】

安政2年(1855)10月2日夜、いわゆる安政大地震が発生した。藩主忠良は帰国中であった。浅草七軒町上屋敷では長屋向が所々大破したが、夜四ツ時(午後10時)頃の発生で就寝前の人が多く怪我人が少なく、また揺れが東西で南北に延びる長屋は多く潰れたが、それらは勤番の住居か役所で、定府の住居は少なかったため被害も少なく、藩主帰国中の発生だったことが幸いした。御殿向については無事ながら、傾いた箇所も多くあったという。

長屋向の再建は、早速普請奉行等の役人が命じられて着工したもようで、12月には長屋が潰れた定府らに手当金が下されており、出来たことが窺われる。この再建に際しては、普請奉行下役2名が職人との契約金の1割を着服していたため家名断絶、普請奉行は監督不行届で隠居を命じられるという不祥事もあった。

万延元年(1860)4月28日、忠良は正室鋭と離縁し、翌文久元年(1861)10月14日には光寿院が浅草七軒町屋敷の別御殿で没した。その御殿跡には新たに鉄炮角場を設けることとなり、文久3年(1863)2月8日に幕府に伺いを立て、翌々10日に場所の見分を受けて同月30日に許可された。

【慶応～明治期】

慶応元年(1865)9月9日、忠良の妾腹の男子、忠匡と忠盛が松山より江戸屋敷に着いた。同月24日には二人の住居取建総入用と奥広敷大破につき修復等の費用見積りが普請奉行より提出され、10月6日に資金調達の仕事が示されており、何れも浅草七軒町上屋敷で着工されたとみられる。その後、慶応2年(1866)11月15日に忠匡が世子となった。

慶応3年(1867)12月9日の王政復古、さらに翌慶応4年(明治元・1868)2月12日の將軍慶喜恭順謹慎を受けて、同月15日に酒井宗家より家族一同江戸を引き払い、在所で恭順する旨を届け出て下向する積もりが伝えられた。ここから忠良も同月20日に帰国の暇を乞う願書を幕府に提出、許可されたことから同月晦日に松山に向けて江戸を発駕し、女中らは先立つ28日に立出、忠良男子の忠匡・忠盛と前年に出生した忠堯も3月8日に江戸を発し、同日に定府の面々へも勝手次第在所に下ることが許された。こうして居住者の概ねが帰国したのち浅草七軒町上屋敷は、世間的には旗本甲斐庄帯刀正光の名義とされたもようで、これは慶応4年3～閏4月の江戸城開城前後の混乱の中で留守屋敷を温存する一策だったとみられる。甲斐庄家は忠礼三男忠誠の養子先で、正光はその子であり

屋敷を託したものと考えられる。

その後、慶応4年5月に成立した奥羽越列藩同盟に松山藩も与して新政府軍に対抗したが、結局明治元年9月16日、宗家隠居酒井忠発による降伏謝罪の決定に従った。そして忠発は新政府より、11月5日に官位停止と東京邸取り上げが沙汰され、12月8日には領知のうち2,500石の召し上げと隠居を命じられ、家名については相続が許されて、同月15日に世子忠匡が2万2,500石を継いだ。新たに藩主となった忠匡は、新政府より出京を命じられて明治元年12月20日に松山を発った。そのときの東京での滞在先は不明だが、甲斐庄家名義としてあった浅草七軒町屋敷に入った可能性が高い。そして翌明治2年(1869)1月25日に改めて従前のおり浅草七軒町と四谷千駄ヶ谷の屋敷が下され⁹⁹、さらに同年6月22日、忠匡が松嶺藩知事に任命された際に¹⁰⁰、浅草七軒町屋敷を藩邸、四谷千駄ヶ谷屋敷を私邸としたもようである。

明治3年(1870)7月、廃藩置県により忠匡は松嶺藩知事を免じられた。これと同時に松嶺藩(県)邸である浅草七軒町屋敷を願って酒井家の私邸に転換し、一方四谷千駄ヶ谷屋敷を返上した。こうして浅草七軒町屋敷は、酒井家の住宅としてその後も利用されることになった。

【屋敷絵図について】

今回の史料所在調査で、鶴岡市郷土資料館所蔵「阿部正己文庫」のうち「松山藩史料」に松山藩江戸屋敷の絵図が2点あることが判明した。①「〔江戸屋敷間取図〕」(第181図)と②「〔松山藩江戸屋敷間取図〕」(第182図)である。ただし①・②とも何れの屋敷か、また年代も不明なため、それらの推定も含めて各々検討する。

①〔江戸屋敷間取図〕…法量653mm×950mm、罫線あり(ヘラ引き)、縮尺6分計、彩色、凡例あり

まず、建築物の空間構成や部屋名から、浅草七軒町上屋敷を描いたものと判断される。描写は表門とそれに続く表長屋と西側の長屋、そして殿舎で、罫線によれば南北54間・東西38間の範囲である。屋敷地全体は南北86間5尺2寸5分・東西51間7寸5分であり⁽¹¹⁾、したがって描かれたのは敷地の一部で、つまり敷地北部の概ねと東部分は描写されていないことになる。

年代は「伊藤猪三(散)太長屋」・「齋藤清太長屋」の記載から、「松嶺史料」によれば伊藤・齋藤とも家臣で文政10年(1827)の分限帳に名前があり、また伊藤は天保3年8月にも記述があることからその頃の様相と考えられ、したがって描かれた御殿は文化12年7月に出来たものと推定される。御殿内部は、座敷向・板ノ間・庭・塀が色分けされていることが凡例から理解され、部屋名と畳数、天井の有無、建具や窓の仕様の記載が見て取れる。さらに間取り等を修正した貼紙や書き込みが多数あり、のちまで改築に関わって利用されたもようが窺える。

続いて空間構成について、南側中央に表門がある。殿舎は敷地西寄りにあって南から北へと展開しており、その概ね南部が表向、北部が奥向となっている。表向は、表門の向かいに式台(玄関)があり、西方に儀礼等に関わる座敷、東方の南側に藩役所や役人詰所等、北側に当主の居間がある。一方奥向は、西方ほぼ中央に式台(玄関)、その北側に広敷や役人詰所があり、これと廊下を隔てた東側に正室の居間、その北西側に当主子女の部屋がある。また奥向の北東に池が看取され、位置的に今回の発掘調査で検出された池の遺構に相当するものと判断される⁽¹²⁾。

さて敷地北部の描かれていない範囲については、まず文政11年正月8日の火災で裏手の北長屋と

概が類似しており、そうした施設があったことは確実である。また文政12年8月25日に出来した光寿院の別御殿も、立地可能なのはこの範囲である。さらに絵図の描写に土蔵や馬場、角場が見当たらず、それも北部にあったものと推定される。

②〔松山藩江戸屋敷間取図〕…法量796mm×1076mm、罫線なし、縮尺不明、彩色、凡例なし

標題によれば江戸屋敷の図である。描写には表門と表長屋、殿舎・庭園、内長屋と土蔵が見取れるが、結論から述べれば、どの屋敷のいつ頃の様相かを知る手掛かりは見出されない。

方位が不明なので仮に表門のある側（第182図では向かって右）を下にして述べると、殿舎の空間構成はほぼ中央を境に、向かって左が表向で広間・役所等、右が藩主一家の住居と二分されている。左は玄関正面から上へ延びる廊下の両側に部屋が展開し、突き当り右に藩主執務室とみられる部屋がある⁽¹³⁾。一方右は下から藩士の居住空間で、これは池を擁した庭園に面している。そこから上へ夫人の居間、そして玄関・広敷等奥向の役所を経て右に屈曲し、子女の居間、さらに隠居住居へと連なっている。

以上の空間構成と部屋のあり方をみると、この御殿は上屋敷的な要素を持つといえ、浅草七軒町屋敷の可能性も考えられる。ただ①の絵図に比すと大幅に小規模で、特に表の役所向は簡素であり、果して江戸時代の屋敷の様相なのかも含めて検討の余地がある。

おわりに

台東区元浅草遺跡のうち、白鷗高校地区は江戸時代初め、幕府組屋敷・同心屋敷地として利用されていたが、その後大名家である岡山藩池田家の手にわたって世子の居住する屋敷となり、以後は泉藩本多家、松山藩酒井家の上屋敷として利用された。当該地区は1990年に発掘調査報告書が発行されて、土地利用の変遷および災害についての多少の記述はなされたが、池田家が所持した時代があったことは本稿で新たに判明した事柄である。また酒井家時代の屋敷絵図も見出され、その土地利用のあり方も明らかにすることができた。

【註】

- (1) 以下、本稿の記述に関する出典は第62表の「出典」欄に記し、それ以外による場合のみ註を付す。
- (2) 岡山藩の史料では普請や作事を「土木」と表現している。『日本国語大辞典』(小学館)によれば「土木」には「木材、鉄材、土石などを使ってする建物、道路河川、港湾などの工事。土木工事。」の意がある。
- (3) 忠晴の長男忠直は宝永4年(1707)、宗家本多能登守忠常の養子となったが、その長男忠通は本多家に残り、忠晴の嫡孫となった。
- (4) 忠如は忠直の五男で、忠通には実弟に当る。
- (5) 寛政12年(1800)4月9日、養生のため泉に発つまで居住した(いわき市教育文化事業団寄託本多忠見家文書「系図明細書」)。
- (6) 蒼朮は健胃・利尿・解熱・鎮痛や発汗をとめたり湿気を払ったりするのに用いられる生薬である。『日本国語大辞典』。
- (7) 寛政9年の皆如院の死後、忠崇は真鶴を忠実方に逗留させる意向だったが当人が望まず、浅草七軒町屋敷に留まり暮していた。忠実寛政元年(1789)、忠崇の後継者問題に不満を持ち幕府に上訴に及んだが、心得

- 違いとされて押込の処分を受け、赦免後は酒井家の厄介として四谷仲町中屋敷に一家ともども置かれていた。なお真鶴はこの後浅草七軒町屋敷には戻されなかったもようである。
- (8) 「松山藩史料」によれば、家臣の田口元八郎は文化3年4月に上屋敷類焼につき普請御用扱を命じられ、そして文化5年11月になって「一、去寅年御類焼後、御仮住居・御長屋向御普請御用、并此度定宗院様御殿御普請御用掛相勤候、(田口元八郎) () ママ」、文化3年類焼後、仮御殿・長屋向御普請御用と今度隠居忠崇御殿普請の御用掛を務めた、つまり職務を完了したといい、言い換えれば文化5年11月にそれらの建設がすべて終わったと理解される。
- (9) 四谷千駄ヶ谷屋敷は弘化3年(1846)7月18日に相對替により獲得した300坪とみられる。
- (10) これと同日、松山は松嶺と改称された。
- (11) 「忠以公忠恕公迄御四代之記 智」(いわき市教育文化事業団寄託「本多忠晃家文書」)のうち「(忠晴履歴)」寛文10年条。
- (12) 浅草七軒町屋敷は、現在の都立白鷗高校の南側街区の一部、具体的には台東区元浅草一丁目四番の中央～西部と同五番の中央～東部を含む敷地であった。その南の敷地境から検出された池の遺構南端の距離は約70メートル=38.5間と算出される。①の絵図で南側屋敷境から池の南端の距離は42間=75.6メートルで、双方の距離は概ね同様といえ、したがって検出された池は絵図に描かれたものと同じと判断される。
- (13) 部屋には「政廳」とあり意味は不明だが、「聴政」は執政することの意がある。この部屋は役所向で唯一、床を備えた格式の高い造りで、したがって藩主の執務室の可能性があるとすると、あるいは「政廳(庁)」の書き損じだったことも考えられるのではないか。

【謝辞】

史料の所在調査と閲覧に当り、本多忠頼様、中村矩之様、いわき市教育文化事業団木桶成雄様、鶴岡市郷土資料館今野章様、学習院女子大学岩淵令治様にたいへんお世話になりました。記して感謝致します。



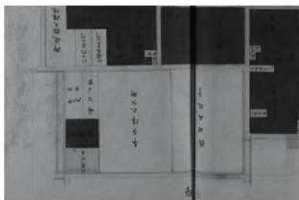
第172図 江戸全図（部分、白杵市教育委員会所蔵）



第173図 江戸大絵図（部分、公益財団法人三井文庫所蔵）



第174図 新板江戸外絵図 東八浅草、北八染井、西ハ小石川（部分、国立国会図書館デジタルコレクション）



第175図 御府内往還其外沿革図書 延宝年中之形（部分、国立国会図書館デジタルコレクション）



第176図 御府内往還其外沿革図書 貞享四卯年之形（部分、国立国会図書館デジタルコレクション）



第177図 御府内往還其外沿革図書 元禄十一寅年之形（部分、国立国会図書館デジタルコレクション）



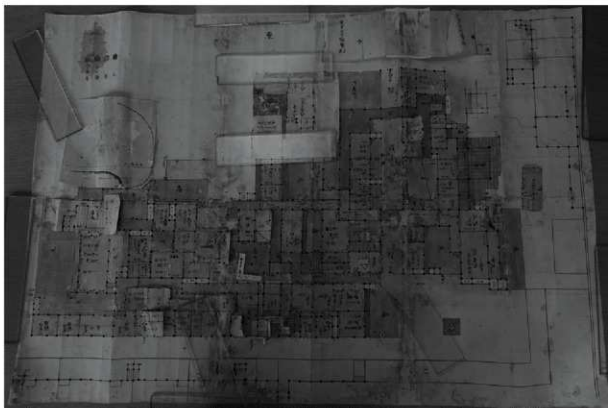
第 178 図 御府内往還其外沿革図書 宝永二酉年
之形 (部分、国立国会図書館デジタル
コレクション)



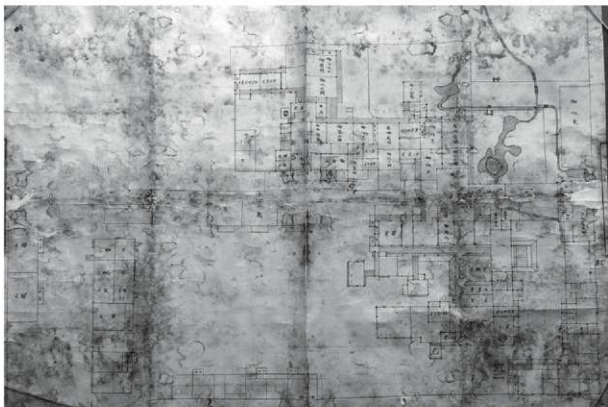
第 179 図 御府内往還其外沿革図書 享保年中
之形 (部分、国立国会図書館デジタルコ
レクション)



第 180 図 御府内往還其外沿革図書 当時 (弘化
2 年) 之形 (部分、国立国会図書館デ
ジタルコレクション)



第 181 図 〔江戸屋敷間取図〕(鶴岡市郷土資料館「阿部正己文庫」のうち「松山藩史料」345)



第 182 図 〔松山藩江戸屋敷間取図〕(鶴岡市郷土資料館「阿部正己文庫」のうち「松山藩史料」346)

年	西暦	月	日	記事	出典
慶応4	1868	2	15	上野原古と新編慶應義塾新聞につき、宗家酒井より一家出で転居する旨御行出で下向の願もりと私入される	松山史料 39
慶応4	1868	2	20	宗伯、幕府・朝廷への離書提出、許可される	松山史料 39
慶応4	1868	2	20	松山藩奉行、幕府・朝廷に先願い写進書提出の上、宗家宗伯への御返、宗家は入府の御文を賜ふること上、御返御返する	松山史料 39
慶応4	1868	2	23	西下手品供下子引手始まる	松山史料 39
慶応4	1868	2	24	宗伯、幕府参府30日付来り、女中は28日御立上りする	松山史料 39
慶応4	1868	2	26	宗伯、江戸参府、幕府に江戸参府へ下向する旨(江戸参府、3月1日御返)	松山史料 39
慶応4	1868	3	8	宗子宗伯(宗室男、信二)・宗子宗伯(宗室男、宗伯の次男、宗伯の次男、江戸参府)	松山史料 39
慶応4	1868	3	8	宗伯の御文、宗子宗伯へ下向することを許可する	松山史料 39
慶応4	1868	3	23	江戸参府、江戸参府、宗室宗伯(宗室男、宗伯の次男、宗伯の次男、江戸参府)	松山史料 39
慶応4	1868	3	24	江戸参府御返、宗室宗伯(宗室男、宗伯の次男、宗伯の次男、江戸参府)に御返、宗伯は幕府に宗伯の御文を呈上する	松山史料 40
明治1	1868	9	16	幕府御文で宗伯の御文が御返り、宗伯の御文を呈上する。幕府御文で宗伯の御文が御返り、宗伯の御文を呈上する	松山史料 p.114
明治1	1868	11	5	宗伯、幕府に江戸参府に宗伯の御文を呈上する。宗伯の御文を呈上する	酒井家譜
明治1	1868	12	8	宗伯、幕府に江戸参府に宗伯の御文を呈上する。宗伯の御文を呈上する	酒井家譜
明治1	1868	12	15	宗家宗伯御文に宗伯、宗子宗伯へ下向する旨を呈上する	酒井家譜
明治1	1868	12	20	宗伯、宗家宗伯御文に宗伯、宗子宗伯へ下向する旨を呈上する	松山史料表 p.115/ 松山史料 40
明治2	1869	1	25	宗伯、幕府の御文で宗伯の御文が御返り、宗伯の御文を呈上する	酒井家譜
明治2	1869	6	22	宗伯、幕府に宗伯の御文を呈上する。宗伯の御文を呈上する	酒井家譜
明治3	1870	7	20	宗伯、幕府に宗伯の御文を呈上する。宗伯の御文を呈上する	酒井家譜
明治3	1870	11	8	宗伯、幕府に宗伯の御文を呈上する。宗伯の御文を呈上する	酒井家譜
明治6	1873	8	1	宗伯、幕府に宗伯の御文を呈上する。宗伯の御文を呈上する	酒井家譜

【注】

・家ごとに作成したので、屋敷地移行期等一部重複する年月日がある

・出典の一部は略称を用いており、その各正式名称は下に記す

・出典の正式名称・著者・収録書誌・所収機関等は以下の通り(記載順)

「江戸参府」(江戸参府教育委員会所蔵) / 「江戸参府」(公益財団法人三井文庫所蔵) / 「蘭語部考」一先生正政著、神原邦男・吉本明「蘭館江戸屋敷の研究(一)一先生正政」(蘭語部考) 録目、「吉備地方文化研究」第9号、筑波女子大学吉備地方文化研究所、1998年、収録) / 「宗家史要稿」のうち「江戸参府上本」(岡山大学所蔵池田家文庫 A9-41、池田家文庫蔵書資料マイクロ版集成、丸善、1993年、収録) / 「御代史記」一「宗伯公忠公忠御代史記」(いわき市教育文化事業研究会「本多忠見家文書」6) / 「御代史記」(国立国会図書館内閣文庫所蔵) / 「新編江戸参府」(国立国会図書館所蔵) / 「寛政」一「新訂寛政重修諸家譜」第一〜「御当代記」(『東京市史稿 寛政』第四、収録) / 「屋敷地御代史記」(国立国会図書館所蔵) / 「月堂見聞集」(『東京市史稿 寛政』第四、収録) / 「天守御代記」(同前) / 「忠節御代記」一「忠節御代記」(『いわき市教育文化事業研究会「本多忠見家文書」6) / 「松山藩史料」19〜23「頼朝市職上資料館所蔵」阿部忠己文庫のうち請求番号19〜23「松山藩史料」19〜23「松山藩史料」29〜34・36〜40「同前」のうち請求番号29〜34・36〜40「松山藩史料」/ 酒井氏系図「同前」のうち請求番号70「松山藩史料」酒井家譜 / 「相対替御書附書」(国立国会図書館所蔵) / 「松山町史年表」(松山町史編纂委員会編、1975年) / 酒井家譜一「引後松山 酒井家譜」(東京大学史料編纂所所蔵)

2 元浅草遺跡第2次調査地点から出土した遺構構成材の樹種同定と年輪年代学的検討

鈴木伸哉（東京都埋蔵文化財センター）・大山幹成（東北大学植物園）

1. はじめに

元浅草遺跡の第2次調査において、19世紀末ごろまで利用された池跡と、それに先立つ地境の間知石列をはじめとした遺構が検出された。ここでは池跡に伴う上水木樋や、間知石列に用いられた胴木に用いられた木材の樹種を同定した結果と、木樋に用いられた木材の一部について、年輪計測に基づく年輪年代学的検討をおこなった結果を報告する。

2. 資料と方法

樹種同定：樹種同定は木材組織切片のプレパラート観察によりおこなった。出土した遺構構成材から片刃カミソリによって木材の横断面・接線断面・放射断面の切片を採取し、これをガムクロラルで封入して同定用プレパラートとした。プレパラートにはHAKHO 01-17の標本番号を付した。プレパラートは他の資料とともに東京都教育委員会によって保管されている。

年輪計測：木樋に用いられた木材のうち、目視で多数の年輪が認められたものを中心に、横断面方向に切断し、円盤状試料を得た。断面を#80～400のサンドペーパーで研磨した後、フラッドベッド型スキャナーを用いて解像度1200～2400ppiの画像を撮像した。

撮像した画像上で年輪幅を約0.01mm単位で計測した。クロスデーティングは年輪年代学の常法(Baillie 1982)を用いて、年輪曲線グラフの目視評価と統計評価、そしてそれらの反復検証によりおこなった。

3. 結果

樹種同定：プレパラート17点のうちには針葉樹2分類群が認められた。個別の同定結果は第63表にまとめた。以下ではそれぞれの分類群の木材解剖学的な記載をおこない、代表的な標本の顕微鏡写真を第183図に示し、樹種同定の根拠を明らかにする。

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 (写真：HAKHO 16)

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は量多く明瞭。放射仮道管の水平壁には著しい鋸歯状の突起がある。分野壁孔は大型の窓状で、1分野にふつう1個。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科 (写真：HAKHO 06)

垂直・水平樹脂道のいずれをも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材はごく少ない。樹脂細胞が早材の終わりから晩材にかけて接線方向に散在する。仮道管の内壁にらせん肥厚は認められない。分野壁孔は中型で孔口が縦に開くトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に2～3個。

年輪計測：88号遺構b 胴木東端 (HAKHO 05)、88号遺構c 胴木西端 (HAKHO 06) と間知石下の木樋 (HAKHO 07)、96号遺構木樋西端 (HAKHO11)、東端 (HAKHO12) の木樋の年輪を計測した (第184図)。

HAKHO 05 は4分割にした大径木の樹皮側を削り抜いて樋を作り出している。樹皮および最終形成年輪は遺存しておらず、残存部の外側5層に辺材が残る。HAKHO 06 は4分割にした大径木の中央を削り抜いて樋を作り出している。樹皮および最終形成年輪は遺存しておらず、心材と辺材の境界

は不明瞭である。HAKHO 07 は 4 分割にした大径木を分割して樋の蓋と本体に分け、本体の中央を削り抜いて樋を作り出している。樹皮および最終形成年輪は遺存しておらず、心材と辺材の境界は不明瞭である。HAKHO 11 と 12 はいずれも角材に製材した大径木の髓付近を削り抜いて樋を作り出している。外側 5 ～ 10 層前後は辺材の可能性があるが、心材と辺材の境界は不明瞭である。

これらの 5 点の資料に確認された年輪数はいずれも 100 層を超え、最も多いものは 427 層であった。それぞれの計測値は第 64 表に示した。

資料間のクロスデーティングの結果、88 号遺構 c 木樋西端と間知石下の木樋 (HAKHO 06・07) がオーバーラップ 366 層・ $r_{\text{MP}}=23.00$ でクロスデートし、96 号遺構木樋の西端と東端 (HAKHO11・12) がオーバーラップ 137 層・ $r_{\text{MP}}=8.61$ でクロスデートした。

これらの資料と、年代既知の複数の標準年輪曲線とのクロスデーティングの結果、HAKHO05 の曲線と中央区八丁堀三丁目遺跡の木棺群に基づく標準年輪曲線 (tkht: 大山他 2001) とがオーバーラップ 313 層・ $r_{\text{MP}}=5.28$ でクロスデートし、HAKHO 06・07 からなる年輪曲線の樹皮側 230 層 (髓側 220 層の年輪データは個体間の変異が著しいため採用しなかった) と千代田区弥勒寺跡の木棺群に基づく標準年輪曲線 (tkmr: 大山他 2001) とがオーバーラップ 228 層・ $r_{\text{MP}}=6.50$ でクロスデートした。これらは他の複数の標準年輪曲線ともクロスデートし、同じ年代値が得られている。その結果、各資料の残存最外年輪の年代値は HAKHO 05 が CE1623 年、06 が CE1567 年、07 が CE1544 年に決定した。HAKHO 11・12 からなる年輪曲線は既存の標準年輪曲線のいずれともクロスデートしなかった。

考察

元浅草遺跡第 2 次調査において出土した木樋にはいずれもヒノキが、胴木にはアカマツが用いられていた。これらの樹種はいずれも水湿に強く、ヒノキは耐朽性にも富むため、木樋や胴木の用材に適している。なかでも木樋には樹齢 400 年以上に達するものも含む大径木が用いられていることから、木樋の敷設にあたって木材を吟味して使用したものと推定される。

HAKHO05 の残存最外年輪は CE1623 年に決定された。この資料の最終形成年輪および樹皮は残っておらず、外側 5 層は辺材と見られることから、この木材は 1623 年以降の数十年のうちに伐採されたものと考えられる。同様に、HAKHO 06・07 の残存最外年輪は CE1544 年・CE1567 年に決定された。いずれも最終形成年輪および樹皮は残っておらず、心材と辺材の区別も不明瞭ではないことから、これらは残存最外年輪の示す年代以降に伐採されたものと考えられる。

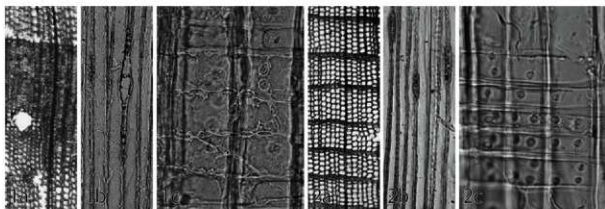
東京都内の大名屋敷では、本遺跡と同様に樹齢百年を超えるヒノキ科の良材が多数、木樋に用いられており、一部は年輪年代学的検討により遺構の上限年代の決定に成功している (鈴木・星野 2019)。今後の同種の遺構の調査においては、年輪年代学的検討がおこなわれることが望まれる。

引用文献

大山 幹成・米延仁志・鈴木伸哉・星野安治 2021 「中部産ヒノキ属の 2000 年年輪幅標準年輪曲線構築」『日本文化財科学会第 38 回大会研究発表要旨集』A-001

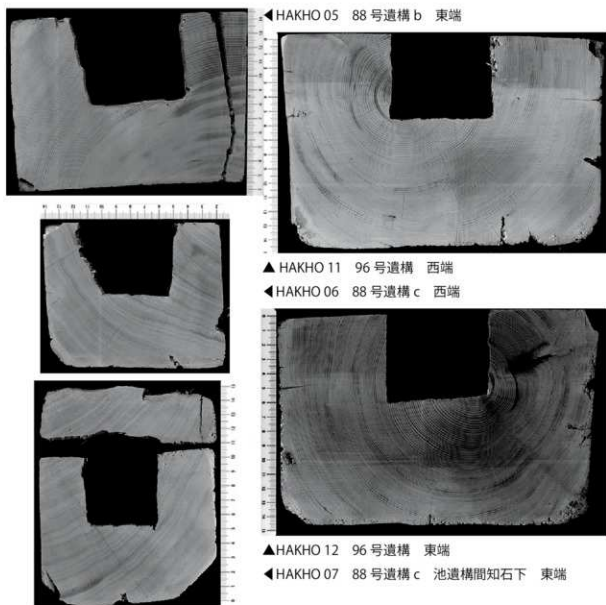
Baillie, M. G. L. 1982 *Tree-ring dating and archaeology*. The University of Chicago Press.

鈴木伸哉・星野安治 2019 「遺構構成材の年輪年代学的検討」『愛宕下武家屋敷群 - 近江水口藩加藤家屋敷跡遺跡 - 発掘調査報告書』虎ノ門一丁目地区市街地再開発組合・大成エンジニアリング株式会社

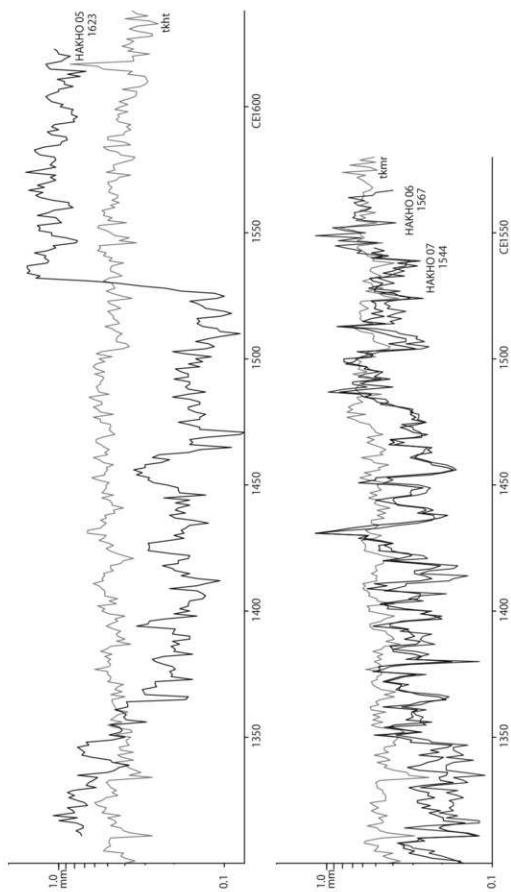


1:アカマツ (HAKHO 16), 2:ヒノキ (HAKHO 06) scale: a (横断面): × 40, b (接線断面): × 100, c (放射断面): × 400

第 183 図 元浅草遺跡第 2 次調査地点から出土した遺構構築材の顕微鏡写真



第 184 図 元浅草遺跡第 2 次調査地点から出土した木樋用材の横断面写真



第 185 図 元浅草遺跡第 2 次調査地点から出土した木桶用材と都内墓地遺跡出土木棺材の標準年輪曲線とのクロスデーティング結果

第 63 表 元浅草遺跡第 2 次調査地点から出土した遺構構築材の樹種

HAKHO	遺構	部位	樹種
1	80 号遺構 割	西端 (75 号遺構連結部)	ヒノキ
2	80 号遺構 池遺構間知石下 割	東端 (池入口側)	ヒノキ
3	88 号遺構 a 割	東端 (88 号遺構 d 連結部)	ヒノキ
4	88 号遺構 b 割	西端 (継手連結部)	ヒノキ
5	88 号遺構 b 割	東端 (92 号遺構連結部)	ヒノキ
6	88 号遺構 c 割	西端 (92 号遺構連結部)	ヒノキ
7	88 号遺構 c 池遺構間知石下 割	東端 (池入口側)	ヒノキ
8	88 号遺構 c 池遺構間知石下 控		ヒノキ
9	88 号遺構 d 割	西端 (88 号遺構 a 連結部)	ヒノキ
10	88 号遺構 d 割	東端 (継手連結部)	ヒノキ
11	96 号遺構 割	西端 (97 号遺構連結部)	ヒノキ
12	96 号遺構 割	東端 (95 号遺構連結部)	ヒノキ
13	33 号遺構 製木①	東端	アカマツ
14	33 号遺構 製木②	西端	アカマツ
15	33 号遺構 製木③	東端	アカマツ
16	33 号遺構 製木④	東端	アカマツ
17	33 号遺構 製木⑤	西端	アカマツ

第 64 表 元浅草遺跡第 2 次調査地点から出土した木種用材の年輪計測値

HAKHO	遺構	部位	年輪数 (層)	残存最外年輪 (CE)	最小 (mm)	最大 (mm)	平均 (mm)	標準偏差 (mm)
5	88 号遺構 b 割	東端 (92 号遺構連結部)	313	1623	0.07	1.58	0.53	0.42
6	88 号遺構 c 割	西端 (92 号遺構連結部)	389	1567	0.11	1.17	0.36	0.17
7	88 号遺構 c 池遺構間知石下 割	東端 (池入口側)	427	1544	0.12	1.21	0.37	0.16
11	96 号遺構 割	西端 (97 号遺構連結部)	137	—	0.52	1.67	0.95	0.27
12	96 号遺構 割	東端 (95 号遺構連結部)	190	—	0.33	1.86	0.95	0.26

3 EDXを用いた元素分析による元浅草遺跡出土煉瓦の分類

長佐古真也(東京都埋蔵文化財センター)

緒言

煉瓦は、近代を象徴する遺構構築材の一つであり、都内の発掘調査においても度々報告の俎上に上がるようになってきている(東京都埋蔵文化財センター1997、2015他)。しかし、近代首都圏における煉瓦生産および流通の様相は非常に複雑であるのに対し、煉瓦の形状は規格の整った単純な直方体で製作技法の差異にも乏しく、生産単位を推定する根拠が現状ではほぼ刻印に限られている。無刻印資料や部分欠損もしくは目地の付着により刻印の有無が不明の資料は考察の埒外に置かれたままであるが、本来は全体を対象とした考察が必須であることは明白で、今後はより詳細な製作技法の観察や胎土の特徴などの所見などから分類の可能性を模索していく必要がある。

近年、その打開策の一つとして、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(EDX)を用いた胎土の主成分元素組成による分類を試みており(長佐古2021・2022、東京都埋蔵文化財センター2021・2022)、既に関東地方の主要河川流域毎の特徴が明らかになりつつある。今回、元浅草遺跡各遺構から出土した近代煉瓦に対しても同様の分析を試みた。

1 分析対象資料

分析の対象とした煉瓦資料は挿図掲載資料を含む145点で、対象個体から採取した数グラム程度の小破片を分析試料とした。分析の目的は、①刻印が捺された煉瓦の分類根拠となる基礎データの蓄積、②無刻印および刻印不明煉瓦と刻印煉瓦の比較検討、③遺構内・遺構間における各種煉瓦使用状況の検討である。

試料には、本文で与えられた資料番号によってD001～D145の試料番号を付した。各資料の詳細は本文第65表を参照されたい。敢えて試料片を採取したのは、調査後廃棄が予定されていた資料についても検証用試料を残すことと、汚染のない破断面を得ることで分析の精度を上げるためである。ただし、D139は資料が小破片で試料採取が困難であったことから、資料本体の旧破断面を直接測定した。

2 分析方法と分析結果

分析にはEDX(SHIMADZU EDX-8100/東京都埋蔵文化財センター)を用いた。Rhターゲット、真空環境、分析対象Al-U(4.00～35.00eV)の領域が50kV/240μA-Auto、C-Sc(0.00～4.40eV)の領域は15kV/1000μA-Auto、さらにS・K・Caの精密定量を意図して設けたS-Ca(2.10～4.10eV)の領域は15kV/1000μA-Autoで#2のフィルタを使用、各領域を60秒ずつ測定した。コリメータは10mmとした。分析値の算出には、FP法による定性定量メニューを設定した。岩石・土壤に含まれる可能性が高い珪素(Si)・アルミニウム(Al)・鉄(Fe)・チタン(Ti)・ナトリウム(Na)・カリウム(K)・マグネシウム(Mg)・カルシウム(Ca)・リン(P)・硫黄(S)の主成分元素に加え、バナジウム(V)・クロム(Cr)・マンガン(Mn)・亜鉛(Zn)・ガリウム(Ga)・ヒ素(As)・ルビジウム(Rb)・ストロンチウム(Sr)・

イットリウム (Y)・ジルコニウム (Zr) の 19 元素を固定し、定性的に検出されたものを加えて存在比を算出してある。

第 1 表に分析結果を示した。分析値は、岩石学の習慣に倣って全て酸化物として算出してある。また、鉄については、すべて 3 価と仮定して算出した。主成分元素については % 単位、その他の微量元素は ppm 単位で示した。

3 考察

3-1 各種刻印煉瓦の推定生産地域について

まず、第一の目的である刻印煉瓦の生産流域の推定、および第二の目的である刻印煉瓦と無刻印煉瓦・刻印不明煉瓦との関係について検討する。瓦今回の調査では、35 号遺構の地表レベルと推測される初段および次段から円枠に「さ」・「サ」の刻印を伴う板目(いわゆる手抜き成形)の焼過ぎ煉瓦が多く採集されているのが特徴である。類似刻印は旧島津家本邸事務所棟であった重要文化財清泉女子大学 3 号館の耐震対策事業の際にも採集されており(学校法人清泉女子大学 2022)、共伴した山傘に「サ」銘刻印に伴う「鹿濱」の文字から、これらは荒川区の荒川左岸域に所在した斎藤煉瓦の可能性が指摘されている。今回検出された円枠「さ」・「サ」刻印もこれらとの関連が想起されることから、まず、刻印を有する板目(手抜き成形)煉瓦について検討を加える。

第 186 図に、円枠に「さ」・「サ」の刻印を有する板目煉瓦胎土に関する主要 10 元素の二元分布図 6 種に示す。各図には、既に把握されている水系毎の分布範囲(長佐古 2021)と旧島津邸「さ」・「サ」刻印煉瓦(前掲清泉女子大学)、さらに「石監」刻印煉瓦と江戸後期の在在地系土器カワラケの分析値(未公表)を併せて示してある。いずれの分布図においても、今回検出の円枠「さ」・「サ」刻印煉瓦は、中円枠「さ」の二例(D027・086)を除き、ほぼ近接した領域に分布し、同一生産者もしくは同一生産地域の所産と考えて差し支えない。ただし、[ケイ素(SiO₂) / アルミニウム(Al₂O₃)] 分布図においては多摩川水系煉瓦(横浜煉瓦・御幸煉瓦)の領域に、[ナトリウム(Na₂O) / マグネシウム(MgO)] 分布図においては荒川水系(東京集治監等)の領域に、[カリウム(K₂O) / カルシウム(CaO)] 分布図においてはいずれの領域からも外れるなど、既に分布範囲が把握されている利根川・江戸川水系・荒川水系・多摩川水系の何れの煉瓦とも傾向を異にしており、過去の事例では未検討の地域(以下、地域 a と呼称する)で生産された可能性が高いことが判明した。一方、今回検出の中円枠「さ」例に加え、旧島津邸採取のヤマ「サ」・円枠「さ」・「サ」刻印例は、すべて東京集治監を含む荒川左岸域の領域に集中している。すなわち、刻印の内容が共通していても異なる地域の所産である事例が確認されたことになる。今後、円枠・山傘を伴う「さ」・「サ」の刻印例に関しては、その生産地推定を慎重に行う必要がある。

では、不詳の地域 a はどこに求められるであろうか。実は、一例の参考分析のみであるが「石監」銘刻印を伴う事例が今回の円枠「さ」・「サ」群と同様の挙動を示している。「石監」銘は、隅田川河口の三角州に江戸期に設置された石川島人足寄せ場から維新期に改組された石川島監獄署[明治 10 ~ 28 年(1877 ~ 95)]の所産と推測されている。さらに、今戸を含む隅田川の沿岸産と考えられる土器も近接領域にプロットされることなどを勘案すると、現時点においては隅田川流域が第一の有力候補地となろう。今後の資料増加を待って再検討したい。

第187図上段は、板目煉瓦のうち、「さ」「サ」以外の刻印を有する例について検討を加えたものである。紙幅の関係から「ケイ素/アルミニウム」および「カリウム/カルシウム」分布図のみを掲げるが、他の元素の分布図においても矛盾のない傾向を確認している(以下、同様)。「千葉本家」刻印のD084・085、円枠に「吉」刻印のD093、「◇」に「十二」を伴うD129については、いずれも東京集治監を含む荒川領域に含まれた。一方、単独の「◇」刻印を持つD051と扇形の枠を確認したD107はチヂレ目(いわゆる機械成形)煉瓦を生産した金町煉瓦と同じ領域にプロットされることから、利根川水系の江戸川流域で生産された可能性が高い。円枠に「千」例(D139)については、ケイ素、アルミニウム共に既知地域よりも高い値を示したことから、生産地を特定することができなかった。第187図下段には無刻印もしくは刻印不明の板目煉瓦例について検討を加えたものである。無刻印のうち、D081・89・091・094・(095)・130は荒川流域、D52・061～066は江戸川流域、刻印を判読できなかったD082(35号遺構)および30号遺構から採集されたD145は地域aの産と考えられる。D073・126・133・134・135については荒川領域と江戸川領域、D083は荒川領域と地域aの重複領域にプロットされたため、現時点において生産地は不明である。なお、便宜的に本図に含めた陶器質のD104・108は、いずれも多摩川流域の範囲にプロットされるが、他の元素では異なる傾向が認められるため、生産地は不詳である。

第188図上段は、チヂレ目煉瓦で刻印を有する例を検討した図である。すべて輪違の刻印を有する金町煉瓦と同じ領域にプロットされ、江戸川流域で生産されたものと考えられる。今後は、これらの刻印が金町煉瓦に関連するものか、近隣の生産者のものかについて考察していく必要がある。一方、同図下段に示した刻印無・不明例に関しては、有刻印例同様、江戸川領域に含まれるものも多く認められるが、D060・071・96～102・109～113・127・128の16例は荒川領域にプロットされており、刻印を有する資料とは異なる傾向を有している。なお、D070は多くの元素について他試料とは異なる挙動を示していることから、生産地域の判定は保留しておく。

3-2 各地生産煉瓦と遺構との関係について

以上、各煉瓦の生産地域が概ね明らかになったところで、第三の目的である遺構毎、35号遺構においては遺構部位における構成煉瓦の生産地域分布について確認しておく。

第189図上段は、35号遺構内で検出された板目煉瓦の生産地域を段毎に示したものである。初段は地域aが主体を占める一方、次段は江戸川流域を主体に地域aを若干含み、次次段と南側拡張部については荒川流域の所産で占められており、部位ごとに明確な差異があることが判明した。これは、チヂレ目(機械成形)煉瓦(第4図中段)についても同様で、次次段および初段より上については江戸川流域、次次段よりも下位については荒川流域の煉瓦が用いられている。焼過ぎの板目煉瓦主体の初段および次段が塩害防止のために地表直上に用いられたと推測すると、35号遺構は、地中に埋没する基礎部分を荒川流域のチヂレ目煉瓦で積み、地表直下の段のみ金町煉瓦を含む江戸川流域のチヂレ目煉瓦と荒川流域の板目煉瓦、地表直上段を江戸川流域の板目煉瓦、その上を地域aの板目煉瓦で構成し、それより上位、すなわち建物壁体には再び江戸川流域のチヂレ目煉瓦を用いるという、かなり複雑な構造を有していたことになる。その背景としては、建築過程で逐次発注・納品を繰り返した所産の可能性も考えられるが、意図をもって使い分けていた可能性も考えられる。後者の場合は、成形技法・生産地域により煉瓦の性質に差異があったことを示唆することになろう。なお、南側拡張部

については構造が異なっていたようである。

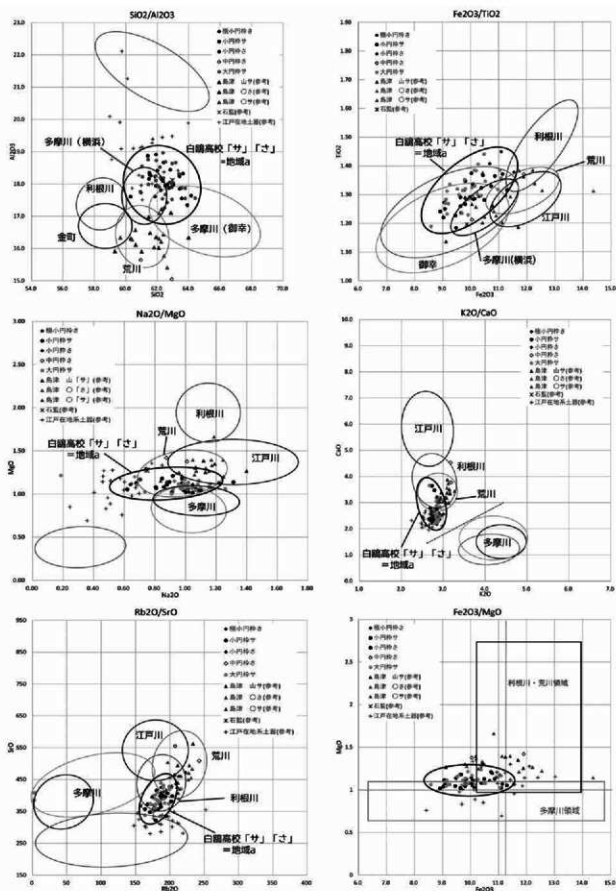
第189図下段に示した35号遺構以外の遺構例については、遺構数に対して試料数が少ないことから明確な傾向を指摘することが難しい。今回は結果を示すのみに止めるが、35号遺構併行期に属する遺構のチズレ目煉瓦は35号遺構の地上部分と共通する江戸川流域と推定される一方、板目煉瓦については生産地不詳のD126・133～135で占められている点を指摘しておく。

結語

今回の分析では、多くの成果を得ることができた。まず、35号遺構で検出された「さ」・「サ」刻印を伴う板目煉瓦が従来確認されていなかった地域の所産であること、その有力な候補地として隅田川流域の可能性を検討すべきであること、類似の刻印を有する煉瓦でも生産地域が異なる可能性があること、荒川流域産のチズレ目煉瓦や江戸川流域産の板目煉瓦が確認されたことなどを列挙できるが、最も大きな成果は、35号遺構の基礎構築に際して様々な地域・性質の煉瓦が使い分けられていたことを確認できた点であろう。今後、こうした使い分けが想定される事例においては、綿密なサンプリングを行うことで、より実態に迫っていくことが求められる。また、こうした検討を行う際、無刻印もしくは刻印不明の煉瓦も対象としうる点で、EDXを用いた胎土の元素組成分析が非常に有効な手段であることを改めて確認できたことも、重要な成果である。

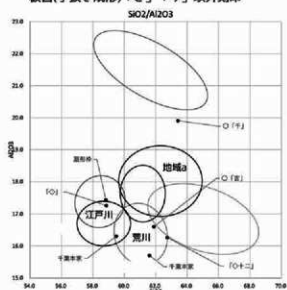
引用参考文献

- 清泉女子大学 2022『重要文化財絨高津家本邸事務所 耐震対策工事報告書』
- 長佐古真也 2021「新港埠頭出土近代煉瓦胎土の元素組成分析と実体顕微鏡を用いた特徴把握」『神奈川県横浜市中区 横浜新港埠頭遺跡発掘調査報告書』（株）バスコ
- 長佐古真也 2022「胎土の元素組成からみた近代玉地域煉瓦の特徴」『日野市ふるさと文化財課紀要』第1号 日野市ふるさと文化財課
- 東京都埋蔵文化財センター 1997『汐留遺跡1』東京都埋蔵文化財センター調査報告第37集
- 東京都埋蔵文化財センター 2015『港区旗本花房家屋敷跡遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第306集
- 東京都埋蔵文化財センター 2021『八王子市№987遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査方向第365集
- 東京都埋蔵文化財センター 2022『港区高輪南町遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第367集

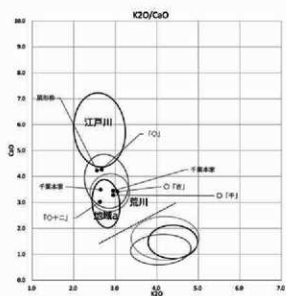


第 186 図 板目(手抜き成形)「さ」・「サ」刻印煉瓦分析値の二元分布図

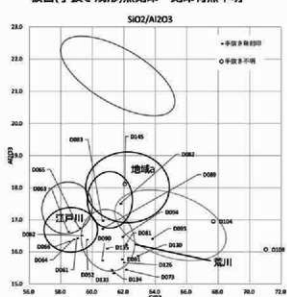
板目(手抜き成形)「さ」「サ」以外刻印



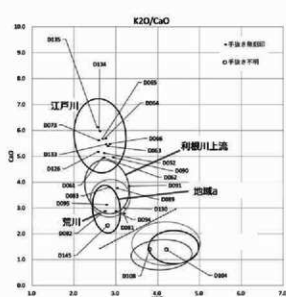
K2O/CaO



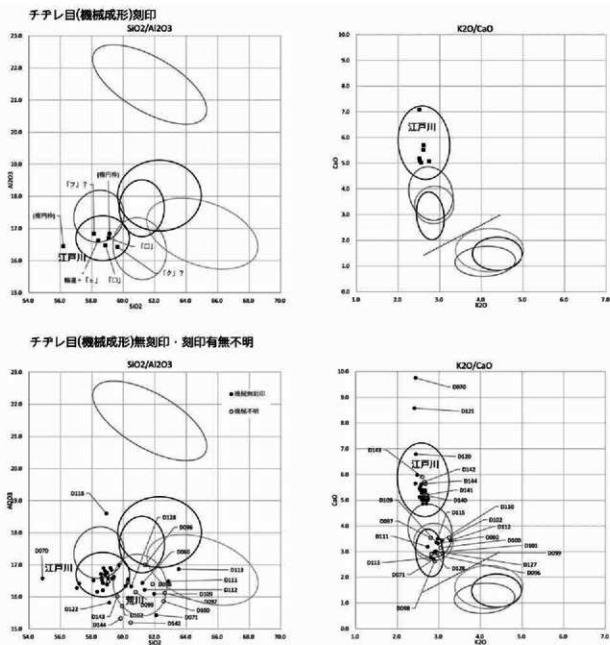
板目(手抜き成形)無刻印・刻印有無不明



K2O/CaO

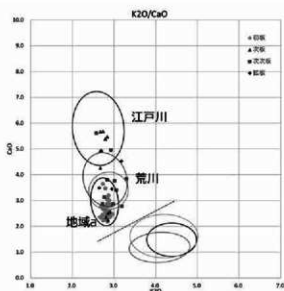
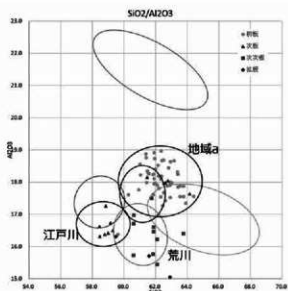


第 187 図 板目(手抜き成形)[他刻印、無刻印・不明] 煉瓦分析値の二元分布図

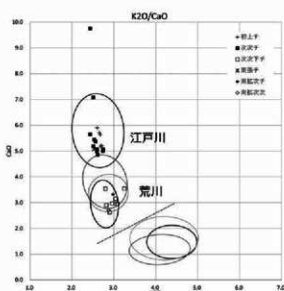
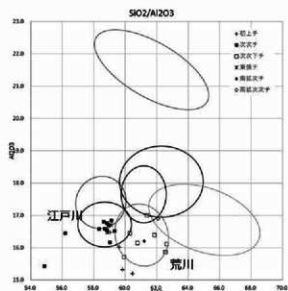


第 188 図 チヂレ目(機械成形)煉瓦各種分析値の二元分布図

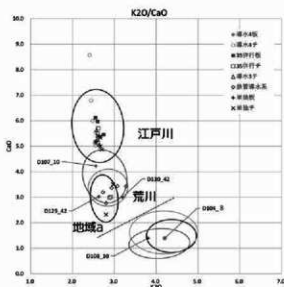
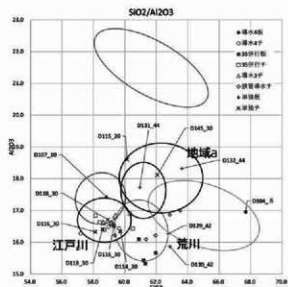
35号遺構出土板目手抜き成形煉瓦 段別



35号遺構出土子テレ目機械成形煉瓦 段別



その他の遺構出土煉瓦 時期別



第 189 図 出土煉瓦分析値の遺構別二元分布図

VI 調査の成果と課題

■遺物（陶磁器・土器）

【基本土層及び主な遺構の素材別・器種別出土量】

第66表に、素材・器種別の出土破片数と全体に占める割合及び重量をまとめた（パーセンテージは少数点以下第3位を四捨五入）。破片数を見ると、遺構、遺構外ともに、陶器が60～70%、磁器が25～35%、土器が4～4.5%で、全体としても陶器が68.62%、磁器が26.92%、土器が4.47%であった。器種は、陶器40器種、磁器30器種、土器（瓦質、施釉を含む）32器種、計102器種が確認された。これをさらに詳しく見てみると、最も多いのは陶器美濃高田産灰釉・胎釉徳利（以下、「高田徳利」という。）で48.05%、次いで磁器碗の11.66%、以下磁器皿6.36%、陶器碗4.40%と続き、それ以下はいずれも数%にも満たなかった。上位4位までの器種で全体の70.52%が占められ、他の98器種のほとんどが0.1%未満という著しい偏りが看取される。第191図は、遺構、遺構外、全体に加えて、遺構出土の約半数を占める池遺構（93号遺構を含む）についても、器種別出土量を折れ線グラフにして、パターンを際立たせたものである。高田徳利の突出とそれに続く磁器碗、陶器碗と土器灯火皿が目立つというパターンが明瞭に見てとれる。ここでは具体的に提示していないが、遺構外各基本土層（第1層…Ⅰ～Ⅱ面、第2・3層…Ⅱ～Ⅲ面、第4層…Ⅲ～Ⅳ面）、分析可能なだけの出土量があった6号遺構、35号遺構の2遺構についても同様の傾向が確認できる。なお、基本土層第5層（Ⅳ面以下）、上述した3遺構以外の遺構については、傾向を読み取るには各々の出土量が少ないため、ここでは言及しない。

なお、第1次調査の出土陶磁器・土器についても報告書の記載をもとに同様のデータを作成し、表の末尾に付し、折れ線グラフ化したのが、出土傾向は同様であった。

【基本土層、主な遺構の年代観】

第67表に、報告した個体の年代別点数と全体に占める割合をまとめた（パーセンテージは少数点以下第3位を四捨五入）。基本土層としては、第1層、第2・3層、第4層を取り上げ、第5層については、個体として報告したものがなかったため言及していない。主な遺構としては、分析可能なだけの点数を報告できた35号遺構（Ⅱ面確認：煉瓦製建物基礎）、池遺構（Ⅲ面確認：池）、6号遺構（Ⅳ面確認：遺物集中部）の3遺構を取り上げ、池遺構については、上層（覆土＝埋立土）、下層（掘方）、93号遺構（中の島）の各層の形成過程と性格を踏まえた上で、層位別の集計も行った。また、年代については、出土傾向を踏まえた上で、1…17世紀中葉以前、2…17世紀中葉～18世紀前葉、3…18世紀前葉～後葉、4…18世紀後葉～19世紀前葉、5…19世紀中葉～幕末・明治初頭、6…近代以降、?…不明もしくは時期を絞り込めないものとした。第192図は、これを折れ線グラフにして、パターンを際立たせたものである。時期4に最も大きなピークがあることが全体的な特徴として挙げられるが、第二のピークが時期2にあるaパターンと時期6にあるbパターンが認められる。aパターンに属するのは、池遺構、6号遺構、第4層、bパターンに属するのは35号遺構、第1層、第2・3層である。なお、池遺構については、全体としてはbパターンであるが、①17世紀中葉以前のものが見られること、②層毎に見ると、上層は時期4に大きなピークがあるのみ、下層は時期4と時期

2に同程度のピークが見られ、93号遺構は時期2～4が多いままで推移しており、パターンが異なることの2点を特筆しておく。以下、それぞれの層、遺構について記述する。

基本土層 いずれの層も18世紀後葉～19世紀前葉のものを主体的に含む。第1層は関東大震災以降の整地層と昭和62(1987)年に解体された昭和校舎の基礎による攪乱から成り、下位の第2層以下から攪乱によって上がってきた18世紀後葉～19世紀前葉の遺物とこの層の形成時期である近代以降の遺物がともに多くなったと考えられる。第2・3層は、池遺構上位の盛土層で、池遺構埋立後から府立第一高等女学校建設までの間(土地履歴から明治20年代～35年と推定)に他所から搬入された土で構成される。近代以降のものを相当数含むが、これは土の搬入元の土地履歴を反映していると考えられ、搬入元は18世紀後葉～19世紀前葉を中心に近代に入ってから利用されていた場所と考えられる。第4層も他所から搬入された盛土層と推定されており、17世紀中葉～18世紀前葉のものを相当数含んでいる。これも土の搬入元の土地履歴を反映していると考えられ、19世紀中葉以降のものはほとんどないので、18世紀後葉～19世紀前葉ごろまでには当地に搬入されたと考えられる。

6号遺構 調査区外南側に続く浅い不整形遺物集中部で、廃棄土坑的な要素が強い。18世紀後葉～19世紀前葉を中心に17世紀中葉以降から基本土層第4層が盛土されるまでの間、比較的長期間にわたって利用されていたのであろう。

35号遺構 府立第一高等女学校の講堂跡と推定される煉瓦製建物基礎で、遺物はその掘方から出土している。これらは建設地盤の基本土層である第2・3層から上がってきたものと考えられる。

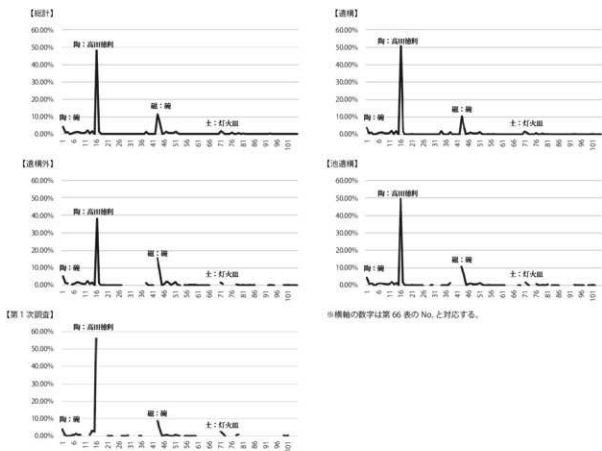
池遺構 上層は池の埋立土と推定されており、18世紀後葉～19世紀前葉の遺物を主体的に含み、他の時期のものはほとんど見られない。埋立(盛土搬入)時期は土地履歴から明治20～30年代頃のことと考えられるので、近代以降の活用が活発でなかった場所から、近世中に形成された土層を搬入したのであろう。下層は、ほとんどが掘方(池底として構築された層)であるが、局所的に周囲からの流れ込みと思われる遺物の集中も見られた。これらを層位的に掘り分けることはできなかったが、17世紀中葉～18世紀前葉の遺物は構築時期を示し、18世紀後葉～19世紀前葉の遺物は流れ込みによるものと考えておきたい。93号遺構は中の島にあたり、17世紀中葉以降、19世紀前葉まで同程度の量の遺物が見られるので、中の島は築造以来、19世紀前葉頃までたびたび手を加えて維持されたのだろう。間知石で護岸された下層とその上にさらに土を覆い被せ、北岸に土橋を接岸させた上層から成るが、上層出土の遺物の方が多い。上層にも17世紀のものが目立つので、築造後早い段階で大きな改修が行われたと考えられる。

なお、第1次調査については、データが層別・時期別に提示されていないため、比較検討することができなかった。

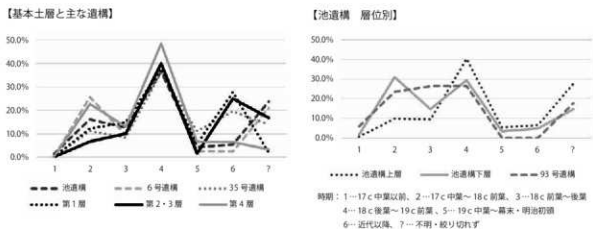
【遺構別・素材別出土量】

6号遺構、35号遺構、池遺構以外の遺構については遺物出土量が極めて少なく、器種別、時期別の出土傾向を捉えることができなかった。ここでは素材別の出土量を第68表に示しておく。

(両角まり)



第190図 器種別出土パターン



第191図 時期別出土パターン

No.	材質	器種	遺構外計		遺構計		遺構のうち流遺構のみ		第2次調査結果計		第1次調査 総片数					
			破片数	重量(g)	破片数	重量(g)	破片数	重量(g)	破片数	重量(g)						
72	土器	打火皿	309	0.72%	159.4	165	1.10%	1193.8	861	0.88%	612.1	195	1.02%	1352.2	1083	1.41%
73	土器	打火受皿				3	0.02%	148.0	1	0.01%	144.6	3	0.02%	148.0	25	0.03%
74	土器	脚付打火受皿				3	0.02%	36.9				3	0.02%	36.9		
75	土器	壺				1	0.01%	2.3				1	0.01%	2.3		
76	土器	切込	28	0.67%	415.5	124	0.83%	1499.0	77	0.79%	928.2	152	0.79%	1914.5	1284	1.70%
77	土器	火酒壺				10	0.07%	470.3	10	0.10%	470.3	10	0.05%	470.3	249	0.33%
78	土器	壺	18	0.43%	654.4	13	0.09%	363.1	7	0.07%	248.7	31	0.16%	1017.5	249	0.33%
79	土器	火鉢	14	0.34%	670.5	93	0.62%	2850.1	39	0.40%	1337.8	107	0.56%	3520.6	716	0.95%
80	土器	壺	1	0.02%	24.6	16	0.11%	937.3	10	0.10%	561.4	17	0.09%	961.9		
81	土器	榎木鉢	13	0.31%	399.8	62	0.41%	1209.7	49	0.50%	988.8	75	0.39%	1609.5	141	0.19%
82	土器	灰漬し	2	0.05%	59.6	3	0.02%	1052.9				5	0.03%	1112.5		
83	土器	瓦	11	0.02%	115	1	0.01%	20.2			20.2	2	0.01%	31.7		
84	土器	土壇	5	0.12%	238.2	12	0.08%	804.0	6	0.06%	123.6	17	0.09%	1042.2	199	0.26%
85	土器	塀面遺	3	0.07%	165.2	8	0.05%	323.7	7	0.07%	307.6	11	0.06%	488.9		
86	土器	敷石	8	0.19%	261.8	19	0.13%	244.7	1	0.01%	25.4	27	0.14%	506.5	285	0.38%
87	土器	内形型枠				2	0.01%	50.0				2	0.01%	50.0		
88	土器	瓦				1	0.01%	12.0				1	0.01%	12.0		
89	土器	瓦				1	0.01%	135.1				1	0.01%	135.1		
90	土器	伊呂土器				3	0.02%	347.8				3	0.02%	347.8		
91	土器	榎木まじ				1	0.01%	125.8				1	0.01%	125.8		
92	土器	瓦	1	0.02%	262.4	1	0.01%	13.9				2	0.01%	276.3		
93	土器	不明	13	0.31%	823.8	52	0.35%	891.6	39	0.31%	645.7	65	0.34%	1715.4	149	0.20%
94	土器	瓦	1	0.02%	124.3	10	0.07%	86.6	10	0.10%	86.6	11	0.06%	210.9		
95	土器	瓦	2	0.05%	210.5	15	0.10%	467.1	13	0.13%	407.9	17	0.09%	677.6		
96	土器	瓦	1	0.02%	110.0	4	0.03%	207.8	4	0.04%	207.8	4	0.02%	207.8		
97	土器	瓦	1	0.02%	110.0	2	0.01%	122.6	2	0.02%	122.6	2	0.01%	122.6		
98	土器	瓦	1	0.02%	110.0	8	0.05%	139.9				2	0.01%	139.9		
99	土器	脚付打火受皿	12	0.29%	110.2	8	0.05%	41.4	3	0.03%	26.4	23	0.10%	151.6	201	0.27%
100	土器	脚付打火受皿	2	0.05%	12.7	7	0.05%	172.7	5	0.05%	142.7	9	0.05%	185.4	59	0.08%
101	土器	脚付打火受皿	11	0.26%	381.1	29	0.19%	866.8	18	0.18%	431.2	40	0.21%	1247.9	224	0.30%
102	土器	脚付打火受皿	2	0.05%	51.4	4	0.03%	100.2	4	0.04%	100.2	6	0.03%	151.6		
103	土器	脚付打火受皿	1	0.02%	3.3	0	0.00%	0.0			1	0.01%	3.3			
104	土器	脚付打火受皿	1	0.02%	13.3	6	0.04%	58.8	5	0.05%	44.3	7	0.04%	70.1		
105	土器	脚付打火受皿	1	0.02%	4.0	6	0.04%	306.5				7	0.04%	310.5	48	0.33%
土器計			170	4.07%	5057.5	687	4.58%	15300.6	388	3.98%	7984.1	857	4.47%	20358.1	4843	6.42%
総計			4179	100.0%	124434.1	15009	100.0%	338499.5	9743	100.0%	235869.7	19188	100.0%	462933.6	75445	100.0%

第 67 表 時期別出土量 (パーセンテージ)

時期	流遺構上層	流遺構下層	93号遺構	流遺構	6号遺構	35号遺構	第1層	第2・3層	第4層
1 17 c 中層以前	0.5%	1.6%	5.9%	1.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2 17 c 中層～18 c 前葉	9.8%	31.1%	23.5%	16.2%	25.6%	11.1%	12.0%	6.7%	22.6%
3 18 c 前葉～後葉	9.3%	14.8%	26.5%	12.6%	9.3%	8.3%	14.8%	10.0%	12.9%
4 18 c 後葉～19 c 前葉	40.4%	29.5%	26.5%	36.3%	39.5%	36.1%	38.0%	40.0%	48.4%
5 19 c 中葉～幕末・明治初期	5.5%	3.3%	0.0%	4.3%	2.3%	11.1%	5.6%	1.7%	6.5%
6 近代以降	6.6%	4.9%	0.0%	5.4%	2.3%	19.4%	27.8%	25.0%	6.5%
7 不明・絞り切れず	27.9%	14.8%	17.6%	23.7%	20.9%	13.9%	1.9%	16.7%	3.2%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
流れ残パターン				a	a	b	b	b	a

■遺構

今回の調査で検出した遺構は、それぞれ盛土(第2～5層)の上層または自然堆積層(第6層)の上層に構築されている。盛土の順序からⅡ・Ⅲ・Ⅳ面の3つの確認面を設定し、遺構の報告を行った。それぞれの確認面の遺構は切り合いや構築の順序、出土遺物から先後関係が認められ、特にⅡ・Ⅲ面において、細分することができた。

【Ⅱ面】

Ⅱ面の遺構は、府立第一高等女学校の明治期の校舎にあたる建物基礎(35・52・56号遺構)、土管・鉄管と煉瓦製・木製枅からなる10の導水施設、コンクリート製礎石を伴う土坑列(59号遺構)や十字型土坑列(53号遺構)などを検出した。明治期の校舎との先後関係に従って3つの段階に細分した。

Ⅱ-1期 関東大震災以降に建てられた昭和校舎に伴う時期である。第192図上にⅡ-1期の遺構と昭和校舎の位置を重ねた図を示した。昭和校舎は現校舎の建設に伴って取り壊されており、その痕跡が第1-2層である。土管系統1・2や11号遺構は昭和校舎に沿っていることがわかる。また、鉄管系統1も昭和校舎に近く、土管系統1と鉄管系統1は順に使われた遺構であると考えられる。

第 68 表 遺構別素材別出土量

遺構名	陶器計	磁器計	土器計	総計
2号遺構	破片数 26	26	27	53
	重量(g) 904.7	276.5	331.3	1612.5
3号遺構	破片数 31	7	30	68
	重量(g) 424.4	129.0	86.3	641.7
4号遺構	破片数 9	5	5	19
	重量(g) 235.5	18.1	27.4	281.0
6号遺構	破片数 1596	160	65	1821
	重量(g) 38618.8	1970.1	1526.8	42115.7
7号遺構	破片数 114	68	11	193
	重量(g) 2959.9	892.8	236.4	3719.1
9号遺構	破片数 9	9	11	31
	重量(g) 121.4	0.7	89.8	211.9
12号遺構	破片数 12	4	2	18
	重量(g) 219.1	102.9	1008.7	1330.7
13号遺構	破片数 34	39	7	80
	重量(g) 544.7	107.4	80.2	732.3
14号遺構	破片数 28	12	0	40
	重量(g) 432.7	321.9	0.0	774.1
17号遺構	破片数 89	45	27	161
	重量(g) 1392.0	620.2	501.8	2514.0
22号遺構	破片数 18	8.0	9.8	35.8
	重量(g) 153.5	11.7	20.6	185.8
23号遺構	破片数 19	4	4	27
	重量(g) 1092.8	331.8	367.4	1792.0
24号遺構	破片数 1	1	1	3
	重量(g) 42.8	11.9	27.2	82.0
25号遺構	破片数 20	8	7	35
	重量(g) 700.6	63.7	10.2	774.5
26号遺構	破片数 4	7	7	18
	重量(g) 53.3	10.9	64.2	128.4
30号遺構	破片数 9	8	1	18
	重量(g) 42.1	20.0	4	72.1
32号遺構	破片数 5	31	4	40
	重量(g) 349.9	239	34.7	608.5
33号遺構	破片数 40	21	8	69
	重量(g) 969.9	315.1	78.4	1363.4
35号遺構	破片数 794	244	18	1136
	重量(g) 14113.4	3221.8	777.4	18112.6
36号遺構	破片数 3	4	3	10
	重量(g) 40.6	4.3	44.9	90.8
37号遺構	破片数 198	96	294	594
	重量(g) 2829.2	767.0	3596.2	7192.4
37号遺構(本館前a)	破片数 28.3	4.7	33.0	66.0
	重量(g) 4.7	3.4	7.8	15.9
39号遺構	破片数 6	10	5	21
	重量(g) 57.4	94.2	151.5	303.1
42号遺構	破片数 3	1	2	6
	重量(g) 3.8	10.0	13.8	27.6
43号遺構	破片数 3	2	5	10
	重量(g) 16.3	5.4	21.7	43.4
44号遺構	破片数 4.2	16.3	20.5	41.0
	重量(g) 2	2	1	5
46号遺構	破片数 85.2	186.0	21.0	272.2
	重量(g) 9	2	11	22
49号遺構	破片数 77.6	6.2	83.8	167.6
	重量(g) 82	31	113	206
52号遺構	破片数 1845.3	583.0	66.9	2495.2
	重量(g) 11	5	2	18
53号遺構	破片数 255.8	42.8	48.6	347.2

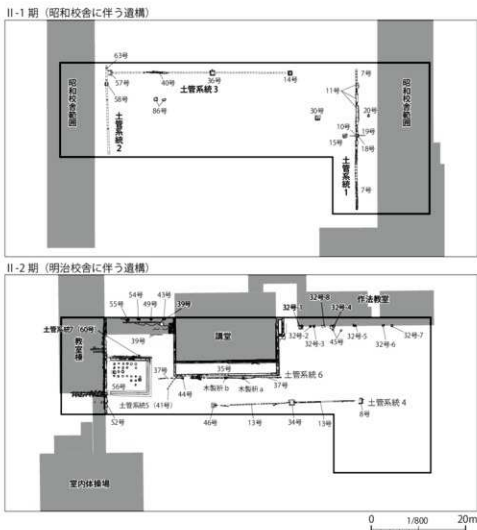
遺構名	陶器計	磁器計	土器計	総計
54号遺構	破片数 4.3	0.0	9.6	13.9
	重量(g) 370.1	45.3	19.0	635.3
55号遺構	破片数 20	2	2	24
	重量(g) 121	7	7	135
58号遺構	破片数 84.1	20.0	104.1	208.2
	重量(g) 39	31	80	150
56号遺構	破片数 694.6	193.3	882.2	1670.1
59号遺構	破片数 36	13	49	98
	重量(g) 479.7	58.3	538.0	1076.0
60号遺構	破片数 9	1	1	11
	重量(g) 81.7	12.3	6.0	100.0
62号遺構	破片数 5	1	4	10
	重量(g) 785.5	19	12.5	798.0
63号遺構	破片数 19	13	10	42
	重量(g) 363.3	107.4	4	475.1
66号遺構	破片数 311	4	1	316
	重量(g) 344.4	225.7	26.6	696.7
68号遺構	破片数 79	7	4	90
	重量(g) 1406.2	52.8	273.8	1732.8
69号74号遺構	破片数 23	29	29	81
	重量(g) 1634.1	485.4	603.4	2722.9
70号遺構	破片数 4	8	13	25
	重量(g) 53.5	143.3	122.2	319.0
71号遺構	破片数 8	6.1	28.8	34.9
	重量(g) 8	29	34.0	72.0
72号遺構	破片数 8	20	1	29
	重量(g) 104.0	48.6	1	153.6
73号遺構	破片数 7	1	1	9
	重量(g) 21.9	2.6	1	25.5
75号遺構	破片数 161	9.9	1	172
	重量(g) 425.6	1097.7	16.9	1540.2
76号遺構	破片数 1	1	1	3
	重量(g) 3	3	1.5	7.5
77号遺構	破片数 3	3	1	7
	重量(g) 24.2	88.8	31.9	144.9
80号遺構	破片数 2	1	1	4
	重量(g) 10.9	21.2	5.6	37.7
81号遺構	破片数 1	7.7	7.7	15.4
	重量(g) 2.4	30.6	2	35.0
82号遺構	破片数 1	1	1	3
	重量(g) 5	2	2	9
84号遺構	破片数 66.9	22.1	81.9	170.9
	重量(g) 112	34	8	144
85号遺構	破片数 3244.1	284.4	206.2	3734.7
	重量(g) 36	17	2	55
86号遺構	破片数 437.9	135.7	91.4	665.0
	重量(g) 30	52	2	84
87号遺構	破片数 1750.0	399.2	340.0	2489.2
88号遺構	破片数 1	1	3.0	3.9
	重量(g) 5	1	2	8
89号遺構	破片数 62.6	11.0	52.7	126.3
	重量(g) 8.0	1.6	19.2	28.8
90号遺構	破片数 1	2	1	4
	重量(g) 8.1	0.6	1	9.7
92号遺構	破片数 3	3	1	7
	重量(g) 66.8	6.0	72.8	145.6
95号遺構	破片数 10	3	1	14
	重量(g) 419.7	102.8	13.0	535.5
94号遺構	破片数 6880	247.8	388	9743
99号合計	破片数 977128.6	30707.0	7984.1	2318105.7

一方、昭和校舎の建築の前には震災後の仮設校舎があり、35号遺構付近に建てられていたと記録が残る(東京都立白鷗高等学校1989)。調査中にこの仮設校舎の痕跡を確認することはできなかったが、土管系統3はこの仮設校舎に伴うものと考えられる。

II-2期 明治校舎に伴う時期である。第192図下はII-2期の遺構と建設当初の明治校舎の配置を重ねたものである。35号遺構や52号遺構、39号遺構は設立当初から所在していた校舎であることがわかる。一方で、生徒数の増加に伴って徐々に増築していったことが記録されており、35号遺構の南辺や56号遺構がこれにあたると思われる。土管系統5~7は校舎に伴うことがわかるが、土管系統4が伴う校舎はない。土管の刻印から、土管系統4は明治43年以降のものと考えられるが、明治期または昭和校舎のどちらに伴うものであるか、不明である。

また、Ⅲ面の項で報告した32号遺構-1からガラス製品が出土しており、明治時代の遺構と考えられる。講堂の東には作法教室があり、32号遺構はこの作法教室の南辺に重なっている。45号遺構も含めて作法教室の基礎であると推定され、ここに示した。

II-3期 府立第一高等女学校の建設以前の遺構と考えられる。39号遺構の下層から出土した53号



第192図 II面の遺構と学校校舎の配置図 (1/800)

遺構や59号遺構は建物基礎と考えられる。また、土管系統8は56号遺構に、土管系統9は土管系統5にそれぞれ壊されており、府立第一高等学校建設以前から敷設されていた可能性がある。

【Ⅲ面】

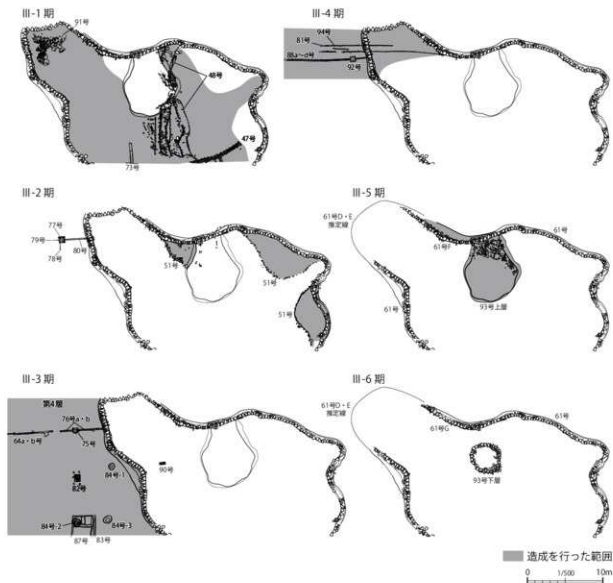
Ⅲ面には、池遺構に関連するものと、第4層に遺された遺構が分類される。池遺構は、松山藩酒井家の屋敷図(第181図)にも同様のものが確認され、明治の地図(第7図左下)にも51号遺構の形に近いものが確認されるが、いずれも形状が異なっている。発掘調査においても、池遺構を構成する石積遺構(61号遺構)、中の島(93号遺構)、木樋系統1～3、土留板列などに段階的な構築が認められた。池遺構は改修や埋立てによって各段階によって形状が変わっていたと考えられる。ここでは、池遺構の形状と埋立てに着目して6段階を設けた(第193図)。

Ⅲ-1期 池遺構が完全に埋立てられた時期にあたる。池遺構を西側から段階的に埋立てる途上で設けられたと考えられる48号遺構や、その前段階として池遺構を狭めた47号遺構、埋立てた土層上面に流れ込んだ91号遺構や73号遺構が属す。91号遺構から、池遺構の埋戻しが第3層造成後にも継続していたことがわかる。Ⅱで確認したとおり、池遺構が完全に埋立てられたのは明治20～30年代と考えられる。

Ⅲ-2期 明治17年の絵図(第7図左下)の時期に相当する。池を51号遺構の土留板によって狭め、北東部は細い角のような形状となっている。池としての機能は損なっていないと考え、導水施設の最終段階である導水系統1もこの時期まで利用されたと推測する。

Ⅲ-3期 導水系統2を設置した時期に相当する。第4層上面は、導水系統2の設置に伴う盛土と考えられ、第4層上面に遺された82・84・87号遺構はここに属するものと考えられる。第4層の出土遺物から、盛土を行った時期は18世紀後葉から19世紀初頭と考えられる。90号遺構は池が機能していた時期に設置されたと考えられ、ここに分類した。

Ⅲ-4期 導水系統3を設置した時期に相当する。導水系統3は61号遺構Dの胴木よりも下層にあるため、池を造成した当初から利用された可能性も考えられた。しかし、導水系統1を設置した際の改修である81・94号遺構の出土遺物には18世紀後葉から19世紀前葉のものが多く、61号遺構Dは、池を利用している途中段階で木樋の設置のために改修されて、検出した池遺構の形状になったものと考えられる。61号遺構Eにおいても、石積の方向が他所と異なっており、池の北西側で大規



第193図 池遺構と周辺の遺構の変遷 (1/500)

模な改修が行われたものと推測される。

また、導水系統3に利用された木桶(88号遺構b・c)の木材の残存最外年輪は16世紀中頃から17世紀前半を示すと分析結果を得た。木材は分割材であり、木桶の外縁が木材本体の外縁を示すとは限らない。また、本所上水廃止後の古桶の売却が享保19(1734)年に行われたという記録も残る(神吉1998)。この木桶が本所上水のものとは断定できないが、古い木桶を再利用した可能性がある。Ⅲ-5期 93号遺構上層や61号遺構北辺を改修した時期にあたる。池の改修は、土橋が石積遺構を埋めて構築されていることから、61号遺構北辺(G→F)の後、93号遺構上層の構築が行われている。93号遺構の出土遺物から、中の島の改修は17世紀中葉から19世紀前葉にかけて、断続的に行われたものと判断した。また、前述のⅢ-4期の池北東の改修を考慮して、池北東の石積の形状は推定線としている。

Ⅲ-6期 池を造成した当初の時期である。池遺構は第5層を切って構築されている。後述のとおり、第5層が17世紀後葉以降の造成であり、池遺構も17世紀後葉以降の造成と考えられる。

【IV面】

IV面には、調査区を東西に横断する33号遺構をはじめ、33号遺構構築後の盛土である第5層上層の遺構、地山層である第6層上面で検出した遺構が属す。

池遺構は第5層を掘り込んでつくられているため、第5層の構築時期は、池遺構の構築よりも早い時期となる。また、池遺構が機能していたころにも第5層は存在していた可能性があり、池遺構と併存することも考えられる。

第5層上面の24号遺構は、被熱した瓦を充填した建物基礎で、瓦の中には螺紋のものが含まれていた。元浅草遺跡を利用した武家で螺紋を用いたのは池田家のみであるものの、池田家家紋と出土瓦の螺紋はやや異なるため、池田家のものと断定はできない。この瓦が池田家のものと仮定すると、17世紀半ばに焼失した池田家屋敷の瓦を再利用した17世紀後葉以降の遺構と考えられ、第5層は17世紀後葉頃から存在していたと考えられる。その他の第5層上面で検出した遺構の年代は不明であるが、少なくとも17世紀後葉以降の遺構であると推測される。

33号遺構は、江戸全図(第172図)に示された地境であると考えられ、17世紀中頃まで利用されていた遺構と考えられる。間知石を積み上げた遺構であり、遺構北側の堆積状況から水路の護岸であったと推測されるが、調査区内では対岸を検出できなかった。本遺跡の北西に位置する上野広小路遺跡では、不忍池から忍川への出口にあたる三橋と考えられる石組水路を検出した(加藤建設株式会社2007)。忍川は東へ流れ、本遺跡の南西にある三味線堀へと流れ込んでおり、本遺跡の近隣を流れていたと考えられる。33号遺構も同様の水路の一部であった可能性がある。

85・89号遺構は第4層の下位にあり、第4層造成以前の遺構である。第4層の造成は18世紀後葉以降と推測され、85・89号遺構はそれ以前の遺構である。Ⅲ-5期以前のものと考えられる。

95～98号遺構は、池遺構下層の下位にあり、池遺構よりも古い遺構である。池遺構の構築時期は17世紀後葉以降と考えられるため、95～98号遺構はそれ以前に利用された遺構と考えられる。

他の第6層上面の遺構については、昭和校舎の解体に伴って第6層の上面まで攪乱されており、遺構や盛土の先後関係から推定することは難しい。廃棄土坑と考えられる69～71・74号遺構は17世紀後葉から18世紀中葉の遺物を多く出土し、2・68・72号遺構は18世紀後葉から19世紀前

葉の遺物を主体とするものの、他の時期の遺物も混入しており遺物から時期の特定することは難しい。これらの廃棄土坑の出土遺物には、被熱痕跡の著しい陶磁土器がしばしば見られる。文献調査により当地が幾度も火事に遭っていたことが判明しており、たびたび廃棄土坑を掘って後始末を行ったものと考えられる。また、廃棄土坑や木枠を伴う土坑は上端部が削平されており、これらの後始末に伴って当地を整地していたと推測される。(山崎太郎)

【引用・参考文献】

- 江戸遺跡研究会 2009『江戸遺跡研究会第22回大会 江戸をつくった土木技術 発表要旨』
- 江戸遺跡研究会 2010『江戸遺跡研究会第24回大会 江戸城・城下と伊豆石 発表要旨』
- 江戸遺跡研究会 2013『江戸遺跡研究会第26回大会 江戸と木の文化』
- 江戸陶磁土器研究グループ 1992『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ 発表要旨』
- 江戸陶磁土器研究グループ 1996『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ 発表要旨』
- 小俣 慎 2011「台東区内遺跡調査検出の上水・下水関連遺構」『江戸の上水道と下水道』吉川弘文館
- 加藤 晃 1989「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開」『國學院大學日本史学専攻大学院会史学研究集録』
14 國學院大學日本史学専攻大学院会
- 加藤建設株式会社 2007『上野広小路遺跡』
- 神吉和夫 1998「享保七年江戸四上水廃止の研究」『土木史研究』第18号 土木学会
- 北野信彦 2000「近世出土漆器椀の用材に関する一考察」『考古学と自然科学』38 文化財科学会
- 木村充保 2022『下駄の考古学』同成社
- 齊藤 進・佐藤貴浩 2023「足立区内煉瓦遺構調査報告書—煉瓦造橋荷社3基、茂出木家煉瓦造蔵・煉瓦造防空壕—」『足立区立郷土博物館紀要』第43号 足立区立郷土博物館
- 佐藤貴浩 2022「現足立区における煉瓦工場の展開」『足立区立郷土博物館紀要』第42号 足立区立郷土博物館
- 鈴木裕子 2009「江戸遺跡出土の小型樽」『東京考古』27 東京考古談話会
- 鈴木裕子 2017「「瀬戸助」銘の陶器について」『東京考古』35 東京考古談話会
- 墨田区横綱一丁目埋蔵文化財調査会『木所御蔵跡・陸軍被服工廠跡』株式会社NTTドコモ・東日本電信電話株式会社、株式会社NTTドコモファシリティアーズ、墨田区横綱一丁目埋蔵文化財調査会
- 「近世考古学の提唱」五〇周年記念研究大会実行委員会 2019『近世の酒と宴』
- 台東区史編纂専門委員会 2002『台東区史』通史編Ⅲ下巻 東京都台東区
- 東京都立白鷗高等学校 1989『百年史』
- 常滑市民俗資料館編 1994『土管の歴史～飛鳥から現代まで～』常滑市
- 野中和夫編 2012『江戸の水道』同成社
- 埋蔵文化財研究会 2017『第66回埋蔵文化財研究会』幕藩体制下の瓦—近世都市遺跡における生産と流通—
発表要旨・資料集』
- 森島知之 2021「明治10年代の千川上水再興と東京府」『文学研究論集』第55号 明治大学大学院
- 煉瓦研究ネットワーク関東 2022「第4項 煉瓦刻印」『重要文化財 旧島津家本邸事務所 耐震体先工事報告書』
株式会社文化財保存計画協会



1. I区IV面全景（南から）



2. III区II面全景（西から）



1. II・III区III・IV面全景（西から）



1. I区北壁土層堆積状況（南から）



2. II区北壁土層堆積状況（南から）



3. III区北壁土層堆積状況（南から）



4. 35号遺構建物基礎南側土層堆積状況（東から）



1. I区南北トレンチ土層堆積状況 (1) (西から)



2. I区南北トレンチ土層堆積状況 (2) (西から)



3. I区南北トレンチ土層堆積状況 (3) (西から)



4. I区南北トレンチ土層堆積状況 (4) (西から)



5. I区南北トレンチ土層堆積状況 (5) (西から)



6. I区東西トレンチ土層堆積状況 (1) (南から)



7. I区東西トレンチ土層堆積状況 (2) (南から)



8. I区東西トレンチ土層堆積状況 (3) (南から)



1. I区東西トレンチ土層堆積状況 (4) (南から)



2. I区東西トレンチ土層堆積状況 (5) (南から)



3. I区東西トレンチ土層堆積状況 (6) (南から)



4. II区深掘トレンチ土層堆積状況 (南から)



5. 35号遺構東張出部 (北から)



6. 35号遺構東辺内部側面 (西から)



7. 35号遺構拡張部東辺内部側面 (西から)



1. 35号遺構東辺外部側面（東から）



2. 35号遺構南辺外部側面（南から）



3. 35号遺構中辺内部側面（北から）



4. 35号遺構中辺中央炭書き「口下」



5. 35号遺構中辺中央炭書き「八下」



1. 35号遺構西辺中央炭書き「二下」



2. 35号遺構中辺中央炭書き「へ下」



3. 35号遺構西辺炭書き「と下」



4. 35号遺構東辺中央炭書き(文字不明)



5. 35号遺構拡張部土層堆積状況(西から)



6. 35号遺構東辺外側土層堆積状況(北東から)



7. 35号遺構中辺南側土層堆積状況(西から)



1. 35号遺構胴木検出状況（北から）



2. 35号遺構拡張部胴木検出状況（西から）



4. 35号遺構南辺胴木・横木撤去状況（西から）



3. 35号遺構東辺・南辺胴木結合部（南から）



5. 35号遺構南辺胴木・横木撤去状況（南から）



1. 52号遺構東辺内部側面（西から）



2. 56号遺構北辺外部側面（北から）



3. 39・40号遺構検出状況（東から）



4. 15号遺構上段（南から）



5. 15号遺構下段消火栓検出状況（南から）



1. 7号遺構北側（北から）



2. 7号遺構南側（南から）



3. 13・34号遺構検出状況（西から）



4. 13・38・46号遺構検出状況（東から）



5. 34号遺構検出状況（南から）



6. 46号遺構検出状況（西から）



7. 62号遺構検出状況（南から）



8. 67号遺構検出状況（北西から）



1. 14号遺構検出状況(東から)



2. 36号遺構検出状況(北から)



3. 37号遺構検出状況(東から)



4. 37号遺構木製枡 a 遺物検出状況(南から)



5. 37号遺構木製枡 b 底面検出状況(南から)



6. 44号遺構底面検出状況(南から)



7. 63号遺構土管検出状況(南から)



8. 10号遺構検出状況(南から)



1. 30号遺構検出状況（西から）



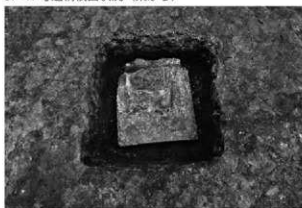
2. 38号遺構検出状況（南から）



3. 41号遺構検出状況（東から）



4. 60号遺構検出状況（北東から）



5. 59号遺構 -1 完掘（南から）



6. 53号遺構 -1 完掘（南から）



7. 11号遺構検出状況（北から）



1. 42号遺構底面検出状況(南から)



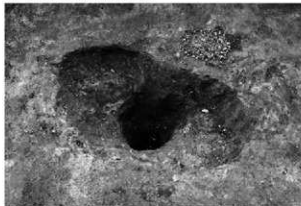
2. 50号遺構検出状況(北から)



3. 43号遺構完掘(南から)



4. 49号遺構完掘(西から)



5. 54号遺構完掘(北から)



6. 55号遺構検出状況(北から)



7. 35号遺構調査作業



8. 30号遺構煉瓦サンプル採取作業



1. 池遺構検出状況 (南から)



2. 47・48・51・61・93号遺構検出状況 (南から)



1. 池遺構底面検出状況（南から）



2. 池遺構完掘（南から）



1. 61号遺構 (A) 石積検出状況 (北東から)



2. 61号遺構 (B) 石積前面 (東から)



3. 61号遺構 (B・C) 石積前面 (北東から)



4. 61号遺構 (C・D) 石積前面 (東から)



5. 61号遺構 (D) 石積前面・木樋出口部分 (東から)



6. 61号遺構 (E) 石積前面 (南から)



7. 61号遺構 (F) 石積前面 (南西から)



8. 61号遺構 (F) 石積前面 (南西から)



1. 61号遺構 (G) 石積上面 (北西から)



2. 61号遺構 (G) 石積前面 (南西から)



3. 61号遺構 (F・H) 石積前面 (南から)



4. 61号遺構 (H) 石積前面 (南東から)



5. 61号遺構 (I) 石積前面 (南西から)



6. 61号遺構 (I・J) 石積前面 (西から)



7. 61号遺構 (K・L) 石積前面 (西から)



8. 61号遺構 (L) 石積検出状況 (北西から)



1. 61号遺構 (C) 胴木検出状況 (北から)



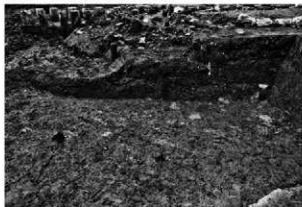
2. 61号遺構 (D) 胴木検出状況 (北から)



3. 61号遺構 (G) 胴木検出状況 (西から)



4. 93号遺構土層堆積状況 (東から)



5. 93号遺構土層堆積状況 (北から)



6. 47号遺構検出状況 (西から)



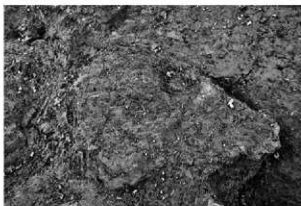
7. 47号遺構土留板側面 (北西から)



8. 47号遺構土層堆積状況 (北東から)



1. 48号遺構（南1）検出状況（東から）



2. 48号遺構（南1）コモ状繊維検出状況（1）（東から）



3. 48号遺構（南1）コモ状繊維検出状況（2）（東から）



4. 48号遺構（南2）側面検出状況（東から）



5. 48号遺構（南3）側面検出状況（東から）



6. 48号遺構（南4）側面検出状況（東から）



7. 48号遺構（南5）側面検出状況（東から）



8. 48号遺構（南4）側面（東から）



1. 48号遺構(南5)側面(東から)



2. 48号遺構(北1)検出状況(東から)



3. 48号遺構(北2)検出状況(東から)



4. 48号遺構(北2)完掘(東から)



5. 91号遺構瓦集中部検出状況(南から)



6. 90号遺構底面・礎検出状況(西から)



7. 64a号遺構竹樋検出状況(東から)



8. 64b号遺構木樋検出状況(東から)



1. 75・76・77・78・79・80号遺構完掘（東から）



2. 76・80号遺構木槨検出状況（東から）



3. 77号遺構底面検出状況（西から）



4. 75号遺構底面検出状況（西から）



5. 80号遺構木槨内部堆積状況（東から）



6. 81・88・92・94号遺構検出状況（東から）



7. 88・92号遺構検出状況（東から）



1. 88号遺構 a 木樋継手部分



2. 92号遺構底面検出状況 (南から)



3. 81・94号遺構検出状況 (東から)



4. 81号遺構側面 (南から)



5. 81号遺構側面 (南から)



6. 94号遺構側面 (南から)



7. 94号遺構側面 (南から)



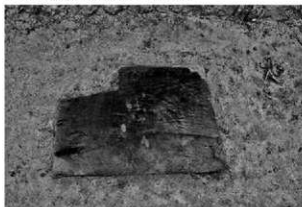
8. 32号遺構-1 礫面検出状況 (南から)



1. 32号遺構-2 検出状況 (南から)



2. 32号遺構-3 検出状況 (南から)



3. 32号遺構-4 検出状況 (南から)



4. 32号遺構-4 磔面検出状況 (南から)



5. 32号遺構-5 検出状況 (南から)



6. 45号遺構土層堆積状況 (南から)



7. 66号遺構検出状況 (北から)



8. 66号遺構底面検出状況 (北から)



1. 82号遺構瓦出土状況(西から)



2. 84号遺構-2礎出土状況(北から)



3. 84号遺構-3完掘(北から)



4. 83号遺構完掘(北から)



5. 87号遺構掘削状況(北から)



6. 33号遺構検出状況(Ⅰ区東)(北から)



7. 33号遺構検出状況(Ⅰ区～Ⅱ区東)(西から)



1. 33号遺構検出状況（I区西～II区東）（北から）



2. 33号遺構石積近影（I区）（1）（北から）



3. 33号遺構石積近影（I区）（2）（北から）



4. 33号遺構石積近影（I区）（3）（北から）



5. 33号遺構石積近影（I区）（4）（北から）



6. 33号遺構石積近影（I区）（5）（北から）



7. 33号遺構石積近影（I区）（6）（北から）



8. 33号遺構石積近影（I区）（7）（北から）



1. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(8)(北から)



2. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(9)(北から)



3. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(10)(北から)



4. 33号遺構石積近影(Ⅰ区)(11)(北から)



5. 33号遺構石積前面(Ⅰ区東)(北から)



6. 33号遺構石積前面(Ⅰ区西)(北から)



7. 33号遺構石積前面(Ⅱ区東)(北から)



8. 33号遺構石積前面(Ⅱ区西)(北から)



1. 33号遺構石積前面近影（1区西から）（北から）



2. 33号遺構アンカー状木製品あ出土状況（北東から）



3. 33号遺構アンカー状木製品い出土状況（西から）



4. 33号遺構アンカー状木製品う出土状況（南西から）



5. 33号遺構アンカー状木製品え出土状況（北東から）



6. 33号遺構アンカー状木製品お出土状況（西から）



7. 33号遺構アンカー状木製品か出土状況（北西から）



8. 33号遺構アンカー状木製品き出土状況（北から）



1. 33号遺構土留板検出状況(北から)



2. 33号遺構胴木検出状況(胴木①~④)(北から)



3. 33号遺構胴木検出状況(胴木⑤~⑧)(北から)



4. 33号遺構胴木検出状況(胴木⑦~⑩)(北から)



5. 33号遺構胴木検出状況(胴木⑪・⑫)(北から)



6. 33号遺構胴木撤去後(胴木支え②~③)(北から)



7. 33号遺構胴木撤去後近影(胴木支え④・⑤)(北から)



8. 33号遺構胴木撤去後近影(胴木支え②・③)(北から)



1. 33号遺構完掘（Ⅰ区東）（北から）



2. 33号遺構完掘（Ⅰ区西～Ⅱ区東）（北から）



3. 33号遺構完掘（Ⅱ区西）（北から）



4. 33号遺構裏込め土層堆積状況（Ⅰ区東）（西から）



5. 33号遺構土層堆積状況（Ⅰ区東）（西から）



6. 33号遺構石積前面（Ⅲ区）（北から）



7. 33号遺構桐木検出状況（桐木^⑬～^⑭）（北から）



8. 33号遺構桐木撤去後（Ⅲ区）（北から）



1. 33号遺構土層堆積状況(Ⅲ区)(東から)



2. 99号遺構検出状況(南から)



3. 2号遺構検出状況(東から)



4. 24号遺構西辺瓦面検出状況(南から)



5. 12号遺構検出状況(南から)



7. 12号遺構井戸下段検出状況(南から)



6. 12号遺構土層堆積状況(南から)



1. 26号遺構土層堆積状況(西から)



2. 95・96・97号遺構検出状況(西から)



3. 95号遺構内部完掘(北から)



4. 95号遺構木樋接続部分近影(東から)



5. 96・97・98号遺構断削状況(北から)



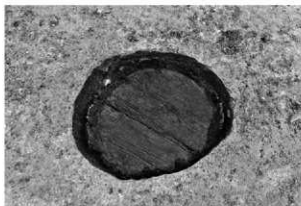
6. 1号遺構底面検出状況(北東から)



7. 3号遺構遺物出土状況(西から)



8. 4号遺構遺物出土状況(西から)



1. 22号遺構底面検出状況(西から)



2. 21号遺構底面検出状況(南から)



3. 9号遺構側板・底面検出状況(南から)



4. 23号遺構側板・底面検出状況(南から)



5. 25号遺構側板・底面検出状況(南から)



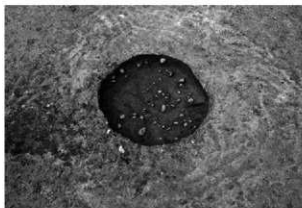
6. 29号遺構底面検出状況(南から)



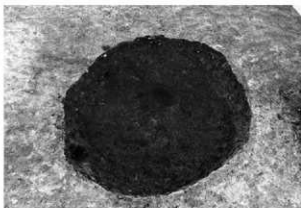
7. 85号遺構完掘(東から)



8. 89号遺構完掘(南から)



1. 27号遺構磔面検出状況(南から)



2. 31号遺構完掘(南から)



3. 68号遺構木材出土状況(南から)



4. 68号遺構完掘(南から)



5. 69・74号遺構完掘(西から)



6. 71号遺構完掘(北から)



7. 72号遺構遺物出土状況(北から)



8. 72号遺構完掘(北から)



1. 6号遺構完掘（東から）



2. 遺跡説明会（学校向け）(1)



3. 遺跡説明会（学校向け）(2)



4. 33号遺構土留板取上げ作業



5. 33号遺構脚木取上げ作業



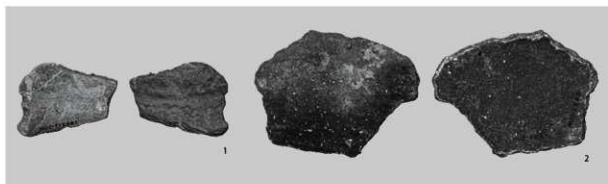
6. 61号遺構調査作業



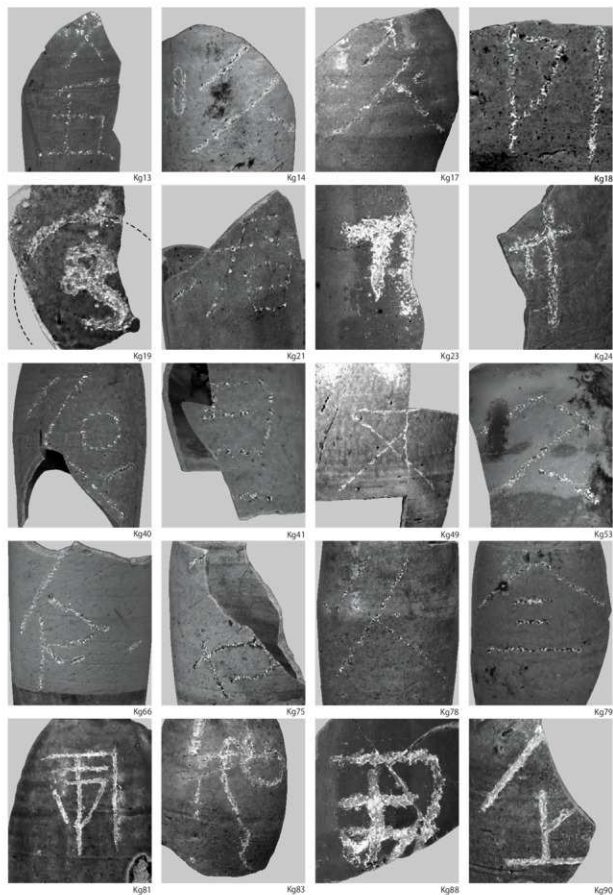
7. 61号遺構調査作業



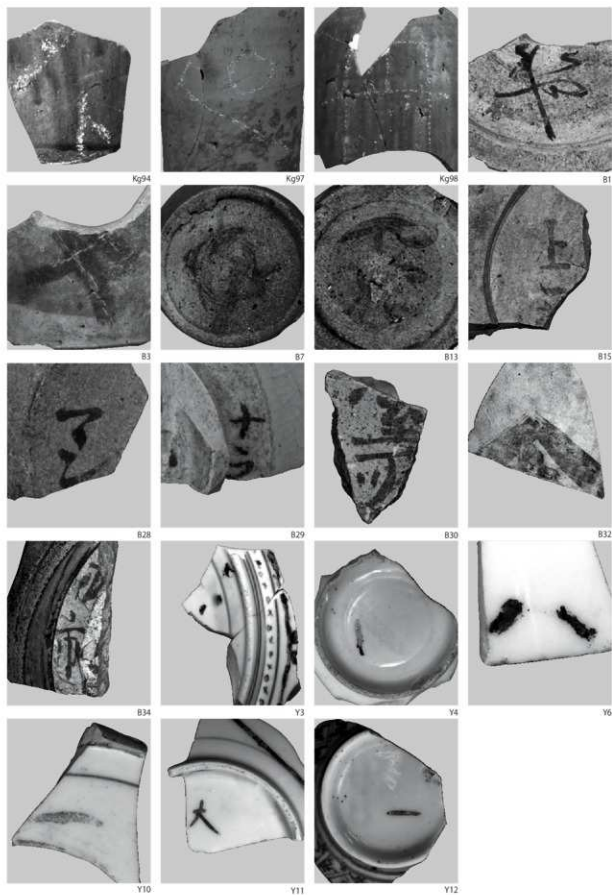
8. I・II区雨天後水抜き作業



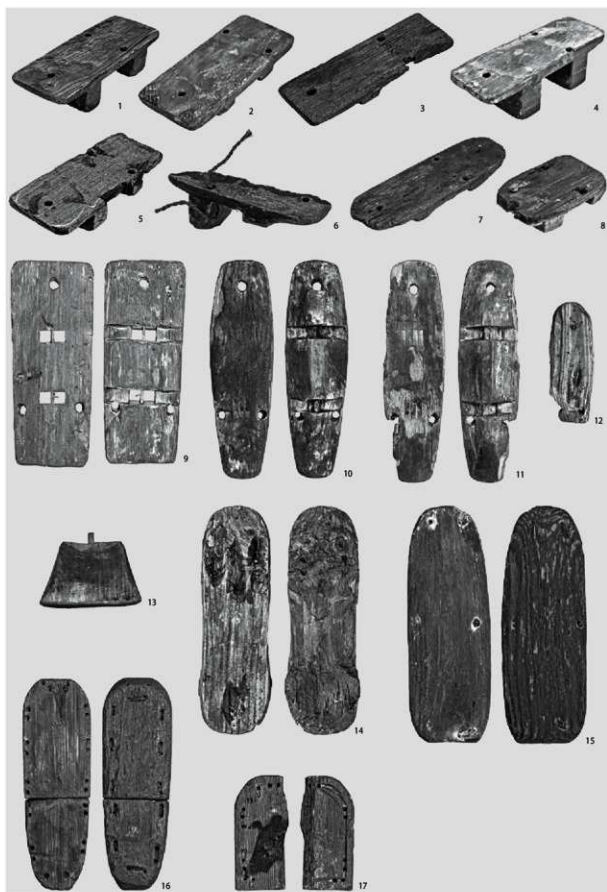
中世以前の遺物



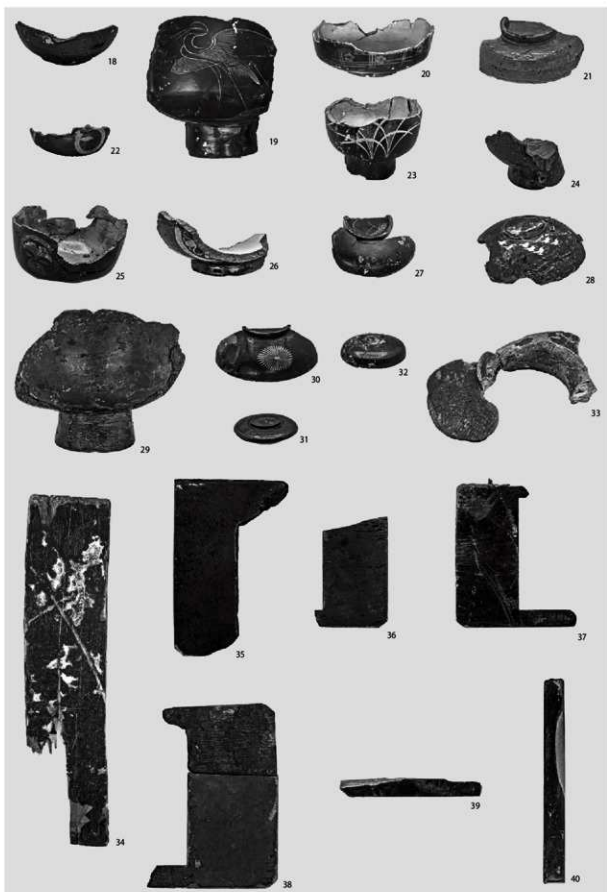
文字や記号が記された陶磁器・土器 (1)

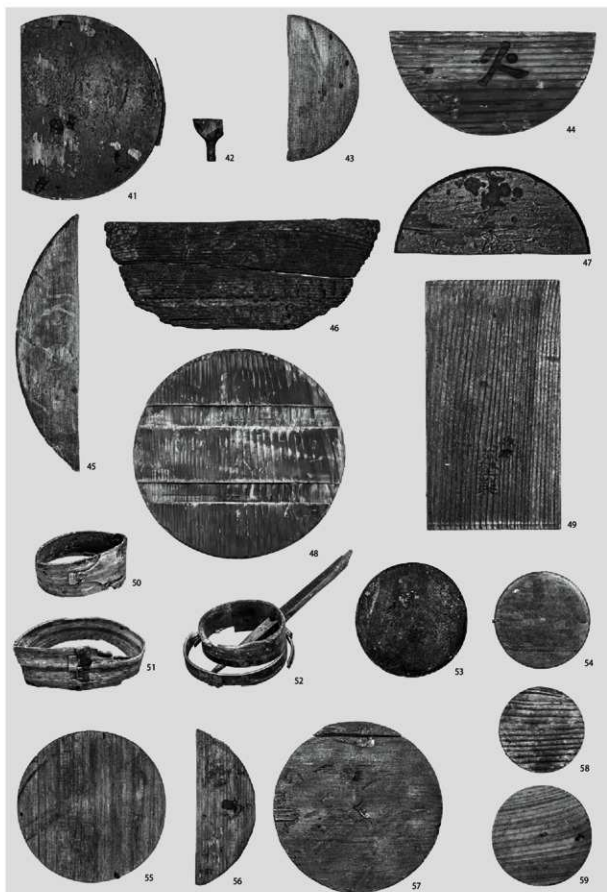


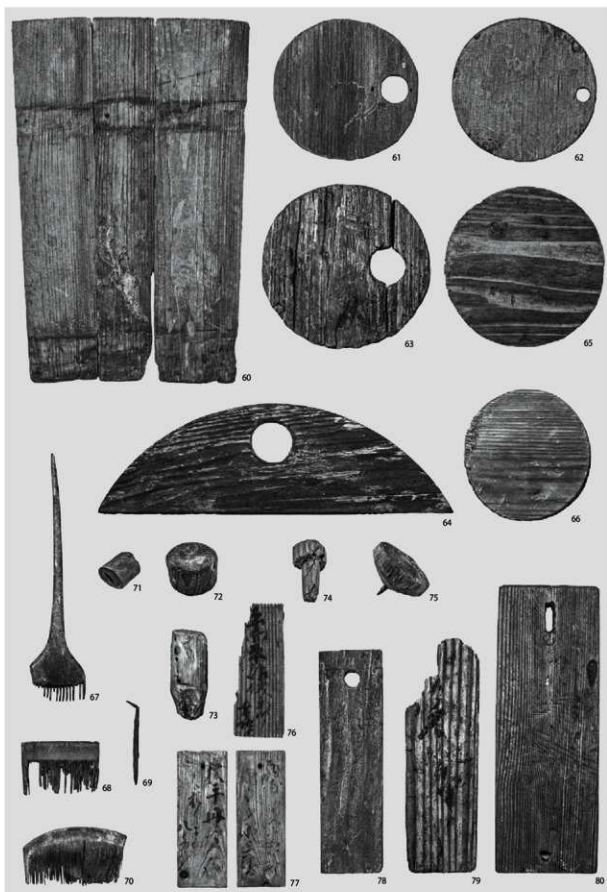
文字や記号が記された陶磁器・土器 (2)



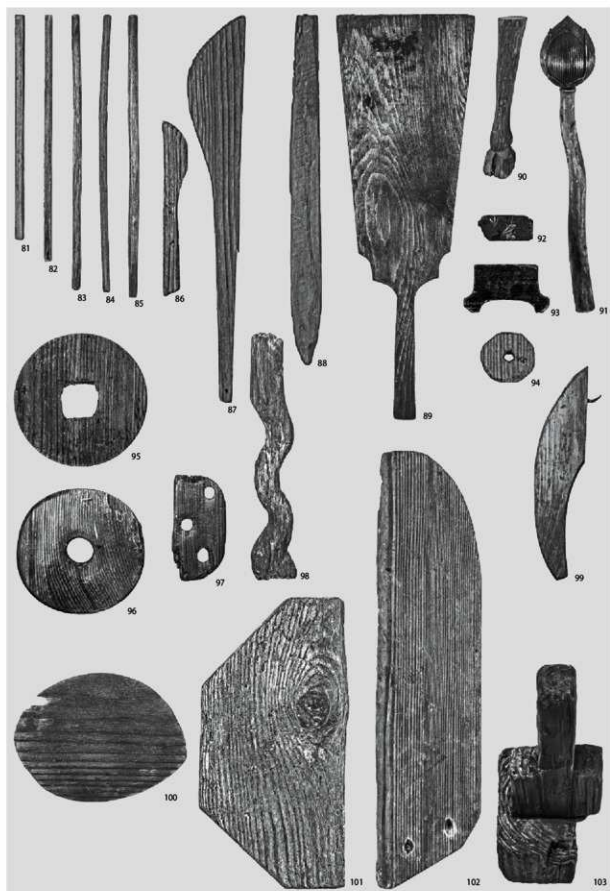
木製品 (1)



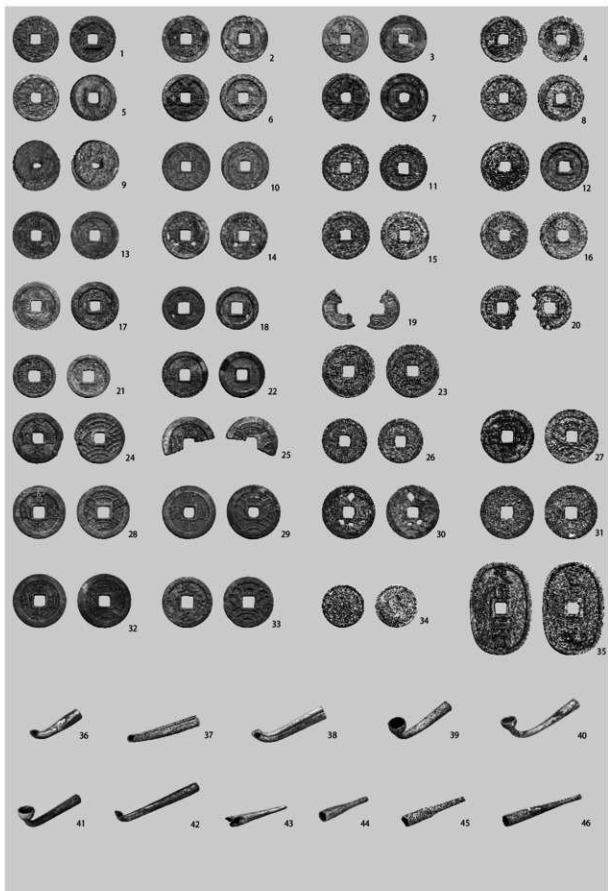




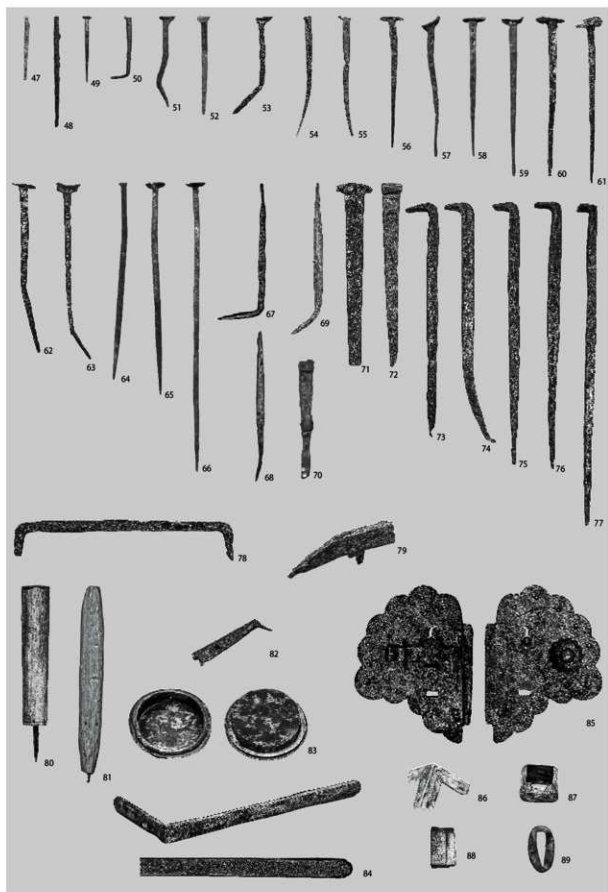
木製品 (4)



木製品 (5)

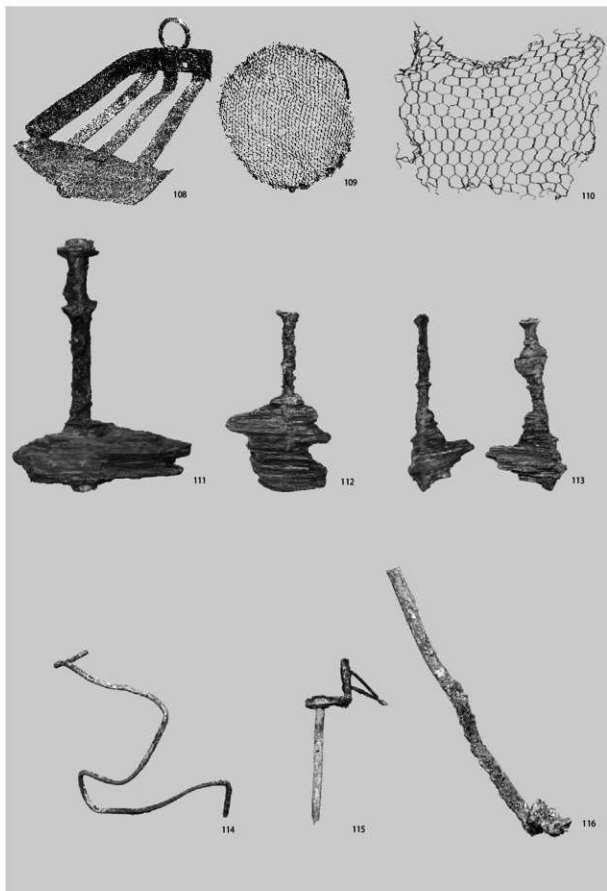


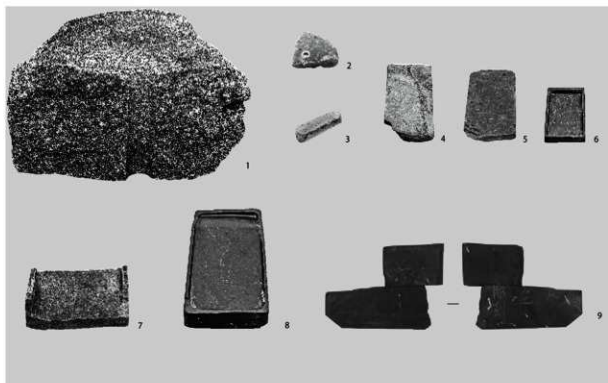
金属製品 (1)



金属製品 (2)



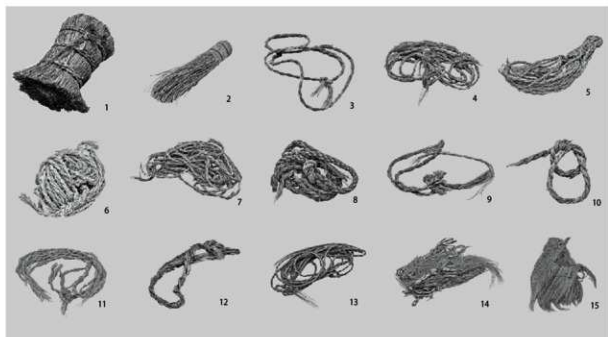




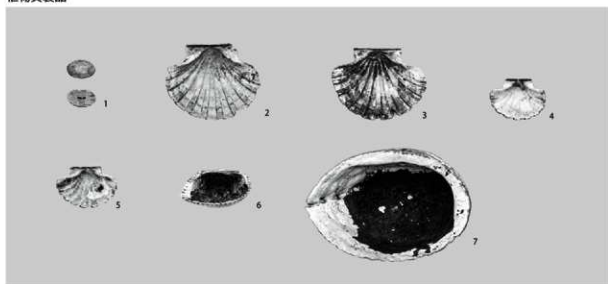
石製品



ガラス製品



植物質製品



骨角貝製品

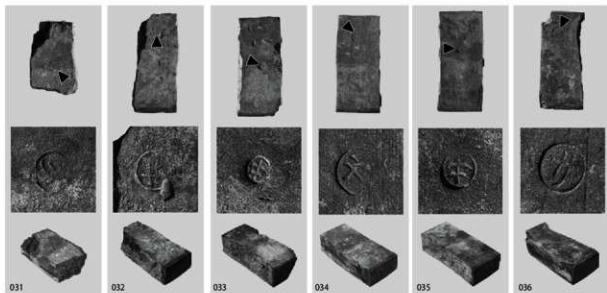
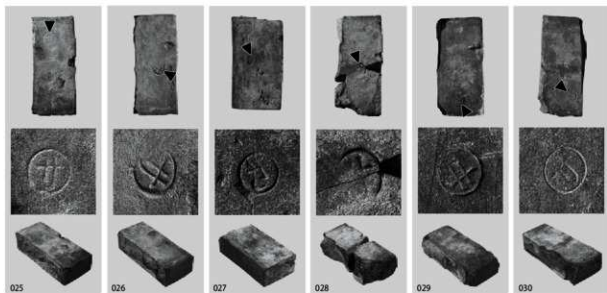
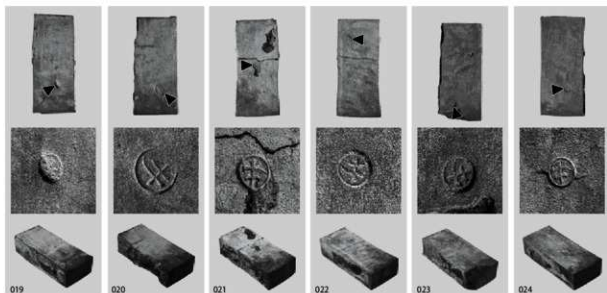


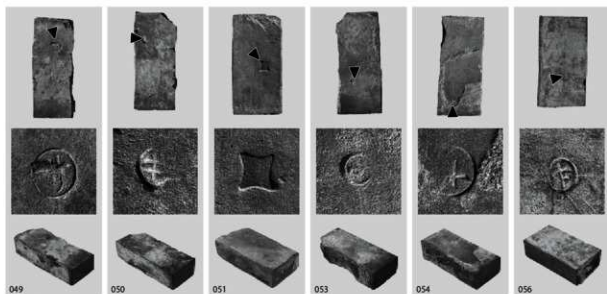
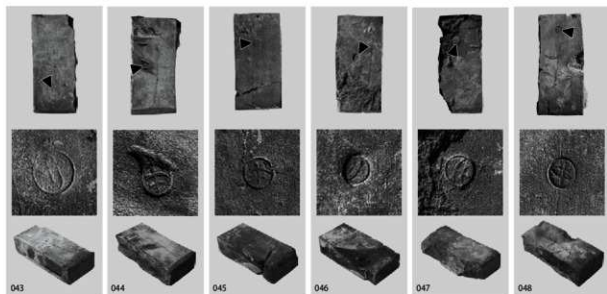
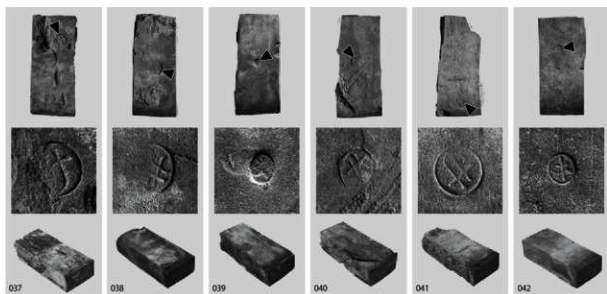
その他の素材の製品

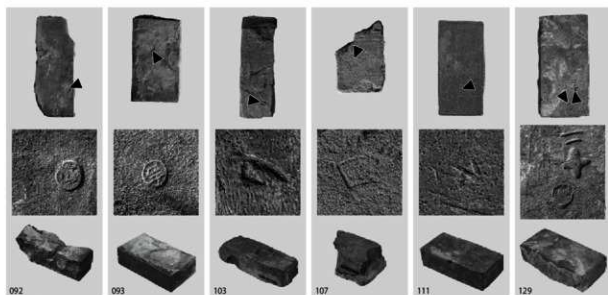
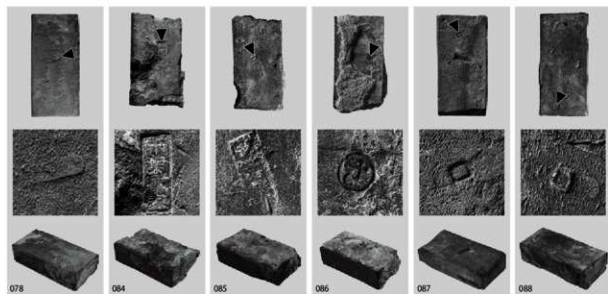
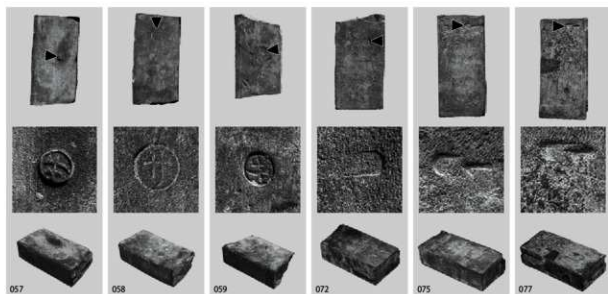




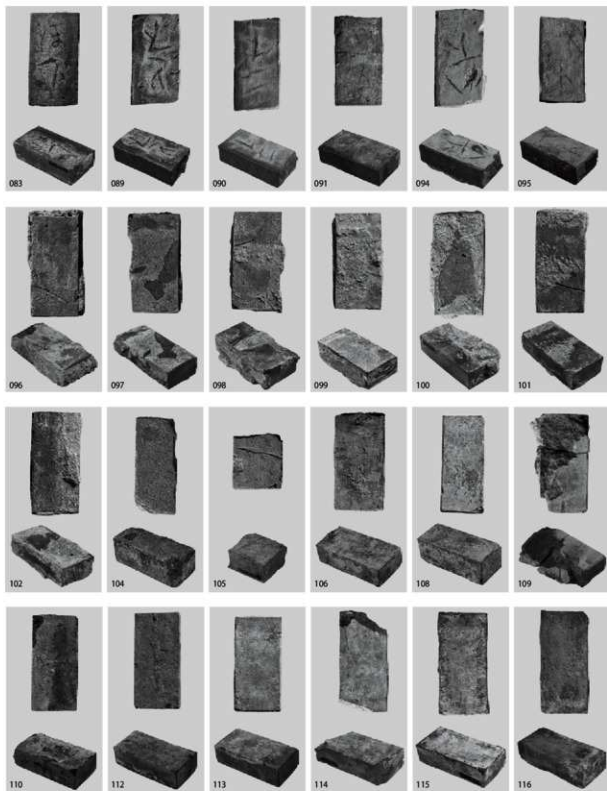
燎瓦 (1)



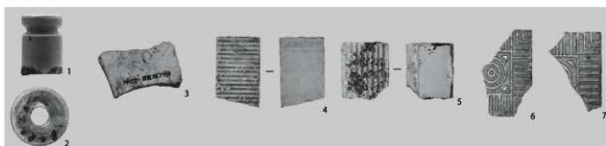




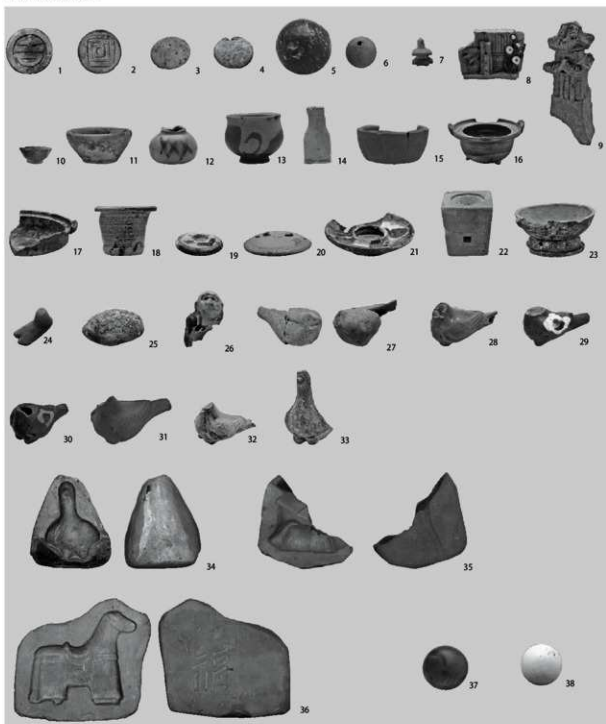




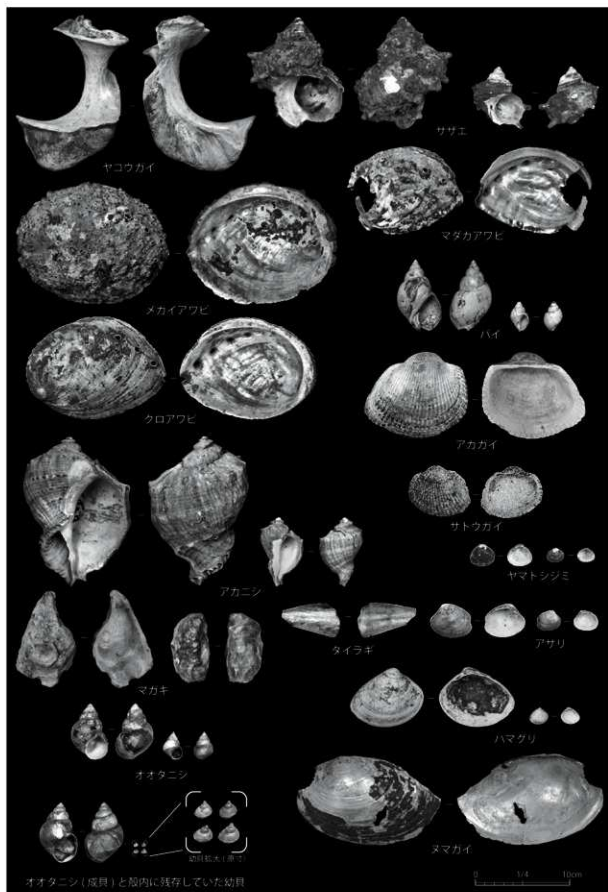




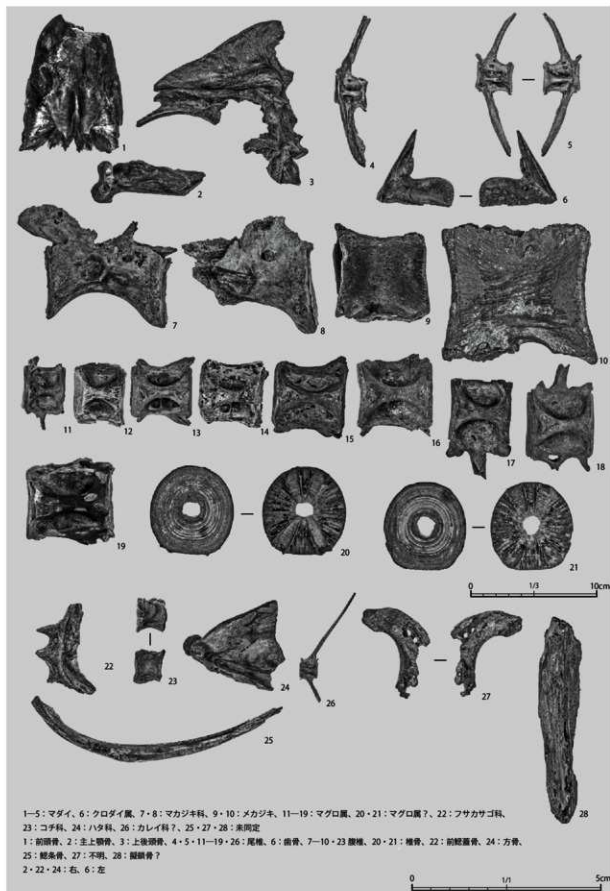
その他の建材など



玩具・ミニチュア・人形



動物遺体 (貝類)



1-5: マダイ、6: クロダイ属、7・8: マカジキ科、9・10: メカジキ、11-19: マグロ属、20・21: マグロ属?, 22: フサカサゴ科、
 23: コナ科、24: ハタ科、26: カレイ科?、25・27・28: 未同定
 1: 前頭骨、2: 主上顎骨、3: 上後頭骨、4・5・11-19・26: 尾椎、6: 歯骨、7-10・23 腹椎、20・21: 椎骨、22: 前鰓蓋骨、24: 方骨、
 25: 鰓条骨、27: 不明、28: 鰓蓋骨?
 2・22・24: 右、6: 左



動物遺体（鳥類）(1)

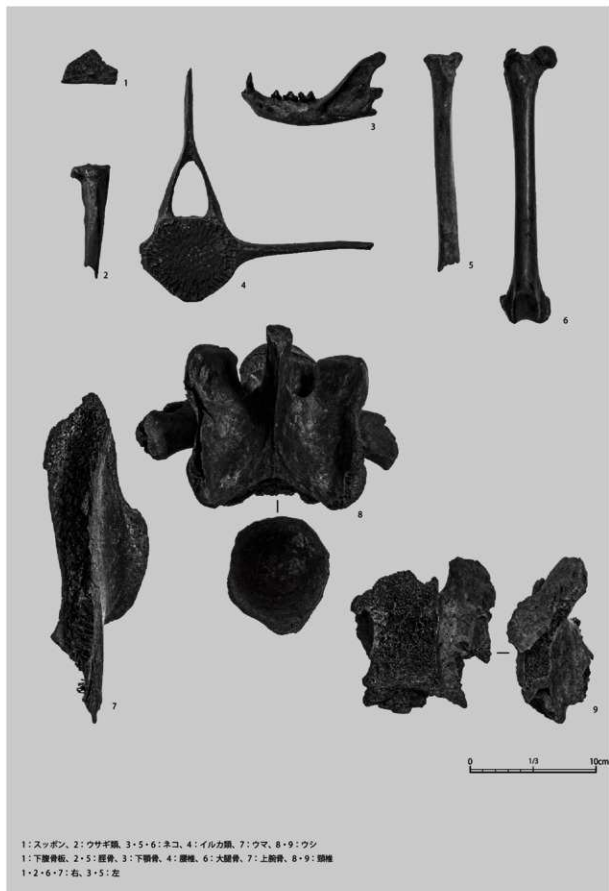


図版 67

1: ツル科, 2: キジ科, 3: マカモ属, 4: ヒロードキンクワ属, 5: ア・B: カモ属科, 6: カラス科, 10: カシロ
 1-4: 上腕骨, 5: 肩臼骨, 6: 脛骨, 7-8: 尺骨, 9-10: 手根中骨
 1-3・9: はた, はかほ

図版 68

1: カモ属科, 2-3・7: キジ科, 4-9: フクロウ科, 5-8: ニワトリ, 6: カラス科
 1-3: 大翼骨, 4-5: 跗跖骨, 6-9: 足根中足骨
 2-3・6: はた, はかほ



動物遺体 (爬虫類・哺乳類)

報告書抄録

ふりがな	たいとうく もとあさくさいせき							
書名	台東区 元浅草遺跡							
副書名	都立白鷺高等学校附属中学校仮設校舎建設に伴う埋蔵文化財調査							
シリーズ名	東京都埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第386集							
編著者名	山崎太郎・両角まり・渋谷葉子・長佐古真也・宮本由子・鈴木伸哉・大山幹成・江田真毅・許開軒・阿部常樹・及川良彦							
編集機関	公益財団法人東京都教育支援機構 東京都埋蔵文化財センター							
所在地	〒206-0033 東京都多摩市落合一丁目14番2 TEL 042-374-8044							
発行年月日	西暦 2024年 7月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市区町村	遺跡番号					
元浅草遺跡	東京都台東区元浅草一丁目番22	13106	11	35° 42'	139° 46'	20220808 ～ 20230623	1,800㎡	都立白鷺高等学校附属中学校仮設校舎の建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
元浅草遺跡	社寺・ 屋敷	近世・ 近代	煉瓦製建物基礎3基、円礫充填建物基礎1基、瓦充填建物基礎1基、板基礎列1基、コンクリート製三和土1基、コンクリート縁石列1基、鉄管列1条、土管列10条、木樋列6条、竹樋3条、コンクリート製枙1基、煉瓦製枙12基、木製枙6基、石積遺構2条、土留板列13条、中の島1基、井戸5基、井戸囲い枠1基、埋設柵4基、木柵土戻5基、土坑16基、木柵2基、瓦集中部1ヶ所、遺物集中部1ヶ所	陶器、磁器、土器、木製品、金属製品、石製品、ガラス製品、植物質製品、骨角貝製品、瓦、煉瓦、ミニチュア、人形、玩具、動物遺体（貝類、魚類、鳥類、爬虫類、本虫類）、植物遺体	東京府立第一高等女学校の建物基礎3基と、渡り廊下部分を検出。近世から近代まで利用されていたと考えられる池遺構とその導水施設、埋立ての土留板列を検出。東西に延びる近世前半の石積遺構を検出。調査範囲外まで続く。			
要約	<p>元浅草遺跡は、武蔵野台地東端部と隅田川西岸の中間にある低地に位置している。今回の調査は、都立白鷺高等学校附属中学校の仮設校舎建設に伴って行われたもので、調査地点は都立白鷺高等学校の校庭にあたる。</p> <p>近代では、東京府立第一高等女学校の講堂と教室棟にあたる煉瓦製建物基礎と、それらを繋ぐ渡り廊下と考えられるコンクリート製三和土を検出した。また、府立第一高等女学校並びに白鷺高等学校の昭和期の校舎に沿う土管列やそれらが接続する煉瓦製枙を多数検出した。</p> <p>近世では、江戸時代から明治時代にかけて利用されたと考えられる池遺構や、調査範囲を東西に貫く石積遺構を検出した。池遺構は、周囲に間知石の石積による護岸を持ち、池の中央に中の島を設けていた。また、池の北西で、木樋、竹樋と木製枙を組み合わせた施設を検出した。木樋は石積の護岸を貫いて池内部へと突き出ており、池への導水施設と考えられる。さらに、池遺構には埋立てに伴う土留板列が設置されており、段階的に埋立てを行っていたことを確認した。</p> <p>調査範囲を東西に貫く石積遺構は、間知石を積み上げた遺構である。最下部に銅木を設置し、その上に主として3段の石積を行っていた。石積の前面には土留板が設置され、土留板は木柄と丸太様の木材からなるアンカー状木製品によって支えられていた。この石積遺構は寛永江戸全国に見られる地壇に相当すると考えられる。</p>							

印刷仕様

表紙	レザック	215kg (四六判)
見返し	上質紙	135kg (四六判)
本文	上質紙	70kg (四六判)
写真図版	上質紙	70kg (四六判)
印刷方式	オフセット印刷	
使用インク	エコマーク商品認定基準に適合	
製版線数	150 線 (カラー 175 線)	

本書は永久保存を考慮し、すべて中性紙を使用

台東区

元浅草遺跡

—都立白鷗高等学校附属中学校仮設校舎建設に伴う埋蔵文化財調査—

東京都埋蔵文化財センター調査報告第 386 集

2024 年 7 月 31 日 発行

編集 公益財団法人東京都教育支援機構

発行 東京都埋蔵文化財センター

東京都多摩市落合一丁目 14 番 2

TEL 042 - 374 - 8044

印刷 株式会社 外為印刷

東京都台東区浅草 2-28-31
